

---

# 使い魔ですらない！

みそアイス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

使い魔ですらない！

### 【Nコード】

N3905J

### 【作者名】

みそアイス

### 【あらすじ】

神の頂点である父親に殺され、脆弱な人間に転生させられた青年。人間を劣等種としか見れない青年は、世界で何かを見いだせるのか。青年は復讐を願い、人間から神に上ることを決意する。\*あらすじ(仮)この物語は自己満足最強系です。更新速度遅くなりますので公開設定に一時変更。

## プロローグ（前書き）

自己満足スタート！

ファイナルファンタジーも入ってるよ！  
なんとなくはっちゃんけたくて書いた小説。

## プロローグ

### 家

「よっと」

やっと終わったか……。

辺りを見回してみるが、やはりと言うか、なんというか何も変わっていない。

フローリングの床に世界宝玉がたくさん転がっているだけ。

俺がいま現在出てきた世界宝玉も転がっている。

時間的には200年程度か。

まあ、“その程度”じゃ変わるわけもないしな。

「ほう、帰ってきたか」

不意に後ろから声がかけられる。

「はあ……、ったく。相変わらずだな、親父。いきなり後ろに転移してくるなっつての」

気だるそうに後ろを振り向き、親父をみる。

やはり、と言うか。全く外見は変わっていない。

銀髪に金瞳。年齢的には20くらいだろう。いわゆるイケメンって奴だな。

「それより、ちゃんと命令は実行出来たか？」

相変わらず無視ですか、そうですね。

「ああ、てか親父のせいで大変だったぞ？ 召喚獣を身に宿したままつれてこいってありえないだろ？ 人目を盗んで祈り子を俺の中に入れてっただんだけ？ ユウナなんて指名手配されてめちゃくちゃ俺に依存しやがった。ヤンデレユウナだったぞマジで？ 結局最後まで二人しかパーティーいなかっただし。過去に戻って召喚士エボンを魂ごと粉碎するってどんなストーリーだよ！？」

せつかくのファイナルファンタジー10のストーリーがめちゃくちゃになった。それも全部親父の命令のせいだ。

前に行ったFF8の世界でも、ストーリーぐっちゃぐちゃだったしな。

「そんなことはいい、ちゃんと“妊娠”させたか？」

「ああ、ユウナは確認して、他は時系列考えなければ300人くらいか？ 親父の命令の人数には足りなかったがな。で、これで俺は自由か？」

早くこんな親父から離れたかった。育てた恩とか言う名目で俺に“命令”を繰り返す親父。育てたとか言ってるが、実質親父と居た時間なんて500年くらいのうちの数ヶ月くらいだ。命令以外では顔すら出さない。

「ふむ、それはこちらで回収しておこう。余の跡継ぎがほしかった

「のでな」

「……は？」

「お、おいちよつと待て！ 俺がいるだろ俺！ 俺が神皇後継者第一位だぞ？ なぜ今更跡継ぎなんだ！？」

「余はな……」

そこで親父は言葉をとぎる。

「余は 娘がほしかったのだ！」

「……死ね糞親父！ お前は本当に神皇か！ 下級神どころか劣等種以下だろ！？ てかそれはテメーが嫁に逃げられたシヨックでインポになったからいけねーんだろうが！ ぜってー俺がお前の後継ぐからな、インポ神！」

娘がほしいって理由で、俺がこんなわけ分からない生活させられてたのかと思うと泣けてくる。

「それはそうと、手に入れたアイテムや召喚獣はどうしたのだ？」

「ああ、ディアボロスに頼んで魔法のランプの空間に収納してもらった。一応自分の影と繋げてあるけど、だすか？」

「いや、いらん」

だったら、なんで俺をあの世界に放り込みやがった糞親父……。

「それは余からお前への餞別だ。魂に刻みこんであるようだし、そろそろいいか」

それは唐突だった。一瞬何が起こったかわからなかったが……。

「おい、親父これはどういうことだ？　そもそも俺だって神だぞ？　この刃物程度で俺が死……あ？」

唐突に現れた、親父に握られた一振りの剣。その刃が俺の体を貫いている。

だが、この体は神。剣程度で死ぬわけもない。そのはずだった。

「神殺しの剣。神を構成しているエーテルを吸収する剣ってところか？　ま、安心しろ。転生はさせてやるから。お前が劣等種と言ってきた人間にな。お前はどんなに世界を回らせても、人間を劣等種としか見なかつたからな。そんなお前に世界を任せられるわけなからう？　ではな、息子よ」

くそつ、結局俺は親父にいいように使われて終わりってか？　人間だと？　あんな脆い生物になってどうしろつつんだよ。

そもそも、息子なんて思ってもない癖に言うな。500年も経って“名前”すらつけない親父がいるかよ。

だがな……親父。

「……待ってるよ親父。俺は神として戻ってくる。いつの日か俺がアンタを殺してやるからな！　いつか……いつか必ず！」

くそつ、身体の構成が出来ないか。伊達に神殺しなんて名前じゃないな。

「楽しみに待っているぞ、“劣等種”」

親父の見下した眼を睨みつけ、そのまま俺の存在は消え去った。

## プロローグ（後書き）

世界宝玉　神が創った世界そのもの。

祈り子　召喚獣そのもの。人間として死ぬことでなれる。現在魔法のランプの中。

魔法のランプ　G・Fディアボロスが封印されていた空間。

G・Fガーディアンフォース　召喚獣のようなものだと思ってくれればいい。ただし、祈り子ではなく顕現した存在。

親父　神の頂点の神皇。

息子　親父にとっては種馬。人をゴミ程度にしか思っていない。



## 01 生まれ落ちて（前書き）

わからなさそうな単語はあとがきにのせます。

## 01 生まれ落ちて

### どこかの平民

「おぎゃー！ー！」

（こんにちわ。てかね、マジでありえないだろ？」

「おぎゃぎゃー！」

（マジ劣等種だわー、どうしろってんだよ！？）

起きたらいきなりこれだよ。

目の前には多分俺を産んだ母親だろうか？ 結構な美人さん。親父もなかなか。

でもさ、でもさ。

めちやくちやボロボロの服来てるし、絶対貧乏だろ？

あー、マツクの月見バーガー食いたい。

「ごめんね赤ちゃん」

「すまん」

あーなんかもうわかるよ？ この展開。いきなり謝られたからね。滅ぼしてやろうか人間！ 名前つけない時点であれだよね？

はあ……。

森の中。

結果で言えば捨てられました。

「おぎゃーーーーーー！」

(捨てるなら避妊しろポケがーーーーー！)

あー、どうしようマジで。神も人間も信じられないわ。神に殺されて人間に捨てられる。劣等種の分際でふざけるなよって感じた。

「ぎゃ、おぎゃっ」

(そだ、ライブラ)

さっそく自分にライブラをかける。

“名無し(平民の捨て子A) 0歳

HP 44 / 44

MP 3456242 / 3456243

スキル・使用不可

魔法・全種類使用可

GF・使用可

召喚獣・使用可

創造、時間、破壊・使用不可”

ふむ。

なめとんのかっ!?

MPとか1000分の1以下になってるし!

神としての能力消えてるし! 創造出来ないとか、はは。絶対此処で死ぬわ。

HPなんて、HP 80パーセントアップ使ってこれかよ。

そもそも名前ありえん。捨て子Aってモブキャラやん。

ここがFFだったら一時間以内に食われて死ぬな。てか、どこの世界よ此処。

とりあえず、リレイズかけとくか？  
死ぬ 復活 死ぬ 復活 死ぬ end…  
嫌だな。いつそひと思いに殺してくれって感じた。  
そもそも、この世界でアレイズとか使えるのか？  
まあ、劣等種が死んだところでどうでもいいけど。  
俺が死ぬのは嫌だ。って言うても今の俺は劣等種だな。

ガサッ

……終わった俺。

近くの草を誰かが踏んだ音がした。  
人間、又はモンスター。ここで、いきなりオメガウエポンとか出たら面白いな。

まあ、一撃も喰らわなきゃ殺せるけど、無理だし、もう好きにしてくれ。死ぬわ。

木々の間から出てきたのは老人だった。かなりの年齢って感じだ  
けど。

なにコイツ？ ダンブルドア先生？ ハリーポッター？

「赤子？」

「おぎゃーー」

（こっちみんな劣等種！ キモイわ！）

ジツトこっちをみてくるじーちゃんがうざい。

「お主、捨てられたのかの？」

「おぎゃぎゃおぎゃー」

（そっだよボケ！ ライブラ）

“ ウィデイス・ラ・リバルスティン（賢者） 742歳

系統魔法・火、水、風、土

精霊魔法・火、水、風、土

クラス・スクエア

擬似クラス・オクタゴン

虚無を除く全てを収めた魔法使い。全ての精霊と契約済み。水の精霊との契約により、延命処置。”

コイツ化け物が……。

人間で俺の神の人生より長生きしてるぞ？

劣等種なんて言っただけで悪かった人間。コイツはスゲーな。マジで食われるかも。

「お主ワシと一緒に来るか？」

はあ？ 何言っただコイツ。

「おぎゃつぎゃー」

（G o t o h e l l ! 《くだばつちまえ》）

親指を立てて下に向けながら言っただ。

「そうかそうか、一緒に来るか」

「おぎゃー……！」

（言っただ……！！）

「そんな感謝するでないわい」

ダメだコイツは……。

俺は抱きあげられた。うへー、気持ちいいな。

じゃねーよ！ ふざけんな！ でも、多分初めてだな抱きあげられるのって。

神の時は最初から歩けたし、さっきの両親は隠すように袋の中に入れてたからな。

まあ、わ、悪くはないな。殺さないでやろっ。

7年後

あれからどうなったか教えてやるぜ？

何もなかった、以上。

実際何もなかった。普通にミルク買ってきて吞ませてもらったり。言葉や文字を教えてもらったり、魔法を教えてもらったりした。精霊との契約つても教えてもらったかな。

あとわかったのはここが『ゼロの使い魔』の世界だったことかな？ 糞親父の世界宝玉で見た世界だな。どうしよう。マックもコンビニもないよちくしょう。

はあ……、ってことで実は結構あったのかもしれない。全部初めてのことだったから新鮮って言うか……。

結構迷惑かけたと思う。文字も言葉も5歳まで覚えられなかったし。俺の天才的な頭脳をもってしても無理だった。まったく違う体系の言葉しか覚えてなかったから仕方ない。

聞く 既存の言葉に戻す 返事を既存の言葉で考える 此処の言葉に直すって感じだった。

いまでは、普通に話せるけどな。神のときは星神魔法で言葉なんてすぐわかったのに。

劣等種はコレだから……。

「ミラく新しい依頼持って来てやったぞい」

ふう、やっと帰ってきたか。ちなみに、俺達の住処は森の中の洞窟だ。

精霊に頼んで、幻術みたくのかけて見えなくしているらしい。

ミラとは俺の名前だ。喋りはじめてすぐに『ミラバケツ』って言ったらそうなったのだ。女みたいな名前であまり好きじゃないけ



どな。

「おうー、今回はどんなのだ？」

「今回のいい感じのじゃ、ホレ」

じーさんが俺の座ってる岩の目の前に来て、羊紙を広げる。

「へえ、森の中の成童討伐か。7匹ならお手頃って感じだな。グループ討伐だけどこれくらいなら一人で出来るな。一万エキューならいいんじゃないか？」

「じゃろ？ ほれ、さっさと行って来い」

「ああ、てか大丈夫か？ 町まで飛ぶくらいで息切れして。そろそろ死ぬんじゃないの？」

「まだまだおぬしには負けんよ！ 風邪ひいただけじゃ。じゃ、行って来い」

「だな、じーちゃんが死ぬとは思わねーよ！ 夕飯までには帰ってくるからな！」

「おう、 “ さよなら ” ミミラ」

「ああ」

まったく、風邪ひいてんなら無理すんなっての。帰ったら俺が夕飯作ってやるかな。

俺はそのまま討伐場所を目指して飛翔する。

森

「っと、これで終了かな」

依頼の7匹を討伐し、証拠の角を折り、影の中に収納する。

「弱い癖に暴れるな……てな」

そのまま浮き上がり、洞窟へ飛翔する。

「ん？」

精霊がざわついているのか？

「おい、どづした？」

『消えちゃった』

『いなくなっちゃったの』

『終わり』

『さよなら』

周りの精霊達が口々に言う。

「は？」

消えた？ まあ、精霊が言うことなんて今まで理解出来たことないけどな。いいや、とりあえず戻るか。

「おい、じーちゃん終わったぞ？」

着地し、すぐにじーちゃんのもとに行く。さすがに動き回るとお腹がすくな。今日は熊鍋でもするかな。

じーちゃんはベットで横になっていた。今までもよくあった光景だ。はあ……。

「ったく、起きろじーちゃん。真昼から寝てどーすんだよ？」

軽くゆすつてみるが、中々起きない。

「はあ…熟睡か？」

『消えちゃった』

『いなくなっちゃった』

『死んじゃった』

『亡くなった』

あー、そう言う事ね。死んだのか。世話のやける。

《レイズ》

じーちゃんの体が光、やがて納まる。

「どうだ？ 元気になったか？」

聞いてみるが、全く返事がない。

「じーちゃん？」

《アレイズ》

レイズの時よりも更にピンク色に輝き、やがて納まる。  
なんでだ？ 蘇生魔法はちゃんと効いてる。病気なのか？

《エスナ》

体が緑色に輝く。だが結果は変わらず。

「おい、じーちゃん！」

《アレイズ、レイズ、レイズ、エスナ、エスナ、リレイズ、リジエ  
ネ、デスペル》

次々に光輝くが、じーちゃんは起きない。  
は？ なんでだ!？

あ、焦りすぎだな。ライブラで見て魔法掛ければいいんじゃない。  
フェニックスの羽根もあるし、フェニックス召喚出来るしな。

《ライブラ》

“死者（賢者の亡骸）

寿命によって死亡。

あらゆる魔法・アイテム使用不能”

「ははは……」

ああ、蘇生じゃ寿命までは無理だ。つまり死んだのかじーちゃん……。

『大丈夫』

『泣かないで』

『私たちがいるよ』

『元気出して』

「ああ、大丈夫だ。泣いてないだろ？」

また一人か。恨むぞじーちゃん。一度暖かさをしった人間はどうすればいいんだよ。じーちゃん。だから……だから

「人間は嫌いだよ全く。短すぎるだろ。たかが、700年ちよつとしか生きられないなんて。なあ、じーちゃん」

声をかけてみるが、やはり目を覚まさない。今にも目を覚ましそうな風で覚まさない。外見は何一つ変わってないのに、魂が消えている。

「7年しか一緒にいなかったけどさ。結構感謝してたんだぜ？ じーちゃんは劣等種何かじゃなかった。ちゃんとした“人間”だったよ。俺が神のままだったら神界に連れて行ってやれたのにな。ごめんなじーちゃん」

ああ、この体が憎いな。ただの人間となってしまうたこの脆弱な体が。

『これ読んで』

『読んでほしいって』

『他の私が言われたって』

『私が私に聞いたの』

精霊が一か所に集まっている、そこには一つの便せん。

精霊に運ばれて、俺の手元に便箋が乗る。

封を破り、中の羊紙を取り出す。

「読むぞ？」

精霊も聞きたいのだろう、俺の周りで静かにしている。

「ミラへ。この手紙をお前が読むころにはワシはもう死んでいるじやろ。幼いお前を残していくことを許してほしい。ワシはな知っておったのじゃ。もうすぐ自分が死ぬことを。子供も残さず、ワシは昔からひたすら魔法の研究をしておった。じゃが、最後の最後にお主を見つけたのじゃ。あるときワシは死に場所を探しておった。ここでお主を見つけてのう、それからは自分の生きた証を残したかったのじゃ。結局自分のためにワシはお主を利用したようなもんじゃ。すまなかつたの。平民の子供に魔法は使えん。それならば、精霊魔法だけでも残そうと思つて拾つたのじゃ。そしたらお主は系統魔法や精霊魔法を使う適正があつた、そして、それを使える精神があつた。ワシはうれしかった。これで、ワシが生きてきた意味を残せると思つた。ひどい修行だつたじゃろ？ 一歳になる前からひたすら魔法を教え、体を酷使させた。すべてワシの我がままじゃつたんじや。そして、お主は5歳でワシの教えを全て受け継いだ。本当の鬼才の持ち主じゃつたのじゃ。ワシの生きてる意味はお主に託された。安心して逝ける。お主と過ごした7年は700年以上の生で一番幸

せじゃった。お主はワシの自慢の息子じゃ。じゃがな、ワシと同じ道をたどってはほしくないのじゃ。お主はお主の幸せを求めてくれればいいのじゃ。幸せをありがとう。

最愛の息子へ

追伸・一緒に入っていた鍵は奥の扉の鍵じゃ。きつとお主の役に立つだろう」

俺は手紙を読み終わり、丁寧に畳んで便せんに戻した。

「……………」

『泣かないで』

『大丈夫』

「泣いてな」

『泣いてる』

『泣いてるよ?』

頬に手をやると、うっすらと涙が手についた。

俺は泣いていたのか……多分初めて泣いた。自分には涙なんて出ないのだと思っていた。

違ったんだな……………。

便せんの中から一つの古い鍵を取り出す。

『……』

『……だよ?』



精霊が教えてくれた扉に鍵を差し込み。ゆっくりと開ける。

「はは……なんだよじーちゃん……」

思わず声が漏れる。

中にはきらびやかな金貨が山のように積まれていた。

一体どれほどあるか、金がない金がないと言っているも高額の依頼を受け、ずっと此処に貯めていたのだろう。

700年の間ずっと貯めていたエキュー金貨。下手したら億を超えてるかも知れない量だ。

『これね、ミラにつて』

『言つてた』

『あげてつて』

俺のこれからのためつてことかよじーちゃん……。

ありがとうな。

「ディアボロス。収納しろ」

俺の足元の影が広がり、金貨を覆い隠す、金貨は次の瞬間には消え去つていた。

最後に、便箋を影の中に投げ込む。

そして、洞窟の外に歩きだす。

外に出、最後に洞窟を振り返る。

「じーちゃん。ありがとうな。俺も幸せだったよ。じーちゃん教えてもらった魔法。ここまで使えるようになったよ。精霊も頼む。最後のお別れだ」

『うん』

『最後』

『ありがとう』

『バイバイ』

俺は詠唱してゆく、じーちゃんに教えられた魔法。

左手で火・火・風・風、そして停滞させる。

右手で水 水 土 土、停滞のスクエアスperl。

四つを合成させるここまでが、一流魔法使いの限界。

だが、じーちゃんは賢者だった。この相性の悪い4つを更に合成させるオクタゴンスperl。

普通は杖がなければ使えない魔法を、精霊の力を借りて放出する。

二つの魔法が同時に放たれ、洞窟の中で混じりあう。

融合し、拒絶する。

### 《エレメンタルラース》

洞窟の中で大きな爆発を起こし、洞窟が崩れ落ちる。

そして、俺は洞窟を背にする。

「じーちゃん。じーちゃんの想い受け継ぐよ。今から俺は ウィ  
デイス・ラ・リバルステインと名乗ろう」

『ウィデイス』

『名前』

『変った』

『ウィデイス』

精霊の声を聞きながら、俺は飛翔する、もう此処には何も無い。

此処に戻ることもないだろう。

さよなら、じーちゃん。

## 01 生まれ落ちて（後書き）

ライブラ 対象の生物の情報を閲覧。

リレイズ 一回限り、死んでも復活。

アレイズ HP全回で蘇生。

レイズ 蘇生

エスナ ステータス異常回復。

デスペル 魔法効果打ち消し。

1 エキュー 1万くらい

エレメンタルラース 4つの属性が拒絶して生まれる爆発。MP  
の練り込み次第ではアルテマに匹敵する。

02 ミラ・バ・ケッソ(前書き)

I s t h i s a p e n ?

N o , i t i s T o m .

T h e n , i s i t T o m ?

N o , i t i s a c c o c k r o a c h .

T h a n k y o u M i c h a e l

I a m T o m .

## 02 ミラ・バ・ケツン

町

あのあと、俺は城で龍の討伐代金を受取、外に出た。

確か、この世界では平民は屑扱いを受けてるんだよな。貴族か元貴族しか魔法使えないとか。

どっちにしる劣等種だろって感じだが。俺はじーちゃん以外認めない。他は等しく劣等種だ。

にしても、どこ行こうかな。家もねーし。

いっそ、じーちゃんが言ったエルフの聖地でも行くか？

俺は一度路地の裏に入る。

「不可視状態にしてくれ」

『はい』

風の精霊に頼み、光の反射を弄ってもらおう。一応これで周りからは見えないだろう。

そのまま浮き上がり、適当な方向に飛翔する。

だって、エルフどこいるか知らないし。運が良ければ当たるかも知れん。外れたらそこから遊べばいい。てかマツクねーかな……。中世の世界じゃねーよな……。

しばらく飛翔していると、路地の奥の方に人の賑わいを発見した。なんであんな所に？

少し離れた所に降り、不可視状態を解除する。

「さあ、どいつも元気な子供ばかりだよ」

手錠をつけられた子供たちが並べられている。

全然元気じゃねーし。ボロボロの服を着て死んだ魚の目だぞ？

とりあえず何をしているのか聞くにも、身体が子供じゃ相手にもされないだろう。

「10歳くらい年齢上げてくれ、あとマントと杖。ついでに豪華な服な」

『はい』

精霊魔法で自分の姿を偽る方法がある。普通は体だけだが、そんなの少し応用すれば服も変えられる。

精霊によって身長175くらいの姿になった。髪も顔は、もともと整っていたし、金髪なのでいいだろう。

前に一歩出、ちかくのおっさんに聞いてみる。

「なあ、これは何をしているんだ？」

不機嫌そうにコチラを見たが、俺を見て目を見開く。  
貴族に見えるってことだろう。

「貴族の旦那でしたか、これは奴隷売買でさー。普通は年単位の奉公のところを違法で永久にしたところださ」

「ほつ」

ふむ、違法だとかどうでもいいが、いいものじゃないな。劣等種同士でそんな無駄なことを。

……む。だが、奴隷ってのはいいかもしれない。召使って言うより、この世界のことを聞く相手がほしい。じーちゃんは引きこもってたから、あまり教えてくれなかったしな。

だが、弱い召使は足手まといだ。

「精霊、俺の周りで光輝け」

『はい』

俺の周りで四種類の色の精霊が光輝く。精霊は普通見えないので見える奴は一応頑張れば契約は出来るやつだ。系統魔法が使えることと、精霊との感受性が高くないと見えない。

エルフは大体見えるらしいが、人間は嫌われてるらしく、精霊がわざと見えなくしているらしい。だから人間は精霊魔法が使えないのだ。

見まわしてみると、一人の少女がこちらを驚いた目で見ていた。試しに少女の周りに精霊を飛ばしてみると、目で追っている。

ピンゴー！



俺は奴隷商人の目の前まで行き、話しかけてみる。

「なあ、この少女はなんだ？」

「へえ、一応貴族だった子でさー。魔法はドットが使える程度でね。ご覧のとおり、顔の火傷と腕がないですが、初物ですし、魔法は使えますんで、どうですか？ 安くしときますよ」

ふむ、確かに左半面汚い布で包まれている。右腕が半ばからなく、コチラも汚い布で覆われている。このままだと化膿し、病気にでもなつて死ぬだろう。顔事態は普通に可愛い。小さい頃のユウナレベ  
ルだ。

処女かどうかってのはやるつもりはないからどうでもいい。それならそれでいい程度だ。

「なんでこうなった？」

「顔の方は昔からのようですが、お恥ずかしい限り、ここに運ぶ途中魔物に襲われまして、魔法が使えるとのことで、護衛させてたとき腕を……」

ふむー……運悪いな。大方没落貴族だろう。小さい頃に魔法が暴発して火傷、家は没落。そのあとにコレって感じだろうな 面白  
いな。

俺はニヤリと顔をゆがませた。

「買おう。いくらだ」

「へえ、こんな見た目でさー、1000エキューで結構です」

人間の価値なんてそんなものか。てか、金数えるのが面倒だ。たしか、報酬でもらった金を1000エキューずつ小分けにしてもら  
ってたな。

大きな袋を取り出し、適当に三分の一程度取り出して渡す。

「釣りはいらん。その少女をもらおう」

「へ、へえ！　ありがとうござっしたー！」

商人は慌てて少女の手錠を鍵で開け、こちらに渡してくる。

うん。臭い。少女くせーよ！

ダメだコレはキツイ。

俺は少女に金貨の入った麻袋を渡す。

少女が不思議そうにコチラを見ている。

「そんな服じゃ臭くて連れて歩けないだろ？　この後宿に行つて体  
キレイにしたら、服買ってこい。その金は全部使っちゃまっていいか  
ら」

俺の言葉に目を見開く少女だが、どうでもいい。

周りの客や商人も目を見開いているが、こっちもどうでもいい。

「店主、金は足りただろ？　ではな」

俺は少女を連れてそこを離れることにした。臭いので、風の精霊  
の力を借りて匂いを消している。

「また、どうぞー」

商人はほくほく顔で見送ってくれるが、それこそどうでもいい。  
今日は宿でもとるか。

## 宿

「あの、ありがとうございます」

少女がペコリとおじぎをする。

震えてる事から商人にそう言えって言われてるのかもしれないな。  
風呂から上がって匂いもとれている。

一番高い宿に泊っているので風呂もちゃんとあったようだ。

この世界は風呂も貴族用しかないから仕方ない。

改めて見てみると、キレイな少女だ。

髪は腰までの金髪で透きとおるような白い肌。大きな蒼い瞳。まあ傷の部分をタオルで隠しているが。服は着てくるなど言っているから。

別に犯るつもりもない。親父の命令もないわけだしな。そもそももう親父じゃないし。

ただ、汚い服をまた着たら意味がないからだ。

「別にいい」

そう言いながら、俺は元の姿に戻る。

「え？ ええ？」

少女は混乱気味だが、いつもあの姿でいるわけにはいかないだろう。

「ああ、俺の年齢は7歳だ。お前もそのくらいだろ？」

「あ、は、はい。同じ年齢です」

まだ呆然としているが、別にいい。

「とりあえずタオル全部とれ」

「え……えっと、わたしは火傷が……」

「知っている。いいから脱げ」

少女は緊張しながらタオルをパサリと床に落とす。

一糸まとわぬことが恥ずかしいのか、頬を赤く染めている。

「あの……初めてなのでうまくできるか……」

「はあ、勘違いするな。そもそも俺もお前もこんな体でどうやってやるんだっての。出来るとは思うがやるつもりはない。とりあえずこっちこい」

少女がおずおずとこちらに近づいてくる。

「あ……」

軽く火傷に触れてみるが、ふむ。目もやられているのか。こりゃキツイだろうな。

腕も水メイジが直したのかも知れんが、実力不足だ。化膿しはじめる。

よく痛みを我慢して風呂入れたな。精神力もこの年で結構なものだな。

さて、どうやって治すか。腕が無くなるくらいなら、前の世界でもケアルで直せたしな。

魔力も同時に回復させるか。あとは、化膿や病気を治すために万能薬か。

俺は影から二つのガラス瓶を取り出す。

「え？ それは？」

「ああ、この影の中に収納できるんだ。魔法だな」

「はあ……」

納得してないようだが、魔法って便利な言葉だ。

「コレ先に飲んで、こっちを後に飲め」

エリクサーを最初に吞ませ、万能薬を次に吞ませる。

「わかりました」

素直だな。まあ、俺の命令は聞くしかないのだが、奴隷だし。

クピクピと飲み始める少女。てか遅せーよ！ 一口飲んで、口離して飲み込むってあり得ないだろ？

「一気に飲め」

勢いよく飲ませてみる、苦しそうだが、遅すぎるのだ。

少女の体が緑色に大きく光輝き、光が納まると、腕が元に戻っていた。見えない目も見えるようになっていし、火傷もきれいに治っている。

「わ、わわ、すごいすごい！」

少女がびよんぴよん跳ねて、嬉しそうに治った右腕を振っているが、変色している部分もあることから、病気だろう。

「いいから、もう一個も飲め」

「は、はいっ！」

少女が万能薬も飲み干す。

傷を負っていた部分やお腹。更には秘所まで輝きだす。エイズかかつてなコイツ。汚くしてたからだまつたく。キレイに腕の変色もなおった。

「か、体が軽いです！」

「ああ、てかお前ちゃんと洗え。初体験もしてないのに性病にかか  
るってどんなんだよ」

「うう……はい」

顔を真っ赤にさせて照れているが自業自得だ。

「あの……」

もじもじと照れているがなんだ……。

「今の薬ってどれくらいするんでしょうか……代金を」

「ああ、払えないだろうから気にするな。考えてみる。瀕死まで切  
り刻まれても治せる薬と、病気だろうとなんだだろうと治せる薬だぞ  
？ 貴族だって喉から手が出るほど欲しい薬だ」

「あう……」

少女の顔が青ざめてゆく。まあ、そうだろ。エリクサーなんてこ  
の世界なら俺しか精製出来ない。俺ってかGFに作ってもらうんだ  
が。最低でも100万エキユーは軽くする。

「だから気にするな。その変わり一生俺に仕えてもらうからな。逃  
げたら地の果てまで追いかけて殺す」

「は、はい！」

はあ、厳しく言って睨みつけたのに嬉しそうに返事しやがって。  
まあ、この調子なら逃げないだろうな。

「そっぴや、俺の名前言ってなかったな。ウイディス・ラ・リバル  
スティンだ」

「あ、わたしはミラです。家名は今はないです」

「ぶっ！」  
「へ？」

思わず拭いてしまった。なにこれ？ 運命ですか？

「ミラ・バ・ケッソって名前だったのか？」

「はい、よくわかりましたね」

小首をかしげてるが、ありえないだろ。アホすぎるだろ……。

「そう言えば、ウイデイス様はこの貴族様ですか？」

「いや、俺は貴族じゃないぞ？」

「はい？」

「あー、だから。金はあるけど貴族じゃない。どうするか考え中だ。てか、座れ。ずっと全裸で立ったままか？」

そう言うと、忘れてたのか、顔を真っ赤にさせて横のベットにチヨコンと座る。

膝を閉じて背筋をピンと伸ばしている。貴族スゲーな。この年齢でもしっかりしてやがる。

「お金はあるのですか？ それならゲルマニアで貴族になるのいいかと。お金があれば貴族になれる国です」

「貴族になったほうがいいのか？」

「はい。基本平民は貴族様には逆らえないので、土台から違います。無意味に混乱もまねかず、どこにでも自由に出入り出来るので、貴族になった方がいいかもです」

ふむ。貴族の言うことなんて聞くつもりもないが、いちいち喧嘩吹っ掛けられるのもどうかと思う。



にしても、こいつは1000エキュールでいい買い物したかもしれないな。相談役にうってつけだ。

「ならそこに行くか？」

「あ、でも爵位を買うのに3000エキュールくらい。領地を買うのに数万エキュールくらいかかるかと」

「別にそれくらいならいい。明日朝一で服買って爵位買っぞ」

「はあ、わかりました」

「じゃ、おやすみ、ミラ」

「おやすみなさいませ、ウイデイス様」

さて、明日から忙しくなるか。

一応コイツも魔法使いだから、反逆してくるかもしれないし、自分にオートリフレクとオートプロセスのアビリティセットしておくか……。

## 02 ミラ・バ・ケツソ（後書き）

ケアル HP回復。

エリクサー 対象のHPMP回復。

オートリフレク 常時魔法反射

オートプロセス 常時物理軽減

アビリティ GFが覚えたスキルをプレイヤーにセットする。H

P80%アップもコレ。

### 03 下準備の使用人探し。(前書き)

白の本はプロットが自宅。

どうしようって感じですよ。

プロット書きなおすしかないかな……。

### 03 下準備の使用人探し。

#### 馬車

あのあと、男爵としての爵位を買い取った。

爵位を買ってすごい国だよな。んで、領地のことを聞いてみると、ちょうど取りつぶしになった侯爵家の領地があるということであってもらった。

時は金なりってか？ 普通よりはかなり高かったが、払えないレベルではないし。売ってもらった。

なんか領地経営ってのも面白そうだったからだ。別に人々の暮らしを良くしようなんて思っていない。誰が死のうと関係ない。だが、領地経営そのものには興味があるのだ。ジムシテイみたいな？

まあ、ゲルマニアっていいよね。何でも金で解決だよ。

ついでに、名前も変わった。ウイディス・ラ・リバルステイン・ヴィ・リヤステイ。

長すぎてムカツク。俺はラ・リヴァルステイと言うじーちゃんの名前が好きなので、公ではヴィ・リヤステイもつけるが、普段はウイディス・ラ・リバルステインとすることにした。

ついでに、ミラは養子と言うことで、ミラ・ヴィ・リヤステイ。

普段はミラ・ラ・リヴァルステインだ。

んで、今は馬車で自分の領地に向かうところだ。

「なあミラ」

「はい？」

可愛く小首を傾げるのは見ていて癒される。

「屋敷にメイドと執事は必要だよな」

「そうですね。元侯爵家なら大きいでしょう」

「お前の家の執事とメイドはどうなった？」

「……」

ミラは黙り込んでしまった。まあ、解雇しかないだろうな。

「親は？」

「……」

はあ……、破産してどっかで働いてるのか？

「わたしを買い戻そうと必死で働いています。ですが、買い戻すにも、国から借りたお金を返さない……」

「ふむ。破産した金を返せばまた貴族になれるのか？」

「いえ、一度破産したらもう無理ですね」

ふむ。

「俺が代わりに返して、お前の両親と執事、メイド全員雇おう」  
「なっ!?!?」

「必要なんだ（俺の住みやすい世界にするために！）」

「ウイデイス様……そこまで……（わたしのことを考えてくれて）」  
「ああ、絶対に譲れない（せめてマック！ 出来れば24時間やってるコンビニー）」

「ありがとうございます。わたしも精いっぱいウイデイス様に仕えさせていただきます」

「頑張ろうな（俺の計画を）」

ミラは涙を流しながら喜んでくれた。

コイツもしってたのか、俺の計画を。それには貴族としての仕事をやるやつと、仕事の出来る執事とメイドが必要だ。ミラの両親ならミラがいる限り信用できるだろう。執事もメイドも問題なくコイツの家でやれてたなら大丈夫だ。

「よし、んで、お前の父親の元地位と、破産額、メイドと執事の居場所を教える」

「はい！ 爵位はゲルマニアの伯爵でした。執事とメイドはお父さんに聞けば。お父さんは街の仕立て屋で働いています。破産金額は……」

ミラが俺のことをチラチラと上目づかいで見つめてくる。

そんなに大金なのか……払えるかな。賢者が700年ためた金より多かつたらどうすっかな。

「……50万エキユーなんですけど……やっぱり無理ですかね」

はあ、びびって損した。たしかに日本円で50億円と大金だ。だが、じーちゃん舐めるな。一億エキユー近く稼いだじーちゃんスゲー。毎日、一万エキユー近く稼いでたからなじーちゃん。しかも高ランク討伐だけで。

今はすまんなじーちゃん。いずれ更に稼ぐからな。

「いや、大丈夫だ」

「本当ですか!？」

目をキラキラと輝かせて、身を乗りだしてくる幼女。もとい、ミラ。

「お前の両親と、執事、メイドは信用できるのか？ 給金はちゃんと払うが、横領とかしないだろうな？」

「はい！ 絶対信用できます。娘にも甘いです！」

おおつ。父親のことを娘に甘い父親って言う娘がいるとは。こいつ腹黒かもしれん。

「んじゃ、一回屋敷に行った後、お前の父親や母親に会いに行くか」

「はい！ あと、屋敷にはもうついてます！」

「おおつ……」

いつの間についたんだ本当に。

とりあえず、降りる。俺の後ろにミラもついて降りる。

「でかいな……」

「大きいですね……伯爵家の時よりも大きいです」

でかかった。横幅が100メートル近く在るだろう。この世界の単位で言うとマイルだっけかな。まあ、言い変えたただけだ。

そして5階建て。二人じゃ死んでも管理しきれない。ツタがから

みついているし、窓なども汚れている。

「汚いな」

「汚れてますね」

とりあえず、軽く掃除か。

「王宮に帰っていいぞ、馬車で送ってくれてありがとな」

「はい、では」

一応馬車で送ってくれたので礼を言う。馬車は遠ざかって行き、見えなくなった。

「さて、ここが新しい俺の家だか汚い！」

「掃除しますか？」

「無理だ、この広さじゃ」

「メイドを連れてくればなんとか数か月で」

「遅い。ってことでー風の精霊、内部の塵を掻きだせ。水の精霊、外見をきれいに洗い流せ、土の精霊、ツタを全て取り除け、火の精霊、出た塵やツタを燃やし尽せ」

『うん』

『はい』

『やるよー』

『せっせのせ』

俺の命令を聞き、精霊たちが屋敷に集まる。ツタが地面に戻ってゆき、窓の曇りなどが晴れてゆく。すべてのドアや窓が内側から弾け、大量の塵が外に書き出され、一か所に集まってゆく。そのゴミが燃えて消えてゆく。



みるみるキレイになってゆく屋敷。エルフなどでも出来ない使い方だ。

そもそも、空气中に散乱している精霊の声を聞くことは普通出来ないらしい。俺の場合魂が神のものだからなのか、適正があるのか知らないがこういう使い方も出来るのだ。

『ねえねえ、地下にね』

『おっきな部屋がるよ?』

『どうするどうする?』

『キレイキレイ?』

隠し部屋か?

「とりあえずキレイにしておいてくれ」

精霊が動き出したの確認し、隣を見ると、ミラが目を見開いて、口をぽかんとあけている。

「どうした?」

「せ、せ、先住魔法!? ウィデイス様はエルフなのですか!?!」

ガクガクと震え問いかけてくる。

「あ た っ」

軽くチョップして目を覚まさせてやる。

「アホか。どこをどうみたらエルフなんだ。確かに先住魔法、俺に言わせれば精霊魔法だが。それが使えるかもしれないが、これは仲介すればお前だって使える。精霊の声は聞こえないかも知れないが、

精霊と契約は出来るはずだ」

精霊との契約で精霊魔法が使える。系統魔法よりも強力な魔法だ。詠唱は勿論必要。俺の場合精霊の声が聞こえるので、詠唱の変わりに声をかけるんだが。

「ほ、本当ですか！ わたし今魔法使えないので、使えたらすごいです！」

キャツキャとうれしそうにしているが、今何と言ったコイツ？

「待て、何で魔法使えないんだ？」

「えーっと、右手に持っていたので腕ごと食べられちゃったんだと

……」

グロ！ よく平気でそんなこと言えるな。

「んー、そうだ。ニルヴァーナがあつたんだ！」

「にるヴぁーなってなんですか？」

「ちよい待て」

俺は影の中に手を入れ、杖を取り出す。

持ち手は黒に白で模様が浮かんでいる。下には二つのアクセサリ。上には、金色の遜色にフェニックスが向かい合ったようなデザインの白桃色の羽根。

ユウナの所持品だが、召喚士でなくなったので俺が預かっていたのだ。

「ほれ」

手渡してやるが、手に取るうとしない。

確かに身長には合っていないが、長さ130センチくらいあるし。対して、ミラの身長は120ないくらい。7歳だから仕方ないが。

「あの……それディテクトマジックかけてないのにすさまじい魔力放っているんですが……」

ああ、そう言うことか。これは俺が神の時にちよつと改造したものだ。APやオーバードライブが必要なさそうなので、魔法攻撃力+20パーセント、魔法ブースター、ダメージ限界突破、MP消費1と言うお遊びで改造した杖。オーバーキルで楽しみたいって感じで作ったのだ。まあ、ミラが使ってもオーバーキルは無理そうだが。そもそも、この杖自体がFF10での一点物レアアイテムだ。

「気にするな、あーそだな。火の精霊。もし、ミラ以外が触ったら焼いてやれ」

「わかりましたー」

「な、なんでそんな物騒なことを……」

「貴重な杖なんだよ。魔法使っても精神力が（ほぼ）減らないと言うすぐれものだ。そして、魔法の威力あげる効果まである。盗まれたりしたら大変だろ？」

「そ、そんな貴重なもの怖くて使えませんよ!？」

「だから、実戦の時だけだ。普段は普通の杖使え。あ、そだ」

俺は更に影から一本の杖を取り出す。

「これ、精霊魔法使う時にダミーとして俺が持ってた杖だ。杖と契

「約もしてないし、安物だから練習用に使え」

「そう言っつて、二本を押し付ける。」

「練習用は30センチくらいの木の杖だ。」

「ほら、魔法放つてみる」

「……………」

「……………」

「……………??？」

「おい」

「えーっと、杖との契約は、数週間手元に置いておかないと出来ないんですよ?」

「ムカツクな……、知らなかったんですか? 常識ですよみたいな顔してるし。」

「あつたついつ」

「俺の連続チヨップが発動した。」

「もー、何するんですか?」

「うっさい! とりあえず、屋敷は一応キレイになったんだから行くぞ。あとは拭き掃除しないと無理だ。ついでにコレもつけとけ」

「俺が影から取り出したのは黒いマント。すごいダサイが、一応貴族の証らしい。」

「ふりふりの洋服を着ているミラには似合わないが仕方ない。」

「貴族だからってなんでこんなの着なければいけないのでしょうかね」

ミラは嫌々ながらそれを身につける。  
そんなミラを横抱きにし、俺は飛翔する。

仕立て屋？

ミラの案内できたのは仕立て屋、もとい工場。  
こんなの仕立て屋ちゃう。下っ端服職人だ。

「ここだよな？」

「そうですね」

そこそこ大きな木の扉を開く。

「たのもー！ー！！」

俺の声に全員がコチラを向く。

うーん、何だ此処？ ぎゅうぎゅうに押し込められて、服を作っているが、生産性悪いだろ？

こんな場所に100人以上詰めるな。

一人の男がこつちに走ってくる。

「貴族の坊ちゃん、うちはまっとうな商売してるんですけど？」

「いや、別に視察できたわけじゃない。ただ」

「ミラっ！？」

俺の言葉が！ 途中で女性の声にかき消された！

コチラ と言うか、ミラに一直線に走り寄る女性。

そして抱きつく。

「コラッ！ テメーごときが触れていい相手じゃねーだろが！ さっさと仕事に戻れ！」

俺にぺこぺこしていた男が木の棒で、ミラの母親らしき人を叩く。  
これが平民か。

「やめて！ お母さんに乱暴しないで！」

男の体罰をミラが止めるが、男の目が途端に細められる。

「おや？　ってーことはアンタら平民かい？」

「いや、ミラは養子にしたから貴族だ」

俺の言葉に途端に態度がまた変わる。なんだよコレ……？

「あー、悪い。この女性と、この女性の夫すこし借りれるか？」

俺はエキュー金貨10枚を渡しながら言う。

「は、へー。どうぞどうぞ、今日一日くらいならずっといいですけど、貴族の坊ちゃん」

「では借りてくな。そのミラの母親。旦那を連れて外に来てくれ」  
「は、はい」

俺の言葉に慌てたように走りだす。俺はそのまま外に出る。

## 店

あのあと、四人をつれて話せる店を探した。

貴族でない二人を連れて行くと、高級店はすべて断られたので、そこそこのランクの店についた。

「さて、料理は適当に好きなもの注文してくれ、金はこっちで出すから。んで、二人の名前を覚えてもらっていいか？」

俺がミラの両親に促すと、二人は素直に口を開く。

「ミルドです。元伯爵ですが、今は家名すらない平民でございます」

30後半くらいの男性だ。イケメンから、渋いに変わり始めたころ合いだろう。

「私はレイディア。ミアの母親です」

20代前半の美人さんって待て。一体いつミラを産んだんだ。少なくとも15前に産んでるだろう。ミルドロリコンじゃん！



「失礼ですが、あなたは」

「ああ、すまない。ウィデイス・ラ・リバルスティン・ヴィ・リヤステイ男爵だ。ミラは俺が買い取った」

俺の言葉に目を見開く二人。

「その御年で男爵でございますか？」

「ああ、悪いか？」

「滅相もございません、しかし。ヴィ・リヤステイ領とは、侯爵の？」

「買い取った。領主がいなかったからな。まあ、そんなものはどうでもいい」

俺は本題を切りだすために、両手をテーブルにのせ、手の甲に顎を置いた。

「まず、ミルド元伯爵が以前雇っていた、執事とメイドの現在の居場所が聞きたい」

俺の言葉にミルドとレイディアは訝しげに顔を見合わせる。

「私が働いている場所で皆働いているが……それが何か」

「ふむ、俺がヴィ・リヤステイ領に行ったのはつい先ほどね。使用人が一人もないのだよ。優秀な使用人がほしい。執事として優秀な、メイドとして優秀な。そして」

俺は目を細めてニヤリと口を歪ませる。

「優秀な元貴族」

俺の言葉に二人は目を剥き、驚く。

そりゃそうだ。元貴族を雇いたいなんて普通はありえないことなのだろう。元貴族と言うことは、破産、横領などで借金を負っている場合がほとんどだ。つまり、破産金全てを背負うと言うことだ。確かに、貴族を雇えるなら利点は大きい。しかし、破産したと言うことは、経営能力がないと言うことでもあるのだ。それを多額の借金を背負ってまで受け入れるなんてまずありえない。

「しかし、私たちには負債が……」

「そんなもの調べている。子供だからって甘く見ないでほしいな。その負債を肩代わりすると言っているんだ。ちゃんと給金も出すし、悪い話ではないだろう？ あなたの屋敷に居た使用人も一緒だ。ミルド元伯爵は俺の補佐と言う形になるだろう。過剰労働などさせるつもりもない」

「それだとウイデイス様に利点が……」

つまり、裏がある……と？

「最初に言ったが、俺は領地経営が苦手だ。だからこそ、領地経営の経験があるあなたを引き抜きたい。もちろん、俺の意見も言うつもりだ。ただ、俺は領地経営より優先させなければいけないことがある（マックとコンビ二計画がな）。だから、頼みたい」

「しかし」

「お父さん！ 一か月くらい一緒にいたけど、“ご主人さま”は信用出来るよ！ わたしもお父さんとお母さんと一緒にいたい！」

いつのまに御主人さまって呼ぶようになったんだコイツ？ まあどうでもいいけど。

二人は顔を見合わせ。

「では、お願いします」

二人は頭を下げた。こんな若造シヨクダにな。  
てか、マジで娘に弱いな。

「娘の火傷も直して頂きありがとうございます」

母親が俺に礼を言うが

「勘違いするな。呼び方は今まで通りでいいが、ミラは俺の養子になった。ミラ・ヴィ・リヤステイと言う貴族だ。普段はいいが、公ではお前達の方が身分は下だ。ミラやお前達の為じゃない。娘で所有物のミラを俺が釣れて歩けないから傷を直したただけだ」

二人はミラの方を見つめ、本当かと目で訴える。ミラは苦笑しながら頷く。

「それでも、大事な娘をありがとうございます」  
「別に構わない。俺はお前達が働いていた場所に交渉しに行くから、これで好きな物でも食べておけ。せっかくの一家団欒だ。貴族じゃないから高級店にはないがな」

俺は金貨10枚程度置いて店を出る。

## 工場

先ほどの工場の前に戻り、影から麻袋を取りだし、中に入る。

「貴族の坊ちゃん。うちの二人はどうしたんで？」

「ああ、あいつらと、他一緒に入ってきた使用人を引き抜きたい」

俺がそう言った瞬間、目を細めて俺を見つめる。

「貴族の坊ちゃん、それはなりませんよ。私の大切な使用人ですし」

大事な使用人が何で皆痣作ってるんだ？ ま、手放さないのは分

かり切つてたし。

これも先行投資だ。どうせ返ってくるわけだしな。

「此処に一万エキューある。使用人をもらいうけたい」

男は目を見開き、俺が地面に置いた麻袋を開く。

そしてこちらを見、ニヤリと笑う。

「貴族の坊ちゃんも人が悪い。最初から言ってくれればすぐに差し出しましたよ。何人でも持つて行つてくだせえ」

まったく……コイツをみると劣等種つて想いが強まるわ。

俺は前に出、大声で叫ぶ。

「おい！ この中で Mild 元伯爵の元で働いていた執事と使用人前が出る！」

俺の声を聞き、50人程だろうか？ 使用人が前に出てくる。皆びくびくしている。別に体罰などするつもりはないんだがな。

「お前らはうちで雇うことになった。もちろん Mild 元伯爵、レイディア元伯爵夫人、それにミラも一緒だ。ちゃんと給金は伯爵の家で働いていた時と同額出す。此処で働きたい物は此処に残れ、屋敷で働く物は俺に着いて来い」

てか、50人もいらない。

少しだけざわつくが、俺が背を向けると付いてくる。ふむ、此処  
どんだけ給金けちつてんだよ……。全員着いてきたぞ？

まあいいや。使用人＋三人連れて帰るか。やらないといけないことあるし。

### 03 下準備の使用人探し。(後書き)

ディテクトマジック この世界での解析魔法、ライブラと同等。  
ニルヴァーナ F F 1 0でめんどいイベントを三つこなさないと  
手に入らない最高の杖。

## 04 まず薬局から（前書き）

目標1・知名度アップして信用を得る。

最終目標・マックとコンビニを各所に設置して、三食不規則生活。



## 04 まず薬局から

### 自宅

あその後、時間をかけてヴィ・リヤステイ領まで戻った。

まじ最悪でしたよホント。転移魔法ほしいなー。精霊にお願いすれば運べたけど、ミラみたいに混乱されたらたまらないし。

結局馬車20台チャーターして地道に来たよ。

着いたのは夜だけどさ。

「あーえつとじゃあ。今日は疲れてるだろうから自室の掃除して、風呂入って寝ちゃってくれ。ベットとかも足りないだろうけど。部屋は客間、書室以外ならどこ使ってもいいから。あんま使うと掃除大変だから一人部屋は無しな。二人か三人で頼む。ベットとか服とか色々足りないと思うが、ミルドに金渡しておくから言えばいい」

俺が大声で叫ぶと、使用人がざわめく。なぜだ？

「失礼ですが、ウイデイス様。使用人にお風呂場まで開放し、部屋も勝手に決めさせて良いのですか？」

執事つばいじーさんに聞かれた。

「別にいいだろ？ 風呂場なんて使わなきゃ意味がないし、俺は使

用人が汚れたままの方が嫌だ。臭いだろ？ てか今臭い。俺は部屋は狭くてもどうでもいいし、寝るだけだし。せっかく部屋あるんだし使ってもらった方がいいだろ？」

俺が返事をしてやると、一瞬驚いたが、すぐに笑顔になる。

「あと、お前今日からセバスチャンって呼ぶから。反論はなしな」  
「かしこまりました。ウイデイス様」  
「んじゃ、全員中入ってくれ」

俺の言葉にぞろぞろと中に進んでゆく。

「精霊、今から入る奴覚えておけ。許可する。俺の許可した以外で屋敷の中に勝手に入った奴は排除しろ。殺してもいい」

『はい』

『燃やす！』

『覚えるよー』

『みんな同じだからむずかしい』

ああ、精霊にとって契約者以外は同じに見えるんだよな。まあ、精霊に頑張ってもらうしかないな。

「あと、火精霊、屋敷の内部を快適な温度に保ってくれ」

『難しいけどやってみる』

『みるー』

これでいいかな。

さてと…俺は。

名もなき使用人

あたらしい御主人さまに連れられてきた御屋敷は、前の御屋敷より大きかったです。

男爵だといいましたが、この御屋敷の広さだと侯爵家並だと思いません。

御主人さまの話したと、自分ですらまだ家に入っていないとのことです。

部屋もお風呂も自由らしいので、それは嬉しいです。

7歳とのことで、夜の御奉仕もないでしょうし、気が楽です。

まず、自分たちの部屋とのことで、部屋を決めましたが、廊下などと同じで、こびりついたホコリが酷かったです。積もっているわけではないのですが、これは拭かないとキレイにならないでしょう。屋敷の中は暖かく、数日くらいならベットが無くても大丈夫そうです。

洋服や下着はほしい所ですが、一応明日ミルド様に言ってみましよう。

まずはお掃除とのことですが、雑巾がありません。どうすればいいのでしょうか？

「あー、雑巾なんてないから、適当に屋敷内にある布なら何でも使っている。どうせ全部取り換えるからな。水は外の井戸使ってもらうしかないが、早いうちに水道引くから、それまでは我慢してくれ」

御主人さまが大声で叫んでいる声が聞こえました。全部変えるなんてただだけお金持ちなのでしょうが。

とりあえず、カーテンを取り外し、これで代用することにしましよう。

それにしても、前の屋敷でも井戸でしたが、水道とはなんでしょう。

「風呂場はまだ入ってる奴いないと思うが、俺が魔法でやっておく。石鹸とかは……明日までに何とかするから今日は水だけで我慢して

くれ」

そもそも石鹸なんて貴族様を使う物なので使った事ないのですが、お風呂自体ありませんが。

御主人さまは貴族になっただばかりのことなので、知らないのでしょうか？

せっかくの新しい職場なので、あまり無駄して破産してもらっては困ります。

「俺はやることがあるから、適当にやってくれ。部屋が汚いままです寝れるんだったら掃除は明日でもいい。だが風呂は入れ。臭い汚い絶対ダメ！」

少し酷い気がします、確かに自分でも嫌ですね。部屋が汚いのも。

とりあえず、カーテン、改め雑巾を持って井戸に行かなくては。

そういえば、使用人には休んでいいと言っているのに御主人さまは働くのでしょうか？

言ってくれば私たちがやりますのに。明日そのこともミルド様に言ってみましょう。

## 地下室

精霊の力で風呂に水を張り、温めた。温度は常に40度程度にしておいたので大丈夫だろう。

シャワーないからそのまま入って汚しそうだが……早めに作らないとまずいな。

シャワーは使用人より、俺が嫌だ。創造が使えれば一気に片付くのに、人間の身体は不便すぎる。

まあ、俺の場合精霊の力借りれば大丈夫だけどな。

んで、あれから精霊が見つけた地下室に来ている。一番大きな部屋の床が開くようになっていたのだ。完全に同化していたので、バシないだろう場所だ。そこから地下に石の階段が伸びていた。ライトの系統魔法を唱えると、奥まで一斉に光出す。これは、屋敷内と同じ仕様だ。

そこは大きな空間だった。多分、屋敷全体に広がっているのだろ

う。

太い柱が等間隔で立ち、かなり階段を降りたので、それなりの深さだろう。

一応階段から降りた奴が許可してない奴だったら燃やそう。部屋を立ち入り禁止って言って置けばいいだろう。守らない奴は死んでも仕方ない。

にしても、これだけ広ければ色々出来るな。とりあえず、マツクはまだ無理だろうな。コンビニも。あと俺に出来そうな事は……爆薬精製、回復薬精製、道具精製、能力精製、禁断薬精製。

どうすっかな。まず爆薬。これはダメだ。戦争なんか使われたら目も当てられない。勝手に使って死ぬのはいいのだが、俺が作ったせいとかいいがかり付けられそうだ。

回復薬は大丈夫だろう。エリクサーや万能薬は手元に置いておいて、ハイポーションレベルなら大丈夫なはずだ。かなり高額で売る事になるだろうが、それならそれでいい。毒消しとかなら売れそうだ。

道具は……テントならいけるか。プロテスストーンとか、アルテマストーンとかは危険だからやめておこう。賢者の石とかもヤバいな。ダークマターなんて流出したら目も当てられない。

能力系は……金持ちだけ強くなるとか、バカ貴族がいるからダメ。禁断薬もダメ。

結局ハイポーションと毒消しとテントだけか……。ダメだこれ。他に方法を。

商品が三つしかない薬局が出来上がるぞ！

GFで出来そうな物なんかないか……。

パンデモニウムなら毒薬なら作れそうだが却下だし……。

サボンテンダーでサボテンの針……意味ない。

エデンで星ごとダークホールへ送って……方向性が変わってきた。

全員戦闘に特化しすぎてやがる。

いつそ同時にマックでも作るか？

コンビニで弁当とか作るのにも人がめっちゃくちや居るしな……。

まず単独店舗なら試用つてことで何とかなるかもしれない。コンビニは無理だが、小さな薬局とマックくらいなら？ てかマックが食べたすぎて無理やりだわ。

マックの場合油はいいとして、鉄板とかか。混ぜるのは大型の鍋を練成して、頑張つてもらうしか、最悪精霊を使えば……。パンは小麦の精製方法から変えないとダメだな。ポテトは芋が安いからかなり楽っちゃ楽だな。野菜もOK。だけど、俺が食べたいエビフィレオ！ エビを大量に入荷しないとダメだ。海に面した村に養殖技術伝えるか。専属で買い取りを保証すればやってくれるだろう。

とりあえず、マックは地道にやるしかないな。先に薬局で金稼がないとダメだ。

「カーバンクル、セイレーン出て来い」

俺の呼びかけに、目の前に二匹が出てくる。

空中にふわふわと浮いている緑色のかわいい物体。

頭に赤いルビーをつけ、小動物のような姿だ。

セイレーンはキレイな人魚。基本黄色い色が主体の女性。手にハープを持っている。

俺は影の中から一本の瓶と、大きなタルを取り出す。

「水の精霊、コレに似た物作れるか？」



俺の言葉に反応し、ビンに水の精霊が集まってくる。

『似てるの』

『作れるよ』

『水の秘薬みたい』

水の秘薬って確か一万エキューくらいするやつだよな……材料の方が高くなるが…。

別にいいだろう。精霊なら簡単に作れるわけだし。

「このタル一杯分出してくれ」

俺の声に精霊がうなずき、タルの中に水がたまっけてゆく。

軽く呑んでみるが、普通のおいしい水？

「セイレーン、このタルの水をいやしの水に変えられるか？」

いやしの水。先ほどのビンの中身の物だ。

セイレーンは頷き、ハーブを鳴らす。

水の中身がなんとなく変わった気がする？

呑んでみると、やっぱり普通の水だ。もともとHP満タンだしな。

「んで、カーバンクルは半分ハイポーションに精製してくれ。セイレーンは半分をテントに」

二匹は頷き、セイレーンがハーブを鳴らすと、水が宙に浮き、だんだん形が変わり小さな三角錐になる。カーバンクルのルビーが光だし、樽の中に光が落ちる。

とりあえず、テントからだな。

地面に落ちたテントを拾い上げ、それを遠くに放り投げると、ポーンと音がして大きくなる。

一体どんな技術なんだろうと思う。圧縮率スゲー。

一応中を覗いてみるが、三人が十分寝れる程度のテントだ。寝て起きたらHP全回復の優れ物。

んで、ハイポーションのほうは、影から取り出したコップですくい、呑んでみると。何時も呑んでるハイポーションだった。薄めればポーションになるだろう……多分。変な科学反応しなければいいが。

毒消しはバンデモニウムに毒の粉作ってもらってセイレーンが精製か。

とりあえず試験運用って感じで小さな薬局作ればいいかな。費用もたいしてかからないだろうし。売れなかったら売れなかったで潰せばいいだけだし。

「とりあえず、戻っていいぞ、また頑張ってもらうことになると思うけど。ありがとな」

二匹が俺の中に戻るのを確認し、タルにレビテーションをかけて浮かせる。

そして、小さなテントをポケットに入れ、階段を上ってゆく。

そう言えば、エーテルってMP回復もあるんだな。こっちなんで特に貴族用だから高く売れそうだ。

ついでだから、作っておくか。

俺は戻り、再度樽を取り出して作り始める。

## 玄関ホール

俺が樽をうつ浮かせて一階に戻ると、何故か使用人達が掃除していた。

もうかなり遅い時間のはずなのだが、何故寝てないんだ？

「なあ、その君。何故全員が働いているんだ？寝てていいと言ったはずなんだが？」

近くを掃除していた使用人の一人に声をかける。

「はい。ご主人様が夜遅くまで働いているのに、私たち使用人が先に寝るわけにはいきません。ですから、出来るだけ早くお屋敷をキレイにしようかと」

ふむー、偉いな。俺だったらすぐに寝るぞ？

でも、かなり疲れているのか、フラフラしてるな。ちょうどいいか。

「今から玄関ホールに使用人全員集めてくれ。狭いと思うから中央階段を超えて二階まで使つて構わない」

「かしこまりました、それでは失礼いたします」

俺の言葉にそそくさと使用人を呼びに行ってくれた。さて、とりあえず俺はこの三つを持って行かないと。

それから、10分ほどで使用人が全員ホールに集まった。

「ウイデイス様、私たちに用とは何でしょうか？」

ミルドが声をかけてくるが、視線が樽に行ってるし、わかってい  
るのだろう。

さっそく試したいので、声を張り上げる。

「まず、此処に俺が作った秘薬がある。新しく売り出そうと思って

いる商品だ。知つての通り、ミラの傷を治したのもこの薬で、大量生産が可能だ。まずミルドにはこれの価格設定を決めてもらいたい。ついでに、使用人も疲れているだろうから、体力も回復し、意見も聞けて一石二鳥だ。まだコップがないので、ミルドとセバスチャンは同じコップ。使用人は10個程コップがあるから回し飲みしてくれ」

俺の言葉を聞き、軽くざわつく。全員がミラの火傷を知っていたのだろう。

「ウイデイス様、使用人にまでこのような高価な薬を使っていただいていいのですか？」

「大量生産が可能と言っただろう？　これから風呂にもお湯が臭くならない程度までこれを混ぜる。疲労回復効果もあるからな。もちろん使用人にも使ってもらつ（ぶつ倒れて使いものにならなくなつたら堪らない）」

俺の言葉に使用人達が何故か一礼する。意味がわからないぞ？　使つた方が効率的だから使っただけだし。

「まず、この一番左がハイポーションと言う秘薬だ。ミラに使つたエリクサーの劣化版だと思えばいい。傷や火傷程度なら一瞬で消えるだろう。エリクサーは効果が高すぎて販売しない。だが、屋敷には用意しておくので、必要ならミルドに言ってくれ。そして真ん中のが、エーテルターボ。魔法を使ったときの精神力を回復出来る。精神的に疲れたって奴にも効果があるはずだ。そして一番右が万能薬。病気や毒などが一瞬で治る。これも効果が高すぎるので売ることができない。作るのは簡単だから屋敷では自由に使つていいが、売るとしたら相当な値段になるだろう。ちなみにミラもこれで性病が治つた」

「へ、へ？ もー何言ってるんですか！ 違いますよ！？ 違いますからね!？」

実際そうだったろが……、真つ赤になって慌ててる時点でバレるぞ？

そのあと、一緒に持ってきたコップを、近くの使用人に渡す。

「大体一杯で効果は十分だ。多分ハイポーションは男の方が大量に使わないと全回にはならないと思う。ミルド。試してみてください」

ミルドがうなずき、コップでハイポーションをすくう。

ひそかにライブラをかけてみるが、ミルドがHP2600程度。使用人は1400〜1800くらいだ。ミラは790。俺は8970。俺の場合は、一歳くらいから剣持って、魔物と戦いまくってたからうなずける。

MPはミルドで750くらいだった。ミラなんて300程度しかない。

ミルドがラインメジ 確か、二つの属性を掛け合わせて魔法を使えるレベル。

ミラがドット 一つの属性魔法だから。

一流メイジのスクエアだと2000くらいあるってことか。

ミルドが一気に杯をあおって飲み干すと、うっすらと体が光り輝き、すぐに収まった。

「ほう？ 体が軽くなったような……?」

「貴方、痣などが消えていますよ?」

自分の体を見回し、驚く。

「あー、体力があまり減ってないと効果はない。傷は治るけどな。使用人達も自由に飲んでいいぞ？ お前たちが今仕えてるのは俺だ。遠慮せずに飲め。万能薬だけは必ず飲んでおけよ？ 屋敷内で病気が感染したりしたら困るからな。ミルドもほかの飲んでくれ」

コップを持った使用人達がハイポーションを飲み、傷が治ってキヤッキヤと喜んでいる。

ミルドもほかの二つを試しに飲み始めたようだ。

数分後、ミルドが飲み終わり、使用人達はまだ飲んでいるが、ミルドを呼び寄せる。

「で、どうだ？ 売れそうか？」

「はい。これほどの効果とは、思いませんでした。一体どのような調合をすれば？」

さすが元領地経営者。だが

「調査は教えられない。だが、いくらでも量産可能だ。で、値段はどれぐらいがいいと思う？」

「そうですね……水の秘薬以上の効果ですから、10万エキュー……」

10億円かよ！ 薬が貴重な世界物価タケ！

「いや。最高でも1000エキュー程度だろう。ただ、これは貴族用、次いで一応平民用も考えている」

俺はニヤリと笑う。

「平民用……ですか？」

「ああ、ちよつと見ててくれ」

俺は用意しておいたナイフを取り出し、自分の手首を切り裂く。

「なっ!？」

ミルドや使用人達が慌てる。

俺はコップにハイポーションを汲み、傷にかけると、その幹部だけが光、キレイに傷が治る。

たまたま見つけたのだが、体内に入るとハイポーションは傷を治すようなのだ。それは、傷口からでも同じ現象が起こる。

「5センチ四方の布に液体を染み込ませ、5枚セットくらいで売ればいいだろう。手の荒れや、体の傷。例えば、貴族に虐げられた子供などの傷もこれで治る」

ミルドは顎に手を置き、考えはじめる。

「しかし、それだと結局はハイポーションを使っているのですよ？ その分量だつて相当な値段に」

「ああ、ハイポーションなんて元手タダだ。布の値段だけで事足りるだろ？ 貴族つてのは見栄をはるのが好きだからな。効果が高くて、全体の疲れが取れる、ハイポーションの方を買っただろう。平民は命名傷ピタくんだ。1エキュー程度でいいだろう。5枚入っ



てるから、5人で買えばその5分の1出しな」

「ふむ、それならば売れるでしょう」

「あともう一個ある」

俺は小さなテントをポケットから取り出す。

「それは？」

ミルドは訝しげに見ているが、当り前だろう、いきなりこんなちつこい三角錐見せられたつてな。

「これはテントと言う」

それを近くの床に放り投げると、大きなテントになった。

使用人がビックリしてあどさる。

「これは一種の薬だな。中は快適な空間になっていて、さらに体力と精神力回復の効果がある。一晩休めば体力も精神力も、完全に回復する。一度に三人まで入ることが出来、最後の一人が出ると、元の大きさに戻る」

一度中に入り、出ると小さな三角錐になる。

「どんな製法をしているのか非常に気になりますね……。それも量産が？」

「ああ、とりあえず、使用人には一人一個ずつ配っておく。何回でも使えることから、一万エキュ！。値段的に上流兵士にしか使えないけどな」

どれも実際は安く売ることが出来る品だ。しかし、あまり売らず

ぎると、戦争などが起きた時に、金がある方が勝つと言つことになりかねない。それは　面白くない。

「一応薬局を作るつもりだから信用のおける使用人数人を店員として選んでおいてくれ」

「かしこまりました」

ふむ。一応店に火の加護をつけて盗んだら燃やすか。その場合王宮の許可もとらないといけないな。まあ、どうせ宣伝するのに、王宮に宣伝してお墨付きをもらうことが必要だ。後は最初は傷ピタくんの試供品を配ればいいだろう。

はあ……、マックまで遠いなあ。金があっても技術が足りない。

まあ、俺の三食マックで不健康生活の為にがんばるかな。

#### 04 まず薬局から（後書き）

レビテーション 浮遊させる、自分にも可能。

精霊魔法で飛ぶのと血がい、精神力がかなり消費される。

ポーション HP200回復。

ハイポーション HP1000回復。

エーテル MP200回復。

エーテルターボ MP500回復

テント HPMPP全回復

## 05 マツクの為にひた走る。(前書き)

以外にお気に入りが多いことにビックリ。検索からもランキングからも除外するのにどうやってきたんだろっ。

## 05 マックの為にひた走る。

### 書室

計画を初めて一カ月。俺はもう死ぬかもしれない。

領の案件や、ミラ薬局。更に新しい計画の為に書類に埋もれていった。

ミラ薬局とは、あまり目立ちたくない俺が名前をミラにしたただけだ。

代表は俺だが、一応顔は伏せてあるので、暗殺とかはされないだろう。されてもどつってことないが。

ミラ薬局はいまのところ順調だ。順調すぎると言っていていいだろう。まず、王宮に試供品と言うことで、兵士を実験台にして効果を試すと。大量受注してくれたのだ。

料理への毒の混入のためか、毒消しも上々の売上。平民のほうも高いながら、傷ピタくんは人気だ。それだけ貴族に虐げられやすいのだろう。

他国からも大量受注があり、転売したらその国には卸さないとする、支店を出してほしいとのことでトリスティンとアルビオン、

ガリアに一店舗ずつ支店が誕生した。

だが、受注額が多すぎる。貴族などからも高い値段なのに相当の数が受注される。

少しおかしいので、部屋で俺の邪魔をしているミラにでも聞くか……。

「ミラ、受注量が多すぎるんだけど、どうなってるんだ？ 戦争でも起きるのか？」

ミラはソファーに寝そべりながら、顔だけこちらに向けた。

「あ、それはですね。化粧品として流行っているんですよ。大貴族だとお風呂にしたり、頭から被ったりしてますね。臭いはきついですが、効果は確かなので、肌荒れも治るしお肌もつるつるです」

おつ……、なんか新しい使い方だな。バカ貴族共の金がこっちに流れるのはいいが、もったないな。

「ちなみにうちの使用人達も浴びたりしてますよ？ 一日に何度もお風呂に入ったりしてますね！ お母さんも喜んでました」

バカ使用人誕生！

「まあ、うちの場合はタダだからいいが、ほかの貴族破産するつもりか？」

「あー、それはですね。パーティーとかで使っている貴族がいて、すぐく肌がツヤツヤしてて、それを見た人が聞いて、噂が噂を呼んでいるらしいです。それで、一回その生活に慣れると、抜け出せなくなつて。多分破産まで行っちゃうかもしれませんね。本店でも、たくさん泥棒が入っては精霊に焼かれてるみたいですし。最近盗

めないとわかって落ち着きましたが」

ふむ。

使用人が減るのは困るから、やはり俺が作ったアレを支給して正解だったか。

にしても、屋敷にの侵入者も相当数いたから人が死んでもうちの使用人達は慣れてるな。まあ、一日一人とか来てたら慣れるか…。

あとは……。

「そっちはわかった。で、お前は毎日なんでゴロゴロしてるんだ？」

こいつは食って寝ることしかしてない。このままだと太る。確実に。

「暇なんですよー、わたしやることないですしー」

「とりあえずお前太ったら解雇だからな？」

俺がそう言っていると、ガバッと立ち上がる。

「ヒドイです！ それはあんまりですよ！」

「黙れ！ 俺は精霊の力とエリクサーで毎日徹夜だぞ！ お前一日12時間も寝てるだろ！」

「12時間じゃありません！ 15時間くらいです！」

「墮落しすぎだボケ！ お前俺の奴隷ってわかってる！？」

「ええ、わたしはご主人様の奴隷ですよ？」

無い胸を張っているが、このままじゃ胸より先に腹が出ることは必須。

「お前杖の契約終わったよな？」

「はい。二つとも終わりました。にるヴぁーなは部屋に飾ってありますが、普通の杖はホラここに」

シヤキンと言う感じで懐から取り出す。だが、まったく使ってるの見たことないぞ？

「レピテーションを使え」

「レピテーション」

素直に俺の命令を聞き、浮き上がる。

「お前今日から屋敷内にいる間はずっとレピテーションしてる」

「な、何言ってるんですか！？ これ以外に精神力が減るんですよ？」

確かに結構減るらしい。ミラの少ないMPがゆっくりと減ってゆく。

「安心しろ、メイド全員にエリクサーを持たせてある。精神力なくなつて気絶+落下の怪我 エリクサーで回復 気絶 エリクサー 気絶つてやってろ」

「なんて拷問！ それにこの恰好だと下着とか見えちゃいますし……」

確かに見えるが……。

「この屋敷には男はお前の父親とセバスチャンと俺しかいない。そして、俺はお前の下着なんて見てもどうも思わない。ついでに、お前には最低三年以内にはスクエアメイジになつてもらおう」



ミラの瞳が驚愕に開かれる。

「む、無理ですよ！ ドットですよ？ 血だって両親がラインですし！」

「関係ない。俺なんて両親貧乏平民で生まれた次の日には捨てられたぞ？」

「え……？ ご主人さま平民だったんですか？ しかも捨て子？」

「ああ」

「……すみません」

「気にしてないっての、それよかずっとレビテーションな。限界まで酷使すれば、最大値が増えるから。エリクサーでズルするから三年あれば十分スクエアになれる……多分」

「多分ですか……？」

「いや、お前才能ないし」

「ひどっ!？」

「まあ、それで10歳で精霊魔法を使えるようにするから。10歳までにスクエアにならなかつたら破門だから」

「横暴です！ 王宮に裁判を申請しにいきます！」

「裁判する金もなくなるから安心しろ。俺に捨てられたらお前は無一文の平民だ」

ミラは涙をためながら、抗議の視線を向けてくる。

「あのなあ、俺は一歳で魔法の特訓をさせられて、3歳で竜の相手をさせられて、7歳で魔法禁止で竜7体の相手をさせられたぞ？」

俺に比べれば楽だろ？ 15歳までにはオクタゴンまで行け！」

「鬼ですか！ 一人で八つも出来たら史上初ですよ!？」

うーん、裏技を使えば多分どこまでも行けるんだよな。精霊魔法

で補佐してオクタゴン、更にトリプルをかければ24つ魔法を合わせられる。ニルヴァーナ使えばMP消費1だからミラならトリプルかけても大丈夫だろう。

普通のやつだと暴発して、よくて気絶、悪くて死ぬけど。

「あ、そだ。やる気が出るように試作品やるよ」

「え！？ 新しいの作ったんですか！？」

ミラの目がキラキラと輝いている。フワフワと浮いて、コチラに近寄ってくる。

俺は影の中から一つの黒いベルト付きポシエットを取り出す。

「これだ」

「小さなカバンですか？」

「ああ、まず中に入ってるものを紹介すると。エリクサー\*2、万能薬\*2、リフレクストーン\*3、プロテスストーン\*3、テント、アルテマストーンだ」

「なんだか聞いたことないものが多いですね」

「リフレクストーンは使えば、30分魔法を反射出来る。プロテスストーンは殴られたり切られたりするダメージを軽減」

「アルテマストーンは？」

「これはかなり貴重なセットだから、奪われたら大変だろ？ ベルトを杖と同じように契約すると、中の物を自分の意思で使うことができる。アルテマストーンは普通は周囲数百メートルだけど、削って小さくしたから周囲三メートルを爆発で消し飛ばす。盗まれたら少し離れて発動しろ。もし、躊躇したら、この家の機密がバレて最悪この家がつぶれる。強すぎる力は排除されるだろ？」

俺の言葉を聞き、ミラの顔が途端に青くなる。実際はそこまで問

題ない。薬の製法は研究されても絶対作れないし、ストーンも同様。アルテマでも3メートル程度なら、普通の魔法と変わらない。

「ちなみに命名ミラちゃんお出かけセット だ」

「な、なんですかそれ！ いりません！」

「命令だ。ちなみに、ほかのメイドも持つてるぞ？ 一人で出かけるときとか危険だからな。輸送する馬車は精霊に守ってもらってるけど、本人は危ないだろ？ お前も自分の身が守れるようになるまで持つておけ。一応お前はミラだからな。ミラ薬局の代表は俺だが、お前の名前が使われてるからお前も狙われる。てか俺より狙われるな」

「ヒドイー！」

ミラは半泣きになりながらも、俺の手からミラちゃんお出かけセットを受け取る。

俺から受け取った後に、唐突に落下した。

「気絶早っ!?!」

しかも机に頭ぶつけて怪我してるし……。

俺はエリクサーを取り出して、自分の口に含んでからミラの口を開き、飲ませる。

一定量を飲ませて、意識が戻ったところで、ビンから直接飲ませる。

「な、なにするんですか!?! わ、わたしの初めのキスが！」

「いや、どっちにしろお前メイドにもやられるぞ？ 飲ませる方法がないんだし」

「がーん！ ひどいー！」

口でがーんでいう人初めて見た。

「もう一つ方法がある」

「あるんですか!？」

コイツはよく目を輝かすな。

「ああ、肛門から直接」

「やっぱり口でいいです……」

「それが剣で突き刺してから直接、どうせ治るから」

「口でお願いします」

「じゃ、レビテーションかける」

俺の言葉に素直に浮かびあがるミラ。

「さて、じゃ。お前はそこで浮いてる。気絶したらまた飲ませてやるから。俺は仕事片付けないといけないし」

「……はい」

ふう……。なんでわたしばかり恥ずかしくてとか聞こえるが気にしないでおこう。

## ミルドの書室

「工場……ですか？」

俺は出来た案件を持ってミルドのもとに持ってきていた。

この部屋はミルド夫婦が仕事をしている部屋だ。

俺の後ろにはミラがふわふわと浮いている。すでに10回くらい気絶している。

「やりたいことがあるんだが、大きな工場が必要だ。金はあるだろうか？」

「ええ、お金はかなり余っていますね」

そりゃそうだろうな。高価な薬がバンバン売れているわけだし。

「んで、豚肉と、牛肉を大量に仕入れるってことで契約してほしい。ついでに、もう一枚あるのはエビの養殖の草案だ。小麦の精製方法が書いてあるやつは、一度使用人にやらせてくれ。まあ、工場出来てからだから、一年後くらいになるかもしれないが。その間に新し

い小麦の精製方法は覚えさせておけ。金はいくら使ってもいい。成功すれば、確実に戻ってくる。あと、豚肉の腸詰方法を……」

そういえばケチャップも作らないとな……。

「腸詰方法を？」

「ああ、そこに書いてある通りにすればいい。ついでにトマトの受注も頼む。レシピは後で渡すからな。まあ、大口契約は来年からだから、それまでは出来るだけ、うちの使用人を使ってやり方を学んでほしい」

あとは馬車より早い輸送手段がほしいな。

「なあ、一番早い輸送手段ってなんだ？」

「そうですね、風竜でしょうか？」

あいつらか……。

「竜は飼えるのか？」

「はい。調教されているのでしたら。ただ、相当値段が高いですね。公爵レベルなら個人で持っている家もあるのですが……」

竜は上位者に従う生き物だ。一度コテンパンにしてからエリクサー  
「この場合Gエリクサーで回復してやれば従えさせられるかもしれない。

元手がタダだし輸送には最適……か。

「ああ、わかった」

竜を捕獲しに行くか。

あと、問題は砂糖。ハンバーガーに紅茶とウーロン茶もときだけは嫌だ。

コーラが必要だろう。

だが、この世界の砂糖は質も精製度も低い。

そうなる……さとうきびの苗がほしい。だが、この世界にさとうきびなんてないだろう、そうなる地球に行くしか……。G F E デンのおかげで座標は分かっているが、転移が使えない。

原作通りなら……異世界扉ワールドドアって魔法が虚無であつたはず。だが、俺には使えない。虚無だけはどうしても覚えることが出来なかったのだ。エデンで宇宙を飛ばせば行けるかもしれないが、この肉体だと大気圏すら越えられないだろう。そもそも酸素がないと死ぬ。

虚無　ルイズと、ティファニア……か。

そもそも、今の年代はいつだ。過去だつたら糞だぞ。

「なあ、ラ・ヴァリエール領って知ってるか？」

「ええ、確かミラと同じ子供がいたので覚えています。公爵のはずですが」

「それは三女か？」

「確か」

「っしゃ！　多分親父がわざとこの年代に飛ばしてくれたんだろうな。神のときはいつも数百年前に飛ばすけどな。」

待てよ。つてことは7歳だろ？

ルイズの方に関わるとういことがない。

ティファニアはまだ貴族だ。手の出しようがない。

コーラはしばらく妥協するしかないか……。

その前に準備として、始祖のオルゴールと、風のルビーを手に入れたい。ミラが精霊魔法まで覚えたらアルビオンに行くか。確か、

オルゴールとルビーはアルビオンにあるはず。

だが、王家に伝わる秘宝を交渉で何とか出来るのか……。最悪犯罪に走れば……。

コーラと犯罪。天秤にかけるとしたらどちらを取るか……。コーラだろ。

手に入れたいものは何としても手に入れる。これは常識だ。ミラが精霊魔法を覚えたら行くか。

「ありがとう。で、さっきの話に戻って質問なんだが、一番竜がたぐさんいる場所はどこだ？」

俺の質問にミルド夫婦とミラが目を見開く。

「ま、まさか行く気なのですか？」

「そのままかだ。安心しろ。無理だったらすぐに諦める」

もちろん竜を皆殺しにしてな。

「はあ、危険で誰も立ち寄らないのですが、幻獣の森と呼ばれる場所があります。そこにはたくさんの幻想種の獣が集まっていると聞きます。竜やペガサスなどですね。王国兵一師団で挑んで全滅したとか言う噂があります」

ふむ。

「ありがとう。試しに行ってみるよ」

俺はそのまま背を向け、扉の出口に向かう。

「そつだ、大量受注より、空いている領内で豚や牛を飼って育てた



方が安上がりかも知れないからそっちも考えておいてくれ」

さて……幻獣の森……ね。

## 05 マックの為にひた走る。(後書き)

Gエリクサー　　GF用のエリクサー。

虚無魔法　　始祖ブリタイニアが使ったとされる魔法。粒子に直接  
さ作用する魔法。始祖の子孫の選ばれた者しか使えない。

始祖のオルゴール、風のルビー　　始祖の残したもの。虚無魔法を  
使うのに必要。

## 06 幻獣の森で輸送機探し(前)

### 書室

もうヤダ。

だってさ、俺は自分に優しい世界作ろうと思ってるんだよ？  
なんでそれで、毎日書類に追われて徹夜続きなんだろう。

まあ、最近は徹夜にミラも付き合わせてるけどさ。  
めんどいのはめんどいよ。

そういえば、ミラが精神力だけならトライアングルクラスになっ  
たよ。

トライアングルって17歳とかでも一握りしかないらしいね。  
でもさ、精神力だけってのが肝だ。魔法の構築が糞すぎていまだド  
ットとかもうね。

でも一週間でこれだけいったのは褒めてやろう。まあ、普通気絶  
まですると数週間とか昏睡するのを無理やり回復させてるからね。  
一回気絶する度に、ほかの人の数百倍は進むからこれは順当なこと  
なのかもしれないけど。

俺の調教のおかげだ。

「そつだ、ちよいこつち来い」  
「はい？」

ミラはいつもどおりふわふわとこつちに寄ってくる。

「ここに樽があるだろ？」  
「ありますね、なんか怖い感じのが」  
「石が入ってるだろ？」  
「入ってますね。魔力纏ってる石が」  
「ちよい手を突っ込んでみる」  
「はあ」

俺の言う通りにミラが手を突っ込むと。

「つて、まま、待つてください！ き、キモチワルイですコレ!？」  
石がミラの体によきによきと入ってゆく。

「安心しろ溶けて体内に入るから」  
「なんですかこの気持ち悪さ!？」  
「それはHPアップとパワーアップだ。魔法はお前が自分であげるとして、体力と腕力は女は上がりにくい上に、上限が低い。だから底上げすることにした。それだけあれば数十くらい上がるんじゃないか？ 数十でも大人程度は超えられるはずだ。HP自体はかなり上がるはずだし」  
「でも、キモチワルイですよこれ？ ご主人様も使いました？」  
「ああ、試作品を使いまくってたら、人間超えたぞ？ 小さいころからパワーアップと魔力アップは使わないと死ぬような生活してたからな」

そうなのだ。一歳で剣を振るとか不可能だったのだ。だから、じーちゃんが出かけてる間にいろいろ精製して、自分に投与してたら人間超えてしまった。って言うっても、神のときに比べたら全くと言っていいほど上がっていない。今親父に襲いかかったら、一秒以内で死ぬ。そもそも神は肉体で構成されていないから神殺しでしか殺せないしな。

「でも、これすごいですね。売ったら高く売れそうです」

「お前だけ金にがめついんだよ？ そんなの売ったら王宮に没収されるぞ。てか戦争起こるかもしれん」

「さすがにご主人様程金にがめつくはありませんよ？」

うーん、俺の場合マックが出来るなら薬局はどうでもいい。計画には金が必要なのだ。ホントはネット環境がほしいところだが、さすがにそんなことは無理だとわかるので諦めている。

「ってことで、行くぞ？」

「へ？ 何処へ？」

「いいから、ニルヴァーナとミラちゃんお出かけセット 持って庭に集合。あ、ついでにこれも入れておけ」

俺は影から6つの石を取り出す。

「ヘイストストーン3つとストップストーン3つだ。ヘイストは使うと自分の動きが二倍程度になる。ストップは短時間+一匹にしか効果ないけど、敵を止めることが出来る。万が一……な」

「ま、待つてくださいよ！？ 万が一ってどこ行くんですか？」

「いいからホレ。早く持ってこい。ちなみにそれでミラちゃんお出かけセットだ」

俺は石を渡してやる。

「あ、そういえば気になっていたことがあるんですけど……」

「ん？」

「えいつ」

俺に向かって杖を振り

「きゅ」

パタリと倒れた。

俺はミラの頬をパンパン叩き、起こす。そのあとでポーションをかけてやる。

「痛すぎます……何するんですか？ 血が出るまで叩くってどれだけの仕打ちを！？」

「自業自得だ。ディテクトマジックでもかけたんだろ？」

「そうですか……」

ミスったな……。屋敷内だからオートリフレク取り外してあったんだよな。

「ご主人様の實力見たことがなかったので、いつもアイテムだけだし。見てみたら、ご主人さまの力もありえないくらいでしたか……それより、ご主人様の中にいるのはなんですか？ すっごい睨んできたんですが？ ご主人さまを守るみたいになっていましたけど」

ミラが不安そうに俺の方を見つめる。

うーん、これからはオートリフレクは常にかけておこう。

「あれは俺の使い魔みたいなものだ。うーん、ついでだから今から向かうところに一匹使つかないかな。歩いたら一か月くらいかかるらしいし」

「だからご主人様の中で守っていたんですねー、全然納得できませんけど。」ご主人様ならなんでも在りな気がするからいいです」

「そう思っておけ。じゃ、中庭な」

「はい」

俺の言葉にふわふわと浮きながら部屋を出てゆく。  
どれ使って行けばいいかな……。

「それにしてもご主人様の使い魔さんは見た目怖いですけどいい子ですね」

「黙れノーパン娘。お前が失禁したせいでかなり時間を無駄にしたぞ？」

「うっ……」

結局GFの方のバハムートを使っていくことにしたんだが。

いきなり上空に雲が現れ、雷が鳴り出したあたりでミラはびくびくし。バハムートが雲を突き破って俺たちの前に現れたところでミラが風圧でふっとび。気絶＋失禁した。

七歳児が七歳児のお漏らしを拭かないと行けなくてホント困った。

「一生の不覚です……」

「一生が何回あるんだ。お前おねしょいつになったら治るんだよ？」

「な、なな何でしってるんですか!？」

「俺の家だぞ？ いやに変えのシーツが多いと思ったらお前だったとは……」

「ぐすん……、ご主人様はいつくらいからおねしょしなくなりましたか？」

「歩けるようになったときだから生後半年くらい？ 実際おねしょっていうよりも、自分で歩けないからするしかなかったんだけど」「そもそも半年で歩けるってというのが異常とは思わないんですか!？」



歩くのは早かったが、喋れるようになったのはめっちゃ遅いんだよね……。  
言わないけど。

「あ、バハムート。あそこに降りろ」

「え？ 早いですね。まだ半日程度しかたってないのに」

「一応風で風圧防いでたけど、実際はかなりの速さだったからな」

とりあえずバハムートに降りてもらって、俺たちは地面に降りた。ミラはバハムートが雲の上に出るまで手を振ってお別れをしていたが、あれは偽装で雲の上に行かせるわけで、実際は俺の中に戻っている。

「うん。わかってましたよご主人様。ご主人様なら此処に来るってね……」

ミラがひきつった笑みを浮かべて、涙目で後ずさっていく。

「わかったなら来い。お前はヘイストかけて逃げ回れ。スピートと体力が上がるかもしれない。リフレクとプロセスも忘れるなよ？」

「はあ…もうご主人様に反抗するのもバカらしくなってきました…」

さて……。

一応念の為に、HP80パーセントアップ。オートリフレ、オートプロセス、オートヘイストつけとくかな。ついでにリボンも。HP2万近くまで装備であれば何が起こっても大丈夫だろう。俺とミラにリレイズもかけて万全か。

俺は影の中から一つの剣を取り出す。

透き通っている青い刀身に黒い柄。柄からは赤い紐が流れている。刃が雷のようにいびつで、黄色い装飾がされている。水が流れているように青い刀身が揺れており、周りにも青いもやが出ている。

「ご、ご主人様！ なんですかその危険な武器みたいなの！」

「ああ、コレはアルテマウエポンって武器だ。一応杖としても契約してあるぞ？」

「デイトクトマジックかけていいですか？」

「別にいいぞ？」

俺にかけて倒れたことを気にしてか、ちゃんと了承を得る。

杖を振り、目を見開く。

「スクエアメイジ何十人分ですか？ いえ、何百人分ですか！？」

「さあ、俺はスクエアメイジ見たことないし」

「あれ？ ご主人様はスクエアでは？」

「スクエアメイジがみんな俺レベルだったら世界は滅んでるだろ？」

「それもそうです」

よくわからない納得の仕方された。

ちなみにこのアルテマウエポン。ダメージ限界突破、回避カウンター、魔法カウンター、物理攻撃20%アップだ。

回避したら確実に相手に反撃する因果効果が付加されている。威力は俺の方でなんとでも出来るから、みねうちも可能。

「ちなみに言っておくが、この武器とお前のニルヴァーナは同格の武器だぞ？ 魔法的にはお前の武器の方が高いと思う」

俺の言葉にミラが目を見開く。

実際俺のは物理優先だ。ミラのは魔法優先。当然ミラのニルヴァーナが上だ。

「そ、そんなすごい武器くれたのですか!？」

「ああ。多分それだけで国買えるぞ?」

多分ってか確實。まあ、買うやついないと思うけど、どんな魔法でも魔力消費が無く。更に魔法が強力になる。MPが残っているほど威力が強くなる効果まであるから、組み合わせると最強だ。リフレクなら弾けるが、精霊魔法のリフレクションだと、スクエアクルスの魔法でリフレクションを破壊出来る。

「どんな魔法でも精神力減らないから、出来るだけ大きな魔法を放つのがいいぞ?」

「そんな効果があつたら国買えますよね……。それにしてもドットでコレは宝の持ち腐れすぎませんか?」

「すぎるな」

「ぐすん……否定してくださいよー」

実際そうなのだから仕方ない。

「とりあえず行くぞ。調味料は持ってきたけど、飯は持ってきてないから狩りして取らないといけないからな」

「幻獣の森で生活とか初めて聞きましたよ……」

俺が歩き出すと、ミラも渋々と付いて歩き出す。

さーて、何が出るかな。

幻獣の森・中層

あれから数時間へイスト状態で歩き、そろそろ日が暮れてきたので此処で寝ることになった。

今はバーベキューキャンプ中。

って言うっても、石の上に肉を吊るして食べると言う、原始的なものだ。

「にしても、この肉上手いな」

「そりゃそうですよ……ユニコーンのお肉とかどんな贅沢ですか…

…。これ、王宮で使用されてる乗り物ですよ？」

ミラが非難めいた視線を向けてくるが、食べれるならそれでいい。自分でも食べてるんだから文句言わないでほしいな。

「ユニコーンの角も高く売れるらしいから一応持っておくか」

そう言って、今まで集めた角数十を影の中に入れる。

「はあ……、まだお金必要なんですか？ 王宮並みにお金あるじゃないですか？」

「金がある分には困らないだろ？ ミラは奴隷生活から此処まで来たんだから文句言うなって」

「そうですねー、あの時はこんなことになるなんて思わなかったですよ。腕が無くなって、顔に火傷があつて、もう死にたいと思つていましたから」

ま、女であんなになつてたらなあ……。

「ご主人様がキラキラ光る精霊を連れてるの見たときはビックリしましたよ？ 一瞬妖精が現れたのかと思いましたが。鎖に繋がれた醜いわたしと、光に祝福されたようなご主人様。ご主人様が眩しく見えましたね」

「だろ？ 実際はあれ精霊が見えるやつ探してただけなんだけどな」「そう思つてたのにお金は荒稼ぎするわ、魔法で人殺すわ、幻獣を剣で叩き切るわ……」

はっきり言つて役に立たない人間はどうでもいいしなー、俺。

幻獣も一緒。ここまで来るのにあつた竜や幻獣は使いものにならない。小さいしな。

「すごく……すごく……」

ん？

「すごくありがとございました！」

そう言っつて、ミラは涙を流しながらキレイに笑った。  
言葉はおかしいけどな。

「きつと、ご主人様に見つけてもらわなかったら、私も家族も使用人も。死んだように生きることしか出来なかったと思うんです。でも、今はみんな笑顔です。ご主人様はかなり自己中心的で、自分最上主義ですけど。会えてわたしは幸せです。ありがとございました」

おい。褒めてるのか、貶してるのかハッキリさせる。

「これからも、よろしくお願いしますね！」

「……役に立たなかつたら捨てるけどな」

「ひどっ！？　ここは俺も幸せだよ、愛してるぜミラ。って言っつてキスとかするものじゃないんですか！？」

「黙れ！　俺の中にはそんな甘い言葉一文字たりとも入っていない。

それにキスなら毎回薬でしてるから飽きた」

「あんな微妙な味がキスなのは嫌です！」

「だが現実だ。現実には厳しいな。さーて寝るか」

「まだ話が終わってません！　てかこれどうするんですか！」

ミラが周りを指さす。

竜や、ユニコーンの死骸が散乱している。

「いや、逃げてたらコイツらが追ってきたんだろ？ せつかく殺さないでやるうと思ったのに、追ってきたから殺した。ここで殺したから周りが血の海だ」

「こんな場所で寝るんですか！？ 生臭いんですが！」

「テントに入れば臭いもしない。何かが近付いてきたら精霊が教えてくれるから大丈夫」

俺はテントを出し、さっさと入ってゆく。その後をぶーぶー言いながらミラがついてくる。

ま、ミラのことは結構気に入ってるから捨てないさ。

じーちゃんがいなくなった後の初めての家族って感じがするしな。

「おい、ミラ。追いつかれるぞー」  
「だった、ら、手伝って、くださいよー!」

ミラが数匹の竜に追いかけてられるのを見学中。  
あいつ好かれるな!。攻撃してくることから、襲われてるだけだ  
けど。

お、ペガサズが混じってる。

「ミラ、そのままこっちに逃げてこい」  
「助けてくださいー!」

ミラがこっちに走ってくるのを待ち、自分にトリプルをかける。

《ペイン》\*2=6

これは毒・暗闇・沈黙状態にする魔法だ。

6匹の獣が、いきなりの暗闇と猛毒によってその場で倒れる。さら  
らに声も出せない恐怖。

「はあはあ……、きついです」  
「まあ、でもさ。お前一時間近く走ってその程度だぜ? めちゃくちゃ  
体力は上がってる。エリクサーでも飲んでおけ」  
「はい」



俺は幻獣達に近づき、竜4匹と、ユニコーンの首をはねる。

「なあ、ペガサス。お前に選択肢を与えよう。俺に従え。さもなければそのままずっと苦しみ、最後には死ぬ。頭がいいお前なら言葉もわかるだろ?」

ペガサスは更に暴れ続ける。

俺はその体をアルテマウェポンの腹で殴りつけ、瀕死の状態まで持ってゆき、ケアルガで回復させる。

それを何度も繰り返す。

7度目で苦しがつてはいるが、おとなしくなり。

口の前に手を出すと、ペロリと舐めてくる。

それを確認し、Gエリクサーを口に入れて飲ませてやる。

しばらくすると、立ち上がり、頭を俺にこすりつけてくる。

「ついてこい」

一度コクリとうなずき、素直に付いてくるペガサス。

真っ白な馬の体躯に、背中と足、尻尾に絹のような長い毛。頭にはドリルのような角が生えている。瞳はサファイアのように深く、蒼い。背中部分に大きな羽が生えており、今は畳まれているが、美しい羽だ。

実際は精霊魔法で飛ぶらしいのだが。何故それがわかるかと言うと

「ミラ。二匹目ゲット」

ミラの隣には先ほど捕まえたペガサスがいる。

「はあ……。どこの悪党ですかご主人様」

ジトつとした目を向けてくるが、この世は力と金だ！

「王宮にでも売るんですか？」

「バカ言うな。うちには馬がないから代わりに飼うんだよ。売ったって大した金にはならないし」

「それでも百万エキューくらいになりますよ？ ペガサスだと。まあ、ご主人様にしたらそこまでの大金じゃないかもしれませんが……」

こんな生物がそんなバカ高いのか。まあ、王宮は見栄も大事だろうからな。売らないけど。

「んじやー、ミラはそっちのやつに乗れ。ちなみに今日からミラがそいつの世話係な。俺はコイツの世話をする。書類ばっかの息抜きにな」

「って、待ってくださいよ！？ これご主人様が従えたんですよ！？ 私の言うことなんて聞かないですよ！ 見てくださいホラ！」

ミラが手を伸ばそうとすると、前足を高く上げて怒り出す。俺が睨んでやると、頭を垂れる。

何ていうか 面白い！

「おいペガサス一号。俺の指示に従っておけ。ミラに従順になるかは、お前がミラを認めたときでいいからな。今は俺の指示だと思っ  
て乗せてやれ」

ペガサス一号が俺を見つめ、うなずく。

ミラが触っても、今度は大丈夫なようだ。

ペガサスはプライドが高いって有名だからなー。

ミラが乗るのを確認し、俺も自分のペガサス二号に乗る。

「毛並みいいですねーこの子。名前をつけてあげましょう。えーつと……“みかん”！あなたは今日からみかんです！」

スゲー適当だな。まあ、みかん自身がその名前を認めるのは当分先だろう。ミラに服従しないとイケないし。

「じゃ、俺の方はシロだ！ん？なんだ？」

ミラがジトつとした目でこちらを見つめてくる。

「白いからシロってどんだけ安直なんですか？」

「お前なんてみかんだろうが！？うれしいだろシロ？」

俺が前のめりになってやると、首をまげて頬を舐めてくる。

「むー。みかんもうれしいですよね？」

完全にシカトしている。

当たり前だ。どんな名前付けようが服従して無かったら反応しない。

「ひどい！絶対いつか認めさせてあげるんだから！」

ま、最低でも竜を一人で殺せない程度じゃ無理だろう。

竜一匹の討伐は王宮騎士一師団が必要と言われている。ミラがスクエアになれば、ニルヴァーナを使って倒せるだろう。

「んじゃ、いくぞー。シロ。俺が言った方向に歩けよ？ ペガサス  
一号も来い」

ペガサス二匹は俺の言った方向に走り出す。

「何でご主人様の命令は聞くんですかー！？」

当たり前だ、ボケ。

## 06 幻獣の森で輸送機探し(前) (後書き)

アップ系 ステータスを1あげる。

ケアルガ ケアルの最上級。魔力が高い者が使用すると全回復する。

リボン 全状態異常無効。

07 幻獣の森で輸送機探し(後) (前書き)

ギルガメツ シュ性格な主人公更生させ物語スタート。

## 07 幻獣の森で輸送機探し(後)

### 幻獣の森・最深層

「見ろ、ミラ。喋る竜がいるぞ！」

「で、伝説の韻竜ですか……これ？」

ペガサスで一日程走ってたどり着いた場所には、竜が30匹近くいた。

しかも、なぜかコイツら喋る。そして、デカイ！

原作だと韻竜はタバサしか持ってないから特別だと思っていたが

……、いっぱいいるじゃん！

多分これで全部なのだろうと思うけど。

『小さき者よ、何故このような場所まで来た。我等は平穩を望み、この地に住まう者だ。この地を荒らさぬと言うならば、殺しはせぬ。速やかにこの地を去れ』

はっはー、心優しい奴ならそれで引き返すけどなー。

「ご主人様、かわいそうですからほかの竜にしましょう」

こんな風にな。

「長はどいつだ！ お前らは強きものを長にするのだろう？ そのルールを守ってやる」

「はあ……最初から言つこと聞いてくれるなんて思っていないですよ……」

だったら言つな。

『我がこの同胞達の長だ。つまり小さき身で我に挑むと言つのか？』

ひととき大きな竜が前に一步出た。30メートル近い大きさの蒼い竜。

「そうだが、確認したい。お前は風韻竜で合ってるか？」

『人間の間ではそう言われている』

ふむふむ。

「OK、OK。じゃ、始めるか？」

俺は剣を構える。

『愚かな、その驕り。死を持って知るがよい』

言い終えた瞬間、口を大きくあけて、可視出来るほどの風の塊を放ってきた。

放つたな、精霊“魔法”を。



剣の意思によって、一直線に飛翔する。

魔法カウンターは自ら魔法にぶつかり、一直線にカウンターを決める技だ。リフレクがなかったら死に行くようなものだろう。

風の塊に当たり、風の塊を相手に跳ね返しながら突き進む。

「ひゃっはー！ 邪魔だ精霊どけー！ー！！」

『どくよ』

『わかったー』

精霊の契約者同士なら、魔力。つまり、つながりが強い方が優先される。俺の方が繋がりが強い。ただそれだけでリフレクションを解除出来る。

『なっ！？』

「まったく……、本当に悪役ですよ」

ミラの声が聞こえるが、そのまま俺は竜に突っ込み、首を切断し着地する。

そして、剣を肩に乗せ。

「さーて、長は倒しただろ？ つまりお前たちの長は俺だ。お前たちのルール通りだろ？ 従ってもらおうか？」

竜達は俺を見つめ、ざわつく。まあ、いきなりこんな子供にそんなこと言われてもな。

なんか召喚して脅すか。

エデンはでかすぎてダメだから。GFと召喚獣のバハムート二匹

と。リヴァイアサンがいいか。竜っぽいし。

「出てこい、バハムート、リヴァイアサン」

上空が雲で覆われ、その中から三匹が現れる。雷を伴いながら現れる三匹。

美しくも力強い龍。竜ではなく日本風の龍のリヴァイアサン。硬いうろこに覆われたGFバハムート。

ゴツゴツした黒いうろこを持ち、背中に大きな円を持つ召喚獣バハムート。

そのどれもが圧倒的な力を持ち、龍達より大きい、

まあ、圧倒的なのはLv100だからなんだけど。

「なあ、竜達よ。俺が長でいいだろ？」

俺がニヤリと笑ってやると、竜達は頭を垂れる。

てか、今更思ったんだけど、今の俺だったら召喚獣に余裕で負けるわ。よく従ってるなイツら。相性MAXにしたおかげか？

「お前たちの中から三匹俺に付いてきてほしい。大きさは……：そうだな20マイル。その竜程度の大きさでいい。まあ、着いてこなかったら全員此処で殺すだけだからそれでいいけどな」

俺はニヤリと笑って。右手を上げる。

後ろのリヴァイアサンとバハムートが口に大きなエネルギーを貯める。俺が命令すればすぐにでも攻撃が可能だろう。

はっきり言って俺にとって竜が死のうが人間が死のうがどうでもいい。すべて劣等種。ただ、それだけ。ついてこなければそのまま

殺す。

やがて三匹が前に出る。

「お前たちは全員メスか？」

俺の言葉に二匹がビクッと反応する。

反応がなかった一匹を指さし、

「そいつ知らない。チェンジ。そいつをもらおう」

後ろで反応していた一匹の竜を指さして言う。

でかい図体でびくびくしながら前に出る竜。

「ご主人様……竜にまで怯えられてますよ？」

「ああ、別に何かするわけじゃないから安心しろ。ただ、家で働いている使用人が女ばっかだからな。あまり美形な若い男だと、そいつらが仕事しなくなるかもしれないからな。んで、お前ら夫とかいないのか？ 恋人とか」

三匹がうなづく。

まあ、さすがにいたら連れていくのも可哀そう……って、待て。

俺は何考えてるんだ。ミラに感化されたのか？ 別に竜如きに情けをかけなくてもいいはずだ。くそっ！

「ご主人様……ご主人様がいる時点で使用人は手遅れです」

何故だ？

そんな時、50センチほどの小さな風弾が飛んでくる。俺は魔法

カウンターを抑え込む。だが、オートリフレクによって魔法は跳ね返り、小さな竜に当たって弾きとばす。

小さいと言っても、6メートルくらいあるが。

『よくも、よくもお父様を殺してくれたのね!』

『ヤメロ、イルククウ! この方は我等の長だぞ!』

イルククウ?

『許さないのね!』

ふむ、確かタバサに召喚される使い魔……か。

「おい、小娘。お前の親父を生き返らせてやるうか?」

此处で問題を起こして、召喚されなくなったらつまらい。出来るだけ面白い世界にしたいからな。

『そんなこと出来るのね!?!』

「ああ、簡単に出来る」

『お願いしますなのね!』

「ああ、その前に精霊魔法で人間の姿になれ」

『わかったのね!』

すぐに竜は小さな人間の姿に変わる。

長くて蒼い髪。耳のあたりで少し外にはねている。

何故か全裸だが。やはり、コイツであっているだろう。

「もういいぞ、約束通り生き返らせてやるう。来いフェニックス」

地面に炎の模様が描かれ、そこから一羽の鳥が出てくる。全長10メートルを超える炎の鳥。

大きな翼を持ち、翼の付け根が七色に光っている。翼は黄色から赤のグラデーション。そして長い尾を持っている。

「この竜を蘇生してもらっていいか？」

フェニックスは甲高い声を上げ、フェニックスの羽が竜に舞い落ちる。

竜は七色に光、光が収まると、首は完全につながっていた。

フェニックスはそのまま空高く舞い上がり消える。

竜の長はゆっくりと立ち上がり、状況を確認しているようだ。

『我は……負けたのか』

『お父様が生き返ったのね!』

イルククウは元の龍の姿に戻り、長に抱きつく。

『イルククウか……』

『よかったのね! よかったのね!』

親子……か。俺には親と呼べるようなやついなかったからわからないが、うれしいんだろな。

そういえば、ミラも両親と再開したときはしゃいでたしな。

「んで、竜の長よ。俺が勝ったから俺が長……と言いたいところだが。俺はこれでも忙しい身でな。長にはならん。だが、お前たちの同胞、三匹をもらっていく。別に虐げたり、性的な事をするつもりはない。ただ、俺がする仕事を手伝ってもらっただけだ」

姿が変わっても竜は竜だ。欲情する奴なんていないだろう。

『本人達が納得しているならそれでいい』

長の言葉を聞き、三匹の竜はうなづく。

と言うか、長はしらないだろうが、ここで頷かなかったら後ろの三匹の召喚獣が皆殺しにするのだからな。

『ならばよい』

『ありがとなのね！ きゆるきゆる！ お父様生き返らせてくれたのね！』

「別にいい。面白そうだから生き返らせたただけだ。あと、俺の名前はウイデイス・ラ・リバルステインだ。覚えておけイルククウ。何れまた会うだろう」

『わかったのね！ きゅきゅっ！』

俺はそのまま背を向ける。

「終わったぞ、ミラ……おい……」

ミラはペガサスの上で気絶していた。どうしたんだこいつ？

『イルククウ見てたのね！ 地面からおっきな鳥が出てきた時に、ビックリして動かなくなってたのね！』

イルククウに教えてもらったが……よわっ！？  
精神レベルひっくいな！？

俺はペガサスの上からミラを降ろし、横抱きにする。

「んじゃ、めんどいから着いてくる竜三匹。乗せてくれ。アイツらじゃ早すぎてお前達がついてこれないからな」

俺は召喚獣を指さして言う。

竜は一度視線を移し、乗りやすいように背を低くした。

「バハムートとりヴァイアサンは帰っていいぞ」

バハムートとりヴァイアサンはそのまま空へ舞い上がり、雲の中に消えた。

俺は一匹の龍に飛び乗り、ペガサスは一匹ずつ竜に乗らせた。

一応ペガサスも飛べるらしいが、風韻竜よりはおそいだろう。

「じゃーな。お前ら。行け！」

俺は竜に合図し、竜が飛び立つ。

輸送機は確保したから、いよいよコーラ無しマック作るか。

って言うっても、コーラのないマックなんて俺は認めないがな。

竜の長

『行つたか……、それにしてもアレは本当に人間なのだろうか』

私の精霊を散らし、硬いうろこを引き裂いた。魔法も反射されるとはな。

『お父様を生き返らせてくれたのね！ いい人なのね！』

『やはり、我は死んでおつたのか？』

『首がバツサリだったのね』

一撃で首を叩き切つたか……。それにしても、生き返らせるなんてことが出来るのだろうか？

それに後ろにいた三匹の竜。あれは我でも倒せない強さをもつていただろう。それを使役しているとは。

『すごい強い人だったのね。イルククウの攻撃も跳ね返されちゃったのね。でも、頼んだらお父様を生き返らせてくれた。きゆるきゆる！』

『ふむ……。悪い奴ではないのかもしれないが……。人間としては危険だのう。イルククウにはまた会うと言っておつたの』  
『そうなのね！ 楽しみなのね！』



ふむ。いつそ、人と竜の子を作ってしまったえぬかの。混血でもあやつの血なら竜を超えるだろう。若い竜を三ひきつれて行ったことだし。

『して、我はよくみていなかったが。あの人間に敵対して、我らが勝てるとおもつか？』

同胞を見まわして聞いてみるとしよう。我は見えていないのでな。

『お言葉ですが長。後ろの一匹ですら我らではキツイでしょう。すべての同胞を集めればもしくは。しかし、あの方はまだ全力をだしていないようでした。あの方の實力も未知数。後ろにいた竜以外にもまだまだいるはずでしょう。最初に出ていませんでしたが、長を生き返らせるときに、更に一匹出していたので』

ふむ。やはり無理か。

出来ればあの三竜に子を成してもらえれば、関係が築けるのう。

『イルククウ、あの人間にもう一度会ったら出来るだけ親密になるのだ』

『わかったのね！ きゅっ！』

ウイデイスの知らないところで、新たな問題が発生していた。  
竜と人間の混血計画。

## 屋敷

俺達が竜とペガサスを連れて、屋敷に戻ったのは、あれから二日後だった。

途中の町で、一度竜に人間に戻ってもらった。それでも、全裸で街に入れなかったので、ミラが三人分の服を大量に買ってきていた。

俺達が屋敷の庭に着地すると、屋敷の中から慌てて、ミルドが出てきた。使用人達も窓から怖々と見ていた。

「う、ウデイス様！　これは！？」

慌てた様子のミルドを落ち着かせ、口を開く。

「ああ、だから言つたる？　幻獣の森に行くつて。それで一番奥に竜が居たから連れてきた」

「つ、連れてきたのですか！？」

「連れてきたんだ。ペガサスは途中に居たから連れてきた」

何やら絶句しているようだが……。

輸送には必要なのだ。

『はじめまして、先日主様の所有物になりました』

そう言つて竜はペコリと頭を下げる。

所有物つてのは、他の奴に手を出させないためだ。俺に完全に服従しているつてことも見せないで、使用人達が怖がってしまうかも知れないし。

「し、しゃべつた！？」

「ああ、最近の竜は喋るんだよ」

「どつちかと言つと、昔の竜が喋れるんですよ……ご主人様」

うるさい！　説明がめんどいんだ。

「い、韻竜ですか？」

「そうとも言つかも知れない。とりあえず、今から人間になつてもらうから屋敷に戻れ。あと、こいつらの仕事はまだないから、それまでは使用人として働いてもらう。使用人達にも言つておいてくれ。」

俺に服従しているから危険がないこともな」

「伝説の韻竜を使用人にする貴族もすごいですね。では、こちらのペガサスは？」

「息抜きに俺が世話しようと思う。一匹はミラが世話する」「かしこまりました」

なんとか納得してくれたのか、ミルドは家の中に入る。

俺は影から一つの物を取り出し、地面に放り投げる。

コテージ テントの上級Verだ。幻獣にも効果がある回復用。一階建ての木の家だ。5人くらいは入れるだろう。

「じゃ、竜達は人の姿になって入ってくれ」

俺の言葉に素直に従い中に入ってゆく。

全裸だけど、見られてはいないだろうからいいだろう。見られても気にしてないし。

「んじゃ、さつそくミラは服着せてくれ」

「はい！ それで……」

ミラが俺の方をちらちら見る。

「ご主人様も入るのですか？」

「ああ、ちよつと調べたいことがある」

「調べたいことですか？」

「いいから入れっての」

俺の命令に仕方なく、ミラが入ってゆく。その後に俺も入る。

中に入って竜達を見るが……。

「うーん。見事に年齢がバラバラだな。精霊での変化ってどうなってるんだ？」

三匹の年齢は12〜17歳くらいまでの少女だ。

「はい。わたしたちはいくら年齢をかさもつと、人の姿は同じにしかねないのですよ。全員2500歳は超えて、誤差1000年程度なのです」

竜の生態か　面白い。

「何でお前だけ下の毛生えてるんだ？」

髪が蒼いと下の毛まで蒼いってすごいな。

「年上だから？　って言っても、最初からこんなもんでしたね。成長もしてません」

まあ、産毛程度だけど。  
いろいろ調べてみるか。

「子供を産むつてのはどうするんだ？　竜の雄も雌も、そんな器官見当たらないだろ？　いちいち人になるのか？」

「いえ、成竜になれば産もうと思えば産めますよ。ただ、雌と呼ばれる固体からは雌しか生まれません。雄と呼ばれる固体からは雄しか生まれません。さらに、産めても2匹が限界ですね。普通の竜は一匹程度しか産みません」

ふむ。なんとも微妙な。だから絶滅しやすいのか。交尾が必要ないってのはすごい。つまりクローンみたいのが生まれるってことか。あれ、じゃあ、何でイルククウは……。

「イルククウは何で長をお父様って呼ぶんだ？」

「それは、生まれたばかりの子供はみんな長をそう呼ぶのです」

他の一匹が教えてくれた。

にしても……。

「なんで、ミラはうなだれてるんだ？」

何故か膝を抱えて床の隅に座っていた。

「ご主人様、だって、見てくださいよ。一番小さな子の胸を。なんであんな小さいのに大きいのですか？ 竜は化け物ですか？」

確かに12歳程度の身長なのに、Dカップくらいありそうな勢いだが……。

「わたしもそろそろあれくらいはほしいです」

「7歳であんなでかかったらそれこそ化け物だ！」

「でも、ご主人様が興奮して」

「そう見えるか？」

「全然」

「竜だからな」

「でも、見た目とか肌触りとかは人間ですよ？」

「それでも竜は竜だ。ただ」

竜が人間状態で交接したらどうなるんだろうか？ そして妊娠し

て、人間状態で子供を産んだ時と、竜状態で産んだ時どうなるんだろつか。あと、一人での子供つてのも見てみたい。子供は卵なのだろうか？ それとも人間状態ならどうなるのだろうか？ 小さい竜なのか？ 人間が生まれるのか？ それとも、半竜みたいなのが生まれるのか？ 調べたいかもしれない。そもそも、体の中の器官はどうなっているのか？ 解剖したい。

「ただ？」

「いや。なあ、人間との混血つて今までいなかったのか？」

「そうなのです。今まではいなかったのです」

聞いてもわからないか。

「んじゃ、ある程度俺が年齢いつたら、試してみたいか？」

「いいのですよ」

「待って！」

そこで、ミラが大声を上げる。いきなり大声出すなよ。

「何でそんなにすぐ決めれるんですか！？ 好きでもないのに！？」

そんなことかよ……。

「そもそも、わたしたちは強者に従う掟があったのですよ。それで、竜より強い人間との混血つて言うのも気になります。子供自体は産んでも産まなくてもどっちでもよかったですよ」

種を増やすつて考えもないのか……。そりゃ絶滅するわな。

俺にとつても竜にとつても実験体が生まれるつてことか。

「で、でも！ それはその……、そうゆう事しないとイケないって  
いう」

何くねくねしてんだミラ……。

「交尾ですか？ ですか？ でもでも、それは他の種は必要らしい  
のです、です。別にいいんじゃない？」

新しい竜が話し始めた。

「ほらな？ お前はマセすぎなんだよ。そもそも、種の繁栄に必要な  
ことだろ？ なぜ恥ずかしがるのか理解できない。これだから人  
間はわからないんだよ。子供を作るシステムの必要手順だろ？」

「ご主人様も人間じゃないですか……人間離れしてますが」

人間の枠は狭すぎてすぐに超えちまうんだよ。

「ってことで、ミラは服着せる。まあ、竜は気が向いたら混血作っ  
て実験するから」

「わかりました」

三匹は素直にうなづく。

「……結局作るんですね……いいですよいいですよー。どうせわた  
しは子供ですしー。竜の方が魅力的ですしー」

なんかぷりぷり怒って、作業的に服を着せ始めた。

「服が気持ち悪いかもしれないが、自分の部屋以外では脱ぐなよ？」  
「無視ですか!？」



「……構ってほしかったのかよ」  
「うぐ……」

はあ……なんてめんどくさい幼女だ。

「いいから着させる。俺は部屋に戻って溜まった書類片付けるから。あと、竜は俺の専属侍女だ。って言っても、主に外に用事があるときとかに連れて行くだけだが」

そういえば、ちょうど竜が使えるような仕事があったな。

08 疲れた……ならば温泉だ！（前書き）

思った以上にコーラを作るのが難しい。  
コーラ+マック編が長すぎるだろ！

08 疲れた……ならば温泉だ！

書室・半年後

「ウイデイス様。領民からの要望をまとめてお持ちしました」  
「んー、とりあえず見せて」

ミルドが持ってきた書類を受け取る。

「それと……」

「ん？」

「領民の代表者がいらしゃっております」

「ん。わかった。通して」

「かしこまりました」

ミルドが外に出るのを確認し、

「精霊、今から来るやつ一時許可」

「わかったー」

「うんー」

さて。一応目を通しておく。

税金の見直し？ 却下。働け。

魔物の討伐……は。竜娘三人に任せるか。餌にもなるし。

新しい店？ 勝手に出せボケ！

警備ねー。別に雇ってもいいが、大きな街なんてないだろ？

お、上のはこれか。街作るのね。って、出資者が全部俺じゃねーか！ どんだけ舐めてやがる領民！ マックとコンビニなら手伝うけどな。

あ、これは前のアレか。トマトと、牧場。結局俺が経営して、雇うことで、無職を減らすことにしたのか。これは了承。

そのための、おとなの牛と豚を買うのね。それを飼育して、子供を産まして増やすと。まあ、OK。

他は個人の意見書か。全部却下つと。

あと、森に入る許可書？ 許可いるのかコレ。伐採しなければOK。ついでに、肥料の腐葉土の作り方も教えておくか。

民の受け入れ。って！ どんだけ人数いるんだよこれ……。

ふむ。小さい街作るか。移民されてそこらに排泄したり、住まれなくても困るから貸家かな。疫病とかにかかっても困るし。

あと、信用できる使用人がほしい。あと、100人ほど。はつきりいって全然足りない。信用出来ないと増やせないから……。この屋敷は機密情報の塊だし。韻竜だって、バレたら研究用に連れて行かれちまう。一応王宮にはありえない額渡してるから平気だとはおもっけど。

とりあえず、適当に案件への返答書くか。

一時間後

「おせーよ！ どんだけ遅いんだ代表！」

「す、すみません」

ペコペコと頭を下げる白髪ハゲ。

「わ、私は各村の長代表で」

「名前がいい。覚えられないし。代表って呼ぶ」

「そ、そうですか」

てか、なんで中に入るのに、一時間もかかるんだよ。

「んー、でとりあえず渡された案件は全部見たよ。お前が遅いから」  
「そ、そうですか。すみません」

めっちゃくちゃ怯えられてるな。

「えーつと、まず税率だけど無理。てかさ、他の領4割くらいだよ  
ね？ 此処1割だよ？ これ以上下げるとか舐めてる奴いたら他行  
けって言うといいてくれ。言っとくが、お前らが払ってる税金って1  
エキューたりとも、俺に入ってるから。全部王宮へ行ってるんだ  
よ。これ以上安くするって言うなら、俺が自腹することになるわけ  
ね。だったら、お前ら全員いなくなった方が利益がでるわけさ。以  
上」

「は、はあ」

冷や汗をかいて、布で額を拭いている代表。むー。臭い。風呂入ってくれ。

「てかさ、何でそんな金ないのか言ってみろ」

「はあ……。農作物の収穫が少ないのが原因かと……」

ふむ。前に一度見たけど無視したんだよな。確か、このあたりに……。

「代表なら平民でも字読めるだろ？　これが農業の仕方だ。まず、畑を休ませないですつと使うとかあり得ないだろ？　土に栄養なんてもうなくなってるつもの。んで、肥料と腐葉土の作り方。森は伐採しなければ出入り自由。木の実とか果物とか常識の範囲内なら自由にとつていい」

俺は前に書いた数枚の用紙を渡し、早口で説明した。

「魔物の討伐はこつちでやっておく。移民の方は……ミルド」

俺は横に立っていたミルドに先ほど書いた草案を手渡した。

「……ほう。コレは」

「ああ、だから移民はそこに住まわせる。仕事は牧場と養殖場で振り分けてくれ。畑の仕事をさせてもいい。あと、使用人が必要だ。あと100人程必要だな。信用できそうな奴選べ」

そこでミルドの耳に口を寄せ、小声でつぶやく。

「大きな怪我を負ったり重病にかかっている奴がいい。自分を救って

くれた奴には尽くしてくれるだろう」

「……またなんとも」

「俺の性格は知っているだろう？」

ニヤリと笑ってやる。

ミルドは苦笑しながら、

「かしこまりました」

代表は聞こえないのか、不思議そうな顔をしている。

「んで、街は俺の方で作るから、店は勝手に出せばいい。もちろん税金払えよ？ 申請はしておけ。ついでにコレ」

俺は部屋の隅に置かれていた農具を手取る。木の桑を使っているのを見て、前に作ったんだが忘れていたのだ。

「それは？」

刃が鉄で出来た桑を渡してやる。

「お前ら何で木の桑使ってたの？」

「そ、それは。鉄を使ったものは高すぎてさすがに……」

ま、わかってたけどな。

「倉庫にそれと同じものが1000本ある。それ使え。金はとらな  
いから。ただ、返せとは言わないが、転売はするなよ？ 壊れたら  
コチラに持ってこい。一応持ち主は俺だからな」

「ほ、本当でございますか。これならば作業効率もあがりましょ

う。領民を代表して感謝を申し上げます」

深く俺に頭を下げる。

8歳の小僧にここまでするってのがすごいよな。

この桑だが、俺が風の精霊を使って1000本の棒を作った。時間的には一時間くらい。

その後、ひたすらミラが石を錬金し、鉄に変えていった。

三ヶ月くらい、泣きながらミラが頑張っていた。使用人が傍に控え、気絶したらエリクサーを繰り返させた。

そのおかげで、三ヶ月でトライアンルメイジになったのだ。精神力だけならスクエアもビックリなレベルになっている。それでもトライアングルなのは、ミラの才能が底辺レベルだからだ。

「あと、個人的な案件だがな、重要なのをまとめて渡せ。こんなたくさん渡されても見れるわけないだろ？ 見る。この他の案件を」

俺の机に置かれた大量の書類。徹夜しても無理。

「だから全て却下だ。はい、以上。さよなら」

俺が指を鳴らすと、使用人が入ってきて、代表を連れ行く。

「ありがとうございます。これで、失礼させていただきました」

最後に深く頭を下げて、退出していった。

「ミルドはさっきの草案に取り掛かってくれ」

「かしこまりました」



ミルドが退室していった。

「はあ……。疲れた」

「お疲れ様ですご主人様」

俺はミラをじっと見つめる。

「な、なんですか？」

何故か照れてるが……。

「お前最近浮いても一日精神力持つよな？」

「はい！」

胸を張って言うが、それじゃ精神力が増えない。

「お前今日から早口言葉と魔法の練習だ。最低でもトライアングルの最大魔法を2秒以内で言えるようになれ」

「ま、待ってください！ どんな早口ですかそれ!？」

多分50文字近くあるのだ。

俺は窓を開け、詠唱を開始。

《フレイム・テラー》

かなり遠くの地面から大きな炎の柱が立ち上がる。

炎・炎・炎・炎のスクエアの魔法。ちゃんと詠唱もした。

「な？ やれ！」

「ま、待ってくださいよ!？ どんな早口ですか!？ スクエアク

ラスを一秒程度って！」

「あのなあ……。詠唱中なんて一番狙われやすいだろ？ はっきり言って、二秒以上の詠唱でかかっているようなやつは、スクエア使えたって、使えないのと同じだ。その間に殺されるんだからな。魔法の射程限界でも、3秒あれば近づいて切り伏せられるだろ？」

「それはご主人様だけだと思いますが……」

「まあ、いいから。ニルヴァーナじゃない杖でひたすら放ち続ける。精神力切れるまでな」

「うう、やってきました……」

ミラは窓からふわふわと出てゆく。

これで、半年もあればスクエア程度にはなれるかな。なんとかして、疑似オクタゴンまで持っていきたい。

そういえば、7歳でトライアングルになったのは、あいつが初だったらしい。俺は申請してないからドットですらない。

「にしても……最近すべてがめんどい……」

……。

「そつだ！」

俺はガバッと立ち上がり、窓から飛び降りる。

地面すれすれで精霊を使い、ゆっくりと着地する。

「温泉を作ろう！」

結局、水を引くのが無理だったから、毎日俺が風呂いれてるしな。ポンプないんだもん。

「地下で流れてる源泉を直接繋げれば此処まで水圧でなんとか  
はず。おーい、竜娘！ 来い！」

俺の声を聞いて、窓からふわふわと浮いてくる三人。

「どうしました？」

「精霊に俺がやること教えるから、精霊から教えてもらって  
ちよい精霊、俺の頭の中覗け。許可するから」

『うん』

『のぞくのぞく』

精霊って便利だなあ。まあ、精霊と会話出来る奴なんて俺以外知  
らないけど。

「わかりました。まず、何をすればいいでしょう？」

「まず、俺が精霊の力を借りて、ってか。そこまでやるから待て。  
土の精霊行くぞ？」

『うん』

まず、50メートル四方を、重力魔法で凹ませる。

《グラビデ》

ズドンと言う音と共に、50メートル四方が、60センチ程凹む。  
使用人達が音に驚き、窓から除いてくるが、俺がいることが分か  
ると中に戻る。

俺がまた何か始めたよ。って感じだった。

《錬金》

周りの土を、精霊の力を借りて、石に錬金する。

《エア・カッター》

精霊の力を借りて、石の形を岩っぽくコーティングしてゆく。

セメントやゴムが無いので、見た目だけだ。実際はつながっていない。

「さて。ここからがお前たちの出番だ。今から精霊が、原泉から此処に穴を開けるから。場所を教えてもらって、水の流れ以上の速さで、周りの土を四人で錬金してゆく。一番大変な部分は俺がやるから、頼むな?」

三人はうなづく。

水の精霊の情報だと、一番近い源泉は此処から2キロメートル。土の精霊の力を借りながら錬金だな。

「いいぞ!」

『いくよー』

精霊と意識を同化させると、ものすごい速さで空洞がこちらに向かってくる。

それを錬金して、周りの土を鉄に変えてゆく。

そして、他の奴のパイプにつながった。

それと同時に、俺が作ったエセ温泉の中央に20センチ程の穴が

あく。

少ししてたから、穴から音がし始め。

「熱い！熱い！！」

30メートル程まで源泉の柱が立つ。まるで熱湯の噴水だ。竜娘が竜に戻って、羽で遮ってくれる。

「ありがと。知識不足だった」

うーん。源泉からそのまま持ってきたらこうなるよな。温度を下げるか。

### 《錬金》

近くの地面で、10メートル程の銀のパイプを作る。

まあ、本物の銀じゃない。原子の配列を銀っぽくしただけ。価値なんて全くないのだ。

更に、1メートル程の球体を作り、中を空洞にする。下と横の中央辺りに小さい穴を無数に作る。

細い鉄を数十本練り合わせたロープを作り、球体の8か所につける。

パイプを球体の下の部分に取り付け、錬金で繋げる。

火傷しないように、一応英雄の薬を飲んでおく。

レビテーションで空中に浮かせ、源泉が放出している穴にブツさして錬金で繋げる。

「球体から出ている紐を引っ張って8方の地面に繋げてくれ」

四人で、頑丈なロープを倒れないように地面に固定する。

「ふう……。まだ熱いけど、なんとか入れる程度かな」

「主様！ お湯が溢れてきています！」

溢れて庭が浸水する！

「ここから、海まで約5キロ。空洞作って繋げるぞ！ 精霊に場所は教えておくから、二人は海側から鍊金して繋げてくれ。俺と一人はこちら側から鍊金していくから」

二匹の竜は海にまっすぐに飛んでいき、一匹は俺を上に乗せる。

「土の精霊穴開けてくれ」

『行くよー』

温泉の下に穴が空き、そこを鍊金してゆく。

俺に乗せた竜が全力で飛翔し、地下の鍊金は俺がしてゆく。

何故か途中でミラが浮いていたが、そのまま轆いてフェニクスの尾を投げつけて鍊金を続ける。

しばらくすると、向こう側から竜と、人になった竜娘が飛んできたので、そのままパイプを繋げる。

竜の足になんか、血と肉が付いてるけど気にしない。

とりあえず戻ることにした。

しばらくすると、ミラが浮いていた。

「ご主人様、わたし何かにぶつかりませんでしたか？ でも、生きてますし……」

「夢でも見たんじゃないか？ たとえば竜にぶつかったら死んでるだろ？ 元気ってことは夢だ」

「そうですよねー」

コイツは気絶していて、俺が長を蘇生したところを見ていない。大丈夫だろう。

ミラ死亡回数1。

「そついえばミラ。面白いもの作ったぞ。ついてこい。さっそく行くぞ」

「あ、はい」

竜に乗って急いで戻る。まだ溢れてたら困るしな。

## 温泉

「完成だ！」

戻ったが、お湯がかなり減っていた。  
鉄の板を練成し、排水口にかぶせてお湯の量を加減した。

「って、屋敷から丸見えじゃないですか!？」

うーん。一応50メートル程度は離れてるんだけどなあ。

てか、お湯が噴水みたいになっていて、何かのアトラクションみたいだ。

そして、使用人達が集まっていた。

「う、ウイデイス様。ま、また何かはじめたのですか!？」

なんか、最近ミルドが疲れてる気がするな。

「んー、温泉なんだけど。ミルド、後でここに屋根と柵立てるから。職人に頼んでおいてくれ。今はとりあえず」

俺は適当な杖を取り出して。

「みつく・みつく・に・してやんよ」

《ミクフィーバー》

人がいるので、適当に詠唱をして、風の精霊にお願いし、不可視



状態にした。

「これで、外からは見えない。柵と、屋根が出来るまではこれで我慢だな。さて、早速」

使用人達がいるが、別にどうでもいい。所有物みたいなものだし。その場でパツパと服を脱ぐ。

「「「「お、おおきいつ!?!」「「「「  
「わ、私より大きいなんてっ!」」

ミルドが何故か泣きながら屋敷に走って行った。

「やんっやんっ」

くねくねするなミラ。

てか、ミルド。八歳児より小さいってどんなだよ!?

「んー、とりあえず、ここは開放するから、好きな時に入っているぞ? 仕事終わってるなら今入ってもいいけど。とりあえず、竜娘は疲れただろうから入っていいぞ。ミラも何故か汚れてるから入っていい。血着いてるぞ?」

「あれ? なんで血着いてるんでしょう?」

死んだからな。

そこで、竜娘達が服を脱ぐ。

「「「「「!?!?!?!?」「「「「「

使用人達の顔が驚愕の色に染まる。

「あ、あんなの勝てない」

「な、何て竜レベル！」

「お母さん恨みます」

「なんて生きずらい世界……」

わけわからないから無視する。

「ご主人様は小さい方がいいですよね!？」

「いや、大は小をかねる」

「がーん！」

黙れミラ。脱いでいたミラを風呂の中に蹴り飛ばす。

「あ、あつっ!?! 熱いですよコレ! 死んじゃいます!」

ミラが熱がって上がってこようとするので、風の精霊を使って真ん中まで吹き飛ばす。

「な、何するんですか! 熱いです! 熱いですが……なんとかなるかもです」

ミラは何故か泳ぎ始めた。

ふむ。でも、このままじゃ風呂が汚れるな。垂れ流しだからいいかもだが。

今度パイプを派生させて、シャワーでも作ろう。海までのパイプももう一個作らないとな。

ついでに、原泉の勢いが強すぎる。そういえば平民が臭いんだよね。パイプから派生させて無料の浴場造ってもいいかもしれん。ど

うせタダだし。

てか！　なぜか、ペガサスも風呂に入ってるし！？　使用人達に背中流してもらってて、気持ちよさそうにしている。

なんか俗世に塗れてきたな、あのペガサス。

とりあえず、俺も入る。

「ああ。このじんじんする熱さがいいな」

なんかミラがじーっとこちらを見ている。

「何だ？」

「ご主人様は不能ですか？」

「ぶち殺すぞ小娘？」

「これだけ女の人が一緒に入ってるのに、まったく反応してませんし」

「あ、無駄な時立たせてどうするんだ？　竜が子供産みなくなったら、魔力ためて子供作るみたいなもんだ。やりたくなったら立たせればいい。それが以外に立たせる意味くないか？」

「でも、お父さんはわたしとお風呂に入ってもたちますよ？」

おい、ミルド。俺はお前のことを勘違いしていたようだな。去勢させるぞ。

「お前ミルドと風呂入るの禁止だ。あれは危険だ」

「わかりました。わたしも最近危険を感じてますから」

8歳の娘に欲情する父親ってなんだよ……。

まあ、それよりも。せつかく使用人がいるんだから聞いておくか。

「おーい。小麦の精製班いるか？」

俺の言葉に5人の女性が近付いてくる。

「小麦の精製の経過はどうなった？ それでパンを作ったらどうなつた？」

「私がこの班のリーダーなので報告いたします」  
「言え」

「今まで売っていたパンよりも、50%程やわらかく、膨れるパンが出来ました。精製方法を変えると弾力を持たせることも出来ます」  
「ふむ。弾力が出た方はパン屋でも開いて売ればいい。そのまゑに俺が指定したようなパンを開発し、新しく雇う奴らに伝授してほしい。それが終わったらこの班はパンの開発班になる。パン屋で稼げたらお前たちに還元するから頑張れよ」

パン屋なんてするつもりなかったけど別にいいだろう。

「は、はい。ありがとうございます」

5人が頭を下げる。一人、水に思いつきり打ちつけてるけどバカか？

「散れ。次腸詰班のリーダー来い」

リーダーだけでいいだろう。  
一人の女性が近付いてくる。

「私が腸詰班です」  
「うむ」

腸詰班ってなんか嫌な名前だな。

「で、経過を頼む」

「はい。指示されたものは、長さも太さも同じものが出来ました。半腸を塩漬けにして、作るとまた違った味わいになることもわかり。新しい開発を進めています。小さな腸詰も使用人達には人気です」  
「ふむ。では、この班も雇ったやつらに教えたら開発班に移ってもらおう。その商品が売れたら売れた量によって給金を増やすことにする」

「あ、ありがとうございます！」

「では散れ。次ケチャップ班のリーダー」

一人の使用人が近付いてくる。

「報告」

「はい。マスタードの方は調整も完了しました。ケチャップの方は調味料の調達が難しいというか……」

「トマト、糖類、醸造酢、食塩、たまねぎ、香辛料。何が足りない？」

「はい。糖類の値段が高すぎ、低予算で作るのは難しいのですが」

やはり砂糖か……。

「調査を変えてみる。指定どおりでなくてもいい。あらびき肉の方はもう完成してるから、それとパンをもらって、いろいろ調べて合うものを試せ。はっきり言って、ケチャップが一番大事だと言っても過言ではない。ケチャップが無い場合、その時点でこの計画は失敗だ。無理はしなくていいが、期待しているのでガンバレ」

俺は使用人の頭にポンと、手を乗せて言っただけだ。

「は、はい！ がんばります！」

「では、行っていいぞ」

ふむ、やはり問題があるか。半年でこれだけ出来たのは奇跡に近いな。原材料を知っていたっていうのもあるが。なんとかして、さとうきびを手に入れたい……。

隣を見てみると、ミラがじっとこちらを見つめていた。

「どうした？」

「ご主人様ってちゃんとお仕事をしていたんですね」

ミラを中央の噴水近くまで投げてやった。

まったく、毎日書類に追われてるところを見るだろうがアイツ……。

「そうだ」

近くの竜娘を呼ぶ。

「なんででしょうか？」

「なあ、エルフの聖地の向こうってどうなってるんだ？」

「昔行ったことがあるのですが、ここより文明が進んでいますね」

「砂糖ってあったか？」

「確かありました。でも、ここよりさらさらしてましたね」

白砂糖か？

「それは白かったか？ ここのって茶色いだろ？ それは白い砂糖だったか？」

「はい」

ビンゴ！

近々行くか。

こっちの砂糖を精製すれば白いのも出来るっちゃ出来るがな。テンサイから作ってる砂糖はよろしくない。サトウキビがほしい。

「ありがと。もういいぞ」

あと少しだ……。

まあ、コーラの製造方法がわからんが。コーンシロップと砂糖と柑橘系と……、炭酸水。あとの原料がわからない。まだまだかかるだろうな。

まだまだ足りない……。

てか、炭酸水をどうやって作るよ？ 炭酸のボンベなんてないぞ？ 重層とクエンサンだって手に入らないし……。

「あーくそっ！ 全然まだまだじゃねーか！」

08 疲れた……ならば温泉だ！（後書き）

英雄の薬 一定時間無敵。



## 09 砂糖ゲット！

飛翔中

温泉が出来てから三カ月後。

温泉のシャワー、屋根と柵も出来。平民の方にも無料浴場を作った。

屋敷への水も、水脈から直接引っ張ってきたら出来てビックリ。

やっと、屋敷内に水が通ったのだ！

トイレも水洗式になった。水が流れっぱなしだけど。

しかも、海にそのまま流すという裏技。屋敷一つくらいなら流しても大丈夫だろう。

温泉のお湯で流しているので、あったかい。でも、排泄すると尻が湿るのをなんとかしたい。

ついでに、三ヶ月でついに、ミラがスクエアになった。この年齢だとミラが初めてらしい。

エリート騎士にでもなれるだろう。

「そついやミラ。今どれがスクエアだ？」

海を見ていたミラがこちらに振りかえる。

「えーっと。風がスクエアですね。水と火がトライアングル。土がライン」

普通は相性というものがあるらしい。だが、俺はそんなこと許さない。

風だけで四つとか、全属性で四つとかやらせてるわけだ。

全ての属性で四つと、全属性四つ組み合わせることが出来れば全ての魔法が使えるだろう。

とくに、全属性4つは出来る人がいないらしいからちよっどいい。

「全属性で出来るようになれ。ひたすら精神力がなくなるまで、出来ない属性を打ち続けろ。それが終わったら全属性で組み合わせろ。それも終わったら精霊と契約して、オクタゴンスペル出来るようになれ」

「ひどい……。終わりが見えませんよー……」

「生きてる限り終わりはないのだ！」

「……適当に言ってますんか？」

「どうでもいいことは適当だ」

「……」

にしても、やはり遠いな。

「それにしても、世界は広いですねー、誰も住んでいない大陸が結構ありましたし。わたし達が初めてですよきつとー」

「んー、そうだろうな。船だと風石が持たなくて落ちるしな」

「感動ですねー」

この世界の船って言うのはなぜか空を飛ぶのだ。風石ってのを使

うことで。だが、エネルギーがかなり必要なので、長時間は飛べない。

「んー、今度一緒に世界でも回るか？」

「あつ、それは楽しそうですねー。面白そうです！」

にこにここと笑うミラを見てると　いじめたくなる！

「お前が精霊魔法とオクタゴンスペルを使えるようになったらな」

「なんていう虐め！？」

「バーカ。だって、未知の生物がいるかもしれないんだぞ？　万全の準備をだな」

「わたしにとってはご主人様の使い魔が未知の生物ですよ」

そりゃそうだけどな。

召喚獣アニマとか出したら失禁確実だろう。

それから数時間後、人が住んでいるだろう大陸についた。

一心姿を不可視にし、ゆっくりと上空を飛翔する。

「ご主人様。なんでしよう此処？ あの魔物」

「蒸気機関車？ 何だ此処。文明かなり進んでるぞ？」

たしか、此処ってかなり昔に、あつちと分岐したんだよな。それからずっと会ってないとか。

独自文化で此処まで来たのか？

船や飛行機はなさそうだな。

貿易もないし、船は必要ないのか。近場なら魔法でどうとでもなるし……。

飛行機もそこまで広い大陸じゃないから必要ないと。

「何を考えているのですか？」

ミラが小首を傾げる。

「いや、文明レベル高いなど。とりあえず、俺が探している物がみつかるまで空を飛ぶか」

「はい」

電機はないのかな？ 車などもない。どんな進歩の仕方したんだこの文明は。

「ちょっと、このあたりを旋回してくれ」

俺はこの地の精霊と契約し、眼下に飛び降りる。

昔のフランスみたいなところだな。  
でも、何故か黒髪ばかり。日本人っぽいな。

一つの店に入り、使用硬貨を調べる。

高価そうな店だから行けるだろう。

支払っているところを見るが、やはりというか。金貨ではあるが、違う。

しかも、金の価値が高いのかも知れない。高価そうな絨毯だったが、それほど金貨を払っていなかった。

こちらと貿易が出来れば最高の儲け話かもしれない。

ただ、バハムートでしか行けないのが困る。

一度外に出て、ある店を探す。蒸気関係が盛んな街ってことは文明も進んでいるだろう。

医学が進んでいるといいが。

一つの薬販売店に入る。

やはりというか、栄養剤もかなりある。

クエン酸と重曹の化学反応で発生する炭酸ガスを使いたい。

にしても、言葉は同じだな。

大きな瓶に薬がかなり入ってるな。

ビンで丸ごと売るんじゃないかと、測って売るのが？

親切な事に、製造地と材料が載っている。

製造地はわからんが。材料がわかればなんとかなるかもしれない。

しばらく探し、一つの物を見つける。

原材料サツマイモと、ヒネミル。

ヒネミルってのは、地球で言うタピオカだ。  
これがクエン酸ってことか。  
名前はサルレイとかわけわからんが。

これだけでいいか。重曹　炭酸水素ナトリウムは作り方わかるし。

石灰水は錬金で出来るし、食塩もある。あとはアンモニアを抽出すれば重曹が出来るし。

作り方と材料の抽出方法が分かれば出来るな。土メイジを雇えば大量に作れるはず。

俺はクエン酸の大きな瓶と説明書を、店主が見ていない時に影の中に放り込んだ。

そして、店の奥に赤い宝石を数個置いておく。  
多分これで代金は足りるだろう。

あとは、サトウキビだな。

店を出、そのまま、空のバハムート目指して飛翔する。

「ご主人様何してたんですか？」

「んー、必要な材料買ってきた。バハムート飛んでくれ」

バハムートに指示を出し、大量の金貨を影の中から取り出す。

「何してるんですか？」

「貨幣が違つたんだよ。だから、金の延べ棒に錬金する。金を金に錬金するわけだから、魔法で調べられても大丈夫だ」

「一から金を作ると、魔法でバレてしまう。金を金にする場合には、バレるが、原料が金って言うのもわかるので大丈夫だ。」

「じゃあ、わたしも買い物出来ないんですね……」

「今回はな。いつか、此処まで来れるようになるかもなー。お前1000年くらい生きることになるし」

「へ？」

「そっぴやコイツに言ってなかったな。」

「いや、精霊魔法で延命処置するからな。その為に精霊魔法教えるんだよ」

「ちょ、ちょっと待ってください！ わたし一人でそんな生きたくないんですが!？」

「俺も生きるし、竜娘三人も生きる」

「それならいいです」

「ここにこしてるが……本当にわかっているんだろうか？」

「その間に不老になる方法探すけどな。」

「神の領域のまず最初が不老不死だ。」

「にしても、この畑広いですねー」

「ん？」

「眼下には緑の作物が……」。

「ちょっと待て！ バハムート。ゆっくりと何も無いところに降り

てくれ」

バハムートがゆっくり降り立つ。  
ふむ。この地は比較的温暖なのか。

俺は不可視のまま、それに近づき。皮を剥いて、かじってみる。

「ご、ご主人様！？ お腹すいたならわたしご飯持ってますよ！？」

「落ち着け。ちょっとこれかじってみる」

「か、間接キス……」

「赤くなってんじゃねー。いいからかじってみる」

一口かじり、目を見開く。

「あ、甘いですコレ！」

「それが砂糖の原料だ。これを探しに此処まで来たんだ」

ミラは気に入ったのか、リスのようにカジカジしてる。

「此処の畑全て買うか。温度を此処と同じにして、地面ごと持って  
いけばあっちで栽培出来るはずだ」

「で、出来るんですか！？」

「出来る。ただし、売ってくれるかわからん」

この地方の金貨の価値なら行けるはず。

俺はもともと持ってきていた、リヤカーに風で金のインゴットを  
100個程積み。

布をかぶせる。

「人を探しに行くぞー」



「この広さをですか!？」

見渡す限り人なんて見えないのだ。というか、畑が広すぎて困る。

「風の精霊。一番近くにいる人の方向を教えてください」

『そう』

そこにはミラが居て、首をかしげている。

「……コイツ以外だ」

『あっちにいるよ』

『いっぱいいる』

「ありがと、ミラいくぞー」

「はい!」

さーて、どれくらい遠くかな。

### 三時間後

かなり歩き、やっとの思いで見つけた数人の人間。

一応ミラも俺も精霊魔法で大人の姿になっている。

てか、ミラの胸がデカイ。調子にのるから、14歳程度で延命処置開始しちまう。そうすればでかくならないし。

「見つけてくださーいこの胸を　　おかあさん並みです！」

「黙れ、交渉するんだから」

リカヤーを二つに分けて、ミラが一つ引いている。

「どうしたんだい、君たち。此処は私有地だが？」

一人のおっさんが声をかけてきた。

家族で経営しているのか、顔が似ているし。

二つの家族かな？

「すみません。此処の代表をしている方に話があるのですか」  
「よくわからないが……。ちょっと、待ってくれ連れてくる」

近くの家の中に入っていき、しばらくして、一人のジーちゃんが出てきた。

「ワシがこの畑の持ち主じゃが、何ようかな？ そのような荷物を持って、旅人かのう？」

まずは……。

「貴方がこの畑全ての持ち主ですか？」

「いかにも。今は二人の息子夫婦と、一緒にやっているんじゃない」

情報収集が必要……か。

「ただの世間話ですが、この作物を育てることに誇りを持っておいでですか？ 素晴らしい作物でして、わたし達に売ってほしいのですが」

サトウキビと言う名前かはわからないので、濁すしかない。

「ふむ。誇り……いや。生きるためじゃの。二ノキビの税が高すぎるのじゃ。作物皆同様じゃが、5割はちとぎついの。だが、生きていく為には仕方ないのじゃ」

作物は二ノキビ。楽しんでやっているわけじゃない。仕方なしにやっている。ね。

俺は後ろに一本隠していた金のインゴットを取り出す。

それを見、老人と家族は目を見開く。

「私達はしがなない旅人です。しかし畑仕事に興味があり、少しこの畑を売ってほしいのですが、これ一本でどれくらい買えるでしょうか？ 正真正銘純金です。どうぞ手にとって見てください」  
「う、うむ」

俺が手渡すと、家族が集まってくる。杖を持っている人もいる。平民でも、魔法が使えるのかもしれないな。

何やらディテクトマジックをかけているようだ。  
そのあとに、少し話をしている。

「どうやら本物のようじゃ。これなら」  
「すみません、広さで言ってもわからないんで、何しろ遠くからきたので。この畑全ての内のどれくらいかお願いします」  
「ふむ。これなら、30分の1くらいかの」

ふむふむ。

俺は目を細める。

「でしたら」  
「俺は片方のリヤカーの風呂敷を取る」

50本の金塊に老人と家族は驚愕に言葉を失う。

「こちらに、それと同じ金塊が50本あります。これで全て売っていただけないでしょうか？」

「う、うむ」

「もちろん全て調べていただいて結構です」

「しかしのう」

老人が渋っていると、息子だろうう人が老人の前で土下座し始める。

「じーちゃん、頼む！ 俺、本当は夢があつたんだ！ でも、学校に行くにも大金が必要だから諦めてた！ 俺、蒸気機関に興味があるんだ！」

片方の息子夫婦の男が叫びだした。

「う、うむ」

「実は俺も、言いだせなかつたけど……。妻のお腹の中に子供がいるんだ……。今でも厳しい生活なのに……。言いだせなかつた……」

あとひと押しか。

「でしたら、息子方夫婦はこれから入用ですし、更に両夫婦にこれと同じものを10本ずつ追加で渡しましょう。どうでしょうか？」

俺はニコリと笑ってやる。

俺の発言に、息子二人は、一瞬目を見開き、老人に頼みこむ。

「わ、わかった。息子達にそこまで言われたら断れん。だが、全て本物か調べさせてもらうぞ？」

「どうぞ。調べるのは当たり前ですからね」

俺は後ろのリヤカーから更に延べ棒を20本取り出し、前のリヤカーに乗せる。

にしても安い。薬数十本分でこれが手に入るとは。

息子達相当不満だったんだろうな……。まあ、あの若さで死ぬまで畑仕事は嫌だろう。

## 屋敷

「あゝ、だりい」

あれから、土地の権利書を受け取り、夜に畑ごと収納した。  
その後に、使われていない広大な土地を丸ごと畑に変えた。  
火の精霊に頼み、温度を変え、土の精霊が少しずつ土をなじませ  
てゆくのだ。

「ご主人様すごいひどかったですね」

「何を言っているんだ。ちゃんと金は払ってあっちも納得してただろ？ しかもおまけして70本やったし」

実際は100本やるつもりだったが、安くあがったんならそれでいい。これで精製すれば、余裕で元は取り戻せる。それに、飲み物の幅も広がるしな。

アイスとかも作れそうだな。

「ミルド」

「はい。なんででしょうか？」

「コレに書いてある通りのことをしてくれ」

「これは？」

「領地経営のサトウキビ畑の農民雇用。近くの村から引き抜けばいいだろ？ 金多めに出せば喜んで食いつく。金のない村だったしな。んで、それをもうすぐ出来る工場に持ってきて精製する。確か、4つ目の工場が空いてるはずだから、そこで上品質の白い砂糖を作る。高価な砂糖。しかも、白くて不純物が無いんだ。貴族にバカ売れだ。サトウキビをしばって黒砂糖にしてから、それを白砂糖に精製する方法も書いておいたから。機密だから、精製は信用できる奴にさせてくれ。ついでにコレ」

俺は白い石を渡す。

「これは……？」

「石灰石と言うものだ、行き場のない土メイジを大量に雇って作ってくれ。あと、サツマイモと、ヒネミルを大量受注。そこに抽出する方法がかいてあるから、それでクエン酸を作ってくれ。あと、じやがいもを大量契約。むしろ、畑ごと大量に買い取って働かせてもいい。ついでに、レシピもそこにあるから。食塩もだな。食塩は領

のだけじゃ足りないから、ほかの領からも大量に輸入してくれ。ついでに、工場が出来たら体力自慢を1000人くらい雇ってくれ。普通の仕事より金を少し多くすれば集まるだろう。移民が大量にいたしな」

「失礼ですが、牧場や多数の養殖。数々の農園を増やしたせいで、移民を全て受け入れられるほど場所がありません」

ふむー……。確かに面積をとるんだよな。ならば。

「隣の領を買い取れ。金を積みれば買い取れるだろう。王宮には賄賂を渡せばなんとかなるだろう。何のための金だけで貴族になれるんだ」

「かしこまりました。して、一つ提案なのですが」

「ん？」

「金銭は有り余っていますので、侯爵位を買い取るのはどうでしょうか？ そこまでならばこの国でも買い取ることが出来るはずです。ウイデイス様はその資格があります」

ふむ。確かに……。領を買い取るにも、男爵が侯爵の領を買い取るとなると、プライドが高い貴族は反抗するだろう。

そもそも、すでに貴族からかなり反感を買っているのだ。男爵でも国とのつながりは一番深い。なぜなら、うちの領の献上金が飛びぬけて高いのだ。今のところは金で貴族を黙らせているが、爆発するのは必須。

侯爵ならばそれも大丈夫だろう。

「侯爵を買おう。その後に隣の侯爵領を買い取り。更に必要なものを自領で作る。輸入に対する税金もバカにならないしな。運搬費用もあるし。それが終わったら工場を増やせ。今は5つだが、更に必要になるのはわかりきっている。大きな倉庫もほしいところだ」



「かしこまりました。そのように手配いたします」  
「行け」

俺に一礼し、ミルドは出ていく。

「最近ご主人様が本当に8歳なのかわからなくなってきました」

「お前も8歳とは思えないよ」

「お、おとなっばいってことですか？」

「大人っばい。性の知識だけな」

「ひどっ！」

ぼかぼかと胸を叩いてくるミラ。

叩かれながら思う。

このままじゃ、大陸中の金を集めてしまっんじゃないかと。

すでにハイポーションで破産した貴族も数人居た。

屋敷への侵入者も毎日5人くらいに増え、焼かれている。

大きくなったミラ薬局も、毎日のように誰かが焼死しているらしい。

最近では、一種のイベントみたいになっているとか。

工場が出来たら、そっちでも焼かれて死ぬ奴が増えるだろう。

死ぬ奴が一番多い領になるな。焼かれる奴は全員犯罪者だが。

の割に、民からの人気は何故か高い。マックの為にやってるのに、なぜこんなことになったんだ？

俺は紙を手元に寄せる。この紙も俺が作り始めたものだ。

なぜなら、羊紙が異様に書きづらいからだ。ボールペンも俺が作ったものだ。これも理由は付けペンがめんどいから。

基本、俺は自分がほしい者しか作っていないのだ。今ではミラグループはかなりの規模になっている。商会登録はしていないから自分でミラグループと名乗っている。マックのあのマークが目印だ。

で、今の時点で販売出来るものを書いてみるか。

マックだと。ハンバーガー、チーズバーガー、テリヤキ……はソース開発中か。ビックマック、エビフィレオ、ホットドック、ポテト、アイス。飲み物は、ウーロン茶もどき。紅茶。オレンジジュース。メロンソーダ。オレンジソーダ。ブドウソーダ。コーラが出来ないのが悔やまれる。コーラって、コカ・コーラ社が原材料秘匿してたから自分達で作るしかないんだよな……。

あとは、ボールペン、紙、ブドウ、オレンジ、塩、海鮮類各種、牛肉、豚肉、ウインナー、ソーセージ、白砂糖、炭酸水も以外に売れるかもしれん、飲み物類、キャベツ、サツマイモ、ジャガイモ、タピオカ。

薬関係が、ハイポーション、傷ピタくん、エーテルターボ、毒消し。

あとは、貴族用の金融会社も出来るかもしれない。

俺はそこで、ペンを置く。

うーん、これだけ作ったらさすがに領地足りないよな。てか、よく今までもったな。あまり必要ない奴は場所を縮小してたからな。これは、両隣の領地買うしかないかもしれない。最低条件が海に面してること。サトウキビ畑も増やしたいし。てか、農園かなり必要だな。近くに牧場作れば肥料にはことかかないしな。

「ご主人様、それなんですか？ 上のほうのはなんですか？」

隣からミラガのぞきこんでくる。

「これはな、新しく作るミラクナルドって店の品物だ」

「なんですか……その無理やりくつつけたような名前」  
「略してミックって呼ばれるな」  
「と言うか、ミラって名前が広がりすぎて、わたしが代表だと思われそうなのですが。どこの貴族が経営しているかバレてますし、わたしはその貴族ですし」

うーん。

「お前経営してみるか？」

「死んでも嫌です。って言うか出来ませんよ」

「って言っても、うーん。じゃあ、領を合併するしかないか。あー、また王宮に賄賂贈らないといけないわ」

「そ、そんなことしてたんですか!？」

「かなりな。お前知ってる？ ゲルマニアの献上金。三分の一はうちが払ってるんだからな？」  
「そんな払ってたんですか!？」

「うむ。お前達が負った50万エキューの何倍も年に払ってるぞ」

たしか、公爵の年の税収が100万エキューだ。つまり、それ以上の金額を年に王宮に渡している。って言っても、王宮に売った薬代以下だから、どっちかと言うとプラスになっているのだが。

「一応お前も俺の養女。もとい幼女だから勉強しろ」

「言い換えた意味あるんですか!？」

「とにかく、今度視察にお前もついてこい。毎回俺しか行ってないだろ？ 毎回盗賊や、貴族の手の物に攻撃されるんだからな？」

「どんな視察ですか!？ もとい刺殺!？」

実際かなり困るんだよな。護衛とかいるだけ無駄だから、俺一人で回っている。

数十人とかで襲ってくるからな。オートリフレクで反射されて勝

手に死んでくけど。

「ちなみに、外に出かけると、十中八九毒盛られる。お前も万能薬は必ず持って行け」

「こわっ！」

俺の場合アビリティのリボンつけてるから、状態異常かからないけどな。

「とりあえずお前は、魔法の練習行つて来い！ 全部スクエアだからな！ 三ヶ月以内！」

「期限十歳までじゃなかったんですか!?!」

「期間短くなった」

「うっ……わかりましたよ……」

さて。俺は温泉にでも行くかな。

考えないといけないこと色々あるし。

## 10 ミラクナルド開店！コーラはないよ？

工場へ

三ヶ月後、やっと工場が全て完成したらしい。  
ってことで視察に来ている。

一応顔見せつてことで、背中とお腹にミラグループマークが入ったタスキを付けた竜三匹も付いてきている。

まあ、輸送はこいつらだしな。

ミラもやっと全部スクエアになった。ただ、全属性を組み合わせるのが難しいらしい。

詠唱は俺が教えたんだが、手の中ではじけたりして何回も死にかけている。

実際数回は死んだ。泣きながら魔法を使うミラは見ていて楽しい。

あと、俺は侯爵になった。賄賂のおかげか、すぐに任命式を行ってもらえ、隣の領も本人達が納得しているならいいとのこと。

隣の領地の侯爵には、大量の金を渡し、離れた空いている領地を買ってやったら喜んで退いてくれた。ハイポーションで破産しかけ

ていたらしい……。

そして、昨日から工場が稼働しているらしい。

昨日から、小さな精霊石が付いた腕輪を社員全員の腕につけてもらっている。

宝石みたいでキレイなので、全員喜んでいますが、これには仕掛けがある。

まず、腕に付けるときに、メイジが錬金でとりつける。円としてつながった瞬間に、精霊がそれを形と定めることになる。そこから大きさが変わったり壊れたりすると石の中の精霊は消え去る。

つまり、腕の太さピツタリとすると外れない。

これがうちの社員の証だ。

これなしで、倉庫に入ろうとすると、仕掛けが発動して焼死すると言っておいてある。

うちの系列の店が焼死で有名なのか、全員が納得してくれた。

一応秘匿義務があるので、大丈夫だろう。焼死が有名だから、そっち方面は楽に納得してくれた。

社員を辞めた時はこちらではまずすことになっている。

工場の説明をすると。

まず、第一工場。

此処は、主となる、ハンバーグ部分の製造だ。此処で肉を解体したりしている。

俺の好物のタンや肝臓レバーはもちろんのこと、牛の体は全て使う。

今までは使われていなかったらしい。これは、そのまま売ったり、焼き肉店を作る計画もある。

ハンバーグ部分の荒引き肉を混ぜる作業は、ガタイのいい男達が、大きな鍋で混ぜている。

衛生面から、白いかっぽう着に、マスクを付けている。

一応出来たハンバーグを食べさせてもらったが、何百回も試行錯誤したことだからかなりチープな味に仕上がっていた。

これらの物は、コンテナ並みの大型クーラーボックス。俺が作ったものだが。それを竜が首から下げて輸送する。実際は精霊魔法でコンテナ内を冷凍状態で運ぶ。さらに、コンテナも浮き上がらせて持っているのだが、普通の竜は精霊魔法が使えないとのことで、偽造だ。

次に第二工場。

此処は腸詰作業をしている。

ホットドックもそうなのだが、ウィンナーやソーセージとしても販売するつもりだ。

工場内部には、大量にブラ下がっている腸詰したもの。

この工場のすごい点は、半分を隔離することが出来、その中を全て蒸すことが出来る。

豚肉なので、菌の関係上この工場で一段階の加工を行うのだ。

次に第三工場。

此処はジュース類だ。

果汁液を抽出している。あとは、クエン酸と重曹も此処で作っている。一応隔離はしている。アンモニアの抽出だけは、別の場所で行っている。通常の給金の3倍が支払われるアンモニア抽出。理由は言わなくてもわかるだろう。

そのクエン酸と重曹を半分づつ混ぜて、大きな瓶に入れて店舗に送る。

これを液体に入れると、化学反応を起こし、炭酸になるのだ。地

球では炭酸ボンベを使うが。ないのでこれで代用する。

ジュースは調整して、濃い原液を作っておく。店舗で決められた量までコップに水を入れ、混ぜるだけだ。

紅茶と、ウーロン茶もどきは産地から大量購入し、安く出す。現在、買い取ったとなりの領地で紅茶とウーロン茶もどきを作っている。いずれ自領だけで足りるようになるだろう。

余った果物はそのまま、ミラ果物店に贈られる。

#### 第四工場。

此処は砂糖だ。ついでに、女性だけの職場でもある。

皮を剥いて、刻まれたサトウキビが此処に運ばれてくる。

それを、絞って黒砂糖にし。それを精製して白砂糖にしている。

そして、全ての工場に送られる。かなり余るので、白砂糖として、何故かミラ薬局に送って高額で売っている。最近では薬局と言うより、なんの店かわからなくなっている。砂糖やボールペンや紙なども売っているのだ。

小麦の精製も此処で行い、焼くところまで此処で行う。

ミラクナルドのパンが主だが、ミラパン店のパンも此処で作っている。開発班で出来たパンが順次此処で作られ、売られてゆく。

余った小麦は王宮や貴族に高値で販売される。精製した上品な小麦は高く売れるのだ。あとは、朝社員に配られる。一応ミラパン店でも小麦を売っている。

ミラパン店は今のところ、店が二か所出来ている。

#### 第五工場。

此処は主に何でも工場だ。一番でかい工場でもある。

ケチャップは此処で作っている。



さらに、野菜の加工も此処。

ポテトも此処で細長いあの姿にする。そのあとに、精霊が氷点下まで下げたステンレス冷凍庫に放り込まれるのだ。

余ったケチャップはなぜか、薬局で売っている。薬が少なくてスペースが余っているとのこと、こんなことになったのだ。

アイスも凍らせる前の状態までは此処で作っている。

向こうで、精霊がステンレス冷凍庫の中でアイスにするのだ。ピクルスも此処で瓶詰になっている。

ただ、最初は間に合いそうもないので、出来たものを買っている。しばらくすれば此処で製造したものが出されるだろう。

余った野菜も臨時出荷されている。

忘れてたけど、テリヤキソースも此処で瓶に詰められる。

一応此処は、全て別々に隔離されている。

海鮮工場。

此処はちょっと場所が違う。海の方にあるのだ。

此処の品物はミラ魚店に送られる。

新鮮なものをそのままということ、当日に血抜きを行い、出荷される。

エビフィレオの中身も此処で練っている。衣まで此処でつくられ、店舗で揚げられる。

ってな感じで、マックを作るためだけに、この世界でない物が相当出来上がり、出荷されているのだ。

だが、コーラがどうしても出来ない！ 開発班は、屋敷の傍に作った工場で働いている。コーラもそこで開発中だ。

「ご主人様。わたしはまだ、此処で作られたものがどうなるのか知らないのですが？」

こいつには魔法で自衛出来るまで外に出さないようにしたからな。ミラクナルドなら大丈夫だろう。あそこは、精霊によって魔法が使えない。

精霊魔法なら、俺より感応力が高い場合使えるが。

一応24時間営業で、調理は男性にさせているから安全だろう。

もしもの為にヘイストストーンとストップストーンと武器も置いてある。

相手がメイジなら確実に倒せるし、ストップストーンを使えばその他も倒せるだろう。

倒したら特別ボーナスも出すって言うてあるし。

ちなみに、こいつらの腕輪は特別だ。持って逃げられたらすぐに場所が分かる。こちらから強制的にストーンを使うことが出来るので、別に盗まれてもいい。

一応内部情報は機密になっている。

「んー、明日開店だから行ってみるか？」

「え？ いつのまに作ったんですか!？」

「いや、かなり前から出来てたんだが、工場が出来るまでは開店してなかったんだよ。女性店員も俺が渡した接客マニュアル見て前から練習させてたし。確か、明日はオープン記念ってことで、一品以上買つと、ポテトSがついてくるクーポン配ってるな」

「それって、損するんじゃない……?」

「客を呼ぶためだ。ちなみに、此処だけの話。原価めちやくちや安いからそれでも利益は出るんだ」

「……詐欺ですか？」

「違う! 商売だ!」

まったく。サービス業じゃないんだからな!

そう言えば、店舗で調理する男はどれだけ上達したんだろうな。  
一か月くらい前から、使用人達がガタイのいい男をしごきまくってへばらせてたけど。

「ついでに、同時に3店舗出来るぞ？」

「試店って言ってませんでしたか!？」

「ああ、ルミアのせいだ」

「納得です……」

ルミアと言うのはゲルマニアの姫殿下だ。

俺が月一回献上金を持って行きたびに遊び相手にされている。

ついでに、ミラとも仲がいいと言つか振り回されている。

「ルミアの要望で、王都に本店がある。んで、うちのヴィ・リヤステイ領に二つある。一つは、屋敷がある方の俺が作った街。もう一個は新しく買い取った領の初めから在った街。両方税金下げたし、仕事も与えてるから気軽に買えるだろう。ついでに、実は工場の近くにもあるぞ？ これは店舗って言うより社員用で、外で食べるってことで大きくはない。開いてる時間も決まってるしな。一日一枚券が配られ、セット一つ無料だ。もっと食べたかったら金を払う。朝と昼休憩時間と仕事が終わった時間しか開いてない」

「本当ですか!？ さっそく行きましょう！ 時間外ですがこう言うときの権力です！」

走って行くこうとするミラを風の精霊に頼んで引き戻す。

「何ですか!？」

「どうせ明日行けるだろうが。最初は本店まで行くぞ」

「えー、別に此処でもいいですっ!」

走り出すミラを連れて戻す。

「けちっ！」

「黙れヒモ娘！」

「だって、わたしがやれることなんてないじゃないですか？ 全部

ご主人様がやっちゃうし……」

「だって、お前無能なんだもん。魔法の才能もないし」

「こっ、これでも最年少スクエアですよ！？」

「薬つかわなかったら未だドットだ」

「うくー！」

変な怒り方だな。事実だから言い返せないけど、怒ってるところ言う怒り方になるのか。

「さーて、帰るぞー」

「うーあーうー……」

わがままを言うミラを引きずって屋敷に戻る。

## ミラクナルド開店

「なんですか？ あの人形」

「あれは、この店のマスコットのイモムシくん。名前はニヤッキだ」

「何で赤い帽子被ってるんですか？」

「イモムシの帽子は赤って決まっているんだ」  
「……………」

台座に座っているイモムシくん。

そのまま芋虫のすがただが、可愛くデフォルメされている。

「にしても、すごい並んでますね……………。てか、並びすぎです。なんか、王宮騎士が整列させてますよ？ どんな状況ですか……………」

「一応お持ち帰り用の窓口も作っておいたんだが……………。両方並びすぎだな。王宮騎士になんて頼んでないから、自発的にやってくれてるんじゃないか？ かなりの土地買い取ってよかったな」

「ホントですよ。すごい広いですね。二階建てで、しかも一階が50メートルくらいあるんじゃないですか？」

「そうだなー、でも。安い！ うまい！ 早い！ が売りだったのに、これじゃ遅い」

「安くておいしいなら並んでみようってことじゃないですか？ あ、

あれがクーポンですか!？」

クーポンを配っている女の店員まで走って行くこととするミラを引き止める。

「な、なんでですかー!？ 無料ですよ!？」

何て落ち着きのない子だ……。

「腕輪だ腕輪。さつき渡したる?」

ミラの腕には、水色の宝石がついた腕輪がついている。工場働いている奴には火の精霊石。店員には風の精霊石。農園は土の精霊石。ついでに、俺とミラ以外はシルバーの腕輪だが、これは金だ。精霊石は中が揺れているので、普通の宝石とは違い、偽装が出来ない。俺の制御下以外の精霊石だと、同じものでも入ろうとすると燃やしつつくされる。水色の場合、全ての場所に入入り自由だ。

「これが?」

「水色の精霊石を持っている奴には、ミラグループの店では全部無料になる」

「すごいです! なんてお得ですか!？」

「いや……。もともと自分達の物だろ?」

「早く! 早く並びましょう!」

俺の腕をぐいぐいと引っ張るミラだが。

「めんどいだろ、裏口から行くぞ?」

俺のことをじっと見。

「いいんですか？」

「ああ、一般の奴が裏口から入ると燃やされるけど。腕輪があれば大丈夫だ」

俺はミラの手を引き、連れてゆく。

裏口から入ると、店員と目が合う。

一人の女性がこちらに近づいてきた。

「あら、僕達どうしたの？ 迷子？」

ああ、燃やされることは言っていないからな。だが、腕輪のことはミラグループ全部に回してあるはずだぞ？

「ウイデイス様、お嬢様いらっしゃったのですね」

後ろから一人の老人……ってかセバスチャン！

「おお、セバスチャン最近屋敷に居ないと思ったたら此処にいたのか」

「ええ、本店の店長をやっています」

「セバスチャンなら信用出来るからな」

「もったいなきお言葉」

にしても、デカイなやつば。レジなんて横に20列あるぞ。それに比例して、厨房もめちゃくちゃでかい。だが、忙しそうだな。こりゃ、給金すこしあげてやらないと割に合わないかもな。

「店長。この子たちはお知り合いですか？」

セバスチャンはため息をつきながら、俺の腕輪を指さす。  
女性は目を見開く。

「ミラグループ代表ウィデイス・ラ・リバルスティン・ヴィ・リヤステイだ」

「わたしはミラ・ヴィ・リヤステイです」

「し、失礼いたしました！ ど、どうか解雇だけは！ 家族がいるんです！」

ぺこぺこ頭を下げる女性。

「此処では平民や貴族は関係ない。そんな怯えなくていい。殴られたって解雇はしない。ミラを殴る分にはな」  
「ひどすぎる！ 鬼畜すぎます！」

女性はポカンとした目をこちらに向ける。

「ああ、だから仕事に戻れ」

ぺこぺことし、仕事に戻ってゆく。

「んで、セバスチャン。悪いけど注文いいか？ 予備のメニュー一覧はどこだ？」

「こちらになります」



連れられて行かれたところには、ガラスケースに入った全バーガーとポテトがケースに入っている。

一番見栄えが良い見せ方を研究させて並べたのだ。写真なんてないから、仕方ないのだ。

レジの下にも同じものが置かれている。その上に、セットメニューの内容などが書いてある。

「じゃ、俺はエビフィレオセットで。あとミックナゲットも。セットの飲み物はオレンジソーダで」

隣を見ると、ミラが迷いまくっている。

「えーっと、えーっと……。ハッピーセットに、ミックナゲットに、アイスに、ホットドック。あ、あと飲み物はグレープソーダ」

「ずいぶん頼むな……」。

「フィレオsオレンジソーダ ナゲット2 ハッピーsグレープソーダ アイス ホット入りましたー」

「わかりましたー」

ミラはセバスチャンをじっと見つめている。

「なにか？」

「慣れてるね……」

「店長ですから」

そつ言って一礼する。

少しすると、プレートに乗った注文品が乗せられてくる。

ここで、食べるわけにはいかないので、スタッフ用の扉をくぐり、店内にはいる。

座れねーよな……。――

「つて、あそこ何で空いてるんだ？」

「ホントですなーって……」

「……」

原因がわかり、俺達は無言になる。

「ミラ、俺の分持ってくれ」

「はい」

俺はその場所まで行き、

「あたっ」

元凶の頭をはたいてやる。

「こらルミア！ お前何してんだ！？」

「痛いじゃ。わらわは普通に食べにきたのじゃ。ウィデイスこそ何をしているのじゃ」

「わかつてると思うけどオーナーだから来たんだよ。てかな、来るのはいいが、こんな甲冑姿の騎士お供に連れて来るな！ どれだけ場所取る気なんだよ！？」

俺に杖を向けている騎士達。多分魔法騎士隊なのだろう。

「勝手に付いてきたのじゃ！ わらわは悪くないのじゃ！」

「連れてくるならせめて持ち帰れよ！？ あと、その魔法騎士隊。居たって何もできないぞ？ オーナーの俺が許すから、魔法使ってみろ」

騎士が俺に杖を向けて魔法を使うが、発動しない。

驚いた様子で見ってくるが、

「この店内では魔法が使えないようにしてある。暴れる貴族が出てきそうだからな。ついでに、この中は貴族も平民も関係ないぞ。そういう貴族はお断りって店内にも店外にも書いてあるんだが？」

そんな時、ミラがプレートを持ってルミアの隣に置く。

「相変わらずですねー、ルミアさちゃん」

「おお、ミラ！ 助けてたもれ、ウィデイスが虐めるのじゃ！」

「自業自得だろが……。とりあえず、次から来るときは私服の、近接特化の騎士三人くらい連れてこい。杖しか持ってきてないんじゃ役にすら立たないぞ？ てか、お前姫っぽくないからまぎれてれば誰にも気づかれないぞ」

俺の言葉に、騎士達は眉を吊り上げるが、知らん。

「ひどい言い草なのじゃ。だが、このてりやきばーがーと言うのは気に入ったぞ！ このめろんそーだと言うのもシユワシユワしてよい物じゃ！ あと、おまけで付いてきたこれはいらぬのじゃ」

口の周りをテリヤキソースで汚しながら、俺に突き出したのは、ニヤツキの恋人のピンク色の芋虫の人形だ。

石灰石を作るメイジの仕事が少なすぎたので、ハッピーセットのオマケを作らせていた。

「ミツクのマスコットだぞ！ 子供が大喜びだ！」

「いらなのじゃ！ だが、この店は気に入ったのじゃ！ わらわ専門の店に、あたっ」

「そんなことしたらお前だけは出入り禁止だ」

俺がはたいた頭を涙目でさする金髪幼女、もといルミア。

「ミラ〜ウイデイスが虐めるのじゃ〜」

「ほへ？ なんへふか？」

ミラはバーガーをぱくついていて聞いていなかった。てか、もう二つ食って三つ目にいつてるし。

俺もルミアの前に座り、食べ始める。

「てかさ、俺がルミア送ってくから、こいつら帰らせてくれね？ テーブルが三つ誰もよりついてないだろ？」

「うむ。わかったのじゃ。そなたら帰ってよいぞ？」

ルミアが隊長らしき騎士を見て言う。

「し、しかし」

「いいのじゃ、帰ってたもれ」

しばらく渋っていたが、ルミアの願いを無下にも出来ず。

「わかりました、くれぐれも気をつけてお帰りください」  
「うむ」

騎士はすぐごと帰ってゆく。  
その後、近くのテーブルが一瞬にして埋まった。  
そしてあることに気付いた。

「なあ、ルミア。この混雑でさ、何で座れたんだ？ 周りの席も何で空いてたんだ？」

俺の言葉にビクッと反応する。

「お前……わらわは王女だぞとか言って退けただろ！？」  
「ち、違うのじゃ！ 騎士が勝手に追い払ったのじゃ！」  
「かわらねーよ！ 貴族と平民が区別されないってのも売りにしてるんだからな？ 悪い噂立つだろうが！」  
「わかったのじゃ。次からは持ち帰るのじゃ」

まあ、それならいいが。

「おい、店員追加注文じゃ、来てたも いたひつ……」  
「だからここはセルフサービスだったの！ ミラみたいに大人しく食ってる！」

そして、ミラに視線を移すが居なくなっている。食べたゴミが散らかっているだけ。

「あれ？ ミラは」  
「さっきどこかにいったのじゃ」

そんなときに、ミラが戻ってきた。

手には、先ほどよりも多いバーガー。ってか、先ほどのを合わせると全種類。ポテトしがつものっている。飲み物も全種類。

「ミラどうやって買ったんじゃ？ あんなに並んでおるのに」

ミラは腕に付いている腕輪を見せ。

「権力です！」

にこりと笑う。

「わ、わらわは王族じゃ！ わらわも！」

俺はルミアの腕をガシッと握る。

「な、何をするのじゃ」

「別に意地悪で言ってるわけではない。俺の経営店が焼死名物って知ってるだろ？」

「う、うむ。父上も犯罪者が消えて喜んでおるのじゃ」

それは金で言いくるめてるだけだ。

「スタッフ用の扉と裏口は通ると焼死するんだ」

ルミアは顔を青ざめさせて、やがて泣き出す。

「わらわは、わらわは……食べたいただけなのじゃ！」

そして逆切れ。

「あーわかったわかった。後で返せよ？ これ持って行けば通れる。ついでに俺の名前出せば、売ってくれるだろう。金は払えよ？」

店員用の風の風石を渡してやる。腕輪加工されていないものだ。

「う、うむ！ 行ってくるのじゃ！」

「あ、わたしも行きます！」

二人が走って扉に向かう。

てかミラっ！ お前どれだけ食う気だよ！？

とりあえず俺は自分の分を食べ始める。

食べ終わり、ポテトをゆっくり食べている辺りで二人が戻ってきた。

ミラは全種類二つずつのバーガーをプレートに乗せて。

ルミアはテリヤキバーガーを10個に。両手に大きな袋を抱えて。

「父上と母上と兄上へのお持ち帰りじゃ！」

はあ……。

まあ、金も払ってるし、気に入ってるならいいけどな。

とりあえず、ポテトは冷めたら糞まずいんだぞ？

にしても、やっぱりコーラほしいな。

## 11 軍を結成。

### 書室

「あー……死にてえ」

一年程立つけど、相変わらず書類に追われているウィデイス9歳です。

だんだんと増える書類。

まず、ミックの店舗が現在24店舗。

トリステイン、ゲルマニア、ガリア、アルビオンにある。

んで、ミラ薬局改め、ミラ雑貨店が12店舗。

ミラパンが8店舗。ミラ魚店が4店舗。ミラ野菜果物店が5店舗。

更に、王宮からの直接受注が各国。貴族も大量。

韻竜が更に7匹こちらに來ている。ペガサスも子供が出來た。



工場が更に5つ増え、全ての生産が自領で出来ている。実際、領地が公爵家超えているのだからそれもできるのだろう。

あと、移民が増えすぎている。

金は王宮より金持ちになっていたりする。有り余りすぎてビックリだ。

ただ、治安が悪くなりすぎている。王宮に相談しに行ってみると、この国で自領軍がない貴族は俺だけらしい。

ってことで、自国軍を作ることになった。ただ、はつきり行つて、この領地は機密がめちゃくちゃ多いので、信用が置ける奴らしか雇えない。

つまり、怪我したり病気になって、動けなくなった奴らが狙い目。そんなメイジ。

ミラグループのネットワークを使い。奴隷や、廃貴族、没落貴族で怪我、または病気にかかったメイジを大量に集めた。今日、家の近くに集めたのだが、俺は書類で死にそうだ。

ミラは四種属性合成が出来るようになったので、そろそろ精霊魔法を覚えさせようと思う。

「あー……死のうかな」

「何言ってるんですかご主人様！ 外に集まっていますよ！？ あと、ご主人様が死んだらどれだけの人が路頭に迷うか考えてください」

窓から入ってきたミラがいきなり怒鳴りだした。

まあ、ミラグループ5万人以上いるし……。領内全員が何かしらで関わっているのだ。

「んー、わかつたから怒鳴るな」

俺はふわふわと浮きながら、ミラの後ろについていく。  
ミラもすでにスクエアメイジ5人分くらいの精神力がある。  
スクエアスペルも2秒以内で唱えられるほどだ。  
自軍かー、最低でもミラ程度までは行ってほしいな。精霊魔法は  
教えるつもりはないけど。

ヴィ・リヤスティ領軍

庭の少し先に、メイジが大勢集まっていた。約500人くらいか。皆腕がなかったり、せき込んでいたり、ひどいやつは腕と足がない。

大陸中から集めたから、かなりの人数だが。この領でこの人数は少ない。

普通は数千必要なのだ。

俺が着地すると、使用人達が全員集まっていた。ミラちゃん特訓セットのカバンがかけられている。

俺が来てもざわついているが、仕方ないことなのだろう。

「精霊、俺の声を届ける」

「わかったー」

「届けるよー」

んじゃやるか。

「静まれ！」

俺の声に一気に静まる。最大限威厳を出そうとするが、9歳児には無理だ。

「俺がウィディス・ラ・リバルスティン・ヴィ・リヤステイ侯爵だ。ミラグループ代表でもある」

俺を見て、大勢の目が見開かれる。

そりゃそうだ。大陸一のミラグループの代表が9歳児だからな。

『まず、言っておくことがある。俺はお前らの怪我や病気をすぐにも治すことが出来る。しかし、ここから先は機密に触れることになる。退軍まで此処で働き、退軍後もこの領で暮らすことになるだろう。もちろん、働いている間は、高給を保証する。我がミラグループの高級薬も無償で配給しよう。だが、これも機密だ。というわけだ』

俺は風・火・土の小さな精霊石がついた腕輪を掲げる。

これに出入りの自由があるわけではなく。これはただの軍の証だ。

『これは純金で出来た腕輪だ。まず従う物はこれを腕に付けてもらう。この腕輪のことを説明しよう。この腕輪はロックすると、ピッチリと腕に張り付くので、はずすことは不可能。錬金の応用で外すことも不可能だ。壊れることもない。試したいならそれでもいいが。ミラ、この腕輪を宙に浮かせてくれ』

ミラはうなずき、腕輪を20メートル辺りまで浮かす。

『錬金』

その瞬間大きな爆発を起こし、周囲10メートル程が白い光に包まれる。

それを見た奴らの顔が青ざめる。

実際はそんな効果ついてはいない。精霊魔法で爆発させたただけだ。

『こうなる。ちなみに、どこに居ても場所がわかるようになっていく。許可を得ず、逃げた場合は遠隔操作で爆破させる。それでもいいなら俺に従え。本当に治るか不安な奴もいるだろう。一人、本当かどうか治してやる』

俺が一番前の少年を浮かばせて、コチラに来させる。

片足がない少年だ。

一応俺は擬装用杖を手に持っている。

『少年、もしその足が治ったら俺に仕えることを誓うか？』

少年は少し震えているが。

「はい」

それを聞き、俺と少年は空中に浮かぶ。

『この二本。我がミラグループの最上位機密の薬だ。刻まれても、心臓さえ動いていればもとに戻れる薬。もう一つは、どんな毒や病気も一瞬で治すことが出来る薬だ。仕える奴には全員飲んでもらう。まずは、少年に飲んでもらうでしょう』

俺は二本を手渡し、飲んでもらう。

少年はおずおずと飲み始める。

身体が光り輝き、なかつた足が復元される。更に薬を飲み、身体の病気の至る所が光りだす。

眼下では、驚愕の声が飛び交う。

少年の腕に腕輪をはめ、精霊をお願いしてピッチリした腕輪に変えてもらう。

『さて、今から腕輪を全員に回す。10分待つ。従う奴は腕輪をはめた状態で待っている。10分後に、腕輪をロックする。両腕がな

「い奴は腕を治した後につけるから腕輪を持っている」

俺は少年と一緒に地面に降りる。

使用人達は、大量の腕輪を持って全員に配り始める。

「あ、あの！　ありがとうございます！」

降りたところで、少年が一礼し、感謝の言葉を言う。

「いや。ちょうど軍が必要だったのだ。悪かったな。お前のような幼子を兵にしまって」

「……ウイデイス様のほうが幼いのでは……？」

尤もだ。俺は9歳。少年は14歳くらいだろう。

「ま、気にするな、これから頑張れよ？」

「は、はい！　ウイデイス様に一生仕えさせていただきます！」

うんうん、素直だ。

そこで、俺は視線をミラに移す。

「……なんですか？」

「いや、少年は素直だなと」

「わ、わたしだって命令断ったことありませんよ!？」

「散々厭味ったらしく言うけどな」

「う、うくー！」

ホント変な怒り方だな。

10分経つ頃に俺は叫ぶ。

『今から腕輪のロックをするので、腕輪を付けろ』

少し動くの待ち、俺は精霊に頼み、全ての腕輪をロックする。

『さて、前にいる使用人に、腕輪を見せてから薬をもらって、その場で飲んでくれ』

ぞろぞろと30列くらいになり、並ぶ。

もらった奴から飲み、治ったことに感涙したり、叫んだりしてる。手足がない奴は近くの人に連れられてくる。

逆側に逃げる奴が三人程いた。

『ふう。“ここから”機密だつて言っただろ？ 断ることは許さないと言うことだ。そもそも、此処にいるやつらは全員買っているわけだ。つまり』

俺は一瞬で詠唱し、

《ファイヤーテラー》

逃げ出した三人から巨大な火の柱が上がり、燃やしつくす。

腕輪を持って逃げなければ座標特定なんて出来なかったのに。  
500メートルくらい離れていたが。一瞬で焼き殺した。

後ろを振り向くと、驚愕と青ざめた顔で俺を見てくる。

『お前たちは逃げなくてよかったな』

ニコリと笑ってやる。

「はあ……ご主人様は」

黙っとけミラ。

『んじゃ、そろそろ全員治つたる？ さっきは言わなかったが、この腕輪には面白い機能がある。ミラ』

ミラはうなずき、ハイスト状態で一瞬で俺の前に移動し、俺に杖で殴りかかる。

それを、俺は腕輪のある部分に合わせて受けると、パシツつと音がし、杖が弾かれる。

『打撃とかスクエア程度の魔法ならはじき返すことが出来る。一瞬にして、スクエア2発とか食らうと壊れるがな。その場合爆発するが、どうせスクエアスペルを生身で食らったら死ぬだろ？』

ニヤリと笑いながら言っでやる。

『んー、あとな魔法のクラスはどうでもいい。まず大事な魔法の詠唱速度。そして、精神力。スクエアだからって自慢すんなよ？ スクエアだからなんだって感じた。二秒以内に詠唱出来ないなら



意味がない』

俺の言葉に全員が息をのむ。

『一年だ。一年以内に此処まで行け。ミラ。エレメンタルリースをニルヴァーナで上空に打て。いいか？ 詠唱速度を見ている』

ミラの声を精霊で広げる。

ミラは上空にニルヴァーナを向け。

### 《エレメンタルリース》

詠唱が約一秒。

爆音が鳴り響き、100メートル程度の白い爆発が起きる。  
空気がびりびりと震えるのがわかる。

全員が驚愕に声すら出せないでいる。へたり込んでいる奴もいる。

『今のがスクエアの火・水・風・土の魔法だ。公式にはミラが初めて達成したと言われる、虚無以外では最強の魔法だ。難易度最高。これを一年後に二秒以下で唱えられるようになれ。ドットだろうとなんだらうと関係ない。ミラだって俺が拾ったときはドットの屑だったからな』

全員がミラの方を見やり、尊敬の眼差しを向ける。

ミラは照れているが……。

『で、大事なのが更に精神力だ。精神力と詠唱の早ささえあれば、一人で軍にだって勝つことが出来る。エレメンタルリースは精神力の消費がバカでかい。普通のスクエアクラスならよくて2発で精神

力が切れる。だから、精神力を普通のスクエアの数倍にしる。精神力が高ければ 』

俺は使用人に持たせていたアルテマウェポンを手に取る。  
切っ先を上空に向け。

### 《エレメンタルラース》

それを連続で放ち、角度を徐々にずらしてゆく。まるで、その範囲が巨大な光の道の様になっている。詠唱速度は、2発で一秒。ほぼ、一文字しか詠唱してない感じだ。

30回程はなち、振り返る。

うん。なんで俺のときは尊敬じゃなくて恐怖なんだよ。

『と、まあ、こんな感じに出来る。目標として、半年で全ての属性をスクエア。一年後にエレメンタルラース。通常のスクエアの精神力の三倍以上』

見回してみるが、絶望の表情が浮かんでいる。

『だが、普通に修行したら、無理だ。死ぬまでかかっても不可能だろう。皆はミラグループが大陸一の高級薬品店だと知っているだろう？ ここにいる全員には、売れば一本エキユー金貨10万枚はするだろう薬を惜しげもなく使ってもらう。金は要求しない。修行中は給金だつて出す。更に、たとえ死んでも蘇生させる秘薬も使わせる。なぜなら、エレメンタルラースは制御に失敗すると十中八九死ぬ。そこにいるミラなんて数千回は死んでいる』

ミラの方を見ると、思い出したのか、震えながら涙を流している。

まあ、自分が死んで何回も蘇生していると、人の命が軽く見える。此処にいる全員が他人の死を数億回くらい見ることになるのだ。だんだん感覚がマヒし、人を殺しても何にも思わない。自分が死ぬのも構わない最強の軍隊が生まれるのだ。

『修行方法は簡単。全員レビテーションを唱える』

俺の命令に、慌てて全員がレビテーションを唱える。浮き上がった状態でしばらく待つ。

「す、すみません……そろそろ限界で」

一人の若い少女が声をかけてくる。

『そのまま続ける。気絶するまでだ』  
「ひっ!？」

それから一分後くらいに、少女は気絶し、地面に落ちる。

『完全に精神力が切れると、数か月昏睡する。ただ、そうすると精神力が一気に伸びる。だから』

俺は少女に近づく。

『よく見ておけ。全員にやってもらってからな』

ふわふわと浮きながら俺の周りに集まる。

少女の顎をあげ、人工呼吸のような状態にする。

そこで、エリクサーを一口口に含み、それを少女に無理やり流し

込む。

軽く意識が回復した朦朧とした状態で、ビンから直接流し込む。

やがて少女はすぐに意識を回復する。

『これを繰り返すことで、一回で数カ月かかる精神力の上昇を、一日でその数百倍上げられる。少女はもう一度レビテーション』

俺の命令に従い、少女は浮き上がる。

少女は何が起きたかわからないだろう。

男性陣から歓声が飛ぶ。

『ちなみに、必ず同性でやれ。いやらしい男が多いみたいだからな』

俺はニヤリと笑ってやる。

女性陣からも非難の視線が向けられ、男性陣はしよぼんとした。

『最低でも一人数千回はすることになる。近くに居た奴は強制でやらせるからな。この練習は必ず二人以上でやれ。それで、レビテーション中に、呪文の早口言葉の練習だ。最終目標は一言しか聞こえないのに詠唱が全て終わっているという感じだ。どうせ、同時に魔法は唱えられないから、発動はしない。のちのち、俺が現存する全ての魔法。俺のオリジナル魔法をのせた詠唱式を冊子にして渡すから。使えない魔法でもいいから練習しろ。毎日此処で修業を開始する。薬は使用人に大量に渡し、毎回数人を此処に置いておくから、もらってくれ。では、修行始め』

俺が言い終わると、数人が気絶する。

使用人が近くの人に薬を渡し、言いつけどおりにやってくれる。

俺は振り返り、ミルドに近づく。

「ミルド。兵士の家は出来たか？」

「いえ、兵士を集めると言われてから、大量に金貨をまき、大量の職人を雇いましたが、あと三ヶ月はかかるかと」

そりゃそうか。

「それが出来るまではこれを使ってもらえ。5人ひと組くらいでリーダーを決めて、そいつに管理させればいい」

俺は小さなミニチュアの建物みたいなもの。コテージを取り出して大量に渡す。

「これは？」

そういえばミルドは見たことなかったか。

「コテージだ。テントの木小屋バージョン。一晩寝れば疲れも吹っ飛ぶ。後は任せるな」

「かしこまりました」

ちと……。

「ミラ。お前にはこれからやってもらうことがある」

「へ？ い、いやです！」

俺は嫌がるミラの襟首を引っ張り連れていく。

「いっせー」

## 土の精霊

「もっとだ、穿つようにもっと！」  
「汚い！ べちよべちよ！ いやー！」

まず俺は、土を水でぐちよぐちよにし、ミラを突き飛ばした。  
更に命令し、土と戯れさせている。

「もつとだ、大地と一体になるように！」

「もう一体になりすぎてドロだらけですよー！」

多分30分くらいさせているだろう。  
涙を流しながら土と戯れるミラ。

だんだん飽きてきたな。

「なあ、土の精霊。なんか汚いからそろそろ契約してくれ」

『いいよ〜』

土の精霊がミラの身体に入りこむ。

そして、すぐに出て、ミラの身体の周りにまとわりつく。

「ミラ。やったな。契約出来たぞ？」

ミラは顔をあげて、土の精霊を目で追う。

「これが、土の精霊ですか？　すごくたくさんいるんですね」

「まあな。精霊はどこでもいるしな。んで、汚れたから風呂いくぞ」

「へ？　他の精霊はいいんですか？」

「……まあな」

次は水と火一気に行くか。

## 火・水の精霊

俺はミラをキレイに洗ってやり、ミラを温泉の淵に立たせる。  
ちよつど人もいないしいだらう。

火の精霊にお願いし、温泉の温度を50度程にまで上げる。

そしてミラを蹴り落とす。

「あちゅっ!?! あづいつ! な、何なんですかコレ! 前よりア  
ッ!?!」

ミラがあまりの暑さで暴れる。  
出てこよつとするミラを水がうねうねと動き、引きずり込む。



「なっ！？ あづづづ！ ああああ！ しびれてきた！」

俺は自分の周囲の温度だけ下げ、ゆったりと温泉に入る。

「はっはー。ミラ。これくらいが気持ちいいんだよ」

「ご主人様！ そこだけ！ 湯気少ないのは気のせいですか！！？」

チツ

何て目がいいんだ。

それから20分程経って解放する。

ミラは全裸で大の字になって石の上で寝ている。

「きゅ〜」

まるで本当にゆでダコだ。

真っ赤になつてのぼせている。

一心臓は動いているので生きてはいるだろう。

「精霊。契約してやってくれね？」

『うん〜』

『わかったー』

『するよー』

「待った、風の精霊はまだな。それじゃ面白  
いや、試練になら  
ないから」

『まだー』

火と水の精霊が土の精霊と同じように中にはいる。

俺はエリクサーをミラの身体にドバドバとまとめて数本かけてやる。

やはり、全身火傷だったようだ。

ミラはむくりと起き上がり、周りを見回した。

「すごいですね、コレ。水には水の精霊がたくさん。空気中にもいます。火の精霊もいますね。むしろ、精霊で周りが見えにくいです」

「ああ、慣れると、自分で見えなく出来るぞ。見えなくてもそこに居るから、力を借りることは出来る。言葉は聞けるか？」

『きこえる〜？』

『きこえるかな？』

「んー駄目ですね。何か言っている程度です。声が聞こえるわけじゃないくて、言ってるって感じがするだけ」

「ま、上出来だな。次は風の精霊と契約しに行くぞ」

「わかりました」

俺は服を着、移動する。



しばらくすると、すご勢いで落下してくる物体。  
地面数メートルで、落下のスピードが落ち、ゆっくりと地面に降  
ろす。

「おお、気絶しないなんてすごいなミラ！」

「は、はは……ははは」

なんか壊れたみたいに涙を流しながら笑っている。  
髪はぼさぼさ。身体が痙攣している……なんとなくコワイ。  
倒れたミラにエリクサーをがばがばとかけてやる。

しばらくしてから立ち上がる。

「わたし、前から思ってたんですが。エリクサーって拷問薬ですよ  
ね……」

失礼な。喉から手が出るほどほしいような薬だぞ？

そんなことを思っていると、風の精霊がミラの中にはいる。

「イタツ!? イタタタタツ!?」

頭を押さえて痛がるミラ。

「アホッ！ 慣れてないのに全部見ようとするな！」

「ま、待ってください！ これっ！ どうやって!」

「範囲を指定するんだよ。自分の周囲だけ見ようと思え!」

やがて、痛みが治まったのかミラが立ち上がる。

そして、不思議そうな顔をしてコチラを見つめる。

「さっきのなんですか？」

「ああ、風の精霊つてどこまでも遠くの景色を、契約者の頭の中に取り込むからな。契約した地域の全部が見えちまう。俺が契約した場所は、無理やり一つにまとめたから、東方まで見えちまう。人間の脳には多すぎる情報だ。だんだんと範囲を広げていくといいだろう。頭痛がない程度まで広げてみる」

ミラはうんうん唸りながら広げているようだ。

「此処ですね。500メートルくらいなら見ようと思えば虫の動きすら見えます」

「ああ。自分の真後ろも見えるから、死角が無くなっていいだろ？」

「ご主人様は常時どれくらいの広さを見てるんですか？」

「んー、5キロくらいだ」

「5キッ!？」

「いや見ようと思えば東方まで広げられるぞ。お前もちょっとずつ慣れればいい。俺は生まれたばかりで精霊と契約したしな。慣れているわけだ。あと、新しく行った場所は、契約した精霊を少し連れて行けば、すぐ契約が出来る」

そこで、ジトつとした目でミラがこちらを見つめてくる。

「……」

「ん？」

「前にご主人様は仲介があればすぐに契約出来るっていいませんでしたか？」

「言ったな」

「わたしにした試練って意味在ったんですか？」

「……」

「ねえ」

「……」

俺はサツと視線をずらす。

「ねえ」

目の前にミラが膨れた顔で現れた、更に上空にずらす。

「ねー」

コイツ！ いきなり詠唱なしで、風の精霊使って浮いたぞ！ こんなときだけ……。

「あーまあな。実際意味ない」

「ぶー。ひどいですねー。わたしの地獄の苦勞が……」

不貞腐れているミラを無視し、話しを続ける。

「とりあえず、契約は終わっただろ？ これで、杖無しでいけるはずなんだ。うーんそうだな。一回だけ俺が見せるから、同じことをやってみろ。ちょいニルヴァーナ貸せ」

「なんだか、ごまかされてる感じがしますがいいでしょう」

手渡されたニルヴァーナを上空に向ける。

「これからお前がやらなければいけないことだからな？」

俺はある詠唱をし、それを一瞬で終わらせる。

「まず、今の状態わかるか？」

ニルヴァーナの遂になったフェニックスの羽。その右側の先に小さな白い球体が浮かんでいる。

「今のは、エレメンタルラーズの詠唱ですか？ でも、最後にエレメンタルラーズって言いませんでしたね」

更に詠唱する。今度は、左側の羽に小さな球体がとどまる。

「これはわかるか？」

「更に同じ詠唱しましたね。でも、まだ名前は言ってます」

上空にニルヴァーナを向け

《エレメンタルラーズ》

杖の球体が一瞬で消え、轟音をとどろかせて宙に大きな太陽が生まれた。その光だけで、一瞬目がくらみ、かなりの距離が離れているのに、風圧で木をしならせる。

大きさに爆発は500メートル近いだろう

「な、何ですか今の！？ 耳痛いたいんですけど！？」

「ああ、エレメンタルラーズってのは、これが完成系なんだよ。スクエアのエレメンタルアースは途中経過だ。多分、これが出来れば虚無超えられるんじゃないか？ まず、方法教えるぞ？ 精霊の力を使って詠唱を右側に留める。更に詠唱で左側に留める。そしてそのまま打ち出す。やり方だけ聞けば楽そうだが。反発し合う属性を8つ留めるのはかなり難しい。失敗すれば手元で爆発するからな」  
「なんか一発で肉片すら残さず消えそうな気がするんですけど……」  
「ああ、だから、魂が残ってれば蘇生できるようにしておく。来い

フェニックス」

地面から10メートル程の火の鳥が現れる。

「こいつなら蘇生してくれる。此処ならだれにも迷惑かけないだろ？ 屋敷からも街からも離れてるし。ニルヴァーナが壊れることはないから、安心して死にまくれ。一年くらい死にまくれれば完成するからな」

「拷問すら生易しい！」

「フェニックスがいれば完全回復してくれるから、エリクサーもいらないしな。じゃ、頑張ってくれ。俺は行くところあるから」

そのまま俺は、ミラを置いて飛翔する。



## アルビオン王宮

あれから、俺は不可視状態でアルビオン王宮に侵入した。すでに夜遅く、標的は寝ているだろう。

王宮を数時間歩きまわり、一つの部屋を見つけた。騎士が二人見張りについている大きな部屋だ。

### 《スリプル》

俺は二人の騎士にスリプルを掛け、ゆっくりと扉を開き、中に入る。

天蓋付きのデカイベットに眠っている人を見つけた。

前に薬を売りに来た時に謁見したからわかるが、アルビオンの王だ。

### 《ペイン》

魔法をかけ、毒、盲目、声を出せない状態にする。

悪いな王様。

俺の目的の為に必要な事なんだ。

苦しむ王様を背に、俺は部屋を出る。毒は俺の薬で解除されてしまっただろう。

盲目と声が出ないのは無理だな。

後は待つだけ……か。

11 軍を結成。(後書き)

スリプル 相手を眠らせる。

## 12 地球への計画〜コーラの為に〜

「俺は死ぬかもしれない　その前に全員殺す」

「またですか……最近なんか、そればかりですね」

仕方ないだろ。

もう書類嫌なんだよ。

新しい事業が進むにつれて、書類がどんどん増えてゆく。

ミラが毎日死に続ける日々を始めてから、三か月が経った。

俺はやっと10歳になった。

数日前に、開発班が焼き肉のタレを三種類完成させ、ミラ楽亭がオープンした。

しかも、一気に四力国の王都に一店舗ずつ出来た。

平民用の安価な肉と、貴族用の高価な部分の肉にわかれており、比較的なじめそうなお店だ。

その中でも、レモン汁をつけるタンが人気だ。

俺も毎日のように上タン塩を食べに行っている。

ミラのお気に入りにはハチの巣らしい。なんてマニアックなんだ。

どこの部分かはわからないで食べているようだが、言いつもりもないが。

ユッケビビンバもなかなかの人気の品だ。

ただ、米がまずいので、結局東方に行ってまた買ってきたものだ。また領内の農業が増えた。まあ、ちょうど移民がたくさんいたの

でやらせているが。

コーラは相変わらず出来ないし。一応出来たけど、真っ白いコーラが。見た目が糞すぎて売り出す気にもならない。

やはり、異世界ドアで本社に乗り込むしかない。

魔法と言えば、ヴィ・リヤスティ領軍は三カ月でスクエアが三割程になった。

この時点でも、領の軍隊にしては強すぎるのだが、数が少ないので、やはり全てスクエアにしないと安心は出来ない。ペースとしては、遅いくらいだろう。

そんなときに、部屋のドアがノックされた。

「入れ」

「失礼いたします」

ミルドが部屋に入ってきた。

「要件を言え」

「はい。アルビオン王家からの手紙が」

ついにきたか。よく、三ヶ月も耐えたな。

「真偽の程は？」

「アルビオン王家の紋章付きでございます」

「見せる」

「これでございます」

ミルドに渡された手紙の封を切り、中身を確認する。

「ほう」

俺は手の中の手紙を一瞬で燃やしつくし、礼服に着替える。

「出るのですか？」

「ああ。ミラを連れて行く。コイツには色々経験を積ませるつもりだからな。王程度でビクビクしてたら話にならないからな」

「竜を使いますか？」

「いや、いらぬ。高級に“見える”漆塗りの木箱を三つ」

「ただいま用意いたします」

そう言つて、ミルドは出ていった。

「ふふ……ふはははははは！」

「ご主人様……また何か企んでいるのですか？」

「失礼な！ 企んでなんていない！」

企みはすでに終わっているのだ。あとは決まった結果しか残っていない。

「と言うか、手紙燃やしちやって王宮に入れるのですか？」

「問題ない。何度か行つてるから顔は覚えられている……はず」

「はずですか……」

ジトつとした目を向けてきやがる……。

「ふう。かつこつけて燃やしたりするからですよ」

「キレイごとだけじゃ世の中やっていけないんだよ」

「むしろ、ご主人様はキレイごと言つたことなんて全くありません」

よね。恐ろしく自分に素直です。悪い意味で」

「自己大切の精神だからな」

「わたしは死に過ぎて自己崩壊の精神です」

二人でジトつとした目で見つめ合う。

「ご用意出来ました」

ミルドが小さな三つの黒い箱を持ってきた。

「御苦労」

その箱を開け、中に入っている紫の布の上に、一つずつ薬を入れる。

エリクサー、万能薬、フェニックスの尾。

「機密では？」

「ああ、これは取引材料だ。こちらの損失は無く、相手には素晴らしい物をいただくためのな」

「一国の王に一方的な取引をするお方はウィデイス様ですね」

あきれた様子のミルドに、俺はニヤリと口の端を吊り上げる。

「相手が気づかないならば、それは同等の取引だ。情報は武器だ。自分に有利な交渉に持っていくためのな」

俺は礼服の、金で装飾されたマントを翻す。

「行くぞ、ミラ」

「わかりましたよー」

そのまま上空に飛び立つ。

アルビオン

バハムートで移動し、今は落下中。

「ミラ、ニルヴァーナを貸せ。多分武器は取り上げられる。俺が影に収納しておく」

ニルヴァーナを預かり、影に収納する。

「擬装用の杖だけ持っていればいい」

「別に戦わないですよね？」

「相手の出方による。最悪」

ミラがひきつった笑みを浮かべるが、俺は淡々と言いきる。

「アルビオンの島を落下させる」

「はあ……。別にいいですよ。アレくらいなら簡単だからいいですけど」

「言うようになったじゃないかミラ」

「誰のパートナーだと思ってるんですか？ 世界で一番傍若無人で、世界で一番唯我独尊で、世界で一番」

ミラの方を見ると、何故か不敵な笑みを浮かべている。

「最強なご主人様です」

「そんなのは当たり前だ」

アルビオン。それは天空の島ラピュタ もとい浮遊大陸だ。巨大な風石の結晶が地面に埋まっているらしい。風石を破壊すればそれで終わりだ。上空3キロメートルから落下する。

下にある村などはだれも生き残れないだろうが知ったことではない。

「それに、今回のコレってご主人様が仕組んだんですよ？」

「ほう。わかるか？」

「当たり前ですよ。何年一緒に居ると思ってるんですか？」

「まだ三年経ってない」



「あれ？ もう20年くらい一緒に居るような気がしてました」  
「お前の人生の二倍以上じゃねーか！ じゃ、降りるぞ」  
「はい！」

そのまま、俺達は落下し、城の前で風の精霊を使い、ゆっくりと着地する。

いきなり現れた俺たちに、入口の騎士達が槍を向けてくる。

「私はウイデイス・ラ・リバルSTEIN・ヴィ・リヤSTEIN侯爵。  
ミラグループの代表だ」

「わたしはミラ・ヴィ・リヤSTEIN。ミラグループの副代表です」

ちなみに、ミラが副代表なのは、その方が都合がいいからだ。

「お前らみたいな子供が――」  
「待て。私は前にこの方が来た時に警備を担当していた。この方がウイデイス・ラ・リバルSTEIN・ヴィ・リヤSTEIN侯爵で間違いない」

一瞬剣呑な雰囲気になったが、警備隊長のような人が現れて訂正してくれた。

「失礼ですが、貴方がミラグループ代表と言うことはわかりましたが、規則ですので、杖を預からせてもらっていいでしょうか？ それとボディチェックをさせてもらえないでしょうか？」

「構わない。だが、私は誰にされても構わないが、こちらのミラ嬢はそちらの女性の騎士の方にボディチェックをお願いしたい。淑女の肌を男性に触らせるのはマナー違反だろう？」

俺は微笑んでやる。

となりで、そんなこと思ってもいない癖に。とか聞こえるがちょっと黙れ。

一応紳士的にふるまった方がいいんだよ。

「もちろんそれで構わない」

俺とミラは杖を渡し、服の上からボディチェックを受ける。

「その箱は？」

「先ほど、王家からの手紙を承り、アルビオン陛下の症状を治療出来るだろうと選んだ秘薬だ」

俺は三つの箱を開ける。

それに兵士がディテクトマジックをかける。

「これは……、すさまじい魔力が内包された薬だな」

「はい。手紙の内容を見た限りでは、深刻な御病気のようにです。それを治すにはこれらの秘薬が必要なのです。手紙は、一刻も早く治療しないと命にかかわると思います、忘れてきてしまいました。情けない話です。ただ、もし途中で戻った場合、手遅れになる可能性も」

「いや、いい。ウイデイス・ラ・リバルステイン・ヴィ・リヤステイ侯爵を信じることにしよう。これほど貴重な薬を持参していただいたんだ。それだけでも信用できるだろう。ついてくるといい」

『どれだけ嘘八百ですかご主人様。この為の箱と薬三つだったんですね？』

精霊を通して俺にだけ言葉を送ってくるミラ。

『いや、こんなことはどうでもいい。本番はこれからだよ』

俺とミラは前の兵士の案内についていく。

## アルビオン王室

今、この部屋には、王と皇太子。

更に、兵士が10名程。どれも騎士隊長レベルだろう。

ひそかにライブラをかけてみたが、皆スクエアクラス。

この国の騎士の最上級10人なのだろう。

王はイスにどっしりと座りこちらを見る。

どっしりとしているようだが、実際は視線が少しずれているし、震えている。

三ヶ月間まつくらの暗闇に閉じ込められたようなものだからな。声も出せないのだから仕方ない。

俺とミラが片膝をつき、口を開く。

「お久しぶりですアルビオン国王、ジェームズ一世陛下。私はミラグループ代表、ウイディス・ラ・リバルステイン・ヴィ・リヤステイです。王宮の招集により、参上致しました」

俺の後に続き、ミラが口を開く。

「お初におめにかかります。ジェームズ国王陛下様。わたくしはミラグループ副代表、ミラ・ヴィ・リヤステイでございます。代表の補佐をするお役目にて、同席致しました」

俺達が挨拶するが、もちろん王が返事をするはずもない。

となりの立っていた男が一步前に出、

「父上は少し、喉を痛めておいでなのです。私は皇太子の、ウエールズ・デューター。他国の貴族にこのような招集申し訳ない。そなたたちの薬の効果は目を見張るものがある。それを見込んで招集した。何か新しい薬があるならば、買い取ろう」

そりゃ、言いたくないだろうな。

だって、手紙には薬を持って招集としか書いていなかった。王が病気と知れば民が混乱するだろう。しかも、今アルビオンは貴族派と王党派で分裂が始まったところ。

ゲルマニア貴族の俺には知られたくないだろう。

『ミラ。お前は診断士ってことにするからな。王の病気は目が見え

ない。まるで、暗闇の中に居るような。さらに、声が出ない。ついでと言ってはなんだが、毒にもかかっていた。それは俺の毒消して治したらしいが。話を会わせる』  
『わかりました』

驚くくらいに微動だにしないミラ。なかなか俺好みに肝が据わっている。

俺は皇太子をじっとみつめる。

「失礼ですがウェールズ皇太子様。私達は薬師と診断士。正直にわけを教えてもらわないと何もすることができません。先ほどから国王陛下の身体が少し震えているようですが。何か御病気におかかりですか？ ちょうど今、私の隣に診断士がいます。彼女ならば原因の解明が出来るかもしれませんか？」

「貴様！ 皇太子様に対して何と言つ言い」

「よい！」

「ハッ。失礼いたしました」

ウェールズはため息を一つつく。

「すまぬ。あまり大ごとにするわけにはいかぬのでな。確かに、父上は病気にかかっている。そこで、そなたたちに新しい薬がないのか聞いたのだ。もうすぐ建国パーティーがあるのだ……、それまでには治って頂かないと困る」

つまり、この三カ月がギリギリのタイムリミットってことね……。

俺は隣のミラに視線を移す。

「ならば、一度隣の彼女に診察させていただけないでしょうか？

若輩でありますが、他に髄をみない腕を持っています。ミラグループの秘薬は、彼女の診察結果から、私が薬を調合した品なのです。もし、診察中、彼女が妙な真似をしたら、私も彼女もその場で叩き切っていたらいて結構です」

「ほう。そこまでの腕なのか？」

「はい。ミラグループの診断士でございます」

「ならば一度見ていただけぬか？」

「御意。頼むぞ、ミラ」

「おまかせください」

そう言い、ミラは王の前に移動する。

騎士達が槍を構える。

「失礼いたします」

軽く両目の下瞼をおろす。

そして、首の横に片手を当て目をつむり、30秒程してから離し、俺の横に戻り、跪く。

「して、何かわかったのかな？」

ウェールズが挑発するように言う。

「はい。まずこの明るい部屋の中で、瞳の瞳孔が開ききっています。この状態は、本来暗い場所にいる状態です。つまり、国王陛下は、目が見えていません。まるで、視界が全て黒で塗りつぶされているようでは？」

国王陛下がビクッと震える。

おお、理にかなってる！ やるなミラ。

「続ける」

「更に、血の流れに何か不純なものが流れています。この症状に酷似したのを知っています。多分声も出ないのでは？」

ウェールズ皇太子が目を見開く。

とりあえず、適当すぎるだろミラ。

確かに、この時代ならけ血なんて、血液型すらわからないだろうけど。

「それで、原因はわかるのか!？」

「ただ、この症状に酷似した病気の場合。足りないんです」

ミラがウェールズを見つめる。ウェールズがたじろぐのがわかる。

「な、何がかね？」

「毒が。この場合毒に侵された症状も出るはずですよ。そうすれば原因が分かるはずですよ」

騎士までもが驚愕に目を見開く。

「ミラグループの診断士とは本当の様だね……。確かに、最初は毒の様な苦しみ方をしていた。それは、そなたらの毒消しの秘薬で治ってね。それで、原因は？」

「心して聞いてください」

そこで、ミラが言葉をとぎると、騎士やウェールズがつばを飲み込む音がやけに大きく聞こえる。

この年齢で此処までの演技が出来るなんてすごいな……。

「これは病気ではなく呪いです」

は？

「呪……い？」

「はい。エルフに古代から伝えられる呪いです」

「「「「なっ！？」」「」」」

俺まで なっ！？ って感じだぞ！

「この呪いは、まず第一段階目に毒と盲目、そして声が出なくなります。第二段階目に血液の流れに不純物が溜まってゆき。第三段階目に血液が固まり、死にいたりします」

「「「「！！？」「」」」」

全員の息をのむ音が、静かな部屋に響く。

「そ、それで治す方法は……」

「無理です」

ミラがはつきりと口にする。

「それは……」

「ないんです。治療薬も。実は……、前に同じ呪いにかかった方が居ました。そのときに、私と代表で必死に治療の為の秘薬を作ろうとしましたが、結局手がかりさえ掴めず、残念ながらその方は亡くなりました」

沈黙が流れる。



「しかし、おかしいのです。この呪いは、エルフに直に触られないと掛けられないはずなんです」

「それは……前に、父上の寝室の騎士が倒れていたことがあり、その時からこの呪いに……」

「一ついいでしょうか？ 心辺りがあるのですが」

そろそろ俺の出番かな。

「何かわかっているのか!？」

「ええ。そこで、一つ取引を行いませんか？」

「金ならいくらでも」

「いいえ。金銭は必要ありません。そして、こちらのレートですが、ミラグループの情報網で知った、エルフを使って国王陛下の命を狙った相手の情報と」

俺は一つの黒い箱を開けてウエールズに見せる。

「始祖竜の涙。6000年前、始祖ブリミルの一人が使役した最初の竜の涙でございます。どんな病気でも一瞬で治す秘薬です」

「……なっ!？」

ふふふ。驚いてるぜ。めちゃくちゃ適当だが。

始祖ブリミル信教だしなコイツら。

「だが、先ほど治す薬はないと……」

「私達は商人でもあります。このような薬はもう一生手に入らないでしょう。どんな難病も一瞬で治す秘薬。たしかに、国王陛下の為ですが、こちらとしてもおいそれと出せる物ではないのです。しかし、副代表の診断結果を聞きました。こちらには手があるのに、もったいぶって救える人を死なせるわけにはいかないでしょう。です

から、取引をしたいのです」

俺はウェールズをじっと見つめ、取引を持ちかける。

「だが、金銭が足りないのなら何がほしいのだ」

「始祖のオルゴールと風のルビー」

ウェールズが息を飲む。

騎士はわけがわからないと言う顔だ。

「しかしそれは」

「今から言う私の情報を聞けばわかると思いますが、これからも同じような事が起こるかもしれん。こちらは一つでそちらが二つと言うのも悪いでしょう。そこで、もしこのような事が起きても大丈夫なように」

更に二つの箱を開ける。

「こちらは精霊王の体の一部でございます。心臓さえ動いていれば、四肢がとれていようと、心臓から下が太刀切られていようと一瞬で回復する秘薬。そして、こちらは不死鳥の尾。寿命以外で無くなつた場合、蘇生させることが出来ます」

俺の言葉に全員が息をのみ、箱の中身を凝視する。

「それは……本当なのか？」

「ディテクトマジックで調べてみてください。これがどれ程の力を内包しているか」

ウェールズは冷や汗をかきながらも、杖を振って調べる。

一つ調べることに冷や汗が増えてゆく。

「どうぞ、他の騎士の皆さまも確認していただいて結構です」

騎士たちに調べるように促す。

証人はたくさんいた方がいい。

騎士たちも杖を振り、その内包する力の強さに冷や汗を流す。

「た、確かにこれほどの魔力を持ったマジックアイテムは見たことがない。国宝級以上だろう。しかし、これが本物とは……」

「ならばこうしましょう」

俺はニコリとほほ笑み。

「この秘薬を使用し、始祖竜の涙が本物だったら、コチラの品とソチラの品を交換と言うことで。効果がない場合は、一方的にコレら全てをお渡しししましょう。どうでしょうか。国王陛下もよろしいですか？」

俺は皇太子から国王陛下に狙いを定める。

暗闇と声を出せない恐怖。更に、ミラの言葉で死の恐怖。

精神的にポロポロな人間は扱いやすい。

使わせて治ってしまえば、約束は反故には出来ないだろう。

それほど貴重な物　　ってことにしてあるし。国の信用にもかかわる。

ミラグループを的に回すことはいくら王でも出来ないだろう。

権力と信用を最大限に使った一手なのだ。

ま……王手だけだな。

「父上。よろしいのですか？」

ウェールズの言葉に、ゆっくりとうなずく国王陛下。  
顔は青ざめ、精気がほとんど感じられない。

「ありがとうございます。では、こちらの中身をゆっくりと飲ませてあげてください」

万能薬が入った容器を箱から取り出し、ウェールズに渡す。

ウェールズはその瓶のキャップをはずし、少しずつ国王陛下の口に流し込む。

すぐに効果が表れ。国王陛下の身体が緑色に輝き、すぐに消える。

「お、おおお。見えるぞ！ 私の目が見える！ 声も出せるぞ！！」

国王陛下は喜び、立ち上がるが、ペタンと座りこむ。

「国王陛下。精神的にも体力的にも病み上がりでつらいのでしょうか。これは、ミラグループで作った新しい秘薬なのですが。これを飲んでいただけませんか？ もちろん、お代は頂きません」  
「う、うむ！！」

先ほどの薬で治って信用したのか、素直に飲んでくれる。

容器が違うが、これはエリクサーだ。

国王の身体が光出す。

「なんだこれは、身体の奥から力が湧いてくる。呪いにかかる前より調子がいいくらいじゃ！ ありがとうございますがとう。ウイディス・ラ・リバルステイン・ヴィ・リヤステイ侯爵！ 心から感謝するぞ！！」

国王は立ち上がり、俺の両手を握り、ぶんぶんと振ってくる。ウエールズや騎士は、口をアングリと開いて茫然としている。

「約束通り、始祖のオルゴールを渡そう。最上位国庫は私しか入れぬからな。少し待つがよい。取ってこよう」

国王は元気になったのか、早足で部屋を出て言った。それを見送ると、ウエールズがこちらに向き直り、頭を下げた。

「ありがとう。君のおかげであんなにも父上が元気になった……元気になりすぎなような気もするが」

苦笑しながら言う。

「これが風のルビーだ。約束は守ろう」

ウエールズは自分の指についていた、大粒の宝石付きの風のルビーを渡してくれた。

それを俺は受け取る。

にしても、なんて簡単なんだ。

人間なんてどうとでもなるじゃないか。

「ありがとうございます。では、今回の原因ですが、ウエールズ皇太子様と騎士様にお話いたします。国王陛下に伝えるかはそちらで判断してください。国王陛下に伝えるかは判断に困るものでして」  
「うむ……」

俺は一つ深呼吸をし、真剣な顔で口を開く。

「犯人はレコン・キスタと言われる組織です」

「レコン・キスタ？」

「はい。アルビオンの貴族派と言う者達はご存知ですか？」

「う、うむ……。その情報は他の国まで広がっているのか？」

「いえ、大陸全土に進出しているミラグループだからこそ入手できる情報です。貴族派が現在、着々と数を増やし、レコン・キスタと言う組織を結成しています」

「だが、そこまで貴族は多くはないぞ？」

「始祖ブリミルを信教している国に、もし始祖と同じ虚無を扱える人間が現れたらどうなりますか？」

全員が息を飲む。

「ま、まさか」

「いえ。虚無を語る偽物です。アンドバリの指輪と言うものが水の精霊から盗まれました。一度水の精霊に会うことがありまして、その時に聞きました。これは、死者を蘇生する。いえ」

ウェールズをじっと見つめ、

「死者を思いのままに操ることが出来る指輪。それを虚無として、貴族派のリーダーが所持しています」

「……そんなっ!?!?!」

「事実です。それを蘇生だと偽り、虚無とするなら。今は王党派だとしても、いずれアチラにつく貴族が増えることは順当でしょう」

「そ、それで！ その指輪はだれが持っているのだ!?!」

俺はそこで首を振る。

「いえ、わかりません。巧妙に隠され、そこは我が情報網でも……」

すみません」

「そうか……いや。これだけでも十分だ。商人として大切な情報をありがとう」

「いえいえ、くれぐれもお気を付けるよう」

まあ、実際は知ってるけど　それじゃ面白くないだろ。  
今言ったら、つぶされちゃうしな。

「それと、あとひとつ」

「なんだ？」

「レコン・キスタを影から操っているのはガリア王ジョセフ。あれは無能と言われていますが。決してそんなことはありません」  
「……うむ」

その時、扉が開き、王が戻ってきた。

「すまぬな。探すのに手間取ってしまった。コレじゃ」

王が手に持った、オルゴールを渡してきた。

それを両手で、うやうやしく受け取る。

「それで、あの秘薬や羽は本当にもらってもいいのかな？」

「はい。約束でありますから。いずれ、同じものを作るように我々は努力いたしますので。いつまでも既存の物に頼らずに、自分たちで作り上げたいのです」

「ほう。まだ幼いのにしっかりしておるな！　ウェールズにも見習わしたいわい！」

「ち、父上！」

豪快に笑う国王。

「元気になりすぎじゃね？」

「でわ、私達はこれで」

「ふむ。もう遅いのじゃから、王宮に泊って行ってはどうじゃ？  
豪華にもてなすぞ？」

「いえ、実は……。お恥ずかしい話、急いでこちらに来てしまったので、明日までに仕上げなくてはならない書類が溜まっていて」

「おお、それはすまなかつたの。何かあれば力になるう」

「はい。その時はよろしくおねがいます。それでは、失礼いたします」

俺とミラは一礼し、扉の外に出た。



「あー、マジ肩凝った。王宮もう行きたくねー」

「でも、ご主人様の嘘連発すごいですね。よくあんなこと思いつきます。最後までずっと嘘つき続けるなんてあきれます。素敵です」

「どっちなんだよ……。あーでもな、レコン・キスタってのは本当だぞ?」

ミラが変な顔している。

「へ? あれ本当なんですか?」

「ああ、このままなら十中八九数年後に王党派が負けるな。ちなみに、主犯はオリバー・クロムウエル」

「さつき知らないって言いませんでしたっけ?」

「だって、それじゃ面白くないじゃん? レキン・コスタに乗っ取られて、アルビオンごと撃ち落としたりしたら面白そうだろ?」

俺はミラにニヤリと笑ってやる。

「すごい自己快楽主義ですねー」

「それ以外に生きる意味あるのか?」

「あ、愛とか?」

「あーそれね。それミックで0エキューで売ってるぞ?」

「あんなひきつった笑顔の愛いりませんよ! 早く注文しろポケッて心の声が聞こえますよ!」?」

「無償の愛」

「かつこよく言ってもいりませんよ!」  
「無償だから愛も無なんだよ。有償の愛なら結構大きいはず」  
「それ歓楽街の風俗とかじゃないですか!？」  
「めんどくさい女だなお前……」  
「う、うくー!」

おー、いつもの反論できない怒りが出た。

「あ、そう言えば、始祖のオルゴールと風のルビーって何なんですか?」

「あー、あれは虚無魔法使うときに必要な道具だ」

ぼかんとした顔をしているミラの鼻をつまんでやる。

「んー、何するんですか!? って言うかまた嘘ですか?」  
「いや、本当だぞ? 誰が虚無の使い手か知ってるから、今度連れに行くぞ。一家に一台虚無の使い手」

「伝説の大安売りですね」

「いや……あれは風俗に売ったら相当高く売れる」  
「売るんですか!？」

「いや、虚無は便利だから使うよ。俺の手駒として。決死隊」

「死に行かせるんですか!？ あーでも虚無って無敵ってイメー  
ジあるから殺せるか試してみたいですね」

「お前最近擦れてきたな……」

「誰の影響だと思ってるんですか!？ 人を何回も殺して! 一回  
ぐらい虚無も死ねばいいんです!」

なんか怒ってニルヴァーナ振り回してる少女。見てて少女だ。いや、少女だ。

「俺が蘇生しないと死につばなしだからな？ てかさ、お前始祖ブリミル信教してないんだな、この大陸の奴みんな信教してるが……」  
「え？ なんで死んだ人なんか信教するんですか？ 信教したって何もしてくれないじゃないですか？」

「ああ、お前は根っからの無信教家だよ」

「んー、でも目の前に居たら信じるかも。そこに居るってことを信じる」

「ああ、俺も目の前にいたら殺す。エレメンタルアース連射すれば勝てる気がするし」

「精霊のリフレクション壊しますからねあれー。何回それでわたしが死んだことか」

けらけら笑っているが、多分コイツは壊れてきたと思うぞ？

んー、ま。面白いからいいか。

コイツと二人で世界征服つてのも面白そうではあるな。

あ、あとティファニアは出来るだけ早く迎えに行こう。アイツも壊したい。

### 13 テファを駒としてゲット。

#### 習練

俺もミラも12歳になった。

事業的には、コンビニ業務も始まった。未だ、弁当屋って感じだけど。

24時間営業で、さまざまな物を販売している。

主に安価な弁当類と飲み物類が人気だ。

大きな工場で一気に作り、弁当にして売るので。

ただ、プラスチックなどがないので、相当数のステンレスっぽい弁当箱を作り、高めに値段を設定して売る。それを近くのコンビニに返したらお金が返ってくるという仕組みになっている。

事業が相当に広がって、最近思うことは効率。

レジは、全てが硬貨なので、かさばるからいらないとして。

電卓はほしい。平民は文字すら読めない人が多い。

それに無理やり計算を教えるのだ。しかも、相当早くしないと客を回しきれない。

ってことで、電卓がほしい。地球に行ったら電卓を買うことしよう。

座標チェックは宇宙規模の演算が可能なGFエデンにしても良かったが。

あとは次元を開く扉がほしい。そのために異世界扉が必要なのだ。そろそろテイファニア捕まえに行つて駒にしようかと思う。やはり、虚無の使い手を捕獲すれば政治的にも有利だろう。

ついでに、隣の領も買わせてもらった。正確には、破産させてブんどった。

影から手をまわして、不満の多かった平民をこちらに移住させたのだ。

貴族なんて、平民の税収がなければ破産するのだ。

うちの領は貴族とか平民なんてどうでもいいので。てか、俺にとつては全員どうでもいい。

ってことで、平民には人気が高い。

大きくなりすぎて、かなり貴族に目を付けられているが、そこは権力。

ミラグループに刃向つたらどうなるかわかるだろう。貴族専門のミラ金融も開設しているので、かなりの貴族を傘下にいれてある。

他商会や店にも、かなりの物資を供給している。

うちでしか作れない食材も多数に存在するので、供給を切らすわけにはいかないのだろう。

うちの薬や砂糖などで破産しかけている貴族が、ミラ系列の金融会社で保っているところも珍しくない。

王宮には、かなりの額の金額を握らせて黙らせている。ゲルマニア全貴族の献上金の、二分の一をミラグループが支払っているのだ。そのおかげで、ゲルマニアの国力も一気に増している。

触らぬ神に祟りなし。下手に突つくと自国にとって莫大な損害

をもたらずので、下手に手出しはしてこない。

最近は色々な場所のパーティーに呼ばれ、ブチ切れそうだ。  
「コネを作ろうと近づいてくるやつらがいすぎてもう嫌だ。」

んで、話がそれてたけど、今は全兵士の習練中だ。

ちなみに、うちの軍は影で『冥府の番人』と呼ばれている。  
訓練を見たルミア姫と王が決めたらしい。

ブレード 杖に魔力を纏わせて、ビームソードみたいにする簡単な魔法なのだが。

うちのブレードは属性を付加して使う。それで、兵士同士全力で戦って訓練するのだが。

普通に心臓つらぬいたり腕を切り裂いたりする。その惨劇から地獄へ導く兵士つてことで名前がついた。

500人以上がスクエアでエレメンタルラーズが使える、近接鍛錬も欠かしていない。

ミラは最近韻竜10体VSミラで訓練をしている。エレメンタルラーズ以外ならフレクションではじけるので、ニルヴァーナの杖に魔力を纏わせ、大剣のようにして、魔法も同時に使って相手をしている。

魔法を二つ同時に使える奴もないこともないらしいので、精霊魔法を使っているとはバレていない。

更に、ブレードに風を纏わせ不可視状態にしているので、対峙した時の恐怖は異常だろう。

人間姿で対人専用。竜姿で人外戦用と、韻竜で修業しているので、ほぼ無敵だろう。

冥府の番人の隊長となつて頑張っている。

オクタゴンスペルも完成し、公式で大陸初のオクタゴンスペルの使い手となった。

対峙したら確実に殺されるとのことで、『死神のミラ』の二つ名

がついた。

ミラは嫌らしく、俺に泣きながら抗議してきたが知らん。

韻竜10匹殺して、その上に足をかけて立っていたのを見たとき、俺も死神だと思った。

最近では韻竜からも怖がられている。

あと、風韻竜が全員こちらに来て、仕事を手伝ってくれている。

ミラグループのマークを付けている竜は襲われないし、怖がられないのだ。

貴族の手の者がちよっかいをかけてきたら、貴族を潰していたので、下手に手も出してこなくなつて治安も安定している。そもそも、冥府の番人が出ると、確実に殺されるから手出しできない。

そして、今は兵士全員VSミラを観戦している。

「どうよミルド。お前の娘は」

俺は隣のミルドに声をかける。

「……なんと申しましょうか……。娘が人外になったようで」

少し顔を青ざめながら小さな声で呟く。

ミラは魔法禁止。ブレード一本で鮮血の舞を踊っている。

兵士の腕や足が飛び、頭が飛んだりしている。

俺の使い魔つてことで唯一知られているGFフェニックスが片っ端から蘇生してゆく。それをミラが更に殺す。

兵士には圧倒的強者に出会ったときの状況。

ミラには戦場での立ち回りを教えるためにこの一方的な残虐殺戮ショーが行われている。

ミラも兵士も死に過ぎて、痛みを感じないらしい。痛みは身体の警告だ。

しかし、蘇生が出来るうちの兵士にとっては無意味なものでしかなく。

結果、死ぬ程の痛みでは死なない。と言う方程式が身体に擦り込まれ、痛みをシャットダウンしたのだ。

一日に100回以上死んでいたわけだから当たり前だ。

さて、そろそろ終わらせるか。

俺はアルテマウエポンを手に持ち、切っ先を兵士たちに向ける。

《メテオ》

虚空からそこそこの大きさの、真つ赤黒な隕石が炎を纏いながら地面に衝突し、大きな爆発を起こす。

爆炎で兵士は全員が身体ごと消滅し、ミラはリフレクションごと潰された。

直後にフェニックスが全員を蘇生する。

「ミラ、もういいぞ。兵士は全力演習を続けてくれ」

「……ありがとうございます！！ ミラ隊長！」「……」

兵士たちの声を聞きながら、ミラはこちらに走ってくる。

「ご主人様、あの終わりの合図やめませんか！？ 毎回あれだけは死ぬんですが！？」

「いや、最近お前だけ死なないから、死の感覚を忘れないように殺してあげてるんだ」

「む……。なんか納得行きませんが、確かに死の感覚は大事かもしません」



うむうむ。死を理解するのは大事だ。おかしい理解の仕方だが。隣のミルドを見ると、隕石の衝突で吹っ飛んで気絶していた。

「お父さんは弱いですねー、あれくらいで気絶なんて。気絶って言うのは無駄なんですよ？」

「故意に気絶を制御できるのはお前とうちの兵士くらいだ」

「ご主人様だつて出来るじゃないですか!？」

「そもそも、俺は気絶したことがない。そんな状態になるのは神と対峙した時くらいだ」

うむ。親父と対峙した時は神力だけで気絶しそうになってたしな。触れられたことすらないがな！ 息子に一度も触れない父親もスゲーよな。

「ま、それはいいが。行くところがあるから行くぞ？」

「あ、前に言つてた虚無の人迎えに行くんですか？ 早く殺しに行きましょう!」

「殺さねーよ！ どんだけ殺伐とした性格になつたんだお前!？」

「ご主人様の教育のせいであつたのですが？」

こちらをジトつとした目で見つめてくる。

めんどくさいから無視する。

「にしてもお前、力ついたのに全然筋肉つかなくないか？」

「それはですね、水の精霊を使って体内を弄っているんですよ。力自体は水の流れを変えて強めています。筋肉が付きすぎると胸がおきくなりませんか？」

「あんな残虐者でも見た目は気にするんだな……」

「当たり前です！ やわらかい身体こそが女の子なんです！ それ

に最近は何が成長して嬉しいです！ わたしの髪を一本でも切り取ったら全員皆殺しです！」

うん。確かにコイツはすごい。髪が腰まであるのに、髪の流れまで把握して戦闘をする。500人の兵士が相手でも、髪一本すら触れられていない。

「それで、何処行くんですか？」  
「アルビオンだ」

ミラは何か考えるような仕草をし、

「落としに？」  
「虚無だつて」

はあ……。なんでこんな殺伐とした性格になってしまったんだ…  
…。

## サウスゴータ地方

「ご主人様、こんな森の中に本当にいるんですか？」

「んー、確かサウスゴータ地方のウエステッドって村にいるはずなんですが……。ウエールズの奴図ったか？ 殺してやろうかあの糞王子」  
せつかく地図もらったのにもう三時間近く飛んでるぞ。

それから一時間程探したあたりで、小さな小屋を見つけた。

村じゃねーし！ つまり、原作より前のこの時期じゃまだ子供を預かってないから村になってないのか！

「あれですか？ なんか二人いますね？ 野営ですか？」

まあ、そう見えなくもない。実際は住んでいるんだが、あの年齢じゃ仕方ないだろう。

知識もないのに、森で得物を捕まえて焼いて食べてるんだろっ。

「降りるぞ」

「わかりました」

俺とミラは二人の近くに降りた。

「やあ、こんにちわ」

「「!?!?」」

俺のあいさつに、紫いろの髪の女が金髪女をかばうように前に出た。

「誰ですか!?!?」

おお! まだ、盗賊になってないから擦れてないのか。確か、マチルダだっけ。

「何歳ですか!?!?」

ミラお前何聞いてんだよ!?!?

「それより」

「何歳ですか!?!?」

有無を言わさずと言った感じのミラ。

「……18」

「12です」

紫が18。金髪が12。

「十二……ですって!? 12でその胸はありえませんか! なんてすかそれ!? 何を入れてるんですか! なんなんですかアナタはっ! Dですか! 12でBのわたしへのあてつけですか!? 殺しましょう! 早く! あふっ」

興奮している様子のミラにチョップをして黙らせる。

そもそも、ミラはすこしチョロまかしてBなのだ。実際Aだ。

「大丈夫です! いまから延命処置をしたらそのままです! いつかわたしが抜きさります!」

確かに抜けるかもしれん。ミラの母親Fくらいありそうだし。だが、金髪少女ティファニアが原作通りだと、Hまで行く。ついでに、ミラは14で延命処置させるから頑張っただ。

「落ち着けミラ。お前のせいで戸惑ってるだろ……」

「うくー! うくー! うきゃ」

とりあえず頭を叩いて黙らせた。

「あー、悪いな。俺は君たちを迎えに来た」

すごい疑わしい視線を向けてきた。

ってかね、ミラのせいで作戦が台無しだ。

「……あなた達はだれですか? 王宮の追っ手ですか?」

ああ、確か父親がエルフと子供作ったとかで王宮に追われてるん

だよな。ティファニアの親の大公は殺されたらしいし。

「いや。そもそも俺ゲルマニア貴族だし」

肩をすくめながら言ってる。

もうやけだな。ダメだったら殺そう。

「その貴族が何のようですか？」

「ああ、前にアルビオンでの建国式に出た時に、モード大公に個人的に頼まれたんだ」

「「えっ!?!」」

建国式には出たが、実際は知らない。挨拶くらいはしたけど、顔すら覚えていない。

「な、なんでゲルマニアの貴族の息子がアルビオンの建国式に？」

おお、あと一歩？

「それは」

「それはご主人様が最強だからです!」

……… 黙れミラ。相手が茫然としてるだろ？ 胸張って何言ってるんだ。

「まあ、ミラは無視して、俺がウイディス・ラ・リバルステイン・ヴィ・リヤステイ侯爵だからだ。息子じゃなくて俺が侯爵」

「わたしはご主人様の奴隷兼 プログラム完遂者。ついでに『冥府の番人』の隊長のミラ・ヴィ・リヤステイです」

「ヴィ・リヤステイってミラグループの代表の!?! それに『死神

のミラ』!？」

「おおー、死神のミラって此処まで……ミラは隣で泣きそうだが、  
ついでに プログラム 実験段階の強化プログラムだ。  
最強騎士育成プログラムでもある。あらゆる面での技術を叩きこ  
む拷問。」

「兵士にはミラでの実験を生かして、 プログラムを教えている。  
では痛みはもちろんのこと、戦闘での感情すら殺し、ただの殺  
戮者として一人で国ひとつ落とせるくらいの実力がある。」

「では貴族領一つくらいなら落とせるだろう。  
改良したプログラムは、使用人達にもさせている。平民なので、  
剣を使ってする修行だが、アイテムを使うことでメイジ一個師団程  
度なら殲滅出来るだろう。」

「証拠は!？」

「うーん、腕輪システム知ってる？ 社員の」

「ああ、有名だからな」

「ホレ」

「俺は蒼い宝石がついた腕輪を前に出す。」

「ミラも前に出す。」

「それは……代表の腕輪か……」

「まあ、告知してあるから知ってるか。アルビオンにだけ。アルビ  
オンとは仲がいいからこれでどこにでも出入り自由だ。」

「しかし、モード大公が何故貴方に？」

「モード大公は、いずれ隠しきれなくなって自分が処刑されること  
を知っていた。しかし、エルフとの子供でも、自分の愛した女性と

の子供。そして娘を愛していた。自分が死ねば誰がそれをかばえる？ アルビオンは全部敵になるだろう。例えばアルビオンから追手がきたとして、それを庇えるだけの権力がある他貴族はどこだ？ 王家の権力さえ撥ね退けられる貴族はだれだ？ 我がミラグループを置いて他にないだろう？」

俺の言葉に、マチルダはくやしそうに唇を噛みしめる。

「あのっ」

ティファニアが俺に声をかけてくる。

「わたしはハーフエルフなのですが……」

そう言って、自分の耳を見せてくる。

「テファっ!？」

「ごめんなさいマチルダ姉さん。でも、わたしのせいでマチルダ姉さんまで迷惑かけて……。それに、お金もないし、このままじゃ生きていけないと思うの」

マチルダが原作通り盗賊にならない限りは無理だろうな。

「エルフが何だ？ てか、エルフの何がいけないんだ？」

俺の言葉に二人が絶句した。

この世界では、エルフが精霊魔法 先住魔法を使うことから恐怖の対象にされている。



「先住魔法を」

「ああ、精霊魔法のことか？」

俺は精霊魔法を使って無詠唱で炎を手に這わせる。

「「えっ!?!」」

「精霊魔法ってのは、精霊との感応力、仲介人さえいれば使うことが出来る。ミラも仕えるぞ。そもそも、君は使えないだろう？ 精霊が寄ってきていないからな。契約者は精霊に好かれる。勝手に寄ってくるんだ」

俺とミラは火や水を周りに浮かばせながら手で弄ぶ。

「キレイ……」

そんなことを言うティファニアを見て、俺は苦笑する。

「君もハーフェルフなら感応力はあるはずだ」

俺は精霊に命令して、無色状態の精霊を光らせる。

「それは？」

どうやら見えているようだ。

「そちらの紫の髪の少女は、金髪の子の前に浮かんでいる精霊が見えるかい？」

「マチルダですっ！ あなたよりずいぶん年上でしょう!?! 何かあるんですか？ なにもありませんが」

その答えを聞き、ティファニアは目を見開いてマチルダを見る。

「ティファニアです。テファでもいいです。マチルダ姉さん見えな  
いんですか？」

「何を？」

マチルダは不思議そうに首をかしげる。

「それが見えるってことは精霊との感応力があるってことだ」

俺はテファの額に人差し指を突き付ける。

即座にマチルダが杖を俺に向けたが、一瞬にしてミラに地面に抑  
え込まれ、首にブレードを突き付けられる。

「精霊よ。この者に加護を与えたまえ。契約者ウィディス・ラ・リ  
バルステイン・ヴィ・リヤステイが命じる」

『いいよ』

『うんうんー』

実際こんなことする必要はないのだ。

ただ、段取りって大事だよな？

精霊達が、テファの中に入り込む。

テファは瞑っていた目をみゆつくりと開き。目を見開く。

「これが……精霊？」

「ああ」

テファが精霊を指で弄ぶ。

マチルダは何が起きているかわからないようだ。はたから見たら私妖精さんが見えるのって感じたからな。

「キレイ……。こんなキレイなものが今まで見えなかったなんて」

呆けたようなテファ。

「精霊にお願いして水を纏わせてみな」

俺は手を前にだし、周りに水の紐を纏わせる。

同じようにテファが前に手を出し、水を纏わせる。

「……出来た」

「ああ、子供が住むにはこの世界は厳しすぎるんだ。自衛の手段が必要だろ。俺は生まれた瞬間から捨てられた。だから、自衛が必要だった。特に、君達みたいなかわいい子だと危ないだろ？」

俺はキレイにほほ笑んでやる。

二人が真っ赤になるのを確認し、見えないようにニヤリと笑う。

ああ、本当にかわいいよ。かわいい駒だ。優秀な駒になってくれよ？

そして、死ぬまでせいぜい俺の役に立ってくれ。

「ご主人様、わたしもかわいいですか？　かわいいですか？」

「お前はただの貧乳娘だ」

「がーん！」

実際ミラはかなりの美人の類に入るだろう。キレイな金髪に大きな瞳。年をますごとに美人になってゆく。だからこそ14歳で延命処置。俺は16歳程度で延命処置。テファも14歳で延命処置をす

るつもりだ。

「テファ。精霊魔法に姿を変える魔法がある。それで耳を人間の物にしたほうがいい。いつでも戻せるしな」

テファは一度頷き。しばらくすると、耳が人間のものになる。

「テファっ!?!」

「マチルダ姉さん、これで街にもいけるわ」

そう言って、マチルダにはほほ笑む。

「……そうね」

娘の旅立ちを見るようなマチルダを無視し、俺は前に手を出す。

「?」「?」

「一緒に来ないか? 俺なら最大限の保護が出来ると思うが?」

「……」「」

しばらく黙っていたが、テファが俺の手の上に、自分の手を置いた。

「よかったじゃないテファ! これで幸せになれるね! さて、わたしは帰ろうかな」

「違うぞ?」

「え?」

俺はマチルダを見つめる。

「俺は最初に“君達”を迎えに来たと言ったんだ。マチルダ。君も一緒だ」

「……………いいの？」

「ああ」

「魔法だつてラインだし。精霊は見えないし」

「うちの兵士はほぼドットだったが、三年で『冥府の番人』と呼ばれる、スクエアメジになっている。俺にはそこまでにする方法がある」

なつてもらわないと困る。駒にな。

「……………う……………ありがとう……………とう」

おお、原作ではありえない擦れてないマチルダんの泣き顔！ テファまでもらい泣きしてるし！

てか、ミラ！ おまえどさくさにまぎれて何で俺の手の上に手置いてる。円陣みたいになつてるだろ！？

「さて、決まつたところで行くぞ」

俺は三人を宙に浮かせる。

「え？ わっ！」

「系統魔法と違って、精霊魔法は精神力の消費がない。それがエルフを脅威とする理由でもある。テファも慣れれば簡単に空を飛べるようになるからな。さて行くこつ」

そのまま空高く飛翔する。

「ま、まっってくださいよー！」

慌ててミラも飛翔してくる。  
さて、計画進行中。

上空。

「んーでさ。やっぱり自衛は必要なわけなんだよ。一人で出歩くに  
しても」

「はあ」

「ってわけで、マチルダにはうちの兵士と同じ プログラムを受け

てもらおう」

「？」

不思議そうなマチルダに教えてやる。

「そ。一年で全属性スクエアクラスにするプログラム。『冥府の番人』が全員修めたプログラムだ」

「一年で……」

ふむ。やはりメイジとしてはスクエアにあこがれるだろう。

「それってミラちゃんと同じ？」

「いや、ミラは プログラムだ。最低条件が系統と精霊魔法が使えること。 プログラム以上の習練を積み、更に精霊魔法、剣の扱い。戦闘での直感を成長させるプログラム。廃人になる限界が プログラムだ。ミラはなんだかんだ言っただけで壊れてるからな」

「ぶー、ひどいです！」

テファとマチルダがミラを見る。

「こいつ最初にアルビオン落そうって言ったからな。そして、それを実行出来るのが プログラム完遂者だ」

俺がミラにジトつとした目を向ける。

テファとマチルダは目を見張る。

「ちなみに、 プログラムを完遂すると、少し感情が破壊される。その分強いメイジにはなるけどな。ついでに、マチルダには秘書としてのプログラムも受けてもらう。給金は王宮近衛騎士もビックリな金額払うから」

「はい。それはいいのですが、テファは？」

マチルダが不安そうにテファを見る。

「テファは系統魔法が使えないだろ？」

「……はい。使えるのは一つと、コモンマジックです」

「忘却か？」

「！？」

二人が何で知っているのか。と驚く。

「それな、系統が違うんだよ」

「系統？」

「虚無って言う系統に忘却と言う魔法がある」

「え？ ええっ！？」

マチルダは驚きに声をあげ、テファはポカンとして口を開けている。

「それって伝説の系統よね！？」

ちよい静かにしろマチルダ！

「うむ。ってことで、テファには早口を学んでもらう」

「はい？」

意味がわからなく、二人はポケっとした顔をこちらに向ける。

「虚無の魔法つてのは詠唱が5分近くある。そんなのあり得ないだろ？ だから早口。エレメンタルラーズって魔法あるだろ？ ミラ



がオクタゴンクラスになったスペル。あれって文字数500文字なんだよ。そんなの一分くらいかかるだろ？ だが、そんな魔法役に立たない。だからこそ、早口言葉が必要なんだ。ちよいミラやってくれ」

「わかった」

マチルダとテファがミラを見つめる。

ミラは杖を飛翔している前方に向け、詠唱を開始する。  
二秒くらいか。

### 《エレメンタルラース》

前方で300メートルくらいの白い爆発が起こる。風圧は精霊魔法で排除しておく。

テファとマチルダはあまりの威力と速さに言葉を失う。

「と、まあ。これが早口だ。マチルダのプログラムにも入っている」

「って、待ってください！ 早口ってレベルじゃないですよ!？」

「そうだな、全ての構造を脳内で構築して、圧縮して言葉にするから。すでに人間には聞き取れない言葉だな。それを人間が発すんだからすごいよな」

二人が絶句していた。

「んで、テファには5分の詠唱を10秒以内で詠唱してもらおうとこるまでやってもらおう。ついでにこれはプレゼントだ」

俺は二本の杖を取り出し、二人に渡す。

蒼い装飾がされた杖だ。

杖の先端が竜の羽を広げたようになっており、その上に細かな細工がされた竜が対になってついでおり。ハートのようになっていて、その中央に蒼い宝石がついている。

「……これは？」

「ご主人様ーわたしそっちの方がいいんですがー」

黙れミラ。ミラのほうがレアなんだぞ？

「アブラクサスって杖だ。ついでに、この指輪もやるよ」

アブラクサス。改造したミラのニルヴァーナと一緒に、ダメージ限界突破、MP消費1、魔法ブースト、貫通。

ダメージ限界と言うのは、この世界にスクエアスperlまでしかなかったのもそれが原因だ。一定以上の力は出せないようになっていく。それを無視して、スクエアでも強力な力を使えるようになる。貫通とはその名の通り、障害物を無視し、魔法の届く範囲を殲滅する。

そして、俺は二つの指輪を渡す。

「それは神秘の指輪。ミラも俺も付けてるんだけどな。意味はわからなくていいけど、体力限界突破、全状態異常無効、速度増加、自動回復だ。ミラグループでも公開してない非売品だ。ミラが一瞬で移動しているように見えるのは、自己鍛錬とその指輪のおかげもある」

二人はポカンと口を開けている。

「い、いらないよ！ わたしたちそんなお金ないし！」

「いや。金はいらない。だってお前ら俺の養子になってもらっし」

「「はい？」」

「んー、はつきり言っちゃうと、社会的地位の確保だ。俺の養子になれば、ほかは手を出せなくなるからな。ちなみにミラは養子第一号だ」

俺はミラの方を見る。

「お姉ちゃんと呼んでください！」

ミラがない胸を張っているが無視しよう。

「養子って……、わたしのほうが年齢上なんだけど……？」

「気にするな。うちの家系に入るってだけだ。ミラグループ系列の物はどこに行ったってタダになるし、お得だ。大陸全土に進出してるしな。ってことで、マチルダ・ヴィ・リヤステイとティファニア・ヴィ・リヤステイと名乗れ」

二人は顔を見合わせ、こちらを向いて口を開く。

「いいのですか？ わたしたちみたいな者を、大陸一の家系に入れて？」

テファアが上目づかいで見ってくる。

「別にいい」

「そんなことして、乗っ取っちゃうかもしれないわよ？」

マチルダが皮肉っぽく俺に言うが、

「乗っ取れるものなら乗っ取ればいい。ミラグループって全て俺が指示してやらせてるから、俺の支持率相当高いぞ？ 最高機密は俺しか知らないし。ミラだって知らない」

「そうなんですよねー。全然教えてくれないんです」  
「最高機密？」

テファが不思議そうに、コテンと首を傾げる。

「作り方は教えないけど、あと他言無用な。死人を蘇生する薬。心臓が動いている限り一瞬で身体を全快状態まで持つて行く薬。病気だろうと何だろうと治せる薬。これを使うことで俺の軍は最強と言われるようになった」

二人が絶句している。

「ちなみに非売品で、俺にしか作れない。兵士と使用人にしか使わない。その超劣化版が市場に流してるハイポーションだ」

「あの数々の貴族を没落させている悪魔の薬が劣化品……？」

「失礼な！ 俺は商売としてやっているんだ。勝手に買いまくって没落してるんだから仕方ないだろ？ ちゃんと金融で返してるし。更に大金にして返してもらってるけどな」

「悪魔……」

なんてひどいこと言うんだコイツ！

と、そういえば……。

俺は、始祖のオルゴールと風のルビーを取り出す。

「テファにコレやるよ」

二つを手渡すと、テファの目が見開かれる。

「こ、これって。一度見たことがありますけど、アルビオン王家に伝わる国宝……」

おい。なんで盗んだんですか？ みたいな顔してるんだ！

「王を助けた対価としてもらった。素直に譲ってくれてな……あれはもう強奪に近いですよ？」

ミラが変な事を言っているが気にしない。

「風のルビーを付けて、始祖のオルゴールを開けてくれ」  
「はい」

テファは指に指輪を付け、始祖のオルゴールを開ける。  
はつきり言っただけには何も聞こえないが。  
テファは瞼を閉じる。

5分くらい経ち、瞳を開く。

「どうだった？」

テファはこちらを向き、ほほ笑む。

「はい。どうやらわたしは虚無の担い手らしいです」

その言葉にマチルダが目を見開く。

「何か呪文覚えたか？」

「はい。『デイスペル』と『世界扉』を。これ以上はこのオルゴールじゃダメみたいですね。他の三つの始祖の秘宝を見るとのこと」

そう言つて、俺にオルゴールを返してくれる。

異世界扉じゃなくて世界扉だったか。記憶違いか。だが、これで地球に行ける。

「ふむ。他の始祖の秘宝はトリスティン、ガリア、ロマリアか。見ればいいだけだし、今度忍び込むか？ 盗むわけじゃないし。テファが精霊使つて不可視になれるようになったらだけど」

二人はキョトンとしているが。

「ご主人様。それだったらいつそ、国ごと潰しちゃえば」  
「お前は思考が殺伐とし過ぎている」

とりあえず、世界扉が手に入ったからいいか。

待ってるよ……俺のハッピーライフ！

とりあえず俺の屋敷だけでもすごしやすくしないと。コタツがほしい。

そして何よりコーラ。

14 地球で、、、(前書き)

わけわからなくなってきました。

まあ、OK！ 自己満足小説だし！

だから公開もしてないわけだし！

## 14 地球で、

### 書室

結果から言おう。マチルダめちやくちや有能だった。  
新規の物を創造するちからはないけど、運営する分には有能だった。

ってことで、俺は三ヶ月間マチルダを調教し、後のことを任せて旅に出ようと思う。

「ってことでミルド。俺は一年程旅に出る」

「どう言うわけですか……？」

冷やかな目を俺に向けてくるミルド。

「一応養女のマチルダがいるから、俺の代わりにパーティーやらなんやらうざったいのは行かせてくれ。運営は単純作業だし引き継ぎ出来るだろ？ 秘薬は大量に地下室に作ってあるから、それを出荷していけば足りる。俺はやらなければいけないことがあるからな。新しい店舗はいいけど、新しい事業はするなよ？ 一応草案はあるけど、する必要もないだろ？ ちよつと東方に行ってくるから」

「は？」

東方ってのは、エルフの聖地を越えなければいけないのだ。



エルフは凶暴とされているので東方との交流はない。

「あ、前にも行ったんだけど、俺の精神力なら空飛んで行けるんだよ。危険もないし。あっちの文化はすごいからな、持ち帰ってくる」「そうなのですか……。わかりました。くれぐれもお気をつけください。ウィデイス様がお亡くなりになられたらどれ程の人が悲しむか……」

「いやいや、悲しまないと思うよ？ だって、俺自分勝手にしてるだけだし。」

「ってことで、ミラとテファ連れてくいな」

そう言って、俺は部屋を出る。

上空

「ご主人様、此処はどこですか」  
「此処は空だ」

うん。空だ。

「でも、兄さん。地面がありますよ？」

テファは俺のことを兄さんと呼ぶ。俺は父親なのだが、年齢が同じなので兄さんになったのだ。

ミラは姉を主張するが、テファには妹として扱われている。

「此処は俺の使い魔の上だ」

「へ？」

地面は見える範囲全てが蒼い。終わりが見えないような場所だ。下からこのGFは見えないので、便利っちゃ便利だ。

「俺の使い魔の一つエデン。上空からハルケギニアごと殲滅することだって出来る一番デカイ使い魔だ。エデンってのは楽園ってことだな。まあ、楽園には見えないだろうが、此処から攻撃すれば、上から見る分には残虐で“楽”しい“園”だな」

二人は実感が無いのか、わからないようだ。別にいいけどね。

「テファ。世界扉使えるか？」  
「はい」

今現在、ミラとテファは杖を持っていない。精霊の補助があるので、杖は必要ないのだ。誰も見てないしね。

「エデン、俺たちの前の空間を、地球との一番次元の狭間が薄い部分に変更」

俺たちの前方の空間がすこし歪む。此処からはテファに扉を開けてもらうしかない。

「テファ頼む」  
「はい！」

テファは詠唱を始める。まだ早口は出来ないので、ゆっくりと紡ぐ。

それから10分後。

「ご主人様、長いですね」  
「ああ」

長いな。

「何ですか？」

「囃んで最初から詠唱になったりしてるからだ」

そろそろ疲れてきた。

30分後

「で、出来ました！」

やっと出来た……。

「テファは向こうに行ってる間早口の練習だ」

「はい……」

あれだけ囃んでたら意味がない。

その甲斐あって、俺たちの目の前に木々が並んでいる。

「んじゃ行くぞ」

「はい」

「楽しみですねー」

さてさて、何しようかな。

地球

「見てくださいご主人様！ この世界にもミックが！」  
それはミックだ。

「兄さん！ あっちにミラ楽亭が！」  
安楽亭だ。

「とりあえず、金が必要だ。お前たちは言葉が通じないから黙ってるよ?」

二人は素直にうなずいてくれる。

「でもご主人様。どうやってお金稼ぐんですか?」

「まず。金持ちを殺し、精霊魔法でなり変わる!」

「なんて素晴らしいアイディアですか!」

ミラは喜んでいるが、プログラムを受けていないテファは青ざめる。

仕方がない。

「テファ。よく聞け」

キョトンとして俺の言葉に耳を傾ける。

俺は、テファの肩に手を置き、目を見つめながら言葉を発する。

「この世界の人間はな。実は全員魔物なんだ。この世界では魔物が姿を変えることが出来る。だから、俺達が魔物じゃないと分かれば襲ってくる。そこで、俺は考えるわけだ。魔物の長に化ければ、安心だと。どうだ?」

テファは顔を青ざめさせ、俺の服の裾を掴む。

「わかってくれてありがとうテファ。俺が守ってやるからなテファ。ずっとそばに居るよ?」

涙目で俺を見つめ、こくこくとうなずく。

これでOK。

ミラがジトつとした目で見てくるがどうでもいい。  
俺達は不可視状態になり、飛翔する。  
目的地を目指して。

## アラブ

結局俺は、アラブの石油王を殺してなり変わった。  
石油ならアメリカのロックフェラーのほうが良いだろう？ と思  
うかもしれないが、こちらの方が都合がいいのだ。  
妻は邪魔だったので、殺してテファになり変わってもらった。

ミラは養子とした。二人は喋れないが、ミラは初めから喋れない  
つてことにして、テファの方は俺がフォローした。

ついでに、どうせ金さえ手に入れば潰れてもいいので、結構自由  
に動き回っている。

一年の期間なので、最初に発注を済ませてある。

まずは、広大な森を買い、そこに金に物を言わせて超大な屋敷を  
発注した。噴水付きだ。

庭にはキレイに木が並び、一面が芝生。まだ出来てないから、一  
応予定ではだ。一部屋一部屋に最新式の設備を作る。向こうに持っ  
て行ったら、上地下水は繋がればいいだろう。

後は、設備を使う為に、ソーラー発電一式と風力発電の施設と同  
じものを作ってもらうことにした。ソーラー発電は近くの山にでも  
取り付ければいいだろう。

どうせ屋敷でしか使わないから十分だ。

更に、BMWの大型バイクを金を握らせて改造済みってことで1  
00台注文した。

せつかくのアラブ石油王。此処の施設も持って行こうと思うのだ。  
あっちでも、どっかの領地に石油が掘れるところがあるかもしれ  
ない。買い取ればいいだろう。

ついでに、最高級な電卓を10万個日本に発注した。

全て金に物を言わせて急ピッチで用意してもらう。

屋敷だけでも数十兆円かかったせいで金が無くなり、仕方なくイ  
ンゴットを作った。

買い取価格が銘入りで1kg3500万だったので、違う場所か  
ら一つ買い取、自分で作ったものを本物に似るように作っていった。  
それを大量に作り、数十兆円稼いだ。

余った分は、また来るかもしれないので、スイス銀行に偽名で名  
義を作り、預けておいた。

後は、向こうでコンビニに増やす品、作れそうなものを適当に買



った。

業務用のレーザー印刷機を大量に買った。パソコンとデジカメも大量に買った。

商売する上で、写真が無いのはつらすぎたのだ。

パソコン以外はだれでも使えるように俺が教えないとな。紙も大量に買ったけどあっちで同じもの作れるかは不安。

こっちにしかない野菜や果物の苗も買ったので、あっちでも作れるだろう。

あとは、技術書。図書館まるまるって感じで買い取ったのだ。情報は武器だ。

世界扉になにか制限があるかもしれないので、出来るだけ一回で買い占めた。

あとはコーラだ。

今夜辺り忍び込もう。

コカ・コーラ社<アメリカにて>

とりあえずわかったことを言おう。

まずコーラ。必要なものが多すぎる。どう頑張ってもあつちの奴らじゃ作れない。

思ったんだが、コカ・コーラ社も何年もかかって作ったのだ。

あつちでも開発班が頑張れば出来るのではないか。

それまでは、大量に盗んだこのコーラでなんとかかなるとおもう。これをあつちで渡して、似た味にしてもらえばいいかもしれない。ついでに今は、警報がめちゃくちゃ鳴っている。

姿を消して入って、リストを脅して手に入れたのだ。殺せばよかった……。

情けをかけた結果がこれだよ。

偏在って言う自分の分身を生み出せる魔法で分身を作り、そいつが今は追われている。

ゴメンヨアメリカ大統領。あんたの姿にしちまったよ。

その間に俺は姿を消して悠々と外に出た。

そして、コカ・コーラ社を見上げる。

工場だけでも貰って行こうかな……。

とりあえず戻るか。

## 自室

「幸せってなんだろう」

俺はコーラを飲みながらつぶやいた。

「またご主人様が黄昏始めました……」

俺は机をたたく。

「だってよう！ 考えてみる！ コーラは作れない！ インターネットも出来ない！ どうすりゃいいんだ！」

バンバンと叩きながら叫ぶ。

「……それコーラですよね？」

「ついでに目の前にいったーねっとなって言うのが映る箱もあるよね」

二人の言葉を無視し、俺はコーラを一気に飲み、ゲップをする。

「ちゃうわ！ 今はいいんだが、あつちに戻った時に何も無いんだよ」

「それは仕方ないですよ。こっちの文明に追い付くのに何千年かかるか。一生追いつかないかも」

そうなんだよなー、あつちには魔法って便利なものがあるから科学が進まない。

いつそこっちの職人を連れていくか？ 洗脳魔法なんてないから無理だけど。

「いつそ、あつちの未開拓地全て修めるか。ミラ王国作ったりしたら面白いかも。俺は飯とかはどうでもいいんだが、退屈が一番嫌いだ」

「なら、ご主人様が裏から操って、国と国をぶつけて、リアル戦争ごっこしてゲームすれば楽しいかもですよ？」

「んー、それもいまいちだ。自分で見れないからな」

唯一の希望はゼロの使い魔本篇だ。まず、主人公が持つデルフリ

ンガーを俺が先に確保したら才人は死ぬのか実験。

ルイズが手に入れるはずの始祖の祈祷書を俺が奪ったらあいつはどうなるのか。

そういうのが楽しいな。人間観察するのは割と好きだ。特に、自分のせいで周りが混乱するのは楽しい。

「てか思うんだよ。自慢じゃないが、うちの軍ってそれだけで大陸落とせるだろ？ つまり、俺が大陸修めるなんて簡単に出来過ぎてつまらないんだよ」

「戦争している人たちに喧嘩売ってますよね……」

「でもさ、実際考えてみる。俺一人で大陸落とせそうだぞ？」

「出来るでしょうね……」

そうなんだよな……。出来ることをしたってつまらないんだ。

手が届かないことをしてこそ意味があるんだ。

前はそれが、コーラだっただけ。まあ、実際大好きなんだけどさ。親父殺すにしても、神になる方法なんて知らないし。

いっそ、こつちから島ごと持って行って、あつちで戦争するか。多分ハルケギニア蹂躪されて終了。

「って、テファは何やってんだ？」

さっきから黙ってこちらに背を向けていた。

「え？ 世界を覗いてたんですよ」

「他の世界？」

俺は近づいて見る。

小さな隙間が出来ており、中で人が動いていた。まるでテレビだな。

「一応あつちから見えないようにしてあります」

「ふむ。ナノマシンか」

「え？」

「いや、ナノマシンとか言ってるぞ。世界雇って未来にも繋げられるんだな」

ナノマシン……ねえ。いつそ、たくさんカメラ作って、国に送り込んでみるか？ 悪役っぽいけど面白そうだ。

「あれ？ てかさ、アレ誰だ？」

俺は一人の人を指差す。

「兄さんですね」

ミラが俺の隣から覗きこむ。

「ほんとですねー、ご主人様あの服似合いませんよー」

ミラがくすくす笑ってるけど、そんなことはどうでもいい。

「だから、なんで俺が居るんだってことだよ！ それに隣見る！」

俺は隣を指さす。

「あ、テファ胸おつきい……。わたし抜けるんでしょうか」

ミラが涙目で俺にすがすがそんなことはいいんだって！

「ミラちゃんもいますよ？ ほら、あそこで膝を抱えています」

テファが指を指したところにはミラが涙目で膝を抱えて居た。なんで膝抱えてるんだあいつ。

「テファ、これどこだ？」

「えーっと、ハルケギニアのはずですが？」

「だが、地球より科学進んでるだろ？ ホムンクルスみたいなものいるし」

「一応未来っぽいですね」

「何年だ？」

「3万年後だ」

「は？」

俺はミラの方を向く。

ミラはぶんぶんと首を横に振る。

テファの方に顔を向けると、首を振っている。

そこで、窓の中をみると、俺似がこちらを向いている。

「テファ、精霊使って見えなくしてる？」

「はい。しているはずですが？」

「精霊か……。なつかしいな。そんな時代も在ったな」

また俺似が会話に割り込んでくる。確実にこちらが見えているだろう。

「なあ、お前たちはなんだ？」

テファ似がコチラを見、人差し指を曲げてくちびるに付け、くすくすと笑う。

「わたし達はあなた達ですよ？」

全然意味がわからん……。

「そんなところで見てないでコチラに来ればいい」

なんだか行きたくないな……。  
ミラ似なんてずっと膝抱えてるし。

《マスターシステム：コントロールタイプ3：プロテクション3デ  
リート》

は？ いきなり、目の前の窓が大きくなり、俺とテファとミラはそのまま落ちた。精霊魔法を使おうにも精霊が何故か周りから消えていた。

なんだコレ……。

俺は影からアルテマウエポンを取り出し、いきなり俺似に叩きつける。

当たる瞬間、俺似はニヤリと笑う。

《マスタープログラム：オート》

俺の斬撃は見えない何かに防がれ、アルテマウエポンがポリゴンのように粉々になり消え去った。消えたわけではなく、俺の影の中に戻ったようだ……。。

「はあ……。ったく。コイツ本当に俺か？ もっとこう状況を掴んで行動して無かったか？」



「ご主人様はそんなでしたよ……」

俺似がミラ似の方を振り返って言うと、ミラ似がジトつとした目を向けてつぶやく。

間違いない。アレはミラだ！ あの目はそつだ。

「てか、お前も昨晚相手しなかったくらいで拗ねるなよ」

「違いますよ！ その前もテファでした！ テファがその厭らしい胸で誘うから！ ぐすっ……」

「わ、わたしはそんな……」

何だろっコレ……。

「わたし今しゃがんでるからわかるんですが……」

ミラ似がテファを冷やかな目で見つめながら、

「何でパンツ穿いてないんですか……？」

「それはこのまま……」

ミラ似の目つきが鋭くなる。

「兄さんにしてもらおうかなって……？」

「うくー！ うくー！ うくくー！」

おお！ ミラ似の怒りがミラよりレベルアップしてる！  
テファ似が俺似に抱きついてるし……。

「ちゃんちゃん」

ちっちゃいこっちのミラが悶えている。  
テファは真っ赤になってうつつむいている。

「あー、ちょっとお前ら待て。昔の俺が羨ましがってるから」  
そう言っつて俺の方を向くが、首を傾げる。

「あれ？ そつか。この時の俺は自分以外劣等種って言っつてたっけ。  
ミラとテファに手出してないじゃん！ そかさか」  
「「ええっ!？」」

おい。何でミラ似とテファ似驚いてんだよ。

「昔のわたし。注意しなさい。後から出てきたのにこの胸モンスター  
Iがご主人様の初めて奪うから。しかも夜這いで」  
「ま、まだ覚えてたんですか!？」  
「一生忘れないです、うくくー!」

とりあえず無視しよう。こっちのミラが親の敵の様な眼でテファ  
睨んでるし。

「でさ。アンタ達はなんで俺達をこっちに連れてきたんだ」  
向こうの三人がコチラを見る。

「ああ。それはわかってたからな。記憶にも懐かしい。地球に居た  
らいきなりだっただろ？ まず、お前達このままじゃ死ぬぞ？」  
「「「は?」「」」

わけがわからない。

「まあ、あと後わかったことなだけどさ。まあ、三番目の原因から順番に。一つは脳死。次が異分子で。最後に糞ヤロウのせいで」

脳死つてのはわかるが、人間の脳はどんなに頑張っても250年しか生きられない。だが、ジーちゃんみたいに方法を探せば……。

「考えてることだいたい分けるけどさ。まず、ジーちゃんな。アレ人間じゃないぞ？」

「は？」

「んー、わかりやすく言うと、上位精霊の集まりだ。精霊は生まれで消えるからな。あれは、一つの精霊の核に精霊が集まって人の姿を作っただけ。それを延命で維持しようとしたが結局消えた」

待てよ……。確か精霊は死んだとは言ってない。「消えた」って言うてた。居なくなつたと。

「まあ、延命処置は出来るけどな。このままじゃ、そこまで生きられない。異分子扱いされてるし」

「異分子？」

「ああ、お前の魂は神だろ？ しかも他の星の神だ。異分子扱いもされるだろ？ あとな、此処が世界宝石だと思ってるなら違うぞ？ 此処は全く違う世界だ。太陽系ですらない。全く違う法則で動いている世界だ。月が二つあってどうやって重力が働いてるんだ？

あの月の近さだと、引力で月同士がぶつかるし、星に落ちるのも時間の問題だ。答えは簡単。法則が全く違う。んで、異分子として魂を消そうとする。ミラはお前の近くにすぎたから、神の魂に感化されて既に異分子認定されているだろう。テファはまだ大丈夫だが、これ以上いたらキツイかもな」

は？ 俺は毎回世界宝玉だと思つて人間なんて作りものだと思つてたんだぞ？ いくら死んだつてまた作り直せばいいと。生きてるのか。コイツら……。そもそも、俺が異分子。それが無理やり割り込んで人間と成っているのか。

「そうですねー、ご主人様は神様なんですなー、納得です」

うんうんとか頷いているミラ。

うん。感化されてるな。まあ、この場合の感化とは違つたろうな。どうも人間超えてると思つたわ。ミラの存在が俺にとつて都合よすぎると思つたわ。これつて神の願望具現化能力に近いじゃん。俺、完全に人間ではなかつたんだな、だからこそ排除されると。

「で、三つめだが、これは教えない。そつちの方が面白いじゃん。まあ、一言言えば、もし奴に殺されて死んだら蘇生も出来ないつてくらいだな。ああ、お前はもとからこの世界で死んだらアイテム使つても蘇生出来ないからな？ だつて、肉体があるからこの世界に留まつてられるけど、なくなつたら速攻で別の世界に飛ばされるし。世界に嫌われてるから。奴の場合ミラとテファも蘇生出来ないから。三つ目の糞野郎は魂まで消し去るからな。言つとくが、別に親父が来るわけじゃないぞ？」

魂まで消せるつて言うのは親父じゃなくても、神に連なるものだろう。

「つてことで！ お前にプレゼントがある。系統魔法や精霊魔法なんてもんじゃ勝てないからな。とりあえず」

《マスターコード：エラー1・2・3：ストップ》

俺の身体が全く動かなくなる、多分息すらしていない。脳も動いていないんじゃないか？ 何故思考出来るんだ。

「あー、三人は今動けないから。魂で思考してるって感じ？ ってわけで」

目の前の俺は、自分の腕に注射器を突き刺して、血を抜く。隣では同じように、二人似も血を抜いている。

「じゃ、行くぞ？ 俺なら馴染むだろ。三万年前俺もやられたし」

そう言い、目の前の俺は俺に、隣の奴らは自分の過去に血液を注入する。

全ての血液を俺の中に入れて、針を抜く。それと同時に。俺似は離れる。

「少ししたら動けるようになるから。あと、お前ら何歳がいい？ 今でもう一生成長しないから此処で決める。口くらいは動かせるだろ」

「「18」」

「ミラは14で」

「「ぐすん……」」

二人のミラはうなだれる。

にしても、多分ナノマシンでも入れられたのだろう……。未来の俺勝手だな。俺もかしれんが。

「こうやって、わたしはこの年になってしまったんですね……一生「カップのままなんです……」」

ミラ似がまた膝を抱え込んでしまった。

ミラ似はギリギリ感じて感ずた。チヨロまかしてるかもしれない。

「んで、俺が16でテファ14」

「ああ、これでまた14なのに化け物Fが生まれるんですね……。昔のわたしも可哀そうですね。ご主人様の二番目になるんですから……」

ミラ似……それは自傷行為だ。

「んじゃ、それで行くわ。まあ、寝て起きたら変わってると思うぞ。ついでに、脳死がなくなった、もうお前ら人間じゃないし。回復アイテム何て使わないでも、細胞すら残ってればそこから復元するし。あとコレ」

直径三センチくらいのカプセルだ。中には液体が入っている。

「これは、ネズミ式算で増える空气中散布型ナノマシンだ。この世界にあるやつだな。まあ、この世界でのナノマシンは許容量いっぱいだから、増殖止めたが。これをハルケギニアで使えば、お前たちを排除する。世界を排除するってことになるから世界も排除が出来る。なくなる」

「なんでだ？」

「これは止めるまで永遠に増え続ける。つまり、マスター制限を持つ俺。つまりお前を殺せば全てを侵食して世界を食いつぶす。だから、脅して世界を味方につけるってことだ。世界くらいは味方についてくれないと糞野郎には勝てないぞ。おまえビツクリするぞアイツみたら。めっちゃくちゃすぎるからな」

俺似は苦笑しているが、テファ似とミラ似は震えている。ミラが

震えるってどれだけ怖いんだ……。

「で、これだとナノマシンの使い方がわからないだろうし、補佐にコイツを付けよう。必要な時には散布ナノマシンの使い方を教えてくれるだろう」

そう言って、指さしたのは緑色の液体に入ったホムンクルスみたいなもの。

「これは、三万年前に俺がもらったクローンのクローンだ。クローンって言うっても、本物と全く同じだから。まあ、育ててない状態だから機能は違うけど。役に立つからもらっておけ。ミラたっての希望で12歳Bカップの設定だ。成長もしない」

「クローンに負けるなんて許せません！ 実際勝ちましたよ！ その後に取られたかもしれませんが……」

二人のミラがうなだれる。

「マスターをお前に書き換えておくからな。一応準マスターを二人にしておく。妹みたいに思ってくれればいい。で、お前のことはなんて呼ばせる？ 標準だとマスターって呼ぶが」

なんかニヤニヤしながらこちらに聞いてくる。

「標準でいい」

「わかった、お兄様な。ついでに妹ヤンデレ設定。マスターと準マスター以外に対してごみの様な扱いするけど大丈夫だろう」

おいっ！ どうでもいいけどな。

「一応テファとミラの遺伝子も入れてあるから、系統魔法も精霊魔法も使えるはずだ。虚無だっけ？ あれは散布ナノマシンの劣化版みたいなもんだから同じことが出来る。こいつ使えば奴にもなんとか勝てるだろう」

その後、ガラス版が徐々に下にずれてゆく。

緑色の液体は液体酸素みたいなもので、気化して消えてゆく。

「んじゃ名前付けてやれ」

「名前ねえ……じゃ、リーン」

「おお、俺と同じだな。グリーンだからリーンにしたんだろ？」

反論できないわ……事実だし。

全裸のリーンがゆっくりと瞳を開く。

数度はちばちと瞼を閉じたり開いたりし、俺の方を向く。

そして、ほほ笑み。

「お兄様っ！」

飛びかかってきた。

てか、10メートル近く飛んだぞ!?

「ああ、ちなみに多分今のお前より強い。十中八九お前が負けるな」

こんな幼女が俺より強いのか……。

「安心してくれ。そいつちゃんと子供も作れるし。てか俺は作った。テファもミラとも子供つくったな」

何ぶっちゃけてんの!?



「やんやん」

くねくねするなミラ……。

テファは真つ赤になって俯いてるし。あと裾ひっぱるな……。

「ま、どうせこれから最低でも三万年は一緒にいるんだぞ？ 作るに決まってるだろ。ま、お前が奴に負けなければな。と、そろそろ時間だな」

《マスターシステム：アクセス：セット0：タイム+1Y》

空間が俺達が元居た部屋につながる。

「じゃ、三万年後にお前はリーンのクローン作って、その時間帯のお前らを連れてくるんだ覚えておけ。此処はハルケギニア。お前が作るべき世界だ」

そう言った未来の俺は、大きなカーテンを上上げる。

その向こうはガラス張りだった。そして広がっている世界

此処が一番高い塔なのだろうか。

眼下には白い建物がたくさん建っていた。

白い卵型の乗り物がたくさん空を飛び、遠くで大きな3Dホログラムが歌を歌っていた。

リーンに似てるけど気にしないでおこう。

小さくてよく見えないが、人間、エルフや竜などが普通に生活をしている。

羽の生えた人間や人間っぽくない奴もいるな。皆楽しそうだ。

未来の俺に視線を移すと、ミラとテファが腕に抱きつき、三人でほほ笑んでいた。

「じゃあな、過去の俺。俺の名前は」

俺達の前でゲートが閉じかかる。

「ウイデイス・ハルケギニア一世。最初の世界の王の名だ。そして、この世界が終わるまでの王」

そこで完全にゲートが閉じる。

最後まで俺達は無言だった。

俺に抱きついたリーンが、頭をグリグリとこすりつけてくる。

俺達は顔を見合わせて茫然としていた。

まるで夢のように此処は何も変わっていない。

唯一違ったことは、俺の両腕に、まるで未来の俺のようにテファとミラが抱きついていること。

ウイデイス・ハルケギニア……か。



15 ナノマシンの実(前書き)

めっさねもい

倉庫

あのあと、俺達はすぐに眠った。そして起きたら、年齢が上がっていた……。

あの、未来の俺達と全く同じ姿だった。

ミラは胸が大きくなって喜んでいたが、それ以上の速度でテファが大きくなっていて咽び泣いた。

原作よりは小さい。Fくらいだと思う。成長が此処でとまるし。

リーンの話では、夜の間細胞分裂を繰り返したらしい。

しかも、身体の全てが作り変えられているとか。

試しに腕を切ってみるが、うにようによとありえない速度で細胞が分裂し、元の状態に戻った。心臓がものすごい速さで鼓動し、血が大量に作られる。

しかも、定期的に心臓などの細胞まで変わるとか。

食べた物も全て吸収してエネルギーに変換するとかで、排泄がなくなつてよかつたねってことらしい。

完全に人間やめている。鉄とかでも吸収するらしい。

ついでに、何故か一年経っていた。まるで浦島太郎だ。

さっきまで昨日のことを話していた。

ハルケギニア統一もいいかもってミラは言っていた。ハルケギニアとは、大陸だけではない。東方やエルフの聖地、更に未開の地も全てだ。

テファは、あんな世界ならわたしのようなハーフエルフでも暮らしやすいですね。とか言っていた。

俺も、なんだかんだ言っただけでもないかなと思ってた。この人外4人でどこまで出来るか試してみようかなと。そのなかでは俺が楽しめることもあるだろうと。

統一ということは、その世界で起こる全ての現象が自分に降りかかるだろう。戦争や、政治、人外との対話、人の感情、世界の在り方、運営。

何をするにしても行きつくところはそこなのだ。一番楽しめる道でもあるのだろう。もちろん、人を振り回すことはやめないけど。

それと、人のことが少しはわかるかもしれない。ハルケギニアが俺にとって初めての箱庭以外なのだ。地球だって、あれは箱庭だ。結局は神の作った世界宝石。ハルケギニアだけが違う。違うルールで作られた星。それを知るのも楽しそうではある。

で、話は変わるが。今日は俺が偽名で購入した巨大な倉庫に行っただ。

管理人曰く、大量に荷物が届けられたので入れておいてくれたらしい。

お金は払っておいたからどうやら届いていたようだ。

それを全て影の中に収納し、次の場所に向かう。

あと、石油王とかどうでもいいので、施設だけパクツて離れた。もちろん、人間は除外して。

そして、今は作られた屋敷を見に来ていた。

森を切り開いた場所にそれは在った。

「大きいですね……」

「立派です」

「お兄様のおうち？」

三者三様の言葉。

どんな形の屋敷かと言うと、『凹』こんなだ。

まず、横幅が200メートルくらいある。

それで、縦が180メートルくらい。

10階建だ。ハルケギニアでは作れない階数である。

その内側が庭で、大きな門から屋敷までが大理石の石で続いている。

入口の少し前に大きな噴水。屋敷までの道には木が立ち並んでいる。

「とりあえず……これ持って行くか？」

三人はうなずく。

工事は終わっているようなので、そのまま地面ごと収納する。

パイプが断ち切られ、パイプから水が噴出しているがどうでもい  
いだろう。

次の場所に向かうとしよう。

次に来たのは、稼働していないソーラー、風力の管理施設。

ソーラーパネルが大量に重ねられている。風力発電用の扇風機の様なものも横にしておいてある。

しくみは簡単そうだ。管理施設は、電気を受け取ったら、その電気で稼働するしくみにもなっている。そのまま使えそう。中には大量の制御装置などがあつたが、まあ注文するときにもらった説明書みたいな見ればなんとかなるか。ダメだったら、ハイテクナノマシンの塊のリーンがいる。

散布型ナノマシンが世界中にまわれれば、すべての仕組みが分かるとのこと。

三万年後のシステムも全て記憶してること、世界を統一したときは頼むとしよう。

とりあえず、俺はこれも収納する。

この後、俺は暴走した。

「ご主人様ー、最初はお金払ってたのに、結局盗みですね。しかも店ごと」

「気にするな、ちょっと街が作りたくなつた」

そうなのだ、俺はかなりの施設をパクった。

まず、浄水場をパクった。いずれ必ず必要になるので、作るにしても原型が必要だと思つたのだ。

そして、水力発電所をダムごとパクった。

コカ・コーラの工場とリストをパクった。



レストランを調理方法も一緒にパクった。

東京タワーもパクった。電波塔にはならないが。

家電製品の工場も品物ごとパクった。

アメリカの戦艦や航空機をパクった。

印刷所、造紙所もパクった。

他にも色々パクったが、結局パクったもののほとんどは文明レベル的に意味がないものだ。

いずれ、研究すればいいだろう。何しろ時間はたくさんあるのだ。他にもいろいろ世界をまわって、パクればいいと思う。

確実にニユースになるだろうが、不可視状態なのでバレないし、バレても地球に來なければいいのだ。もしバレたら、歴史に名を残す大犯罪者になるだろう。

「さて、帰ろうか？」

「はい」

「そうですね」

「かえろー」

俺はエデンを呼び出し、その上に移動した。

ヴィ・リヤステイ領地

「では、これから屋敷の設置を始める」

「はい！」

「おうちー」

元屋敷の近くの空いている場所の林を切り崩した。

て言っても、新しく買った領地だ。帰った後、俺達は屋敷に戻ると、めっちゃくちゃ驚かれた。

いきなり年齢があがっていたのだから当たり前だろう。適当にこまかしたけど。

そのあと、うちのせいで潰れた領地が増えていたので、どんどん買い取って行った。

そろそろ、王宮が危機を覚えるころだろう。排除しようとしてきたら、国を奪い取るつもりだ。

ついでに、散布方ナノマシンのカプセルも開いておいた。一瞬にして気化したが。

あと、何故かメイジが二倍に増えていた。危険かもしれないので、急いで腕輪を付けてはめた。途中で、リーンが全員殺したりしてたけどどうでもいいことだろう。

使用人もかなり増えており、屋敷がいっぱいいっぱいだ。奴隷になつていた子を買収したらしい。つてことで、屋敷が必要なのだ。

「まず、屋敷の形に掘る！ 掘れ！」  
「……」

無理だろう。あの広大な屋敷。庭も含めたら1km程度だ。そして、俺は行動にでた。

まず、空間魔法のデジョンで少し大きめに地面を消し去り、そこに屋敷を置き、土の精霊に調整してもらって地面に合わせてなじませる。

「……おおー」

「次に、電球。こんな形のが天井についているから、これを取り除いて全て光石に変えてくれ。行け！」

俺の命令によって三人が屋敷に走り出す。しばらくしてからこちらを振り向き、非難の視線を向けてくる。

「いや、俺は下水と上水と温泉繋げないと」

その言葉に納得したのか、コクリとうなずき中に入って行く。

その後、前と同じように下水と上水を繋げた。今度は、下水も太くしてあるし、上水も太い。

そして、近くの山にソーラーパネルを一面に取り付けた。  
一応、不可視状態で、精霊に守ってもらっている。

風力発電もOKだ。

施設の部分は念入りに精霊をお願いした。

電力貯めているわけだし、爆破でもされた大惨事が起こってしま  
う。

操作と繋げ方が全く分からなかったので、そこはリーンにやって  
もらった。

さすがハイテク。分厚い説明書数十冊をパラパラめくるだけで全  
て理解した。

なんでも、本を一度全部写真として読み込み、イメージとして理  
解するらしい。

完全に人間ではない考えだ。

その後、リーン指導で温泉を屋敷の中の風呂場と、庭に繋げて終  
了だ。

最後に精霊をお願いして、使用人に渡してある指輪以外では入れ  
ないようにしてもらった。

これで、屋敷関係は全て大丈夫だろう。

屋敷の中に大量の印刷機と、パソコンを置き。

必要そうなものも置いた。

んで、外にバイクを30台程置いた。

ガソリンは数年分はあるが、やはり石油は必要だ。

ってことで次は石油だ。

精霊に石油を見せてやると、何処にあるか教えてくれた。一応二  
か所あるが、量が多そうな方を教えてもらった。

もうリーンの独壇場だった。海だったので、設置は鍊金だけで楽  
だったが、使い方が全くわからない。

ってことでリーンがノーパスを使って使用説明書を作ってくれた。

ハッキリ言つてマジでリーンの指が見えなかった。

ハルケギニアの文字用にOSも書き換えたとか言っていたが、すごいとしかいいようがない。

キーボードは日本語と英語なのに、場所を覚えているらしくハルケギニア語で打ち込んでいくのだ。

此処はまだナノマシンが来ていないが、来たらナノマシンを通してキーボードすら必要ないらしい。後で此処には人を雇おう。安価な燃料があれば、冬を越せない平民も減るだろう。

その後は、街が出来るであろう場所。

比較的屋敷に近い場所にレストランなどを置いた。この程度なら電気も供給できるだろう。

そこに見本として、日本の一般家庭の家を置いた。

セメントなどの作り方。家の構造などを、グループの建築部門に教えて作ってもらうことにした。新しい技術だと喜んでいた。

建築部門つて言うのは、支店が増えるので、専門の職人を抱えた方がいいということで、俺のいない間にミルドが雇ったらしい。ミルドもかなり使えるようになってきたということだ。

更に、これはミルドに言ったのだが、効率を上げるために、電気の供給が届く場所だけ、俺がパクってきたマクドナルドと同じようにしてくれと言っておいた。つまり領内だけだ。

電卓は全ての店のレジに置いておくことになった。わかりやすく簡単なので喜ばれた。

街には上水を通した。あとは、家が出来たら、パイプを増やすだけ。

下水も一応作っておいた。

ただし、これ以上作ると、海に流すこともできないし、地下水じや賄えなくなるので、早急に浄水所が必要だろう。

一応浄水場を設置したが稼働はしていない。リーンが説明書はつくってくれているので、ここだけはすぐにでも稼働が出来る。しか

し、新しく作れない。領全てを賄うことなど不可能だろう。出来るだけ早く作るために、仕組みも書いた説明書を置いてある。

水力発電所は、油田の少し離れたところに設置した。電気は必ず必要だからだ。

発電所関係は、ホント説明書とにらめっこと言う感じだ。何かおきたら、リーンが向かうことになっている。屋敷の近くの発電所は、リーンがナノマシンを介して操作出来るとのこと。なので、出来るだけ水力発電の方に人材をまわしている。

お遊びで持ってきた遊園地は電力的に不可能だからやめておく。リーンはパソコンの作り方なども細かくパソコンに残しているが、まったく意味がわからないのでしばらくは無理だろう。一応技術班達が頭を働かせているが、全然成果はないようだ。

あと、リーンの話では3年程でナノマシンが世界中に張り巡らされるらしい。

俺とテファ、ミラも将来的には世界全てを観測出来るとのこと。未来のハルケギニアでは、系統魔法も精霊魔法も、ナノマシンによって抑え込まれて使えなくしているらしい。使えなくしたのは俺らしいのだが。

その代わりに、ナノマシンを自由に扱うことが出来るらしい、もちろん使用目的は制限されているらしいが。

そのおかげで、皆が差別もなく、自由に暮らしている。貴族制度はなくなっていて、王は俺らしいが。

「つてわけで、俺は仕事から逃げたい」

「駄目ですよ？ はい、これ今日の書類です」

にここにと言ってくるテファが恨めしい。

「ご主人様、だめれふよー」

パリパリと新発売されたポテトチップスを食べているミラ。  
忌々しいことこの上ない。

「リン。エデンシステムとのリンク出来てるか？」

「出来てますよー」

「繋いでくれ」

「りようかい」

俺の書室には巨大な液晶画面が付いている。

それで、宇宙に居るエデンとナノマシンでリンクして人工衛生の  
代わりをするのだ。

エデンはもともと演算で星全体を魔方陣したり、星丸ごとダーク  
ホールに突っ込ませたり出来るGFだ。

アップすれば人の髪の毛の本数や、会話すら聞こえるのだ。

「えーっと一枚目は油田の案件か。アップしてくれ」

「ほふー」

あー、めんどい。

.....

「んで、次は兵士かー。もう全然みてないから兵士どうなったかわからないんだが。マチルダとかどうなった？」

マチルダならテファが知ってそうだから聞いてみる。

「マチルダ姉さんですか？ プログラムは終わったらしいですよ？ しかも第一期より優秀らしいです。ヴィ・リヤステイ家だからなのかもしれませんが、ミラちゃんが抜けたあと隊長やっているらしいです」

にこにこ嬉しそうに言うテファ。

「とりあえず、そこでポテチ食ってる小娘。暇なら訓練でもしてこい」

「んー？ でもやることないよ？ ナノマシンのせいで精神力はほぼ無限ですしー、魔法も全て速唱出来ますしー」

「んーそういやそうだな。テファは？」

「そうですねー、わたしも精霊魔法は全て修めましたし。偽装としての呪文も覚ええました。虚無も速唱できますね。あるとすれば、他



の始祖の秘宝ですね。強さとしては、今のところ勝てないのはミラちゃんと兄さまとリーンちゃんくらいでしょうか？」

「そっか。リーンは俺でも勝てないから仕方ない。そっか……始祖の秘宝……」

原作には介入しないようにしようと思ったけど……。統一すると決めた訳だ。そういうわけにはいかないだろ。

「お前たちは俺についてくるって決めたんだよね？」

「ついていきますよ？」

「ついていきます」

「お兄様と一緒に」

「ふむ、ナノマシンの散布は大陸は大丈夫か？」

「だいじょーぶ。東方は無理だけど」

「んじゃ、始祖の秘宝ってわかるか？ これと同じような感じなんだけど」

俺は影から始祖のオルゴールを渡してやる。

「ん、大丈夫だよ。他に三つあるね。エデンシステムで映そっか？」

「いや。全員PDA充電してあるか？」

「大丈夫です」

「はい」

PDAがこの屋敷でしか充電出来ないのがな。

ちなみにこのPDA。リーンが改造して、エデンシステム用にしか使えない。

倍率アップダウンと移動くらい。

「じゃ、ミラは始祖の祈祷書。テファは始祖の香炉。リーンが始祖

の虚無取ってきてくれ。あ、ついでに指輪持つてる奴いるからとってきて。ミラのところは王女アンリエッタ。テファの所はジヨセフ。リーンのところはわからからテファの指にはまってるのと似てるの回収してきてもらっていいか？ 一応全員不可視状態な。姿見られたら殺せ。ただ、それじゃあまり面白くないから、見られない限りはその場にいる全員を一撃で気絶させて指輪奪ってきて。俺はその間に書類地獄終わらせるから……」

「はい！」

「行ってきますね」

「すぐ戻ってくるねー」

そう言っつて、三人は窓から飛び出て行つた。最近、出入り口が此処になっている。一応館内に数カ所エレベーター、エスカレーターまであるのだが、普通に飛び降りて着地した方が早いのだ。だつてここ10階だし。

今は此処で300名程の使用人が働いている。働いているつて言うがそんなやることが無いので、新しく作つたレストランの料理の開発や、その他の開発班もいる。

近くの果樹園で働いている人も此処に泊っている。地球から持ってきたものなので、めずらしくて興味があるようだ。

果物は最近やつと収穫し始めた。最初は種を取つて他の果樹園に送り、増やしていた。

サトウキビ畑も随分と広がり、砂糖が大量に余つてケーキ店などを出している。

なぜか、砂糖単品で売るより安い。単に砂糖の値段が法外なだけではあるのだが、つまりサービス業みたいなものだ。ちなみに。そういう嗜好品はこの領でしか売っていない。

輸送手段は生産地から地球のトラックで工場へ、工場で加工後竜でミラグループ支店。

地球のように権利をオーナーに売るわけではなく、俺がオーナーで他は店長なのだ。もし潰そうとおもったら俺の判断で全て一気に潰すことも出来る。副代表のミラは全くやらず。仕事量で言う俺>ミルド>リン・テファだ。ミルドは此処をやめればいつでも貴族に戻れるのに戻ろうとはしない。理由は、お店の経営が楽しいから。と、妻が此処の薬を毎日使ってキレイになっている。だがあのハイポーションの金額は貴族では払えない。とのこと。そろそろミラの妹か弟が生まれるんじゃないだろうか。セバスチャンはマック系列全52店舗を全て取り仕切っているようだ。新商品のシェイクや、朝マック限定メニューにも結構口出ししてくる。一応レシピは地球からもってきたもののだが、納得いかないらしい。

こっちではあまり人気が無いお米も、コシヒカリを栽培しはじめて人気は鰻登りだ。

小麦などもあつちから持ってきた物に取りかわっている。

こっちの作物は全て質が悪いので、だんだんと取りかわっている。あと、一番最初の領　つまり、今屋敷がある何も買い取っていない時から持っていた領を首都にしようと言う話が出ている。俺が作った街に東京タワー改めミラタワーが建っている。そこに最新式の日本から持ってきた家がたくさん出来ているので、そこらあたりから計画をはじめようと話が上がっている。実際そこにはかなりの人が住んでいる。ミラタワーは一応この屋敷から見えるので、そこまでは離れておらず、第一期の軍　現在元屋敷に住んでいるのだが、保護しやすい街なので、治安がよく、人気なのだ。

ただ、浄水場がまだ一つしかないので、領全てでは足りない。一応さらに5つ程急ピッチで建設されているのだが。

電気自体は、風力発電の発電機を分解し、パーツごとにメイジが錬金している。一種の　プログラムだ。気絶するまで錬金し、エリクサーで回復。さらに錬金って感じた。それで、集まったものを組

み立てている。リーンが最初は丁寧な代表者に教え、代表者が下のものに教えている。そのおかげで、かなりの数のプロペラが回っている。

パソコンは未だに作れないでいるが、単純な電化製品なら同じ方法で作れるようになっていいる。

あとは、意外な事だが、造船所が出来上がっている。地球と違い、土から鋼鉄を錬金できるので、俺が持ってきた戦艦と設計図で普通出来るのだ。ガソリンも精製出来るようになり、相当余っているのでもいい感じだ。

そこで問題なのだが、まず移民が多すぎる。つまり、他の場所がすくなる。現在、ゲルマニアの半分はうちの領だ。ほぼ公爵以外は残っていない。王宮ですらうちには手が出せなくなり、公爵の方が人が減りまくって収入が減っている。

古い考えの奴らは、貴族で在りながら商売をしているのが許せないらしい。王宮に毎日文句がきてるとルミア姫が言っていた。

他の国の貴族からも文句が出ているらしい。

そして、他の貴族の軍からの転軍要請なども増えている。

脅しに脅し、スパイっぽい奴を何人殺したかわからない。

そして現在、うちの軍は3000人程になっている。

第四期育成中である。第一期の奴がリーダーになって、数人のチームとなっている。

レベテーション修行ではなく、錬金での修行に変わっている。これで電化製品や船の部品を錬金しているのだ。

あとは、バイクの製造が出来るようになり、社員には住民登録必須なので、住民登録+社員にだけバイクを売っている。さすがに使用人だけが使えるBMWにはほど遠いけど。

このぐらいかな。店舗は着々と増えて行ってるし、本編突入した

あたりではどうなるかわからん。

まあ、トリステインは遠いし、ゲルマニア貴族なんてあの学院にはほとんど行かないらしいし、トリステインと仲悪いからね。被害はほとんどないだろう。

さて、書類に戻るかな……。

夜

「ご主人様、この指輪どうしますか？」

「うーん、砕いてもいいんだけど、どうせ俺の影の中に入れておけば俺以外取り出せないから、一応渡してくれ」

三人は任務を見事達成させた。目の前には三つの始祖の秘宝と指輪。これで虚無の使い手はテファ一人となった。

「テファ、四つのうち三つが盗まれるって変だから、指輪不可視にしとけよ？」

「はい」

とりあえず三つの指輪を収納する。

使い終わった秘宝も影の中に入れて証拠隠滅。居ないと思うが、指輪と秘宝をたどれるやつが居ても、影の中は別次元なので探せないだろう。

「お兄様、そういえば赤い指輪へんなおばさんが持ってたよ。全然違う人が持ってた」

「ふーん、盗んだのかな？」

ま、別にいいけどね。

「それで、テファは何覚えたんだ？」

「はい！ 『エクスプロージョン』『イリュージョン』『加速』『記録』です。これで六つですねー」

ふむふむ。エクスプロージョンは爆発。イリュージョンは幻影。加速は早くなるのか。記録ってなんだ？

「記録ってなんだ？」

素直に聞いてみる。

「対象物に込められた想いを読み取れます。どんな思いで作ったとか」

ふむ。サイコメトラーエイジか。てか、役に立たないなそれ。

「あ、あと加速唱えた状態ならミラちゃんに勝てました！」

「おお、すごいな！ ミラは俺の紐になってるから仕方ない」

ミラは拗ねているようで、口を膨らませていた。

「どうやったんだ？」

「まず、移動します。で、デイスペルでリフレクションをかき消して、ブレードで切り裂きました」

「ん？ ミラは魔法なし？」

「仕方ないんですよ！ だって、加速したら見えなくなっちゃって、何処にいるかわからなかったし……。それでいきなりリフレクション消えて、慌ててたらクビ刎ねられた……」

ミラがだんだん沈んだ行く。

「ちょっとやってみてもらっていいか？」

「はい」

そう言つて、速唱。約三秒で詠唱が終わり、テファがかき消える、俺の体感速度はオートヘイストで三倍。こちらに向かってくるのが見えた瞬間。

《ストップ》

俺の魔法が上書きされ、テファが動けなくなる。

「あのなあ、ブレード使うのはいいが、ここでやられたら書類が鮮血で染まる」

俺はテファの額を突つつく。するとテファはそのまま倒れる。

《デスペル》

効果を解いてやる。

テファはペタンと床に座り治す。

「全然だめでした……」

「んー、でも。他の奴なら見えない間に殺せるぞ。加速中って精神力減るんだよな？」

「はい。でも、ナノマシンのおかげで減りませんね」

つまり、ずっと加速でいられるわけだ。

「それなら余裕で国落とせるな」

「ぶー、わたしだって落とせますっ！」

不貞腐れてるミラは無視する。そりゃ此処にいる四人なら余裕で落とせるだろう。

一人一個落としてくれって言ったら一日で制圧出来る。

うちの兵士第一期から第四期まで束でかかってても此処にいる一人にすら敵わないだろう。



「リーンはさっきの加速見えたか？」

「うん。最初から最後まで止まっているように」

やはり次元が違う。

「時間を区切って見ればいいんだよ？ 自分の体感時間を伸ばせば簡単でしょ？」

簡単に言うが人間には出来ない。思考速度を上げるんじゃなく止める。どんだけ人間離れ いや、神の領域だろう。

「本当に見えなくしたいんなら……」

そう言っつて、リーンは部屋の外に出て行った。扉も閉めている。

次の瞬間 俺の首にブレードを突き付けたリーンが居た。

「「「!!!?」「」」

三人の内誰一人気付かなかった。

いや、扉を開いたことすら気付かなかった。もしリーンがその気なら簡単に殺されていただろう。しかも、ご丁寧に俺のリフレクシヨンまで破壊している。

リーンはもとのソファカーに戻って行った。

「どうやったんだ？」

「んー？ まず、お兄様の座標を確認します！ 次に、その場所に身体を再構成」

ん？ 座標って言うのは散布ナノマシンだろう。

「再構成？」

「そう。この散布ナノマシンってのは、わたし達の身体を構成しているナノマシンと大してかわらないの。だから、わたしたちの身体の情報をその場に反映させればそこに存在出来るわけ。同時にさっきわたしを構成していたナノマシンは散布ナノマシンに変わりました。全てのナノマシンは多であって個。つながっているから、タイムロスも無し。これくらいなら未来の三人も出来たよ？」

「転移の原理か……。」

にしても、マジ人間どころの話じゃないぞ。前の俺だって出来なかった。エーテルだからやろうと思えば出来たかも知れんが。

「んー、例えばね。この近辺はナノマシンが物にまで入り込んでるから」

そう言って、テーブルの上のパイナップルを手取る。

「こつやってナノマシンを弄ってやれば」

ポトッとパイナップルから“部品”が落ちる。

ほとほとパイナップルがパズルのように落ちてゆく。包丁では絶対に出来ないような形に。

「こんな風にナノマシンを動かすだけで細切れ。んで、ナノマシンは情報が在る限りなんにでもなれるの」

そう言ってリーンはパイナップルを“消す”。

その後手に皿が現れ、皿を四枚テーブルに並べる。

そして手にメロンが現れる。次の瞬間メロンは消え、四等分した

メロンが皿の上に乗っている。

「つまりね、つながっている範囲ならそこから持ってくる事が可能なの。それが多であり個」

共有しているってことか。これならば立派な等価交換ではある。錬金よりも現実的な等価交換だ。点から点への情報の移動。世界はナノマシンと言う情報の集合体へと変わっている。  
ミラとテファは茫然として声すら出せないでいる。

「なあ、ナノマシンを扱える奴って俺達四人だけか？」

「うん。でも、ミラ姉さまとテファ姉さまとわたしは、お兄様から権限を借りてるって感じかな？ このナノマシンって言う存在自体がマスター権限を持つてるお兄様のもの。つまり、あと二年で、実質的に世界はお兄様の物」

そう言えば……未来の俺がマスター権限とか言ってたな。世界の全てを観測し、自由に出来る力……か。

「それって、俺とミラとテファは使えるのか？」

「んー、まだ無理。完全にナノマシンで構成されないと。でも、もしそれをしたら」

リーンはかわいらしく両手ではむはむとメロンを食べる。

「完全に人間じゃなくなるね。世界になる」

俺達三人はゴクリとつばを飲み込む。

そうだ。全でありーである。つまりーであって全なのだ。個人が世界そのもの。意思一つで全てを操れる。それは それはまるで

神ではないか。

「あー、でもね。時間の問題だよ。ナノマシンが世界中に浸透する二年後には、完全に変わっちゃうね。だって、細胞分裂することにそれはもうナノマシンだから。ねえ、250年で脳死するのに、未来のお兄様は不老で記憶も一生持ち続けている。なんでかわかる？」

リーンはミツクのらしきオレンジソーダを取り出してちゅーちゅーと飲み始める。

今のリーンはすごく残酷に見えた。

「それはね、周りのナノマシン　世界に情報を貯めているから。この世界そのものが記憶媒体なの。どんなに膨大な知識だろうと忘れることもなく一瞬で覚えられる。絶対記憶能力の完全版だね。開示できるのは個人と、お兄様だけだけど。お兄様が完全になれば、見ようと思えば、世界中の人間の過去を見ることが出来るよ？　記憶破壊だって操作だって書き換えるだけ。存在だって抹消すればいいだけ。わたしは出来ないけど、お兄様なら無から有だって作り出せる。情報さえあればね。話を聞いて散布をとめたいって思うかもしれないけど、完全にナノマシンにならないと無理。そして、ナノマシンになったところには散布が終了している」

逃げも隠れも出来ないってこう言う意味か。ナノマシンがナノマシンを構成出来るってことは、俺が死ねば情報で俺は復元するだろう。ナノマシンがマスターを殺すはずもない。まさに不老不死。死にたくても死ねないとはこのことだ。神殺しですら殺せない神。

もし、俺が止めなかったらこのナノマシンは宇宙空間すら侵食するだろう。もし俺が死にたくなったらナノマシン全てを破壊　つまり最低でも世界は破壊しなければいけない。

「あ、そういえば」

小さな人差し指をくちびるに充てて、少し上を向く。

「世界扉で前、地球と未来のハルケギニア繋いだよね？ 此処とは時系列が同じだよな」

まさか

リーンの手にはマツクのチーズバーガーが握られていた。

“ミツク”ではなく“マツク”の。この世界にない包装紙。

「地球にはマスターがいないから大変かもね。未来のお兄様が言ったけど、お兄様を排除できない。したら世界が消えちゃうって。マスターがいないナノマシンはね。何も分からないの。親のいない子供。しかも、片手を降ろしただけで全てを破壊出来ちゃうような強大な。何も知らない子供はどうなるのかな。ま、わたしにはお兄様がいるからいいけどな」

そう言っつて、こちらを見てにこにこことほほ笑む。

「今頃は探してるんじゃないかな。自分達の主を。地球全部掘り返していなかったら、太陽系全部を、そして銀河系。更にはそこから離れて全部を。此処まで辿りつけばいいけど……。次元の薄いところを通れば来れるかも。この時間軸にいるマスターはお兄様だけだし」

両手でチーズバーガーをぱくついている姿はかわいいけど、思考はすごい怖いな……。

「ナノマシンにとって、主のいない星なんてなんの価値もない屑と変わらないからね。ナノマシンの全てはお兄様の味方。そして、準マスターになっっているミラ姉様とテファ姉様の味方。ミラ姉様とミラ姉様への攻撃は、お兄様から以外は全力でナノマシン　世界が味方について敵を排除しようとするよ。お兄様の場合、害なす物は例え星だろうと破壊するよ。ミラ姉様もテファ姉様もそこに含まれるけど。地球のナノマシンはきつと　地球なんて、探すのに時間かかるだけの邪魔な害だっと思って思うよね」

こいつは地球はこのままなら消えるって言っているのか。そして、此処は銀河系どころか次元すら違う。このままなら銀河系の外まで消える。

ミラとテファは青ざめるを通り越して、蒼白になっている。  
もうここまで壮大だと、逆にどうでもよくなってくる……。

「でもね、一つだけ方法あるよ」

「え？」

「えーっとね　」

リーンは包装紙をツルに折って、ぱたぱたと飛ばしながら言う。

「お兄様が自分を細胞が残らないくらいまで破壊して、向こうのナノマシンをこっちに来るように命令する」

そう言ったリーンの顔は、相変わらず笑顔だった。

## 16 学院への交渉、もとい脅迫。

空

現在、俺達四人は上空にいる。

「もしだ。もし、俺が完全なナノマシン構成体になったら、すぐにも地球の散布型ナノマシンはこちらに持ってこれるのか？　そして、こちらのナノマシンに停止命令を送れるのか？」

ナノマシンになっただけで、いきなりそれが操れるのか。今まで、操るって言うことは考えたこともなかった。それをいきなり出来るようになるのか？

それをリーンに聞いたです。

「うん。命令するだけなら簡単だよ？　近くのナノマシンに全員こっちこいって言ってやれば、繋がってるから全部来るし。完全に己の一部として使うのはまだまだ出来ないかな。未来のお兄様だっけかなり時間かかったはずだし。こればかりはマスターのお兄様が

システムを構築していかないといけないし。まだ変化前のナノマシンを移動することしか出来ないかな」

ふむ。地球に潰れてもらうのは困る。俺の貯金があるし！ ついでにあそこの星はまだまだ利用価値がある。

「俺が死んだら蘇生出来るのか？」

「うん。勝手にナノマシンがやってくれるよ」

ならいい。そう言えば、俺初めて死ぬは。人は散々殺してたけど、死ぬのは怖いな……。

「ならいい。三人とも、俺から離れる」

ミラとテファは心配そうに俺を見ていたが、やがて頷いて離れる。

やはり、此処はアルテマで一気に細胞すら残さず破壊するか。

三人が500メートルくらい離れたのを確認し、俺はそれを開始する。

ポイントは俺の心臓を起点に。

大きく息を吸い込み。

《アルテマ》

瞬間、痛みを感じることもなく視界が真っ白に埋め尽くされた。

妙に長く感じる。音すらも感じず。多分これが、死んで再生される光景なのだろう。

しばらくすると、自分は全裸でその場に浮いていた。

感覚は前の状態と何一つ変わらない。四肢を調べてみるが普通。



《ライブラ》

“ ウィデイス・ハルケギニア一世<ナノマシンの王> 年齢???”

HP・不明

MP・不明

星々を治めた王。

その意思一つで惑星を破壊することも可能。

基本的に死ぬことはあり得ない。ナノマシンのバックアップにより魔力は無限”

これって、俺のデータじゃなくて、未来の俺の情報じゃないか？  
つまり、アイツの体内に居たナノマシンが完全に俺と同化し、俺  
と言う存在は消えたってことか。思考は俺の物だからいいか。

少し経つと、三人がコチラにやってくる。

なぜかリン以外は全裸で、コチラにじっとした目を向けてくる。

「何でお前ら全裸なの？」

「……」

《ライブラ》

“ テイファニア・ハルケギニア<王の妻>” “ ミラ・ハルケギニア  
<王の奴隷兼妻>”

あれ？

「ご主人様……ちゃんと範囲を考えてください」  
「兄さん……」

全裸の俺は全裸の二人にジトつとした目を向けられ続ける。

「うーん。ナノマシンのバックアップで指定した範囲よりかなり大きくなっちゃったね。ナノマシンの調整が必要ね」

リーンは前と変わらずニコニコと笑っている。

「お前ら巻き込まれたの？」

コクリとうなずく二人。

「死んだ？」

「細胞すら残さず」「」

二人が声を合わせて言う。

つまり、コイツらもナノマシンになってしまったと言ったことだ。

「……さーって、地球から連れてくるかー」

「誤魔化すの？」「」

「い、いや。だって、地球のピンチだろ？」

二人はため息をつきながらしびしび納得してくれる。

まあ、どうせ早いか遅いかの違いだし！

「テファ。座標はわかってるだろ？ 繋げてくれ」  
「わかりました」

前は30分もかかったが、今回は数秒で詠唱が終わる。  
目の前には地球への扉が開いている。

「んで、リーン。どうすればいいんだ？」

ナノマシンなんて見えないし、何もできないぞ？

「普通に頭の中で声をかければいいですね。地球側のナノマシンに意識を向けて」

よくわからんがやってみるか。

『そつちなんてつまらないだろお前ら。こつちへ来い』

次の瞬間、風のように不可視の何かがこちら側へ膨大に流れ込む。

「あー、こいつらか？」

「そうです。道が狭いので、風船に穴が空いたみたいになっていますね」

じゃ、しばらく待つか。

### 三時間後

「全部こちら側に来ましたね。閉めてください」

テファが頷き、扉が閉まる。

ふう、俺は一息つき。更に命令する。

《分裂を一時停止》

「ん、止まりましたね」

やっとか……。俺は両腕を伸ばしのびのびする。

「終わったー、あー、これでハルケギニアの三分の二がナノマシンか」

俺の言葉に、リーンが不思議そうな顔をする。

「違いますよ？ まず、地球にナノマシンが流れたのはいまから二年前です。お兄様を未来から戻すときに時間を進めましたし。で、こつちが一年前。一年であの小さなカプセルから三分の一。つまりカプセルが2だとして、二の一年繰り返された分裂回数二乗＋約一万の二年繰り返された分裂回数二乗の量です。地球には直接扉を開いて流出しましたから相当な量が最初から紛れ混んでいましたね。とりあえず外に目を向けると」

リーンはなにか掌に鉱石をとりだす。

「うん。こちらにも惑星が結構ありますね。人は住んでいませんが、微生物はいます。あと一回分裂させれば、もう6個くらい銀河系の系列を制覇出来ます。もちろん銀河系ではないですが、名前がないので代用です。これで、宇宙まで勢力を拡大出来ます。未来のお兄

様はかなりの星を制圧していましたね。となりの系列にはまた違う生き物が住んでいます。人間の場合もあります」

「ここにこう言っているが……結局手遅れだったんじゃない……。まあ、地球からナノマシンがこっちに向かってくるよりはマシだが。」

「まあ、それはいいや。思ったただけどき。俺の意思でナノマシンを消せないのか？」

「消せますよ？ 侵食した存在ごとですが。つまり、宇宙空間ごと消えますが」

「いい案だとおもったんだがな……。」

「で、俺は何か出来るようになったのか？」

「何も」

「……」

期待して損した。

「うーん、他の韻竜見つけて仕事手伝わせたかったんだけど……。足りなくなってきたし」

「ああ、それならわたしがやってきますよ。制圧して連れてくればいいですよね？」

「出来るのか？」

「はい。前のお兄様の自由開示情報も貰ってきましたから。戦闘用装備もあります！」

「おお！ やっぱコイツにも何か武器がないとな。」

「任せる。で、どんなのだ？」

「見てて下さい、わたしの美しい姿を」

そう言うと、リーンからパキパキと言う音が聞こえてきて、背中に一枚10メートルはありそうな機械の翼が現れた。腕が大きなガトリングになっている……。

「最終兵器彼女です！」

「未来の俺アホだー！ー！」

「核も万全です！」

「……生態系破壊するから核は使わない。あと、光学迷彩使えな」

「ハッ、行ってきますであります元帥！」

次の瞬間、キーンと言う音を残してリーンは消えた。

残された俺達はなんとも言えない顔をしていた。

結局生活は全くかわっていなかった。身体は成長もしないしなにもない。

店舗が増えたくらいか？　あとはメイジ兵士が一万くらいになったかな。

トリスティンへの進出はある程度自重している。

うちの領だけが、自動車バイクは免許があれば乗れるようになった。道路も整備された。

首都も出来上がり、パクってきたテレビ局もナノマシンのバックアップで放送出来ている。

現代人ですら理解できない技術だろう。

施設も増え、遊園地もオープンした。鉱石などは、未開拓地と言っか、惑星からほぼ無限に持ってこれる。

平民の収入がかなり増え、物価は上がった。俺の領民は裕福なので、電化製品や自家用車も買えるが、他の領民はきついだろう。

あ、そう言えばマチルダが嫁いでいった。向こうの貴族はうちに取り入ろうとしたらしいが、直前で俺が家系から籍を外して送り出した。

内部から破産させて奪い取れと言っている。

あと、うちの戦艦艦隊がありえない数になってしまった。まず、未開の地とうちの領の間に巨大な人工島を作り、そこに停滞させている。隔離された未開の地も、軍の戦艦や戦艦機の隠しには適役なのだ。広大な土地がタダだし。行ける奴は限られているしな。そこには、平民兵士が常駐している。

俺がパクってきたF-22　ラプターをリーンが調べて、量産しているのだ。地球ではコストがかかりすぎる。とのことだが、こっちでは土から錬金すればいいだけなのだ。メイジの兵士が習練つてことで大量に錬金して作っている。

実はハルケギニアのパソコンも量産している。ただし、これは領内にしか電気が流れないので、自領でしか使えない。と言っか、ほぼ全て自領でしか使えない。

公爵家には王族の血筋しかなれないので、潰して領を奪い取った  
りしている。

状況としては、ゲルマニア王家ですらこちらには手が出せないで  
いる。

実際のところ、早く手を出してくれないかと思っている。そした  
ら奪い取ってやるのにと。

テファやミラ、俺にはかなりの婚約話が流れ込んできているが、  
うちより裕福な家系にしか興味が無いと一蹴している。王室ですら  
うちより裕福でないので、実際何処にも行かないと言うことだ。

目標としては、まずは、国を建てること。しかし、今建ててしま  
うと此処の貴族ではいけないので、まずはゲルマニアを乗っ取って  
から未開拓地も領土ですよ。と言ってみることにする。

だが、危機感を覚えたゲルマニアは、俺にルミアを預けてきた。  
偵察なのだろうが、ルミアは楽しければいいと言う性格なので、普  
通にこっちに馴染んで遊んでいる。ただ、紐として送り込んできた  
ようなもんだ。

俺の中ではうちの家系に入ると言うことは、実家を捨てることだ  
と思っている。だから、別に入っても支援なんてしてやらない。こ  
ちらから嫁がせるということは決別すると言うことだと思っている。  
こっちの貴族は政略結婚しか考えていないが、もし俺が王家に入  
ったら、そっこうでゲルマニアを潰して国を作るだろう。

俺の優先順位は自分 > 次元の狭間 > ミラ・テファ・リン > >  
> 使用人 > > 領民 > > 越えられない初夜の一線 > > > 他人（死ん  
でも別にいいレベル）なのだ。

あー、ゲルマニア早くつぶしてーな。そしたらルミアはうちで養  
ってやるう。使用人達に好かれてるしな。ゲルマニアと縁切ったら  
いつでも大丈夫だ。

んで、今はバイクである場所に向かっている。



「ご主人様ー、わたしも乗れないから後ろに乗せてもらえませんか……？」

「黙れ。めちゃくちやうまいだが」

「でもー……、その胸お化けがご主人様の背中に奇妙な物を押し付けているのが憎たらしくてたまらないんです」

「ミラちゃんひどい……」

バイクは三つ。人数は四人。

まずリーンと俺は初めから乗れた。リーンなんて大型バイクでウイリーしたりしてるし。

その後にミラが操作を覚えて乗れるようになった。テファは機械操作が苦手過ぎて、こう言うのも操作が出来ない。

身体能力はかなり高いのにな……。

ついでに、リーンは俺がやったエクスカリバー（ダメージ限界突破・貫通・物理攻撃20パー・炎攻撃改）を振り回して、辺りを火の海にしながら疾走。

他の領では法定速度がないので、200キロオーバーで疾走しているの。

会話は、俺達が唯一出来るようになった、ナノマシンを介しての会話で行っている。

「てか、もうすぐ付くぞ？ この広野抜けたら到着だ」

「ですねー、馬だと二週間くらいかかるのに早いです」

テファの顔は見えないがほほ笑んでいるのだろう。

それからしばらく走り、目的地の学院についたので、俺達はバイクをとめて降りた。

一応バイクは精霊に守らせておく。

ちなみに、来年から俺達も学院に通うのだ。ハッキリ言って、俺達には全く必要が無いのだが、原作に介入しようとおもっ。ただし、その過程で国を乗っ取れそうな場面があるので、そこで乗っ取っていく計画なのだ。

リーンはバイクに乗って疾走したいから着いてきただけだ。こいつはサーバーの役目もあるので、向こうに残って俺の変わりに運営を行う。呼ぼうと思えば数秒でこっちに来れるしな。ナノマシンがあるところなら宇宙だろうが一瞬だろう。

とりあえず俺達は学園内に向かう。

俺達が入ると、何故か全ての教師がいた。確かに連絡は入れておいたが……。

いきなり杖を向けられたが、テファとミラ、リーンが一瞬にして全員の杖を叩き切った。

交渉に来たのだから殺すなどは言っている。

俺は目を細め、ここの長であろう人物を見つめる。

「なんのつもりですかね？」

「うむむ……」

その老人は冷や汗を流しながら呻いた。

「私達は別に殺し合いに来たわけではないのですよ？ まあ、殺し合いならば一瞬で殺していますが」

俺はニヤリと笑い続ける。

「もちろんここの生徒全員皆殺しですが」

10人以上の教師人は、来年生徒になるだろう三人に完全に主導権を握られている。

「……して、来年から入る予定のお主らは何の用できたのじゃ？」  
「交渉と言いましたでしょう」

俺は学院長の前にあった紅茶を勝手に飲みながら話を続ける。

「一つ 情報の偽装。二つ 工場の建設許可。三つ 輸送用竜の在留許可。見返りは多額の金貨 ただし、王宮への献上ではなくあなた達の懐にしまってください」

そこで俺は、教師人を見回しほほ笑む。

「情報の偽造とはなんじゃ？」

「知つての通り私はウイデイス・ラ・リバルステイン・ヴィ・リヤステイ。ミラグループの代表です。取り入ろうとする貴族がかなりの数に上るでしょう。しかしですね、はっきり言つてめんどろなのですよ。結婚の申し込みなんて何件きたかわからない程です。それじゃ 楽しめないでしょう？」

俺は紅茶を飲みながらニヤリと笑う。

学院長はひきつった笑みを浮かべているがどうでもいい。

「つてわけで、私はウイデイス・ラ・リバルステインとして下さい。ラ・リバルステインの家名は有名でないので大丈夫でしょう。家名ですらありませんし。じゃ、最弱ミラから自己紹介」

「ひどっ！？ はあ……。ミラ・ヴィ・リヤステイです。クラスは全属性オクタゴン、先住魔法全て。偽造後は、ミラ・ラ・リバルステイン。クラスは風のトライアングル。ちなみにご主人様の未来の妻らしいです、キャッ」

わざとらしいな最後のところ……。

だが、学院長や教師人が目を見開いている。

「せ、先住魔法も使えるのかね……？ まさかエルフではあるまいな？」

「違います。全く。先住魔法がエルフしか使えないとか、スクエア

クラスが最高とか、限界を決めつけてるからそこで成長が止まってしまうんです。スクエア程度で我慢できるなんてどんな神経してるんでしょうか」

ミラさん絶好調ですね……。普段俺が弱い弱いつて言ってるから此処に来て。

教師人は複雑そうだな。トライアングルかスクエアだろうしな。

そこで、俺はテファに目で合図する。

テファはうなずき、一歩前が出る。

「ティファニア・ヴィ・リヤステイです。クラスは虚無と先」

「虚無!?!?」

教師人が声をそろえて目を剥く。

ミラは、わたしの存在価値って……とかぶつぶつ言っている。

「こほんっ。クラスは全虚無魔法、全先住魔法。偽造後は、ティファニア・ラ・リバルステイン。クラスは火のドットです」

「きよ、虚無とは、で、伝説の系統のかね!?!?」

「はい。しかし、伝説でもなんでもなく、虚無は虚無です。存在していないからこそ伝説と呼ばれるのです。存在している限りそれはただの虚無と言う属性の一つでしょう。以上」

教師はあまりにも堂々した伝説否定に引き攣っている。

だが、あれは俺のバイクの後ろで散々練習していたから言えたのだ。

「んで、俺がウィデイス・ラ・リバルステイン・ヴィ・リヤステイ。クラスは全オクタゴンに全先住魔法。で、全黒魔法白魔法召喚魔法。

んで、偽装後はさつき言った通りの名前に、クラスはドット。ミラグループ代表つてのも秘匿で」

「ふむ。黒魔法や白魔法とはなんなんじゃ？」

ふむ。王宮に連絡してほしくて言ったが証拠か……。王宮がちょっとかい出してきたら乗っ取れるしな。別に機会はたくさんあるから連絡してもしなくてもいいけど。

証拠なら手っ取り早く……。

《デス》

俺は一人の教師に手を向けて即死魔法を唱える。

教師の足元から黒い影が立ち上がり、鎌のようなもので教師を切り裂く。

身体には怪我すらないが、崩れ落ちる。

「……なっ!?」「」「」

全員が驚愕に声を上げ、急いで脈を確認している。

「……し、死んでます」

「」「」「……」「」「」

全員が蒼白になり、そして無言になる。

「今のが黒魔法だ。次に白魔法」

《アレイズ》

死んだ教師の身体が光り輝き、やがてムクリと起き上がる。

「あれ？ 私はなんで倒れているのだ？」

「……蘇生かの？」

「ええ。最初のが即死魔法、次のが蘇生魔法。って言っても、俺はドットなので、誰が死んでも蘇生などしません。勝手に期待しないでください。自領の人なら蘇生しますが、それ以外は関係ありませんので」

俺はキツパリと言ってやる。

俺のあまりに無慈悲な宣言に全員が言葉を失う。

何故それだけの力を持ちながら使わないんだってとこか？

そこで、なぜかリーンが前に出る。

「わたしはリーン！ 好きなものはお兄様！ 次に好きなのがお姉さま！ 好きな事はお兄様の役に立つこと！ 趣味はお兄様に害なす者を殺すこと！ 夢はお兄様の子供を一兆人産」

「あーもう、お前は入学しないだろが」

「うっ……毎日夜だけはお兄様の所にくるもん……」

リーンを引きずって下がらせる。その後、リーンは俺のお腹辺りに抱きつくことで納得したようだ。

「んで。他の二つのことに関しても大丈夫でしょうか？ 一応工場は見られないように少し離れて作るぞ？」

先ほどの自己紹介は脅しでもある。そして、俺の躊躇もなく人を殺せること。相手は、断れば教師はおろか生徒まで殺されると思っ  
だろっ。

「う、うむ。それならばよい。しかし、何故我々の懐に受け取った金をしまっておけと言つものじゃ？」

「これは学院の問題でしょう？ 教師だってその方がうれしいのでは？ そして何よりも」

俺は紅茶をポットごと自分の影に流してゆく。

影からは何か得体のしれない顔が出てきて、それを飲みほしてゆく。

その異様な光景に教師達は息を飲む。実際はただのGFティアボロスだけだな。

「王宮や王立魔法研究所の奴が来たら、国滅ぼさないといけないし。それは面倒でしょう？ 一時間くらいかかっちゃうし」

俺は空になったティーポットを机の上に戻し、横目で学院長を見、唇の端を吊り上げる。

「うむ……わかった」

「さて、私達はこれで帰ります。来年入学しますのでよろしく」

そう言つて、俺達は部屋を出る。

さて、工場で精製した薬を貴族の子供にでも売つて借金させて、トリステインを内部からもらうとするかな。子供の責任は親についてね。



学院長Side

「学院長！ 正気ですか！？ あの子たちを入れるなんて！？」

ミスタ・コルベールがわしに抗議をするが、仕方ないのじゃ。

「しかしのう……相手も貴族じゃ。この学院は貴族は入学させることがきまりじゃろう？」

「しかしっ！？」

言いたいことはわかっておる。だが、あれはどうみても断れる状

況じゃ……。

「多分断ればわしはおるかトリスティンごと滅ばされていたじゃろう。一時間で出来ると言っておったが、あれは嘘じゃ……」

「そ、それはそうでしょう！ 一国を一時間でなど」

「一分で十分滅ばされるじゃろう」

「……なっ!?」「」「」

教師達がおどろくのも無理がないじゃろう。ワシだってあれを見なければ……。

「誰か、ディテクトマジックを掛けたものいるかの?」

全員が首を振る。そりゃそうじゃな、すぐに杖を折られてしまったのじゃから。

「わしはひそかに机の下で杖を振ってしらべてみたのじゃ。と言っても、四人全員気づいていたようじゃが……。それでな、最後に影の中に居た“何か”を皆は見たかの?」

「は、はい。ティテクトマジックを掛けずとも圧倒的な存在でした。影の中から魔力が溢れ、気を失わぬ様にするだけでも精一杯で……」

そう言う、教師達の手からは血が流れておった。気を失わないように掌に爪を突き刺していたのじゃろう。

「わしもこの通りじゃ」

「……なっ!?」「」「」

わしの傷はもっとひどい。左腕の肉がえぐれ、骨まで見えておる。

「が、学院長！ はやくこれを！」  
「う、うむ。すまんの」

教師の一人が、教師が常時所持しているハイポーションを掛けると、傷はたちまちふさがった。

「皮肉なものじゃな……。ミラグループ代表のせいで出来た傷がミラグループの薬で治るのじゃから」  
「はい……」

今では平民ですら知らぬものは居ないミラグループ。貴族は必ずハイポーションを数本所持している。

じゃが、代表のせいで傷ついたものをミラグループの品物で直す。これは貴族の家とミラグループの関係の縮図のようなものじゃな。破産させて金を貸して乗っ取る。これほどうまくできたシステムもないじゃろう。

「それでの、ディテクトマジックの結果なんじゃが。まずミス・リバルステイ。呼びにくいので、ミス・ミラとする。あの者の精神力はほぼ無尽蔵にあるじゃろう。そしてオクタゴンスペル。あの少女一人でも国を落とすことが可能じゃろう。だからこそ『死神』の二つ名じゃ」

「……………つっ！？」

悔しそつだが事実なのじゃ……。

「そして、ミス・ティファニア。虚無とは嘘ではないじゃろう。系統4つではない力をもっていたからのう。この少女も精神力は無尽蔵。まるで人間ではないようじゃった」

「……………」

全員黙ってしまったわい。

「最後にミスタ・リバルステイ。彼は……」

思い出ただけで身体が震えるわい……。

「がっ、学院長どうしました！？ 顔色が蒼白ですが……」

「彼のなかにのう。たくさんいるのじゃ……」

「な、何がでしょうか」

「影の中に居たものと同等のものが、30。彼を守っているように、こちらを睨んできよったわい。すぐに腕を神経ごとちぎらなければ心臓がとまったじゃろう」

「……」

「この学院でのディテクトマジックを禁止するのじゃ。破った場合は退学としてもいい。もし生徒があれをみたら」

教師達が息を飲むが事実じゃ。

「死ぬ。よくて、発狂」

ディテクトマジックはだれでも使える。しかし、あれを見ることが在ったらどうなるかと思うと、それだけの処罰で脅すほかないのじゃ。

「学院長！ 我々では対処できません！ 王宮に連絡しましょう！」

「ならん！」

「何故ですかっ！？」

「もし王宮が彼の領まで抗議に行ったとしよう。その場合どうなると思うのじゃ！？ 『冥府の番人』にでもこちらに来られたらそれ

だけで国が潰されるのじゃ！ 彼がただ、命令するだけでもいい。それだけで全ての平民や貴族が寝返えるのじゃ！」  
「くっ!?!」

何て強大な力なのじゃ……ミラグループ。

彼が大陸を己の手にしようと思えば、すぐにでも四つの国は潰れるじゃろう……。

まったく、なんてことになってしまったのじゃ……。

16 学院への交渉、もとい脅迫。(後書き)

召喚獣は主の気持にも連動しているので、主が心を許している相手にはそこまでの威圧感を与えません！ 後付け設定！

17 ほのぼの。(前書き)

今回はほのぼのとします。毎回殺伐としてるので。

学院にて

さて、学院に入ったのはいいものの、最初の一年がだるすぎる。魔法の教え方が下手すぎるのだ。基礎を教えて、はい、やってっ  
て感じなのだ。

つまりだ、ランクを考えずに教えて、自己鍛錬して使えるようにしてね、みたいな。放任すぎる。

授業以外はどんな感じかと言うと、まず、俺が嫉妬される。

テファとミラがずっとそばに居るからだ。ミラなんてそのまま主人様って言い続けるし。

で、普段大勢の前では俺は逃げる。出来るだけ弱いと思わせておく。

んで、数人でちょっかい出してきた時に半殺しに。放っておいたら死ぬくらいにだ。

それで、法外な金額が記された契約書を書かせて契約する。回復させ、その後にテファが記憶を消す。

後は親にそれを送りつければ終了。もちろんミラグループの名前は伏せてある。



ミラグループは市民に優しい善良会社です。

「お兄様、見てください！　これがガンダムです！」

「……」

いきなりやってきたリーンが持ってきたのは、大量の真っ黒いブロック。

現在、工場から少し外れた広野。一応不可視状態だ。

「で、それをどうやって使うんだ？」

「よくぞ聞いてくれました！　まず、このブロックの情報を書き換えて、フリーダムの造形に変えます！」

そう言ったリーンは、どうやっているのかわからないが、書き換えてフリーダムガンダムの形に変更する。

「そして、自分のナノマシンを分解し、ガンダムを自分として書きするんですよー！」

リーンが消え、フリーダムの目に光がともる。

『リーン行きまーす！』

次の瞬間、俺の視界は白で塗りつぶされた……。

「……」

光が収まった時、そこには大きなクレーターとそこに浮いてる俺、テファ、ミラ、リーン。

全員が裸。つまり、一回死んだのだ。

リーンは俯いていたが、やがて顔を上げ、両手の人差し指を頬に突き付け。

「……テヘッ」

久々に殺意が湧いた。

「でっ、でもでも！ 科学に失敗はつきものでしょっ！？ では、まら来週ー！」

そう言っつて、リーンは消え去った。

あとには全裸の三人が残った。

ちなみに、リーンは本当に毎週なにかしらの実験成果を持つてくるのだ。

そのほとんどがこの結果を生み出すのだが。

「さて、精霊魔法で服を偽装して部屋に戻るか？」

「……ですね」

「あれ気分的には裸で歩いてるようなものだから嫌なんですけど、仕方ないです」

三人で服を偽装し部屋に戻る。

## 学園・寮

俺達三人の寮室は5階だ。

階段しかないので圧倒的不人気を誇る5階。

実際俺達三人しか住んでいる奴はいない。

工場近くにある簡易ソーラー発電所から電気を引き、井戸しかなかったので水もひいている。

部屋をぶち抜き、一室は風呂に改造済み。階段は破壊し、ドアは屋上にしかない。

「ご主人様ー、この学院レベル低くてつまらないんですがー？　まるでヴィ・リヤステイ領にある孤児院のお遊戯会です」

「確かにそうですね……、身体がなまらないように、結局放課後にミラちゃんと殺試合しないといけませんし」

二人はガラス張りの風呂から顎を浴室にのせうなだれている。ガラスは見えなくすることも出来るのだが、だいたい話しながらなので丸見え状態だ。

俺は薬の精製を一度やめ、顔を向ける。

「まあな。来年あたりに楽しくなるかもしれないが、今はつまらん。まあ、自領では忙しすぎるから、休暇だと思えばいいんだが……授業出ないといけないのがめんどい」

あ、そついや俺達って召喚何するんだろな。韻竜程度だったら出てきた瞬間殺そう。ゴジラ出てこないかな。

「あ、そう言えば今日キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーって子とお友達になりましたよ？　ゲルマニアの子でしたが、何でウィントボナ魔法学校じゃないんでしょうかね？」

おお、テファアさっそく原作キャラと。たしか、俺達が海沿いで、

ツエルプトー家はトリスティンとの国境だから、正反対だな。

ウイントボナ魔法学校とはゲルマニアにある学校だ。

「あの胸……。胸友達なのですねテファ！ お化け胸同士友達になるなんて！」

まあ、デカかったな。俺的には褐色の肌は好きじゃないからテファの方がいいけど。

「ち、違いますよっ！ ミラちゃんだってルイズって子と仲いいじゃないですか？」

「ちつがーう！ アイツはちよくちよく喧嘩売ってくるんですよ！ 一応設定的にはわたしトライアングルでしょ？ ルイズは魔法絶対主義者のくせに魔法の才能ないからひがんでくるの！ あんな貧乳友達じゃない！」

まあ、そいつは虚無だからな。指輪と秘宝こっちで回収したから魔法は一生使えんだろ。

「え？ 同じくらいの大きさじゃ」

「違う！ あっちはAAでわたしはC！ この違いがわからないとはこれだからモンスターはうくー！ うくくー！」

ばしゃばしゃと風呂場で暴れてる二人……。はあ。

「まあ、友達作るのはいいけど、あまり思い入れしすぎるなよ？ いざって時は切り捨てられる程度の仲にしとけ。一定以上は足かせにしかならん」

まあ、本気の死合ばつかやってるコイツらにそついう感情があるかわからんが。

「大丈夫ですよー、殺せつて言われたら殺せますし。今だって、嫌にちよつかい出してくる人いっぱいいるけど、命令で殺してないくらいです」

「わたしも大丈夫です」

ま、そうだな。あの と プログラムは洗脳でもあるからな。一度完遂したら戻ることは不可能だろう。

「でも、ご主人様もなんだかんだうまくやってますよね？ ちよつかい掛けてくる人には容赦ないですが、外面はすごいですよ。友達もいっぱいいますし、女生徒からも結構人気ですよ？」

ミラが褒めてるっぽいのだが、なんでそんな不満そうな顔してるんだ。

「いちいちあんな奴らの相手するの面倒だろ？ こちら側からは広く浅く。あつちからは深く信用してもらわなければいけないだろ？ 魔法絶対主義のやからが多いから、魔法のアドバイスでもして、確実に成果が出れば深く信用してくれる。あとは利用するだけ。お前らもしてやればいい。どうせスクエア以外は雑魚だ。なのにはほぼ全員ドット。一個あげてやっても脅威にならん」

「よく考えてますねー」

「だろ？ あとテファから手を離せ、それだけ長く沈めたらすでに10回程度死んでるだろ？」

ミラが暴れだしてからずっと沈めっぱなしだ。さすがに腕力ではミラに勝てないのだろう。

両方が14歳で止められているから、身長140前後しかないが、腕力だけなら大陸でも上位の方だろう。腕力以外でも上位だが。

「あ、忘れてました」

「ぶはっ！ ひどいです！ 何回死んだと思ってるんですか!?!」

やっぱり死んでたか。

「……死んで胸が小さくなればいいのに(ぼそっ」

「ひどいつ!?!」

ミラはさめざめと泣くテファを見つめる。否、その胸を親の敵のようにみつめる。

そのあと、テファは涙目でこちらを向く。

「そついえば。今日、兄さんはタバサって子見てましたけど、何ですか?」

む。誰にも気づかれない程度にしか見てなかったはずだが……。

「んー……、ちょっと興味が在ってな……」

「?!?!」

二人が浴槽からザバっと上がり、拭きもしないで部屋に入っただけのまま外に出ようとする。

二人の髪を掴み引き止める。

「裸で何処に行くつもりだ……」

キッと俺を睨みつけ、

「だって！ あのご主人様が興味を持つんですよ！？ 貧乳根暗だと思って油断してました！ 殺してきます！」

「兄さんは人間に興味なんてないはずですからね！」

純情だったテファもプログラムを受けて殺伐となってしまうた。

「違う。二年の召喚でな、多分あいつはイルククウ呼ぶからな。どうすっかなと……」

イルククウはだいたい家にいるから情報もそこまで持つてはいないが……。何しろバカだし。

いっそ、タバサを引き込むか。あいつ魔法は糞だけど頭いいから利用価値はある。永遠の忠誠だって簡単に得る方法あるしな。

「へ？ 何でわかるんですか？ ああ、でもご主人様がそう言うならそうなのでしょうね」

二人はうんうんとうなずく。

変な信頼関係が出来上がってるな。

とりあえず、二人の髪を掴んでひきずり、浴槽に蹴り飛ばす。

「兄さん。今思ったんですが、例えば私達の子供はナノマシン構成体なのでしょうか？」

「……何故思った？」

「いえ、乱暴に扱われるのも嫌ではないのですが、妊娠してたら赤ちゃん死なせてしまうのではないかといったところから」

してないのになんで思ったんだコイツ。

「んー、ナノマシン構成体だろうな。ナノマシンから生まれるんだからそれ以外あり得ないだろ？」

「そうすると、年を取らないんでしょうか？　そもそも、お腹の中で大きくなるのでしょうか？」

どう説明すつかな。

「それはわたしがお答えしましよー」

いきなり二人の後ろにリーンが現れた。しかも、裸で……風呂に入る気まんまん。

「まず、お兄様と、テファ姉様とミラ姉様が年をとらないのは、故意に未来のお兄様が止めたからです。それ以外の、操作をされていないナノマシン構成体は年をとります。普通に育つと人間と同じで死にますね。死ぬって言うか、ナノマシンに戻るだけです。なので、一定まで行ったらお兄様がとめるのがおすすです。今は出来ないでしょうが、慣れれば出来ます」

ふむー、なら作らない方がいいかなしばらくは。あれ？

「じゃあ、ハーフは？　人間との」

「はい。それはですねー、まずお兄様と体液交感をすると、相手の身体に入って相手もナノマシン構成体を作り替えられます。ナノマシン自体はお兄様に定義されているので、劣化しますが。これは、お兄様にしか適応されませんけどね。第一期ナノマシンがお兄様に次に体液交換をすると、第二期になります。これは、テファ姉様やミラ姉様、わたしですね。最初のお兄様が性交をしたときに移ったのです。まあ、唾液くらいなら大丈夫かもしれませんが。散布しちやいますので。性交は精子自体がナノマシンなので、確実に移ります。」



子供も第二期になります。で、更にその子供が他人と子供を作ると、第三期です。寿命が延びる程度ですね。第二と第二での子供は第二が生まれます。ハーフだと劣化するので、出来るだけ近親相姦をするように家訓に残せばいいと思います」

いやな家訓だな……。

第二期を存続されるためには父親は俺にしかねない。つまり、テファとミラの子供同士で子供を成すか、俺が娘と子供を産むしかない。ナノマシンだから劣性遺伝はしないと言うか、むしろ優勢遺伝なのだが。なんとなく嫌だな。

「あ、あと特典として毎回処女です！ やりましたねお兄様」

ニコニコ言うがどうでもいい。確かにナノマシンにもとの状態に戻されるが。

テファとミラくねくねするな。キモチワルイ。

「コーディネーターみたいのがうまれますね。しかも相当能力が上がった種が。将来ウィデイス種って言われるかも知れません。不老不死、精神力無限、ナノマシンも操れる。しかも生まれた瞬間からお兄様に絶対命令権がありますから、裏切ることはないし。未来では、王室関係全てそれでした」

確かに、あの未来の俺ならやりそうだ。テファとミラもなんだかんだ言っただけにしてたしなアイツ。ちゃんと人間を人間として見られるようになってたし。人間ってか優越種か。

「韻竜との子供もいましたが、あれは」

「いや、それはいい。自分で作って何が産まれるか調べたいから」

竜とナノマシンのハーフ。面白そうだな。

「そうですか、ではわたしは帰りますね。屋敷の温泉に入り直します。やっぱり温泉に限りますよねー」

そう言つて、リーンは消え去つた。

早く俺も転移覚えたい。温泉入りてー！

てか、温泉作ればいいんじゃない！

「テファ、ミラ。呆けるな。今から温泉作るぞ。細かなところは明

日業者に来てもらつて、土台は作るつ」

「ふあい」

「わかりました」

夜だけど音消せばいいか。

眠い……。

昨日徹夜で温泉作りをした。

ミラとティファの案で、俺達用+男風呂、女風呂を作って学院に解放することにした。

貴族のガキは金の価値なんて知らないくらいにガバガバと使うので、一年間使えるフリーパスを売るのが。

その後、病院を作ることにした。

魔法での怪我が多いので、儲かるだろう。ハイポーションの販売もやってるし。

病院はエリクサーと万能薬を使えばハイポーションよりすごいつてことで多めに金をとれる。使ってる薬を教えることも売ることもしないが。

めんどくさいので、俺が半殺しにした奴らもこっちに行ってもらおう。場所は工場のすぐ脇にある。

で、今は授業中なんだが……。

「暇ですねご主人様……」

「ああ」

「うわあああああ~~~~」ズドン『」

「眠いです」

「だな」

「きゃあああ助けて~~~~」グシャ『」

アホらしい。

今は野外でコモンマジックのレベテーションの授業なのだが……。確かに一般魔法だけあって誰でも使えるものだ。

だが、貴族は目立つ魔法が好きなのであまり練習をしない。

一年の初めのほうだし、これが現実なのか。

「プログラムの最初にレベテーションが入ってる理由がわかりました」

「いや、制御を覚える為に入れてるわけじゃないぞ。てか、うちの奴らは厳しい環境で育ったから、最初から使えていたろ」

うん。制御じゃなくて、あれは精神力を伸ばす訓練だ。そのあいだに早口を練習すればいいってことで入れている。

「それにしても、何で飛ぶことも出来ないんでしょうか？」

「貴族の親の加護で甘く育ちすぎたんだろ。ほんと役立たずばかりだ」

「ですねー」

「ミラの最初もこんなもんだった」

「……そうですね」

俺達三人はふわふわと浮きながら好きな事をやっている。

俺は風の精霊に頼んで土台を作ってもらい、領地の書類。

ミラは最近やっと絵がうまくなったので売り始めた週刊ミラ。地球には何処にでもあるような漫画だ。今では使いふるされた表現なども、こっちでは新しいので、教えて作らせている。

テファは俺が渡した日記を書いている。

頭のいい奴が見ればわかるだろうが、実は俺やテファがやってることはすごいことだ。多分、出来る奴は、大陸では三人。他はエル

フだろう。

だが、俺達が魔法を滅多に使わないので、魔法使えないからコモンスペルばかり鍛えた奴らって言われている。

コモンスペルっていうのは生活に使うような便利なものが多く、実際系統魔法より俺は好きだ。

コモンスペルのブレイドなんて、鍛えれば岩も豆腐のように切りさけるのだ。

「にしてもミラ。お前の友達のルイズが飛ぼうとしてるのに、失敗魔法の爆発で他の生徒怪我させてるぞ」

俺が指さす方向には、飛んでいる生徒を器用に撃ち落とすルイズ。あれ魔法って言い張ればいいだろうに。

「うクーー！！ 違うのっ！ あれは友達じゃないの！ でも、そのお陰でうちの出張薬品店が儲かってますよ？」

だろうな。授業中なのにうちの薬品店に行列が出来てるし。たいしたことない怪我なのによくあれだけ金使うよな。

「なんであんなに痛がるんでしょうね。腕とか無くなってるなら納得いきますが、あの程度でわめかないでほしいです」

まったくだ。うちの兵士を試してみる。痛みなんて感じなくて魔法にすら突っ込めるぞ。

にしても、みんな精神力なすぎだろ？ 一分程度で降りるってなんだよ。まあ、気絶するまでやっているわけじゃないが。

「君達は余裕そうだね」

「おうギーシュ。こっから見てたけどお前は結構飛ぶの上手いな」

「こちらに歩いてきたギーシュに顔すら向けずに答える。

「よしてくれよ。照れるだろ?」

こいつは扱いやすいから好きだ。

身長も高い、顔もいい、金髪のさらさらした髪。理想像だな。キザすぎるが。

こいつがドットで悩んでるときに、教えてやったら懐かれたのだ。もっとも、

「ウイデイス。美しい妹君を持って羨ましいね。どうだろう君達、今日の夕食」

「結構です」

「そ、そうか……」

狙いはこいつらなのかもしれんが。

テファとミラは見た感じ姉妹みたいだ。

両方とも長い金髪だし、身長も大して変わらない。小さいが……。の割に胸がでかい。テファもそうだが、ミラだって身長的には大きい方だ。

顔の造形は違うが一般的には美しいってレベルだろう。

厳しい修行のせいで太ってはいないし、ナノマシンのおかげで筋肉質でもない。

男からの人気は高いのだが……どうも下ごころがある男は嫌いらしい。

いつそ、俺みたいにヒドイ扱いの方がマシだとか。

「ギーシュ……、お前の口説きは下手だな」

「な、何を言うか!? これでも僕を慕ってくれている子猫ちゃん

「私たちは大勢いるんだぞ!？」

ミラとテファは鳥肌を立てて嫌がっているが……。

「それに、美しい女性を口説かないのは相手に失礼だろう?」

「いや、全然。むしろ殴ってやった方が手に入りそうだ」

「はあ……。ウイデイス。君はレディをわかっていないよ。此処だけは相容れないようだね」

ため息をつきながらギーシュが言うが。何処も相容れないだろう。

「てかギーシュ。このクラス何人に手だしたんだ?」

「いやー、美しい女性が多くてね、おもわず全員に声を掛けてしまった。あ、勘違いしないでくれよ? まだプラトニックな関係だから」

「なるほど。だから後ろの奴らは怒ってるのか」

「へ?」

ギーシュは首をギギギと回して後ろを見る。

そこには、5人の少女が仁王立ちしていた。

「な、なな!?! ち、違うのだよ君達! これは、そう! ウイデイスに話があつてね!」

「あら、わたしとテファを口説いたのは遊びだったのね。なら今度から近寄らないでいただきたいわ」

「何を!?!」

ミラが猫つかぶり状態の言葉になり、追い打ちをかける。

「ギーシュ……。私はね。ミラさんやテファさんの方にあなたが行

くから心配でみていたの。でも、恋人だから信じて、ミスタ・ウイデイスと話をするのだと思っていたわ。そして周りを見回してみると、同じように見つめている方がいらっしやるじゃない？ それで声をかけたら自分はギーシュの恋人だと。それが5人も。恋人って言うのは友達って言う意味なのかしら？」

青筋を浮かべた少女の言葉に周りも頷く。

「ち、違っぞ！？ やはり美しい女性を」

「連れて行ってくれ」

「わかりましたわ、ミスタ・ウイデイス。それにミラさんとテファさんもごきげんよう」

「待ってくれウイデイス！ なんとかし」

「静かにして！」

5人の女性に襟を掴まれ、ギーシュは連れて行かれた。

「アホですね」

「まーな」

「いつそ兄さんみたいに全員恋人未満にしておいて、向こうから寄ってこさせればいいと思います」

「んー、俺はそんなつもりはないんだがな」

「でも、ご主人様のファンクラブが領内にはありますよ？ かなり大きな規模の。特殊なのだと、『ウイデイス様に罵られ隊』とか『ウイデイス様に殺されたい』とか」

「あとは、『ウイデイス様に入れ隊』とかありますね。こちらは男性です」

何だろっそれ……。入れようとした穴から槍突っ込んで晒す。



「はあ……。お前達にだってあるだろうが。『ミラ様を影から見てい隊』とか、『ティアニア様の足を舐め隊』とかだっけな。『お姉様と呼び隊』もあつたな。これは女性だが」

「ま、まあそうですね。って言っても、領民約30万人はみんなご主人様やヴィ・リヤステイ家を崇めているので仕方ないです」

んむ。基本ひどい生活を改善してやってるからな。まあ、これも計画なのだが。

裕福になり、赤ちゃんブームもきてるしな。

未開拓地がどんどん移住で広くなっている。

「それは仕方ないか。出かけるだけでも、もらった物で両手毎回ふさがるしな。その点、トリスティンには顔がバレテないからゆっくり出来ていいかもしれん」

「そうですねー、この学校は貴族同士の繋がりのために貴族が集まっていたりしますが。わたし達の場合、どこを潰そうか考えてる感じです」

それは否定しないでおう。

「そう言えば、リンちゃんに聞いたんですが、ルミア姫殿下がプログラムを受けているらしいですよ」

「ブツ!? アホか!? なんてあいつがうちの軍のプログラム受けてんだよ! これで王室に返せなくなるぞ!？」

プログラムなんて機密の塊だ。受けた場合永遠の忠誠が約束される。破った場合死刑だ。

あの領では、人殺しと大犯罪、火を放つなどしか死刑はない。その例外が機密を漏らすことである。それは、王宮でも例外ではなく。あの領はゲルマニアでも治外法権なのだ。

「ああ、それならご主人様のところに嫁ぐとか言っていましたね。楽しいからって」

「あいつらしいが、どんな理由だよ？ 毎日遊園地や水族館行つてると思ったら楽しさを調べてたのか……」

「わたしはいいですよ？ 第三の妻でしたら」

つまり、自分とミラが第一、第二ってことか……。

「テファ。もちろんわたしが第一だよな？」

「……」

「うくー！ 純情そうにして奪うつもりだ！ なんて腹黒テファ！」

アホらしいな……。

「とりあえず、ミラは仕事が出来ないと結婚なんて一生無理だな」

「……わたし紐でいいよ？」

「俺が嫌だっつの！ そんなこと宣言すんな！」

ホントコイツなんもやらないから……。毎日屋敷でお菓子くってグータラ生活だ。

「まあ、結婚は寿命がバカみたいにあるからどうでもいいとして……。にしても……」

俺は視線を前に向ける。

「ホントへたくそだなアイツら。てか、これで何回目のレベテーションの授業だよ。魔法って結局、自己鍛錬でしか上達しないから授業意味ないよな」

ふらふらと飛んだり、急上昇下降したり。壁にぶつかったり地面にぶつかったり、他の奴にぶつかったり。ギーシュはぼこぼこにされてるし。

「ままならねえな」

「暇ですねー、これあと二時間くらいありますよ？　なんで三時間授業にしたんでしょうね……ふぁ」

テファは手で口を押さえて欠伸をしている。その気持ちもわからないでもないが。

「んじゃ、コレやってろ」

「嫌です」

俺が手渡した書類。領の経営のだ。二人はそっぽを向いて拒絶する。

「あのなー、今の生活だつて仕事してるから出来てるんだぞ？」

「でも、お金だつてたくさんあるじゃないですか？　早く他の国を滅ぼして王になりましょう。それで独裁政治です！」

「もう独裁政治だろが。もうつてか初めからな」

てか、この世界が独裁政治ばつかなのだ。エルフだけが共和制らしい。人間が一番糞だよな。

にしても……。

「あー暇だ。俺は寝る」

そう言って、俺はかなりの高さまで移動する。

隣に風を固め、書類を乗せる。それを飛ばないように精霊にお願いして横になる。

「んー、わたしも寝ます」

「ぽかぽかしてあったかいですね」

二人も来たようで、隣で寝る。

「下からスカート見えるぞ？」

「安心してください！ この無駄にでかいマントを操って毎回見えないようにしてますから」

「丸見えなんだが？」

「ご主人様にはいつも裸見られてるし今更ですよ」

ま、それもそうか。

俺はそのまま目をつむり、夢の中に入る。

## 18 帰省。両親。

ヴィ・リヤスティ領 首都ミラ・バ・ケツソ

今は夏季休暇と言うことで俺達は帰省している。

何と言うか……リーンが俺のいない間に好き放題やったのだろう。しかも俺の名前で。

首都ミラ・バ・ケツソは何故か文明が地球超えた感じすらする。

白い建物がたくさん立ち並び、マンションなども建っている。

お掃除ロボみたいのも動いてるし……空中に浮かぶディスプレイはなんだろうか？

そもそも、国民の平和を願ってるみたいなの俺のプロモーション……撮った覚えすらないんだが？

一体半年で何があったのだろうか？

となりではミラとテファが茫然としている。

「あ、ウィデイス様だ！」

声が出た方を向くと、子供が俺の方を指さしていた。まあ、これも信頼を勝ち取る方法か。

俺は軽くほほ笑んでやる。

「……ウイデイス様!?」「」

は? 近くにいる奴らが一斉にコチヲを向く。

「ウイデイス様、これをどうぞ。私が開発したお菓子でございます」  
「あ、ああ。ありがとうございます」

手に渡されたのは、あれだ。ケンタツキーで売っているメーブルシロップを付けたよくわからないやつ。

てか、開発班何でこんなところ居るんだよ!?

「ウイデイス様、コレもどうぞ。ミラ様もティファニア様も」

「あ、はい。ありがとうございます」

「ありがとうございますね」

次は牛丼? てか俺が経営してるミラ野屋の店長かよ。

「ウイデイス様こちらを」

「ミラ様とティファニア様のご洋服を」

「ウイデイス様」

わらわらと集まってくる人たち。皆それぞれ品物を持っているが

……。

「静まれ!」

俺は大声で叫ぶ。

その声に反応し、皆とまる。

「まず、非公式の訪問に対する歓迎に礼を言おう。ありがとう」

俺は周りを見つめながら言葉を続ける。

「しかし、ここは首都である。皆が集まって通りを邪魔すると、他の民が迷惑するだろう。気持ちは嬉しいが、それは皆が誠心誠意働きた品物だ。それをもらうことは私には出来ない。既に領主としてそれ相応の税金はもらっているのだから。これ以上もらえば他の領主と同じ独裁制になってしまう。私に献上するくらいならばその品を売り、より自分の幸せを掴んでくれた方が私は嬉しい。では、自分の仕事に戻るといい」

俺の言葉に、皆が一斉に頭を下げ、自分の店に戻ってゆく。

何故か泣いてる奴もいたがわけがわからない。

「ご主人様ー、今のを直訳するとどうなりますか？」

ミラが下から俺を見つめ、声をかけてくる。

「ん？ これ以上荷物が増えると邪魔だから勝手に売ってる。ほしい物は自分で買うからいらねーよ。だ」

「はあー……。ご主人様は罪作りなお人です」

民を操るのは必要だぞ？

「さて。ミラとテファ。どこか行きたい場所があるか？」

「あ、わたしがいいですか？」

テファが隣で手を上げる。

「いいぞ？」

「水族館って場所に行ってみたいですね。行ったことが無いので」

そう言えば俺もないな……。

「んじゃー、行くか。場所わかるか？」

「はい！ バツリチです！」

テファの手にはミラ・バ・ケツソ観光ガイドと言う本が。  
さっきもらったのかな？

「では、ついてきて下さい！」

つきつきしながら小走りするテファを追ってついていく。



「わー、これが水族館ですか。ご主人様！ あれ！ あれ食べたいです！」

「黙れミラ。此処のは食べちゃだめだ！」

ミラが指さしたのはひとときわ大きな水槽。中にはクジラが泳いでいた。

「ぶー。何のために泳がせてるんですか？」

「いやいや、鑑賞だろ！？」

「テファを見てみる！ あそこでちゃんと涎を……テファ？」

じつと水槽の中を見ていたが、俺に気づき慌てだす。

「え？ え？ 違いますよ？ これマグロですよね？ おいしそうなんて思っていますよ！？」

慌てて手と首をぶんぶんと振る。

「いや、お前が刺身を好きなのは知ってるけどさ。どうせ屋敷に行けば嫌でも食べれるんだから鑑賞用まで食おうと思うな」

「だから違うんですってばー！」

俺の腕を掴みぶんぶんと振るが落ち着いてほしい。

「あ、ご主人様！ わたしあれほしいです！ かわいいです！」

ミラが反対の腕を掴んで俺を引っ張る。指さしている方向にはペ

ンギンが居た。

やっと普通に見る気になったのか。

「わー、いいですねコレ。ん？ この柵邪魔ですね。壊しましよ

」

「アホかつ！ どんな迷惑客だよお前！？」

手でねじ切ろうとするミラの頭を殴って止める。

「な、何するんですか！？ この領の物はわたしの物！ わたしの物はわたしも含めてご主人様の物ですよ！ ってわけで」

「黙れニート！ おまえは遊んでるだけで何もしてないだろが！？ 養ってもらってるだけでもありがたく思え」

「だから、わたしはご主人様の物って言ったじゃないですか！？」

つまり、働かない代わりに養え。代わりに所有物にしているよ？  
って舐めた考えしてるのかコイツ。

こいつ、俺に捨てられたら戦争以外で使い物にならないな。

「まー、でもペンギンか……。それくらいならいいかもしれん。確か未開拓地の北部に生息してた奴だよなコイツら。こんど屋敷に連れてこよう。設備作ればなんとかなるだろう」

「本当ですか！？」

目をキラキラと輝かせながらこちらを見つめてくるミラ。

「ペンギンなんてかわいいものだろうが！？ お前が連れてくる猛獣に比べたらな！ お前のせいで屋敷の庭の一角が動物園だ！ なんで屋敷のプールにイルカまで放し飼いにしているんだよ！？ 拳句に連れてくるだけ連れてきて世話しねーし！」

本当コイツの性格には参る。勝手にいなくなって、戻って来るといつのまにか生き物が増えているのだ。今ではペガサスやユニコーンも20匹くらいいる。

「じつとこつち見てるんですよー、すぎるように。だから連れてきて上げたんです!」

いやいや。俺は一回お前を追って見たことあるよ。息絶えそうになつて、殺さないでくれとお前を見る動物を。それを懐かれてると勘違いしているのはお前くらいだ。しかも、怖くて素直に言うことを聞く動物達を、わたしが大好きなんです。とかよく言える。

そしてテファに視線を移し……。

「そろそろ飯行くか……? テファが涎垂らしてマグロ見てるし。何れガラスぶち破って食べそうだ」

「そうですねー、わたしもペンギンがいればそれでいいです。あ、いい場所がありますよ?」

「んじゃ、そこでいいや。テファー、飯行くから戻ってこい」

「あ、はい! ごはん! お腹すきました!」

そんなの見ればわかるっつもの。

## 焼き肉

「見てください！ 此処はわたしが経営しているお店！『死神の釜』です！」

目の前にはきらびやかな見た目の店が在った。

成金丸出しだ。

の割に人が少しかいない。

確か、うちの系列で唯一大きな赤字が出ている店がこの名前だったよな。

ミラが経営してたのか……。

「入ってください！ 此処はすごいですからね！ 一応貴族専門店です！」

ミラが走って中に入って行くので、俺とテファも後を追う。

数十分後。

「おい。これはなんだ？」

「何って焼き肉ですよ？」

確かに焼き肉だが、ミラも焼き肉好きだしな。  
だがな

「何で肉が一枚1キロくらいでスライスされてるんだよ!？」

ありえないだろ!？ それが10枚くらい積み上がった皿が三枚、  
目の前に置かれている。

「よくぞ聞いてくれました! これは、普段平民には手が出せない  
ような最上級の部分を使っているんです! あまりとれない部分な  
ので、コレ一枚300エキューくらいします! 一皿3000エキ  
ューですね! いつも残って使用人のまかないにもなっています!  
あたついたつ」

俺はミラの頭を何回も叩く。

「ほんとバカ! お前はもうなんてアホなの!？ 日本円にしたら  
一枚300万だぞボケ!？」

「日本ってなんですか!？ あ、地球のですね。金額の多さがわか  
りませんが」

エキューでわかればけ!？

他の領だと一年の年収家族四人で150エキューだからなっ!？

俺がいなかったらこんな店一週間で潰れる！

「よし。わかった。この店潰すように申請しておく」

「待って下さいよーそれだけはー……あ、お肉焼けた」

「絶対潰すっ！」

「ひほいっ！」

食べながら文句を言うミラを無視して宣言する。

うむ。確かに柔らかいしうまい。だが、これは屋敷で少量がいいな。

こんな食えん。ってミラ！？

大前どんだけ食うのはえーんだよ！？ 三皿ともお前のだったのかよ！

焼けるのを待つ間に生の肉食うって原始人か！

他の街。

俺達は領内の首都以外の場所に来ている。

首都は比較的金持ちの家が多い。最初から俺の領に住んでいた人がほとんどだ。

そして、他は後から移住してきた奴らが多い。

って言っても、貧乏かと言うとそうでもない。ちゃんと仕事も与えているので、普通に生活は出来ているだろう。兵士もちゃんと巡回しているしな。

「あ、兄さんあれ見てください。兄さんに似てますねー」

む？ 俺に似てるって未来の俺か？

「本当です。ご主人様が年取ったらああなりそうですね」

ミラとテファの視線を追ってみると……おー、確かに俺は将来……え？

「あれ？ どうしましたかご主人様？ 似てて驚きましたか？」

「兄さん？」

俺が固まっているのに気付いたのか、二人が声をかけてきた。

俺の視線の先にはさっきの似てる人。

男と女、男の子が楽しそうにしている。一般的な家庭だろう。

俺はその40台くらいの夫婦の顔に見覚えがあった。

「ウイディス・ラ・リバルステイン・ヴィ・リヤステイの名において命じる！ 兵士達はあの家族を捕えろ！」

俺の叫びに一瞬にして兵士がそちらに走る。やはり、プログラム受けてると反応が早いな。

「ご、ご主人様！？ 似てるからっていきなり捕縛ですか！」  
「兄さん！？」

他の市民達が皆何事かとこちらを向いている。

この領に置いて俺の顔を知らない奴が居ても、俺の名と腕輪を知らない奴はいないだろう。

皆驚きに目を見開く。領主がこんな子供だからか？ まあ、それはいい。

俺は兵士にとらえられた夫婦と子供に近づく。子供は6歳くらいだろうか？

「りよ、領主様！？ わ、私達は何もしておりません！」

その言葉を見無視し、ミラとテファに話す。

「ミラ、テファ。こいつは俺に似すぎている。何でわかるか？」  
「んー、確かに似てますよね。そりゃもう兄ですか？ ってくらいに……え？」

「普通に成長したらいつかこうなるかもです……ん？」

ミラとテファは何か感づいたようだな。



「前に話したよな。俺が捨てられたって」

次の瞬間、ミラとテファが夫婦の喉にブレードを突き付ける。子供が大声で泣き出すが、わずらわしいな。

「兵士、口をふさげ。命令だ」

「ハッ！」

兵士が子供の口を布でしばりつける。

その後、俺は夫婦に話しかける。

「なあ、貴様。何もしてないとはよく言えたな？ 生まれた瞬間に子供を捨てた夫婦がよくそんなことを言えたものだな、「父親と母親」さん」

「「「なっ!?!?!」」」

兵士や、あちらこちらで声上がる。

夫婦も今気付いたようだった。

兵士は俺の父親とのことで、離そうか迷っているようだが、

「離すなよお前ら。俺はコイツのことなんて両親だと思っていない」  
「は、ハッ！」

別に今更親がどうこうとかはいい。むしろいらない。

ただ、生まれたばかりの俺を森に捨てたのはムカツク。多分、じーちゃんに拾われなかったら確実に俺は死んでいた。

「お、お前テリアかつ!?!」

「テリア？ 俺は名前すら与えられずに捨てられたんだぞ？ 一体いつそんな名前付けられた？」

「覚えていないかもしれないが」

「忘れるわけがないだろう？ その鼻の上のホクロも、頬に出来た傷も。名前すら付けてもらっていないこともな。じゃなかったら何故俺が一目でお前達が両親だとわかる？ 俺は特別でな、あの時の記憶も残ってるんだよ」

「なっ!？」

にしても 俺は視線を少し下にずらす。

うち領の指輪から、社員の父親に、領民の母親と子供ねー。

「ふむ。別に捨てたならばそれはそれでよかった。だがな、何故俺の領にいる？ 普通捨てたら一生顔を合わせたくないと思うだろう？ これだけ顔が似てるんだ。なんとなく領主が俺だってわかっていただろう？ なあ？」

俺は目を細めて捨てた男を見つめる。

「そ、それは……」

「それは……？」

「この領なら平民でも幸せに暮らせると噂が……妻の腹には子供もいた」

「子供ねー、捨てられた子供が言うのもなんだが、都合よすぎないか？ 俺のことは捨てて、そっちのガキは捨てた子供の領で幸せに育つ。ありえないありえねーよ」

そこまで口を瞑っていたミラが口を開く。

「ご主人様。殺しますか？ さすがにこれは親としても人間としてもダメでしょう。いっそ殺した方がいいです」

ふむ。まあ、それも一理だな。だが、そんなことすら生易しい。俺は夫婦と子供の指輪に触れる。それだけで、指輪が砕け散る。

「ウイデイス・ラ・リバルステイン・ヴィ・リヤステイが命じる。市民権の剥奪。財産の没収。永久に市民権の取得を禁止する。ヴィ・リヤステイ領からの追放を命じる」

「なっ!?!」

「ハッ!」

「ま、待ってください領主様! わたし達には子供もいるんです! それに、お腹の中にもう一人赤ちゃんが! いま此処を追い出されたらどうやって生きてゆけば!?!」

女の方が俺似すがりつく。

「知らん。その年じゃ無理だと思うが、身売りでもすればいいだろう? 子供子供って、子供を捨てた親のセリフじゃないな。捨てさえしなければ、今の俺の立場はお前達だったものを。だが、既に遅い。此処は俺の領だ。この領は民ならば無条件で移民することが出来る。しかし、お前達は民ではない。俺にとっては犯罪人だ。おい兵士。こいつらの写真を撮って市民権を永久に取れないようにしろ。あとは領から適当に追い出しておけばいい。領内で見つけた場合死刑だ。以上」

「ハッ! では、失礼いたします」

三人は兵士に連れて行かれる。

振り向くと、民達がビクつとする。

「ああ、今の話を聞いていただろう? あれは俺が生まれた瞬間に俺を捨てた屑だ。その後拾われなかったら、今のヴィ・リヤステイ領はない。俺が恨むのも当然だろう? それに殺しはしていない。」

ヴィ・リヤステイ領に暮らす他の平民には幸せに暮らしてもらいたい。その中にアレは必要ないのだ。仕事に戻っていいぞ」

皆が俺に頭を下げ、散ってゆく。

まあ、子供の時に捨てられたってことで情は稼げるだろう。噂が広まればそれでもいいしな。

民のためってのは嘘だけど。民は金を集める道具だ。

「兄さん、いいのですか？」

テファが心配そうに俺の顔を覗き込む。

「そんな顔をするな。俺は気にしていない。どのみち、金も職もなくて子供が二人じゃ死ぬだろう。あの場で殺さなかったのは俺の信用を下げない為でもある。ま、あの親なら子供も捨てると思うけどな」

さっきいた子供は大丈夫かもしれないが、生まれてくる子供は捨てるだろう。まあ、そこまで生きながらえればだが。

「ん？ どうした？」

俺の両腕に二人が抱きつく。

「わたし達は幸せな家庭をつくりましょうねー」

にこにこ俺を見上げるミラ。

「子供には幸せになってほしいですねー」

少し顔を赤らめているテファ。  
俺はため息をつく。

「まだ、結婚するとも決まっていけないだろうが」  
「でも、“まだ”ってことはいつかしますよねー」

ま、そうだな。三万年後にもコイツらは居たしな。

「結局、幸せってのは金なんだな。俺を捨てた時はあんなつらそう  
だったのに、今では幸せそうにしてやがったよアイツら」

「「そんなことありませんっ!」「」

二人が声を合わせて叫ぶ。

「「愛ですっ!」「」

愛……ねー。

「あの夫婦も愛し合ってたぞ?」

「「……」「」

うん。やっぱり金だ。

「でも……わたしはご主人様と一緒に居たら幸せですしー」  
「そうですっ! 愛とお金があればいいんです! 今が幸せってこ  
とですね!」

テファが纏めたっぽい。結局金も必要じゃん。

「ちなみに、俺はお前らを愛していないぞ?」

まあ、人間の中では一番大切かもしれないが。

「いーんです！ 今は一方的に愛していれば、いつか三万年後のようになりますから！」

ま、それは同感だな。未来の俺は幸せそうだったし。

「んー、じゃ。帰るか？」

「あ、待つてください！ ペンギンとつてきてから帰りましょう！」

「……水族館のはだめだぞ？」

「大丈夫です！ ちよちよつと数万キロ程散歩に出かけるだけですから！」

全然ちよちよつとじゃない。

しかも、もう夕方だし。

「んー、まあいつか。30匹以内だからな？ 色々種類あると思う

けど各30つてのは無しだから」

「わかってますって。ペンギンが30匹ですよ？ あとは、アシカと白クマで我慢します」

ダメだコイツ……なんもわかってねーよ。

そのまま俺達は上空に飛翔し、一気に北極を目指した。

あとで気づいたのだが、リーンに頼めばすぐだっただろう。

19 来訪者

屋敷

「ふふふー、やっぱりかわいいですねー。ねー、マゼンタ。あ、イエローレッドそっちはだめですよー」

今、目の前ではミラがペンギンと戯れている。

「はふー、柔らかくて素敵です」

テファは白クマに抱きついて幸せそうだ。

ちなみにこの白クマ。テファがふるぼっこして連れてきた。強い者には従うのだ。

「はー、お前ら。まじで動物園だろ此処？」

「ご主人様だつて、前にわたしが連れてきたレッサーパンダと戯れているじゃないですか!？」

「いやー、こいつらかわいい。この顔とふわふわの尻尾。癒されるわー……。」

「コホンツ……、ウイデイス様。お客様がお見えになっているのですが？」

「あー、ミルドか。今俺は忙しいから帰ってもらえ」

もう、こんなかわいいやつらがいるのにヒゲ男爵のミルドの顔なんて見たくない。

「しかしウイデイス様。ご学友らしいのですが？」

「学院には俺の正体隠してるの。だからありえない。今は俺忙しすぎて死んじゃうから」

もう、こいつらのかわいさで俺は死ぬ。いや、むしろこいつらの為なら民を滅ぼしてやろう。

「お主人さまー、ほんとに知り合いつぱいですよ？」

ミラが俺の背後を見て茫然としている。

「んー？ マジかー。じゃあ、お前が相手してやれ。俺は知らん」  
「でも、どう見てもご主人様への用ですよ？ 後ろ見てくださいよ」

俺が後ろを振り返ると、青髪の少女が土下座をしていた。なぜっ



!?

「あー、おまえレッサーパンダ様に弟子入りでもしようと思っ  
てるのか？ やらんぞ？」

「……違う」

なんだろう。タバサが訪れる理由なんて一つしかないけど。

「んー、で？ 何で来た？」

「お願い」

ふむ。やはりか、ここらでコイツを駒に加えてもいいか。

「わかった。とりあえず話は聞くから屋敷に入れ」

「わかった」

んー、なんでこいつはこんなに言葉数が少ないんだ。イライラす  
る。

「ミラとテファはー……」

二人の方を向くが、二人とも幸せそうだからやめた。

「仕方ない、お前は俺と一緒に来るかー」

一匹のレッサーパンダ『トレンタくん』を肩に回り込ませ、屋敷  
に向かう。

「あなたのお父様に会いたい」

「はー？」

俺の父親に会ってどうするんだコイツ!? 既に追放したし!

「お願いする」

「俺の父親に会って何をお願いするんだよ……」

金もないし何も無いぞアイツ。

「母様を治してほしい」

ん? あーそうか。コイツ俺が此処にいるって知らないで来たわけね。

「なあ、お前今までも此処に来たことある?」

「何回か」

「その時は?」

「追り返された」

そりゃそうか。俺が面会謝絶してるからな。たくさんくるからつぎくつ。

「今回は?」

聞いてみると、自分の服を引っ張った。学院の生徒ってわかるな。

「あなたの友達か聞かれた」

「で?」

「頷いた」

「俺とお前友達じゃないの知ってる?」

「くりりと頷く。

「で、入れるかもしれないから嘘ついた？」

また頷く。まあ、コイツもチャンスだと思ったんだろっな。

「で、此処の領主がミラグループ代表ってわかってきたわけ？」

頷く。くそ。じれったい。

「此処の領主の名前知ってる？」

「ヴィ・リヤステイ侯爵」

「名前は？」

「知らない」

まあ、基本わからないはずだ。家名しか出していないし。ミラグループの方には名前伏せてるしな。

「俺に父親はいないの」

「出かけてる？」

表情が曇った。

「いや、俺には父親なんて初めからいない」

こいつ本当に頭いいのだろうか？

「ウイデイス・ラ・リバルステイン・ヴィ・リヤステイ侯爵。それが此処の領主で、ミラグループ代表だ」

「あなたは？」

「名前すら知らなかったのかよ……」

もう嫌だ……早く帰ってほしい。

「俺はウイデイス・ラ・リバルスティン・ヴィ・リヤステイだ」

俺の言葉に目を見開く。おお、意外な表情。普通に『そう』くらいだと思っただけ。

その後に、屋敷を見つめ、俺に視線を移す。

「あなたの？」

「ああ」

「大きい」

「……そりゃどうも」

なんだろうこの虚しさ。

確かに王宮よりデカイけどさ……、反応がそれだけか。

「まあ、話は屋敷の中で頼む。ついてこい」

俺が歩き出すと、素直についてくる。

俺さ……メガネ嫌いなんだ。

## 応接室

応接室にタバサを入れ、俺とテーブルを挟んだ席に座らせる。この部屋は豪華な調度品などでキレイにされている。

まあ、全ての部屋が豪華なのだが。

「んで、早速だが話を」

その時に、タバサの腹からきゅるゝと音が鳴る。

「……」

「……おなか減った」

何なんだろう……。

「昼食を頼む」

「かしこまりました」

近くに立っていた使用人に頼む。

「まあ、すぐ持ってくるからそれまで話を聞こう。で、母親だっけ。詳しく離せ」

こくりと頷く。

「エルフの毒」

「おい。一々一言ずつ話すな。日が暮れちまう。全部一気に話せ」

こくりとまた頷く。

「ガリア王ジョゼフに母様が毒を飲まされた。精神を壊す毒。それがエルフの毒」

俺はその間トレンタくと戯れていた。だって、結局一言一言区切るんだもん。

「んで、ガリア王とお前の家の関係は？」

知ってるけどな。

「ジョゼフは父様の兄。父様を殺した」

ふむふむ。父親を殺したただじゃ飽き足らずってわけね。普通だったらコイツの親が王だったんだな。確か優秀なはずだし。ジョゼフは無能ってレッテル張られてるしな。

「じゃ、お前の名前は？」

「タバ」

「言っとくが、嘘は付けないと思った方がいいぞ？ ミラグループの情報網舐めるなよ？ さっき聞いたことも確認の為に実際は知っていた。ジョゼフがお前の父のオルレアン公に劣等感を持っていて殺したってこともな。嘘付いたら助けない。続ける」

「……シャルロット・エレーヌ・オルレアン」

どうすっかな。此処で助けて忠誠を誓わせるか……。それとも捨てるか。

だが、ガリア滅ぼした後にこいつが居ればすぐに信用は勝ち取る。

使えるか。

そんな時、部屋に使用人が数人料理を持ってきて、テーブルの上に並べる。うちの領でとれたものばかりだが、高級品であることは変わらない。

タバサの腹からまた音が……。

「食べながらいい。あ、俺の分はいいから下げてください。紅茶だけ頼む」

「かしこまりました」

使用人が下げ始めるが……。

何故かタバサがじっとこちらを見ている。

「……食べるか？」

「ククリとうなずく。」

「やはりそのままがいい。使用人達は部屋から退室してください」

「かしこまりました」

小さい女つてのはよく食べるんだな。

ミラもそうだったが……。

「さて、結論から言おう。エルフの毒なら治る」

タバサが目を見開きステーキを落とした。てか飛び散ってる汁が！  
このジュータン高いんだぞ！？ 平民の年収何十年分だと思って  
んだ……。

「ほんと？」

「ただな、それに使う薬はうちの最重要機密なんだ。他者においそれと渡すわけにはいかない」

「お金なら払う」

「いらぬ。金ですら買えないから最重要機密になっているんだ」

「どうすればいい」

「オルレアン家から抜けてもらいたい」

「え？」

「オルレアン家を抜け、養女として内の家系に入ってもらいたい」

「どうして」

ガリアを滅ぼした後、うちが王になる。ガリアの王族がうちの家系に居るとなれば政治がしやすくなる。無駄な反乱なども無くなるだろう。反乱を抑えるのに街を壊したら修繕費もバカにならないからな。

「どうでもいいだろう？ とりあえず、学校では偽名でいいが、うちではシャルロット・ヴィ・リヤステイとなってもらう。そうすれば、うちの秘薬を使っても問題にはならないだろう」

そう言って、俺はほほ笑む。

「母様を家に残しておけない」

「うちに連れてくればいい。屋敷の部屋は腐るほど空いている。養う代わりに、お前には働いてもらうけどな」



「何を」

「うちの家系は圧倒的な実力を持たないといけない。知っていると思うが、なぜスクエアのメイジがあれ程忠誠をしている？ それはうちの家系が圧倒的に強いからだ」

「あなたはドット」

「情報なんてものはいくらでも偽装が出来る。お前はラインって言うてあるよな？ お前のクラスはなんだ？」

「……トライアングル」

「だろ？」

俺はニヤリと笑ってやる。こいつは名前も誤魔化しているのだから、俺と同じだ。

「俺がオクタゴン、ミラがオクタゴン、テファが虚無。兵が束でかかってても一人ですら倒せない。これが忠誠を抱かせている。圧倒的武力と金銭。それがこの領だ。領一つで国を落とせることを前提にしている」

俺の言葉に目を見開く。虚無もいるしな！。

「お前にはこれが見えるか？」

手元に無色の精霊を光らす。王族なら見えるはずだ。それにコイツは才能がある。ミラより早く成長するだろう。

「見える」

「これは精霊だ」

タバサはまた目を見開く。

「うちの家系は全員が精霊魔法　先住魔法が使える。エルフではないがな。もしうちに入るなら死ぬ気で努力してもらおう。ミラが受けた　プログラムをな。オクタゴンスペルと精霊魔法を完遂させるものだ。下地があるから一年で大丈夫だろう。どうだ？　無理なら帰れ。そして二度と此処には来るな」

俺はタバサの目を見つめながら言っただけ。

「……やる」

「ならばよからう。お前は今からうちの家系だ。手続きはしておこう。そうだ、お前の家に使用人と執事はいるか？」

没落貴族だからな……。……。

「執事が一人」

「ならばそれをお前の母親の世話役に連れてこい。お前の分の給料や学費、執事の給料はちゃんと出すから不自由なく暮らせるだろう。此処での食事は出すしな。イルククウ来い」

俺は部屋に入る前に精霊を通して呼び出しておいたイルククウを呼ぶ。

ガチャリとドアが開き、青髪の少女が入ってくる。

「きゅきゅっ！　お兄様なんなのね？」

そのまま俺に抱きついてくる。昔っからこんな感じだ。

「ガリア王族？」

ああ、青髪はガリアの王族だけだからな。

「違う。こいつも機密だけど……まあいいだろう。イルククウ、タバサを家に連れて行ってくれ。タバサ、明日には戻ってこい。訓練を開始する。それとホラコレだ」

俺は二本の瓶を渡す。

「まず、右が万能薬。全ての病気を治すことが出来る。左がエリクサー。精神力と体力が回復出来る。病気だったんだから体力も弱っているだろう。万能薬の方から飲ませる。それも機密だから飲ませたらビンもその場で破棄しろ」

「ありがとう」

一言俺に礼を言う。

「連れていくのね！ きゅきゅ！」

「あ、バカお前此処で戻るな！」

時すでに遅し、イルククウは服を破いて竜の姿に戻っていた。まあ、広い部屋だからギリギリ天井に頭がぶつからなかったが。

「ほら戻れ！」

「い、ごめんなのね！」

すぐに全裸の少女の姿に戻る。

タバサは目を見開き。

「韻竜？」

「ああ、うちに住むなら慣れる。韻竜なんて100匹以上いるんだからな。じゃあ行って来い」

俺は全裸の少女を窓の外に放り投げる。  
やがて、竜の姿に戻って窓の前に戻ってくる。

「ひどいのねっ！ ひどい扱いなのね！ きゅきゅっ！」

タバサをその上に乗せる。

「行け、イルククウ」

「わかったのね！」

イルククウはすぐさま飛んでゆく。  
まあ、何れ後一年でタバサの使い魔になるんだしな。  
さて、俺もやることやっちまうか。

書室

俺が未開拓地の店舗の数を増やせとの案を考えていると、扉がノックされた。

「入れ」

「失礼いたします」

入って来たのはミルドと、タバサと知らない女性。

俺は顔を上げて一瞥し、書類に視線を戻す。

「何だ？」

「お初にお目にかかります。ウイディス・ラ・リバルスティン・ヴィ・リヤステイ侯爵様。わたしがシャルロットの母です」

ちっこい女性だな……。

タバサと違って髪も長いし。

「ああ、初めましてオルレアン公夫人」

女性は深く頭を下げる。

「此度はわたしの病気を治していただきありがとうございます。シ

ヤルロットが無理を言ったとのことだ」

「気にするな。俺は俺の為にシャルロットに手を貸したに過ぎん。聞いているかわからんが、シャルロットを俺の家系に入れた」

「そのことでお話があります」

「いいだろう。言え」

「なんの為にシャルロットを家系に？」

「ああ、いずれガリアを落とす。そのときの為にタバサが居た方が楽に政治が出来る。それだけだ」

「「!？」」

顔を上げてないからわからんが、目を見開いているだろう。

「此処に居る間は安全だからゆっくりするといい。ガリアが攻めてきても殲滅出来る。ガリアを潰した方がお前達も安心して暮らせるだろう。家名が変わったとしても、お前らが家族であることに変わりはない。部屋も一緒にしてやる」

俺は問題の書類を手元に寄せ、甘い言葉を言ってやる。

「あ、ありがとうございます！ なんてお礼を言っていないか。わたしたちのことをそこまで考えていてくれるなんて」

実際なんも考えてない。駒として使うだけだ。

「気にするな。ミルド。タバサを部屋に通してくれ。二人部屋だから大きめのな。オルレオン公夫人は家に居ることが多いと思うから最上階の見晴らしのいいところにしてやれ。オルレオン公夫人は部屋に少し残ってくれ」

「かしこまりました」

視線を上げると、タバサがじつとこちらを見つめている。

「心配するな、何もしない」

タバサはこくりと頷き部屋を出て行った。

「では、オルレオン公夫人。この書類を見てくれ」

「はい」

俺は一枚の書類を手渡した。

「それは、ミラグループの情報網で調べ上げたものだ。ついでに言おう此処はガリアではない。双子だから捨てる必要もない」

オルレイン公夫人はその用紙を見つめ、バツと顔を上げた。

「シャルロットの双子の妹ジョゼット。セント・マルガリタ修道院“陸の孤島”。双子が忌諱とされてきたガリアで、お前が孤児院に預けた少女」

それを聞いた瞬間、オルレイン公夫人は口を手で覆って泣き出した。

ぼろぼろと泣き、立っていられなくなったのか膝を床についた。

吐き気がする。どんな理由でも子供を捨てた親など泣く権利などない。

タバサがいなかったら殺している。

「俺は彼女を助けに行きます」

「え？」

ポケっとした顔でこちらを見る。

「俺も生まれた瞬間捨てられたんです。だから、彼女を見て見ぬ振りなど出来ない。シャルロットの妹ですしね」

「あ、あああ、ああああああ」

よほどうれしいのか声を上げて泣き出すが。

こいつにも、俺の穿いた嘘にも吐き気がする。早くこいつを追い出さないと殺してしまうかもしれない。

「ただし、彼女は俺の家系に加えます。では、シャルロットが待っているでしょう。早く自室に行つてあげてください。ミルド、頼む」「かしこまりました」

先ほど戻ってきたミルドに支えられ、部屋から出て行く。  
最後にこちらを振り向き。

「本当にありがとうございました」

一礼して出て行った。

「ふうー……危うく殺しそうになった」

「何でそんな我慢したんですか？ それに、何故妹までうちの家系に？」

ミラが頬を膨らませて聞いてくる。

話す前に、風の精霊に頼んで声が漏れないようにしてもらおう。

「ああ、シヨゼットはな虚無なんだ」



「「え？」」

ミラとテファが声を出す。

「今は候補だ。虚無ではない。今の虚無が死ねば、候補が虚無を扱えるようになる」

「わたしはお払い箱ですか……ぐすっ」

「泣くなっつの。ガリアの虚無が死ねばってことだ。相手の虚無は知らないが、こちら側の虚無は多ければ多い程いい」

駒は多ければ多い程……な。ただし信用できない駒は不安要素でしかなく、いらぬ。

「それはそうですね……。じゃあ虚無を殺しに行くんですか？」

「いいや。今はその時ではない。国を乗っ取る計画が崩れかねないからな。とりあえず、確保することが大事だろう。ジョゼットが虚無って知ってる奴いるしな」

「でも、秘宝も指輪もこっちにありますよね？」

「……今日はやけにつつかかるなミラ」

「そりゃそうですね！ また女の子が増えるじゃないですか！ どれだけ家系に女の子増やす気ですか！？ わたしにテファにシャルロットにジョゼット！」

「あと、ルミアもだな。王族関係は国をまとめた時の為にほしいところだ。アルビオンとトリステインは実力行使しかないが……」

「ロマリアは……？」

「あそこは始祖ブリミル至上主義だ。こちらが虚無二人持って、更にトップ殺せば簡単に民はついてくる」

エルフと東方はどうすっかな……。その時考えればいいか。

「はあ……。いいですよ、でも妻の座は渡せません！」

「持ってもいらないだろうが」

「もつすべもつんですっ！ うくー！ー！」

怒ってるミラはいつものことだから無視してっと。

さて、明日にも行くかな。

屋敷の庭

「リーン。頼んでおいたものはあるか？」

「はいお兄様！ これですね？ ちゃんと変声で録音済みです」

「サンキュ」

この場に居るのは俺、テファ、ミラ、リーン。そして、三種類の韻竜の長。

テファはウエディングドレスのようなヴェールを被り、白い司教のような格好をしている。

「さて、行こうか？」

「あの、わたしの虚無魔法で行けば一瞬では？」

テファは新しい虚無魔法を覚えた。たまたま、ジヨゼットに渡す為に、机の上に全て出したら、オルゴールから音が聞こえたらしい。テファも成長したから聞こえたのかな？

新しく覚えた魔法は『レポート』非常に便利だが

「行ったことのない場所は無理だろ？」

「そうでした……」

女神の様な恰好でうなだれるテファ。

「む……」

それをじっと見つめるミラ。

「ご主人様！ わたしもウエディングドレスを！」

「ちげーよ。あれは演技の為に着せてるだけだ！ テファも頼赤らめるな！」

とりあえず、リンから渡されたICレコーダーをポケットに突っ込み。

一人ずつ韻竜ののって飛び立つ。

ジョゼットはジュリオが好きってのを利用させてもらっかな。

セント・マルガリタ修道院

周りが全て海に囲まれた孤島。そこにジヨゼットは居る。一種の監獄と呼ばれる場所である。情報では、30人の修道女が暮らしているらしい。

俺達は教会から少し離れた場所に着地した。

「さて、始めるかな。精霊よ、あの中でお前達の声が聞こえる奴を呼んできてくれ」

『はい』

『よぶよぶー』

これで、運が良ければ来るかな。

もしもの為にテファにはこの恰好してもらったけど。

数十分後だろうか？ 一人の修道服に身を包んだ少女が現れた。髪は腰より長い銀髪。青じゃないのが意外だな。

身長はマジでちっこい。ミラより小さいかも。ミラは胸の大きさを  
で勝って誇らしげだ。

タバサの妹じゃ仕方ないよな……。母親もちっちゃいし。

「こんにちは」

俺は優しくほほ笑んでやる。

少女は少し赤くなって、笑みを返してくれる。

「あなたたちは……だれ？ わたしを呼んだのはあなた達かしら？」

不思議そうにこちらと竜を見ている。

「大きな竜ね。竜のお兄様が乗っていた竜よりも倍くらいあるわ」

「ああ。それで、君を呼んだ理由はね。君を助けに来たんだ」

「え？」

少女はわけがわからないと言う風な顔をしている。

「そう。ジュリオのことは知っている？」

「竜のお兄様のこと！」

途端に嬉しそうな顔になる。

さあ、絶望の始まりだ。

「そうだ、でね。そのお兄様が悪いことをしようとしていてね。君  
を利用するつもりらしいんだ」

「そんなはずない！」

だろうな。さすが王族、少女でも睨みは強いな。

「そんなはずないよね。だからね、これを聞いてほしいんだ」

俺は懐からICレコーダーを取り出す。

「銀の棒でしょうか？」

「君はずつと此処に居たから知らないだろうけどね。これは声を此処に留めることが出来るマジックアイテムなんだ」

「声を!？」

「ああ。そして此処にジュリオの声と教皇聖下の声が入っている」  
「お兄様のっ!？」

パアアつと顔が明るくなる。

これは利用しやすいかもしれないな。

「聞くかい？」

「聞く!」

そこで俺は再生する。

『教皇聖下。ご報告があります』

「お兄様の声!」

そこで俺は唇に人差し指を置き、静かにするように言う。  
こくこくとうなずくジヨゼツト。

『うむ。して何ようだ?』

『はい。セント・マルガリタ修道院 監獄に預けておいたジヨゼツトをそろそろこちらに確保しに行きたいのですが』

『まだ早いのではないか?』

『いえ、もうあの娘を手玉にする方法は考えております』

『どうするのか言ってみよ』

『近々ガリアを我がロマリアが手にする時、あの娘程使い勝手が言い“物”はいませんゆえ。何せ、ガリアの王族ですしね』

『そなたがそれほどまで言うのなら何か手は打ってあるのか？』

『私が孤児院を出てから何度も通い。てなづけておりました。あの娘は閉じ込められていた故に、男性を私しか知りません。すぐに私に好意を向けてくるように仕向けられました。人形の王として、簡単にこちらが操れるでしょう』

『ふむ。ならば好きにせい。して、いつ頃やるのか？』

『約一年から二年後でしょう。それまでにあの娘を言うことを聞くだけの人形とし、我等の手中に収めます』

『よかるう』

そこで、ICレコーダーの再生は終わった。

これは真っ赤なウソではない。かといって本当でもない。色々伏せた結果こうなったのだ。リーンに侵入してもらって録音したものと、ヤバイ部分は削除して入れなおしたものだ。

そこで、ジヨゼットの方を見ると、唇が震え、顔色が蒼白になっていた。

「そ…そんな…お兄様が…あのお兄様が、わたしを利用…？  
それに私がガリアの王族…？ お兄様…好きだったのに」

ぼろぼろと涙をこぼし、ぺたんこ地面に座ってしまうジヨゼット。  
俺はそんなジヨゼットを抱きしめた。

「大丈夫だから。ジヨゼットは俺が守るよ。何せ君と俺は同じだからね」



「おな……じ？」

頭をなでながら続ける。

「俺も生まれてすぐに捨てられたんだ……」

俺はジョゼットに鼻がくっつきそうなくらい顔を近づけ、目を見つめる。

「お兄様”……も？」

「ああ、俺はそんな子たちを保護している。後ろの二人もそうだよ？」

「同じ？」

まあ、ちょっと違うけど嘘ではないだろう。

「ガリア王族の君は、ガリアで双子が忌諱と言うだけで妹の君は捨てられてしまった。普通は双子なんて生まれたら喜ぶのにな。だから俺はガリアを許さない。命の冒涇。そして、このままだと君みたいな捨てられてしまう子がこれからも出てしまう。そして、捨てられた君を利用したロマリアを許したくはない。もっとみんなが幸せで入れる世界を作れるはずなんだ」

「幸せな……世界？」

「ああ。もし、君が俺と一緒に来てくれたら、今はまだ小さな幸せの世界だけど、何れ大きな幸せを見せてあげられるよ？」

もちろん……俺にとっての幸せだけだな。

「本当に……わたしなんかでも幸せになれるのかしら……こんなわたしでも……」

「ああ、なれるさ。君みたいなかわいい子が幸せになれない世界なんて間違っているよ。そんな世界俺が壊してあげる」

俺は優しくほほ笑んでやる。

かわいいつてところに反応し、ジヨゼットが少し照れる。やはりか……。

「お兄様が幸せにしてくれるの？」

「ああ」

「なら……わたしをお兄様について行かせて」

「もちろん歓迎するよ。今から君はジヨゼット・ヴィリヤスティだ」「うんっ！」

ジヨゼットは涙目を笑いに変え、俺の首元に抱きついてきた。

そこで、俺はようやくニヤリと笑う。

やはり、子供は簡単だ。好きな相手に裏切られ、助けを求める。

振られた後が狙い目って奴か？ しかも、コイツは男をジュリオしか知らない。簡単に依存させることが出来るだろう。

あと、俺は意識すれば背後も見えるのだが、ミラとテファの視線が痛すぎる。

ロリコンとか聞こえてきたが聞かなかったことにしよう。ジヨゼット同年代だからな？

ついでにお前らも身長変わらん。二歳下だから仕方ないけど。

「あ、あとお兄様ってのはもう使われちゃってるからダメ。それに裏切ったジュリオと同じ呼び方だろ？」

「では、兄さんでどうかしら？」

「それもダメ」

「そうですか……ではお兄ちゃん」

うむ……二人の視線が厳しくなったが仕方ないか。

「じゃ、それで」

「はい！ お兄ちゃん！」

あ、あの視線で人殺せる。ジョゼット気をつけないと殺されるぞ。

「その修道女をどうするつもりですか！」

突如、前方から声が聞こえた、気づいてたけどね。

俺は立ち上がり、俺の背後にジョゼットは隠れる。

「しゅ、修道院長……」

ほう。とりあえず教会内は全員眠らせとくか。音でわらわらとこられてもウザイ。

「テファ、打ち合わせ通りに」

「はい」

テファが一步前に入る。

「わたくしは、始祖ブリミルの直系の子孫であり、始祖の力を受け継ぎし者である」

テファのあまりの威厳に修道院長とジョゼットはたじろぐ。

よかったな、昨日からカンペ渡したあと練習してたしな。

「な、何をバカなこと！？ 始祖ブリミル様への冒瀆ですよ！」

「ならば始祖の力、お見せしましょう」

そう言って、テファは上空に杖をかざす。

《エクスプロージョン!》

上空で大きな爆発が起きる。って言っても、俺が使うエレメンタルリースよりしょぼいが。

ミラのくらいか？

修道院長は腰を抜かしてへたり込んでいる。

「いまからこの海を守護する神を呼びましょう。ここで起きたこと、全てこの海の神に教えてもらおうのです」

テファが杖を掲げると、教会が建っている岬の向こうの海が盛り上がり中からは……。

普通にリヴァイアサンが出てくる。まあ、俺が演技の為に呼んだんだが。

テファは神から教えてもらったのだよ？ みたいに頷き。

「わかりました。あなたがたはこの国の貴族に体よく利用されているだけではありませんか。彼らは神を恐れぬからこそ、このような“牢獄”を造りあげたのでしょうか？ 恐れ多いことです。あなたがたの主人は誰なのですか？ 尊き神と始祖ですか？ それともこの国の貴族ですか？ 尊き神と始祖の子孫が此処にはいるのです。貴族に言われているでしょうがジョゼットを渡して頂けないでしょうか？」

そこで、美しテファはほほ笑む。

「おおお……、やはり、あなた様はすべてをお知りになっておられるのですね？」

修道院長は地面にひれ伏して尋ねた。

「ええ、この海を守る神に教えていただきました」

「ただ、わたしは娘達の出自までは知りませぬ。したがってそれをお尋ねになられても」

「大丈夫です。わたくしは貴女をさばこうとは思いません。貴女もまた、被害者なのですから」

本当に慈悲深い女神って感じてほほ笑むが……違和感ありすぎて怖い。

「な、なんと慈悲深い。ありがとうございます始祖様」

始祖様になってる！？

「ええ、ですが。ジヨゼットはわたくしのほうで保護します」

「わかりました」  
「では」

テファは浮き上がって一匹の竜の上に乗る。俺達も後に続く。竜が飛び立っても、まだひざまづいている修道院長。

「テファ。俺達がきた記憶と、ジヨゼットに関して全員から消してくれ」

「わかりました」

そこで、テファアが忘却を唱えて記憶を忘れさせる。  
無駄な手間だが、この方がジョゼットに受けがいいのだ。

「戻れ、リヴァイアサン！」

俺の言葉に、リヴァイアサンは宙に駆け上ってゆく。

視線を前に移すと、俺の前に座ったジョゼットが茫然としてこっちを見ている。

「海の神はお兄ちゃんのだったのでしょいか？」

「んー、あれは演技だね。ジョゼットをちゃんと渡してもらえるようにテファアのことにおいたんだ」

「そうだったんですか……お兄ちゃんが虚無？」

「いいや。それはあっちのテファアだ」

ついで君もね。

ジョゼットはテファアをじっと見つめる。

ついで自分を見下ろす。

「あの胸は偽物ですしょうか？」

「ひへっ!?!」

テファアが情けない声を出す。

「ほ、本物ですよ！」

「身長はわたしと変わらないのね」

「やっぱり胸に視線が行くんだな……」。

「まあ、いいわ。それで、お兄ちゃんは貴族様なのですか？ わた

し此処と孤児院しか知らないのです」

「そうだね、両親に捨てられてから、がんばって貴族になったよ。ついでにジヨゼットも今日から貴族だからね」

「はいっ！ お兄ちゃんと同じ家ですね！」

嬉しそうにほほ笑む。

「……随分と顔がニヤけてますね……」

「いやいや、だってお前達最初から子供っぽくなかったしさ。ジヨゼットは子供っぽくてかわいいし」

「そういえば……ご主人様はレッサーパンダとか好きでしたよね。小動物でふわふわしているのが」

ミラはジヨゼットを見つめる。

髪はさらさらとした銀髪。

くりくりとした大きな瞳。やわらかい頬。

ちっちゃい。

「妹ポジションとられた！」

「いやいや、お前最初から奴隷」

「わかってるけどひどいっ！」

「わ、わたしはどうですか兄さん」

「胸がでかすぎて妹って感じしない。ちっちゃい姉みたいなの？」

「いつも胸！」

二人がむせび泣いてるのを無視する。

さーてもうそろそろか。

ヴィ・リヤステイ領

「お兄ちゃん、すごい街だね。外の世界はこんなに賑やかになってたのね」

「うーん、うちの領だけかな？」

今は屋敷に向かっている最中。

「お兄ちゃんのだけ？」

「そうだねー、ちよっと下を飛んでみようか」

俺は竜に頼んで、限界まで下に降りてもらおう。下に被害が無いように精霊にお願いしながら。

此処は首都だから人も多いし、危ないしな。





「ジョゼット様……！！」  
「ファンクラブ作成いそげ……！ 会員ナンバーは俺だ……！」  
「かわいい……さすがウイデイス様女ったらし……！！」  
「黙れ愚民共……！！」  
「わははははははは」

意外なところで俺の評価がわかった。

まあ、気軽に声をかけてもらえるのも信用のうちか。

「ウイデイス様……！！ ジョゼット様が怖くて泣いてる……  
！」  
「はああああ！？」

ジョゼットの方を見ると確かに泣いていた。

俺は急いでジョゼットをこちらに戻す。

「おい。そんな怖いか？ 落ちないようにしてたんだが……」  
「ち、ちがいます……」  
「あ？」

「うれしくて……捨てられたり裏切られたり、利用されたりしかさ  
れなかったわたしを、大勢の人が受け入れてくれて……。ありがと  
うございますお兄ちゃん！」

ガバつと俺に抱きついてくるジョゼット……だがな、俺の視線の  
先に竜をポジショニングしてジトっとこっちを見てる二人が居るん  
だ。

頭をなでてやると、ジョゼットは嬉しそうにするが二人が危険領  
域まで達しそつだ。

周りで精霊が暴れてるぞ……今にも打ってきそつだ。



竜に着地してもらい、俺達は降りる。  
そのまま、動物達がいる場所に移動する。

一つの動物を手に取り、首に回らせる。

「見るジョゼット！　これが俺の愛娘トレンタくんだ！」

「か、かわいいっ！　かわいいー！」

「だろ？　見る奴が見ればわかるんだ。あの二人は趣味が悪いから  
な」

「……」

不機嫌な二人は無視だ。

俺は小さめのレッサーパンダを手に取り、ジョゼットの肩に回らせる。

「わ、わわ！　落ちる！　でもふわふわ気持ちいい」

「よし！　お前にそれをやろう！　今日からそいつの世話係はお前  
だ！」

「い、いいの!？」

「ああ、餌とかは使用人に言えばもらえるからな。死なないように  
してほしいが、死んでも誰かに言えば蘇生させてくれるからガンバ  
レ」

「が、がんばるわ！」

てか、実際ジョゼフ殺すまでコイツに仕事なんてない。

虚無も使えないし。精霊と契約させて、空飛ぶくらいしか出来な  
いだらう。

虚無覚えても精神力足りないんだよな……虚無の消費バカでかす  
ぎてテファみたいになノマシンになつてないと連発出来ない。

「いつそ、そのときは第二期ナノマシンにしちまうか？ 修行より  
てっとりばやい。」

「ご主人様……今いやらしいこと考えてましたか？」

なんて鋭い野郎だ。こう言うときだけ。

「いや、ちょっとてっとりばやくナノマシンに」

「駄目です！ いや、いいのですが、わたしを最初にしてください  
！」

「お前もナノマシンじゃん」

「関係ありません！」

てか、コイツらちっさすぎて未熟児生まれるんじゃないだろうか？  
ああ、でもナノマシンだからどうともなるか。未熟だろうと死  
ぬことなんてないだろうし。

その時、屋敷の中から一人の女性が飛び出してきた。  
うん。オルレアン公夫人には言っているから大丈夫だろう。  
捨てた身で自分の子なんて言っても嫌われるだけだつて。  
オルレアン公夫人はジョゼットの前に立って荒い息をしている。  
ジョゼットは首を傾げているが。

「じょ……、あなたがジョゼット様ですか？」

「あ、はい。此処の屋敷の使用人の方でしょうか。わたしがジョゼ  
ット・ヴィ・リヤステイで御座いますわ」

スカートの裾をちょこんと持ち、お辞儀をする。

その姿とセリフに、オルレアン公夫人はさびしそうにはほ笑む。

「そ、そうでございますか。お待ちしておりました。し、失礼ですが頭を撫でさせてもらっていいでしょうか？」

「はえ？ な、なんでなのかしら!？」

おお、人前だとジョゼットは口調も違うな。貴族としてなのか？  
オルレアン公夫人も会っていきなりそれはないわー……。

「いえ、わたしにもあなたと同じ年頃の娘がいるのですが、今は会えないのです。ですから、無性に懐かしくなってしまうて……やはり貴族様にこの物言いは失礼ですよ、忘れてください」

そう言った彼女の寂しそうな目を、ジョゼットはじっと見つめる。  
やがてほほ笑み。

「よろしいですよ。わたしで代わりになるかわかりませんが。どうぞ」

ジョゼットはオルレアン公に近づき、軽く抱きつく。

オルレアン公夫人は抱きしめながら、声を出さないように唇をかみしめて泣いていた。

その傍で、俺はトレンタくと戯れていた。

ミラはペンギンと戯れ、テファは白くまとごろごろしていた。

感動の再会などどうでもいい三人であった。

あー、トレンタくんかわええー。

21 ナノマシンを使おう！（前書き）

家系

当主 ウイデイス

奴隷 ミラ

虚無 テファ、ジョゼット

政治要因 タバサ、ルミア（予定）

愛娘 トレンタくん（レッサーパンダ）

## 21 ナノマシンの使おう！

### 訓練所

今俺達が居る場所は、家に連なるものしか入ることが出来ない訓練所。

メンバーは、リン、ミラ、テファ、ジョゼット、俺。

「ご主人様、タバサは？」

「タバサは プログラムだ」

夏季休暇が終わるまでにスクエア。一年で プログラムを完遂してもらわないと困る。

それには、夏季休暇みっちり+学院でもみっちりとやってもらいたい。

「じゃ、はじめるよお兄様？」

まずは、必ず必要になるだろうナノマシンの転移。これだけは一年以内に覚えておきたい。

「まず、ナノマシンの再構成を覚える前に、転移先座標を検索するところから始めないとダメ」



「転移先座標？」

「そうです。ナノマシンを自分の一部だと認識し、場所を特定し、そこに自分を投影するのです。そうすると、こちらの構成は失われ、そちらに反映されます。最初は、頭の中に浮かんだ場所に投影ですね。慣れれば、座標検索し、言ったことが無い場所でも行けます。テファお姉さまは、レポートが出来るので、座標検索から始めましょう！」

「はい！ はいっ！」

そこでジヨゼットが大きく手を上げる。

「わたしもそれやってみたいわ、出来るのかしら？」

「出来ませんよ？ やりたいのならば、お兄様と性交してナノマシン第二期になってください。いずれ寿命を止めることになるのですから、やっておいて損はありませんよ？」

「え？ あ」

ジヨゼットの顔が真っ赤になってゆく。

「……ジヨゼットちゃん。修道院でもそういう話結構したの？」

「えーっと……はい。女の子しかいない場所だったので結構。みんなキスすらしたことありませんでしたが……性交……」

ゴクリと唾を飲み込む。

「でも、そうすれば皆と同じになれるのですか？」

「はい」

「……うん。仕方ないですね。仕方ないですわ。これは必要なことかしら。必要ですね。……お兄ちゃん！ いざ あきやつ！？」  
「うるさい変態！ なんてぼつと出が一番なのよ！ うくー！！！」

「いたひ……」

ミラに殴られた場所を涙目でさするジヨゼット。

ミラの腕力は一般人にはつらいものがあるだろう。

「うーん、ジヨゼットは精霊魔法と、テファに虚無の詠唱を教えてもらって早口で言えるようにしたほうがいいな。何れナノマシンにはすると思うが……今はしないから。テファは俺達より覚えること少ないから少し余裕あるだろうし。いいか？」

「はい。大丈夫です」

「んじゃ、わかれて訓練開始な」

バラバラになって訓練を開始する。

俺、ミラ班。監督リーン。

「では、まず目をつむって視野を広げる感じにしてください。例えば、此処から学院を見ようと思えばいいのです。ただし、ナノマシ

ンと同調しなければ出来ません」

ふむふむ。

難しそうだな。

「あ、出来たよ?」

「「へ?」」

ミラの言葉に俺達は驚く。だってコイツは目すらつぶっていない。

「違うんですよ。わたしは最初からそれ出来てました。いつも遠くを見よう見ようって思っていましたから」

ああ、そう言えば、こいつは風の精霊の契約の時も一人だけ見過ぎて頭痛起こしてたよな。

あれは、遠くを見ようって思って起きた現象だ。普段から遠くを見たいって思っていたんだろう。

「その光景が、髪の毛一本まで見えますか?」

「うん。見えるよ? ご主人様の下の毛なかなか落ちてないけど」

なんでそんなの探してるんだ……てか、ナノマシンのせいで生えないの知っているだろコイツ。

「では、テファさんと一緒に投影練習に移ってください」

「はい」

ミラはそう言って、パタパタと走って行った。

「なあ、俺ってマスター権限あるよな? なんで俺だけ出来ないん

だ？」

「んー、わかんないけど。最終的にはお兄様が一番あやつれるよーになるよ？ とりあえずやってみたら？」

「そうだな。もしかしたらすぐできるかもしれん」

俺はゆっくりと目をつむり、学院の自室を見ようとする。

真っ暗になり、その中に学院が……って言っても、これはただの記憶だ。

そこを鮮明にしていこうとするが、出来ない……。

ああ、トレンタくんがベットのの上ではしゃいでるかわいいなー。

トレンタくんだけは鮮明に見えるよ。

トレンタくん見ると他がぼやけるし。

実際トレンタくんは屋敷にいるけどさ。

数十分後。

うん。出来ない。トレンタくんは100匹くらいに増やせたけどさ。

先は長そうだ。

「では、まずは此処に虚無の呪文を書いたノートがありますから、これを覚えて早口の練習です！」

「はい！ テファ先生！」

渡されたノートを手にとって見るけど……呪文長すぎる……。

これをテファ姉さまは数秒で唱えるなんて……やはり人間ではない。

聞いた話では人間じゃないらしいけど。

それに、わたしはまだ虚無は使えないらしい。聞いたときは驚いたけど、ジョゼフって人がいなくなると使えないらしい。

だったら、お兄ちゃんと一緒にナノマシンと言う魔法を使ってみたいわ。

使うには、ナノマシンと呼ばれるものにならなくてはいけないらしいのですが、皆もうなってるとのこと。それに、わたしだけ年をとってゆくのも嫌だわ。

お兄ちゃんとせ、性交すればなれるとのこと……。

少し怖いけど、お兄ちゃんはわたしを救ってくれた男性ですし……それでもいいかなと……。

守ってくれるって言ってくれましたが、守られてばかりもいられないので、早く強くなりたいです。

それにしても、ミラ姉様が言うにはお兄ちゃんはロリコンと呼ばれるものらしいです。

だから、わたしをかわいがっている。よくわかりませんが、  
“だから”って部分がわかりません。

お兄ちゃんの家系は小さな子ばかりと言うのがヒントらしいです。

確かに、140前後しかいませんね。しかもそのうちの3人はずっとそのままらしいです。わたしも、多分これ以上は伸びないでしょう、成長止まっていますし。

16歳で140ないって言うのは少し微妙ですが。実際テファ姉様とミラ姉様は14でとまったからあれらしいです。本当だったら170超えていると言っていました。

そてにしても、お腹すきました。

お兄ちゃんの家のご飯はおいしいので、昼食が楽しみです。さて、頑張りましょうか。

『リヤ・レミドウ・ラ・ミレスティ・サラスイびっ……いはひ……』

先は長そうですね。

俺は何とか遠くを見ることだけは出来るようになった。って言うても、俺が最後の上に、先ほど出来たばかり。転移はまだミラも出来ないようだ。

出来たとしても、周りのナノマシンを制御できないと、宇宙空間にはいけないようだ。

ジョゼットは プログラムを受け始めている。

これは、精霊魔法の特訓だ。出来るだけ多くの精霊を制御化に置いて、膨大に操作するのだ。 プログラムに組み込まれている内容でもある。

人を殺すことを躊躇ったら使い道なんてないのだ。だから、出来るだけ人が死ぬところを見せ付けている。

最初は、顔面蒼白になり、涙を流していたが、蘇生できることを知ってからは何とも思わなくなったようだ。

タバサはスクエアになったが、未完成のエレメンタルリースすらも出来ない。

スクエアと言っても、得意な風と水しかなくておらず。兵士以下である。

ただ、もくもくと訓練し続けるタバサを見て、兵士たちは子供のようにタバサをかわいがっている。うちの家系なんだから、兵士に支持されるのはいいことだろう。

さて、明日からまた学校だ。

学院

447

俺達の部屋は突然の来訪者に襲撃されていた。

「これはどういうことよ！ ミスタ・リバルスティン！」

「いきなり現れてどういうこともないだろう？ ミス・ツエルプス  
トー」

赤髪巨乳女が現れた。褐色の肌が煩わしい。

「あ、キュルケさんおはようございます」

「うくー！ー！！ 巨乳めー！ー！ わたしだって虚乳！」

何ミラ自爆してるんだ。自爆してるってわかって部屋の隅で膝抱



え込んでるし。

「てか、この部屋広っ！？ お風呂まで！ 階段破壊して何してるのよ！」

「自分の部屋だから勝手だろ？ それよか早く要件を言って帰ってくれ。今はトレンタくんがご飯中だ」

俺の肩に乗っているトレンタくんに餌を上げながら話しかける。

「それよっ！ なんでタバサが授業にも出ないであんな危険なことやってるのよ！？ 理由を聞いたら強くないといけないの一点張りよ！？」

「なんでそれで俺の所に来る。そもそもお前はラインメイジのはずだろう？ 此処の屋上まで飛んで来れないはずだが？ 情報操作が得意なんだなミス・ツエルプストー」

「あ、あなただってドットのはずじゃない！」

「俺はミラがトライアングルだから連れてきてもらった。以上」

まったくやかましい女だ。

「くっ！ それよりタバサよ！ 朝貴方がタバサに命令しているのを見たのよ」

確かにアドバイスはしたな。

「アドバイスしたただけだ。俺が他の奴にアドバイスしてるのは知ってるだろう？ 魔法の才能はないんだがな。アドバイスだけは出来るよっだ」

「よくそんな嘘が次から次へと出るわね……」

「事実だから仕方ない」

めんどくさすぎる。

「キュルケ。諦めなさい。ご主人様に口で勝とうなんて確実に無理です」

ま、ミラの指摘も最もだろう。俺はこれでも政治や商業、パーティーなどで場数を踏んでいる。

そこらの貴族の娘じゃ相手にもならん。

「ところで、なんで貴女達は男性と同じ部屋に？」

いやいや、毎日男を部屋に連れ込んでるお前には言われたくねーよ。

「わたしたちは家族ですからね。別に問題ないんじゃないでしょうか？ 学院長の許可ももらっていますし」

髪も全員金髪だから大丈夫だろう。若干色が違うが誤差の範囲内だ。

「……わかったわ。今日の所は帰って上げる。タバサを見てないといけないしね。また来るわ」

「もう来なくていいつつの。それに今授業中だろ？」

「あなたには言われたくないわね……」

尤もだ。

ツエルプストーが出て行ったあとに、声を遮断する。

「あー、だるいな。実際タバサは何回も死んでるだろうしな。ツエ

ルプストーは王族でもないし。使えない」

「ですねー、あ、そうだ。トリステイン王女のアンリエッタって人は？」

「んー、王女ならいいんだが、多分もうすぐ女王になる。そうすると国の代表だから価値がゼロになるな」

女王は捕虜にするか殺さないといけないしな。まあ、あいつはアイツで使い道がある。家系には入れないが、ウェールズを利用するついでに、うまくいけばトリステインも落とせるからな。

更にうまくいけば、一気にロマリア以外全て落とすことが出来るだろう。

計画的にはそうなるようにしてあるしな。しかも、こちらが戦争を仕掛けるわけじゃなく、より支持を稼げる方法で。

「ご主人様がまた、何やら考えているようですね……ニヤニヤしています」

「兄さんのことですから、またいい作戦でも思いついたのでしょ

ういやいや、お前達俺をどんな目で見ているんだ？俺はただ、慈悲深く幸せになれる国を作ってやるうと思ってるのに。

わずかな人を絶望に落とし、多くの人を幸せに導き、俺が一番得をする理想の国家ハルケギニアをな。

ある一部屋 番外編。

真つ暗な部屋の中で、男性二人がテーブルを挟み対峙していた。テーブルには一本のローソクと、ワイン。さらにチーズクラッカーが置いてある。

「ではまずギーシュ。愛とはなんだろうか」

一人の男性がワインを一口含み、相手のギーシュと呼ばれる青年に聞いたです。

「ふむ、僕は愛とは世界そのものだと思うね」

「ほう。何故そう思う？」

ギーシュはクラッカーを一口かじり、続ける。

「この世界には愛が多いと思わないか？ 例えば、家族に対する愛。親友に対する愛。恋人に対する愛。夫婦に対する愛。動物や植物だつてそうだ。愛から世界は成り立っているとは思わないかい？ ウイデイス」

ウィデイスと呼ばれる青年は、少し考え込む。

「確かに。しかし、愛は 重い」

ギーシュはウィデイスのその言葉に、くすくすと笑い始める。

「確かに、愛は重い。多くの者を愛すると言うことは、多くの者に愛されると言うことでもあるだろう。こちらから1000人に最上級の愛を与えたとしよう。向こうは一人につき一つの最上級。ただ」

「こちらに戻ってくるのは1000人の最上級……と言うことが」「然り。許容量を超えた愛は重石としてのしかかる。そこで潰れてしまう人もいるだろう」

ウィデイスはワイングラスの仲の真つ赤なワインを揺らす。

「つまり 君はそれに耐えられると?」

ウィデイスはニヤリと笑う。それにつられるように、ギーシュも笑う。

「もちろんだとも。確かに同じ時間に愛を受け取れば、破たんするだろう。ものは考えようだよウィデイス」  
「とは?」

まったく考えが回らないね。とウィデイスをバカにする。

「時間を分けてやればいいのさ。同じ時間に一人から愛を受け取る。1000人居たのならば、1000時間かけ、一人一時間。そうす

れば許容量を上回ることもない。そして、常に愛で満ち溢れる」

「それが 上手くいくとでも？」

「そこは個人の技量だ。少なくとも、僕は上手く回す気ではある。ただ、偶然とは恐ろしいものでね」

自傷気味に苦笑を浮かべるギーシュ。

「だろうな。愛と言うのは一人に一つ分しか受け取れる器が無い。もし、偶然が起こればそこから破綻するだろう。それでも君は愛をささげるのか？」

ワイングラスをギーシュに突き付けるウィデイス。

「もちろんだとも。全てを愛し。全てに愛される。そういう点では僕達は同士と言えよう。ただ、君の場合は愛を与えず、愛をもらうだけかもしれないがね」

ギーシュがワイングラスを伸ばし、グラスは、コンと言う音を鳴らしてぶつかり合う。

お互いがワインを飲み合う。

「俺のは弱い人間の考えでもある。愛を与えていないのだから、愛を受けても許容することは出来ない。つまり、与えも受けもせず。こぼし続けるのだよ」

テーブルに置かれたグラスに、ワインを注ぎ続ける。真っ赤なワインがグラスからこぼれ、ローソクの灯りを反射して輝く。

「こんな風にね？」

「それも一つの心理ではある。零れた愛も光り輝き、美しいではな

いか」

ウィデイスはワインをギーシュのグラスになみなみ注ぐ。

「ギーシュは愛を満たし、俺は零す」

「お互い理想ではあるね」

そこで、俺達は互いに席を立ち、背を向ける。

「有意義な時間であった。また会おう。同士よ」

「ああ。いつか……な」

そこで互いに一歩前に進み

土下座をする。

「」「ごめんなさい」「」

俺達の前には仁王立ちした少女達が居た。

「ご主人様！ わかっていますか！？ あんな小さな子を何故最初にしようとしたんですか！？ わたしが入るのがあと一歩遅かったからどうするつもりだったんですか！？」

ジョゼットがどうしてもナノマシンになりたいって言うから……。

「ギーシュ様！ なぜあれだけわたしに愛をささやいていたのに、他に大勢恋人がいるのですか！ わたしへの愛は嘘だったのですか！？」

「ち、ちがう！ 僕は全員に最上級の愛 おげぷっ！」

見えないが、後ろではギーシュが大変なことになっているようだ。

「お兄ちゃん！ 早くわたしへの続きをやってくれませんか！ あんな中途半端では胸の高鳴りが抑え込められません！」

くそ……何故俺がこんな目に……。

「ギーシュさんっ！ わたくしたちも最上級の愛をプレゼントします！」

「ま、待て！ その椅子をどうするつも ぐへあ！ びどあ！ げはあ！ うぷあっ！ あべすっ！ めぼあ！」

後ろではギーシュが変な魔法の詠唱をしている……。

「兄さん、わたしと第二期を新しく作るってことにしたじゃないですか？ 三万年後だってわたしが最初なんですよ？ つまり、今回もわたしが最初ってことです。さっそく行きましょう。なんだったら全員一緒に相手してくれても構いません」

無理だ……お前らの体力はナノマシンで無限だ。永遠にやることになりそうだ。

ああ……なんでこんなことになってしまったんだろうか。



21 ナノマシンを使おう！（後書き）

性格が少し違うのは、番外編だからです。

22 ついに使い魔召喚(前書き)

作者は迷走中。

だんだんと意味がわからなくなる。世知辛い世の中だ。

自室

やばいな。

今日は今年になって最初の授業 使い魔召喚の儀式だ。

タバサはいい。スクエアになっても、他の竜を一か所に集めて、タバサからゲートが開いたらイルククウを突っ込めって言ってるし。

問題は、俺とテファとミラだ。

韻竜なんて目じゃない。つまり、何が召喚されるかわからない。下手したら異世界から島ごときたりしないだろうか。

とりあえず、テファが十中八九人間。しかも、第四の使い魔って不安要素召喚しそだから……。

一応リーンにゲート先を調べて、人間だったら殺しといてもらうつもりだ。

てか、三人とも人間だったら殺しといてもらうのだが。

まあ、なんとかなるだろう。

「さあ！ 出撃だ野郎ども！」  
「はい！」

何が出るかな……。

## 召喚の儀式

失敗続きで何度目かの爆発をルイズが起こしている最中、俺達は少し離れた場所にいた。

「さて、まずはミラ。お前からだな。呪文は……適当でいい。俺も覚えてないから」

コクリとミラはうなずく。

呪文なんて適当なのだ。今だってルイズは『宇宙の果てのどこかにいる私の僕よ！ 神聖で美しく、そして強力な使い魔よ！ 私は心より求め、訴えるわ！ 我が導きに、応えなさい！！』なんて言ってる。

呪文つてのは普通『ウィズ・レスティ……』みたいな言葉なのが、召喚だけ普通の言葉なんてありえない。だったら自分に在った召喚獣って指定するよりも、初めから何を呼ぶか決めて召喚したほうが確実だ。

ミラが一步前に出、杖を両手で掴む。

《おいしくて、やわらかいお肉が食べたいな。毎日毎日食べたいな。普通の牛よりおいしいお肉！》

ミラの欲望だらけの呪文によって、目の前に一枚の鏡が現れた。そして、その中からゆっくりと現れる黒い生物。

うん。牛だ。それにしてもなんだろうあの牛……見ているだけで涎が垂れそうだ。

なんて人の心をわしづかみする牛だろう。

「出たー！ー！ー！！ やったやった！ー！」

ミラはびよんびよん跳ねて喜んでいる。

周りも普通だったらバカにするとところだが、あまりのミラの喜びに何も言えないでいる。

ミラは土を石と、鉄棒のような串に錬金する。

「それでは、頂きます！」

ブレードで首から下をバツサリと切断した。契約する前に切断するとは……。まあ、うれしそうだからいいけど。

それを串にさし、早速焼き始めたようだ。  
先ほどの牛　頭の方に視線を移すと……。

なぜか先ほどと同じ姿。と言うか身体まである姿でいる。  
頭だけのはずだが……。ミラの手には身体付きの串が握られているし。

「こ、これは!？」

ミラはブレードを作り、また切断する。  
切断し、数分で元の牛に戻るわけのわからない牛。

「やった!!　これで『死神の釜』再建できる!!」

更に、頭を縦に切り裂くと、数分で何故か二匹に増えた牛。

「なんて素晴らしい牛!　今日からお前の名前は『黄金ミラ牛』です!」

めっちゃくちゃうれしそうにしているが……。

「ミラ。此処で数を増やすな。ふやすなら領の牧場で増やせ。此処で増やしたら持ち運べなくなって、トリスティンの物になっちまう。食べる分だけにしとけ」

「わかった!」

にしても……、これは素晴らしい。最初の一匹だけは何度切っても死なないし、首を裂くと分裂する。二匹目以降は普通に死ぬ。なんてすばらしい牛なのだろうか。世界狙える。しかも肉質がめっちゃ

くちやいい。

ミラなんて焼けるの待てなくて生で食ってるし。

「んじゃ、次俺も行くわ」

俺は一步前が出る。

ミラに負けないようない物出さないと。

《すみません、お願いします。果物作る敷地が足りないんです。おいしい色とりどりの果物が成る種とください。不躰なお願いですが、どこか別の星から連れてきてください》

多分、ミラも別の星から連れてきたのだろう。俺が誠心誠意お願いすると、鏡が現れた。

その中からは一本の木が現れる。しかも何故か歩いている！青々とした葉つの隙間から、色とりどりの果物が覗いている。まるで輝いているようなその果物を一個もぎ取り、一口かじる。

「うまー！！ まじ最高ですよ！ 召喚の儀式最高すぎる！！ やった！ なんてすばらしいんだこの儀式！！」

一口かじった瞬間に口の中に広がる果汁と甘さ。ありえないわっ  
レ！

「そういう目的の召喚ではないのだが……」

「うるせー黙れコッパゲ！！ テメーの頭より素晴らしい木だろうが！」

「せ、生徒にまで……私はコルベールだ……」

うなだれてるハゲは無視して、俺とミラは果物と肉で昼飯だ。  
てか、なぜか俺が召喚した木。命名『ミラ樹』が増えている。別  
に切つてないぞ？

わしゃわしゃと歩きまわり、更に二本が分裂して四本に……って！

「おいミラ樹。此处で繁殖するな。あとである程度まで増えていい  
場所に連れて行ってやるから。それ以上増えたら燃やすぞ？」

俺の言葉に素直に、葉をがさがささせて頷く。

「ミラの肉もこの木も最高だな。果樹園が簡単に開ける。牛の世話  
も簡単になるし。テファ、なんか役に立つもの出してくれー」  
「はい！」

テファは意気揚々と杖を握る。

俺の希望だったら、自動星開拓キットとかほしい。そんなのある  
かわからんが。

《ミラちゃんと兄さんに負けないような便利なください。出来れ  
ば、お魚が食べたいです。大トロだけのマグロとかがうれしいです》

テファの素晴らしい詠唱によって、鏡が現れる。

しかし、出てこないの、待つしかないようだ。

数分後

「出てきませんねー」

「ああ」

「あ、この果物本当においしいですね」



俺達は鏡を放置して昼食中だ。

数十分後

「お兄様、既に100人くらいゲート先を殺しているのですが」  
「あー、詠唱変えてもテファはテファだなー」  
「人間は嫌ですね、大トロ部分在りませんし」  
「あ、ご主人様！ この部分すごいおいしい！」  
「マジでっ!？」

一時間後

「おい、そのちびイルカ。リング取ってきてくれ」  
「くきゅっ」  
「本当に便利ですねー、あの子」  
「ああ、浮いてるからちょうどいい」  
「でも、どこから来たのでしょうか？」  
「お兄様……。あれが鏡から出てきた者ですが……」  
「マングロかつ!？」

ありえないだろ。俺はちびイルカを試してみる。  
果物を必死に取ろうとしているちびイルカ。  
15センチくらいしかなく、おいしそうでもない。  
確かに魚っぱいが、哺乳類だろう。しかも飛んでる。

「ちびイルカ、ちよいこっちこい」

ふわふわと浮いてこちらに移動してきた、ちびイルカはテファの肩に乗る。

『まだリンゴを取ってこれていないのだが……』

「ああ、それはいいや。で、お前何？」

『ふむ。精霊達には精霊王と呼ばれておる』

「えー、すごいですね『ルカ』ちゃん」

「でも、ちっさいね」

「だな」

「」「」「……」「」「」

「」「喋ってる!?!」「」「」

「今さらですねー、お兄様もお姉さまも」

『精霊ですら喋るのだ、我とて喋ろう』

まったく似合わないな。見た目とギャップが激しい。

「で、なんか出来るの？ 役に立たないなら帰ってほしいんだけど？」

『失礼な奴だ。今は一部だけしか顕現しておらぬが、我はこの星自体なのだぞ？』

「ナノマシンに侵食されてないのか？」

『……されておる』

役にたたねー！ー！ こいついらなくないか……？

「まあいいや。テファ。契約してやれば？ なんか出来るかもしれないぞ？ てか出来ないなら捨てる」

『で、できるぞ！ 杖にもなれるぞ！ そうすれば、全ての精霊を扱えるのだ！ 多分』

多分かよ精霊王！ まじ使えなさそうだ。

「とりあえずしてみますね。詠唱は……忘れました」

「ああ、俺もミラも適当に契約したしな。たしか俺は『お前は俺の下僕だから言うこと聞けよ？ さからったら燃やす』ってのだった」「わたしは『いつまでもおいしいお肉を供給してください』でした」「……お主ら人を何だと思っておるのだ……」

ミラも俺も人間じゃなかったぞ。

《なんかよくわかりませんが、この子と契約します。使えなかったら食べます》

そう詠唱したテファは、イルカの頭に噛みついた。

『な、何をするのだ！ 痛いではないか！ あー、仕方ないのう！』

スポンと口の中から抜け出し、杖の形になったと言っか……。もとから在った杖を侵食した。四色の模様が杖に浮かびあがる。

「なんか変化あるか？」

「そうですねー、あ。ナノマシンと精霊が融合しているので、検索と物質情報の呼び出し。転移が出来るようになったっばいです。星の裏側とか見えますし」

「おおっ！ 別に時間かければ出来ることだが役にたったな！ いらなくなったら捨てればいいし」

「はい！ 便利ですねー。あと、精霊への命令権があるので、大陸統一したらするって言った精霊と系統魔法使えなく出来ますよ？ ご主人様がナノマシンに慣れれば普通に出来ることですが」

ふむふむ。つまり、いずれ出来ることが今出来るようになったっばい。てことか。

使えるような使えないような……。  
改造コードみたいなものか。

「んじゃリン。この牛と木、領内送って適切な処置してくれ。くれぐれも街に放し飼いにしたりするなよ？ 利益が損なわれるから」「はい！ では、行ってきます！」

リンは牛と木を連れてその場から消え去った。  
残ったのは一匹の牛と木。こいつらは寮の屋上で育てよう。

「わたしの黄金ミラ牛が……」

「転移出来るんだから食いたくなったら行けばいいだろ……」

ミラは納得いかなそうだが……にしても。

「ルイズはいつまで召喚失敗し続けるんだ？ もうすぐ授業終わるぞ」

「そうですねー。地形がめちゃくちゃになってますし」

もう二時間くらい爆発させてるぞ。

「てか、お前らなんで混じって食べてるわけ？」

俺たちの前で勝手に食べているタバサとキュルケ。

「ケチねー、いいじゃないっばいあるんだから」

「……おいしい」

「きゅるるー！」

お、イルククウも無事召喚されてる。

となりの火とかげはサラマンダーか。

「そついや、テファ。ルーンの効果なんだかわかったか？」

「あ、はい。吸収らしいです」

「吸収らしい？」

「あ、らしいって言うのはルカちゃんが教えてくれたんですが、吸収ってのはその名の通り。殺したり食べたりしたらその能力とか吸収出来るんです。でも、わたし自信が上限までいってるっぽくて、意味がないとのことです。これ以上になるには、兄さんを食べるくらいしないと無理だとか」

ふむふむ。だが、普通の人間にとっては最強の能力だな。かなり危ない力だが。

「精霊王についたルーンなのにテファが使えるのか？」

「はい。杖になってる間はわたしと同化って扱いみたいです。だから、精霊王としての力もわたしが使えるんですよ」

そうか……召喚されたのがアイツでよかったかもしれない。人間とかエルフとか亜人だったら最悪世界が滅びる。

殺しまくれば体力や精神力なんて簡単に無限に出来る。リーンに召喚手伝ってもらってよかったな。

「ゼロのルイズが平民を呼び出したー！ー！」

少し離れたところで生徒が叫んでいた。

てか、やっとかよ。

「さすがゼロのルイズね。平民を呼び出すなんて」

キュルケがそんなことを言うが、俺のおもちゃとしては最適なんだよアレは。

俺は、近くに置いてあった愛車にまたがってゆっくりとそちらに近づく。

ミラとテファも自分の愛車にまたがる。

長い練習の果て、テファも乗れるようになったのだ。

最初から大型バイクはきつかったのだろう。

カラーリングは俺が黒。ミラが赤。テファは灰いろっぽいシルバ―だ。

視線を移すと、召喚された平民は茫然としているようだ。まあ、いきなり異世界に呼び出されたらな。

「あんだ誰？」

「誰って……。俺は平賀才人」

「どこの平民？」

くだらないルイズと才人のやり取りの中。

平民召喚したルイズを周りがバカにしだす。それにいちいち怒って反応するルイズ。

実にくくだらないやりとりだ。

で、結局契約することになっていた。

契約がキスなのな。俺達はキスなんてしないが。

つまり、体液を入れられればいいのだ。適当に腕を切って血をたらせばそれで終わり。

木や牛にキスなんて出来ないっての。

「なんなんだあんたら！」

おお、才人がキレた！

「それでは、皆教室に帰るぞ」

才人の言葉を無視し、皆が空を飛んで教室に戻ってゆく。  
その光景を才人は口をアホみたいに開けてみている。

「お前は飛んで行かないのか？」

「と、飛んだら運動にならないじゃない！ 私は健康に気を使っているのよ！」

ルイズが胸を張って言っているが、胸なんてAAだ。男と変わらねーなあれじゃ。

その場にいるのは、俺達三人と才人とルイズ。俺達は少し離れるけどな。

そこで、才人はこちらに気づいたようで、目を見開いた。

「お、おおおおおおお！！！！」

いきなり叫びだしたぞ……大丈夫かアイツ？

目をキラキラと輝かせながらこちらに走ってくる。

「そ、それはBMWのK1300S！！ スゲーー！ 生で初めて見た！ しかも三台ともプレミアムライン！ 異世界も捨てたもんじゃねー！ これ250万くらいするよな！ 将来ほしかったんだよ！！ こっちだといくらなんだろ！！ 安かったらほしいな！」

てかこいつマニアか？

ちなみに、領で売ってる市販のバイクはそこまで高くないのだが、

これだけは値段がバカでかい。なにしろリーンしか作れないのだ。てか非売品だし。屋敷には500台くらいあるが、使用人用でしか使っていない。一応町中では精霊を使ってエンジン音は消してある。

「なによそれ？ そんなつまらない鉄くずがご主人様より大事なの？ 早く戻ってきなさいよ犬！」

おお、ルイズがおかんむりだ。

「バカにするなよお前！ これはBMWで最もバワフルで最速なんだぞ！？ 最大出力129kW！ 2.8秒で100km/hまで達する！ 素晴らしい！ あー、まじほしいな！ なあ、これってこの世界だとどれくらい買えるんだ？ 俺でも買えっかな」

ふむ。ちと試してみるかな。

「乗ってみるか？」

「いいのかっ！！？」

才人がハンドルに触れるが……。

「いや。俺免許ねーんだわ。この世界じゃどうだか知らないが、俺の世界では大型は18からだからな。どっちにしろ乗れない。壊しても困るし」

そう言って離れて行った。なんかかわいいなこいつ。

残念そうにうなだれてるし。

試した結果だが、ガンダールのルーン。武器なら問答無用で操れるようになるはずなのだが、乗り物は無理なのか。ゼロ戦と違ってこれは武器にはならないしな。ひき殺せば成りそうだが。



「まあ、バイクも車も俺の領にしかないからな。今度来ればいい。他にもたくさんあるから乗らしてやるよ。試乗コースもあるから、操作の仕方覚えればいいだろ？　なんだったら免許もうちでとればいい。年齢制限なんてないからな。その分取るのに難しいが」

「いいのかつ!？」

「いいわけないでしょバカ犬！　あんたも人の使い魔誘ってんじやないわよ！　これだからゲルマニアの田舎貴族は！　そんな田舎の鉄くずより、ドラゴンやグリフォンの方がよっぽどいいわ！」

ふむー……。確かに竜のほうが早いけど、竜もうちの領に全韻竜集まってるし。

竜より全然早いラプターもあるんだがな。トリスティンより文明は数千年進んでるしな。

まあ、どうでもいいか。

「なんかピンク髪が文句言ってるから俺は行くな。俺の名前ウィデイス・ラ・リバルステイン。またな」

「誰がピンク髪よっ!？」

「おう。またな！　俺は平賀才人だ」

「無視するな！」

あーうぜえ。

俺はあえて精霊の消音を消し、学院に走り去る。

後ろで、『やっぱカッケエエエ！』とか言ってるが。うん。趣味が合いそうでアイツは好きだ。一台プレゼントするかな。まあ、ルイズにばれたら壊されそうだけど。

その時は才人もルイズ見放すだろうし、そしたら俺がもらってやるわ。

### 23 才人を虐めて（前書き）

やっぱさ。ケティは必要だとおもわね？  
超脇役で一回きりかもしれないけどさ。

## 23 才人を虐めて

### 自室

「来ないな……」

「何がですか？」

ミラが首を傾げて俺のつぶやきに反応する。

「才人だ」

「ルイズの使い魔さんですか？」

「ああ」

この腐った世界の現実をそろそろ知るところだろう。そしたら俺の所に逃げてくると思ったけど。

「そもそも、来れるわけないじゃないですか？」

「来るはずなんだが……」

「此処、階段繋がってませんよ？」

「そうだった……！！」

ミスった……。いつも何も考えずに飛んでくるからな。これが普通だと思ってた。

才人は魔法使えないし、ルイズに頼んでもあいつも使えない。そもそも、ライン以下では此処まで来れない。トライアングルなんて上級生か教師、タバサキュルケくらいだ。

「と云うかですね。クラス同じなんですから授業に出れば会えたでしょうに」

「それはそれでめんどいだろう？」

あんなつまらない授業いらないだろ。

「あ、そういえばですねー」

テファがほわほわと風呂に入りながら会話に入ってくる。

「今日、その人とミスタ・グラモンが決闘してましたよ？ ぼろぼろになってましたがその人が勝ってました。それでルイズさんがハイポーション使って治してました」

ギーシュと戦ったのか。

「で、強かったか？」

「そうですねー、結構速いかな？」

「テファなら勝てそうか？」

「魔法使わないでも大丈夫ですね」

やはりその程度か。

「何て言うんでしょうか。早いんですが、熟練されてないんですよ。技の繋ぎとかも無理やり力で方向を変えていると言うか。流れがないので、遅い敵にとっては戦いづらいですが、早い相手にとっ

ては一気に弱く感じてしまいますね」

ふむふむー。

まあ、テファの加速と比べたらかわいいそうだな。あれは人間には視認できない速度だからな。

「タバサと比べたらどうだ？」

「それでもタバサさんが勝ちますね。魔法使わなかったら使い魔さんですけど」

そりゃ当り前だ。魔法使わなかったらな。プログラム完遂すれば魔法無しでも勝てると思うが。

「キュルケとだったら？」

「それは使い魔さん。タバサさんは詠唱のないフェントと、速唱の大きな魔法混ぜて戦うんです。でも、キュルケさんは最初から、しかも速唱出来ませんから長い時間かけて大きな魔法を使います。その間に切られちゃいますね」

実践向きと、貴族特有の見た目重要視ってことね。つまり、兵士のような実践訓練受けてないやつなら才人も倒せるんだな。って言うても、そんなやつなら誰でも倒せる。弱いなー。

「んー、手駒にはいらんないか。よくておもちゃだな。あいつの行動で未来がどうなるか面白そうだな」

「どっちにしろ、ご主人様の掌の上ですけどねー」

「そりゃそうだな。年季が違う」

「皆同じ年ですが、と言うか7歳の頃からご主人様はご主人様でしたよ。どんな子供ですかって感じでした」

「お前はあのおときは純情だったのにな」

「ご主人様色に染められましたから」

断じてその性格にしようとしたわけではない。まあ、あのときよりは使えるが、人がするような性格ではないだろう。まあ、プログラム受けたら皆人から外れるが。

「とりあえずっと」

俺は立ち上がる。

「どこか行くのですか？」

「ああ、暇だから才人にでも会いにな」

「そうですね。随分気に入っているのですね。好きになったらあの人殺しますから」

「男だぞ……。好きになるわけないだろう……」

性格がだんだんと怖い方に向かうなこいつは……。

「それならいいのですが。わたしはぐるぐるしているのでいつからつしゃいませー」

Reぐーたら。

俺はため息をつきながら別の場所に転移した。

## 食堂

才人何処行きやがった。ギーシュもいねーし。

食堂に来てみたが、飯の時間も終わっちまったからな。いねーわ。俺達はリーンに直接飯送ってもらってるし。何しろ、学院の飯はこつてりしすぎている。貴族はすぐ死ぬだろうな。

朝食にステーキとかアホすぎるし。

食堂を見回してみると、一人の黒がみの少女が座っていた。

何やってんだあの子？　なんか席に魔法でも仕掛けてるのか？

それだつたらそれで面白いから放置するけどな。

俺は少女に近づいてみる。

「あんた何やってんの？」

「!？」

その少女はビックリしてこちらを振り向いた。目は泣き腫らしたように真っ赤になっていた。

ああ……。めんどくさいのに声掛けちまった。全然面白くないわ  
コレ。

「あんたは確か……下級生の……ギーシュの恋人だっけ？」

「ケティ・ド・ラ・ロツタです。もう恋人ではありませんの。貴方はギーシュ様のお友達でしたね」

あー、またギーシュが何股もかけた犠牲者が。だるい。

「ま、そんなとこだ。で、君はギーシュの食事に毒でも盛りにな？」

「ち、違います！ いくら浮気されたからってそんなことはしませ  
んわ」

いやー、ミラあたりならするぞきつと。俺にではなく、相手の女  
にな。

「少し気分がすぐれなかつたので、厨房を借りてケーキを作ったの  
ですが……」

俺はテーブルに視線を移す。確かにショートケーキではあるな。  
ショートケーキ？ って感じだが。

「失敗したと？」

「はい……」

「気分がすぐれないからケーキつてのも不思議だな。俺の知り合い  
は機嫌が悪いと寝るけど？」

「お菓子作りが趣味なので、気がまぎれるかなと」

ケーキって確か、俺の領限定で発売している物だ。一応支店もあ  
ったっけな。作製方は公開していないが。ふむ。



「そのケーキ少しもらっていいか？」

「え？ でも……失敗作ですし」

「いや、ちよつとな」

「はあ……」

ケティと呼ばれる少女は素直に切り分けてくれる。確かに、ケーキナイフなのに切れ方がおかしいな。あれは……パンを切っているようだ。材料も違っていて何か。

「ど、どうぞ」

「ああ」

皿に乗せられたケーキとフォーク。

受け取って一口食べる。

ジャリとした感触。そして、空気が大量に入ったスポンジ。てかこれ……。

ホイップクリームもおかしいな。ふんわり感ゼロだ。水っぽい。噛むたびにグチャグチャと口の中にこびりつく。気色悪いな。

「ど、どうですか……？」

おずおずと聞いてくるが。はつきり言って糞まずい。だが、此処でひどいこと言って学校での評価下げるのもだるい。噂でもされたらたまらないからな。

「君。レシピ知らないだろ？ コレ、ミラ菓子店のケーキでしょ？」

「あ、はい。レシピは教えてもらえなかったので、おいしかったので真似して作ってみたのですが……。難しいですね……」

真似して子供が作れるようなものではない。しかも、材料も市販で買うと高いのだ。ケーキになって売る場合、うちが出す物は安いと言つか、出来物の方が安くなるのだ。個別のものの物価を下げないようにすると、どうしても砂糖など高くなる。それだと売れ行きが悪いので、材料を秘匿して安く出来たものを販売する。真似して作られても他では高くなる。うちが安いのは、自領で材料を全て賄っているからなのだ。

「まず、スポンジの材料が違う。何使ってるの？」

「えーっと、小麦粉ですが……？」

「それが違う。ケーキに使うのはパンと違って薄力粉。だからごわごわして、空気が入ったスポンジになってしまう。あと、砂糖は？」

「普通の砂糖を……」

「茶色い奴？」

「あーっと、はい」

「それも違う。あんな目が粗い砂糖じゃどうしようもない。精製された白砂糖を使え。ホイップクリームもさ、これ牛乳にわけわからないものを入れて作ってるだろ？ 本物は生クリームと砂糖だ」

「うっ……すみません」

おお！ 既に涙目だ。まずい。このままじゃ俺は女を泣かせる男ってことで広まる……。せっかく猫かぶってきたのに。

「あー、君はお菓子作るの好きか？」

「はい……」

ふむ……。

「ちよい待ってる」

「え？ わかりました」

俺は席を立ち、扉の影に移動する。

そこで、ナノマシンを介してリーンに連絡を取る。

『リーン。ショートケーキの材料を送ってくれ』

『はい。どれくらい必要ですか?』

『あー、そうだな。18型のホールを20個分くらいか?』

『了解です、数分まってくださいねー』

数分後、俺の前にミラグループのマークがついたダンボールが届く。

ああ、20個だもんな。えーっと、イチゴが20パック。生クリームも350gが20に。砂糖数袋。卵いっぱい。まあ、ひと箱にまとめられてあるからいいか。

俺はそれを持ち、テーブルの上に乗せる。

「えーっと、それは」

「気にするな、部屋に在った邪魔なものを持ってきただけだ」

俺は一枚の紙を取り出し、少女の左側に座る。

「描きながら説明するぞ? まずスポンジケーキの作り方は知っているか?」

「あ、えーっと。はい。それは外で見ましたので」

勤勉だなー。いつそケーキ屋で働いてくれないかなコイツ。

「ふむ。18型で、材料は、薄力粉90g砂糖90g卵150gバター30gだ。薄力粉、砂糖、バターはミラグループ系列でしか扱

つてないから注意しろよ?」

「それは知ってます」

「で、作り方は知ってるとのことだ。見た目は好みってことで、ホイップは生クリーム350g砂糖35g。作り方は氷水に当てる。冷やししながら、生クリームに砂糖を加えて泡立てる。すくうと太い筋になって垂れるくらいの固さまで泡立てる。デコレーションに使うシロップは、砂糖10gと水20gを温めて溶かし、冷めたらキルシュを加える。あとは外見だが、これはミラ菓子店と同じにしてもいいし、自分で考えてもいいだろう。わかったか?」

少女の方を見るが、全然理解していないようだ。

俺は苦笑して、詳しく紙に書いてゆく。

「えーっと、ケーキの材料ってすごく高くてお小遣いでは」

「ああ、そんなの知ってるさ。貴族だって男爵とかの娘じゃそこま  
で金ないしな。だからコレだ!」

俺はダンボールを叩く。

「ミラグループの……箱ですか?」

「箱だけ渡してどうすんだよ……中見ろ」

箱の中をのぞき、目を見開き、俺に視線を移す。

目がキラキラと輝いているみたいだ。

あー、ミラもこれくらい素直だったのに。なんであんなってしま  
ったんだ。

「こ、これ!」

「中身はショートケーキ20ホール分の材料だ。って言っても、イ  
チゴは早く使わないとダメになっちまうけど。それやるよ」

「ほ、本当ですか！？ あ、でも」

パアアアつと顔を輝かせた後に落ち込む。

「お金もないですし……渡せるものも……」

「別にいらぬ。部屋にあった邪魔なものって言っただろ？ まあ、普段ならもうがな」

俺にとってこんなもの全然たいしたこない。どうせ自領でとれまくるし。ミラ樹からのイチゴだし。自領の民が首都で勝つたら1エキユーいかないだろ。他寮だったら数百エキユー行くけど……。砂糖なんて1000超えるかもしれない。

俺が苦笑しながら考えていると、少女はじつとこちらを見ていた。

「なんだ？」

「なんで見ず知らずの会ったばかりの子にこんな高価な物くれるのですか？」

うおい！ 親切心が逆効果になった！ じょーちゃん、飴あげるからおじちゃんについてきな。みたいな？

「んー、友達の尻拭いかな？ ギーシユは毎回そんなだからなあ……。まあ、普段の俺ならしないんだが、暇つぶしかな。本当は才人を探してたんだけど、たまたま君が居た。居なかつたら話すこともなかつただろうし、居たから話した。それだけ。見返りも金もいらぬからもらつとけ。材料だって俺の所に会つたら腐らすだけだから、君に作ってもらつた方がいいだろ」

「あ、ありがとうございます」

頭に手を乗せて軽くほほ笑んでやる。

顔を真っ赤にして俯かせてしまったが……まずいな。

ギーシュよりも俺に惚れた方がまずい。なぜなら、ミラとテファに殺されかねないからだ。よし。すこし遠ざけるか。

「ちよつと待つてくれ」

「あ、はい」

俺は一枚の紙に紹介状を書く。

まあ、どうせこの子が大人になるころにはトリスティンは俺の国になっている。学院から離れさせることが出来るならそれもいいだろう。一応俺の正体はバレないように書いておこう。

最後にサインを書き、ミラグループ代表の印を押す。

それを、封筒に入れ、開けたかわかるように魔法をかける。

「はい、これ」

「? これは何?」

「これをミラ菓子店の支店に持って行って見せれば、作り方教えてもらえるし、見せてもらえる。そこで作る分には材料ももらえる。但し、一度開いたら中の文字が消えるように魔法かけてあるから。絶対に開かないで持ってゆくこと」

俺の言葉に目を見開きこくこくとうなずく。

頭のいい奴なら、此処で気づくかもしれないが。会話からそこまですで頭がまわりそうもなさそうだな。

「あの、ありがとございました。何から何まで」

「いや、気にするな。ただの気まぐれだ。次会ったときは君を無視するかもしれないし、話しかけもしないかもしれない。一生に一度の縁だったと思ってくれ」

そこで俺は席を立ち、そのまま背を向けて歩き出す。

「あのっ！」

「ん？」

「名前をまだ聞いていません！」

「あー、言わないとダメ？」

「はい！」

だるいな……。

「ウイデイス・ラ・リバルステイン。偽名かもしれないし、本名かもしれない。どっちでもいいことだ」

本名なんて言えないからな。

そのまま出口に歩きだす、出る直前で、

「ケーキが出来たら、また食べてもらっていいですか？」

はあ……。一生に一度って言ったたるうに。

「さよなら。“ケティ”」

俺は返事をせずに、そのまま外に出た。もう真っ暗だ……。

## ギーシュの部屋

「それで、君は何の用できたのかね？」

「何でもねーよ。お前のせいで才人にあえなかつただろーが二股野郎」

あのまま俺はギーシュの部屋を訪れた。

「モンモランシーを追い出してまで部屋に居座つた理由がそれかね！？」

「お前の齒の浮くようなセリフを永遠に金髪ドリルに聞かせてただけだろ？ 思ったんだけどさ。お前って童貞だろ？」

「なっ！？ なんてこと言っんだ君は！？」

「いやさ。あんだだけ何股も掛けておいて、選ばないってことはそうなのかなと。お前最上級の愛とか言ってるけどさ？ 一線を越える勇氣はなくて、途中までしか手出せないへタレだな」

「な、なななな」



「じゃあ聞くが。全員妊娠させて、一生背負ってく覚悟あるのか？」  
「……」

まあ、16歳にはキツイだろうな。17かもしれないが。俺の場合なんか女の方が何股しても容認してるし。自分から何股もするつてのは結構疲れる労働だ。てか、俺も童貞じゃん。

「てかさー、才人お前そんなところで何赤くなってんだよ？ てかなんでギーシュの部屋にいるか謎」

「僕が才人と仲直りしたくてね。部屋に呼んで置いたのを忘れて、モンモランシーが来てしまった。それでベットの下に隠れてもらってたんだ」

才人の気持ちになつてみると可哀そうだな。男友達に家に誘われたら彼女が居ました。つて感じた。一応中に入るけどいたたまれなくなつて帰ろうとするが、帰らせてもらえないって感じか？

「才人は地球で何人女いたんだ？」

「は？ いや。俺は居なかつたぞ？」

「マジでっ！？」

「本当かいつ！？」

「いや……、そんな驚かれると傷つくんだけど？」

「年齢イコールつて言う伝説の？」

「ああ……」

いや、都市伝説かと思ってたわ。普通それでも告白程度何度か受けるだろう……。一年に一回か二回は最低でも。実際モテないつて奴聞くけど、どれ程モテないかは本人しか知らないしな。

「まあ、安心しろ。才人。俺も恋人は居ないからな。仲間だぞ？」

「一回も出来たこともないしな」

才人の視線が俺を貫く。ジトつとした目だ。

「とりあえず、その腕に抱きついてる二人を置いてきてから言っ  
てほしいセリフだ」

ふむ。ミラとテファが勝手についてきたただけであって、連れてき  
たわけではない。

「気にしないでください使い魔さん“いつか”いいことありますよ  
」？」

テファがにっこりと笑う。

「そうですねよ使い魔さん。全然カッコよくななくても“いつか”恋人  
くらい出来る“かも”しれません」

ミラのとどめの言葉に、才人が泣きだす。

「お、俺だって本当はうはうはハーレムルート直行したいんだー  
ー！……」

泣きながらハーレム叫びやがった！

「ところでウイデイス。どうやって二人の女性を同時に維持出来る  
のかね？」

黙れギーシュ。

「違いますよ？ ご主人様はわたしと、テファとリーンちゃんとルミアちゃんとジヨゼットちゃん。もしかしたらシャルロットも維持してますね。皆関係は良好です」

「6人同時なのかね！ なんてうらやましい！」

シャルロットの名前は知らないからなコイツら。

「そっぴやさ、ギーシュ。黒髪の子いたろ？ ちゃんとフォローしとけよ？」

じゃないとこっちにきそつだ。駒になんてなるわけがないからいらぬ。

「ケティのことかね……。先ほど厨房に行ったのだが、嬉々としてお菓子を作っていた。味見をさせてもらおうとしたら、『ギーシュ様は食べたないください！ あの方にあげるのですから！』と言われてしまったね。恋多き年頃なのさ……。フツ」

ギーシュが遠くを見つめているが……。あの方つてのが俺じゃないことを祈ろう。俺の家系の奴らは、全員俺が利用に値するやつらつてことで保っている。能力だつて圧倒的だ。あの少女が入ってきたら破綻することは目に見えてる。うん。知らないぞ俺は？

「サイトはルイズと仲直りしたんじゃないのか？」

「フツ、聞いてくれよ。俺のモグラ人生を」

うわー……。めちやくちや聞きたくない。

「俺が怪我したのを高価な薬で治してくれてな。看病もしてくれたんだ。でさ、女神のように見えたんだ。そこで魔が差した。もしか

したら俺が好きなんじゃないかとき。そこで、押し倒したら……」

「うん。お前バカだ」

「最低ですね。女性の親切心を」

「いつそ死んでください」

「君は女性を理解してないようだね」

「うわーん、どうせ俺なんて一生モグラだー!!」

才人は泣きながら地面に伏してしまった。

てか、アホだろ。どんな勘違いしたんだ。むしろ今まで女に免疫が無さ過ぎて勘違いしたのか？

「で、どんな状況だったんだ？ ごまかせばいいだろう？」

「ああ……。惚れてると思って散々臭いセリフ吐いて、怖いと思うけど優しくする、俺も初めてだっと思って感じで言っつて。ズポンを脱いで押し倒した」

「……ルイズのその時の状態は？」

「震えてた。初めてで怖いのかと思っつて……」

うん。誤魔化しようもないな。

「お前は終わりだ」

「死んでください」

「此処に便利なロープがあります」

「……君はなんていうか」

「俺はモグラ以下だー!!」

ミラが魔法で天井からつるしたロープに首を掛け、ベットから飛び降りる。

俺がロープに穴を開けてちぎれ、倒れ伏して泣いている才人。

ホント何て言うかあれだな。

「まあ、しばらく扱いは害虫並みになると思うが……飯は厨房からもらえばいい。なんだったら俺の部屋に来ればいい。飯くらいは食わしてやるよ」

「ダメです！」

「やっぱダメだ。来ない方がいい」

うん。多分殺される。てか、コイツら風呂好きだから、結構入ってるしな。才人のことだからちようどその時に中に入ってくるだろう。そして殺される。

「そもそも君の部屋って此処の最上階だろう？ 魔法が使えないと行けないのではないかい？」

「ああ、それもそうだ。前にギーシュが来ようと思って落下してたしな」

「不便すぎるのだよ……。ラインに上がってもあそこまで登れない」

トライアングル以上じゃないとな。

「って言っても、才人は部屋に戻れないだろうしな。俺の部屋はミラモテファもいるから入れられないし。ギーシュの部屋は女がきそうだから無理として。一日俺のバイク貸してやるからぶつきれるまで暴走してるか？ 固定化かけてあるから壊れることもないし」

固定化の魔法は術者のレベルによって強度が変わる。オクタゴンレベルの俺が固定化を掛ければスクエアの魔法程度なら壊れることはない。200キロでぶつかっても乗っている奴だけが死ぬだろう。バイクは無傷だ。

「マジでっ!?!」

「ああ、操作はわからないだろうが。お前バイク好きなら少しはわかるだろ？ 後は慣れた。車体に潰されないように頑張れよ」

「マジかつ！！ 夢にまで見たK1300Sに乗れるなんて感激だ！」

「んじゃ、寮の横の工場の近くにあるから。ホラ、これがキーだ」

才人はパシッと俺の投げたキーをキャッチする。

「サンキュー！ 行ってくるぜ！」

そのまま部屋を走って出て行った。

「もうルイズのこと忘れてるな。まあ、バイクで風に当たってれば気分も変わるだろ」

「君は優しいのが優しくないのかわからないね」

俺はギーシユの方を見、ニヤリと笑う。

「面白い奴には優しいよ。つまらない奴には興味すらない。ギーシユが何股もかけるような面白い奴でよかったさ」

「……それは褒めているのかい？」

少なくとも俺は褒めている。皮肉でもなんでもなく純粹に。

その時、バイクの爆音が聞こえてきた。あ、忘れてた。消音してねーわ。迷惑すぎる。

窓から顔を出し、音を消してやる。

才人はこちらを向き、手を振る。

「あ、エンストした」

「そのまま倒れましたね」  
「下敷きになってます」

何て知識だけな野郎だ！ でもそれはそれで面白い！

「ほー、それでももう一度乗ろうとする熱意はすごいな。ギア変えずに出て行ったぞ」

「あれじゃ本当の楽しさを受けられません」

「それは最速まで入れて、ブレードで木を切り刻んだり、魔法乱射するあれか？」

「気分爽快です」

確かにそうだけどな……。ブレード10メートルくらいに伸ばして、木をスパスパ切ってるし。

ま、とりあえずそろそろ帰るかな。もう此処に用ないし。

「さて。俺は帰るわギーシュ。これ。迷惑かけたからやるわ」

俺は箱入りのワインを渡してやる。

「こ、これは！」

「ああ。ミラグループの知り合いにもらった最高級赤ワイン。肉料理と一緒にでも飲め。さっきのモンモランシーとでも飲めば機嫌治るんじゃないか？」

「おお、僕は君を友に持って幸せだよ！ ありがとう！」

何て都合がいい奴なんだ……。

まあいいや。

俺達はそのまま部屋を後にした。

### 23 才人を虐めて（後書き）

あのねー先生。頭に手を乗せて撫でるのって、かなり有効的な手なんですよ？ ちなみに実体験です。是非使ってくださいb いきなりみず知らずの人にやったら殴られるかもしれませぬ。節度を持ちましょう。



## 24 計画第一段階の準備。

### 始祖の生誕祭

憂鬱だ……。

パーティーとか飽き飽きしてる。

学生にも貴族としてのふるまいを学ばせているのかも知れんが、超だるい。

才人なんてもうずっと帰ってこないし。まあ、今はこっちに向かってるし、あいつを見てるのはおもしろかったけどな。

俺はパーティー会場にあるテラスに出て思わず苦笑いをしてしま  
う。

バイクに積んであった金をつかって様々な場所で買い食いしたり、

兵士や盗賊に追いかけられたり。面白い。

デルフリンガーって魔剣もルイズと喧嘩したから買えないだろうと思ったが、歴史の修正力か知らないがたまたま立ち寄って買ってたし。

だが、殺しは出来ないっばいな。逃げっばなしだ。地球の常識をそのまま持つてると死ぬな……アイツは。

まあ、とりあえず今は会場から退避中だ。無名貴族の俺にダンスを申し込む奴なんていないし。

なにしろ、この国の王女が来てるのがだるかった。ルイズと話してるようだが。王とは会ったことがあるけど、あいつには会ったことが無いから大丈夫だろう。

「なあ、ギーシュ？ お前も何で此処に居るんだよ。グラモン元帥の息子なら引く手あまただろう？」

手すりに寄りかかって、ワインを飲む隣のギーシュに問いかける。

「聞いてくれよ、フッ」

なんだか自嘲気味にため息を漏らした。

「もし、今日他の女性と踊ったら一生口をきかないとモンモランシーにね……」

「ああ。結局お前はモンモランシー一筋なのか？」

「さあ、どうだろうかね。自分でもよくわからない。愛を与え過ぎてどれが本当の愛かも忘れてしまったよ」

ため息をつくギーシュを見つめる。まったく。ままならねーな。全部が全部。

「ご主人様！」

後ろから聞こえた声に振りかえる。  
そこで目を疑った。

「何でお前たち二人はウエディングドレスなんだ？ ダンスパーティーだろ。踊れねーよそれじゃ」

もう会場の視線独占だ。王女より目立ってるし。スカートの裾が長すぎる。

宝石も王女のみより立派だしティアラまでかよ。結婚するきかコイツら。

まあ、美人は美人なんだがな。

「特注品です」

ロパクでミラグループのとか言ってるが。

「ご主人様、結婚していただけませんか？」

「黙れ。ダンスの申し込みじゃないのか？」

「チツ、間違えました。踊っていただけませんか？」

舌打ちは置いておいて……、あらかじめ順番を決めていたのか、ミラが先に手の甲を前に出す。

「さすがにその服じゃ踊れないだろ？」

「あら？ ご安心を」

ミラは小さな杖にブレードを纏わせ、くるくると回転させながら

ドレスを切ってゆく。

ドレスが円のように切られ、だんだんと短くなってゆく。やがて、ダンス用のドレスになる。

「ね？」

「にこやかに言うミラだが……。ウェディングドレス高いんだぞ……」

「はあ、言つとくが俺のダンスレベル無駄に高いぞ？ ついてこれるのか？」

「ええ。わたくしもダンスには自信がありますの」

そう言えばコイツもよくパーティーに連れていったな。俺はコイツとは踊らなかつたけど。たまにはいいかな。

俺はミラの手を取り、会場の中心に移動する。

ゆっくりとした音楽に乗り、俺達は踊る。

だんだんと飽きてきて、すこし激しめに踊る。

「さすがご主人様、やはり他の方たちとは違いますわ」

「お前も違うな、……口調が」

「うぐ……、仕方ないのよ。パーティーではこうと、昔から言われ続けていましたので」

「確か……最初にそうしろって言ったのは俺だな。確か7歳の時か……」。

懐かしいな。怪我を負った奴隷少女が此処まで来るとは思ってもいなかった。

俺がしげしげとミラを見つめると、こちらの視線に気付いた。

「あら？ わたくしに見惚れて？」

俺は苦笑で返してやる。じっと見ていたのも事実だしな。やがて曲が終わり、ミラが首に抱きついてくる。身長差がかなりあるので、ぶら下がるような感じだが。

「ずっと一緒です、ご主人様。これからもずっと」

「ああ。もともと一緒のつもりだった」

ミラは一步離れ、キレイにほほ笑んだ。

「次はテファをエスコートしてくださいな」

後ろにはテファが立っていた。

ミラは他からの誘いを数度断り、テラスの方に戻った。

「さて、踊ろうか？」

俺はテファに掌を上にして差し出す。

テファは手を重ね。

「ええ。兄さん」

やさしくほほ笑んだ。

だが、会話をしながらも俺は違うことを考えていた。ルイズとアンリエッタ王女の会話。ナノマシンを介して聞いているのだが。

もし、原作通りになると、ルイズは死ぬ。最悪敵の方に着くな。そうなったらそれで殺すけどな。

## 自室

俺はルイズの部屋を盗聴していた。

原作通りなら、アンリエッタがルイズの部屋を訪れて、ルイズと才人を死地に追いやるはず。

先ほど日焼けして褐色の肌になった才人が帰ってきたしな。

なんだか少し大人になっていた。世界をみてきたのだろう。ルイズに謝り、部屋に入れてもらっていたな。

これで、ルイズは死なないかな。ただ、原作と違ってゴーレム事件もなかったので、ルイズの心はつかめていない。才人もルイズをそこまで好きじゃない。

このままじゃ二人は死ぬかも知れない。

ただ、此処で死なれると計画が台無しだ。

「ご主人様、何をしているのですか？」

「ん？ そうだな…… お前らさ。ルイズの部屋の座標覚えてるか？」  
「はい」

「ちよつと見てみる。あ、タバサは聞けないから俺がきいた内容を口頭で話すは」

「わかった」

この部屋にはミラ、テファ、タバサがいる。

原作と違って、ルイズ達にタバサが協力しないかも知れない。だが、それだと確実に途中で死ぬのだ。

竜がいなくて逃げられもしないしな。

「あれ？ これはアンリエッタ王女ですか？」

テファは覗いて首を傾げる。

「ああ。ちよい待ってる。俺の計画の狼煙が上がるから」

俺達はルイズの部屋の中を見つめ続ける。

『ルイズ。わたしくしは、ゲルマニアの第一皇子に嫁ぐことになったのですが……』

『ゲルマニアですって！ あんな野蛮な成り上がりども国に！』  
『そうよ。でも、仕方がないの。同盟を結ぶためなのですから』

そのあと、ルイズにハルケギニアの内部情勢を説明していた。

アルビオンの貴族が反乱を起こし、王室は倒れそうなこと。反乱軍が勝利をおさめたら、次にトリスティンを攻めてくること。

それに対抗するために、トリスティンはゲルマニアと同盟を結ぶこと。

てか、ウエールズ。ヒント教えてやったのにこのざまかよ。  
ルミアの兄は皇帝に似てブサイクなんだよなー。ルミアは母親似  
だったけどさ。

『いいのよルイズ。好きな相手と結婚するなんて、物ごころついた  
ときから諦めていますわ』

『姫さま……』

『アルビオンの貴族たちは、トリステインとゲルマニアの同盟を望  
んでいません。片方ずつならば折れる国も、同盟を組まれたら難し  
いでしょう。したがって、わたくしの婚姻を妨げる材料を探してい  
ます』

『もしかして……姫さまの婚姻を妨げるような材料が？』

『おお、始祖ブリミルよ。この不幸な姫をお救いください……』

『言つて！ 姫様！ いったい、姫様の婚姻をさまたげる材料つて  
何なのですか？』

『わたくしが以前したためた一通の手紙……』

『手紙？ どんな内容なのですか？』

『……それは言えません。でも、それを読んだらゲルマニアの皇帝  
はおそらくわたくしを許さないでしょう。同盟は反故。となると、  
トリステインは一国で、あの強大なアルビオンに立ち向かわないと  
なりません』

『いったい、その手紙はどこにあるのですか！？』

『王党派のウエールズ皇太子が持っております……』

『あの凜々しい皇子様が？』

『ああ！ 破滅です！ ウエールズ皇太子は、何れ反乱軍に捕らえ  
られてしまいますわ！ そしたらあの手紙が明るみに出、トリステ  
インは滅亡です！』

『では、姫様。わたしに頼みたいことは……』

『無理よ！ 無理よルイズ！ わたくしっしたら何てことでしょう！』



貴族と王党派が争いを繰り広げているアルビオンに赴くなんて危険な事、頼めるはずありませんわ!」

『何をおっしゃいます! たえ地獄の釜の中だろうが、竜のアギトの中だろうが、姫さまの御為とあらば、何処なりと!』

そこで、俺はため息をついて、意識を戻した。

反吐が出る。

周りを見回してみると、無表情の三人。

「で、どうよ?」

「どうよって言われても。茶番? 質の悪いドラマ? 力もないくせに自分勝手な王女と、何も考えないアホ?」

俺はその言葉にくすくすと笑ってしまふ。言い得ている。無理と  
か言うくらいなら頼まなければいい。それを受ける奴もバカだ。ど  
こぞの三流演劇以下だ。

「ただ、俺の計画では、ウェールズをこちらで確保したい。反乱勢  
カレコン・キスタには一度アルビオンを制圧してもらいたい。と言  
うかだな。レコン・キスタにトリスティンに攻め込んでもらいたい。  
そこが、国を乗っ取るチャンス。だが」

俺はタバサを見つめる。

「此処で才人とルイズに死んでもらうわけにはいかない。まあ、楽  
しみてわけでもあるんだが。で、タバサにはアルビオンに着くま  
で、不自然でないようについて行ってほしい。キュルケでも連れて  
いけばいいだろう。出来るか?」

タバサはコクリとうなづく。

これで、途中までは安全だろう。タバサは偏在も使えるしな。あとは、バレないようにウェールズを回収。そして、恋で盲目なアンリエッタを利用すればいいだけ。

「わたし達はどうします？」

「ああ、俺達はやることがある。王党派アルビオン軍の説得。此処で死なすわけにはいかない。まだ利用価値があるからな」

俺はニヤリと笑みを浮かべる。

うまくゆけば、トリステイン、ゲルマニア、アルビオン、ガリアは一発でケリがつくな。

色々と楽しみが尽きないな。実に面白い。

「タバサ、明日の朝。才人達は出発する。キュルケは才人に惚れるからついて行こうって言いだすだろう。そしたら一緒に後から追ってくれ。だが、あまり関わりすぎるなよ？ お前はトリステインでもガリアでもゲルマニア所属でもない。『冥府の番人』。そしてシャルロット・ヴィ・リヤステイダ」

コクリとうなずく。

問題はルイズと才人の心情だな。そこをどうやって操るかだ。

「それにしても、あの息子。何変な要求してるんでしょうかね？

顔がアレだから仕方ないのかもですが」

「まあ、どうせすぐに王位継承権なくなるけどな。俺が王になるわけだし。んで、ゲルマニアは公爵しかもう残っていない。公爵とは王族の家系。だが、俺に子供などいないからな。ゲルマニアには貴族はいなくなる。他の三国は公爵だけ降格かな？」

「あれ？ でも貴族制度廃止するんじゃない？」

「貴族つてのは魔法が使えるから貴族でもある。魔法を使えない世

界にした後で、撤廃するのが一番いいだろう。民は簡単に味方につけられるからな。民がいない貴族など放浪者となんらかわりはない」

「それがこの腐った世界を作った元でもあるのだがな。貴族と言う地位に胡坐をかいて、何もしてこなかった貴族。俺がツケを払わせてやろう。」

25 死への葛藤。才人がね。（前書き）

グリフォン飛べなくなっております！

ワルドファンの方には申し訳ございませんが、作者的にワルド好き  
ではありません！

なのでより滑稽にするために……ね。

25 死への葛藤。才人がね。

書室

「絶っ好調〜真冬の〜恋〜スピードにーのおって〜」

今日もゲレンデの雪は真っ白だぜー。

「俺！ 輝いてるー！？ ゲレンデで一番、輝いてるー！？」

「ご主人様……現実逃避しないでください。あー、ホラ！ 書類がくしゃくしゃです！ 性格も崩壊してますから！」

「俺のスノーボードテクニクの前にはそんなもの関係ないぜヒヤツハ  
ー！」

「ああああ！！ 完全に書類が千切れてるじゃないですかっ！？」

もうね。なんでこう床真っ白。山が出来る程書類が溜まるんだろ  
う。

アルビオンのせいで俺の仕事が一気に増えたよ！ マジ潰したい！

「と言うかさ、お前が『死神の釜』支店出すって言うから、上層部  
(使用人権幹部)言いくるめるのに書類がいつぱいきてるんだよ！  
テメーがやれ虚乳娘！」

「巨乳なんて……やんやん」

「悶えるな！ お前の胸は成長分虚空に次元突破して成長してねーだろが！ 書類片付けろ！」

「ひどすぎる！」

落ち込んでるが仕方ないぞコイツ。あんな糞赤字ばっかの店再度出店。しかも同時に支店とか無理すぎる。まあ、黄金のミラ牛がいるから出せるんだけどな。アレの肉が食えるのは『死神の釜』だけってことにしてるが。

「あ、つてかもう学院の門前にルイズと使い魔くんいますよ？ あと、なんかよくわからないヒゲ男爵とギーシユも」

あ、忘れてた。徹夜のせいで頭があんま回らないし。とりあえず、薬飲んで行くかな。

「んじやー、行くぞ。ミラ。テファ。今回は戦闘もないし、才人とかとは途中で別れるから。気軽に行くぞー、交渉はあるけどな」

「はい」

「交渉ならまかせてくださいっ！」

ミラは交渉だけはすごいからな。交渉っていうか話を合わせることだけ。

テファは交渉が最悪だけど。人見知りするし。

俺は誰かに見られないだろう場所、出来るだけ門に近いところに転移する。

門

そこにはルイズ、ギーシュ、サイト、髭男爵。ギーシュの使い魔の大きなモグラ。グリフォンが居た。てかさ、グリフォンって空飛べないのな。マジパチモンだわ。あと馬が二頭いた。

俺達はそこに近づく。

「よう。オ人、ギーシュ。どこいくんだ？」

俺の声に気がついて全員がこちらに振り向く。

「あ、ウイデイスか。ああちょっと」

「ちょっとアンタ！ これは姫様の極秘任務なんだから言っちゃダメよ！」

うんうん。ルイズは頭も足りないのな。胸なんて足りなすぎるし。それを言っただろうするんだ？

「ああ、気にするな。アルビオンだろ？ 学院長に心配だから着いて行けって言われたんだよ」

そう言い、俺は空中の一点を見つめる。遠見の鏡で覗いてるようだが、ナノマシンで何処にいても俺の目が在るようなものだ。空間の歪みくらいわかる。

「何であんたがそんなこと頼まれるのよ！」

あー、うざい。とりあえず無視無視。

「で、その髭男爵は？」

「アンタ失礼で」

「いいのだよ。僕のかわいいルイズ。怒った君もかわいいね。僕の名前は女王陛下の魔法騎士隊、グリフォン隊長、ワルド子爵だ。君らは？」

意味わからんが出しゃばってきやがった。

「ああ、ずいぶん長い名前だな。“女王陛下魔法騎士隊グリフォン隊長ワルド子爵”なんてどんだけ長い名前なんだよ。ちなみに俺はウイデイス。覚えなくていいから」

「わたしはティファニア。覚えなくてもいいですよ？」

「わたしも覚えなくていいから名乗りもいいです」

俺達の適当な自己紹介に才人とギーシュがくすくす笑っている。

「本当コレだからゲルマニアの貴族は！ なんて礼儀もなっていないのかしら！」



真っ赤になって怒るルイズだが、礼儀を示す相手くらい自分で決める。

「まあ、とりあえずわかったことは。ロリコン子爵ってことだけだな。気をつけるよミラ。テファは……大丈夫だな」

「ま、待ってくださいご主人様！ 今明らかに胸見て言いましたね！？ 言いましたよね！ あんなAAと比べないでください！」

ビシッとルイズを指さして怒るミラ。正確には胸を指さして言う。ルイズが真っ赤になって怒鳴りそうだ。

「いいよ。おいでルイズ。僕は君の全てがかわいく見えるから。気にしないよ」

ああ、コイツは重症だ。末期だ。死ぬしかないな。

ルイズは真っ赤になりながらワルドに近づき、抱きかかえられてグリフォンの上に飛び乗った。

「では諸君！ 出撃だ！」

「待てロリコン！」

今にも駆け出そうとするワルドを俺は止める。

「……何かな？」

ロリコン呼ばわりされて、イラついているのか青筋が浮いている。

「何も何もないだろう？ お前の脳みそはロリコン神経に全て使われているのか？ 俺達がいいが、才人とギーシュはどうやって移動

するんだ？」

「馬が二頭いるだろう？」

「馬でグリフォンに追い付けると？」

「……」

追いつけるわけないよな。脚力も持久力もグリフォンの方が上だ。地を這うしか能が無いグリフォンでも、“地”に限ればほぼ最速だ。

『リーン。すぐに上空にペガサスを二匹転送してくれ』

『わかりました！』

ナノマシンの会話で送ってもらったことにした。

すぐに上空から羽ばたきが聞こえ、俺達の目の前に二匹の純白のペガサスが降り立つ。

グリフォンなぞより全然レアだ。しかも、精霊魔法が使えるので空も飛べるし、魔法も使えるので便利だ。

全員が驚きに目を見開いている。

「才人とギーシュはうちで飼ってるペガサスに乗れ。俺が命令してるからおとなしい」

ペガサス二匹は二人の前に移動し、乗りやすいように背中を向ける。

「な、なんでアンタみたいな田舎者がそんな物持ってるのよ!?!? 王宮だって持ってないわよ!?!? それよこしなさいよ!?!?」

もうなんだろうコイツ。ため息しか出ないわ。

「はあ……。なんで俺がお前にやらないといけなんだよ？」

「私はヴァリエール公爵家三女儿イズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ！ 下級貴族は公爵家の命令は聞くのが当たり前でしょう！？」

「俺ゲルマニア貴族だし。ゲルマニアだったらお前は平民と同じ位だろう？ 意味ないじゃん。そもそも、お前は三女なら爵位継承権もほぼゼロ。現公爵はお前の父親。何処に自慢することがあるんだ？ 自慢するなら公爵をお前が次いでからにすればいいだろう？」

ため息交じりに言ってやる。俺は自分自身が爵位持ちだが、コイツは爵位無し。偉くもなんともない。偉いのは親ってだけだ。

「な、なななな」

「まあ、家柄しか自慢出来ないんだから仕方ないだろうけどさ。逆にバカにされるからそんな自慢すんなよ？ 意地悪じゃなくマジな話だから。確実に陰口叩かれてるぞそれ」

「侮辱よ！ 侮辱されたこと、王宮に告訴してやるんだから！」

「はいはい。勝手にどうぞ。ゲルマニアに喧嘩売って滅ぼされないように気をつけるよ」

まず、俺をトリステインでとらえたら確実に戦争になる。

ゲルマニアの三分の二の領土を持ち、献上金も膨大。ならないほうがおかしい。そもそも、うちの領民が黙っていない。兵が出れば確実に小国トリステインは落ちるだろう。

こいつは認めないだろうが、ゲルマニアは超大国だ。ただし、今までは金で貴族が買えることから一枚岩ではなかったのだ。領土だけなら大陸一だろう。ただ、今までは貴族同士の争いが絶えなかった。だが、俺がほぼ一つにまとめてしまったから一枚岩となっているのだ。

うちの領は王室ですら手が出せないの、ならば取りこんでしま

おうと思って諍いはなくなった。  
それが毒だとも知らずにな。

「僕のルイズ。気にしなくていいよ。では行こう！」  
「は、はい。ワールドさま！」

グリフォンが駆け出す。

俺達は浮かび上がり、後を追う。ペガサスも俺に続く。

#### 数時間後

「おせーよ、アイツラ。竜でもつれてこいよ全く」

俺達とペガサスは、地面を走るグリフォンを上空から見ながら、  
ゆっくりと飛んでいた。

グリフォンはかなり遅れている。原作ではグリフォンに乗ったワールドが速さを自慢しているようだったが、所詮地面を走る獣。全然遅い。

ワールドがこちらをちよくちよくみて、必死にグリフォンを駆っている。

「それにしてもウイデイス。ずっと飛んでいて精神力は持つのかい

？」

「ん？ 少しでも俺達が疲労してみえるか？」

「見えないな……」

「だろ？ 一日や二日飛んだって大したことない。魔法の才能はないけど、精神力だけなら俺達は教師より多いぞ」

実際は一年だろうと飛びっぱなしでいれる。精霊の加護でやろうと思えば音速だって超えられる。

ナノマシンじゃなきゃ燃え尽きるがな。

「どうだ才人？ 馬だと腰も痛くなるし、たまには空の散歩もいいだろう？ ロリコンがめっちゃ遅く感じるし」

「くくく。まあな。バイクもいいが空もいいかもしれない。そう言えばこのペガサスってルイズがあんな怒鳴る程高価なのか？」

不思議そうに首を傾げている才人。その返答には、俺の変わりにギーシュが答えてくれる。

「君は知らないからそんなことを言っていていられるんだよ……。王室で使ってる神聖な生物って言われるユニコーンの上なのだよ？ 王室ですら手が出せない幻獣さ。一匹で小さめの領と豪華な家が建つね」

「ゲっ！？ こんなものがねー……」

そういつた瞬間、才人を落とそうとペガサスが暴れる。

「わっ！ ちょっとどうしたんだいきなり！ あぶねー！」

「ペガサスは頭がいいからね。人の言葉だってわかるのさ。気をつけたまえよ？」

「それどころじゃねー！！」

才人がペガサスと格闘している頃、下ではなんかわけわからないことになっていた。

「ちよい皆下見てみる。なんかルイズとロリコンが盗賊に襲われてるぞ?」

「あ、本当だ。数十人くらいか?」

「助ける?」

「いやー、ロリコンが居るから大丈夫かな……と思ったけどロリコン弱いな」

多分俺達がいるから本気は出さないんだろう。原作だとあいつ黒幕だしな。盗賊雇ったのもアイツだし。

「うーん。ミラ頼む」

「はいはい」

本当なら俺がやってもいいのだが、実力隠してるからな。

ミラはわざとゆっくり詠唱し、氷の矢を盗賊の数と同等作りだす。ナノマシンで数と位地は計算済み。

「そーれイケ《ウィンディ・アイシクル》」

その氷の矢が盗賊めがけて見えない程の速度で飛翔する。

下からは盗賊達の断末魔が聞こえ、やがて全員がことぎれる。

「うーん。一人だけ狙った所から数センチずれたかなー……」

「……ミラ修行しなおしだ」

「うぐ……」

俺達はほがらかな会話を続けるが。

ロリコンはこちらを驚愕の目で見つめ、ルイズは吐いている。  
ギーシュと才人は顔を蒼白にしている。

多分、かなり離れてなかったら吐いていただろう。

「君は本当にトライアングルかい……？」

「え？ そうだよ？ 風風水の魔法だし？ 精神力が高いからたくさん出せるけどね」

そう言ってニコリとミラはほほ笑む。

「なんで……なんでそんな簡単に人を殺せるんだ……」

む？ 才人が何やら呻くようにつぶやいていた。

「へ？ 何言ってるの？ じゃあ、使い魔くんはルイズとロリコン子爵の方に死んでほしかったってこと？ 言ってくればそれでもよかったけど？」

本当にわけがわからないって感じでミラは首を傾げる。

「違う！ そんなことじゃない……誰も殺さないでいらなかったのか？」

「うーん。出来たよ？ 眠らせればいいだけだし？ だけど、そもそも貴方は」

ミラの目が細められる。

「そんな我儘言ってられる程余裕があるのかな？」

才人の考えは平和的ではある。死にたいならその考えでもいいが、死にたくないならその考えは捨てないとダメだろう。

「例えば、貴方があの盗賊達の目の前に一人で投げだされて、同じことが言っていてられるの？ そんなキレイごとしか言えない貴方はどうせすぐに死ぬ。だったら此処で殺してもいいよね？」

ミラは杖を一振りし、逆剣山のように才人の周りに氷の矢を這わせる。

「ねえ、この状況で貴方は反撃もしないで死ぬの？ 殺したくないからって殺されるの？ わたしはイヤ。まだご主人様と子供も作ってもいないし、エッチなこともししていない。キスすらしてもらってないんだから（薬は飲ませてもらったけど）。貴方は弱い。わたしが合図するだけで一瞬で死ぬ程に。ギーシュに勝った？ それはギーシュのレベルが貴方より低いだけ。弱者に権利何てないの。弱者は強者に殺す気で挑んで、わずかな勝ちを拾う。手加減して傷を与えても、次の瞬間に何してくるかわからないでしょ？ こっちが殺されるかもしれない」

ミラは無表情で淡々と才人に聞かせる。周りの氷の矢を解くことはせず。逆に氷は増えてゆき、今では才人を覆い尽くす程だ。ペガサスは退避させて、風で浮かせてある。

「ま、待ってくれミス・リバルスティン。才人はまだこの世界に来たばかりで……」

ミラはギーシュをちらりと見、ギーシュにも同じように氷の矢を這わせる。



「なっ!?!」

「使い魔くんがわたしを殺さなければ友達が死ぬ。その状況でも貴方はそうやって何もせず時間解決してくれる、誰かが助けてくれるってきれいごとを言うつもり? 元の世界ではどうだか知らないけど、この世界ではそんな甘いことは言っていられない。殺されるか殺すか。二者一択。敵は殺す。味方は守る。わたしはそうやって教えられてきた。もちろん、ご主人様に敵対したら味方だろうと殺すけど」

ミラの言葉には本気が伺えた。と言うか本気なのだ。俺が命令すれば友達だって平気で殺す。そう育てたのは俺自信なのだから。うちの兵士は全てこっやって育ててある。それが最強と言われる所以でもあるのだから。

「俺は……」

「まあ、才人がそう言うならそれでもいいんじゃないか? 才人が死のうが何しようがそれはお前の責任だろ? いずれ、かならず殺さなければいけないことがある。殺さなければ守れないし殺される。その時どんな決断しようとか俺は構わないよ。なぜなら、俺はお前じゃないから。被害がないから。まあ、もし俺だったら殺すけどな」

才人には酷かもしれないが、どうでもいい。此処でとまるようならそれまでだ。死ねばいい。

「まあ、ミラを責めないでくれ。俺もミラもテファもそうせざるおえない環境で育ったからな。弱者が蹂躪される状況でな。ミラ、解除してくれ」

「はい」

氷の矢がばらばらと全て砕け散る。

俺もミラもテファも皆そうだ。なにかしらで蹂躪される。

ミラは金が無くて奴隷とされた。

俺は弱かったから親父に殺された。

テファは為政の敗者として家族が殺され、国を追われた。

俺達は権力も力も金も必要だった。その為には人間を捨てるしかなかった。地球でのほほんと暮らしていたこいつにはわからないことだろうさ。

「才人、ギーシュ。覚悟が出来たらついてこい。なければ学院に戻れ。あそこなら平和に暮らせるぞ。全てを周りに任せて自分だけは平和にな。これから行くところは戦争中のアルビオン。殺すか殺されるかの戦場だ。覚悟が無い奴が来ても死ぬだけだ。来ないなら俺は先に行く。あと、そのタバサも来い、キュルケは才人が心配なんだろうから、ペガサスの後ろにでも乗せてもらえ、ペガサスなら二人でも余裕だ」

俺は更に上空のタバサを見つめる。風で隠れているようだが。

「気づいてた」

「つたりめーだ。俺を誰だと思ってる？」

タバサはこくりとうなずき、イルククウ、改めシルフィードがキュルケを魔法で才人の後ろに乗せる。

「ちょ、ちよつとタバサ！」

「行く」

タバサは俺の隣に並ぶ。

「キュルケ。才人の覚悟がない場合は一緒に学院に戻れ。殺したくないのならな」

俺とミラ、テファ、タバサはそのまま背を向け先に街に向かう。ルイズはいまだに吐いてるし。

これで、誰も来なかったら笑えるな。

それならそれでいいけど。交渉にこいつらは必要が無いし。

26 ルイズ終了のお知らせ。(前書き)

お兄ちゃん違うお話書きたくなっちゃったよ。  
ぶっちゃけ飽きちゃった、テヘッ

頑張って簡潔まで行けるかな……。

## 26 ルイズ終了のお知らせ。

ラ・ロシエール入口

先に来た俺らだが……。どうなるかなー。来なそうだ。

「あれ？ こちらに向かっていますね」

テファがナノマシンを介して教えてくれる。

「ふーん。来ないと思ったがくるんだ。まあ、敵を殺せるまで振りきったとは言えないかもだけど」

言葉だけならどうとでもなる。俺の場合、世界宝玉で親父が創ったり創り治したりしてるの見たから、死の葛藤なんてなかったしな。創れる存在って程度にしか。

「そういえば、タバサは殺し最初から慣れてたよな？」

俺はタバサの方に視線を向ける。

「母様の為」

そついや、母親を治療できるのがガリアだけだったから、くぐつとして働いてたんだっけ。

「タバサ。忠告しておくが、下手したらルイズが敵に回る。殺そうとしてきたら殺せよ？」

才人とのつながりが薄い今なら、ロリコンに依存するだろう。そして、敵に回る。死なれるのは困るが……どうすっかな。まだアイツの役目はあるし。

「あ、ご主人様きましたよー」

ミラが指さした方向には、グリフォンとペガサスが二匹こちらにやってきている。

数分後

俺達の目の前まで来て、停止した。

「や。遅かったな。来ないかと思ったよ」

適当な挨拶を試みる。

ルイズはこちらを睨みつけるように見ているが、何も言わない。才人はまだ葛藤中か。

ギーシュは見込みがあるな。キュルケも大丈夫だ。

ロリコンは値踏みしてるって感じが。

「あ、ああ。遅くなってすまない。出来るだけ急いだつもりなんだがね」

ギーシュは少し距離を置いた話し方で、話しかけてくる。

「んじゃ、宿行くんだろ？ もう夜になっちまったから船は出ないしな。宿の部屋は取ってある。一応5部屋取ってあるが？」

多分。俺達三人。才人とギーシュ。タバサとキュルケ。ルイズとワルドとなるだろうから余裕だろう。

「ふむ。ではボクはルイズと同室にさせてもらおうよ？」

「え、ええ。そうね」

あれー？ ルイズ此処で反論するのが原作だろ？

とりあえずロリコンに鍵を渡してやる。

「ありがとう。では、我々は失礼するよ」

二人は宿に向かっていった。

「じゃ、ダーリンとわたしが相室ね」

「……………」

「おや？」

「ダーリン、わたしとじゃ……………イヤ？」

「いや、大丈夫だ」

「そ、じゃあ行くわよ」

俺はキュルケに鍵を渡してやる。

なんか原作からかけ離れて行ったぞ。

「タバサは……………一人部屋がいいよな」

こくりと頷く。

鍵を渡してやる。一言お礼を言って離れて行った。

「では、僕はティファニア嬢で」

「はい、鍵。お前は一人だ」

「わかってたさ……………フツ」

ギーシュは鍵を渡されて、とぼとぼと離れてゆく。

「予定とはだいぶ狂いがあるな……………」

レールには戻せないかもしれないが、計画に近い方向に操ることは出来るか……………。

「ご主人様ー、行きましょう！」

「なぜミラグループ系列以外の宿なのでしょう？」

「ああ。バレる危険性があるからな」



それはそれでめんどいことになる。  
バレルのは王になった時点で十分だ。

宿

「あー……ちやこしいことになったなマジで  
「ですねー……」

俺は計画を少し変更することになってしまった。

「なんでよりによって……」

おかしいだろ実際……。

「よりによって今夜身体の関係持つんだよアイツら……」

ナノマシンでのぞいていたのだが、才人とキュルケ。ロリコンとルイズが普通にやっていた。

ルイズなんて結婚の約束しちゃったし。アルビオンで原作通りに結婚式をあげるらしい。しかも、ウェールズ殺すことも納得しちまってるし。

才人は才人でキュルケの剣と楯になるとかほざいてる。

「キヤー！ ご主人様ご主人さまー」

ミラが俺にすがりついてくる。

「何だ？ やらんぞ？」

「つくー！ あんなの見せられてわたしはどうすれば……」

「寝ろ」

「寝ます……おやすみなさい……」

ミラは不貞寝。テファは顔を真っ赤にしながら未だに覗いていた。予定通りにはいかなーな……。

ギーシュは壁に耳付けて嬌声聞いているし。

タバサはサイレントかけて本読んでるな。

そういえば、そろそろジョゼット延命処置かな。

タバサは政治利用しか価値ないか。

数時間後

俺が計画を一通り完成させたあたりで、大きな爆発音が聞こえた。

「な、なんですか！ 地雷原突入ですか！ めくるめく夜のベットに地雷原！」

「ひっ！ なんてことするんですかリンちゃん！」

ミラとテファが飛び起きた。

どんな夢みてんだコイツら……。

「あー、傭兵が襲ってきた」

その時、扉がバンと開いた。

鍵がこちらにブツ飛んでくるし……。

「敵襲だ！」

ロリコンが簡潔に説明してくれる。説明にすらなっていないが十分だ。

どうやらその後ろには全員そろっているようだ。

「ルイズと僕は姫様の任務の為に先に行く！ 使い魔くんはどうするかね！？」

「……俺は残る」

「アンタわたしの使い魔でしょ！？ なんてついでこないのよ！」

「俺はキュルケを守る。お前はワルドがいるだろ？ キュルケにはいないからな」

「くっ！ わかったわよ！ 勝手にしなさいっ！」

ワールドとルイズは出て行った。てか、俺達囃かよ？  
ついでに、才人とキュルケべたべたするな。  
ギーシューうなだれるな。

にしても……原作ブツ壊れまくった。

「んー、じゃあ才人とキュルケは相手出来る分だけしとけ。ギーシ  
ユもな。タバサと俺達は適当に潰してくから」

「わかった！ キュルケは絶対に守る！」

「ありがとう。ダーリン」

何て甘い空間だよ。

俺達が外に出ると、数十人の傭兵が押し寄せていた。鎧を纏って  
いることから金がある〃でだれってことだ。

「んー、少ない。雑魚だ。ブレードで確実に首刎ねるか、身体真っ  
二つにするか？」

「「わかりました」」

「わかった」

俺達四人はブレードを纏わせ、突貫する。

魔法が放たれる前に確実に殺してゆく。

詠唱がいかなせん遅すぎるのだ、余裕すぎる。

さくさくと倒していると、仮面を被った変態が現れた。  
うん。ワールドの偏在だな。髪でわかるだろ？

ライトニングクラウドとか言う、実用性微妙な魔法　雷を纏つてこちらに突っ込んでくる。

それをブレードで弾き、胴体をさよならさせる。すぐにその姿が消えたことから、偏在であつてるな。

偏在ワルドを倒し終わるころには、他の傭兵も全員が死んでいた。

「あら……わたし達来た意味ないわね……」

後ろから三人が現れるが……着替えしてから来るとかどんだけ余裕なんだコイツら。

「こりゃまたおつたまげたな！」

才人の手の剣が喋り出した。

「ほう、喋る剣か？」

「おうよ！　俺はデルフリンガー様だ！」

「俺はウィデイスだ」

つかの部分がカタカタと動いて喋るとは。面白いな。

才人は吐いてるし……。

「才人。守ると決めたならば、目をそむけるなよ？　次はこっちがこうなつてもおかしくないのだからな。敵に容赦はするな。じゃな  
いと」

「あ、危ない！」

剣を持ち、ボロボロになりながら後ろから突っ込んでくる傭兵を、振り向かずに切り裂く。

「こうなるんだ。死にかけたらうと、なんたらうと敵は敵だ。こちらに牙をむいてくるのは必然。完全に真つ二つにするか、心臓を貫け。首を刎ねてもいい」

まあ、今回ののはわざと一人急所を外しておいたんだが。

オ人はじつとこちらを見つめ、涎を拭き、涙を流しながら立ち上がった。

「んじゃー、アルビオンに向かうか。オ人とキュルケとギーシユはペガサスで。俺達はタバサのシルフィードで行くから」

全員がコクリとうなずくのを確認し、一度宿に戻る。

死体は衛兵が処理してくれるだろう。通りが血でびしょびしょだが。

「どうやら俺達は、ルイズ達より先に来てしまったようだ。」

「何者だ！」

俺達が岬にある城に近づくと、兵士たちに周りを取り囲まれた。

「王にようがある！ 通せ！」

「今は戦乱中だ！ 誰だろうと通すなと命令を受けている！」

そりゃそうか。

更に兵士が俺達を囲んで槍を向ける。才人達はビクビクだ。ギーシュなんて座り込んでるし。

「よせ！」

そんな時、兵の奥から声が掛けられた。

「お？ ガーウエンか？」

「久方ぶりだなウイデイス。一年ぶりか？」  
「だな」

俺とガーウエン……と言うか、アルビオン王党派とは仲がいい。かなりパーティーなどに呼ばれたからな。

「騎士隊長殿。お知り合いですか！？」

「陛下のご友人だ。彼らを陛下にお通ししろ」

「しかし」

「よい。私が許そう。すまなかったなウイデイス。さあ、こっちだ」

ガーウエンの案内で、俺達は中に進む。

城の中はガランとしていた。

「ガーウエン。何故兵が少ない」

「ふむ。皆貴族派についてしまったな。今では300程度しかない」

情報与えてもこれかよ。都合がいいっちゃいいが。

「すまないな……。警告されていたのにこの様だ……」

ガーウエンは悔しそうに唇をかむ。

「気にするな。まだ、チャンスはある」

「ほう。ウイデイスの考えならば期待出来るな」

俺に有利な考えだな。

「な、なあウイデイス」

後ろからギーシュが声をかけてくるが、めんどいなー。

「ウイデイスはアルビオンの皇帝と知り合いなのかな？」

「知り合いつつうか……。まあそうだな。うちの家系がアルビオンと仲が良くてな、パーティーに何度も誘われていたんだ。そこで知り合った」



「王族と知り合いなんてすごいのだね……」

王族だって人間だ。知り合いになるなんて簡単だが。

「ガーウエン。今日はパーティーでもあるのか？」

何やら使用人たちが料理などを持って走り回っている。

「そうだな。是非君たちも出席していただきたい。最後の客人として……な」

「最後の晚餐つてか？」

「そう……だな。こちらは300。相手は5万。どうやって勝ちを拾えるか」

だろうな。

「おかしいだろ！」

後ろの才人が声をあげた。

「ふむ。何がおかしいのかね？ 少年」

「明日でお終いだつてのになんで笑っていられるんだよ!？」

才人の言葉に、ガーウエンは少しほほ笑む。

「君は優しい少年だな。終わりだからこそ、ああも明るく振舞っているのだよ。我等は、最後までアルビオンでいたい。絶対の不利な状況ですら、此処にいるものはアルビオンと共に滅ぶことを決めている」

才人は黙ってしまった。

なんとも気高い精神だろう。だが　あまりにもつまらない。

「さ、ついたぞ？　各自楽しんでくれて構わない」

パーティーは、城のホールで行われていた。

官位の玉座が置かれ、そこにジェームズ一世が座っている。

才人達とはパーティー会場で別れ、俺だけがガーウエンに着いて、王のもとにゆく。

「お久しぶりです、ジェームズ一世皇帝陛下」

俺は陛下の前に跪く。

「おお、久方ぶりじゃのうヴィ・リヤステイ侯爵。いつぞやは世話になったのう。豪華にもてなすことも出来んが、楽しんでいってくれ」

かなりの年と精神的疲労で、よわよわしい。

「恐れ多くも申し上げます。皇帝陛下、並びに騎士隊長殿に内密なお話があります。お時間をいただけないでしょうか？」

「内密とな？」

「はい。決して損はさせません」

「ふむ……。他ならぬお主の頼みだ。よかろう。裏の部屋に移動しよう」

「ありがとうございます」

近くに立つガーウエンに肩を借り、ジェームズ一世は歩きだす。

にしても……此処まで弱るか。年つてのはめんどいな。  
その後引き続き、俺も歩き出す。

確か、ウェールズは今ルイズと一緒に、此処に向かっているんだ  
よな。

## 部屋

「して、内密な話とは何なのじゃ」

ジェームズの質問に、PDAを懐から取り出す。

「ふむ。それは？」

「以前、カメラと呼ばれるものを献上したと思えますが」

「あれはいいものじゃった。城下でも人気じゃ」

「あれは、とまったものを取り込むマジックアイテムでしたが、こ  
れは動いているものを取り込むマジックアイテムで御座います」

まあ、これはDVの映像を入れただけなのだが……説明はめんど  
い。

「ほう。しかし、今の我々には不要だぞ？」

「いえ。この中に、ある風景を取り込んでいます」

俺はテーブルを移動させ、PDAをその上に置く。  
簡易転写機だ。白い壁に向け、再生ボタンを押す。  
壁に映像が映り、ミラグループのマークが表示される。

「すごいものじゃな……」

「見てもらいたいのはこの映像で御座います」

映像には雲と海が写りこんでいる。雲の形から、かなり離れていることが分かるだろう。

わかりやすいように、夕方に撮っている。

「ふむ。キレイな夕焼けじゃのう。これを見せるためかのか？」

「いやいや。そんなわけないだろ……」。

その時、転写された映像の中で大きな爆発が起きる。

大きな閃光のあと、真っ白い雲が出来上がる。

ジェームズとガーウェンは驚きに目を見開く。

「こ、これはなんじゃ!？」

「これはミラグループで開発途中の水素爆弾で御座います。核融合反応　説明はいりませんね。大きな爆発を起こし、敵を駆逐する爆弾でございます。範囲の程も見ての通りかと」

まあ、これはただの実験だ。実際使うことはしない。自分の領土になるのに、汚染させたらもつたない。ただ、説得力を出すために使っただけ。

映像は切り替わり、航空隊の演習に移っている。

「これもすごい竜じゃの……風竜より数十倍速いのう」

ラプターを竜と誤っているならそれはそれでいい。

「ええ。一匹で数百から数千の竜を落とせるでしょう」

「ウイデイス！ これを我々に売っていただけなのか！？」

ガーウエンが興奮した様子で捲し立てる。

襟掴むなおい！

「残念ですが……明日までに運ぶことは不可能。そして、これらは量も少なく、王宮ですら払えない程高額です」

「……残念だ」

一気に二人が肩を落とす。

実際これらは大量に量産されてある。原子力発電所を作った時に、リーンが戯れで作ったのが水爆だ。ラプターは俺の命令で、魔法の訓練として大量生産してある。

「そこで、提案が御座います」

「提案とな？」

この交渉、少し難しいかもな……。

「ええ。今回の戦争で亡命してほしいのです」

「亡命とな……それは無理じゃ……アルビオン王家は生涯アルビオンと共に」

「立派でございます。しかし、ただ亡命するだけではありません。」

期を見てほしいのです」

「期と？」

「はい。今の戦力差で勝てる確率はどれ程でしょうか？」

「0だな……」

ガーウエンは悲しそうにつぶやく。

「そうです。ただ、今、先ほどの兵器を量産中にして、少しすれば大量にあれらの物が使用できます」

「しかし、お主は先ほど高価だと……」

「はい。とても手が出せるような値段ではありません。しかし、私としては恩あるアルビオンの為に、タダで渡したいのです。ですが、為政とは難しく、私が決めても兵士や民が納得しないのです。最悪、私に反発して内部分裂。そこで提案なのですが」

俺は真剣な顔でつぶやく。

「我々にこの国を最終的に任せていただけないでしょうか？」

「貴様！ それを狙いかっ！」

「違います。こうすれば、タダでも納得させることが出来る。我が兵も出すことが出来るのです。考えてみてください。レコンキスタと言われる貴族最上位主義が、この風の国アルビオンを治めたとして、どうなると思いますか？ 民は虐げられ、貴族ばかりが優雅に暮らす国の誕生です。それと、我が領。我が領を訪れたことはありますか？ 民は誰もが幸せそうではございませんでしたか？ 貴族と平民は平等ではありませんでしたか？ どちらが国を治めたほうがマシでしょうか？」

「それは……」

二人は唸って俯いてしまう。

あつとひとつ息

「わたしは、この国をおさめたら、我々の領のような幸せな国にしたいと思います。今はまだ小さな領だけですが、何れ世界全て平等な幸せな世界にしたいと思うのです。それに、我々はアルビオンの民の信用度が高いでしょう。配給や、店舗をたくさん出していることが大きいのですが」

「それならば、どうせこの国はもう終わりだ。その後にレコンキスタを妥当して乗っ取ればよからう」

「確かにそれも出来ます。しかし、いくらわたし達でも、新天地でいきなり国を治めることなど出来るはずありません。ですから、口添えと手助けがほしいのです」

「手助けとな？」

「ええ。前皇帝陛下が支持してくださるならば、すんなり民も受け入れてくれるでしょう。無駄な内乱を招かずに、より早く、幸せを手にすることが出来ます。民の混乱、内乱は見ていてつらいのです」

俺はそこで、ホロリと涙をこぼす。

サンキュー。水の精霊！

「そなたは……そこまで我が国のことを考えてくれたのか……違う国のことだと言うのに……」

「ええ。違うと言いますが、同じ人間なのですよ。これまで長き戦乱の時代が続きました。しかし、そろそろ私は皆幸せになれる時代が来てもいいと思うのです。そのために、私は今の領を作り上げました」

「うむ……それでもし了承するなら、我々になにをやってほしいのじゃ？」

「はい。私が居ない間。この国の為政を」

「それだと、お主が国を治める意味がないのではないか？」

「いえ、表向き、私を王に置くだけでいいのです。ミラグループのバックアップがあれば飛躍的に豊かになるでしょう。ただ、この国の貴族は一度全て排除した方がいいでしょう」

「それはわかっております。皆反乱軍に行ってしまったからの。残っているのは王族だけじゃ」

「ですね。なので、私の領土を動かしている優秀な者たちを、この国の政治家としてお連れしましょう。皆、非常に優秀でございます。新しいシステムにも慣れておりますので、補助も完ぺきでしょう」

皆うちの教育を受けた俺の手の者だ。特に忠誠心が高い奴を此処に配置する。現王族は王族支持派を取り込む駒でしかない。政治は全て俺直属の部下に任せる。いつでも俺の命令が通るようになる。それに、まったく新しい政治体系、貴族完全廃止。これに現王族はついてこれない。俺の部下に意見を出させ、信用させて刷り込む。これで政治用のくぐつが完成だ。しかも、民のことを一番に考えている王族は扱いやすい。最悪、俺が支持を稼いだら切り捨てればいいだけ。俺には不利なことなど何も無い。

今までコイツらの信用を稼いでおいてよかったわ。

「ふむ。すまぬのう。何から何まで。国民のことを考えているお主なら大丈夫じゃろう。それに、ワシらもいるしの。して……これから何をすればいいのじゃ？」

「はい。今回は間に合わないの、亡命です。私達の領に一度亡命していただきたい。あそこならば、下手に手出しも出来ませんでしょう。一応万が一の為に、姿は隠していただきたい。いくら安全と言われても、完全に安全を確保することは出来ません故」

「そうなの……、騎士隊長はどうだ？」

「はい。私もそれでいいかと。此処で無駄死にするより、今後国を取り返すことが重要です。情けないかもしれませんが、民のことを思えばだと思えます。それに」



ガーウエンは俺を見つめ、ほほ笑む。

「ウイデイス殿は信用に足るお方です」

「それはワシも同意じゃ。今まで何度も助けてもらったしの。それに、彼がレコンキスタだった場合、レコンキスタの情報を早くから我らに教えるわけもなかるう」

レコンキスタを潰さない情報以外は教えてたからな。人徳人徳。

「しかしのう」

まだあんのかよ！

「船は一隻以外出してしまった。此処からどうやって逃げるのじゃ？ 使用人用しかないのじゃが」

「ええ。それなら大丈夫です。アルビオンには大量の支店があります。そこに常駐させている竜達。更に近場の竜を呼び出せば、300人程度運べます」

ミラマーク外しておかないとな……。

「ふむ。わかった。では、皆に報告に戻るかの」

「はい。あと、私がミラグループ代表つてことは言わないで頂けますか？」

「ふむ。何故じゃ？」

「ええ。私は今学校に通っているのですが、知られると色々面倒なので。その生徒も数人きてますしね」

ジエームズは少し考えているが、政治をしてきたジエームズなら

わかるだろう。バレたときの面倒さが。

「よかろう。では戻るぞ。肩を貸してもらってよいか？ ガーウェン」

「ハッ」

俺は二人が出て行く背中を見つめ、一人ニヤリと笑う。

計画の一段階目、終了。

## 会場

俺の思惑通り、王は兵士たちに説明して、納得してもらっていた。最初は皆反対したのだが、王の国民を大切にすゝる気持ちに動かされたみたいなの？

ぶっちゃけ説得出来たならどうでもいい。

後から来たワルドとルイズ、ウェールズ達はポカンとしていた。

ロリコンワルドが、わけわからない言葉で説得しようとしていたが、一蹴されていたな。

ルイズもロリコンワルドに付いたから説得していたが。王からは誰君って感じで終わった。

だが、無理やり結婚式はやるようで、俺達とウェールズは出席することになった。

だりーな。てか、ルイズどうしよう？ 裏切ったら殺すしかない

のか？ 王宮に連れて行ってもいいことないし。  
はあ……。

## 結婚式

教会でやることになったんだよね。まあさ、それはいいんだよ。  
その後だが、予想通りと言うか何て言うか。

「何てことするのルイズ！」

「黙りなさいキュルケ！ これが幸せな世界にするための！ 私は、私を誰もバカにしない世界にするわ！ その力が私にはあるってワルド様は言ってくれたもの！ ワルド様がこうすればいいって言ったのだからコレが正しいわ！」

うん。見事な依存っぷり。

ワルドと婚約のキスをしたところで、ルイズがウエールズを爆発させ、ワルドが突き刺した。  
ウエールズ血だまりで終了。

「アナタそこまで……」

「うるさいっ！」

次の瞬間、キュルケはルイズの爆発で壁に叩きつけられた。

「ルイズ…… テメエ……」

あーもうわけわからない。才人がルイズにマジギレってか。

「才人、キュルケは俺に任せろ。秘薬も持ってきてるからな。そっちは任せた」

「すまないウイデイス！」

さーて。どうなるよ？

ロリコンは偏在で四人に分身する。ロリコン\*4だ。

俺はキュルケに薬を飲ませる。気絶はしていないので、普通に飲んでくれて助かった。

褐色は嫌いなんですよ。エリクサーだけど、バレなければいいだろう。

「許さねえ……お前ら絶対許さねえからなっ！」

「何やってんのよアンタ！？ アンタは私の使い魔でしょっ！？」

「違エ！ テメエはただの裏切り者だ。トリスティンを売った売国野郎だ！」

「なっ！？」

いやいや、実際そうだろうルイズ。何驚いてんだあいつは。

才人のルーンが光り輝き、その光を受けてデルフリンガーも発光する。

「いいぞ！ いいぞ相棒！ そう！ その調子だ！ 思い出したぜ！ 俺の知ってるガンダールヴもそうやって力を貯めていた！ いか相棒！ ガンダールヴの強さは心の震えで決まる！ 怒り、悲しみ、愛、喜び！ なんだっていい！ とにかく心を震わせな！ 俺のガンダールヴ！」

デルフが嬉々として柄を震わせる。  
てか、震えるのはいいが、怒りの矛先が自分の主だしな。守るべき者が敵で一番震わせるってなんて矛盾。

才人はすさまじい速度でロリコンに接近し、一体を切り裂く。偏在が一人消え去った。

「き、貴様……！」

のこり三体。

三体のロリコンの杖から、才人の身体に三方向から光が伸びる。しかし、才人はデルフリンガーを風車のように回して弾く。

次の瞬間、一瞬にして三体のロリコンの、杖を持った方の腕を切り裂いた。

二体の偏在は消え、本体の左腕も切られている。

「イヤーーーー！ ワルド様！ ワルド様！ なんて、何でアイツに当たらないのよ！」

ルイズはワルドに駆け寄り、杖で才人を狙って爆発を起こす。命中力皆無なうえに、今の才人では当たらない。

「くそっ………！ この『閃光のワルド』がよもや遅れを取るとはな………」

ワルドが残った右手で杖を取り、宙に浮かぶ。ルイズはその腰に抱きつくが。

そんな隙を誰が見逃すだろうか？

才人は跳躍し、ワルドの首を刎ねた。

ロリコンとルイズは地面に落下し、跳躍から降りた才人のデルFRINGERが、ロリコンの心臓に突き刺さる。

斬首と心臓の破壊。完全な止めだ。

守る者の為なら鬼にでもなる。なかなかいい壊れ方をしてきたな……。

悲鳴を上げて壊れながら爆発を繰り返すルイズに、ギーシュがスリープ・クラウドをかけて眠らせる。

うん。お前一体今まで何してたんよ？ てか、前の椅子の背もたれに隠れながら杖ふるってるからわかるけどさ。

タバサはタバサで本読んでるし！

俺はアンドバリの指輪で不死操出来ないように、魔法でロリコンを完全に焼却する。

「ダーリン……ありがとう」

キュルケが気がついたことに才人が振り返り、笑顔を浮かべる。

「いや。守れてよかったよ」

二人が抱き合うが……何で甘い空間になるんだよ。

血だまりの中でウェールズ死んでるし、ワルド燃えてるし。首だけはあるけどさ。

「それにしてもどうするのかね？ ウェールズ皇太子も……」

「ああ、それなら大丈夫だギーシュ。皇帝から王家に伝わる秘薬を貰ってきたから」

俺は昔渡したフェニックスの尾とエリクサーを取り出す。  
それをウェールズに投げると、光り輝き、意識を取り戻す。  
さらに、エリクサーを飲んでもらって完全回復！

「すごいものだね……王家の秘薬」

ギーシュがごくりと唾を飲み込む。

「すまないウイデイス。油断していたよ。それに、本当に蘇生の秘薬だったんだね、アレは」

「まあ、気にするなウェールズ。どうせ復活したんだし」

そこで俺は振り返る。

「ってわけで皆。ウェールズが生きていることは言うなよ？ 亡命した後に狙われたらたまらないからな。国には死亡と言っておけ」

まあ、アンリエッタが恋焦がれて期が熟すのを待つだけだが。  
全員がうなずく。

「さーて。このピンク髪の裏切り者どうするか？ 皇太子の暗殺。売国奴。まあ、よくてコイツは死刑で、ヴァリエール家の爵位の剥奪か。悪くてヴァリエール家全員公開処刑。まあ、考えてる時間もないけどな」

「それは何故かね？」  
「聞こえるだろう？ もともと、これはコイツらが考えた時間稼ぎだ。だからホラ」

耳を澄ますと、兵士たちがこちらに向かってくる足音がする。レコンキスタだろう。他は竜で先に逃げ出してもらったからな。ロリ

コンとルイズがどうしてもってことで俺達が残ってるだけだ。

「まずい！ ヴェルダンティ！ 穴を掘ってくれ！」

ギーシュの巨大なモグラが地面にもすごい勢いで穴を掘り進める。

これで逃げ出せる……か。

「皆、この穴から付いてきてくれ」

コクリとうなずき、中にどんどん入ってゆく。

ルイズはリーンに送ってもらったロープでぐるぐる巻きにし、ゴロゴロと引きずってゆく。

ふむー……計画に大まかな変更点はないが、ルイズ殺されてほしくないなあ。

そうなると才人のガンダールヴも消えちゃうし、虚無候補が虚無にランクアップだし。

自分のせいだけど、ままならねーな。



26 ルイズ終了のお知らせ。(後書き)

わーお。超原作ブレイク。

書室

あの後、一度宮廷に向かった。  
途中でルイズが何度か起きたが、完全に精神崩壊。  
暴れるので速寝させた。

アンリエッタ王女はウェールズの死とルイズの裏切りに号泣した。  
しかも、ルイズがウェールズの殺害の一端を握っているしな。  
何でも、ルイズは子供のころからの友人らしい。

即刻処刑されそうだったので、嘘つきまくって説得。で、一生幽閉。

原作のメインヒロイン終了しました。  
まあ、生きてるならそれでいいだろう。才人のやる気はキュルケ  
で出来ているしな。

あと、俺の嘘の副産物で、ヴァリエール家は何故か平気だった。  
だが、ルイズとは縁を切ることになった。  
色々周りの貴族から責められているようだが、ワールドに騙された

ってこともあり大丈夫っぽい。

実際は自分から裏切ったが、ルイズが完全に精神病にかかっているので詳しいことは何も聞けてない。つまり、俺達の証言が真実になるのだ。

アンリエッタも精神不安定になっているので、簡単に落とせそうだが、めんどくさいからイライナイ。どうせウェールズとあと後くっつければ同じ効果があるのだから。

ゲルマニア皇太子との結婚も無事決まったようだな。

「ご主人様、ヴェストリア広場見てください。家政婦は見た！」

ミラの興味しんしんな顔と言葉を無視し、ナノマシンを介してみる。

「お？ 家政婦は見たってか家政婦が犯罪者だろこの場合」

才人はなぜかシエスタだっけかな。学院の使用人と五右衛門風呂に二人で風呂に入っていた。

「ですね。さっそく浮気ですかあの人は。にしてもあの胸……Eですか」

何だろうコイツ……。結局行きつく先はそこか。

「いやー！」

バンと机を叩き、ミラが立ち上がった。てか机に足掛けるな！

「アンダーが太い！ あれはCかDです！ デブです！ 見たところアンダー67！ CかD65！」

「黙れミラ！ どんだけ詳しいんだよ！」

「周りのナノマシンで測りました！」

「能力の無駄遣いだろが！」

「胸が84くらい！ つまり差が17！ D65げふあー！」

ミラが壁に頭をゴンとぶつけてぶっ倒れた。

「な……なんて強力……使い魔さんは巨乳派ですか。ご主人様が貧乳派ならどちらでもいいですが」

「で、お前はどうなのさ」

「よくぞ聞いてくれました！」

バッと立ち上がって身を乗り出してくる。

「アンダー60のスマートさ！ しかもウエストも50ちよいです  
」！

それはコイツがちっちゃいからだ。

「てかさ、Cって差が15セントだっけ？ てことはお前75しかないじゃん」

「ぐふあっー！」

ミラは机の角に頭をぶつけ、流血しながら倒れた。

いや、まあ。ちっちゃいし痩せてるから大きくは見えるが……。

逆に85とかあったら気持ち悪いぞ。

テファはありそうだが。

「と言うかですね。そんな話はいいのです。何であの二人が一緒にお風呂入っているのですか！」

「お前から話し始めたんだろ。てか、近づくな。血が飛び散る。まあ、才人も浮気したい年頃なんだろ？ いいじゃん別に」

「まあ、人間として見なければいいですね。猿なんて会った瞬間インサートですし。家族とだってします。あ  
「ん？」

ミラの動きがジッととまる。

「使い魔さん興奮してますね。でも、ご主人様の二分の一くらい。なんて可哀そう。あれじゃ子供作れません」

「かわいそうだが……。黄色人種は小さいんだよ。確か、黄色は13 سانتが平均で、白人が17 سانتだっけな」

「でもあれは可哀そうですね。長さも太さも。てか、ご主人様白人ですよ？ どう見ても17 سانتどころではないんですが？」

「気にするな。人それぞれだろ？ 小さい方が……。えーっと。小回りが利く？」

「そんなわかりやすいフォローしてどうするんですか。テファが真っ赤になってますよ」

確かにテファが真っ赤になっているが、どっちにしる話してきたのはミラだ。

「わたし思うんですが……。アレ絶対今夜やりますね。一体いつ仲良くなっただんでしょうか？」

原作と違ってアレはやるな。ルイズって言う邪魔者いないし。すげー仲がいい。

今現在も触りっこみたいのしてるし。

仲良くなったのは……貴族から守ってあげた時か？ それからも、才人は平民と仲良くなってたしな。なんだかんだで、毎日厨房行ってたみたいだし。平民なのにメイジに勝てるって英雄扱いされてたしな。

「んー、まあいいんじゃないか？ あの使用人。俺にはなんの役にも立たないし。本人達がいいなら別に」

めちやくちゃどうでもいい。他人が何しようどうどうでもいいのだ。

「てか、才人は温泉のフリーパスルイズから引き継いだよな？ 混浴じゃないからあそこで五右衛門風呂に入ってるのかアイツ。ギーシュよりやるな。てか、ギーシュモテンのに不憫すぎる」

顔はめちやくちゃいいのにな……。性格も女好きじゃなかったらいいのに。

「ご主人様より性格はいいですよね」

「黙れって。俺の性格が悪いのは、自分でもわかってるからいいんだよ」

俺の言葉にテファとミラが目を見開いて驚いている。

「わ、わかってたんですかっ!?!?」

「めちやくちゃ失礼だなお前ら!」

てか、利用しか考えてない奴の性格が悪いのなんて当たり前だろ。

「そ、そうでした！ そういえばですねー、東方『ロバ・アル・カリエ』から未知の技術をレコン・キスタ 現在は新皇アルビオ

ン帝国が取り入れたとか」

話題のすり替えだな……。

「未知ってーと。単分子カッターとか原子ごと破壊するレーザー砲とか？」

「大砲です」

「は？」

「何でも、今までのハルケギニアの大砲の1/5倍程飛ばせる大砲です」

うーん。今までつてのが屑みたいなものだったからな。それが何って感じた。

こっちは空気中のナノマシンを収束して解放するレーザー砲まで出来てるぞ……。リーンが勝手に作ったんだけど。

ガンダム出来ないのが不思議なくらいだ。

まあ、リーンの『最終兵器彼女』が擬人化ガンダムみたいになってるんだけどな。レーザー砲とか普通に搭載してるし。ナノマシンで百発百中だし。使える奴がリーンしかないけど。

そもそも、リーンが遊びで作ったタチコマみたいなロボットが強力すぎるし。

背中にレールガン装備してるとか警備用ロボじゃねーよあれ。実験みてきたけど、あれ射程何キロだよ。

遠くの星から持ってきた材質のせいでめちゃくちゃ装甲硬いし。量産したせいで兵士入らずだわ。

「うん。雑魚過ぎるだろ。大砲使ってる時点で雑魚だ。高圧縮電磁砲くらい出されたら今すぐにも潰そうって思っけどな」

「それは無理ですねー、あの技術は通常1万年近く先のはずですし。リーンさんが情報持ってなかったら不可能でした」

ホントリーンは万能だ。だが、実際リーンはこんな知識持っていないかった。

ただ、未来のナノマシンが地球に移り、それがハルキゲニアに移った。ナノマシンの記憶領域を俺が開示設定にし、それをリーンが使っているのだ。本来未開の知識があるわけで、楽しそうにリーンは作りまくっていた。

「ま、俺は寝るかな。やることないし」

「書類でサーフィン出来そうですか？」

「今日はサーフボードないから寝る」

俺は現実逃避をし、眠りに就いた。

## ヴェストリア広場

今日は久々に芝生でのんびり。三人で木の陰にねそべっている。木の後ろにはタバサが本を広げている。

そんな時だ、庭の中央にゼロ戦が降り立った。竜騎士隊に運ばれてきたっばいが。



「どうやら才人が持つてきたらしく、才人が色々説明し、コルベール先生だっけかな。それが興味しんしんで調べている。」

「たしか、俺のバイクも調べたそうにしていたが、俺を怖がっているので、調べられなかったのだ。」

「兄さんなんですかアレ？ 扇風機みたいのがついてますが。F2 2ラプター？」

「テファが不思議そうに見ている。」

「ヴィ・リヤステイ領にはラプターしかないのだ。」

「ただ、あれはアフターバーナーを使っているので、プロペラなぞについては居ない。」

「しかもうちのF22はリーンが変な改造をしてラジコンみたいになっっているのだ。」

「全方位映せる端末を作り、屋敷の地下にある巨大CPU『RERA』が瞬間演算して最適な攻撃方法を編み出す。ナノマシンを介した通信なのでタイムラグゼロ。しかも、設定を変えれば自由自在だ。人が乗り込む用もあるのだが、人間の限界があるので基本無人機だ。恐怖や躊躇が無い分ラプター無人機は動きが人間離れしている。」

「改造されすぎて名前しか残っていなかったりするが……。」  
「下部にレールガン装備なんて反動的にも技術的にもあの時代の地球では不可能である。」

「射程数キロ。放出はナノマシンがあれば無限。威力は岩だろうと軽々と貫通。恐るべきリーンだ。」

「あれはゼロ戦だな。地球で1939年だっけかな。開発された飛行機だな。ラプターより70年くらい前の戦闘機だから、かなり古い」

「へー、ラプターとどっちが強いんですか？」

「強さね……。ラプター無人機ならあれ100機持つてきても落

とされない。ああ、リーンが星から持ってきた外壁使えただけど。それなかったら……なくても平気かな。有人の場合乗り手がミスれば一機でも落とされるんじゃないか？ てか、そもそも速度が違う。あれは最高速度540キロ。ラプターは有人時でも2600キロ。フル改造された無人機は4300だっけか。武装だつてあれは機銃二種類4挺だろ？ ラプターは通常時で、機関砲に中距離空対空ミサイル\*6、短距離空対空ミサイル\*2、誘導爆弾二種を10。改造した後のレールガンとか含めると全然違う。とまってる蚊を落とすようなもんだろ？」

「全然わからないですけどすごそうですねー」

俺もリーンから得た知識だから意味わからん。

「てか、才人はあんな年代物で何しようとしてんだろ？」

虚無もルイズごとなくなつたし。俺の計画時にあんなの乗ってたら問答無用で撃ち落とすぞ俺？

「才人、そんなもの使つて何すんだ？」

俺の声に気付き、こっちを向く。

「んー、シエスタの村に置いてあったから持って帰ってきた。この世界にはガソリンがないからコルベール先生に作ってもらおうかなと」

チラリとコルベールを見ると、ビクつとする。

別にとって食つわけじゃないのにな。

「才人……。お前が乗ったバイクは一体何で動いてるんだ？」

「あ！ そう言えばアレもガソリンだな。しかも排気ガスの色と臭いの的にハイオクだったな！」

「そこまでわかると逆に引くわー。」

「んー、とりあえず最初だけ俺が作ってやるわ。成分知ってるし。

飛んでる最中になくなったら、ゲルマニアに行けば給油所あるから」

「おっ！ マジで！？ それは助かる！」

俺は杖を振り、一つの樽を練成する。その中に水を魔法で入れ、石油を練成し、錬金で精製してガソリンを作る。

ホント等価交換無視って素晴らしい。

「んー、これでいいな。もっとほしいならこれをコルベール先生にでも調べて作ってもらえ」

才人は樽の中のガソリンのにおいをかぎ、笑顔を浮かべる。

だが、俺はガソリンの臭いを嗅いだ時の、一瞬の幸せそうな顔を見逃してはいないぞ？

「どれだけそっち系のオタクだテメー。」

「魔法ってマジで便利だよな」

俺もバイクのガソリン途中で無くなったら作るしな。

原子の結合知ってれば楽に作れるし。

レビテーションで樽をゼロ戦の傍まで運んでやる。大きな樽を作りすぎたので運べるはずもない。

見る奴が見れば、ドットクラスじゃ確実に不可能な重量を浮かせているのだが、コルベールは知っているから関係ない。

「サンキュー、ウイデイス！」

才人は急いでゼロ戦の方に走って行く。

「ご主人様今日は優しいですねー」

「そうだなー、久々にのんびり出来て気分がいいからな。あー、それなのにさー……」

「ですねー。平穩はすぐに終わります」

なんで……レコンキスタとトリステインの戦艦が戦ってるのさ。

ナノマシンから世界の情報が送られてくる。

俺達は常時世界の全てを見ているようなものだ。

前は脳の限界で一定までしか無理だったが、演算をナノマシンにも振り分けているので出来るのだ。人間では確実にな

い。マルチタスクの並列処理すら出来るのだから、人間では確実にな

「あー、あれが未知の大砲ね。確かに一方的にトリステインやられてるな」

「ですねー、あーっ落ちました。確か同盟結んでるんじゃないかったですか？」

「それは前アルビオンだろ？ 今は違うな。あーめんどい。今は俺の計画じゃないんだが……。だけど、此処で俺らがやらないと、トリステイン滅亡だな」

ルイズの虚無もないしなー。

「んー。多分城から学生にも明日辺り連絡来るだろ？ そのとき才人のゼロ戦の後ろに乗って俺も行くわ。ガンダールヴのゼロ戦操縦

「見てみたいし」

「わたし達もですか？」

「いや。戦艦が少しだしいいや。温泉にでもつかってゆっくりして  
る」

「わかりましたー」

「はい」

「かつたるいけどー、アルビオン戦線まではトリステインに保って  
ほしいしな。」

## 学院

翌朝、トリステイン魔法学院に、アルビオンの宣戦布告の報が入  
った。

「なんかゲルマニアとトリステインの婚約の話も無期延期になっ  
たとか。」

「戦争の方は、王軍がラ・ロシエール　アルビオンに行くときに  
宿を取った街に展開中とのこと。」

トリスティンの戦艦は全滅。小国だしこんなもんか。

ってことで、俺は才人が来るまでゼロ戦の前で待っていた。

「お、きたきた。よう才人。行くんだろ？」

「あ？ ウィデイスか。ああ。タルブの草原に敵陣があるらしいんだ。タルブの村にはシエスタが居てさ。行ってくる」

まあ、予想通りか。

「俺も付いていくわ。通信機取り外したんだから二人乗れるだろう？」

才人は少し考え込む。

「……危険だぞ？」

「ハッ。誰に言っただお前？ そもそも、この広さじゃ飛び立てないだろ。俺が最初浮かばせないと無理だ」

「仕方ねーな。乗れ！」

俺は後ろの通信機が乗っていた部分に乗り込む。

椅子がほしいな。

才人が乗り込み、バルルルルと音を立てて、エンジンを掛ける。

プロペラが周りブレーキをリリースするが。

距離的に飛べるわけがねえ。

「才人浮かべるぞ？」

「ああ。いいつて言うまで浮かべといてくれ」

俺は風の精霊にお願いし、前方上に飛翔させる。

「いいぞ！」

そのまま上昇し、勢いよく飛び出す。

「うおー、飛びやがった！ おもしれえ！」

才人の近くに置いてあるデルフリンガーから声が聞こえてくる。

タルブの村は炎で全焼していた。  
にしても……かなりの数の戦艦だな。  
草原の上に戦艦がかなりの数浮いていた。  
草原には、アルビオン軍が敷き詰められるように陣取っている。

前方を見ると、才人はどうやらかなりキレているようだ。確か、  
此処にゼロ戦があったんだっけな。  
シエスタって使用人の故郷だっけか。あの才人と風呂に入ってた  
奴。

「叩き潰してやる」

才人が低く呟いた。

そのままゼロ戦を急降下させる。

てか、椅子とシートベルトないから頭とかぶつけて痛い。こいつ  
絶対俺のこと忘れてるだろ？

竜騎兵が攻撃を仕掛けてくるが、機関銃で竜に風穴を開けて落としてゆく。

「次は三騎右下からくる」

デルフリンガーが教え、才人が順調に撃ち落としてゆく。

「相棒、親玉が来たぞ！」

「あれがアルビオン最大戦艦『レキシントン』号か」

確かに眼下より300メートル近い戦艦が来るな。

「デルフ、アレ落とせると思うか？」

「ま、無理だあね。だが、アレ落とさないと終わらないぜ」  
「わかってるよ」

艦隊砲撃が続く中、右舷側がピカッと光る。

一瞬後、ゼロ戦に無数の小さな穴が穿たれた。  
風防が割れ、才人の頬に一筋の血が流れる。

「近づくな！ 散弾だ！」

「ちくしょう、あいつら小さな玉を大砲に込めてぶっ放しやがった」  
「！」

ふむ。てか、俺完全空気だわ。

どうすっかな。

「くそっ！ これじゃ撃沈どころか近づぐことも出来ねー」



うーん。ガンダールヴの能力は大体わかったしな……でも目立ちたくねー。

「おい、後ろの貴族の息子。なんか手はねーか？」

デルフリンガーが俺に声をかけてきた。

「いや。あるにはあるぞ？」

「本当か！？」

いや、お前前向けよ。

「別にいいけど、俺は目立ちたくないからお前が相手挑発しろ。そつすりやお前がやったってことになるだろ。両国共にそう認識される。やったな才人英雄だ」

「はー？ いいけどどうやんだよ」

俺は精霊魔法で広範囲に才人の声を繋げる。

「今お前の声を拡散させる魔法をかけた。挑発しろ」

才人はコクリとうなずいた。

「えー、こほんこほん。マイクのーテストス」

……っぜー。

『あー、自分。サイト・ヒラガって言うんですけど。アルビオン軍さん降伏しませんか？』

もう適当だけどいいや。俺じゃないし。  
才人への返事は散弾だった。

『うわっ、危な。交渉決裂ですねー。十秒後に落とします』

俺は精霊の拡散を切る。

「おい！ 10秒かよ！」

「仕方ないだろ！？ だつてノリが……」

「あーもういい！ ハッチ開ける！」

才人は急いでハッチを開ける。俺は立ち上がり、アルテマウエポ  
ンを向ける。

「ウイデイス、いつきまーす！」

「ガンダムかよっ！？」

才人の突っ込みを聞き流す。

《エレメンタルラース》

瞬間、大きな白い爆発を起こし、一隻の船が閃光に包まれる。  
そのまま、船は完全に消え去る。

「すげえ……」

「こりゃ虚無か……？」

「虚無なんて使えねーよ。二発目ー」

《メテオフレイム》

上空から大きな炎の塊が船に落ち、爆発となる。  
そのまま船は残骸となって落下した。  
炎炎炎炎土土のオクタゴンスペルだ。

「なんちゅー威力だ……魔法つてスゲー」  
「相棒……普通はメイジでも無理だぜ？」

原作だと一隻しか落とさないんだけどなー、まあいつか。

《サンダーストーム》

上空から何条もの雷が降り注ぎ、数隻丸ごと撃ち落としてゆく。  
風\*8の魔法。風を圧縮して電気をうんだだけ。

「めんどいな。一気に潰すか」

《グラビジャ》

まあ、これはディアボロスに借りてる技だけどいいだろう。  
超広範囲瞬間重力によって、空中の船が一隻残らずペシャンコになり、落下した。

眼下では、トリステイン軍の士気が上がり、攻め込んでいるようだ。逆にアルビオン軍の士気は底辺だ。

俺はアルテマウエポンをしまい。座り込む。

「ふー、さーて終わった終わった」

あーめんどい。帰りたい。

「おい、貴族の息子。お前何者だ？ 虚無だつてあんなめちやくちやじゃねーぜ？」

「あん？ 何だ伝説の剣。撃ち落としてやったんだからいいだろうが。それにこれは俺がやったんじゃない。才人がやったんだ」

「でもいいのか、ウイデイス。これだけやればマジで英雄間違いないだぞ？」

「いらねー。俺は目立ちたくないんだつもの。だから学校でもドットメイジのふりしてんだろが。言ったら魔法ぶつ放すぞ。その伝説の剣もな」

「勘弁してくれ、俺が魔法吸う剣だつて限度つてもんがあるんだぜ？ 一発でポツキリだ」

「だから言わなければいいんだつて。それより才人」  
「ん？」

俺は眼下を指さす。

「あれは……シエスタ！？ 生きてたのか！」

タルブの村焼け跡近くの森から、シエスタが出てきて、才人に手を振っているようだ。

才人はすぐに降下させ始めた。

## タルブの村焼け跡

才人はゼロ戦から飛び降り、シエスタの方に走っていき、抱き合  
った。

俺は置いて行かれたデルフを掴み、飛び降りる。

「才人さんすごいです！ 一人であなたたくさんの戦艦を撃ち落と  
すなんて、ますますほれちゃいました」

「あ、ああ……」

才人はこちらをチラリと見る。

俺は首を横に振る。

才人は頷き、

「ああ。たまたまだけだな」

「でもすごいですねー。竜の羽衣はあんな大きな魔法も使えるんで  
すね」

竜の羽衣とはゼロ戦のことだろう。

「あーそうだな。すごいよなー」

才人はもう適当に笑い返す。冷や汗まで出ているようだ。

「なあ、最強の魔法使い」

「あん？ 俺か？」

手元のデルフリンガーに変な呼び名で呼ばれた。

「おめーしかいないだろ？ 本当に虚無じゃないのか？」

「違うつての。虚無じゃ雷とか炎操れないだろ？ あれは普通の系統魔法だ」

「俺はなー、6000年も世界をみてきたが、あんな魔法使う奴は見たことないぜ？」

「あれは俺のオリジナル魔法だからな。使える奴はー。今のところ三人だな。俺の弟子があと二人」

弟子ってか奴隷かもしれんが。

「もし相棒が死んじまったら俺はお前の剣になってやってもいいぜ？」

「口うるさい剣はいらねーよ。そもそも、さっき俺が剣持ってるの見ただろ？」

「俺の方がすごい剣だぜ？ なんせ魔剣だ」

俺は才人から少し離れ、大きな岩の前でアルテムウェポンを構える。

そして、飛翔し、上段から一気に体重を乗せて叩き切る。

明らかに剣の長さが足りないが、岩はパツクリと割れている。

「さて、次はデルフリンガーの番だな」

「ま、待ってくれ！ 俺が悪かった！ さすがにあれは無理だ！」

うむ。わかってくれて何よりだ。

アルテマウエポンはHPによって攻撃ダメージが加算される。

HPが無限に等しい俺が使ったら切れないものなど存在しない。

「にしても、最強の魔法使いで最強の剣士ってか？」

「俺はそんな名乗ったつもりはねーよ。そうだな」

俺はデルフリンガーをゼロ戦の近くの土に投擲し、突き刺す。

誰もいないのを確認し、

「“世界の王”かな」

そのまま俺は学院に転移する。

自領の屋敷・庭

あの後、アンリエッタ王女が女王に即位した。  
強大なアルビオン軍を破った強き王つてことで担ぎあげられたのだ。

良い意味では国の希望。悪い意味では操り人形。

才人はシュバリエの爵位をもらったっぽい。

原作だとかかなり後のはずだが……名乗ったおかげなのか知らないが、才人の戦果が周知の事実となり、国の英雄となった。

ついでに、この時期に新しく水精霊騎士隊つてのが出来て、才人はそこの副隊長になった。

隊長はギーシュに譲ったとか。

とりあえず才人は、死亡フラグが立ったことに気付くべきだ。

才人は一人である戦艦を落とすことが出来るってことになったのだ。

つまり、厄介事が舞い込んでくる。



十中八九このままだと戦死する。

かわいいそうだが、仕方ない。さようなら才人。また会う日まで。

で、今は夏季休暇なので屋敷に帰省している。  
久々なのでうれしい。

だってさ

「あー、コラトレンタくん！ 服の中にもぐるうとするなって！」

癒されるー。なんてかわいいんだよコイツ！

こいつが人間だったら結婚してるね！

いや、人間じゃだめだ！ だからこそいいのだ！

「ご主人様ー、このピンクブルーのがかわいいですよー」

ミラはペンギンと遊んでいるが、ピンクブルーってどんな色だ。  
適当に色を組み合わせて名前にしたんだろ。

「最近生まれた白クマのあちゃんかわいいー」

テファはちいさな白クマをもふもふしている。

タバサはシルフィードを背にして本を読んでいるようだ。

そう言えば、才人は貴族となったが、夏休みはシエスタの村に行  
っているようだ。

まあ、学院時からシエスタとはやりまくってたから、自宅でも厭  
らしい過ごし方をするだろう。

キュルケが付いて行ったのが不安だが。

「ウイデイス様。お客様がお見えになっております」

背後からミルドの声が聞こえた。

「あー？ 今日とは誰とも予定入ってないぞ？ ゲルマニア皇帝は俺から行くってことになってるし、ミック取り仕切ってるセバスチャンとの会議だつてもうちよい先のはずだが？ ってことで帰つてもらえ」

俺の幸せは誰にも邪魔させない！

「しかし、学院の」

「今度こそ俺の知り合いなんていない！ ギーシュと才人以外は知り合いなんていない！」

仲いい奴なんて誰もいないしな！。寂しくはないぞ？ わずらわしいし。

「ご学友の親御さんが……」

親御さんかよ！

俺が振り返ると、二人の夫婦が土下座していた。

なにこのデジャビュー？

「誰……？」

俺は失礼になりそうなので、トレンタくんを置き、代わりに隣に居たジヨゼットを引き寄せた。

胡坐をかいていたので、その上にジヨゼットを乗せる。

不思議そうにこちらを見ていたが、頭をなでてやると気持ちよさ

そうにしている。

「この度、我が娘がしたこと。本当に申し訳ございませんでした」

む？ 誰この口髭と鼻下の髭がご立派な金髪は。

モノクルまで掛けてるし。

隣のピンク髪の女。目きつつ！ こわっ！ 絶対にお近づきになりたくない！

「いえいえ、全然許しますので。もうホント許すんで帰ってください！ もう迅速に早急に！」

ホント帰ってほしい。絶対厄介なことになる！

「いえ！ これで許してもらおうなど考えておりません！ 是非あなたの父君にも謝らなくては！」

ガバっと二人が顔を上げた。

「いえ、もうホント帰ってください！ てか父親が出てくる意味がわかりません！」

何故か敬語になるが仕方ない、威圧感半端ない！ てかマジカエレ！

「……」

無言になったよ！ 絶対何か考えてるこの人ー！  
てか名前言え！

「で、あんたら誰さ？」

「私はラ・ヴァリエール公爵でございます」

「わたくしはカリーヌ・デジレ」

「いやー！ マジお帰り下さい！」

「わたくしはエレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール」

「わたしはカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンティヌ」

顔を上げると、車いすに乗せられた女性と、それを押してる女性。エレオノールって方目きつつ！

後から来たのは、車椅子手配してもらったからか。うちの領にしかないし。

カトレアって方は、どうやったらこの家族から生まれるんだってくらい温和そうだが。

てか、家名違うやん！ 領地与えられてるってことか。

そもそも、何で家族全員そろってるんだよ！

「えーっと、とりあえずラ・ヴァリエール家全員そろって何？」

「ですから弁解を」

「弁解はいいっての。つまり、あそこに居た全員に弁解して回ってるの？」

「……」

「ぜってー、俺のそこだけだコイツ！」

「そもそもですね。もう三女とは縁を切ったのですから関係ないは

「ずですが？」

「……」

もうカエレ！

「で、俺の父親に会いたいと？ てか、弁解じゃなくてそっち理由ですよ？」

「……おっしゃる通りで」

これ、タバサと同じじゃね？

「まあ、なんとなくわかるけどさ」

俺はジョゼットを横に移動し、立ち上がる。そしてカトレアに近づく。

「何を……？」

「ちょっとエレオノールさんだけ？ 退いてくれ。別に変な事しねーから」

素直に頷いてくれるが、変なことしたらマジ切られそう。

カトレアの背中に触ってみる。一部の水の流れがおかしいから多分。

ふむ。脊髓に空洞が出来て、水がたまってるな。運動神経細胞も少し侵されてるか。

俺はナノマシンと水の精霊を使って調べる。

「カトレアさんだけ？ 熱いとか、冷たいとかだんだん感じなく

なったりしてきたか？」

「あ、はい。昔に比べると鈍くなっているかも知れないわ」

もしかしたら……。

「何っ！？ カトレア本当なのか！？」

「ちよつと黙れ！ 診察中だ」

うるさくて集中できないっつもの。

「指の感覚は？ あと、足が不自由になったり」

「指の先の感覚はあまり……足はあまり歩かないので」

「何故言わなかったカトレア！？」

「黙れっつもの！ あんたらに心配かけねーようにするためだろうが！  
少しは娘の気持ち考えとけ！ そしてうるさいっつもの！」

マジでうるせーんだよコイツら。そんな家でやれ。追い出すぞ  
屑が。

「ま、とりあえず病名はわかった。『脊髓空洞症』だな。今はまだ  
狭い範囲の感覚がなくなってるだけ。多分、針とか刺しても全く感  
じない。服とかの感覚は残ってるから気付かないが、熱とか寒さが  
感じなくなってるから確実だ。んで、指先の神経が腐りかけてる。  
このままいけば徐々に感覚は消える。ついで、神経が圧迫されて運  
動障害。歩行が不自由になり、いずれ動かなくなる。これが症状だ  
な」

これは間違っていない。治療するかはわからないが、一応正しい。  
普通菌が入ってるのだが、これは先天的かもしれないので、万  
能薬では治すことは不可能。健康な状態を知らない身体では無理な

のだ。万能薬を使うには、一度健康な状態に戻さないといけない。まあ、うちの屋敷の医療施設なら癌だって治せる。なんせ三万年も先の技術が使われてるわけだしな。その分機密性が高いので、治すか迷う。

「な、なぜ君はそれがわかるのだ？」

「わかるさ。ミラグループ代表嘗めるなっつもの。診断と調合は俺の仕事だろうが」

「……は？」

カトレア以外はぼかんとした。

やっぱコイツらもかよ……。

俺はタバサの方を見る、こちらを向いていたが、フイツと顔をそむける。

「失礼ですが……それは父君では？」

「俺には父親なんていない。俺自身がウイデイス・ラ・リバルステイン・ヴィ・リヤステイ侯爵だ。ミラグループ代表でもある。ハア……コレ前に誰かにも言ったよな」

チラリとタバサを見るが、サツと視線をずらされた。

「あとな。言っておくがこの病気が進行したのお前たちのせいでもあるんだぞ？」

「それはどういう……」

わかってねーなコイツら……。

「まず、脊髓空洞症。これは此処の」

俺はカトレアの背中の中の骨を下からすくい上げるように指で撫で上げる。

「ひゃっ!？」

やめてくれこの場にいるミラヤテファ、ミルドまでじとつとした目を向けてくるだろうが。

「今俺が触ったところの骨あるだろ？ 背骨って言うんだが。これの中に脊髄つてのがある。その空洞がだんだんと広がっていくものだ。これが病気なのだが、これだけなら症状は出ない。ただ、この中に水が入って神経を圧迫するんだ。それで症状が大きくなってゆく。わかるか？」

俺は公爵を見つめる。

「つまり？」

「水の魔法で身体いじくつたる？ それで水がかなり入りこんじまってる。広がって水を一杯まで入れる。それでまた広がって更に水を入れる。それをやったのはあんたらじゃないのか？ かなり広がってるから、下手したら死ぬぞ？」

全員が息を飲むが事実だ。

普通だったらありえない現象。魔法　それが無理に注入して悪化させないところはならない。こんなこと続けてたら死期を早めるってか作ってるだけだ。

ヴァリエール公爵は膝をついて茫然とした。

「そんな……ワシが娘を治そうと思って高価な水の秘薬や、高名な



水メイジにやらせていたことが……逆に娘を苦しめていた……と」  
「その通りだ。確かに。空洞が水で満たされれば一瞬楽になるだろう。だが、空洞が広がったあとさらなる症状が出る。それでまた埋めれば楽になって更につらく。それで最終的に死に至る」

はあ……広がっちゃったから水抜いたって意味ないし。完全な治療しないと行けないな。

やるかわからんが。

「お父様、別に私は気にしてないわ。だって、お父様は良かれと思つてやったことなんですもの。それに、私も納得して治療を受けていたわ。だからいいの」

そう言つてカトレアはほほ笑む。

「カトレア……すまない。私が早くに気付かなかつたばかりに」

「んー。気付かないのも仕方ない。本人だつて気付かないつて言うかだな。気付いたつて治せる奴がないんだよコレは」

医療つて分野が水メイジしかないからな。怪我は治せるが病気は治せないんだよこの世界。魔法が便利すぎて文明が屑すぎる。

「で、ではカトレアは……」

ヴァリエール公爵はカトレアを見つめる。

カトレアはさびしそうに笑うだけだ。

「ん？ 別に俺なら治せるぞ？ ただ、お前の近くに治せる奴が居なかつたつてだけだ。近くつて言うか俺以外に？ この屋敷の中の医療技術でしか治せないな」

「「「「へ？」「」」」」

おお、今度はカトレアも変な声上げた。

「んー、そうだな。時間はかかるが治せないこともない。ただ、此処までなつてると手術かな……、何もしなかったら薬だけで大丈夫だったんだが」

てか、何もしなかったら死ぬなんてこと絶対なかった病気だ。変な事だから病気がおかしなものになったのだ。

たいしたことないはずなのだ。

発病したのだって本当に先天的だがはわからん。傷を負ってそこから菌が入るのが普通だし。普通20歳くらいからかかる病気なのだ。運が良ければ万能薬でも治療可能。幼少の頃にかかったのならばだが。手っ取り早いのがナノマシンにしてしまえば勝手に治るのだが、するつもりなんてないしな。

「頼む！ 金ならいくらでも払う！ ワシはこれ以上娘を失いたくないのだ！」

俺の前に公爵は土下座してきた。

やっぱり平気なふりしてるけどルイズを失ったのは痛いかな。

「うーん。金はいらないんだよな……。どんな条件にするかなー……  
…ヴァリエール公爵に出来ることって言われても何があるか……」  
「アナタ随分とした言いようね！ たかが侯爵が偉そうに つつ  
！？」

エレオノールが杖を持った瞬間、俺はアルテマウエポンを首に突き付けた。

更に、ミラとテファが左右から首にピタリとブレードを押し付ける。

動いた瞬間バツサリだ。

「カトレアさんは温和な方ですが、貴方は随分とルイズと似た性格をしているのですねエレオノールさん。言っておくが、俺達は『冥府の番人』の師でもあるのですよ？ どのクラスだか知らないが、スクエア程度の実力で脅せるなんて思わないでほしい。冥府の番人5万人、俺達一人で殲滅出来ると言うことをお忘れなく」

そして、俺達は剣やブレードを離す。

「まあ、治さないわけじゃないんですよ。ただ、俺は王族だろうとなんだろうとお金以外の条件を突き付けているんで、何にしようかなど……。あとエレオノールさんは杖をしまったほうがいいですよ次はありません。ヴァリエール公爵が娘をもう一人失って悲しみますから」

やばい、実際何も思いつかない。ブレード突き付けたのは条件反射だしなー……。

ん、待てよ？ こいつは娘のことかなり考えてたはずだな。それを利用すれば

「テファ、ミラ。二人はリーン呼んできてカトレアさんの精密検査んで、治療する場合どのようなことするか俺に連絡。まだ治療するつもりはないけどさ。エレオノールさんも付いていいよ。妹さんが心配だと思っし」

エレオノールさんの目がキラリと光った気がする。

「あ、エレオノールさん。うちの物をやたら分解とかしない方がいいよ。壊れたら貴女が一生働いても返せない負積負うことになるから。うちのはマジックアイテムじゃないから魔力なんて通ってないし。此処はトリスティンじゃないから、王立魔法研究所の命令なんて聞けないからね?」

はつきりいつてエレオノールって人と、カリーヌってのには帰ってほしい。マジ苦手。

「でも、ご主人様。護衛は?」

「護衛つてこの二人なら危なくならないし。簡単に殺せるし。俺達の動きを視認すら出来ないんじゃないか? さっきのだって気付きもしなかったし」

そもそも、通常移動だつて俺達はオートヘイストがかかっている。更に、やるうと思えば何回だつて転移出来るのだ。

で、カトレアさんが連れられて移動してるんだが……。

「後ろのソレなにさ?」

カトレアさんが俺の言葉に後ろを振り向き、気付く。

「ええ、これはわたしのお友達ですの。皆付いてきたいって言ったので」

まあ、別にいいけどさ。うちの動物に比べれば少ないし。

「まあ、いいけど。医療 病気治すところに入るわけだから、動物は外で待つてもらえ。うちの動物達と遊ばせとけ」

コクリとつなずき、動物に何か言い聞かせている。  
スゲー……話せるのかコイツ？

「じゃ、ヴァリエール公爵と公爵夫人は話があるので、応接室に来てくれ」

さーて。いつそ裏をかいてみるか。

### 応接室

二人を応接室に案内し、対面に座らせる。  
何やらキョロキョロしているが……。

「屋敷もそうだが、立派な部屋だな」

「ああ、一応ミラグループ代表の屋敷だしな」

ちとちと。

「飲み物は紅茶で？」

「ええ」

「それでいい」

一通りは用意しておいてもらったので、すぐさま使用人が注いでくれる。

ケーキとお茶菓子もだ。

「で、カトレアさんの病気の為に、弁明ってことを使って来たんですよね？」

「ああ。それはすまない」

「いえいえ、此処まで普通通さないようにしてますからね。前にも一度そうやってきた人がいましたし」

学友ってことを使ってタバサがね。

「んー。で、率直に言いますが、トリステインがゲルマニアを悪く思っているのと同じように、私自信トリステインを良く思っていない」

トリステインは金だけで貴族が買えるゲルマニアを疎んでいる。ルイズが成り上がりとか言ってたのもその為だ。トリステインは伝統を大事にするので、貴族としてのプライドも高い。だから、トリステインの平民と貴族の差が激しくなり、平民は貴族を嫌う。

「それは心得ております。しかし、そこを何とか」

「私の領では貴族と平民が平等です。と、言うか貴族は潰れました。はっきり言って平民をおろそかにする貴族など邪魔なのです。働いているのが平民なので、あたりまえのことですが。と、言う

わけで」

俺は使用人に、手を差し出す。

その上に書類の束が乗せられた。

「それは……？」

「先ほど貴方達が来てから調べ上げたヴァリエール領のデータ。収入や貴族と平民の扱いなど全て。輸入や輸出はもちろん。作物の栽培状況とかもね」

俺はニヤリと笑ってやる。

「い、一時間程で、ですか？ そのようなこと……」

「なら、これを見ればいい」

俺は一番上以外の紙をテーブルの上に投げ出す。

数分後、俺は手元に残った重要な部分 俺の必要な情報を読み終わる。

「た、確かにうちのラ・ヴァリエール領の物でした。うちの記述より詳しい……」

「そうですね。機密なんて、ざるです。各王宮のデータだって簡単に手に入るんです。情報は武器。覚えておいた方がいいですよ」

「は、はあ……」

もう公爵さん冷や汗だらだらだ。

「まずは、トリステインの状況。一年間で平民が貴族に処刑された件数をご存じですか？」

俺は用紙からチラリと視線を公爵にずらす。

「50人程でしょうか……？」

「2574名。理由 街でぶつかつた。使用人がお茶をこぼした足を踏まれた。目ざわり。服装が汚い。税収が少ないe t c …。わかりますか？ 私が一番嫌いな貴族がトリステインに固まっているのです」

「……」

まあ、わかるはずないだろう。平民など貴族にとってはゴミだ。

「ですが、これは他の貴族なのでそこまで問題ではありません。重要なのはラ・ヴァリエール領」

もう一度まとめた書類に目を通す。

「ヴァリエール公爵とカトレアさんは非常に好かれていますね。平民の為に努力をしてきたとのこと。これはかなり、理想的です。こゆう方は私的には好きですね。ただ」

カリーヌの方に視線を移す。

「ルイズさん、エレオノールさん、カリーヌさんは貴族絶対主義。平民を何だと思っているんですかって感じです。私はルイズさんと学院が同じでしたが、彼女は召喚した平民の使い魔に首輪をつけて犬と呼んでましたね。乗馬用の鞭で叩いたり、失敗魔法で爆発させ



たり。見ていて非道な者でした。多分、これはカリー又さんやエロオノールさんの貴族は貴族らしくと言う教育。言いかえれば、貴族は平民をコキ使え。って教えのせいなのでしょう。知っていましたか？ 確かにヴァリエール家は領内で人気がありますが、と言うか公爵とカトレアさんが人気がありますが、後は恐怖で従順になつていたことを？」

「わたくしはそんなこと」

「平民暗黙の了解<sup>1</sup> ヴァリエール公爵様の家族にたいしては笑顔で挨拶をする。但し、出来るだけ早く切り上げる。<sup>2</sup> 機嫌を取るために獲れた物を手渡し勧める。<sup>3</sup> 会つたらまず地面に頭をつく。まだありますが、このような事が幼子にまで知れ渡つています」

貴族貴族って何さまのつもりだろうか。これで帰つたら平民は肅清か？

そんな時、一つの大型テレビが俺の前に飛んできた。

これは、両端に筒が付いており、上からのナノマシンを下に噴出させて浮いているのだ。

テレビ自体が紙のように薄いので、風圧でも軽々浮くのだ。

パッと画面にリーンが映る。

二人が驚いているがどうでもいい。

『お兄様。屋敷の中をうろついている人が居ます。殺しますか？』

「あー、映せ」

『わかりましたー』

リーンから画像が変わり、なにやら色々屋敷の中を調べている女性……。

俺はこめかみを押さえる。あー、もうやだ。

「えーっと。公爵。あの不審人物は？」

「すまない……。エレオノールだろう」

公爵も頭が痛いようだ。

「屋敷の中は機密情報が多いから、最悪記憶を消すか殺さないといけなくなる。ただ、使用人じゃ敵わないだろうし、カーリー又さん行つてあげてください……」

「……わかりました」

娘の不始末なので素直に了承してくれる。

「本当にすまない……。娘は珍しいものを見るとすぐ調べたくなるのだ……」

「あー、はい。わかりますよ」

リーンがそれだし。リーンの場合は作り始めるけど。

「あ、話戻りますが、うちの技術って機密なんですよ。王族だろうとなんだらうと。で、うちの治療受けられる対象なのですが……1、兵士になること　でも、うちは兵士いすぎるくらいだからいらない。2、うちの家系にはいる　無駄に多いから政治能力ないならいらぬ。3、トリステインを裏切る　これがオススメ」

まあ、この内容は話してほしいな。王室に。うちに刃向ってくれれば楽っちゃ楽。

「トリステイン……を？」

「ええ。あの国の貴族が気に入らないんです。と言うかですね？  
あなたはそこまでトリステインに恩が在るのですか？」

俺は目を細める。

「だが、始祖ブリミルから続く伝統的な血筋。絶やすわけには……」  
「ええ。で、あなた自信は？ ワルドに裏切られてルイズと縁を切られ、幽閉されましたよね。そもそも、ワルドは何故あそこに居たのですか？ 現女王アンリエッタがつかせたのですよね？そんなことしなければルイズが裏切ることもなかったし、ワルドが王族を殺すこともなかった。で、なぜヴァリエール公爵のことが表にでなかったか。何故ルイズが幽閉されたことも秘匿されたか。簡単です。ヴァリエール公爵は王族の血筋が入っています。王族にしても、それは立場があやうくなりませんからね。下手したら、アルビオンのように貴族派などで内部分裂しかねない。それを恐れて秘匿した。実際は処刑だったでしょう。王族ですら我が身かわいさに身内を売ったわけです。公爵が愛娘かわいさに、王族を売ったとしてもなんらおかしくはありませんよね？」

まあ、多分コイツはトリステインを売らないだろう。

「だが……わたしは」

「別に、こちら側についてほしいわけではありません。ある情報がありましたね」

俺はニヤリと笑う。

「まず、もうすぐトリステインはレコンキスタの最後の残党5万と艦隊全てと戦うことになるでしょう。レコンキスタからの情報です。今はアルビオンでしたっけ」

「なっ!？」

先ほどの公爵家の正確な情報から、信用に値すると認知するだろう。

「で、トリステインはゲルマニアと同盟を組み、コチラで調べた最大戦力7万で迎え撃ちます。ただし」

俺は紅茶を一口飲み、目を細める。

「ゲルマニア皇帝の思考は私がよく知っています。ゲルマニアは必ず寝返る。トリステインがかき集められる最大戦力が三万。艦隊なし。しかも、信用が出来ない傭兵も含めてです。対して、アルビオンは自国の兵だけで5万+艦隊。ゲルマニア皇帝なら有利な方に確実に寝返ります。ただ、これは確実な情報ではない。ですから、もし途中までこの通りになったら、情報を流してもらいたい。ゲルマニアは裏切ると。そして、ゲルマニアを攻撃してもらいたい」

「だが、もしそれが本当だと。それをすると貴殿の兵までもが」  
「そんなのわかっています。だが、攻撃してもらいたい。策はあるのです。全てが上手くいくような」

カップに口を隠してニヤリと笑う。

全てが俺の思い通りにゆく策が……ね。

「どうでしょう? どっちにしる避けられない戦争でしょう? あなたにもトリステインにも被害はない。むしろ、ゲルマニアが裏切ったことでの被害が最小限になる。どうですか?」

「貴殿はゲルマニア。貴殿も我々を裏切るのでしょうか?」

「一言言いますと。此処はゲルマニアであってゲルマニアではない。」

招兵されたら参加はしないといけません、うちの兵士への命令権は私にある。私は裏切るとがあまりすぎじゃなくてね、その時はゲルマニアが裏切ったと言うことで、私はゲルマニアを裏切る。そしてゲルマニアを潰す」

そして、トリステインに攻撃されたことを口実に、トリステインも潰す。

カトレアはヴァリエール公爵への人質。

「それくらいならば可能です。我々に有利なのですから……」

「しかし、ゲルマニアとの同盟はするしかない。うちが手を貸すならばまずゲルマニアを同盟にしなければいけないのだから。うちの兵士5万。それでこちらに有利になるでしょう。では、契約成立でしょうか？」

「それは構いませんが……それでカトレアは？」

「ええ。ちゃんと治療しておきます。ただ、少し時間がかかるかもしれない。ですから、治すことが出来るこの屋敷に滞在してもらうことになりますか？」

「治るならそれで構わない。本当になんと礼を言っていいいか……ありがとう」

公爵が深く頭を下げる。

それはこっちのセリフだ。トリステインをくれてありがとう。

「経過はそちらに臨時、文で送ります、遅くても半年以内には完治するでしょう。公爵が経過を見に来る分にはいつでももらしてください。しかし、エレオノールさんとカリーヌさんはご遠慮を。私の領では貴族がいません。此処には此処の法律があります。街で好き勝手にやられたら、最悪処刑です。貴族だろうと平民だろうと人殺しは此処では処刑です。例え、ぶつかつたとか理由が在ってもです」

「え、ええ。では近々私が来させていただきます」

「はい。ヴァリエール公爵がお帰りだ。送って差し上げる」

使用人が部屋に入ってくる。

「かしこまりました」

「では、失礼させていたがくとしよう」

「ええ」

俺はヴァリエール公爵が出て行ったのを確認すし、リーンに話しかける。

「リーン」

『はい、お兄様』

「カトレアの検査結果を映せ」

先ほどの浮遊テレビに結果が映る。

上から目を通していく。やはり、後天的な病気か。生まれた瞬間に背中が傷ついたのね。

「ふむ。これなら万能薬でも治るな。手術だつて一回で簡単に治る」

それでは意味が無いか……。

「リーン。万能薬を半年で治る程度に薄めて飲ませろ。完治するまでで半年だ。同時にエリクサーは原液で飲ませ、体長は良くなつてると思いきませろ」

『はいー。やっておきます』

映像が消え去る。

これでいいな。あとは……戦争が始まるのを待つだけ。兵士を一度招集して説明したほうがいいのかもな。

28 第二計画の土台作り。(後書き)

ヴァリエール公爵大好きなんですよ。



## 29 リヤステイ軍（前書き）

一回消えるとやる気なくなるよね……。  
opera 変えようかなあ……。。

## 29 リヤステイ軍

### 広野

未開拓地 現在では非公式のリヤステイ領。

そこに、リヤステイ軍全てが集まっていた。

メイジ部隊5万、有人空軍3万、有人海軍3万、戦車部隊5万、重器部隊5万。計21万のハルケギニア最大の軍。それがリヤステイ軍。ただし、これは非公式である。公式にはメイジ部隊の5万人だけ。

何者も侵入できない未開拓地だからこそ作れる部隊だ。

男女比は6・4。女性が意外に多いのは、戦艦や飛行部隊、有人戦車などは器用な女性の方がうまいのだ。これは、リーンの改造によって、操作にほぼ力がいらず、ラプターでかかるGなども抑えられているからだ。

有人 有人機と無人機がわかれているからこそ成る部隊だ。

無人ラプター。無人蜘蛛型戦車。戦車は警備ロボットでもある。

ただ、警備用は1メートル程度の高さで、頭上に小さな電磁砲を担いでいるだけ。これが、公式に知られている警備ロボット。

だが、裏がある。高さ5メートルになる有人、無人蜘蛛型戦車。

超遠距離用レールガン。遠距離用誘導ミサイル。中距離用ガトリ

ング砲。近距離用液体窒素放出装置。これが軍事用の蜘蛛型戦車だ。蜘蛛の足ですら軽々と人を串刺しに出来る凶悪性。

リーンが他の星から調達してきた外装で防御力が非常に高い。

現在、全兵士が終わりが見えない程にズラッと並んでいる。

上段には、俺、ミラ、テファ、リーン、タバサ、ジョゼットが並んでいる。皆白に金の装飾がしてある服を纏っている。つまり、うちの家系図に名を連ねているメンバーだ。

『諸君。今日は招集に応じてくれたことに礼を言おう。今日は報告がある。その為に皆に集まってもらったのだ。我が軍の初陣が決まった！ まあ、その前に』

俺は掌を上にかざし、数本の光の矢を作りだす。

『ゴミが紛れ込んでいるようだ。他国の屑が我が領の市民権を取ろうなど考えるな』

その矢を飛翔させる。矢は一直線に対象の頭部にささり、対象は倒れ伏す。

他の兵士は眉ひとつ変えないことから、相当な錬度だ。

市民権を取ることが、他国の奴でもそこまで難しくない。ただ、兵士に成るのはかなりの段階が必要なのだ。

まず 兵士は皆PDAを持っている。これは、ナノマシンを通して兵士の生体データを確認するものだ。巨大CPU『RERA』に全て管理され、ナノマシンで抜き取った遺伝子配列が99、9999%合致しないと本人と認められない。家族でも不可能なのだ。このPDA。『RERA』から最適な殲滅プログラムが送られてくる。他にも、現在地の確認や対象の確認なども出来る。その分セキュリティも厚い。使用者の生命反応が消える、または手放した場合、

勝手に電源が落ちる。他者が電源を入れたら電流が流れ、脳を破壊するのだ。

そして、これを持つ正規兵になるのもきつい。まず最初にナノマシンで頭を覗かれる。それを『R E R A』が回収し、設定項目をパスしなければならぬ。スパイなどは此処で殺される。次に、どの兵士のプログラムにも洗脳が入っている。完全に従順になるようにだ。

更に人を殺す訓練を重視する。心が壊れる場合も無理やり治す。最初にやることは訓練所に連れてゆき、無理やりみさせること。本気の訓練。実弾や、魔法、ブレードを使って実際に殺し合う。それを永遠と見させる。一定の基礎訓練が終わると、殺し合い形式の訓練。それで自分も数千回は殺される。

そして最強の部隊が生み出される。人を虫けらのように殺し、自分の命よりも効率的に人を殺せる方法を選択する狂兵士。治すよりもまず殺す。効率が悪くなるようならエリクサーで回復する。死んだら近くの兵士が蘇生させてくれる。死など恐れない部隊が出来上がった。

『では、まず心に留めておいてほしい。自分の領以外の奴は仲間だと思つな！ まず疑え！ 飯が出されたら毒が入っていると思え！手を差し伸べられたならば裏が在ると思え！ それだけは覚えておけ！』

『ハッ！』

うん。全員そろつてると気持ちいいな！。

『ならば、説明を開始する』

俺が指を鳴らすと、大きな浮遊ディスプレイが大量に浮き上がる。PDAも勝手に起動し、説明に必要な情報が映りだす。

『戦場はアルビオン大陸！ トリステイン軍とアルビオン軍の戦争だ。我々は、トリステインとゲルマニアの同盟により、トリステイン軍として出陣することになった。だがしかし！ 我々はゲルマニア兵か！？ 否！ 断じて否である！ 我々是我々の軍！ リヤステイン軍である！ 国になど従属しているわけではない！』

ディスプレイにはアルビオン大陸が映しだされ、戦力比が映しだされている。

『我がリヤステイン軍は、戦場では、最後尾に付くことが交渉で決定された。戦力比は、アルビオン軍5万＋戦艦、対トリステイン軍3万、ゲルマニア軍2万、リヤステイン軍メイジ部隊3万、重器部隊二万、無人蜘蛛型戦車3000。計5万だ。だが、ゲルマニア王家は我々もゲルマニア軍だとして、ゲルマニア軍7万と計算している。そして、トリステインよりアルビオンの方が有利としている。よって、確実にゲルマニアはアルビオンに寝返るだろう！ ゲルマニアが寝返れば、我々をゲルマニア軍だと思っているトリステイン軍は後方の我々に牙を向けるのは自然だ。だが諸君！ 我々はトリステインに攻撃などしていない！ だが、一方的に無実の攻撃をされたら我々はどうすればいいのだ！？』

『排除します！』

『そうだ！ トリステイン軍を殲滅せねばなるまい！ しかしだ！ ゲルマニアは我々が攻撃されている事を知りながら裏切っている。これをそのままにしておけるのか！？』

『排除します！』

『当然だ！ 我々は協力しているのに何故牙を向けられなければいけないのだ。では、最初から敵対していたアルビオンはどうだ！』

『駆逐します！』

『そうだ！ 我々は、5万の兵力で10万を殲滅せねばなるまい！』

出来るか！』

『当然であります！』

『そのいきだ！　そして、この戦争にはガリア軍が乱入してくるとの情報が入っている。戦艦の大群だ！　では、我々は戦艦からの一方的な攻撃に耐えなければいけないのか！』

『殲滅します！』

『当たり前だ！　我々は他者に従うことなど出来るはずがない。我々は全てが自由を求める反乱軍なのだから！　では、配置を指示しよう！　まず、ゲルマニアとして出陣する部隊！　メイジ部隊3万、重機部隊2万、無人蜘蛛戦車三千。次に、がら空きになったトリスティンとアルビオン、ゲルマニアの王都を制圧する部隊。各メイジ部隊5000、重機部隊5000、有人蜘蛛戦車部隊5000。次はガリアを殲滅する部隊だ。此処は兵士が大勢いるだろう。メイジ部隊5000、重機部隊一万五千、有人蜘蛛型部隊1000、無人蜘蛛型戦車2000だ。無人蜘蛛型戦車を楯として、突貫してもらいたい。次にアルビオン大陸上空のガリアとアルビオンの戦艦。これは上空5キロ地点に全空中要塞120基を配置しておく。そこに有人、無人ラプター部隊を5000配置する。空はラプター部隊に任せるぞ！　戦艦隊は逃がさぬように大陸を囲め！』

『ハッ！』

『トリスティンの女王は捕縛しろ！　他の王は殺せ！　親族も皆殺しにしろ！　刃向う者は殺せ！　勝利を我らが手に！』

『ジークハイル・リヤステイ！　勝利を我らが手に！』

『以上だ！　細かな布陣や指示は暗号通信を使って『R E R A』經由でP D Aに転送する。では頑張ってくれたまえ！』

『ハッ！』

ザツザツとキレイに兵士たちは戻ってゆく。

それを見送り、俺は軽く息を吐く。

「ふー、なかなか洗脳上手くいってるんだなー」  
「当然です！ リーンが考えた各プログラム まででは完ぺきなんですよー」

リーンが胸を張って自慢する。

「で、ミラちゃんお出かけセット は配給してあるのか？」  
「はい！ 内容はエリクサー\*10 フェニックスの羽\*10 リフレクストーン\*5 ヘイストストーン\*5 アルテマストーン\*1ですね。アルテマストーンはカバンに連動しているので、所有者以外が取り出すと、爆破します」

ならいいか。

「で、タバサはオクタゴンスペルでエレメンタルラーンまで使えるようになったんだよな？」

こくりと頷く。

「なら、お前はアルビオンで5万の指揮を取れ、5万のPDAへの命令優先権お前のに付加しておくから」  
「わかった」

あとはどうすっかな。

「リーンは『RERA』のところで最適プログラムと無人機司令官だろ？ 俺はトリスティンを落とす指令やるから。ミラはアルビオン指令。テファはゲルマニア指令。ガリアは……」

俺達4人は残った一人の方を向く。

ジョゼットはキョトンとしているが、やがて気付いたようだ。

「やります！ やらせてくださいお兄ちゃん！」

いや……でもさ。精霊魔法だけだよな……ジョゼットつて。

「確かにガリア王殺せばジョゼットが虚無に目覚めるんだが……。  
リン、ジョゼットのプログラム内容提示」

「はい。まず通常通り殺すことは慣れました。あとは精霊の制御、  
運用。指揮系統の教育。医療教育。近接戦闘。戦艦操縦、戦車操縦、  
航空機操縦。政治運営教育ですね」

ふむ…… プログラムと大してかわらないか……ただ系統魔法が  
使えない。

「わかった。ジョゼットお守りセット作ろう。内容は……エリクサ  
ー\*20にリザレクシオンストーン\*10 ヘイストストーンプロ  
テスストーン\*5 各魔法ストーン\*5 でいいか」

「ご主人様……わたしのセットよりずいぶん優遇してますね……」

「バカッ！ 当たり前だろ？ お前達と違ってジョゼットは精霊魔  
法しか使えないんだからな？ まじ怖いじゃん！ ジョゼットに傷  
一つでもついたら俺は国ごと破壊するね！」

「なんで理不尽……」

精霊魔法つてのは便利だが、突発力に欠ける。精霊魔法と系統魔  
法合わせるから強いのだ。

どちらか片方なんてキツイ。

「あー、心配だ。いつそジョゼットをナノマシン化しちやええ……」



「待ってください！ それは優遇しすぎでしょ！？ 最初はわたしです！」

どうせお前テファに最初取られるんだろ……。

「まあいい。任せたぞジョゼット。国の地図と予想侵入経路調べとけ」

「任せてください！」

心配すぎて胃に穴が開くわ。

「とりあえず、合図があるまでは全員待機だな。トリスティンと、ゲルマニアがこちらに刃向ってきてから戦線を布告する。で、ガリアが出てきた辺りで王都制圧を開始する、同時に飛行部隊もだ。学院生は学生として参加だ。合図と共に動き出せ」

「……わかりました！」

タバサだけはコクリとうなずく。  
さて、楽しくなってきた。

## 馬車

俺達は学院に戻り、魔法学院に来た募兵官に王軍への申し込みを行なった。

それぞれが即席の士官教育を二か月ほど受け、各軍に配属されるはずだったのだが。

王軍とは12個連隊なのだが、何故か俺達はギーシュ率いる学生だけの騎士隊。水精霊騎士隊に入ることになった。

王直属の最高司令官“王軍”とは別の、直属の部隊らしい。

それほど、才人の実力が期待されているのだろう。

王軍とは、王政府所属の貴族の将軍や士官たちが、金で集められた傭兵の隊を指揮するのだ。

他の部隊は、王から領地をもらった貴族が盟約に従い、領地の民を徴兵して編成する“国軍”。

自分的には民がもつたいたいと思うが、仕方ないのだろう。農民とかじゃ戦力にならないと思うけどな。

ちなみに、ラ・ヴァリエール公爵はこれを断り、免除税を払って

いた。この戦には反対らしい。

この他にも多くの貴族が拒んでいる。見所があるのか腑抜けなのか……。

後は、国軍の半分は補給部隊と成っているらしい。

リヤステイ軍は、補給がほぼ蜘蛛型戦車に乗っている。全ての場所に無人蜘蛛型戦車を置いたのはその為でもある。5メートルの巨体。しかし、外装は魔法ですら打ち破れるものではなく、中は空洞になっている。その中に食料が入っているのだ。PDAを持っていない兵士は近づいた瞬間液体窒素で殺されるが、持っていれば食料の調達がたやすいのだ。

重機隊用の武器庫戦車は色分けされている。

次に、“空海軍”。空や海の軍艦を動かす軍隊である。

これは、俺達のラプター部隊と戦艦隊が対処するだろう。数も性能もこちらのほうが圧倒的に高い。

で、俺たち水精霊騎士隊50人程は、馬車でわいわい進行中。所詮学生だ。

俺とミラ、テファとタバサはそれぞれ馬に乗って移動中。

あんな男だらけの馬車に乗る気はおきなかったのだ。

女で士官したのなんて、ミラ、タバサ、テファしかない。

てか、士官したのに、結局こいつらと、なんかわけわからない慣れ合いとは。

「ご主人様ー、今確認したのですが、レコンキシタン号の船長トリステインが雇ってるんですけど？ 生きてたんですね」

いやいや。生きてた以前に雇うなよ！ 裏切られるだろ。人少ないすぎだ！



はこれからやってもらわないといけないことが在るからな。出来るだけ、強く成ってもらわないといけない。ジョゼットが虚無覚えたらテファが教えてやってくれよ？」

「はいっ！」

あー……めっちゃくちゃニコニコしてブレード振り回してるなコイツら。

ブレード伸びすぎてあたり切れまくってるぞ。

空へ

現在、トリスティンとゲルマニアの連合10万を乗せた大艦隊が、アルビオン侵攻の為、ラ・ロシエールを出港した。すでに各地には、リヤステイ軍がメイジ部隊によって姿を隠し、潜伏している。

女王アンリエッタと枢機卿は出向した船を見送っている。

こちらから侵攻するのは、責められるならば攻めてやれってこと

らしいが。

トリスティンにはほぼ兵が居なくなってしまうている。1000人でも殲滅出来そうだ。

か。10万人乗った船はぎゅうぎゅうだ。圧死するんじゃないだろうか。

俺達は、仲間の貴族が自分の家にあつた移動用船を持ってきてくれたので、優雅に飛ぶ。

「ご主人様。アンリエッタと枢機卿の会話聞いてますか？」

「ああ」

俺は与えられた部屋で、残った二人の声を拾っていた。

「この戦は国や民のものではない、私怨を晴らす、恋人の仇を討つ戦争……ね」

ミラはベットにごろんとなりつぶやいた。

「なんともまあ、自己中な王もいたもんだな。一応ナノマシンに記録したからな、コレ使えば女王は確実に失脚だな」

「ですねー、でも使う必要なんてありませんよね？」

だな。そんなことしなくても、これで終わりだ。

「と云うかですね、ご主人様此処に居ていいのですか？ ご主人様の地位ならゲルマニア軍司令官ですよ。何ですか今のハルデンベルグ公爵って司令官」

「どうやら、俺が此処にいるのが気に入らないようだ。」

「確かに、皇帝にはやれって言われたが、そんなのやってられん。どうせ裏切るし。それより、各地の配軍完了してるのか？ 蜘蛛戦車と空中要塞なんて特に」

俺は手元のPDAを弄ってデータを確認する。

「ガリアがちよっと手間取ってるな……。俺達は指示もう終わったが、やはりジヨゼットはまだか。」

PDAで一括命令も出来ないし、マルチタスク 並列思考出来ないからな。

「ナノマシン化は必要か。」

無人機の操縦もリーンに任せるしかないだろうしな……。。

「確認終了。ミラもテファもよく出来てる。タバサはこれから現地で指示だし。大丈夫だろう」

「才人可哀そうだなー、あいつ最高司令のところいかされたぜ。利用されるだけだろうが。」

立ち向かってこなければ殺さないが。どうなるか……。え？

「あー！」

俺はガバっと立ち上がった。

「え？ どうしたんですか」

「くそッ！ 忘れてた。ジュリオがいるじゃねーかこの戦い。ロマリアの命令できたんだなアイツ」

「ご主人様座標座標！」

「固定するからそこ見ろ」

俺はマスター権限でその場所を固定する。

「これって、ジョゼットちゃん会ったら……」

テファが心配そうに言っているが、

「十中八九会うな。むしろジョゼットを探しに来たと言っていい。どうすっかな。ジョゼットこっち裏切らなければいいが。裏切ったら殺すしかないが、殺したくないよな」

裏切った場合躊躇はしないが……な。

と言うか、その場合、持たせてるアルテマストーン爆破すれば周囲1キロくらい消滅させられる。ジョゼットに渡したのは、取られた時の爆破用でなく攻撃用だ。欠片ではなく塊。本来の威力を持つ。

俺はもう一度横になった。

「ま、心配してもしようがない。ジョゼットが向こうにつくならそれも運命だろ。そしたら殺すだけ。だろ？」

「……」

ミラとテファはじっとこちらを見つめていた。

「ん？」

「ご主人様、なんでそんな不安そうなんですか？」

「兄さんとずっといるからわかりますよ？ それに、ナノマシンが暴れているので」

は？ 俺は表情だっていつもと変わらない。



「ナノマシンはリーンが情報飛ばしまくってるからじゃないか？  
俺は裏切り者には死をだ」

うん。例え、ミラやテファでもそれは……。

だが、本当にそれが出来るか？ もし、此処でコイツらが俺に剣を向けてきたら、俺はコイツらをナノマシンに命令して存在ごと殺すことが出来るか？ 多分 出来ない。

多分……俺は弱くなったんだろ。この世界で俺は弱くなった。  
群衆は人を弱くする。俺は……。

「ご主人様。ジヨゼットちゃんが裏切った場合。殺すのはわたしがやりますので、ご主人様は国を落とす時の政治体制を整えてください。わたしなら躊躇なく殺せますので」

ミラは真剣な表情で俺を見つめていた。

「……すまないな。その時は任せる」

「はい」

また笑顔に戻る。

あー、ミラに言われるようじゃ俺もまだまだだな。  
まだまだだって言うか、昔のほうが強かった。

「これで、ご主人様の妻がすくなくなりましたっ！」

はあ……。

それが本心じゃないってことくらい俺だってわかるっつもの。  
そんな気使わなくても……。

「ありがとな」

「いえいえ、わたしはご主人様の奴隷で妻なので。おやすいご用です」

気がきく妻だこと。

墮落してる妻でもあるが……。

### 30 リヤステイVS四国

#### 拠点

俺達水精霊騎士団は、船から降りてからはゆっくりと進んでいる。才人はゼロ戦で一人で戦果をちやくちやくと上げているようだ。シテイオブサウスゴータってところを今は拠点としている。

ただ、食糧庫が空だったので、こちらが餓死寸前の民たちに食料を分けているのだ。

トリステインの国庫がやばいらしく。ガリアに借金してるらしいが。

「なあギーシュ。これじゃ僕たちは戦果があげられないじゃないか」  
ギーシュの傍に居る小太り。マリコルヌとか言う奴が文句を言う。それに追隨し、他の者からも不満が出る。

俺達が配属されたのはかなり後方だ。  
貴族の子供たちを前線に置くわけないだろうに。死んだら文句言われるのは国なのだ。

「仕方ないではないか、我々は此处に配属するように国から言われているのだから」

ギーシュだって戦果をあげたいのだろうな。  
の割に、全員へっぴり腰と言うか、怖がっていると云うか。

「別に安全なんだからいいだろ？」

戻ってきていた才人が発言する。

「君は一人で戦果をあげているだろ！？」

「そうだそうだ！ 俺達にも分ける！」

「あのフェニックスを貸せ！」

フェニックスとはゼロ戦のことだ。

不死鳥のフェニックスと呼ばれているらしい。

「無理だろ！？ 乗れるの俺だけだし！」

だろうな。

「なあ才人」

「なんだウイデイス？」

「例えば、ゼロ戦でF35ライトニングに勝てるか？」

「いやいや、無理だろ！？」

知ってるとは……。

「もしだ。もし、勝てないと思ったならすぐに着陸し、隠れている。  
例えば、普通のメイジが俺に勝てないように、ゼロ戦の限界がある  
んだ。約束してくれ。俺はお前を失いたくない」

俺は真剣なまなざしで忠告する。  
だって、おもちゃが死んだら……。

「どうしたんだよ急に？ まあいいけどな。そんなレベルの戦闘機が出てきたら隠れるよ。でも、この世界なら竜程度だろ？ むしろ、お前がF35知ってることに驚きだ」

嘗めすぎた才人。

現在この世界にある兵器は地球以上だ。改良型F22ですら数万。蜘蛛型戦車も数万。空中要塞まである。地球だってやろうと思えば制圧出来る。

無人機作りまくって投入すればいいだけなのだから……。  
核でも出されなきゃ、蜘蛛型戦車の装甲すら破れないだろう。

「約束したからな。その時は、此処に居る奴ら全員連れて隠れる」  
俺はフッと笑う。

「な、なあギーシュ。このポジション怖いんだが……」

一人の少年がギーシュに声をかける。

「わ、わかっている。何故この場所に彼らが居るんだ……」

ギーシュの視線の先には、Mの旗を持った部隊。

言わずも知れたりヤステイ軍。一応、合図が在るまで、俺のことは知らないように装ってもらっている。

「『冥府の番人』……だよなアレ？」

「あ、ああ」

冥府の番人の評価が聞けるのはいいかもしれないな。

「確か、全てスクエアメイジで構成されている部隊だろ？ どれだけ参加してるんだっけ」

「5万だったはずだが……」

「と言うか、何故最後尾にいるんだ？ 前線に出れば一つの部隊で殲滅出来るんじゃないか？」

そこはめちやくちや交渉しましたよ？

じゃなかったら出ないって言ったし。免除金払えばいいだけだからね。

「そう言えば、冥府の番人を保持してるのって、ヴィ・リヤステイ侯爵だっけ？」

「ああ。今回は来てないらしいが」

「軍だけ出すって腰抜け？」

「ははは。そうかもしれないがあまり言っな。殺される」

とりあえず、隣のミラとテファの目が怖い。此処でバレたら計画破たんだ。

「それよりも才人。君は何故女性を侍らせているのかね？」

ギーシュが嫌味っぽく声をかけた。

「いや、補給部隊として付いて来たらしいぞ？ それに、俺はこの方がやる気が出るんだ」

出るかもしれないが、自重しろ。

シエスタとキュルケ腕に抱きつかせてどうすんだ。  
まあ、今はいいけどな。

「なんで君とウィデイスは複数上手く行ってるんだろうか」  
「日ごろの行い？」

お前の行いは決して誉められないがな。  
てか、キュルケが二人でも納得しているのが意外だな。独占する  
と思ってた。

「ギーシュ……僕は疲れたんだが、ミラグループのテントは支給さ  
れていないのかい？」

「あんな高価なもの下っ端の僕たちに支給されていると？」

「だよな……後ろの部隊は全員使ってるからさ……」

「そりゃ、ミラグループの代表がヴィ・リヤステイ侯爵なんだから  
使い放題だろうさ……」

少年は黙りこみ。

「つてことはハイポーションもたくさん持つてるよな？」

「多分な」

「……盗む……とか？」

「やめておきたまえ。君も貴族だろう？ それに、殺されるぞ」

確実に殺されるな。お出かけバック奪ったら殺すように言ってるし。  
るし。

才人はテント使ってるようだな。キュルケの持ち物らしいが。

## 進軍

ああ、才人死んだ方がいいと思う。確かに、テントは防音完璧だけどさ。

此処まで来てやるか？ しかも二人とも同時に。

「なあ、俺達は何もしてないが、今現在も交戦しているんだよな？」  
「そうだ。何れ水精霊騎士隊も参加することになるだろう」

うん。お前カッコよく言ってるが足震えてるよ？  
とりあえず、俺も口をはさむ。

「てかさ、さつきから前方がかなりあわただしくない？」  
「確かにな……」

前方で誰かが叫んでる。此処までは聞こえないが。  
まあ、俺にはわかるんだが。

しばらくして、内容がナノマシンを介せずとも聞こえてきた。

「反乱だ！ ロツシャ連隊！ ラ・シェーヌ連隊など、街の西区に駐屯していた連隊および、ゲルマニア軍が反乱を起こした！ こちらには三万の兵士を失った！ アルビオン軍は8万！ 後ろに伝えて



くれ！」

前方から声がかかるが……。

「反乱だと！？ だからゲルマニアとの同盟なんか！」

「とりあえず後ろに伝える！」

「だが、後ろって言うっても後ろは……」

全員が八つとして後ろを向く。

後ろにはそのゲルマニア軍。俺の軍隊が5万。

どう考えても後ろには下がれない。

「ギーシュ。落ち着け。隠れた方がいいぞ？ 此処も戦争になる」

「ウイデイス！ だが、どうやって下がればいい。前からは敗戦として兵が押し寄せ、後ろにはゲルマニアの反乱軍！」

確かに反乱軍……だよな。

「ゲルマニアが退路をふさいでいるぞ！ 突破しろ！ 撃てー！ー  
！ー！」

前方から大きな叫びが聞こえ、俺たちに大量の魔法が飛んでくる。

「なっ！？ 僕たちは味方だぞ！？ 味方も一緒に撃ち殺そうと言  
うのか！？」

多分、このままならこの部隊も全員死ぬだろう 味方の攻撃に  
よって。

着弾の寸前、後ろのリヤステイ軍が魔法を一瞬で唱え、水の壁が

現れる。

それが、トリスティン軍の魔法を全て防いでくれる。

「ゲルマニアが……俺達を守ってくれたのか？」

一人の少年がつぶやく。それは水精霊隊に伝わってゆく。

才人は既にゼロ戦で出撃したようで、その場にはいなかった。

「味方に攻撃され、敵に守られる！ どこが名誉の戦だ！ 周りを  
見てみる！」

一人の少年が声を張り上げる。

前方に居た士官の一団が、こちらに走ってくる。我先にと逃げ出しているのだ。

上空では竜が全て後方に逃げてゆく。

戦力差で勝てると思っていた時は、偉そうに指揮をし、負けるとわかったら最初に逃げ出す指揮官たち。

俺と、ミラ、テファ、タバサは視線を交差させ、頷く。

「ギーシュ。お前たちは逃げる。リヤスティ軍を超えたら、真っ先に後方の街へ逃げろ！」

「何を言っているのだ！？ この布陣で後ろになど逃げられない！」

「確実に生き延びる！ 俺はお前のこと嫌いではなかったぞ？ 結構楽しかったしな」

「ウイデイス？」

俺達四人は空中に浮き上がった、魔法で攻撃されるが、精霊魔法で全てが跳ね返る。

服もリーンが転送し、純白に金の刺繍がされた物に代わっている。

どこぞの王族の様な服装だ。

そこで、声を拡散させる。

『トリスティンよ。数で負けたからと言って逃げ惑う姿。滑稽にも程が在るぞ！ 道をふさぐものは味方ですら排除して進もうとするか！ ゲルマニアよ！ 一度した同盟を反故にし、裏切るとは人間として言語同断だ！ その精神、救いようがない！ アルビオンよ！ 国を支配するだけでは飽き足らず、他の国まで支配しようとは欲が過ぎるぞ！ 三国よ、その責任どうとるつもりだ！』

俺の叫びに全てが止まる。時間が止まったように。意外なことに、最初に動き出したのはギーシュだった。

「君は何を……」

俺はギーシュにほほ笑む。

『命令だ、そこの一団だけはとおしてやれ』  
『御意！』

水精霊騎士団の後方だけ道が出来る。

「ギーシュ……生き残れよ？」

「ウイデイス……」

俺はギーシュのつぶやきを無視し、前方に顔を向ける。

そして、アルテマウェポン 青く輝く剣を前方に向ける。

『我、ウイデイス・ラ・リバルスティン・ヴィ・リヤステイは、現

在この時を持って、トリスティン、ゲルマニア、アルビオンに宣戦を布告する！」

『我等は主君の為に！』

そこで全ての不可視状態を解除する。

リヤステイ軍にまぎれて大量の蜘蛛型戦車が現れる。

空には無人、有人のラプターが大量に飛翔する。

隠していた、重機。ガトリング砲や電磁砲なども重機隊の手に現れる。

『蜘蛛型戦車隊前へ！』

蜘蛛型戦車が一斉に前に出る。

『レールガン、ナノマシン収束開始』

レール部分がキラキラと光出す。収束され、白い光が溜まってゆく。

『撃てーーーーー！！！！』

天地を揺るがすような轟音が響きわたり、白紫の3000の光が、一直線に前方に放たれる。

大地を削りながら、超高圧電流により、射線上の兵士の身体を消し去ってゆく。余波だけでも、腕が千切れたり、感電して死んだりしている。

更に収束しながら、遠距離、中距離用装備で敵を駆逐してゆく。

「ウイデイス……」

この爆音の中でよく通る声が聞こえた。

「ギーシュ。死にたくないならば逃げる！　だまして悪かったな。俺はウイデイス・ラ・リバルステイン・ヴィ・リヤステイ。この世界の王になる男だ」

ギーシュから視線を移す。

「銃機隊、前方に移動し、撃て！　蜘蛛型戦車の間を埋める！　メイジ隊、二軍は魔法を撃ち落とせ！　一軍はエレメンタルラーズで突破口を開け！」

銃機体は小型の蜘蛛型警備ロボットの上にガトリング砲を設置し、撃ち続ける。

電磁方は肩に担ぎ、撃ち続ける。遠くで白い場発が何度も起きる。メイジ隊のエレメンタルラーズだ。

魔法を撃ち落とせといったが、近くに人なんて一瞬にしていなくなつた。

俺はタバサの方に視線を向ける。

「タバサ。後は任せたぞ？」

コクリとうなずく。

俺はその頭をなでてやる。

「お前なら出来る。今まで厳しい訓練受けてきただろ？　俺はお前だつて家族だつて思ってるんだぞ？　だからな、いいんだぞ？　母親だつて帰つて来たんだからな。お前を傷つける奴なんて誰もいな

い。昔のように普通に普通にしていんだぞ？」

俺はタバサの頭から手を退け。

「ミラ！ テファ！ 各自任せた！」

「「わかりました！」」

そこで俺達は消え去った。

## タバサ side

わかってた。

わたしが性格を変えたのも、もう意味はない。

あの時母様がわたしを忘れて、イザベラに利用され始めてから、感情を出さないようにしていた。

でも、今はもう必要が無いことだってわかる。

母様は帰ってきた。父様は帰ってこなかったけれど。母様はちゃんといる。今の生活だって嫌々しているわけではない。むしろ、母様と毎日一緒に居れるし幸せなのだろう。

髪だって此処に来てからは切っていない。昔みたいに腰までは伸

びてはいないけど、背中辺りまでは伸びている。

目は悪くなってしまったけど、これも治せるらしい。昔と全く同じように、母様の前に居れるだろう。

でも、いいのだろうか。昔の

『シャルロットをどこへやったの!?!』

『え?』

『シャルロットを返して!』

『わたしはここにいるわ! どうしたの? ねえ! 母さま!』

『おおお……、あなたと言う人は……、夫を奪ったのみならず、このわたしから娘をも取り上げようというのね? 悪魔!』

そこでかぶりを振る。

思い出したくもない。母様がわたしを悪魔と呼ぶようになったあの日。

でも、今はまた戻ってきた幸せな日々。いいの……? あの時と同じで。

「わたしは……もういいの?」

思わずつぶやいてしまう。眼下では、激しい戦い 一方的な虐殺が行われていた。

あの方は、多分自分勝手だ。残虐だ。非道だ。だけど……。わたしの頼みを聞いてくれた。母様を助けてくれた。民だって幸せになっている。

あの方のもので、昔のようになっているの?

『シャルロットは頑張ってきたから、そろそろいいんじゃない?』

母様の言葉が頭の中に、いや。これは多分わたしの希望なのだろう

う。

でも もういいよね。

「いいのよね。幸せになっても……」

わたしは精霊に頼んで、声を拡散してもらおう。

そして、大きく息を吸い込んだ。

「わたしはシャルロット・ヴィ・リヤステイ！ 今から我がリヤステイ軍の指揮はわたしが行う！ 蜘蛛型戦車隊を先頭に！ 全軍進撃！」

わたしの声でボロボロになった地面を軍が侵攻していく。

なるほど、この為の蜘蛛型なのね。よく考えているわ。これなら大威力の攻撃の後でも進めるわね。

わたしは空を仰ぐ。

……。

気持ちいいものじゃないわね。

ラプター部隊がこちらに進む竜や戦艦を次々に落としてゆく。

さて、わたしはわたしの仕事をしますか。

わたしの任務は敵の兵士の全殲滅。

そのまま進軍と一緒に飛翔する。



ある程度進むと、大勢の兵士がこちらに走ってくるのが見えた。ふふ。全ての軍が纏まったみたいだ。本当に5万対10万。わたしは手を掲げる。

『全軍止まれ！ 布陣を崩さず、レールガンによる一斉放射！』

次々にナノマシンと呼ばれるものが収束される。

『撃てー！』

声と同時に手を振りおろす。

キレイな閃光が敵軍に放射される。

まるで、地面に均等な白い線が引かれるように。

すぐに地面が砕け、敵の身体が飛んだり、消滅している。

……。

うん！ キレイだけど怖いかもしれないわね！

っと、指示しないと。

『近寄らせるなー！ 遠距離、中距離射撃！ 銃機隊はガトリング砲と、電磁砲用意！ メイジ隊は各所にファイヤーテラーを設置！ 敵の進軍を妨げ、視界をふさげ！ 蜘蛛型戦車隊は半歩ずらし、レールガン一斉掃射！』

超遠距離からのレールガンによって大部分を駆逐する。ずらすことにより、一回目であたらなくても当てる。

それでも近づいてきた物は、遠距離、中距離射撃で駆逐する。火の柱が上がり、視界のない状態での電磁砲とガトリング。

上空の敵はラプターが撃ち落としてくれるので楽だ。

圧倒的よね……敵ながら可哀そうになってくるわ。

でも、これはわたしの決めたことだし、それに人死には慣れている。

そろそろ見える範囲は消えたわね。

『全軍進撃!』

それから何度も繰り返し、あと少しの所で乱入が在った。

あの方が言っていたガリアの大戦艦隊。

確かに、数百は浮いている。

ガリア　わたしのとうさまを殺した国。そして、母様を壊した国。

出来るならばわたしがとどめを指したいのだけれど……。

空から舞い降り、次々と数を増やしてゆくラプター部隊。

ガリア軍は何もせず撃ち落とされてゆく。

逃げようとするが、速度が違いすぎる。数分で全てが撃ち落とさ

れてしまった……。

……。

呆気ないのね……。

もし、わたしがあの日あの方の方所をお願いしに行かなければ、わたしも同じようになっていたのね……。

呆気ない程に終わる。こちらの被害は一人すら死んでいない。転んで怪我した人がいるくらいだろう。それもすぐに治ってしまう。

死者ですらこちらは治すことが出来るのだから……。  
負けるはずのない戦いだっただのね。

さて……。

『全軍進撃！』

更に命令を下す。

そう言えば、他の方たちはどうなったのかしら？

### 30 リヤスティVS四国（後書き）

タバサの性格と話し方を昔の状態に戻しました。  
寡黙なタバサ好きごめんよ。

### 31 各々の仕事（前書き）

なんだかシヨボくなくなったー！  
だけどいいよもう！  
疲れた寝る！

### 31 各々の仕事

テファ Side

転移した先は、既にわたしの部隊がお城を包囲していました。

一応なるべくお城は破壊しないようにと行ってあったので、出てきた兵士だけは倒れ伏してますね。

そこで、わたしは声を拡散させる。

『では。まず、お城を包囲している蜘蛛型戦車隊と、重機隊に命令します。上空の敵は、ラプター部隊によって撃ち落とすので問題ありません。包囲した外側は、近づいてきたら容赦なく撃ち殺してください。内側も、敵が出てきたら殲滅してください。メイジ隊はわたしと共に、お城を制圧します、抵抗してきたら殲滅してください。それ以外は捕らえる方針で。クロムウエルと言う人が居るので、それだけは殺せと兄さんに言われています。では、行きしょう』

そこで、わたしはあることに気がついた。  
近くの兵士に聞いてみる。

「抜け穴はどうしましたか？」

「ハッ、我々が来た時には全て潰されておりました」

あ、そう言えば兄さんがそんなこと言ってましたね。潰してある  
って。

それにしても兄さん。兵が多すぎますよ……。

わたしはまず、入口の扉の前に来て、精霊魔法で氷の塊を作り、  
扉を破りました。

系統魔法が使えないと不便ですね。

「すみません、それぞれ偏在を作って中に突入させてください。入  
ってすぐに大量に待ちかまえているでしょう」

「ハッ」

わたしの命令通りに偏在で分身を作り、中に入ってくれる。

すぐに、横から魔法が飛んできて、偏在を消し去る。

偏在の兵士は数が相当多いので、どんどん中に入ってゆき、結果  
魔法が飛び交っています。

「入口、制圧しました」

「では、突撃しましょう」

わたし何もしてないなーとか思いながら一番最初に入りました。

「それぞれにわかれて、各部屋を制圧して行ってください。外に逃げた敵は外の者が処理しますので、無視していいです。わたしは、このお城には来たことが在るので、王室に向かいます。30人程ついてきてください」

来たと言っても、昔のアルビオンですけど。  
皆が別々の通路に走ってゆく。

わたしは、兵士の偏在を先頭に、場所の指示をして走ってゆく。

上に乗る階段を上っている最中、偏在が上方からの攻撃で潰される。

しばらく、偏在を送っていたが、上からの攻撃は当たるけど、下からは壁が邪魔して当たらない。足場ごと壊せばいいのだが、お城は壊したくないので……。

結局なかなか進めなさそうなので、ナノマシンで敵の居場所を感じ、その背後に転移する。

「……なっ!?!」「」

10人程の兵士を、ブレードで一瞬にして切り裂く。  
教え通り一撃で確実に殺します。

下の兵士に合図し、上ってくるように言う。

途中何故か兵士がいなかったなので、更に走り抜ける。  
多分、王室で待ちかまえているでしょう。

そして、王室の前。



「偏在で扉を開けてください。一応感知しましたが、部屋の中には50人程のメイジがいます。一齐に魔法を撃ってくるでしょう」  
「わかりました」

偏在を作っていただけ、扉を開けてもらうと、案の定魔法を放ってきた。

### 《加速》

オートヘイストと加速。これはナノマシンでなければ確実に視認できないとのこと。

歩いている速度でも見えないと言われた。

魔法がやんだ瞬間、わたしは中に入り、ブレードで確実に首を刎ねてゆく。

何が起こったかわからないらしく、兵士は慌てているが、その隙に50人全ての首を刎ねる。

その後、兵士の中に入ってもらい、命令を追加。

「死体を消滅させてください。此処の主は死体をよみがえらせます」  
「ハッ」

小さなエレメンタルースで死体を消し去ってくれる。

あの魔法羨ましい。ミラちゃんや兄さんが得意とする魔法だ。

兄さんが作った魔法らしい。わたしも使えればいいんだけど……。

あれ？ そういえば、わたし吸収のルーンがあるんだからもう使えるんじゃない……。

帰ったら練習しよつと。

とりあえず、ナノマシンで感知した場所つと。

わたしは玉座を切り捨てた。

玉座の下の穴に、震えている人が居た……。

通路はふさがれているらしく、そこまでしか潜れなかったらしい。

精霊魔法で引きずり出し、兵士達の真ん中に降ろす。

一応確認したほうがいいのか？

「あなたがクロムウエルですよね？」

「ち、違うのです！ わたしは違います！」

んー……。そう言えば、兄さんが死人を生き返らせる指輪を持っているとか。

「失礼します」

その人の指を見てみると、大きな水色の指輪。とりあえず無理やりはずしてみる。

そして、ブレードで心臓を一突き。

指輪を使ってみると、目に光が入っていないゾンビのような……。

これは、兄さんの蘇生とは全然違いますね。

「制圧完了です。クロムウエルの死亡を確認。気持ち悪いので消し去っちゃってください」

「ハッ」

外では、投降した人たちが連れられていくようです。

一応、使用人以外は全員処刑と命令を受けているんですけどね。  
さて、ミラちゃん、兄さんとタバサちゃんはどっだったかな。

### ミラside

ゲルマニア王宮に来ました。  
久々にミックで食べたけど、新商品も出ててなかなかでした。  
さーて。

「ミラ様！ 包囲を完了しました！」  
「うむー。」「くるー」

さて。どうしようか。

大きな爆発を起こせば出てきてくれるかも？

ご主人様からもらった大切な杖をお城に向け、

《エレメンタルラース》

やっぱり、ご主人様に最初に教えてもらった魔法が好きです。

おおきな爆発が起き、白い光が消えた後には……。

何も残っていませんでした……。

みなさんそんな目で見ないでくださいよ。

「えーっと、少し威力間違えましたね。反抗してくる兵士は……兵士ごと消滅しましたね。ってーことで、撤収！」

「撤収ー！！！」

兵士の視線が痛いけど気にしない。

「ってー、待つて待つて！ 各地の貴族をつて言つても、公爵が少しか。それを制圧して。反抗してきたら殲滅OK！ では、行つてくださいー！」

「ハッ！」

うんうん。素直だね。

えーっと。ご主人様褒めてくれるかな……。怒られるかも……。ぐすん。

## トリスティン本拠地ロサイス

何でこんなことになったんだろうな。

トリスティンに女王の反応がなかったので、後方本拠地ロサイスに向かった。

兵士はトリスティンで貴族と城の制圧に乗り出してもらっている。なので、リーンに蜘蛛型戦車500と、銃機隊500送ってもらった。

ここロサイスは後方本拠地だけあって、戻ってきた者たちがいるわけだよ。

竜などは全て撃ち落とされ、船も撃ち落としているので、此処からは逃げられないわけだ。

上空3キロ地点に浮いてるアルビオンからじゃ、レビテーションでもおりられないわけよ普通は。だから、全て此処に集まっているのだが。

最後尾に俺らの軍が居た訳ですし、つまり戻ってきてるってのは。

「ウイデイス様。掃射を開始致しますか？」

「いや、待て。だが、いつでも掃射出来るようにはしておけ」  
「ハッ」

最後の拠点を取り囲むようにしている俺の軍。

此処に残っていた戦える奴は、此処までで皆掃討した。

「やあ、こんにちわ皆さん方」

気軽にあいさつなんてしてみるけど、帰ってきたのは睨んでくる視線。

「ウイデイス……だよな？」

「他に誰に見えるんだ？ 才人」

此処に居るのは必然的にこれだ。水精霊騎士団と女王アンリエッタ、枢機卿。

他は殲滅した。

水精霊騎士団ってのは女王の近衛兵だ。つまり、守るわけでした。

「なんでお前がこんなことしてるっ!？」

才人マジギレ。

「んー、なんでって。この世界の貴族がさ。嫌いなんだ。ちなみに、ギーシュとか才人は嫌いじゃなかったけど。見逃しては………くれな、いよねー。わかります」

殺したくはないんだけどな。

「才人！ お前のフェニックス持ってきたぞ！」

水精靈騎士団がゼロ戦を持ってきた。逃がしてやったのになコイツら。

「わたくしの近衛騎士、サイト・シユバリエ・ド・ヒラガ！ 国を脅かすあの方を排除しなさい！ あの時の希望の光をもう一度！」

希望の光って俺がやった魔法か。  
今回使ったら絶望の光だぞ姫さん。

「……」

「どうしたのですかサイト？」

まあ、そうだろうな。

「才人、お前は俺に剣を向けるのか？」

「やめたほうがいいぜ相棒！ 剣でだってこの坊主にや勝てねーよ。おとなしくしたほうが身の為だぜ？ むしろ、俺が破壊されちまう」

デルフリンガーだけがこの状況を分かっているようだ。

才人は黙ったまま……仕方ないな！。

俺はアルテマウエポンを影の中に落とす。

そして、才人の方に近づく。

「く、来るな！ 今の俺はお前だって切れる！」  
「知ってるよ」

それでも俺は歩く。

「今です！」

アンリエッタがトライアングルのウィンディ・アイシクルを撃ってくる。

俺はそれを指さし、ツーッと指を横に振る。

それだけ、氷の矢は全てあさつての方向に飛んでゆく。

「せ、先住魔法っ!？」

水精霊騎士隊からも恐怖の声上がる。

それを無視し、才人の一歩前でとまる。

「来いよ才人。殺すんだろう?」

「なんでだよっ……なんでお前が裏切るんだよ!? 俺達友達じゃなかったのかよ!？」

「友達だ」

「は?」

「友達って言うのと、国は関係ないだろ? 国同士で争って。バカみたいだ。だから、俺は国を一つにまとめる。そして、貴族制度を撤廃する。貴族と平民の壁を排除する。貴族のお前にとっては平民なんてどうでもいいか?」

「違うっ! 確かにそれは俺の理想だ! だけど……けどっ!

今は俺もトリステイン貴族だ……」

「つまりだ。お前は平民の時は、貴族と平民はおかしいと言つて。貴族になったらそれを認めてるってことだ。なんて自分勝手。所詮お前もそうなのか?」

まあ、俺以上に自分勝手な奴はいないけどな。

「俺は……俺は……」



「だったら。証明してみる。フツ切つてやるよ」

俺は精霊を使い、才人の腕を操る。

才人がデルフリンガーを持った腕を振り上げる。

「お前、何を……」

「殺して見せる。才人」

「や……やめるウイデイス……やめ……」

俺はそのまま腕を操り、才人の腕を振り下げる。

「やめろろろろおおおおおおお!!」

ザシュッと錆びたデルフリンガーの刃が俺を肩口から両断する。

精霊の力によって、めり込むではなく、切り裂く。

鮮血が才人の顔に飛び散る。

俺はほほ笑み、そのまま、ドサリと倒れる。

ほほ笑んだのはなんとなくですよ？ だって、こつ言つシーンつてほほ笑まないか？

「あああああああああ!!!!」

ナノマシンで確認するが、才人は膝をついて頭を抱えて叫ぶ。

「サイト・シュバリエ・ド・ヒラガ！ よくやりましたね。勲章物ですよ！」

姫うつせえ。

「俺はこんなことするつもりはなかったんだっ!!」

「やっぱり才人は守るためと、敵しか無理だったか。それはそれで良いと思うけど。」

「頼むウイデイス！ 目を……目を開けてくれ！」

「え？ もう開けていいの？」

「……は？」

その場の全員がキョトンとしている。

俺の軍は眉すら動かさない。さすが、慣れてるな。

「あ、苦しくないかっ！？ だってお前は身体が」

切れてるのに違和感が在るから繋げるか。

「ほら治った」

「へ？ 何それ？」

「ひどいな……。まあ、説明しちゃうと。俺ってか俺の軍はフェニックスに愛されているんだ」

うんうん。適当に言ってみよう。

全員の視線がゼロ戦に移る。

「ゼロ戦？ お前達が使ってたのラプターだろ？」

「いやいや。フェニックスだって。来いフェニックス」

地面に炎で絵が描かれ、そこから大きな火の鳥が現れる。

「ほーら、フェニックス。だから、俺、俺達は死なない。だから、才人は殺してない。泣くなっつもの」

「お前……全く。だが、ウイデイスらしいな」

才人は俺らしいってことで何故か笑いやがった。とりあえず、いつまでも横になってるもアレなんで、俺はほこりを払って立ち上がる。

「で、才人はどうする？」

「そうだな……やっぱり納得出来ないかな。貴族と平民。もともと俺はそれをブツ壊したかったからな」

才人は羽織っていた黒いマント　貴族の証を捨てた。

「やっぱ、平等ってか共和制バンザイ！」

「あ、ちなみに、俺が王だから独裁制だ」

「感動して損した！」

感動してないだろがコイツ。

そこで、俺は女王に視線を移す。

「で、女王様はどうするんだ？　俺に刃向うか？」

「なんで、何で邪魔するんですか！？　わたくしはただ、ウェールズ様の仇をとりたかっただけなのにつ！」

うわー、泣き崩れたよ。

「アンリエッタ。俺はフェニックスに愛されてる。フェニックスとは何だ？」

「フェニックス……伝説の不死鳥……破壊と再生をつかさどる鳥……」

「ウェールズは死んだ。だが、フェニックスは再生を司る。これが

どういう意味かわかるか？」

「ウイデイスそれは……」

俺は才人に黙るように、口を閉じさせる。

「再生……できるのですか？」

「もちろんだ。但し、国を明け渡せ」

「それくらい」

「アンリエッタ女王陛下！」

枢機卿がアンリエッタの言葉を遮る。

「あなたは女王ですぞ！ 国を捨てると言うのですか！」

「しかし、この戦争だって、ウエールズ様の仇の為に」

「それを言っただけじゃありません！ あなたが……あなたがそうならば、わたしがこの国の王になります！」

アンリエッタに枢機卿は魔法を放つ。

至近距離からの魔法。

俺はその魔法をナノマシンに命令して不発させる。

「うん。邪魔だねアンタ。そんな野心が在る奴は生きていても使えない物にならないな。伝説のフェニックスに最期を与えてもらおうか？」

破壊と再生。破壊を。ヤレ」

俺の命令に、フェニックスは大きな真つ赤な炎を放つ。

それだけで、枢機卿は塵すら残らず消え去った。

「で、どうするよアンリエッタ。国を渡してくれるなら、ウエールズと一緒にうちの屋敷で保護するけど？ 毎日ウエールズと愛欲の

日々」

「え、え？ わたくしはそんな……キャッ」

うおい！ ミラみたいにくねくねしてるぞ。

「どうせ今頃はトリスティンはずちの軍に制圧されてる。お前を殺して国を乗っ取るか、お前に明け渡してもらうかどっちかだ。その場合、もれなくウェールズが付いてくる」

「ウイデイス……ゲームの景品みたいだな」

だって景品だし？

女王はこちらをキリッと見つめてきた。

「わたくしは！ トリスティンの女王をやめます！」

キリッとして宣言したぞコイツ！

「ただけ愛に飢えてたんだ……まあ、原作でもゾンビになったウェールズと一緒に国捨てたくらいだしな……」。

「だからっ！ 早くウェールズ様を！」

「あー、わかつたよ」

なんて野郎だ……。

『リーン。ウェールズこっちに転送してくれ』

『わかりましたー』

すぐに俺達の前にウェールズが転送される。

「あ、ああ。ウェールズ……様？ 本当にウェールズ様……？」

「アンリエッタか？ 我が麗しの従妹のアンリエッタか？」

アンリエッタは涙をぼろぼろと流し、走り出す。  
ガバっと二人は抱き合い。

「ウエールズ様ー！ 会いたかった！ わたくしがどれ程この時を待ったか！」

「アンリエッタ。僕もだよ。ああ、美しくなったねアンリエッタ」  
「ウエールズ様もかつこよく」

とりあえず此处でシャットアウト。  
うざすぎる。

「ウイデイス、これって詐欺じゃね？」

「いいんだよ。本人たち幸せそうだし？」

そこで、俺は水精霊騎士隊の方を向く。

「じゃ、今から水精霊騎士隊は解散！ トリスティンでの勲章も意味なし！」

「て、じゃあ俺平民か？」

「ああ。お前兵士に成ればいい。そうすれば、ラプター乗れるぞ？」

「一生ついていきます！」

わかりやすいよ才人さん。

さて、トリスティンは手に入ったし。

他の奴はどうなったかな？

31 各々の仕事（後書き）

次はジヨゼット編

一番頑張る！

### 32 ジョゼットの決意（前書き）

めぐり合う〜二人〜チュチュチュチュチュチュ

確か前に唐突に考えた遊び。

やり方 パーカーの首から出てる紐二本の先のまるい部分を恋人  
同士に見立てて、鳥がくちばしをつつつくようにぶつけ合う。

何の脈絡も無しにいきなり始めるのがベター。

運が良ければ爆笑されるb

絶対はやります！ 一発ネタですが。

普段からボケキャラじゃないとダメかも。



## 32 ジョゼットの決意

ジョゼットSide

どうしてだろう。

確かに数が多いって言われてたけど、コレはあんまりだ。

5万くらいいる。しかも、王都全体が戦場になってしまっている。

『第三混合部隊前進！ 前方に敵影300！ レールガンによる掃射後、中距離ミサイルで残存を殲滅！ 第六メイジ部隊！ 敵影1500！ 前方300メートルの足場を凍らせて！ 前線が転倒後、アースクエイクで殲滅！ 第五混合部隊！ 一度下がって、第1混合部隊が側面から攻撃！』

わたしの魔法ではお城ごと一気に殲滅は無理。

お兄ちゃんやミラさん、テファさん、シャルロットさんクラスでないと超広範囲魔法は無理。

リンさんの報告では、もうお兄ちゃん達は終わったらしい。

わたしに出来ることは、精霊魔法で敵の位置を見つけることくらい。

役に立ちませんね、わたし。

『銃器部隊3・4は、姿を消しますので、D-14ルートとK2  
5ルートを取って進撃！ PDAで味方の位置を常時確認すること  
！』

あとは、姿を消させることくらいしか出来ないか。

『レールガン収束、建物ごと焼き払い、その後、エレメンタルライ  
ス！ 閃光を合図に全軍進撃！』

銃器部隊が進む前に、建物ごと敵を駆逐する。

エレメンタルライスの閃光を合図に、蜘蛛型戦車を先頭に全軍が  
進撃する。

敵の後続や竜は、ラプター部隊の攻撃で壊滅と言ってもいい。

だから、前線の兵士くらいはわたしがやらないと……。

その時、大量の炎や氷がある場所で飛び交う。敵のメイジ部隊だ。  
生体反応の消失がPDAに表示されてゆく。数はどんどん増して  
ゆく。

『第4蜘蛛型戦車部隊は、第11銃器部隊より前に前進。後続のメ  
イジ部隊は銃器部隊を蘇生。同時に、第11銃器部隊を下がらせて  
！ 第4蜘蛛型戦車部隊はレールガンを収束し、遠距離、中距離、  
近距離攻撃を！』

しばらくして、生体反応は戻ってゆくが……。

完全に消滅してしまって戻らない兵士もいる。

わたしの判断ミスで仲間がどんどん消えてゆく。

そういえば、お兄ちゃんに持たされたお守りバック……。

肩にななめがけしている、普通の人より重たいバックの中を見つ

める。

張り紙がしてある　メテオストーン。出来るだけ、味方が居ないところを標的にして、使え？

これ以上減るのは嫌だし……。

お兄ちゃん……使うね。

『蜘蛛型戦車部隊以外は、近くのメイジ部隊の傍に、メイジ部隊は出来るだけ硬い壁を作ってください』

メテオストーンを握りしめ、座標を設定。

お願い……わたしたちを守って。

《メテオ》

1キロメートル程さきだろうか。上空から落ちてくる1000メートル程の隕石。

『全員リフレクストーンを使用して！　衝撃に備えて！』

慌てて自分もリフレクストーンを使用する。

確か、30分魔法反射効果。

隕石が落下し、大きな爆発が起きる。

1キロメートルは先なのに、熱風ではなく、炎がこちらに押し寄せ  
る。

リヤステイ軍の周りには黄色い円が現れ、炎をはじめ返している。  
メイジが張った壁は完全に崩壊しているようだ。

よかった……最初の指示だけだったらこちらが全滅していた。

蜘蛛型戦車はさすがと言つべきか、無傷である。

数分で熱風は収まり、そこには、大きなクレーターが出来ていた。周囲数キロが更地になっている。

火の精霊にお願いして、熱を引いてもらう。地面が溶けて溶岩になっていたからだ。

足元もボロボロになったけど。

そのお陰で周囲から敵は消え去っていた。

『全軍進撃！』

さすがお兄ちゃんの作ったマジックアイテム。

一回でストーンは壊れちゃったけど、すごい威力だ。

わたしは兵と一緒に進軍を開始する。

数時間後

あれからは進軍が楽になり、一気にお城前まで来れた。現在はお城の包囲を開始させている。

ふう……。あと少しかな。

せつかくお兄ちゃんにもらった白くてキレイな服が、結構汚れちゃってる。

明日天気になったら洗って干しておこうかな……。

「前方に一匹の竜が。排除しますか？」

兵士からの声に我に変える。危ない。今は戦争中だった。油断してたら え？

前方の竜の傍に降り立った金髪の人。

あれは “ 竜のお兄様 ” ？

「排除を開始します」

「待って！」

アレは敵なのだ。ならば何故わたしは止めたのだろう。

「ジョゼット、迎えに来たよ」

昔と変わらない優しい笑顔。わたしの大好きな笑顔で竜のお兄様が口を開く。

「竜の……お兄様？」

「ああ、ジュリオだよ」

「竜のお兄様！」

わたしは駆け出す！ 竜のお兄様が迎えに来てくれた！

「……どうしたんだい愛しのジョゼット？ 僕はずっと君に会いたかった。ずっと君を愛していたんだ」

わたしは途中でとまってしまった。足を動かそうにも動かない。

「ねえ、竜のお兄様」

「なんだい？」

「わたしは竜のお兄様と一緒にいっても虚無なんて使わないわ。絶対に」

竜のお兄様の目が一瞬細められる。

やっぱりそうなのかな、お兄ちゃん。

「……知っていたんだね？」

「知っていたわ。竜のお兄様がわたしを利用していたのも」

「……」

お兄ちゃんみたいにカマを掛けてみると、黙ってしまった。

「ジョゼット、君はこの世界を統べる素質があるんだ。始祖プリミル様に頂いた力が。僕の主の新教徒教皇と同じように……ね。僕と一緒に来ないか？ 僕ならば君を幸せにしてあげられる」

竜のお兄様はそう言ってほほ笑んだ。

「無理よ竜のお兄様。わたしは今 幸せだもの」

涙がこぼれる。これが竜のお兄様との決別。

利用されていたってわかるけれど、ずっとやさしかった竜のお兄様。

わたしの初恋の人。

「そうか……でも命令でね。無理やりにも連れて行かせてもらおうよ」

お兄様が腕を上げ、降ろす。

上空から竜の大群の声が聞こえてくる。

確か、お兄ちゃんの話だと幻獣を操る能力を持っているとか。

この人は無理やり操る。お兄ちゃんは竜は仕事仲間だと言っていた。

それに、精霊の気配がしないので、あれは韻竜ではないのだろう。

「さよなら。竜のお兄様。優しい夢をありがとう」

わたしは顔を上げ、兵士としてのわたしになる。

腕を高く掲げる。

『ラプター部隊！ 上空の竜を撃ち落とせ！』

命令を下し、一気に腕を振り下げる。

遠くから飛んできたラプター部隊が竜の横を通り過ぎる。

通り過ぎた後に、思い出したかのように竜は地面に次々と落下する。

ラプター部隊から放たれた誘導ミサイルが残った竜を追い、駆逐してゆく。

わずか一分程で全ての竜が墜ちる。

竜のお兄様はそれを見上げ、ため息をつく。

「ふう。君のその統率力。力。もったいないね。ロマリアに来ればトップになることだって夢じゃないのに」

「違うわ竜のお兄様。これは借り物。もし、わたしが竜のお兄様に抱きついていたら、後ろの兵はわたしごと竜のお兄様を殺していたでしょう」

これは事実。お兄ちゃんは裏切り者を許す程弱くはない。  
だけど、それでもわたしはお兄ちゃんについてゆく。

「そんなところに何故君が？　ロマリアならもつと幸せになれるはずだよ？」

「いいえ、竜のお兄様。それでもわたしは行きません。わたしを救ってくれたお兄ちゃんがいる此処にいます。わたしの幸せは此処。わたしには帰るべき“家族”がいるから。今が幸せなんです。わたしが初めて自分で決めて、掴んだ幸せだから。それに」

うまく笑えているだろうか。最後に竜のお兄様に向ける笑顔。

「わたしの幸せのお兄ちゃんが此処にはいるから」

わたしを見つめ、一瞬キョトンとしてから肩を下げる。

「はあ……。任務失敗かな。此処は分が悪いから引くとしよう。きつと、聖エイジス様は君を諦めないと思うけどね」

竜のお兄ちゃんはそう言って、竜に飛び乗った。

「ねえ、“貴方”」

「なんだいジヨゼット」

「わたしは変わったのよ？　だから」

わたしは腕を上げる。

「さようなら」



『全蜘蛛型戦車に告ぐ、撃てー！ー！ー！』

収束は完了している。

白い何条もの光が“あの人”と、背後のお城を貫いてゆく。

わたしは最後に涙を一つこぼし、顔を上げる。

「さようなら……“竜のお兄様”」

もうあの人は過去。涙なんて必要ない。

それに、わたしにはお兄ちゃんがいるもの。

「派手にやったなージヨゼット」

後ろから声が聞こえた。

よく通る、すき通るような声。

性格はお世辞にも良いとは言えないけれど、なんだかんだいって優しい人。

わたしの今の“お兄様”。そしてこれからもずっと一緒なお兄様。

わたしは背後を確認せずに、背後に走ってそのまま抱きつく。

顔を上げると、お兄ちゃんは苦笑していた。

いつものように優しく頭を撫でてくれる。

撫でられるのは大好き、竜のお兄様の時は無理に笑顔を作ったけれど、今は自分でもわかるくらい自然に笑顔になる。

「ねえ、お兄ちゃん。わたしは“過去”に出来たよ」

「ああ、俺はジヨゼットなら大丈夫だってわかってたよ」

わたしは苦笑してしまう。

ミラさんやテファさんに聞いていた。お兄ちゃんが、わたしが離れてしまいかもって不安におもっていたこと。

もし裏切ったらミラさんがわたしを殺すってことも。お兄ちゃんは絶対わたしを殺せないからって。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「さっき思ったんだけど、わたしもテファさんみたいに虚無の魔法使いたいな」

「んー、ジョセフは使い魔ごと反応消えたし、今はお前が虚無だな。帰ったら特訓だな」

「はいっ！」

虚無　伝説の系統。使えるようになればお兄ちゃんの役に立てるかもしれない。

それに、確かせ、性交が必要だとも。

「何赤くなつてんだジョゼット……」

「な、なんでもないですっ！」

優しげに頭を撫で続けてくれる。

「あ、そう言えばお城壊しちゃってごめんなさい」

わたしはお城を見上げてみるけど、背後の街までもめちやくちやだ。

もう使い物にはならないだろう。

「別にいいさ。ジョゼットは無事だったわけだし。どうせ、街自体

も全部作りかえるつもりだったし。解体する手間が省けた」

そう言って、苦笑していた。

戦争の前に、お城は役所として使ってたって言ってました。

わたしに気を使っているのでしょうか。

残虐で、残酷で、自分勝手。だけど、優しいお兄ちゃん。

そんなお兄ちゃんがわたしは大好きです。

### 32 ジョゼットの決意（後書き）

本当はもっと長く書こうと思ったんだけど、もうすぐお昼ですし、出かける用事があるんで。

すぐ帰ってきますが。

時差で日本何時かわかりませんが。

てかこれ、日記みたいになってるし！

### 33 家族会議

普通ではない家族会議

軍を各地に配備し、俺達は一度帰宅した。

大きな会議室で家族会議だ。

メンバーは、俺、ミラ、テファ、リーン、シャルロット、ジョゼット。

一応超大国の王族である。

皆ちっこいけど。140サント前後しかないし。

あと、何故かシャルロットの雰囲気が変わっていた。

目もパッチリと開いているので、ジョゼットと瓜二つだ。

眼鏡と髪の色と長さで判別。

眼鏡は視力矯正するとかで近々いらなくなるだろう。

なんでも、昔の自分に戻りたいとか。

「で、政治体系と法律はこの領と同じでいいとして、貴族制度はどうする？」

「そうですねー。はっきり言って、今いきなり廃止とかすると内乱  
確実ですね」

ミラがこんなことを言うとは……明日は隕石が降ってくる　む  
しるキタキタおやじが降ってくる。難しいフリだが、つまり

「ハレルヤって感じですね？」

「勝手に頭の覗くなりーン！」

油断も隙もねー。

まあ、何が言いたいかと言うと、全員教育プログラムは受けてい  
るので頭は良いはず……多分。脈絡ないけどね。

「とりあえず、ミラは意見言う前に煎餅食うな。バリボリうるさい」  
「仕事の疲れをとろうとしてるのに！」

別にそれはいいが、うるさすぎるのだ。

「お兄様、しかしですね。貴族と言うのはその国に決められた盟約  
の上で成っています。この国で決めた訳ではなく、“前”王が決め  
たものなので、関係ありません」

確かにリーンが言うことも事実だ。だがな……。

「それで廃止したとして、反発は必須だろう」

「そうですね。ならば、全員に意見を言ってもらいましょう。せつ  
かく“家族”全員集まっているのです。それが得策でしょう」

それもそうだ。意見も考え付かないようじゃ、王族としてやって  
いけないだろう。

「じゃ、ミラから右回りで。考えなくていいから、自分の思ってる

「こと率直にな」

全員がうなずく。

「では、わたしから。どつちでもいいです。以上」

「お前明日家系から外すから」

「わ、わかりましたよ！」

頬を膨らませているが、今はイラついた。

「そうですねー。貴族を廃止で反発。存続しても内部分裂。どつちが被害が少ないかと言うと、存続でしょうね。公爵は確実に廃止か降格がいいでしょね。一応集まってもらつて、試験を課してみるのはどうでしょうか？ 使えない貴族は、ただ貴族として胡坐をかいて何もしないだけで終わりますから。最低でも領地経営能力。民のおかげで生活出来ることをわかっている貴族ですね。選別後、教育プログラムを受けさせれば、かなりのものになるかと。それ以外は無能だけど納得いかなくて反発してくるって感じでしょう。それは制圧するしかないかと。最悪処刑でもいいと思います」

ふむふむ。理にかなっているな。

てか、最初から言えよコイツ。

「次テファ」

ミラが座り、テファが立ち上がる。

「わたしは廃止が良いと思いますね。どうせ、最終目標は廃止です。ただ、今魔法を消すと、混乱を招く、最悪うちの領以外は全て生活能力を失います。ですから、貴族には高給な部署を与えてみるのは

どうでしょう。ですが、高給はかなりの重要部署ですから、頭の中をのぞくのと、洗脳プログラム必須でしょう。例えば、発電所の所長などをやらせたとして、その人に悪意があれば、それだけで民の混乱が押し寄せます。街の機能だって止まってしまいうでしょう。問題としては、優秀な平民が居るのに、果たして使えない貴族を上置き意味があるのか。だったら全て排除してしまっても問題はありませんか。もともと、普通の国だったらまず貴族を排除するでしょう」

やはり、最初に従属するかと、頭を見るのは必要だな。

悪意があれば、最初から殺してしまうしかない。これは変えられないだろう。

処刑したとしても、元々民から貴族は疎まれている。さらに、前国に従属していた者たちだ。

処刑は自然の理である。

「次シャルロット」

シャルロットが立ち上がる。

よくしゃべるようになって、会話が楽になってうれしいな。

「次はわたしが発言致します。わたしはどちらでもないの。潰すわけでもなく、残すわけでもなく。別の方法を。現在の状況は、トリステイン貴族存命。アルビオン貴族無し。ガリア存命。ゲルマニア公爵数名。爵位はまだ剥奪してないわ。ですが、領地は一度全て没収しているの。だから、貴族として領地の所有権を全て与えるわけではなく、支役所を作って国の地方役所として、仲介してもらおうのがいいと思うの。王直属の政府機関を城が在ったところに建設したとして、一つで広大な土地を管理できると思えないの。それに、役所で全ての住民登録や、申し出や案件を預かると、民はそこまで移動する前に最悪亡くなるわ。それに、そこ一つで大量の書類を片



付けるのは不可能。土地に詳しい元貴族を支役所に置くのもいいとおもうわ」

市役所ではなく支役所ね。支部ってことだろう。  
こいつ地球の知識ないのによくやるな。

「ありがと。次ジョゼット」

「はいっ！」

バッと立ち上がった。

「やっぱり、貴族でなくしちゃうのが手っ取り早いかな。お兄ちゃんが王なわけだし、新しく貴族を任命しちゃうのが良いと思うの。その権限はお兄ちゃんにあるわけでしょ？ 有能なものは残す。貴族って言うより、お兄ちゃんの部下かな。手が届かない所を代わりにまとめて報告してもらおうとか。領のただだつて最近書類処理しきれないでしょ？ だから、必要な案件をまとめてもらつて、最後にお兄ちゃんが許可を出す。区域の案件を一度集めて、そこで処理して、最終審査をおにいちゃんがやる。問題は、やはり洗脳と頭を覗くことは必要。地方だからつて、お兄ちゃんの名前使えば何だつて出来ちゃうし、それじゃ貴族と変わらない。結局、悪意があるかないかが一番大事だと思うな」

結局行きつく先はそこだ。悪意があるかないかで随分変わってくる。

従属しないかするか。しないものは処刑しかないか。下手に残しておくで内部分裂などが起きて、アルビオンの二の舞だ。

「リーンは……未来の知識出てきそうだから遠慮しておくか。最後にまとめてくれ」

「はい」

俺は立ち上がる。

「とりあえず、皆の意見と俺のを混ぜて発言させてもらおう。結局のところ、敵意があるかないかは最初に調べる必要がある。重要な役職に置くことになるのは変わらないからな。あと、敵意が後から出る場合も考えて、私有軍は撤廃しよう。こちらで鍛えて、こちらのものを配属した方がいい。いざというときに、こちらから直接命令が通るうえに、反旗を翻したって軍が動かなければ何もできない。無人機を置いておけば、すぐさま鎮圧も出来るしな。支役所つてのは俺は賛成だ。実際、俺に来る書類が多すぎて無理。徹夜したって追いついていないわけだから、このままじゃ重要な案件が埋もれてしまい、あとあと問題になりかねない。だが、十中八九貴族は納得しないだろう。特権階級からの降格だからな。前の国を引きずって反発してくるなら、それはもう処刑するしかないだろう。貴族と平民と言う分け方を変えようって掲げてるのに、いつまでも貴族を楯にされるのは納得いかない。完全な実力主義に変えたい。貴族つて言うくらいなんだから能力は高いんだろう？　つて言いたくなるしな。権力だけを楯にするのは実力が無い奴の負け惜しみでしかない。実力がある奴はそれ相応の地位につかせることが出来るのだから。貴族と平民と言う呼び方はもうやめたい。全てが“国民”だ」

「でも、王はいますよね？」

「そりゃそうだ。此処で共和制になんてしたらどうなるかわからんまあ、出来たとしてもしないけどな」

俺はニヤリと笑ってやる。

「で、リーンは？」

「そうですねー、所々は違いますが、おおむね未来でも同じです。

重要な部分は未来ではナノマシンで生成した人型ヒューマノイドですが。あ、ちなみに機械ではないので、完全な人間ですよ？ 一方的に命令を受けるだけです。存在的にはお兄様達と変わりません」

んー、今の俺じゃそんな物作れる程ナノマシン操れない。

処理能力も高いし、頭もいい、反発は確実にしない。それが出来れば一番だけどな。

「じゃ、最後に俺が纏めた奴でいいか？」

全員を見回すと、頷いてくれる。

「じゃ、次の案件だが」

俺は、目の前に置いてあった書類を手に取る。

「学校の建設……か」

「はい。この領だけは結構前から建てていたので、平民の教育レベルは高いですが。他の平民は文字すら読み書き出来ません。今の状態だと全く使い物になりませんよ」

そうだな。使い物にならん。

「税金が一割に消費税つけるか？」

リン以外は何だかわからないようだが。

「ですね。税金をどんどん上げるより、とれるところから取った方がいいでしょう。その収入で国立の物を建てましょうか。いまのところ、元各国を整備するのに、税金だけでなく、ミラグループの資

産も使っていますから。ミラグループは国の物ではありません。お兄様の私有団体です。国庫とは分けた方がいいでしょう」

「だろうな。俺はメモ用紙とペンを手に取る。」

「んー、じゃあまず国立の学校。私立はあとで誰かが建てるだろう。出来るだけ最初は働き手がほしいから……。5歳から16歳までの間義務教育にするか？」

「ですね。教育プログラムの劣化版なら、それだけあれば十分大学卒業程度の知識は付けられます」

教育プログラム 様は詰め込みだ。俺達が受けた教育プログラムはそりゃひどい。

朝から晩までひたすら勉強。エリクサーが無かったら勉強死確定だった。しかも、未来の技術まで頭に詰め込まれる。さらに、実技が各種操縦や操作、作成まで入っている。蜘蛛型戦車の制作方法まで入ってるんだからそのアホさがわかるだろう。

レールガンやナノマシンの構造などまでだ。

しかも常時オートヘイスト。三倍程度まで速度あげての勉強。疲労感が半端ない。

劣化版なら教育だけに成るのかな？

「一期生から十期生まで、最後の一年は好きな物やらせて、その時作ったものとかで能力に応じて振り分けかな？」

「ですねー」

「じゃ、次は……医療機関」

医療機関もこの領にしかないな。

「エリクサーや万能薬では、最終的に人口が増えすぎて成り立たなくなります。本来の医療技術で治せるものは治しましょう。癌が80%で治るくらいまでの技術が良いですね。未来でも医療機関のレベル制限がありますから」

皮肉だな。地球ではどうすれば医療技術が高くなるかってことで研究してるのに。こっちは高くなりすぎて、制限しないと人口過多で世界が回らなくなるとは。

「んじゃ、それで頼む。各地域に一つあればいいだろう。最初だけ万能薬とエリクサー使ってやってくれ、無料で。薬品名は言わないで、最初だけって説明してから。言いわけは秘薬なので数が確保できない。最初だけは俺の配慮とか適当に。怪我人は仕事も出来ないし、こうすれば支持率も稼げる。だが、絶対に持ち帰らせるな」  
「そのようにしておきます」

もうリーンと俺しか話してない。他はお菓子食べて雑談してるし。

「次は……何でコレ一番初めに来なかったんだよ！ 王国の名前」  
全員がバつと顔を上げる。

「…………ハルケギニア！」「…………」  
「いきなり世界の名前かよ！？」

俺はミラにしようかと思ってたぞ！？

「統一してないのに俺の名前がウィデイス・ハルケギニア王になるぞ…………」

「わたしはミラ・ハルケギニアですね」

「テファ・ハルケギニア」

「シャルロット・ハルケギニア」

「ジョゼット・ハルケギニア」

口々に決まったかのように名前を言いだす。

「……「良い！」「……」

「よくねーだろ！？」

「いえ、大丈夫だと思います」

リーンが軽く考えるようなポーズをしながら言う。

「例えば、今此処でミラ王国としたら、永久にそのままでしょう。

あたらしく国を落としても、吸収するのですから名前は変えられませんが。それに、国立系の名前全て変えないといけません。書類もです。かなりの無駄金ですね。それに、民も混乱するでしょう。それだったらいつそ、今は大きすぎる名前ですが、それで良いと思いません」

ハルケギニア この世界全ての名前。そして、未来の俺の名前。

今決めるならば、これから変えることもしないでいい。否、此処から始めるわけだ。

統一世界ハルケギニア王国を。

悪くはない……か。

「よし！ 建国式は一週間後からだ。そこで発表しよう。我が国の名前、そして領土を。全員の王族の名前もな」

「……「はいっ！」「……」

実は、この大陸はあまり大きくはないのだ。

東方まで全て合わせても日本程度。

そして、俺はこのハルケギニアの他の場所も開拓を進めている。日本以外の全てが我が領土みたいなものだ。他の場所は幻獣や、みたこともない生物がたくさんいたが。人間は居なかった。亜人すらもいなかった。その代わり、凶悪な生物がたくさんいた。

そこに、無人蜘蛛型戦車を大量に置いて駆逐してもらっている。うちの兵器は大体が永久機関。

動力をかなり省エネ設計にし、動くたびに自家発電する。

レールガンはナノマシンなので、弾もなにもいらなから楽だ。

レールガンを装備、更に電磁砲を数門装備の蜘蛛型戦車は永久に動き続ける。

固定化の魔法でほぼ整備いらずなのがうれしい。

「さて、次々と、えーっと。後は街の細かな問題点か。これはうちの職人を各地に回すしかないか。元各国に首都っぽいのを作るかな。イメージはうちの領の首都。後、うちもそうだが生産系を別の場所に移そう。一応此処が最大の首都に成るようにしたい」

「わかりました。最初は、ミラグループの資金かなり食いつぶしますが？」

「後で帰ってくるならいいだろう。国の負債として記入しておけ。将来ミラグループに戻せばそれで大丈夫だ」

「わかりました」

さて。建国前はこれくらいでいいかな。

俺はジヨゼットに視線を移す。

「ジヨゼット。お前が付けてる十字架のチヨークの意味って知ってるか？」

ジョゼットは首に付けられた十字架を弄びながら、首を傾げる。

「これは、修道院で絶対にはずしちゃいけないって言われてたの。でも、もういいのかな？」

そう言っつて、ゆっくりとジョゼットは十字架を外す。まさしく戒めである十字架を。

外すと、ジョゼットの顔の造形と髪の色が変わってゆく。顔はシャルロットと瓜二つに。髪もシャルロットと全く同じ。声はもともと似てるんだからもうなんていうか……。

全員が驚いているが、ジョゼットはわけがわからなそうだ。

「リーン。鏡渡してやれ」

「はい」

リーンが転送させた鏡を、ジョゼットの前に突き付けてやる。

「え？ え？ シャルロットちゃん？」

「まあ、そう言っつわけだ。その十字架は、ジョゼットを利用しようとして、ガリア王族ってバレないようにするための戒めの鎖。それが本場の姿。つまり お前とシャルロットが姉妹だったんだな」

ジョゼットは凍りついたように固まるが、シャルロットは俺が言っつていたから知っつていた。

「大丈夫よ、ジョゼット。今更姉となんて呼ばなくていいから。わたしのせいであなは捨てられたの……」

シャルロットは悲しそうに微笑する。

ジョゼットは固まっつていたが、やがて。



「それは違うわ。確かにわたしは双子の妹で生まれたから捨てられた。でも、それはシャルロットのせいではないでしょう？　シャルロットのつらい過去も聞いているもの。お互いつらかったのよ。だから呼ばせて、シャルロットお姉さま」

シャルロットは無表情で涙をぼろぼろと流していた。自分に妹がいると知ったのも最近なのに、それでも涙を流していた。

「大丈夫よお姉さま。これからはずっといつしょ」

「ありがとう。ありがとうジョゼット」

「あ、でもね。お姉さまはいいのだけど、家族を許したわけではないの。わたしが家族と認めたのは、このハルケギニア王家の人だけだから、お姉さまはもともお姉さまなのよ？」

なんか、姉妹立場逆転してるけど……。ジョゼットがシャルロットの頭撫でてるし。

「でも、今更オルレイン侯爵夫人を、お母様とは呼べません。シャルロットはお姉さまと呼べますが、家族なので。わたしは、家族以外は家族とは思っていません。お兄ちゃんも一人です。お姉ちゃんはずりいますか……」

「リーンが妹？」

「ミラちゃんが妹」

「何故っ!?!」

ミラが、がばつと復活した。

「んー」

ジヨゼットは唇に人差し指を当てて考える。

「仕事もしないで、いつも遊んでるから？」

「ひどいっ」

「その通りだな」

「ご主人様までっ!？」

いや。だって、その通りだし。ミラより仕事もちゃんとやってるジヨゼットが、我儘な妹ってミラを思ってもなんら不思議ではない。それよりも!

「あー、取り込み中悪いがな。はっきり言ってお前らの見わけが俺達にはつかない」

全員がこくこくとうなずく。

「一卵性の双子とかまじ見分けつかない。身長も同じ。顔も同じ。髪の色も同じ。声も同じ。しかもだ、シャルロットは視力矯正して髪長さも伸ばすって言ってるし。無理だ」

うんうんとうなずく。

「それなら、こつすればいいのよ」

ジヨゼットは十字架をもう一度付け、姿を変える。

「わたしは別にどっちでもいいもの。見た目が変わっても、中身は同じなのですから」

「んー。それでもいいんだけど。こつ言う物がある」

俺は一つの箱を取り出した。装飾がされた茶色い箱。箱を開くと、大きな宝石が着いた一つのネックレスが入っている。

「これはアルビオン王宮の宝物庫にあったんだけどな。髪の色だけがどんな色からでも銀髪に変わる。見た目も、十字架じゃ戒めつぽいが、これなら飾りとして使えるだろ？ それに、変えた顔より、今の顔の方が俺は好きだ」

大きな透明な宝石。透明なものには理由があるのだが。

「これに変えないか？」

「いいの？ 高そうなのに」

「ああ。これはジョゼットの為のネックレスだからな」

パアアッと顔を輝かせてチヨークを外し、後ろを向く。

「つけてもらっていいかしら？」

「もちろんですともお姫様」

俺はくすりと笑って、背後からネックレスを付けてやる。

すぐに髪の色が銀髪になり、代わりに宝石が深い青色になる。

「それは、髪の色素を付けている間だけ宝石内に取り込める。だから、髪の色によって宝石の色が変わる。着けた人によって宝石の美しさも違ってくるんだ」

「キレイ……」

ぼーっとそのネックレスの宝石を、ジョゼットは見つめる。

「それがキレイだと思うなら、ジョゼットの髪の色がキレイなんだ

る。それはジョゼットの髪の色に宝石なんだから」

俺の方をじっと見つめ、笑顔になる。

「ありがとうございます。大切にしますね」

「ああ、まあこっちの都合で悪いんだけどな。見わけがつかないも  
困るし」

「大丈夫。髪の色だって昔から銀髪だったもの。逆に蒼だと誰だかわからないわ」

まあ、そう言ってくれるならそれでいい。

さて、そろそろ解散を

「ご主人様！」

いきなりガバっと立ち上がってミラが詰め寄ってきた。  
真剣な表情だ。何か問題点でもあったのか……？

「終わったので約束の性交を！」

一気に気が抜けた……。

リーン以外顔真っ赤になったし……。

「今日は疲れてるだろ？」

「ナノマシンだから疲れることないんですが？」

そりゃそうだが……精神的には疲れることはあるんだが？

「明日な」

「約束ですからね！」

「そんな急がなくてもいい気がするけどな……なんせ寿命は一生。年齢も変わらないだろ？」

「一番がいいんです！」

「あー、わかつたわかつた」

別に何番でもいいだろうが……。

普通、一番とか何番とか男のほうに気がしないか？

男は何番だろうと変わらないだろうし。

女なんてすぐバレる。

あ……コイツら激しい運動してるけど、ナノマシンだから毎回処女膜復活するんだった。

「てー、わけで今日は解散！ 風呂入って寝ろ！ 以上！」

俺は早く風呂に入って寝たかった。久々に精神的に疲れたわ。

## 深夜

なんとなく面白い展開になった。

「で？ テファは何故此処に？」  
「……………」

うん。まあ、わかるけどね。

そんな顔真つ赤にして、バスローブしか着てなかったらな。

「い、いいでひゅ……………」か

噛むなよ……………」。

「んー。これが未来でミラが言ってた夜這いって奴なのか」

「えーっと……………。やっぱりわたしも一番が良いかな……………」と？」

「疑問形か。いやでも」

これはこれで面白い。知った時のミラの反応が面白そうだし！

「いいぞ？ まあ、どうせお前ともやらないといけなかったし」

俺と一緒にしてくるとしたら、ジヨゼットをナノマシン化する  
のは必要。

だが、ジヨゼットを先にやると、ナノマシンが馴染むまでの一日  
の間に殺されかねない。

「よ、よろしくおねがいします！」

テファがぺこぺことお辞儀をし、飛び込んできた。

てかアホかつ！？

「いてー！ なんで頭突きすんだよ！？」

「すみませんすみません！ 何すればいいかわからなかったんです！」

「じゃあなんでバスローブ来てるんだよ！？ 髪もまだ濡れてるし」「そ、それはリーンちゃんがごうしろって。あとは兄さんがやってくれるって」

「リーン……計画犯だな。ミラの野望はリーンによって防がれる……か。」

「まあ、いいよ。楽しんでる。任せとけ」

「よ、よろしくおねがいます」

顔を真っ赤にして、上目づかいでこちらを見つめてくるテファのバスローブをゆっくりと取り除く。

「あ……」

意識はしていないだろう、テファの口から声が漏れる。嫌がってはいないようだ。

それにしても、久々だな……。

俺も服を脱いでゆく、と言っても、最初から下着くらいしか付けていなかったが。

テファは俺の物を見つめ、少し驚く。

「や、やっぱり大きいですね……。リーンちゃんの話だとわたしに？」

自分の秘所を見つめ、少し青ざめる。

「だ、大丈夫ですか？ 全部は無理そうですね……が」

俺は苦笑する。

「大丈夫だ。安心して言いからな」

ゆっくりと髪をすいてやると、気持ちよさそうに目を細める。  
指をテファの顎に添え、こちらを向かせる。そしてゆっくりと



書室

案の定面白いことになった。

「わたしは芋虫わたしは芋虫わたしは芋虫……」

部屋の隅っこで膝を抱えてぶつぶつと呟くミラ。

まあ、何故バレたかって言うと、テファが朝から妙につきつきしていたのだ。

ナノマシンで痛みなどほほないに等しいから元気だ。  
そこで、ミラが理由を聞くと、普通に言った。

それからミラはあんなだ。

「ミラちゃんどうしたんでしょっつね？」

お前のせいだぞテファ。

寝ていたらナノマシンで感知など出来ない。  
言わなきゃ絶対にばれないのだが、テファが言ったからな。

「ミラ。うるさい……」

ミラはゆっくりとこちらを向く。

もつ目を真っ赤にして泣き腫らしている。

今だって涙がぼろぼろと瞳から零れている。

そこまで一番が良かったのか……。

「ご主人様……。何故わたしを最初にしてくれなかったのですか  
……ずっとご主人様と一緒に居たわたしを……ぐすっ」

確かに一番最初からいるのはコイツだな。

なんか、面白そうだったからとか言えない。

「わたしは芋虫……蝶に成れなかった出来そこない……ふっ……」

なんか危ない方向に走りそうだ。

仕方ないか……。。

俺はミラを風で手元に引き寄せ、お姫様だっこをする。

「テファ、残りの書類を頼む」

キッとミラはテファを睨みつける。

「夜這いお化け胸には仕事がお似合いです!」

もう完璧に敵とみなしている。朝からテファ何回も殺してたしな……。  
これがジヨゼットだったら真剣に死んでる。

はあ……。俺はミラを連れて部屋を出る。

## 書室

「ふんふん　ご主人様、好きです。好きすぎ、愛しています。」

これはこれでウザイ。

さっきから首に腕をまわしてへばりついている。

俺は書類処理してるのにうざったすぎる。

建国までは書類が忙しいのだ。ハッキリ言って邪魔すぎる。  
芋虫の方がマシだった。

「邪魔だミラ。離れろ」

「嫌ですー、一生離れません　ずーっとご主人様と一緒にですっ」

「うぜー……」。

殺しても死なないし、閉じ込めても破って出てくるし。なんて強  
かなウイルスなんだらう。

しかも言いふらすし。

屋敷中に流れたぞ。しかも自分が一番とか嘘の情報まで。

「あ、そだジョゼット」

「はい？」

隣で同じく書類を片付けていたジョゼットが顔を上げる。

ミラだけだ、遊んでるの。

「えーっと、お前はガリアの虚無だから土のルビーか」

俺は影の中から茶色いルビーのついた指輪を取り出す。

なんでルビーなのに赤くないんだらうな。

更に、始祖の秘宝を取り出す。

「この指輪付けて、始祖の秘宝使えば虚無使えるから」

「本当ですかっ!？」

パアッと明るくなって、指輪をはめて秘宝をいじくりだすジョゼ  
ット。

「ご主人様へキスしてください」  
「黙れミラ。うるせーよ」

粘着菌だこいつは。

しばらくして、ジョゼットは魔法を覚えたっぽい。顔をあげて、目をキラキラさせている。

「これで、魔法が！」

「あーテファ。ジョゼットの精神力でどれくらい使える？」

此処は先輩のテファの出番だろう。

ジョゼットどっかに突入して、魔法使ってぶっ倒れて殺されそうだし。

「んー。ジョゼットちゃんは精神力がスクエアメイジの数十倍くらいあるんですが……。エクスプローション二発が限界かな？ 二発目は威力もあまり出ないかも」

一気にションボリするジョゼット。

魔法二発で終了。なんて消費がバカでかいんだ。

エレメンタルラーズの方が数十倍燃費良いぞ。

バツと顔を上げるジョゼット。

「お兄ちゃん」

「あ？」

「テファさんはたくさん撃てますよね？」

「ああ」

「何ですか？」

「ナノマシン化したからかな……」

うんうんとうなずく。

「わたしはお兄ちゃんの役に立ちたいの」

じーっと見つめてくる。

「言ってる意味わかってる？」

確かに家族にだけは教えてある。

ナノマシンの秘密を。

だが、修道院で耳年増になってしまったジヨゼットは、テファと違って知っているはずだが。

「お兄ちゃんなら……いいよ？」

上目づかいでチラチラとこちらを見てくる。

頬が真っ赤になっているが。

「ダメです!」

ミラが乱入してくる……。

「ご主人様とわたしは愛しあってるんです! 渡しません!」

「うるさいミラ」

「わたしは遊びだったんですかっ!？」

「遊びだった」

「ひどいっ!？」

涙を流しながらうなだれるミラ……。  
マジで悲しんでるのかコイツ……。

「まあ、またやってやるからあんまうるさくするな。煩わしくなる」

カップルが分かれる原因ベスト10に入りそうな行動、平気でしてるからなコイツ。

愛が重い。

「うーん……一日で三人か……。しかも全員家族」

「血は繋がってませんけど？」

まあ、ミラの言うことも尤もだけだな。

そこで、俺の袖が引かれる。

「どうしたシャルロット？」

「一人だけ仲間はずれは……ヤッ」

おお！ こいつも随分変わったな。頬を染めながらプイッと横を向いて言われた。

前の無表情ではない。

「双子……いつしょ」

「なんかすごい厭らしく感じるな……その言い方」

「お姉様と初めての共同作業ですねー」

「共同作業だが、共同するものが微妙だが？」

もう色々ダメな気がする。年齢はいいのだが、見た目的に。あと、家族ってこととか。更に双子一緒とか。

「とりあえず、お前ら二人は今日の夜にでも部屋に來い」

「わたしと毎日愛に溺れる約束はっ!？」

「一人でプールにでも入って溺れてろ」

そんな約束してないし。

都合の良いように事実を捏造するなミラ……。

「ってーわけで書類終わらせるぞ。4人でやっても終わらねーよ。

ミラが邪魔だ出てけ」

「わたしは此処に居るだけで皆幸」

「邪魔」

「邪魔です」

「うるさいわ」

「です」

「……ヒドイ」

ミラはうなだれて自分の机に座る。

「わかりましたよー……やりますよー、やればいいのでしょー」

どうやらミラもやる気を出してくれたようだ。

しばらくは書類をめくる音と、ペンのを動かす音だけが部屋を支配する。

「はるか昔 この大陸がハルゲギニアと呼ばれ始める前。世界に大きな災害が存在した。この災害は繰り返される。災害の元凶はある生物。全ての存在を操る『終焉の一』と呼ばれた存在」



なんか何かに取りつかれたようにミラが喋りだした。  
気持ち悪いので無視っと。

「それまで、この世界には70億の人類が住んでいた。しかし、終焉の一は、これらを排除しにかかった。時には嵐で、時には津波、地震で。ありとあらゆる災害を操れる終焉の一。その時代に生きていた者は言う『あれこそが世界の終焉だと。地獄よりも深い地獄だ』と。古代文明を生きる人々は考えた。何とかしてあれを倒さねば……と。そして、人類の99%以上が災害により死滅した頃、それは完成した。これで我々は救われるのだと。ただ、人々は知らなかった。終焉の一がどんなものを、どれほどのものかを。挑むと決めてから人類が初めて見た終焉の一。兵器を創る前に知っておくべきだった。これを人々は一生後悔するだろう……。初めて見た終焉の一。それは黒い塊だった。当然、人々はその中に何かが居ると思っただろう。そこで、古代兵器による一斉掃射を開始したのだ。全ての兵器が使い物にならなくなる程続けて行われる攻撃。だが、それほどの攻撃を終えても、黒い塊は変わらずにそこにあった。だが、人々が攻撃していたのは塊ではなく、その中にあるものだ。中では死んでいるだろうと思った。なぜならば、災害の一切がやんでいたのだから。だが、次の瞬間　世界が震えた。地が空が海が、ありとあらゆるものが脈打った。まるで、全てが心臓に成ったような。人々は理解した　アレハシンデハイナイ。そして、遂に人類はその姿を見ることになる。黒い塊が波打ち、そこから這い出るものを。全身が怖気立つ。誰もが理解した。我々では勝てないと。中から出てきたものを見れば、一目でわかる。それは、人類。いや、生物ならだれもが知っているものだ。そして、敵わないと思ってしまう。なぜならそれは　」

ミラは一つ息をつき、紅茶を飲む。  
そして、続ける。



もうミラもびくびくだ。

血走った目を向けられて、半泣きのミラ。

「てか、なげーよ！ 生物なら敵わないと思い、知ってるものってなんだよ!？」

「えーっと。それが思いつかないのでボツにしようかなと……」

「じゃ。お前それが仕事な。思いつくまでご飯抜き」

「理不尽すぎますよ!？」

いやいや。気になるだろ!？」

そんなこんなで平和な一日は過ぎて行った。

ちなみに、ミラが夜までかかって思いついたのがゴキブリだった。  
一気にギャグ臭くなったのは言うまでもない。

34 特別編でお送りします。本編だけどね。(前書き)

ものすごくハイテンションなお話。

言うつか、僕がハイテンションで書いてます！

僕は寝転がって書いているのですが、従妹が隣で寝てるんですよ。

僕の従妹じゃないです。友人の従妹です。つまり、金髪幼女なわけです。

ハイテンションにもなります！

そんな勢いでお送りする小説。主人公も頭おかしくなってます。今回だけ。

34 特別編でお送りします。本編だけどね。

屋敷控室

「またもや、ミラは膝を抱えてブツブツと言っている。  
部屋の隅大好きだなアイツ？  
でも時間が無い！」

「ミラ。良いから服着とけ」  
「いやですー、わたしはまた芋虫になったんですー」

頬を膨らませてこちらをチラリとみてる。  
構ってほしいのか？

「だいたいですねー、ご主人様は勝手すぎます！　なんでわたしと  
はやってくれないのですか!?!」  
「お前だけじゃなくて他も一回だろ！」

「バツとしなれて姿勢を変えた。  
器用だな……、漫画にしたらおよよって効果音着きそうな恰好だ。」

「あれですか……わたしが子供を墮ろしたから具合が？ だって、ご主人様が墮ろせつ」  
「適当な捏造すんな！ それより建国パレード間に合わなくなるんだつつの！」  
「いーですよ。いーですよ。わたしは芋虫のまましておれて蚕のように黄色くなって死にますから」  
「羽化しても蛾にしかねないだろがっ！？」  
「わたしは蛾だって言いたいんですかっ！？」

あー、もう嫌だコイツ！ なんでこんな性格ねじ曲がったんだよ！でも、最初は素直だった。そこからは俺がずつといっしょよ。人格が出来始める期間俺と居たってことは……俺がこっしたのか！？

俺は頭を抱えて唸る。

「はあ……わかったつつの！ 建国式終わったらするから早くしろ！」

バっとミラは立ち上がった。

「早く準備ですっ！ 皆遅いです！」  
「全員終わってんだよ！ お前だけだ！」

なんて適当な性格してるんだコイツは！  
これで本当に頭良いのかと思ってしまう。  
マルチタスク出来るわけだから、数千桁の暗算でも瞬時にやれる能力はあるだろうけどさ……。

「ご主人様、この服胸が大きすぎますか？」

「それ、テファのだぞ？」

沈黙した後、フフフと気色悪く笑い始めた。

「つまり勝負は既に始まっているとっ！」

「何のだよ！ いいから着換える！ 布詰めてんじゃねーよ！ 不自然だろそれ！？ 上からはみ出てるっつの！」

疲れるよ……。多分コイツといると一番疲れる。

「あ、ご主人様、いつもみたいにパンツ貸して下さい！」

「俺に何を求めているんだお前」

「あ、ありがとうございます」

「そこ使用人なんで俺の持ってたんだよ！？」

俺王族だよな？ なんで使用人にまで舐められてるんだよ。

つまり、俺がなめられないようにすればいいと？

「おい！ その使用人！ パンツよこせ！」

「え？」

驚いたように使用人が一瞬戸惑い……。いそいそと脱ぎ始める。

「どろぞろ……」

消え入るような声で俺に渡して。

「わああああああん！ 辱められた！」

泣きながら走って出て行った。

「何でこんな扱いだよ俺！ おいテメーラなんでそんな目向けてくるんだよ!？」

「ご主人様……我慢できなくなっちゃった、むごあつ!？」

「もうお前なんかと一生性交しねよボケー!！」

俺はミラの口に使用人のパンツを突っ込み、窓をぶち破って外に飛翔した。

## 屋敷の庭

さて、全員が白い服を着て、窓から飛翔して此処に集まった。

「では、今日はこれで出てもらいます」

「これは?？」

「エアライド」



まあわかるけどね。

それは、白い円になっており、中心が黒くなっている。なにやら機械っぽく中で発光しているが。

「ハンドルみたいなのは？」

「ナノマシンを意識して操ってください。王族専用です」

「王族専用ってかナノマシンじゃないと扱えないな」

「だからこそ、専用です。ついでに光速超えます」

「耐久度もナノマシン限定だな……」

なんてもん開発したんだコイツ……。

「てかさ、今日建国式だろ？　なんで当日出すんだよ？」

「朝から作り始めたので」

なんて開発速度コイツ！？

「はあ……相変わらずだなリーンも。王族になったのに」

「そんなかわいさ褒められたって困りますよー」

「どこの次元と繋がってんだテメー！？」

でも、なんか皆テンションは高いな。

緊張してるのか知らないが。

辺りを見回してみる。

ミラはペンギンと遊んで服をべちよべちよにしていた。

テファは白クマと遊んで爪で服が破れている。

シャルロットはナノマシンの性能試すために身体切っている。

ジヨゼットは虚無魔法の試し打ちでボロボロ。  
リーンは開発していたから、服がそもそも違う。

うん。微笑ましいくらいに緊張してない。てか死ね。

「全員今すぐ着替えてこい！ さもなければ死ね！ いや、殺す！」  
「死ね！？」

ビシッと俺は屋敷を指さす。てか、屋敷の割れた窓に投擲。

100メートルくらいあつて壁ごと突き破ったりしてるが気にしない。

あいつらを投げ送り、俺は円っぽいエアライド（仮）に乗ってみた。

えーっと、命令するように意識すればいいのか。

頭の中で浮かべと念じる。

「つておい！ なんでお前らまで浮かぶんだよ！？」

6つ全部浮かびやがった。

「とりあえずその5匹降りろっつもの」

5つが地面にパタンと降りた。

動物みたいだな。

「なんかこうレーザーとか出ないかな？ 出そうなUFO」

前の部分がパカリと開き、そこからレーザーが出た……。

そして木が消滅した……。

「何作ったんだリーン……」

「よくぞ聞いてくれましたー！」

隣にいきなりリーンが転移してきた。

「まず、円の外周に36個の射出口を作りました。それが、180度それぞれ回転します。そこから電磁砲が出ます！ただ、これは試作品なので、充電が必要ですね。全面がソーラーパネルになっているので、一応自家発電出来るのですが、電力が足りません。電磁砲が使いすぎなんです。浮遊自体はナノマシンを使っているので、システム構築さえ出来ていれば、動力源はいりません」

胸を張って説明してくれた。

「いやいや、お前これ王族用の乗り物じゃなかったのか……？」

「お前な……」

「お兄様の心配はわかります。ですが、ご安心を！横は180度ですが、縦には270度回転しますので、真上も真下も万全です！」

別に兵器としての心配してたわけではないぞ？

「ご主人様！素晴らしいです！直角に曲がれますねこれ！」

「いやいやミラ。それ、真横になって踏みしめてるみたいじゃん。

曲がれてるって言うか、無理やり曲がってるだろ？」

「そんな音速つばい速度で直角に曲がったら、ナノマシン以外圧力で潰れる。」

「リーンに頼んだこの服がナノマシンと未知の物質で出来てて助か

った。

まあ、最初は普通のだったから、あいつらぼろぼろにしたけど…。

今のだって、普通だったら燃え尽きてる。

なんだか質量保存の法則が別の意味をなしそうだ。

質量保存の法則　その情報を記憶し、物質を失っても元に戻る法則。

「ではー、わたしはエアライドの旅に出ます」

ミラがもすごい速さで飛び立っていく。

「墮ちろ」

「げふぁっ!?!」

数十メートルの高さから、ハンマーで撃ち落とされたようにミラは地面にめり込んだ。

「ひどい……」

「何処いくんだよ!?!　これから建国式だったの!　てかお前ら何やってんの?」

「「「「……」「」「」

全員が地面にめり込んでいた。

「マスター権限はお兄様だって忘れないでほしいのですが……」。どんなにこっちで操作しようと思っても、お兄様に命令されちゃったらナノマシンは言うこと聞いちゃうんですから……」

ああ、それで全部墜ちたのね。

「さーて、皆行くぞー。ホラまた汚れてるから早く着替えてこい！」  
「……」

うん。最近俺の理不尽“かも”しれない命令には、無言で返すことが確立しているようだ。  
ジト目つきだけだな。

## 建国式

建国式。流れとしては、パレード 上空での王族紹介。  
至る所にカメラが飛んでいて、浮遊ディスプレイも各地に飛びま  
くり。

スカートの中は不可視状態にしてあるらしい。  
下から見ると、本人なのに3D立体映像みたいだ。  
俺達は首都を屋敷方面にゆっくりと浮遊して移動している。

「こんにちわー、皆のワイルド思春期まつさかりです」

ミラ……お前わかってる？ 今建国パレードだぞ？

「こんちゃー、世界を股に掛ける飛行船！ ダンス山中からお送りいたします」

どうしよう……コイツら連れて来なければよかった。リンまでか。

はっちゃけるのはわかるけどさ？ もう適當すぎるだろう？

『ミラ様ーリン様ー！！』

ああ。わかっているようだからいい……か？

「あ、あの！ こんにちは！ テフェリングフィールドと申します。赤き鮮血所属です」

ペこぺことテファが頭を下げる。

はは、もうどうにでもなってくれ。

「シャルロット・ランスロット・モルドレット・ヴィンセント・ギヤラハット」

それ最初以外機体の名前だけだろっ！？

「ジョゼフィーヌ・ド・ボアルネと申します」

ナポレオンでも愛す気がこいつっ！？

『五人合わせて！ いっせーのせ』

もう色々台無しだよ……帰りたい。

『ミルクティー』

『うおおおおおおおおおおおお！！！』

お前らの宣言も観衆が興奮する理由もわからない！

「お兄様〜わかりませんか？ 今まで言った物は共通点があるんですよー？」

さも当然だとばかりにリーンがこちらを向く。

全員ミルクティーが好きとかか？ でも、機体名とかあるしな…

…。

「ミルクと紅茶でまろやかに」

全然わからない！ こいつらの考えがわからない！ てか、そんな打ち合わせするくらいなら準備早くしてほしかった！

「はい、ご主人様」

「え？」

「のどが渴いたかと思って……いりませんか？」

ミラが涙ぐんだような目でこちらを見つめてくる。

ああ、確かにのどが渴いたよ。お前らのせいだな。

ミルクティーってもしかしてこのための布石か？ なかなか憎い

演出だな。

「ああ。もらおうか。ついでに今魔法びんから注いでる液体は何だ？」

全然ミルクティーに見えないが。

「え？ 酢だけど？」

「飲める！ かっ！」

俺はそれを頭上に投げ出し、炎で燃やしつくす。

さすがにナノマシンだつて無理！

多分解されて吸収されるけど味覚はあるのだ。そんな素で飲みたくない調味料上位に入る飲み物じゃない！

「えーつと、ワカメ酒？」

「酉って部分しかあってねーだろポケツ！ もうヤダ！ パレードなんて中止だ糞やるー！」

俺は一生独裁者でいい！ 民を下僕のように扱ってやる！

「あ、待つてくださいい兄さん！ このミルクティーが！ 同じ“茶

”ですから牛乳とお茶を混ぜてみました」

「死ね糞野郎ども！」

俺は名前だけミルクティーを球体にして浮かせ、ミラの口に突っ込んだ！

「げほっ！？ ペっぺっ！ まずっ！？」

「テメーらが飲ませようとしたのがそれだ！」

「うあー、口の中に変なものが残ってます！ 助けてくださいー」

「はっはっは！ 助けてやろう我が娘よ！」



俺はアルテムウエポンを取り出し、ミラの首を切り裂く。  
落ちそうになった首を身体に乗っけてやると、すぐ元に戻る。  
鮮血がかなり下に墜ちてぎゃーぎゃー騒いでいるが。

「ひどいっ！一回死にました！　だったらわたしはそのお化け胸を切り裂きます！」

ミラのブレードがテファの胸に突き刺さり、鮮血が舞う。

「ミラちゃんひどいです！　胸は胸ですが、心臓突き刺しましたねっ！？」

「正義！」

ブイと指を二本立てて胸を張っているミラ。

「ふふふ。実はですね。毎回毎回胸のことばかり言われて嫌気がさしていたのです。いっそ小さな人達を殺せば残るのは大きな人だけ、つまり平等！　平等な幸せな世界へ！」

テファがブレードで、シャルロットとジョゼットの腕を切り裂く。腕はくるくると血を纏わせながら落ちてゆき、途中で霧散する。そのころには二人の腕は元通り。

「リーンの新開発のお披露目ですか！　電磁砲フアヤー！」

リーンのエアライドから発射された光が俺達の急所を全て貫く。無傷だが、血だけは下に落ちてゆく。

「バカかっ！　これ全国放送だぞ！？　どんな建国式だよっ！」

「皆の記憶に残る建国パーティーです！」

「トラウマとして残るわ！」

下の奴ら鮮血浴びまくってるし！

「仕方ありませんねー」

ミラは大きく息を吸い込み。

「みなさん！ 元気ですか〜！ それではさっそくいってみよ〜！ 1・2・3・ナース！」

「黙れミラ！ 日本文化に影響受けすぎてる！」

「食欲不振 睡眠不足 動悸に眩暈に神経衰弱 あくあっ!? いたひ……」

「黙れつつの！ 変な歌がはやったらどうすんだよ!?」

仕方ありませんねともう一度いい。

今度は聖母のように両手を胸の前で組み。ゆっくりと瞳を開く。

「世界は愛で満ちています。わたしはその愛をさらなる愛で包み込みましょう。そして……皆さまはいつか気づくのです……」

眼下の民衆は、その歌うような声を聞き、静かになる。

「愛とは血！ 鮮血こそ愛！ ご主人様の愛でわたしの処女を血染め いたっ!?」

「全国放送で何言っただお前!?」

『愛……そうかっ!?』

眼下で皆が叫びだした。

『愛とは血！ ストーカーして殴られた時に出た血は彼女の愛だったのかっ！？』

『あの時盗んだ下着についていた血は盗む俺への愛！？』

『彼が他の女の裸を見て、鼻から出した血はわたしへの愛！』

『結婚した時に彼が流した血涙は愛！』

『世界はこんなにも愛で満ち溢れていたのか！？』

『愛は世界を救う！』

口々に皆が叫びだした。

『愛！ 愛！ 愛！ 愛！ 血！ 鮮血！ 流血！ 出血！ 失血！ 冷血！』

『おい待てよ！ 血つまり！ ケツ！ 尻！ 愛とは尻なのではないか！』

『そうか！ 愛とは尻！ 尻が世界を救う！』

『尻！ 尻！ 尻！ 尻！ 尻！』

俺の中で何かがブチギレタ。

「はははははははは！！ 俺の国でテメーらみたいな屑が歩きまわるのは許させねエ！ 来い！ アニマ！！」

地面から八工取りクサの様な二枚の貝のようなものが現れ、それが開く。

中からは、鎖で縛られた凶悪なミイラのような怪物が現れ、耳をつんざくような悲鳴を上げる。

「ハハハハハハ！！ 殺せ！ 殺せアニマ！！ 我が覇道を阻む屑どもを食いつくせ！ ハハハハ！！」

くりぬいたような眼から、不可視の攻撃が放たれる。  
地面が爆発し、屑どもが身体を千切れさせて飛ぶ。

「テメーラの好きな血だぞ！ 愛だぞ！ ハハハツハ！ もっとだ  
！ もっと食いつくせ！！ 世界は我の物なり！！」

俺は狂ったように笑い続ける。

他の五人は狂った俺を震えながら見ていた。

俺はそちらに視線を移す。

「……ヒッ!?」「……」

「くくく！ お前らに俺の愛を教えてやるよ！」

俺はアルテマウエポンを構える。

「……ごめんなさいすみません調子になりました！」「……」

「おせーんだよ小娘共！ エース・オブ・ザ・ブリッツ」

一人一人に数十回連続で刻みつける。一発一発が必殺。  
完璧なオーバーキル。

再生が追い付かず身体が細切れに成ってゆく。

全員切り刻み、最後に影の中から光球を取り出し、蹴りつける。  
着弾点が大きな爆発を起こし、空に大きな光の花が生まれた。



5人がビクリと震える。

「「「「「ごめんなさいごめんなさいアレだけは」「」「」

ペコペコとその場に土下座する5人。

「シャルロット、ジョゼットは半年間給金無し。ミラ、テファ、リオンは一年無し。ついでにミラは一年お菓子なし」

「ひどいっ!」

「ああ?」

「ごめんなさい絶対食べません」

ミラが再度深く土下座。

なんだかんだ言つてコイツらは給金がかかり多い。

仕事量が半端ないのだから当たり前だが。

5人に言った分を考えれば、50万エキューなんて軽々超える。

と言うか、ナノマシンのおかげで、お金自体をうちが流しているのだ。

物価が上がりすぎないようにゆっくりとしか流してないが。金など、未開拓惑星に腐る程あり、そこから回収した金で金貨を作る。

「でもご主人様。貴族の反発がほとんどなくなりましたよ? 最終的にご主人様が使い魔30体出したのが全国放映されたので。従つてます」

まあそつだな。武力を見せ付けて従わせてるみたいになった。望まない事態ではあったが。

「と言うか怖いわ……。死なないってわかっててもアレは怖かった

の。夢にまで……」

シャルロットは思い出したのかぶるぶると震えている。

まあ、確かにあの時は俺もブチギレた。

何だよ『尻』って。どんな宗教作るつもりだったんだこいつら。

宗教は嫌いだ。あれは一種の洗脳である。うちの兵士は死なないうってわかってるから死に行くような場所でも平気で行って命を捨てるが。

宗教は命が有限にもかかわらず死に行く。

信じたところで何も変わることはない。結局、変わるも変わらないうも自分次第なのだ。

信じて何か変わるくらいなら、その前に変わっているだろう。

神は確かにいる。俺自身だって神だったわけなのだから。だが人が信じるような神ではない。

世界を無責任に作り、後は放置する。遊びで凶悪な化け物を入れて、世界を破壊する神だって見たことがある。神とは信じるものではない。打倒し、神の思惑を乗り越えてこそ未来を掴めるのだ。

運命とは最初は残酷に出来ているものだ。例えば、人間など最初は他の生物に全く刃がたたなかつただろう。にほくそこうなど、弱点でしかあり得ないのだから。結局脆弱な人間は、死ぬ運命を変えて、科学や魔法を発展させたわけだが。それは神の思惑を超えたってことだ。確かに進化して成ったと言うが、もし雷が落ちて火が上がりなかつたら？ その時代にジュラ紀の様な生物が居たら？ 火も使えず、一方的な捕食される側。脆弱な人間など、動物以下の生命力しかないのだから、真っ先に絶滅していた。

神なんて気まぐれ、そんなものだ。

「どうしたんですか？」

「ん？ ああ。ロマリアって国の宗教がな」

あそこは完全な宗教国家だ。

「確か、始祖ブリミルを神として崇める国家ですね。虚無の担い手が今の王とか」

「だなー。虚無とは始祖の血族。更に、力をも受け継いでるわけだろ？ だからあそこでは崇められる」

潜入させて、内部から潰すか……。

「テファ、シャルロット、ジョゼットも始祖の血筋だな。虚無はテファとジョゼット。まあ、血筋だけで言うと、オルレイン公夫人、カトレア、ウエールズ、アンリエッタもこの屋敷に居るな。虚無を殺していけば、何れ虚無になるやつらだ」

「始祖って伝説とか言いますが、そう考えるとわんさかいますね……」

「だなー」

残った虚無はルイズと聖エイジス。ルイズは俺の国で幽閉。エイジスだけか。あ、そういえば。

「ルイズってどうなった？」

「だいぶ落ち着いてますね。一応精神崩壊は治したらしいです。出そうと思えば権限でだせますが？」

うーん……。

あいつを出して指輪を渡すのは危険すぎる。

貴族の代名詞みたいな奴だからな。出てきたら貴族じゃありません。むしろ国ありません。

絶対ブチギレル。辺り構わず爆発させる。



「やっぱダメだな。統一して、魔法消し去ったら出せばいい。それまでは仕方ない。あいつの性格がいけない。どっちにしる犯罪者だし」

「ですねー。そう言えば、最近みませんけどルミアちゃんどうしたんですか？」

「は？ お前が城ごと消し去っただろ？」

「え？」

ミラの顔がみるみる青ざめてゆく。なんだかんだ言ってるミラとは仲が良かったからな。

「ってのは嘘で、全国おいしいものめぐり行くなって言ってたな。両親と兄はお前が殺したが」

「……悲しんでましたか？」

「ああ。まあどうなったか話してやるよ。あれはお前ら全員の処女奪った次の日だな。全員処女膜再生してるけどな」

「どづしたルミア？ こんな暗い部屋で」

真っ暗な部屋の中、ルミアはベットの上で膝を抱えていた。ぶるぶると震え、何かを怖がっているように。こちらを振り向かず、ルミアは問いかけてきた。

「……ウイデイス。父上と母上と兄上はどうなったのじゃ？」  
「死んだ」

俺はスパッと言いきった。思考時間ゼロだ。ミラがやったとは言わないが。

「そうか……ゲルマニアはどうなったのじゃ？ 残ってるのはわらわだけじゃが」  
「滅んだ」

またしてもスツパリ言った。

「トリステイン、アルビオン、ガリアのどこかに併合されたのかの？」

「その三つも滅んだ」

バットこちらを向き、俺の服を掴んだ。

「ならば！ ならばロマリアが攻めてきたのか！？」  
「責めたのはヴィ・リヤステイ軍。四力国を滅ぼしたのもヴィ・リヤステイ軍。そして出来たのがハルケギニア王国」

ずるずると俺の服から手を離し、顔を青ざめさせる。

「……なぜじゃ」

「あ？」

「なぜじゃ！　なぜお主が！　お主はゲルマニアの貴族じゃろ！？  
何故滅ぼした！？」

「勘違いするなよルミア」

俺は軽くルミアを突き飛ばす。

そのままルミアはベットに倒れこむ。

「俺が裏切ったんじゃない。ゲルマニアが俺を裏切ったんだ」

「嘘じゃ……。嘘じゃ！　父上はそんなことするはずないのじゃ！」  
「説明してやるうルミア」

俺はベットに腰を下ろす。

「トリステインとゲルマニアが同盟を組み、アルビオンに侵攻したのは知っているだろう？」

コクリとうなずく。

「俺達はその連合軍の最後尾に居た。連合軍は勝利まで後一步のところまでいった。その時、ゲルマニアが反乱を起こしたんだ。アルビオンに寝返った。そこで戦況は一変。だが、俺達は最後尾に居た。トリステインは俺達をゲルマニアだと思っている。攻撃をしかけてくるのは自然の理。俺達の後ろにはトリステインの本拠地。後ろにも下がれない。前にも行けない。攻撃はしかけられる。この状況でお前ならどうする？」

俺はルミアに視線をやった。

ルミアは俯いているが、

「……前か後ろを殲滅するしか生き残れないのう」

「そうだ。だが、後ろを倒しても、船が足りない。逃げられない。前からは敗戦と知り、逃げてくるトリステイン軍が追ってくる。そしたら袋叩きだ。追撃戦など勝敗はわかりきっている。だから、俺達は前を倒していった。だが、トリステイン軍に交じってゲルマニア軍まで俺たちに攻撃をしかけてきた。裏切ったのだから、報復されると思ったのだろう。だから潰した。そこで、俺達が許せると思うか？ 俺達を亡きものにしようとしたゲルマニアに。裏切ってもいないのに殺そうとしたトリステインに。攻撃をしかけてきたアルビンに！ 結果から言えば、俺達ははめられたようなものだ！ だから全ての国を潰した。更に、ガリアとも連携していたようで、途中でガリアが攻めてきた。だから、ガリアも潰した。そして俺が王として国を作った。なあ、ルミア。この領はどうだ」

「いい場所じゃ。皆民までも幸せそうじゃ」

「だからな、俺はこの世界全てをそうしたいんだ」

ルミアの涙を指でぬぐってやり、ほほ笑んでやる。

「だからルミア……お前はこの国で幸せにならないか？ 確かに前前の両親や兄は死んだ。だが、俺達が居るだろう？ お前を大切に思ってる俺達が。ルミアにも幸せになつてほしいと、俺は思う。こっちに来てからいつもルミアは笑顔だった。そんな笑顔を見て、俺は世界全てをそう変えたいと思ったんだ」

「……わらわの為にかの？」

「ああ」

俺はルミアを抱き寄せ、頭をなでてやる。

「なあ、ウイデイス」

「なんだ」

「父上の変わりに、わらわの父上になってくれんかの。やっぱり、さみしいのじゃ。父上や母上、兄上がいなくなったのじゃ」

じつとこちらを見つめてくるルミアにはほほ笑む。

「ああ。俺でよければなってやるよ」

「ありがとうなのじゃ……父上……」

ルミアは真っ赤になって、固まってしまった。

「どうした？」

「やっぱり恥ずかしいのう。ウイデイスはウイデイスでいいのじゃ」

そう言って、泣き腫らした眼ではほほ笑んでくる。

「そうか……」

目をつむり、ルミアをただ撫で続けた。

「なあ、ウイデイス」

「ん」

「父上は、わらわとウイデイスを婚約させようとわらわを送ったのじゃ」

「なんとなくわかっていたよ」

なんもなく王族が、長期間大事な娘をこちらに渡すはずもない。

あの父親はルミアに激甘だったからな。そのおかげで我儘に育ったが。

「そうか……でも、わらわは忘れておったのじゃ。此処に来てから楽しくてのう。新しい発見ばかりじゃった。で、今思い出したのじゃ」

「そうか」

「のう。わらわと婚約せぬか？」

「ブツ」

そうきたか！

だが、俺は情には流されないぞ。

「んー、でもお前ちっこいしな。13歳だろ？ 婚約は早いだろ？」

「わらわはこれでも大人のつもりなのだがのう。ミラと大して変わらないきがするのじゃが」

「いやー……。ミラよりだいぶちっこいぞ。ミラはあれでも140くらいはある。ルミアは130の方が近い。」

「魅力がないかのう」

チラチラとこちらをうかがってくるが。全くないと言ってやりたい。

「これでも教育プログラムも受けているのじゃが」

リン。ルミアにも受けさせたのか？

「領地経営か？」

「性教育じゃが」

「ぶほめ」

思わず拭いてしまった。

リーニアホかっ!?

確かにプログラムには基本教育として入っているが、なぜそこだけ抜き取って教える!?

「あと、ナノマシン構造」

待て待て、それ家族以外受けてないプログラムだぞ? てか、世界構造学でもあるのだ。機密中の機密だぞ。データだってナノマシンの未開領域にしかないはずだ。

「えーっと。それでナノマシンのことはわかったか?」

「そうじゃのう、難しすぎてほとんどわからなかったのじゃ」

そりゃそうだな。マルチタスクと絶対記憶能力持ちのナノマシンだからこそわかるのだ。構造が複雑すぎる。本にしたら、広辞苑数百万冊だろう。なにしろ、演算が半端ない。物に入り込んだナノマシンは性質も変化し、組み変えるだけでも相当難しい。一つの思考回路では確実に出来ないのだ。

「ナノマシン化だけは詳しく教えてもらったのじゃ」

おいリーン。ルミアをナノマシン化しろと言っことか?

「わらわだけ年を取るのじゃな」

「あー。使用人とかも年取るぞ? と言っか、家族以外は皆」

「わらわは家族ではないのかの? 父上となってくれと言ったのは嘘だったのかの?」

涙目でうるうるるところこちらを見つめてくる。

てか、父親の下り布石かー！　なんて賢いんだコイツ！

「えーっとそれで？」

「わ、わらわもナノマシンに」

「いや待てルミア。永遠の命とかめんどろだぞ？　死ねないし。俺達は死のうと思っても死ぬことすらできないからな」

うん。確実に面倒だ。

「わらわはのう。世界を見てみたいのじゃ。それはわらわが死ぬまでじゃ足りないのじゃ。母上が言っていたのじゃ。世界は美しいとだから、わらわはそれを見て回りたいのじゃ」

ルミアは真剣な瞳で、じっとこちらを見つめてきた。

「本気か？」

「あたりまえなのじゃ。こんなこと冗談で言うはずが無かるう」

仕方がないか……。

「あーわかったよ。ナノマシン以外とやったことないし、お前の身体だと痛いぞ？　確実に」

「だ、大丈夫なのじゃ。それくらい我慢するのじゃ」

てか、これ犯罪だな。俺の作った法律自分で破ってるんだが。てか、マジでこいつの身体大丈夫が不安。俺のって自慢じゃないが普通よりかなりデカイ。ミラで一回試したけど最後まで入れたら子宮破れてるんですか……とか言われたし。

まあ、手加減すればなんとかなるか……。



現在に戻る

「と、言うことが在った」

「「「「「……「「「「」

おお、俺の情の深さに感動してふるふる震えてやがる。

「「「「「ぶざけるなー！」「「「「」

絶叫と言つのが合っているだろう。かなり大きな声で叫ばれた。

「ご主人様！ わかっていますか！？ 一体どれだけナノマシン化すれば済むのですか！？ てか嘘つきすぎです！ 全然戦争の内容違っじゃないですか！？」

「いや……目的がナノマシン化だろ？ 嘘ではないぞ？ 見た目的には」

「兄さん！ 犯罪ですよ！？ 13ですよ！？ 幼女趣味も大概に

してください！ 嘘じゃなかったらどうやって最初から各国にうちの軍が配備されているんですか!？」

「お前らも大して変わらぬか……？ 軍は……たまたまっただことだ」

「わたし思うの。利用出来る人だけって言ってたけど、ゲルマニアは始祖の血入ってないから完璧趣味ですわよね!？」

「趣味じゃないと何度も……」

「お兄ちゃん！ まだ王族増やすのですか!？ このままじゃ世界女性全て王族です!」

「家族になつたわけじゃないぞルミアは……まだ。多分100年くらいは帰ってこないし」

その後も、ぐちぐちと言われ続けた。

「ってことで、ご主人様は今度からやるときは、わたし達に確認とってください!」

うんうんとリーン以外がうなづく。

「そもそもですよ？ やりたいならわたし達に言えば良いじゃないですか!？ 24時間何処でも大丈夫です!」

真っ赤に成りながらも全員がうなづく。

「今日は全員相手してもらいますから！ オールナイトです！ むしろ、歌広のスペシャルフリーです!」

いやいや、あれって確か午前11時から翌朝の5時までだぞ？

ナノマシンだから平気だが……。さすがにやる気が出ないと言うか逃げたい。

「あ、リンちゃんは初めてですよね？ リンちゃんもどござっ。」

おいテファ。俺に確認とれよ。

「いいの？」

こてんと首を傾げて俺を見つめる。

「嫌」

「どうぞ。一人三時間くらい出来ます」

三時間歌えるみたいに気軽に言うな！ お前ら三時間かもしれないが、俺は15時間連続だ！

一人カラオケで15時間みたいな感じじゃねーか！ あの恥ずかしさと喉の痛さは死ぬる！

「スペシャルフリータイム、アルコールに飲み放題付き！」

嫌だ！ 絶対おかしなことになる！ そもそも、アルコールなんて俺達にはヤバイのだ。

吸収するが分解はしない。速攻でよっぱらうわけだ。しかも吐く機能なんてない！

一杯でぐでんぐでんだ！

「これを見てください！ お父様の秘蔵酒『神殺し』アルコール分97%！」

「『おお』」「『』」

おおー、じゃねえ！ 俺達の身体でそれ飲んだら大変な事になる

！ ナノマシンで倒れない、でも意識はぐでんぐでん。絶対朝になるまでに数回死ぬことになる！ 下手したら屋敷壊滅だ！

「あー、意見がある。せめて、訓練所の寝室でやろう。あそこなら作り治してもそこまで金かからないから……周り森だし」

もういいや。

あー、元凶のルミアは今頃食べ歩きだろうなー。俺も付いて行き  
たかったよちくしょー。

35 対等な友人（前書き）

アレンジアレンジ大事！

### 35 対等な友人

トリスティン城・王室

「ご主人さま、ちょっとこれ聞いてくださいよ！ 最近流行ってる5人組美少女アイドルユニット、ミルクティーの曲なんです」

「いやーもう聞いたことあるよその歌手。

歌手になったのは知らなかったけど。

「で？ 王宮でのこのだるい時間に何ようだ？」

「え？ って、誰ですかこのおじさんっ！？」

ミラは飛び跳ねる勢いで驚く。俺の前には膝をついたおじさん。

「んー、一応元公爵の領土で支役所の長やらせてる元侯爵」

「そうなんです。でも、邪魔なので帰ってくださいさようなら」

ペコリとミラが一礼する。

めっちゃくちゃ自分勝手だな。

「でね。MC持ってきたので聞いてくださいよー」

一枚のカードをペラペラとさせて俺の目の前に持ってくる。

MC ミュージックカード。カードに音楽データが入れられるものだ。

カードを構成しているナノマシンからデータを抽出し、再生させる。

容量はほぼ無限。ナノマシン技術なので、複製は不可能。

「なんだそれ……もう載ってる写真がお前ら五人じゃん。服装明らかに私服だし。どこがアイドルだよ。てか、服がボロボロだろ。写真撮る前に戦闘でもしたのか？」

「いえ、曲の雰囲気作りです」

ぼろぼろな雰囲気作曲。しかもアイドルグループってのステータスな。

「曲名は？」

「いつも一緒に……骨になって持ち歩くの」

「死ねばいいよ」

「なんでっ!?!」

言葉にせずにこの気持ち伝わればどんなにいいか。てか、それが売れる理由がわからない。

「って、わけで再生」

ミラがカードをPDAに差し込んだ。

まず、ジョゼットがコーラスか？ お、途中からテファが入ってきた。次にミラって！

「アホかつ！　なんで全員違う歌詞なんだよっ！？　普通は聞き取れねーよ！　ナノマシン基準で考えるな！」  
「一回で5曲聴けます！　省曲！」  
「各一曲ずつ一枚に入れるよ！」

最近のこいつらの暴走振りには呆れる。  
まあ、気分転換にはなるか。

「あ。気分転換と言えば」

「どうしました？」

「いやー、学院ずつと言つてなかったけど、どうなったかなと。一応魔法学院は国立で続けてるだろ？」

「ええ。ただ、教育プログラムもちゃんと入ってますね。魔法は短時間で成果が出るようになってます。ただ、元貴族以外はあまりいないかなと。16から入れる学校ですと、ちょうど義務教育が終わってますから」

「行ってみるか？　いきなりの視察みたいな感じで」

「そーですね。あ、今日の真剣衰弱ちようどやってるので、NR聞きましょうー！」

ミラは何やらPDAを操作し始める。

NR　ナノマシンラジオ。そのまんまだ。宇宙まで届くラジオ。テレビもNTTってことでこれを使っている。

『今日の  
『リクエスーロー』』

おお、ミラが掛け声をし、5人が喋るって！　なんでラジオもこ



いつらなんだよ!? てか、真剣衰弱ですらねーよ!

最近仕事しないと思っただらどんだけ遊んでんだ! しかも録音か!  
聞かなくても結果知ってんじゃない!

『では、今日の一番の運勢の夢は 』

いきなり一番からか!? てか、運勢の夢ってなんだ!?

『ご主人様とわたし! 最高の相性です! 身体の相性もバッチリ!  
! くんずほぐれつ一生合体!』

「お前アホかつ!? 運勢でもなんでもないだろがつ!?」

「ちなみに、毎日これを繰り返して放送してます!」

「そんな説明いらねーよ!」

「ちなみに5パターンあつて ー」

「もうなにやつてるかわかるからいらねーっつ!」

完全に技術の無駄遣いだ。

『次のカードはB型のあなた! 世間一杯では嫌われていますが、わたしは大好きです! でも、ご主人様のほうがもおおっと好きです!』

まだ続いてた!? しかも血液型が変わってる! 二番目とか関係ないし!

むしろリクエストだが、運勢なんだが罵倒してるんだかわからない!

『次は彗星! あなたはなかなか地球に近づけません、おり姫と彦星のように愛し合ってください。超遠距離恋愛! そこにしびれ

るあこがれるう！ でも、わたしは嫌ですね！ いつもご主人様と一緒にいます』

彗星にまで意見みたいの届けてる！ しかも此処地球じゃないぞ！？

『あとはラジオの前のアナタ！ どうでもいいです！』

一番大事なりスナー適当じゃねーか！？  
もういいよこのラジオ！

「どうですかご主人様？ 今日はラッキーデーですね？」

「真剣衰弱の意味も運勢なんてわからなかったが？」

「副音声でお送りしました」

そんなの聞こえてなかったが？

「わたしの心の中で副音声を」

目を瞑って、胸の前で両手を握るミラ。

「それは思考だ！」

「ご主人様が大好きって副音声を」

「内容関係ないっ！？」

「なんて妄想！ でもそこが大好き！」

ガバッとミラが抱きついてくる……。

「あの……ハルケギニア王……私が邪魔なようでしたら後日改めて」

申し訳なさそうに言う役所の人。  
むしろこちらが申し訳ない。

「あれ？ まだいたのですか？ わたし達はこれからデートと言  
名の視察に行くので、帰っていいですよ？」

シッシつとするミラ。

名目と目的が入れ替わってる。いや、どっちにしろデートではな  
い。

「すまないな。こいつはこんなだが、役所の方はよろしく頼む。あ  
とあと案件の方は俺が目を通して連絡いれるから、大変な思いして  
此処まで来なくていい。そもそも、俺は普段首都にいるからな」

「ハッ。ありがとうございます。では、失礼致します」

深く頭を下げ、下がってゆく。

まじ申し訳なくなる。

「お前……愛が重いよ」

「それを受け入れるのも男の器です」

「もっともらしいと言わなくていい」

こいつの愛を受け入れてたら、一人で許容量オーバー間違いない。  
そもそも、ナノマシンじゃなかったら身体も持たない。

忘れてはいけませんが、こいつの力は異常だ。特に興奮してるとき  
はやばい。加減が無いのだ。

ナノマシンでなかったら、抱きついただけで全身複雑骨折。

学院

「ご主人様……二人でこうやって歩くのって久々だね」

「ああ」

「懐かしいよね。昔はいつもこうだったのに」

「……」

「ねえ、ご主人様」

「何だ……」

「むらむらしてきたかも」

「死にさらせ淫乱女」

「むせびなくう〜」

ああ、どっかで聞いたようなセリフだが思い出せない！

聞いたかも思い出せない！

「そもそもだ。二人で“歩く”ことはないが、二人で飛翔はしよつちゅうやってるだろ。懐かしいって魔法使えない頃だろが！ むらむらはお前が毎日夜這い来るから、数日開いただけで禁断症状出るんだよー！」

「わたし……不安なんです……」

「え……?」

「もしですよっ！ もしっ……」

ミラは俯いてしまう。

「未来のわたしが言った、『その後に取りられたかもしませんが……』 っるのが不安なんです！ わたしはこれは、先に誰かが子供を作ると過程しているわけです！ ですから何が何でも子どもを！」

頑張ってるのはいいが……。

すまないが無理だ。ナノマシンに俺が命令して、精子はそのまま身体に吸収されるようにしているから。栄養としてミラの身体に還元される。全て終わるまで子供作る気にはなれないし。

「まあ、それはあとあとでいい。元々ナノマシンは受精しにくいって聞いたし」

「本当ですか!?!」

おもいつきり嘘だ。命令すれば一発だ。性別だろうと、一番優秀なのだろうとこっちで決めて受精させられる。

「じつくりしますからいいです！。それはそうと、着きましたね！。工場は破棄されましたけど、温泉はあるようです！ 湯けむり上がってますし」

遠くで白い煙が見える。

それよりも、公務用の服で来てしまった。

そっぴや、俺の部屋どうなったんだ？

「ご主人様！ 見てくださいあのオブジェを！？」

ミラが指さした先にはボロボロのオブジェ！ もといギーシュ！

「何やってんだあいつ……」

ギーシュがゆっくりと立ち上がり、服をパタパタと払う。

辺りをきよろきよろとし、こちらと目が合う。目を見開き、パクパクと口を開く。

お前の探してた杖はこっちじゃないぞ？ ぽつきり折られて捨ててあるし。

「なあ、ミラ。お前は友達の所にも行って来い。おまえ、友達いっぱいいたる？」

ミラは俺をじっと見つめ、やがてこくりと頷く。

「ご主人様。ご主人様って、人間なんてどうでもいいって言うてますが。本当はすごく優しいってわたしは知ってます。そんなご主人様がわたしは わたし達は大好きです」

そう言っつて、ミラはぱたぱたと走っていった。

ミラの言った意味が俺にはまったくわからなかった。

自慢ではないが、俺程残酷な人間はいない。

ま、それはいいか。

俺はギーシュの方にゆっくりと歩き出す。

「久しぶりだな。ギーシュ。相変わらず女に殴られてるとは」

俺はフッと笑って声をかける。ギーシュは俺の前まで来て

膝をついて頭を垂れる。

「ハルキゲニア皇帝陛下。恐れ多くも、失礼します。このような場所に皇帝陛下様が訪れたこと、誠に感謝いたします。その上、私のような者の名を覚えていただき至極光栄でございます」

……その態度がひどく嫌だった。

これが普通の態度。だが、俺は嫌だ。

俺より目上の奴が全て傳くのを、俺は毎日のように目にしてきたが、それでも

俺が友と認めた者に……。

「頭を上げるギーシュ」

「ハッ」

ギーシュは頭を上げ、直立する。そう、俺の“命令”通りに。

「やめるギーシュ。俺達は友ではなかったのか？」

「そのような事、恐れ多くて口にも出来ませぬ」

なんて皮肉。これが王になるってことだ。嫌だ。嫌なものだよギーシュ。

「命令だギーシュ」

「ハッ！ 不肖この私がどのような命令でも遂行さ」

「俺のことを陛下と呼ぶな！ 敬語を使つな！ 王と見るな！ な

あ、ギーシュ。それは寂しいぜ？」

「へ？」

俺は軽く苦笑して笑う。

「俺は今でもお前を友達だと思ってる。それはこれから変わることはない。今まで通りじゃダメなのか？　なあ。俺の最初の友よ」

ギーシュは俺を見つめ、やがて、くすくすと笑い出す。

「君は……相変わらずだねウィデイス」  
「変わってないさ。立場が変わるうと、俺は俺だ」

俺は広場の芝生に寝転がる。

昔、俺が好きだった木の下の子。

「それでも皇帝かね？」

「これでも皇帝だ」

二人で笑いあい、ギーシュも傍に座りこむ。

「懐かしいな」

「ああ。お前が女に毎日追いかけられ、殴られて　今も変わらな  
いけどな」

「愛に生きてるのさ」

ホントこいつは変わらない。貴族でなくってもギーシュはギーシュだった。

「何か変わったことはあるか？」

「変わったことかね？　学院に平民　いや、今では全員が“国民”  
”か。入ってくるようになったことかね”

「どうだ？　平民と一緒に授業を受けて」



「そうだな。平民の中にも優秀な者とそうでない者がいる。メイジと変わらないさ。おおむねなかよくやってるかな。なんせみんな国民だ。君の思惑どおりかね？」

「まーな」

余計な混乱は起きてないようだな。安心した。

「それにしても驚いたよ。ヴィ・リヤステイが君だったなんてね」

くすくすと笑ってやる。

「まあな。ずっと隠してたからな」

「まさか、ウイデイスが国をまとめるとはね。ずっと戦争が続いていた四国を一つにね。これでよかったのかも知れないと最近はあるのだよ。反発している元貴族もいるけど、それは少数だ。人間としては、この方がいいな」

俺はキョトンとしてしまう。もっと反発してるかと思った。

「意外かね？ 確かに、生活は前より大変になったのかもしれないが、全体的に見れば豊かになったのだよ。それに、生活自体は楽になった。使用人がいなくても生活が出来るようになったのだしね。僕ら元貴族も自分でやるってことがわかり始めてきたよ」

フフと、俺は目を瞑る。

「ああ。ま、俺は使用人いっぱいいるけどな」

「おいおい、自分で決めたことなのにかね？」

ズサツと隣で音がする。ギーシュも横になったのだろう。

「まあ、実際は使用人が居ないと無理なだけ。書類が未だ多くてね。謁見とかも多いし。王も大変だよ」

「はは、そりゃそうさ。なんたって超大国だからね。僕なんか想像がつかないような国の皇帝だ。でもよかったよ」

「ん？」

「君が変わってなくて。ウイデイスならよき皇帝になれるだろう」「どうだろう。俺は独善的だぜ？」

はは、と。ギーシュは笑う。

「君が独善的なら、今までの王は悪魔だよ。実際わかるだろう。生活は格段に向上している。差別もなくなった。生きるための状況が整っているよ。これからこの国はもつと豊かになるだろう」

「……ああ。俺はこの世界を統一するからな。だからこそそのハルケギニア王国だ」

ギーシュは黙りこむ。

「君はすごいことを考えつくね。それでも、君なら出来ると信じているよ」

素直にうれしいな。俺が作る世界を望んでる人が此処に一人いる。それだけでも、かなり救われる。こんな残酷な王を認めてくれる奴が一人でもいるんだ。

「ギーシュ。何かほしいものはあるか？ 家でもなんでもいいぞ。生活だって、楽ではないだろう？」

俺はこの友人に何かしてやりたくなった。それほどまでに嬉しか

った。ギーシュが望むならば何でもやろうと。

「そうだな……PDAがほしいかな。なかなか手に入らなくてね。生活は、父上が発電所の所長になってね。前とあまり変わらないよ。使用人が居なくなったことで、母上が料理を作り、家族円満ってところだ。発電所所長つてのは軍事家系としては微妙かな」

「かなり重要な役所だつつの。発電所がなかったら、お前の家もそうだが、全ての家電製品が動かなくなるからな」

俺は話してる間にリーンに頼む。

PDAとは欲が無いな。確かに手に入らないが。値段ではなく、供給が足りないのだ。

「父上もそう言っていたが。今日帰ったら労おうかな」

そう言って苦笑した。

俺の手元に、牛革に入ったPDAが転送されてきた。

一応確認の為に、取り出す。

裏面にはハルケギニア王国の紋章装飾。下部に金で、ギーシュの名前が刻印されている。

いきなり頼んだのに仕事早いな。

「ほら、ギーシュ」

それをギーシュに手渡す。

「説明書はないからヘルプ見る」

「おいおい。コレ王族仕様じゃないか？ 王国の装飾に名入り……」

隣で、驚いたような声が聞こえる。

「少し違うけどな。王族サーバー『HARU』に繋がってるから、回線の優先度はトップだな。市販のハイスペックVerから拡張データまで全部入ってる。有料アップデートも自動でやってくれる。有料回線も標準で使える。あとは、王族専用の衛生映像閲覧くらいか。王族用は、全PDAのアクセス権限とかあるからな。それはさすがにプライバシーの侵害だから入ってない。一応それ見せれば、俺の屋敷は入れるから、たまには遊びにでも来い。ちなみに、市販と違って特別仕様だから、最初に起動した奴のデータが登録される。それ以外は使えない」

「いいのかい？ こんなもの一般人に渡して」

「悪用することもできないからな。それは勲章みたいなものだ」

「何のだい？」

ギーシュはくすくすと笑う。

「さあ、何のだろう？ 命名『友情の証』。みたいなの？」

「君も臭いこと言っただね」

「臭いセリフだって言わないと王には成れないよ。俺がNTで言ってることの99パーセントは嘘だと思え」

「ヒドイ言い草だな」

俺はもう一つのPDAをギーシュに渡す。

「これは？」

「才人の分だ。あいつ兵士に成るとか言ってこないし」

「サイトなら、一応この学校に通っているよ。よく、使用人の所や、キルケの所に遊びに行っているようだがね」

「あいつも相変わらずだな」

「変わらないよ……立場が変わっても何も」

そうだな……。

そんな時、バタバタと慌てるような音が聞こえてきた。

「ウイデイス・ハルケギニア皇帝陛下！ 視察でしたら言って下さればおもてなしも出来たのですが。生憎そのような準備も出来ておりません。申し訳ございませんでした」

目を開くと、先生達のような様子だ。

全然違う奴らだな。確か、学院長や教師は家族の元に戻り、平和にくらすとかだったな。

魔法様にスクエアメイジ。教育にはプログラムを受けた奴を配属したんだった。

「いや、構わない。私も昔は此処の生徒でね。近くに来たんで懐かしく立ち寄らせていただいた。そこで、友人に会ってね。突然の訪問。私の方こそすまない。授業の邪魔になってしまっ。君たちは戻ってくれて結構だ。散れ！」

「ハッ！」

ふう。せつかくののんびり気分だったが、此処までか。

俺は立ち上がる。

窓から多くの生徒が顔を出していた。

「今のはまるで皇帝陛下のようだったね」

ギーシュが笑いながら言った。

「みたいではなく、皇帝陛下だ。君も失礼がすぎるのではないか？」

「ハッ」

そう言って、俺達は笑い合った。  
悪くない。

「さて、ギーシュ。そろそろダメだな。もう少し話していたかったが。ダメそうだな」  
「そのようだね」

ギーシュもほこりを払いながら立ち上がる。  
ちようどミラもこちらに走ってきたようだ。後ろには数人の女子生徒。ミラの友達かな？

「ミラ。久々の学院はどうだった？」  
「楽しかったですよ？ こう、普通のお話が出来て。いつもの四人だと会話のレベルがどうしても政治や技術開発とか、運営になっちゃうから」

ミラはにこにここと笑っていた。

「君たちは普段どんな会話をしているんだね……」  
「仕方ないだろ？ 王族だ。ふむ。ミラ、友達は大事にしるよ？」

ミラは一瞬目を見開き、ほほ笑む。

「ご主人様も有意義な時間を過ごせたようですね」

俺は苦笑しながら頷く。  
ミラの友人の方を向き、

「ミラの友達でいてくれてありがとう。この子には、普通の友達がないからね。私からも礼を言わせてほしい。願わくば、これからも、王族としてではなく、普通の友達として接してあげてほしい」

最後の所で、ギーシュの方にチラリと視線を移す。

ギーシュは苦笑していたが。このままのギーシュでいてほしい。権力や地位が全てではないと。

「はっ、はい！ ミラ様とはこれからも」

「ダメだって。“様”は無しで。そうでないと、ミラも可哀そうだから」

俺はそう言っただけでほほ笑む。

「ミラちゃんとはこれからもずっと友達です！」

そう言っただけで少女もほほ笑んだ。

「君たちもたまにはうちに来てくれ。ミラの話し相手にでもなっただけでいいよ」

「は、はい！ 是非っ！」

俺は苦笑し、背を向ける。

「あ、ギーシュ。お前の昔の恋人のケティ・ド・ラ・ロッタって子。あの子に言っただけでいいよ。卒業したらミラグループの和洋菓子開発部に来ないかって。いつでも歓迎するって」

「ああ。言っただけでいいよ」

俺とミラは、その場で転移した。

願わくば

皆が幸せでいられる世界にならんことを。



35 対等な友人（後書き）

ウィデイスが少し成長しました

いやかなり？

### 36 第三計画準備

#### 書室

「仕方なかったんですよご主人様！」

もつミラには飽き飽きだ。

「……どうすんだこの案件。全部燃えたぞ？」

まじめに仕事してると思ったら、いきなり髪をかきむしり始めた。その後、うくー！とか言って部屋の書類を全部燃やしやがった。

「わたしを信じてください！ 案件の分はわたしが処理を！」

いや、無理だろコイツ。

送られてきた案件を印刷する時点で、印刷機もブツ壊しそうだ。

「この目を見てください！ この誠実な目を！」

「……目そらしながら言われて誰が信じれると？ ブチ殺すぞお前？」

やっぱりミラには無理だ。

単純な作業が此処まで合わない人間が居るとは。

まあ、こいつも悪い奴ではないと思うんだが……多分。

「ちなみにお兄様。こっちからならミラお姉さまの目がはっきりとわかりますがー、目どころか顔すらニヤついていますよ?。」

……多分悪い奴だ。

「ご主人様!。」

ミラがバン! と、俺の机を叩いて詰め寄ってきた。

「そういえば生理が来てないです!。」

その瞬間、部屋の空気が凍りついた。俺と、リーンを除いてたが。てか、そう言えはって忘れてたのかよ……。

「あー、で? どっちにしろ産めないぞ?。」

「なんでですかっ!?! お金が無いから育てられないって言うアレですかっ! 産ませてください! 泣きます! 世界破壊しながら泣きます!。」

ミラは涙を流しながら抗議してるが……あー。

金はあるし、育てられる。ただ 本当に子供が出来ていればだ。

「まあ、ちょうどいいから説明するわ。俺達ナノマシンは子供が産めない。」

ガタツ！ と全員が椅子を後ろに倒して立ち上がる。顔も青ざめているようだ。

「勘違いするな。子供は出来る。だが、産めないんだ」

「なんですかそれっ!？」

「あーそうだな。俺達は身体が勝手に健康な状態に戻るだろ？ だから、腹が膨れると言つのも、異常とみなされて勝手に戻る。そして、異常の核。つまり、子供を排除する。身体の栄養に還元しちゃうわけだ」

もう青ざめるを通り越して蒼白だ。

「だから、方法があるんだが……もういいかな」

俺はあえて隠していた屋敷の地下施設のナノマシンを公開設定に変更する。

世界を見ている全員が不思議そうな顔に変わった。すぐにわかったのだろう。

「これは……？ リーンちゃんが入ってたカプセル？」

「まあそうだ。俺達以外は入れないのだが。まず、俺達の命令で、双方の了解があればすぐに受精するんだ。俺の場合は一方的に出来るけど。上位から下位だと一方的に命令出来るな。でだ。受精した後すぐに、物質転移で外に排出する。まあ、そこらへんに投げといても勝手に子供になるのだが……。原理としては、そんなことから普通すぐ死ぬ。だが、受精卵が核として、散布ナノマシンはそれを何が何でも殺そうとはしないんだ。だから、核が周囲のナノマシンを集めて子供になるわけだ。炎の中とかでも子供になるんだが、それはあまりにもってことで、カプセル作らされた。気分的にはクローンだが。実際俺単体とか、他単体でも作れる。遺伝子を組み合

わせるって思うと、受精卵でしかダメだが」

「でも……それはちょっと寂しいような」

全員が俯いてしまいが、仕方ないことなのだ。

「まあ、子供を産むってことは出来ないんだよな。無理に産もうとしてもいいけど、どっちかと言うと、排卵みたいなものだ。それで子供も出来るは出来るが。ミラが生理が来ないってのは、（俺が許しなかったから）異常を感じたナノマシンが、受精卵を吸収して栄養に還元しちゃったんだな。残念かもしれないが、こればかりは仕方がない。ついでに母乳なんて一生でないから。そんな機能身体の成長が止まった時点で真っ先に消えてるし。機能的にはあるだろうが、動作しないな」

赤ちゃんだろうとナノマシンだし、母乳いらないんだけどな。口にいれたら鉄だろうと分解して栄養に変えちゃうし。

「うう……ご主人様、あかちゃん産んでみたいですよー」

「無理だつて。一人だけどんどん年老いて行くのと、子供の生まれがカプセルどっちがいいんだよ。どっちにしる自分たちの子供だ。ついでに、もう元の身体には戻れない」

ミラが半泣きだが無理なものは無理だからなー……。

「ついでに、多分一晩で赤ちゃん程度の大きさになるぞ。取り出すとな。ナノマシンが生きていける年齢までくつつくから。で、ちょうどいい年齢になったら俺か本人が年齢を止める。第二期ナノマシンだし。お前ら個人で作ったら第三期だな。上位から下位の命令しか不可能」

なんで全員が半泣きなんだ。別に自分たちの子供なんだからいい気がするけどな？ 男にはわからない考えか。

「あーもうこの話はおしまいだ！ テファとジヨゼットこれ見る！」

半泣きだったテファとジヨゼットが近づいてきて、俺が手に持った書類を受け取る。

「これは？」

「ロマリアをリーンに監視してもらって、そのレポート」

結構ヒドイ内容なのだこれが。

「これ……本当ですか？」

ジヨゼットが真剣な顔でこちらを見つめる。

「ああ。マジで狂信者の国だ。始祖ブリミルを信教しなければ処刑始祖の子孫のいまの王。聖エイジス32世が死ねたって言ったら喜んで死ぬような国だな。他の国との貿易は一切してない。うちの支店もまったくないしな。そのせいで、貧困街がかなりあって、かなりの数が毎年死んでる。裕福な奴らは貴族と平民異常の差があるしな。エイジスは子孫ってことで、崇められてる」

全くやってらんねー国だ。

「これをわたしとジヨゼットちゃんに渡したってことは……」

「ああ。お前たちにロマリアのトップに立ってもらいたい。子孫であり、虚無であるお前たちはエイジスより崇められるだろう。それを利用し、国を内部から乗っとしてほしい。エイジスは殺すんじゃない」

なく、幽閉だな。死んだら次の虚無が現れるし。出来れば、あいつが子孫じゃないってことを偽造して、地位から引きずり落とす。んで、うちの国に合併するように運んでほしい」

テファとジヨゼットは真剣な表情で話を聞きながら、書類に目を通していた。

「ちなみに、うちのテレビはもちろん。一切あの国には干渉出来ない。バックアップも受けられないし、完璧に二人でやってもらうしかないな。一応映像は逐一こっちで確認するし、N通信で会話もできる。計画書はそこに全部入ってるし、ナノマシンに公開設定として記録してるから大丈夫だろう。テファが物質転送もできるし、二人とも転移は出来るから大丈夫だと思うが。最悪国滅ぼしてもいい。いけそうか？」

俺が視線を向けると、書類から顔を上げ、うなずく。

「じゃあ、頼む。三ヶ月だ。三ヶ月で全ての国民の支持率を稼ぎ、エイジスを失脚。そして併合までもっていけ。計画通り行けばそれで終わる。行かなかつたら潰すしかない。とりあえず、一か月かけてリーンの教育受けた方がいいな。公式での喋り方や仕草。相手を信じさせる方法など全て」

まあ、俺がコイツラを表にほとんど出さなかったせいでもあるのだが。ハッキリ言って世間知らずだ。いい教育になるだろうしな。ミラは連れ出してるのにもかかわらず糞だが。

## ジヨゼット

「違いますジヨゼットお姉さま！ その笑みはもつと笑顔を押さえて、口のあたりと目の形を変えるだけです！ あと、手をもつとゆっくりと振ってください！ テファ姉様もダメです！ 基本的に優雅さが無いのです！ もっとゆっくりと心をこめて！ しなやかにです！」

リンちゃんがすごく怖いので、だって、食べる時でも、休む時でも、歩く時でも、全て指摘されます。もう、存在否定です。聞いたところ、男性の振舞い方として公式ではお兄ちゃんもやっていると。こんな大変なことやってたのですね……。まあ、お兄ちゃんの場合教えなくても掌握術は洗練されているとのことですが。息遣いまで変えさせられるとは思いませんでした……。口で息もダメらしいです。ご飯も少ないですね。あと、虚無を売りにする使い方も教え込まれてます。ナノマシンを始祖の直系での不死身効果と思わせたりするらしいです。

始祖ブリミルを神として崇めているからそっちのほうが効果があるとか。



「ジョゼットお姉さま！ 欠伸なんてもつてのほかです！ 早くその口を閉じてください！」

ああ……泣きたい。と言っか半泣きです。

「いいですねその涙！ 涙は武器です！ 民の不自由な生活にながいて涙する図。使ってください！ 支持率アップです！」

普通に涙が出たんですが……。

「お兄様も水の精霊を使つてたまに涙出します。かなり信用されますから！」

なんて生活でしょうか……。助けくださいお兄ちゃん……。

テファ

「テファお姉さま口調がもどってますよ！ 敬語はいいのですが、

もう少し威厳を持ちましょう！ バカにされます！ ただ、普段は優しい敬語が良いですね。そして公では威厳を。筋肉が痙攣するほど笑顔をばらまいてください。絶対に怒っちゃダメです！ 公では本当に怒る所だけ怒ってください！」

すでに痙攣してますよりーンちゃん……。この、24時間手を振るって意味あるのでしょうか……。

「違います！ 手首じゃなくて、肘からふるんです！」

もう疲れました……。

「手の指は開かない！」

ぐすん……。

「ペガサスに乗っている時の足の角度が5度ずれています！ あと、背筋がだんだん曲がってます！ ピッシリと！」

どろしると……。

「では、降りてください」

素直にありますが……。

「違います！ 降りるときの足を開く角度が全然違うんですよ！ ペガサスさえ従えてるように見せるんですから！ それじゃ従えられてるみたいですよ！ 降りた後は向かい合って、ペガサスが首をこちらに曲げますので、優しく鼻を撫でるんですよ！」

もう死なせてリンちゃん……。

### 37 ロマリア奪取計画始動。

#### ロマリア皇国・テファ side

わたしとジョゼットちゃんは、ペガサスに乗って二人でロマリア上空に来ていた。

「じよ、ジョゼットちゃんいい!? き、緊張してないよね!?!」  
「だ、大丈夫です! テファひゃん!」

駄目だ。わたしもジョゼットちゃんも緊張してる……。  
兄さんがいない状態での大きな仕事ってこれがはじめてかもしれない。  
兄さんがいると絶対成功するって思えるのに……いないとわたしもジョゼットちゃんもダメらしい。がんばります……兄さん。

「よし! おります!」  
「はい!」

ペガサスにお願いしてお城、と言つか宮殿に降りてもらおう。

宮殿の前に降り立つと、たくさんの兵士に囲まれてしまった。と言っても、威圧感が全然ない。うちの兵士の方が全然鋭い眼をしている。

「貴様ら何者だ！ 此処は皇宮であるぞ！ 貴様らのような者が立ち寄って良い場所ではない！」

ふ。全然目に力が入っていない。こんなうちの白クマさんのほうが怖いです。白クマさんのほうがかわいいですが。

「黙りなさい！ 我々をどなたとどころえているのですかっ！ 始祖ブリミルの正統後継者ティファニア・ハルケギニアですよ！」  
「わたくしは始祖正統後継者ジョゼット・ハルゲギニアです！」

設定的にはわたしが怒鳴り、ジョゼットちゃんがほほ笑む。飴と鞭のような方法です。これもリーンちゃんがやれと言っていました。

兵士たちは一瞬ざわめくが、すぐにこちらを睨みつける。

「き、貴様ら！ 我らの始祖ブリミル様の後継を語るとは！ 即刻処刑してくれよう！」

情報通りですね……。始祖を怖いくらいに崇めています。

わたしとジョゼットちゃんは杖を空に掲げる。

ガチャリと、兵士が構える音が聞こえる。

《《エクスプロージョン》》

二人の声が重なり、上空には大きな光の爆発が二つ咲き誇る。そして、兵士に向きなる。

「虚無魔法。これが始祖の正統後継者の証にはなりませんか？」

ジョゼットちゃんが笑顔で言うと、兵士たちは狼狽しだす。

わたしは加速し、兵士たちが構えた杖や槍を全て叩き切る。

「これでも疑うのですか？」

「しっ、失礼いたしました！ 我々は虚無魔法など見たことがありませんので、判断にこまっていたのです！ ですが、確かにそれは系統魔法でも、先住魔法でもありませんでした」

兵士たちが膝をつき、頭を垂れるを見降ろし、ジョゼットちゃんとほほ笑む。

「ならば、わたし達を通しなさい！ 始祖の子孫と言われる。ヴィクトーリオ・セレヴァレ《聖エイジス32聖》に用があります！ わたし達は、正統後継者として、その人物を見定める必要があるのです！」

「し、しかしそれは」

「貴方は始祖ブリミルを信教しているのではないのですか？ わたし達の命令が聞けないというならば、始祖ブリミルへの反逆とみなされることですよ？」

ジョゼットちゃんはほほ笑みながら言っていますが、言っていることは結構理不尽だった。

「けっ、決して我々はそのような事は……」

「ならば通しなさい！」

「は、ハッ！ 始祖ブリミル様の御心のままに」

深く頭をさげ、わたし達を中に入れてくれ、案内までしてくれる。まあ、わかりやすすぎるほどに緊張しているっぽいけど。どうなるかなー。

ヴィットーリオ・セレヴァレSide

「失礼いたします猯下。猯下に謁見を求めのお方達がいるのですか……」

一人の兵士が傅き、私に報告をしてきた。

謁見の予定ならば、まだ一時間程早いと言うのに……時間も守れないのでしょうか？

「コリアムでしょうか？ まだ早いのでは？」

「いつ、いえ……」

「ならば、改めて謁見を申請してほしいとおっしゃってください。私も忙しいのです」

「失礼ですが……猯下の命令でもそれは無理なのです」

私でも無理だと、兵士は冷や汗をたらしながら言っている。

おかしい……それは私よりも上の者だと言うこと。そのような者はこの国 いや、始祖ブリミル様を信教しているこの国の者ならば、ハルケギニア全土でも私以上はいないはず。

「……始祖の正統後継者と本人達が」

わたしはそこでため息をついた。

「煩わしい。君は本当にそれを信じたのかい？ それはありえない。正統後継者足るはこの私しかいないでしょう？」

「それが……虚無魔法を使っていました……」

ガタつと私は立ち上がった。

虚無……。それは私だ。母上が持ち逃げした炎のルビーと、盗まれた始祖の虚無さえあれば私が虚無なのだ。だが、受け告げられた文献には四人の虚無がいると……。いや、先ほどこの兵士は“お方達”と言った。複数……が？ このロマリアに來ていると言うのか！？ もしそれが本当なら……逃す手はありません。実際に虚無を持つているお方が居れば、より一層この国は強固な物になるでしょう。

「複数なのかい？」

「はい。お二人とも虚無の魔法を」

「よろしい。他の謁見は全てキャンセルしろ。そのお方達をお通し下さい」

「ハッ！」

兵士はすぐに、背後の扉を開いた。もう来ていたのか……今の会話聞かれたのでは？

扉が開くと、今まで見たこともない程きめ細かな、白く美しい衣



装を着た少女が二人立っていた。そのお姿もお美しい。おもわずため息が漏れる程である。金髪の長い髪をした少女と。腰まである銀髪の、幻想的な髪を持つ少女。手には、竜をかたどった様な蒼い杖を持っている。歩き方やものごし、それすらも神々しい。雰囲気だけならば、まさしく彼女らは始祖ブリミル様の子孫。

実は、私はこれでも自分が人からどう思われているか聞いている。呆けさせる程の美貌をもっているらしいのだ。しかし、前の二人はそれに全く動じていない。このようなことも初めてである。やはり始祖様の子孫。皆美しいのだろう。

「貴方がヴィットーリオ・セレヴァレですね。私はティファニア・ハルケギニアと申します」

「わたくしは、ジョゼット・ハルケギニア」

その名前に目を疑った。それは、帰ってくる事のなかった私の使い魔。ジュリオが連れてくるはずの少女。まずい……ジュリオは彼女に殺されたのだろう。虚無に目覚めているとは知らなかった。つまり、私が彼女を連れて来られない場合の対処をしたことも知られている……。

「おっしゃる通りでございます。ティファニア・ハルケギニア様。ジョゼット・ハルケギニア様。わたくしめがヴィットーリオ・セレヴァレです」

内心、服の下は冷や汗でべとべとする。

「早速ですが。ご質問が幾つが御座います」

「失礼ですが。その前に正統後継者の証を見せていただいてよろしいでしょうか？ 何分疑い深くないといけない立場です」

「いいでしょう」

二人の少女は目配せし。

《イリユージョン》

少女達の隣に、私と全く同じ姿の人物が二人現れた。

『これでよろしいでしょうか？』

その私が、私と全く同じ声で問いかけてくる。

あれは虚無だ……。

「はい。文献に乗っている『イリユージョン』で間違いありません」  
「では、質問させていただきます」

少女達はイリユージョンを消しきった。

ティファニアと言う少女が一步下がり、隣の少女ジョゼットが一歩前に出た。

「では、先日のことはご存知でしょうか？」

ぎくりとした。先日……やはり彼女は知っている。もし、口止め  
に此処で兵士に殺せと命令をしたところで、兵士たちは先ほどのイ  
リユージョンで彼女たちを正統後継者と認めている。そして、私自  
信が認めたのだから、言うことは聞かないだろう。

「先日でしょうか？ 失礼ですが、私はあなた方と会ったことが？  
私は此処から出られぬ身なのですが？」

平然を装って言葉を紡ぐが、少し震えてしまった。

「そうですか。ならば、アナタの使い魔。神の右手、ジュリオ・チエザレ。この名前に聞き覚えは？」

「いえ。私に使い魔はいないので」

使い魔のことは公にはしていないので、あやしくはないだろう。

「ですが、私を殺そうとしたジュリオ・チエザレは、貴方に命令されたとおっしゃいましたが？」

私は自分でもわかる程大きく唾を飲み込んだ。そこまで話していたのか。

「きつと、私の名前を使った者でしょう。良くも悪くも私の名前は有名ですので。今回は悪い方が出てしまったのですね。嘆かわしいことです」

二人の少女は目を細めた。やはり、わかっているのだろう。

「はあ。ならば仕方ありませんね。知っていると思いますが、始祖ブリミル様は神の様なお方ですよね？」

「それは勿論でございます。私達ロマリアは、始祖ブリミル様を神として崇めていますので」

「ですよ。神。そして、私たちは神の後継者。あなたもそうですよね？」

「おそれながらその通りでございます」

見透かされているような蒼い瞳。背筋が泡立つ。

「ならば、世界を観測出来るはず。わたし達は知っているの

すよ？ 全部を。あなたも出来るでしょうが」

「な、何をおっしゃっておられるのですか？」

「そう、例えばこの宮廷にいま現在配置されている兵士の数は462人。あら、今日の夕食はおいしそうなローストビーフですね」

今度こそ私は混乱した。兵士長の方に視線を移すと、目を見開いてコクコクとうなずいている。つまり、当たっているのだ。私ですら知らない。知っているのは兵士長のみ。それを見て、一瞬で人数まで割り出したのか！？ 知らない！ 私はそんなもの知らないぞ！？ 私だつて始祖の子孫で虚無だ！ だがわからないものはわからないのだ！

「そう言うわけで、知っているのですよ。それを踏まえて返答をどうぞ？」

しなやかな手つきで、私に掌を向けて返答を求めろ。

どうすればいい……。

「た、確かにジュリオと呼ばれるものが居たかもしれない。しかし、アレハ竜騎士として謁見に一度来ただけだ。命令などしていないのだよ？」

苦々しい言いわけだろう。彼女たちの目が鋭く細められているのだから。真実を知っているのだ。

「それならそれでよろしいです。ですが、見極めさせてもらいます。あなたが本当に後継者なのかを。もしあなたが本当に後継者ならば、炎のルビーを授けましょう」

「なっ！？」

まさか！？ この二人が私から秘宝と指輪を盗んだのかっ！？  
少女達はくすくすと笑っている。

「いいえ、違います。始祖の秘宝と指輪は、最初に目覚めた虚無の正統後継者の手に移動するのですよ。そして、始祖様は言うのです。見極めると。本当に虚無を扱うに値するか見極めると言われたのです。ですから、私たちはきたのですよ？ ヴィットーリオ・セレヴアレ」

まるで死刑宣告のようだった。全てを覗かれているようだ。そして、私には世界を観測するような神の力はない。どうすればいいのだ。

「お、おふた方は思考を読むことが……？」

「くすつ、いいえ。顔に書いておられますもの。始祖の子孫足る者、むやみに顔に出してはいけませんよ？ 神であるのですから」

この二人が何を考えているか全く分からない。これこそが虚無を扱うに値するとも言つのかっ！？ まるで心臓をわしづかむような威圧感を放つことが！

「見極めると言うが……何をするのかね？」

「ええ。しばらく此処に滞在させてもらいます。そして、貴方を見極める。あとは、民を見て回りたいですね。よろしいでしょうか？」

「あ、ああ。それくらいなら大丈夫です。すまないが、この二人を最上級の客間にお通ししてくれないか？」

「ハッ」

兵士が感極まったような顔で返事をする。私にですらこのような顔は見せない。それほど、この二人の影響は大きい。何とかしなく

ては……。

「おふた方。滞在中は使用人に言って頂ければ、必要なものはすぐに取りそろえよう。最上級のもてなしをすることを約束する」

「ええ、ありがとうございます。ヴィットーリオ・セレヴァレ様」

そう言っつて、二人は兵士に連れられて出て行つた。

そこで、私はやっと椅子に腰かける。気付かなかつたが、どうやらずつと立っていたようだ。

そんなことすら気付く余裕がなかったのだ。それにしても疲れた

……今日は早めに休むことにしよう。

わたし達が案内された客室は確かに良い場所だった。キレイな調度品や大きなベットが置かれている。だけど、まるで時代を遡ったよう。お兄ちゃんの国であたりまえのことが、此処では期待できない。わたしは、お兄ちゃんの国から出たことが無いので、アレが普通かと思っていたが、テファさんに聞いたところ、こっちが普通らしい。お兄ちゃんが全てあのように変えたのだと。さすがお兄ちゃんです。

そう言えば、部屋も別にしてくれると言っていました。あえてテファさんと一緒にしてもらいました。

「それにしても緊張ですねー」

テファちゃんがだらけた顔でため息をついた。すごい威圧感だったのに、無理していたらしい。ついでに、すごい嘘だった。

「はいー。あ、でもあの人。わたし達であんなびくびくしてたら、お兄ちゃんの前に立ったら心臓発作でしんじやいますね」

「ふふ、そうですね。兄さんの心象掌握術はすごいので。嘘も有効に使えば武器って言ってましたし」

お兄ちゃんの嘘はレベルが高すぎて普通の人間には無理です……。平気な顔で嘘ついて、それを納得させるだけの材料を用意するんですから。言葉巧みすぎです。

「それで、どうします?」

テファさんがくすくと笑いながら問いかけてきたので、わたしもくすくすと笑う。

「そうですね。最初は思い通りにしてあげます。操り人形として。ですが、着々にあの人の首を絞めます。お兄ちゃんも遊んで来いっていつてましたし」

「ふふふ、そうですね。わたし達で好きにやってかき回して来いって言ってくれましたしね。別に滅ぼしてもいいとか」

なら、わたし達は遊んでればいいでしょう。お兄ちゃんが言うことは絶対信用出来るので、あそんで、この国を乗っ取りましょう。

あ、そう言えばお兄ちゃんが介入する前の文明レベルっぽいので、それも体験してみたいです。

「テファさん。明日街を歩いてみましょうか？ たしか、わたし達が使つかもって、ミラ牛とミラ樹でとれたもの、大量に倉庫にあるとか。リンちゃんに頼んで、転送してもらえば、虚無っぽいですし、それ市民に配ったりしてまわりましょう」

「それたのでしそうですね！」

テファさんもここにこしていた。これで支持率アップ！ ミラ牛もミラ樹もほつpegがとるけるくらいおいしいので、絶対支持率あがりますね。貴族が食べてるのよりおいしいのですから！

わたしは、明日を思うと楽しみで仕方がなかった。

そして、そのまま眠りに就くのです。



昨日の通りに、わたし達は街に繰り出した。どうやら、わたし達の噂は回っているようで、皆挨拶してくれてうれしい。

わたし達が虚空からだし、大量のお肉と、大型バーベキューセツトと調味料で、兵士たちがお肉を焼いて皆に無料でふるまっている。兵士たちは最初驚いたが、その後尊敬の眼差しでわたし達を見つめていた。

その傍で、わたし達は次々と虚空から取り出した果物を子供たちに渡してゆく。この調子で、数か月かけて街や村を全て回るつもりだ。

そして、何故かわたし達は始祖様と呼ばれている。なんでも、始祖様の再来とか。

「おらっ！ 貴様らみたいな貧乏人が来る場所じゃねーんだよ！ カエレカエレ！ 始祖様は忙しいんだ！」

遠くからそんな声が聞こえた。

「お願いします！ 無料でお肉がもらえると聞いて……この子に栄養があるものを食べさせてあげたいんです！」

「駄目だ駄目だ！ みずばらしい恰好で始祖様の前に出ることは許されない！」

ん？ 兵士かと思ったら、身なりのいい貴族が痩せこけた母親と、腕がない子供を怒鳴りつけている。

「お願いしますどうか……どうか！」

母親はペコペコと頭を下げているが。

「駄目だつて言つてんだろ！」

「お待ちなさい！」

思わずわたしは声を荒げてしまった。

お兄ちゃんの領のとき。こんなことはありえなかった。つまり、お兄ちゃん以外の治めている場所ではこれが普通なのだろう。

「し、始祖様！？ 失礼いたします。この者達が……」

「お願いします始祖様！どうかご慈悲を」

わたしはその親子に近づき、膝をつき、少年と目線を合わせる。腕が無かった……、どうしてこうなったのだろうか？

「どうしたの？ その腕。痛い？」

「ううん。痛くはないよ。でも、お母さんに大変な思いさせてるのに、僕、なにも出来なくて。それは悲しい」

わたしは、その少年の頭を思わず撫でた。

ぱさぱさしている髪。白い粉は、フケと虱だろうか。

「始祖様！そのような真似」

「黙りなさい！」

なんて煩わしい……。これが貴族だと言つのですか！？ お兄ちゃんの気持ちがやっとわかりました。貴族が嫌いだから撤廃したいって。

わたしは隣の兵士に視線を向ける。

「この親子に食べ物。早急に」  
「ハッ」

そして少年を見つめる。

「お母さんのお手伝いしたいの？」  
「うん……お父さんいないから」  
「そっか……」

わたしはエリクサーをリンちゃんに転送してもらうことにした。

「ねえ、これ。ちょっと苦いけど飲んでみてくれない？」  
「苦いの？」  
「ちょっと……ね」

そう言ってほほ笑んであげる。  
少年はジットこちらを見つめ。  
一度頷いてから、ギョッと目を瞑って一気に飲み干した。

「まずひ……」  
「よくできました」

そして、腕の部分や、傷の部分が光だし。すぐに元の健康な身体に還元された。

少年は不思議そうにそれを見つめ、ぶんぶんと振っている。

「し、始祖様の奇跡だ……！！ 無くなった腕を元通りに治療したぞっ！」

見ていた人たちが一斉に声を上げ始めた。

「あ、ああ。ありがとうございます始祖様！　ありがとうございます！　ありがとうございます！」

ペコペコと涙ながらに感謝する母親にほほ笑み、少年に視線を戻す。

「よかったね。これでお母さんのお手伝いも出来るね」

「うんっ！　これからは頑張ってお手伝いする！　ありがとうございます始祖様！」

少年の笑顔を見、隣に戻ってきていた兵士からお皿を受け取る。  
普通よりかなり多い量のミラ牛だ。

虚空からバスケットごと果物を送ってもらい。いっしょに手渡す。

「今回はこれくらいしか出来ないけど。きっともうすぐ幸せになれるから。それまで頑張ってね」

「ありがとうございますお姉ちゃん！　このごおんはいっしょうわすれません」

なんだか微笑ましくなって笑ってしまう。

「ごらっ！　始祖様になんて口きくの！　あのっ、本当にすみませ  
ん」

「いえ。今日はお腹いっぱいおかわりしてください。兵士に先ほどの様なことがないように注意しておきますので」

ほほ笑んで、手を振ってあげると、ペコペコとお辞儀をしながら離れて行った。

「ジョゼットちゃん」

後ろを振り向くと、テファさんがにこにここと笑っていた。

二人で、先ほどの親子に視線を移す。少年はよほどお腹が減っていたのか。すでにお肉をぱくついていた。

「なんとかしたいですね……」

テファさんがそうつぶやいた。

「なんとか出来ますよ。お兄ちゃんなら」

「兄さんなら出来るでしょうね」

くすりと二人で笑ってしまう。

そうしていると、誰かに裾をひかれる。

「始祖さまー、わたしも果物食べたいの」

小さな女の子が、果物を食べている子たちを指さしていた。

「ふふ、どうぞ」

リンゴを三つほど渡してあげると、顔をほころばせてお礼を言ってくれた。

両手で持てなかったらしく、裾を引っ張ってそこに置いて持って行った。

「不思議です。家もなく、日々の生活すらあやうかったわたしが、今では皆に配っているんです。そして、崇められている」

テファさんは昔を懐かしむような顔をして、つぶやいた。

それはわたしもだ。捨てられて、孤児院で生活させられ、その後修道院。外の世界のことなんて全く知らなかったわたしが、今ではこうして民の生活を考えている。お兄ちゃんもわたし達に教育になるって言うていた。本当に勉強になる。あの幸せなところに居たら、絶対にわからなかったであろう現状が此処にある。絶対に変えなくてはいけない。そのためには、この計画を何としても成功させるのだ。

さて。がんばるかな！

「兵士さん。此処にあるお肉で足りるかしら？」

「ハッ！ これだけの量があれば、三日ほどは配り続けても平気かと」

「そうね」

わたしはお肉がたくさん積んである横に、大量の果物を置いた。

「子供たちが来たならわたしで上げてね。隣の町の兵士さんは、わたし達のこと知っているのかしら？」

「はい！ 昨日のうちに、竜騎士に全ての街に伝えるようにと言われておりましたので」

「そう。では、わたし達は隣の街にいきますね」

そう言うて、ほほ笑む。

「しかし……始祖様はお疲れでは？ 今日には宮殿でおやすみになられた方が……」

「いいえ。この街を見ているとね。思うのよ。食べるのにも苦勞し

ている人がたくさんいるようだから。出来るだけ早く、皆に届けてあげたいと。もし、一日でも遅ければ、明日誰か死んでしまつかもしれない。それが、間に合えば助かることだってあるかもしれない。だったら、早く届けてあげる他ないでしょう？」

「ハッ、考えが至らずすみません！」

何故か、涙ぐんで尊敬のまなざしを向けられているけど……何ででしょう？

まあいいわ。

「テファさん。次に行きましょか？」

「ですね。では、皆さまごきげんよう」

そう言って、わたしとテファさんは次の街に転移した。

### 38 演出は大事です。

客間・テファ

街周りも案外すぐに終わってしまった。って言っても、二か月かかってしまったが。

皆喜んでくれていたので、うれしかった。

もう少しすると、わたし達が出る式典があるらしい。なんの式典かは言われていないが、どうやら、民にわたし達をウィットーリオ・セレヴァレの下のものと位置付けるための式典らしい。

ナノマシン観測を、見ることでしかできないと勘違いしているようで、会話しているのを聞きとったのだ。

「勝負は全て式典の最中かな」

「そうね。わたし達を利用しようとしているわけだし、こっちに利用されたって文句は言えないはずよ」

ジョゼットちゃんは真剣な面持ちでそう語る。もし、わたし達を公式発表しなくても、下に付いているというふうには振舞えれば、ウィットーリオ・セレヴァレの支持率は鰻登りだ。だが、そんなこと許すわけにはいかない。こんな国にしてしまうあの教皇を放置など



出来ない。

「それで、ジヨゼットちゃんはどうすればいいと思うっ？」

「そうね。まず、教皇がわたし達の敵と皆にわかってもらうのがいいわ。事前に、虚無としての演出を入れれば尚よし」

わたし達の敵ねー……。

「どうすればいいかな？」

「なら、こんなのはどう？」

ジヨゼットちゃんがわたしの耳に口を近づけ、囁く。

別に、この部屋は精霊に音の遮断してもらってるから堂々と言ってもいいんだけど……。

それを聞き、わたしはくすくすと笑ってしまう。

「まるで、兄さんの様な計画ですね」

「だって、わたしお兄ちゃん大好きだもん。お兄ちゃんならどうするかなって思うと、こうなったの」

確かに兄さんがやりそうな手です。きっと、相手は絶望しますね。味方には優しいけど、敵には残虐な方法。だけど、支持率を下げない方法。

「場所は、此処なんてどう？ 一番人が見えていて、伝わりやすそうだし」

ジヨゼットちゃんがPDAを取り出し、わたしにも座標を送ってくれる。

「そうですね。兵士の数も多そうですねからちよつどいいです。兵士はわたし達の味方をしてくれるのでしょうか？」

「この方法なら絶対に……」

もう一度、ジヨゼットちゃんがわたしに囁く。

本当にジヨゼットちゃんは悪知恵が働くようですよ。本当に兄さんみたいですね。

「くすつ、それならどんな兵士だって大丈夫そうですね」

「ええ。ですから、わたし達はおもしろおかしく演出を考えましょう。演出で虚無の力を見せつけるのです」

本当にジヨゼットちゃんは面白そうに、ほほ笑みながら喋っています。

でも、きっと奥底では怒っているのでしょう。この国の現状に。

だからこそ、このような計画を考えついたんだと思います。ヴィットーリオ・セレヴァレを完全に失脚させ、国を併合出来るように。

「そう言えば、この国を治めるのはわたしらしいです。国と言うか地域でしょうか？ 例えば、元アルビオンはテファさん。元ガリアはシャルロット姉様。元ゲルマニアはミラさん。元トリスティンと統括がお兄ちゃんらしいのです。別に住むわけではないのですが、案件などはその国の担当でやってほしいとか。最終的にお兄ちゃんが決定しますけどね。元ゲルマニアなんてミラさんが仕事しないから、お兄ちゃんがやっていますね。リーンちゃんは全ての開発や指導だとか」

そう言えば、最近ほとんどアルビオンの地域からしか案件が回ってきてないと思ったら、そうだったんですね。結局、兄さんが一番

大変ですが。枢機卿とかいませんしね。案件以外はリーンちゃん全部やってくれてますし。慣れればわたしたちも寝ないで出来るとか言っていました。ナノマシンを使ってマルチタスクで一気に作業出来るとか。自分の身体だけだと限界があるんですよね。前に聞いたら、リーンちゃんは常時数千から数万の作業を同時に並列処置してやっていると。本当にすごい子です。

「さて、わたし達は演出でも考えましようか？」

わたしはジヨゼットちゃんと、演出を考え始めることに集中する。

### 書室・ウイデイス

「うーん」

早く帰ってこないかな二人……。

「二人と離れて初めて大切さがわかった」  
「ご主人様……」

「どうしよう……」。

「ミラは仕事しないし。書類がめちゃくちゃ溜まる。帰ってこない  
とこの国は終わりだ。三ヶ月って言っというてよかった。半年とかだ  
ったらマジきつい。あ、ミラなら一年でも行っていいぞ？」  
「ひどすぎる差！」

実際ミラの場合いないほうが仕事はかどるからな。

そんな時、部屋のドアがノックされた。

「失礼します。お客様がお見えです。以前、ウィディス様が来たら  
通せとおっしゃった者です」

ミルドが部屋に入ってきた。にしても……そろそろかもしれない。  
ミルドの年齢を見るとますます思う。ミルドは結婚してるからい  
いのだが……。

「なあミルド。元お前の屋敷で働いていた使用人の平均年齢はいく  
つだ」

「約30でございます」

結婚の適性年齢はこの世界で23だ。それが30……。

「使用人に連絡回してくれ。やめたい奴はやめろと」

「失礼ですが、それはあまりにも……」

「違うんだミルド。お前は結婚しているから良いかもしれないが。  
使用人はこのままずっと此処に居た場合。結婚は出来ないだろう。  
ずっと働くのもいいかもしれないが、家庭の幸せをそろそろ味わっ  
てもいいんじゃないか？ 男がいる部署に回して出会いをつくって

やってもいいし、やめてもいい。ある程度の保証はするから。このまま此処で働かせ続けるのはあまりにもひどいだろう。抜けた使用人の人数はミルドが選んで雇えばいい。有能な使用人が一気に抜けるのは残念だが、一生働かせ続けるのもな……」

人間は寿命が短い。エリクサー漬けでも150まで生きれたら良い方だ。150まで生きたとしても、老化は着実に訪れる。80歳以降、子供も旦那もない状態で、介護施設で生きる。そんな生活誰が望むだろうか。うちの使用人は金もあるし、家庭に入れば専業主婦として幸せに生きられるだろう。

「別に、勤務日数減らすのでも構わない。だが、本当に此処には出会えないんだ。警備は全部無人機だしな」

「わかりました。それならば、連絡をまわしましょう。希望者だけで？」

「それでいい。で、俺の客は客間にいるのか？」

「はい」

俺はそこで席を立つ。

「お前らは休憩しててもいいからな」

そついや、ギーシユの野郎全くこねーじゃん。死ねばいいよ。

## 客間

俺が客間に着くと、既に彼女は座っていた。

「ようケティ。久々だな」

彼女は慌てて立ち上がり、ペこぺことおじぎをした。

俺は彼女の前の席に座る。

「緊張しなくていいから座れ」

「あ、はいっ！ でも、こう言うの慣れていませんので。い、いえいえ！ そうじゃなくて初めてなので」

随分混乱しているようだ。

「いいから。で、ギーシユからの伝言聞いて来たんだろ？」

「はい。開発部にわたしを推薦してくれると」

「まあ、そうだ」

使用人に、紅茶をもらい、そのまま下がらせる。

「あの……一応ケーキを作ってきたのですが……。皇帝陛下のお口に合うかどうか」

上目づかいで不安そうに、キレイな箱を取り出す。  
もう一度使用人を呼び、ケーキナイフと皿を頼む。

「慣れてないなら前と同じ呼び方でいい。俺はおいしいかおいしくないかと言うより、売れるか売れないかで客観的に判断するからな。今は売れなくても、先が見込めればいい」

箱から取り出すと、メレンゲ生地の上に、輝くフルーツが多種乗っていた。

使用人から受け取ったケーキナイフで半分に切ると、四層に分かれており。メレンゲ生地、イチゴが入った生クリーム。イチゴソース。メレンゲ生地。見た目は悪くない。

「使用人にも評価してもらっからお前らも食べる」  
「はい」

切り分けてもらい、皿を受け取る。

ケティはめちゃくちゃ不安そうだ。それを見ると軽く笑ってしまふ。

まず、いつそう一層食べ。最後に縦に全てを一回で食べる。

「ふむ……。見た目は合格。味は……。少し甘すぎるな。紅茶と一緒に食べると、甘すぎるように感じる。食べ過ぎると胸やけ起こすかもしれない」

ケティは甘い方が好きなのだろう。水と一緒にならいいかもしれないが、紅茶と一緒にだときついな。コーヒーと一緒にだったら死ぬかもしれん。

「お前たちはどうだ」

「そうですね……おいしいはおいしいですが。生クリームの層が厚いです。もう一段、クッキー生地がほしいかもしれません。フォークで縦に切り裂くと、一気に崩れてしまいますし。大量の生クリームのでいで、食べ過ぎると気持ち悪くなりそうです」

「ミルフィーユのようなものか。」

「そうですか……」

「ケティが涙ぐむが。」

「いや、合格だ。確かにまだまだだが、本来開発部でも、数人でだんだんといい出来にしていく。一人で此処まで出来たら大したものだ。後は、改良を加えて行くことだな。そうすれば、原案はお前として売り出せるだろう。売り出して売れば、お前に発案者として一定のバツクがあるから。若いうちにたくさん作っておけば。老後も、勝手に金が入ってくる」

「本当ですかっ!?!」

「どの部分……と聞きたいが、多分店にケーキを出せることがうれしいのだろう。」

「そうだな。とりあえず、働いてもらうのは好きな時でいいから。職場見学に行くか?」

「はいっ! 是非!」

「顔を輝かせて身を乗り出す。」

「まあ、食材がいくらでも支給されるし、最先端の技術も使えるから。うれしいのだろう。」



「んじゃ、ついてこい」

「はいっ!」

俺は窓際に近づいていく。

「あの……殺人?」

「アホか! 遠いんだよ。だから、馬車とかじゃ行く気が起きない」

俺は窓を開け、エアライドを呼ぶ。

その上に飛び乗り、ケティを風で手元に引き寄せせる。

俺達ナノマシンと違い、ケティは足場を固定出来ないから、俺につかまってないと墮ちるだろう。

「あ、あの。すごく怖いのですが……」

「あーそうだな。俺に抱きついとけ。じゃないと墮ちる。王族しか乗れないから、ケティにまで補助が行かないんだ」

ギュっとなぎついて、顔を真っ赤にする。

うむー……ギーシュに聞いていたが、多分ケティは俺が好きだ。

でも、前と違い、今は王族と元貴族。手が届かないのだろう。告白されても断るけど。

「じゃーいくぞ?」

「はいっ! って、え? ひゃあああああああ!」

一応風は防いでいるが、速度的には音速。死ぬことはなくても怖いのだろう。普通だったら風圧で死ぬ。

開発部。

俺達は建物の前で、着地する。

「はー、大きなお屋敷ですね」

「屋敷じゃない。ここが開発部、和洋菓子専門だ」

「え？ ええ！？ こんな立派なお屋敷が！？」

見た目はそうなのだが。もくもくと煙が出てるし、大きな搬入口がある。

ケティを連れて、中に入る。

入って靴などを履き替える部屋を出ると、そこは真っ白な部屋。

「あ、あのっ？ 何を？ くすぐったいし、恥ずかしいのですか？」

「ああ。髪の中のゴミはとれないからな。まあ、普段は最初に風呂に入ってもらうんだが。めんどくさいから今日はとってる」

俺は丁寧についたゴミをとってゆく。ふむ。フケもないし油もついてない。化粧もしてないようだし大丈夫か。

ケティは気持ちよさそうにしてるが。

「で、まず部屋を順番に回ってくからついてこい」  
「はいっ！」

この部屋は除菌室でもある。スペースが区切られ、最初に順番に通らなくてはいけない。

「わふっ!?!」

「ああ、最初は風でほこりを飛ばす。まあ、髪の間とかはとれないけどな」

上下左右からかなりの風圧の風で吹き飛ばす部屋だ。

そして、次の部屋。

「ひゃえっ!?!」

「ミストって言うか、薬を散布してる部屋だ。ここで、身体の病気とか汚れを取る」

まあ、設置されてる風呂が、万能薬を溶かした風呂だし。そのあとに、此処で万能薬のミスト。ちよつと臭いがきつい。

「んで、自分で手にそこの殺菌薬を付けて終了」

ケティはキレイに手にそれをつけてもみ込む。爪は深く切られていたようだから大丈夫だな。

「さて、部屋は終わり。此処は開発部だから、好きな大きさや柄のエプロンを申請すれば支給される。マスクは必要だがな。次の場所で販売が決まったものは量産するんだが、そこではかつぼう着だ。此処よりも嚴重に殺菌しないといけない部署だ」

「ほふー……。すごいですね。いつもはエプロンだけでしたから」

「まあな。人に食べてもらうんだ。衛生面は自分用以上に大事だろ？」  
「はいっ！」

うむ。えらいな。

俺とケティは予備でおいてあるエプロンをつけて、マスク装着。  
何故かケティはじっとこちらを見ていた。

「どうした？」

「……えつと。似合いますよ？ 花柄……あふっ！？」

俺は頭を軽くたたいてやる。  
痛そうに撫でてているが、黙れ。

「そんな気遣いいらん。俺は開発部じゃないんだしな。お前は相変わらずケーキが乗ってる絵柄か」

「自分で使ってるのもこんな感じなので」

前に見たから知ってるが。

そのまま俺達は中に入る。

「あ、陛下——！ 発見！ またかわいい女の子連れてる——！」

一人の女性がこちらに近づいてきた。緑色の髪の毛の20代前半の女性だ。

実は彼女。こんなでもかなり有能だ。

「黙れつつの。お前は相変わらずだな」

「あ、こんにちわ。わたしはルル・ド・セレスティ」

「無視かよ……」

ケティはあたふたとしているが、やがてペコリと腰を折った。

「ケティ・ド・ラ・ロッタです」

よく出来た娘さんだーとか言ってるが、まじオヤジ臭い。

「あー、ケティ。こいつはこんなんでも此処の部長だ。三日に一回くらい新作作るからめちゃくちや有能ではある。性格は屑だが」  
「照れるよ陛下ー」

俺の脇腹を肘で突っつきやがるが、まあいい。

「性格は屑だつて言ってるんだろ」

「あ、ケティちゃんも此処で働くの？」

「都合の悪いところは無視かよ……」

ケティは俺をじつと見つめるが。言いたいことはわかる。

「ウイデイスさんって陛下？」

「まあ、気軽につて最初言ったら、コイツはこんなになった。別に俺はこれでもいいと思う」

「はなしがわかるねー」

「黙れ屑！」

「あ、そう言えば新作あるからケティちゃん食べる？ まだ販売してないよ？」

「また無視かよ」

ケティは俺に視線を移すが、こんなことでいちいち聞かなくてい

い。

「此処はな、出来たらずまず開発部全員で試食し、9割以上販売に賛成しないと売り出せない。だから、食べることも仕事なんだ。気使わなくていいからまずかつたらまずいつて言え。出来ればどうすればよくなるか言つてやればいい。そうやって、どんどん改良していいものにしていくんだ」

ケティは感心したような顔をし、

「一つもらつていいですか？」

「どうぞどうぞー」

ルルがケティに皿ごと一つわたし、食べる姿を見つめる。

いつもはふざけてるが、このときだけは真剣そのものだ。ずっとふざけてたらとっくに解雇だ。

「あ……おいしい」

「でしょー！ 自信作！」

「あ、でもグレープフルーツが何かほしいかも。盛りつけのフルーツが全部甘い方に偏つてて、少ししつこいです」

「ほー、なかなか有能な新人さんです！」

ルルはさっそくメモを取り出し、書き始める。

「ふむ、つてことは、レモンでも……いやそれだと……あ、なら

「あ、あの？」

「諦めるケティ。こいつはふざけてるが、開発になると自分の世界に入り込む。しばらく戻つてこないから先行くぞ」

「そうなんですか……すごいですね」

憧れの様な眼でみつめているが、そんな大層な人物ではないぞこいつは？

そのまま、ケティを配属するであろう場所に移動する。

『いらつしやいませ陛下！』

元気な女性達が一斉に頭を下げ、挨拶してくれる。皆年は25歳くらいまでだ。

「お邪魔するよ。此处で新しく働く子を連れてきた。いじめるなよ」  
「？」

俺はニヤリと言ってやる。

「わかってますよ。陛下が連れて来た子なんだから有能なんですよ」  
「？」

「そうだな。ルルが有能だねーって言ったぞ？」

「ルルさんがそう言うなら有能ですねーはじめまして」

「あ、あの。ケティ・ド・ラ・ロッタです」

ぺこぺことおじぎりするケティを見つめ、全員が固まる。

『か、かわいいー！ー！ー！ー！』

どつやら問題なさそうだな。すぐに自己紹介はじめてるし。話題がお菓子なことばかりだが。

「陛下陛下！ もうケティちゃんに手出しちゃったんですか？」

「してねーよ！ よし！ お前一週間以内に新作出せなかつたら減給な？ ジャンルは和菓子」

「横暴っ！ しかも和は苦手……」

さめざめと泣き真似をする女は放っておこう。

ケティは真っ赤になつてゐるし……。

「んー、でケティこっちだ。此処が今日からお前が使う台かな。開発部は、10人で一室にしている。一人一室でもいいんだが、意見を出し合いながらのほうが進むからってことだ。今はこの部屋8人しかないけどな。全部屋ベテラン、中堅、新人で構成されてるから。まあ、この部屋は新人はケティしか居ないんだけど。ベテランが多いから色々教えてもらうといいだろう」

「が、がんばりますっ！」

新人ばかりでまとめると、出来あがってもシヨボイものになってしまう。全部屋フレンドリーだが、上下関係は大事なのだ。生活での上下関係でなく、教える側と教えられる側ってことだ。こうして、新人を育ててゆく。

ケティは目を輝かせて包丁などを確認している。

「こ、これわたしが使っちゃってもいいんですか！？ 見たこともないものがたくさんあります！」

「ああ。足りないものがあつたら注文しておけ。食材だが、必要なものは一週間前に数などを注文する。次の週になると一気に来るから。この部屋の倉庫に一週間分を貯める。最初は数がわからないだろうから、多めに注文するといいい。別に、給料から引き抜かれるわけじゃないからな」



口を軽く開き、笑顔でコクコクとうなずく。

「一応この屋敷の上の階に全員住んでるんだが、家に毎日帰るのか？ 馬じゃ大変だとおもうが……？ てか、トリスティンじゃ帰れない」

「あ、それは大丈夫です。お父さんとお母さんは陛下の推薦だつて言ったら、涙を流して喜んでました。だから、此処にすみませす」

「そうか、話はとおしておこう。今は冬期休暇だろ？ 卒業してから働くのか？」

「いえ、さすがにあと2年も待てないので、すぐにでも」

「ふむ。じゃあ、此処で働いている間は就職研修中つてことにしておこう。それなら卒業したことになるし。俺が連絡入れといてやるから」

「あ、ありがとうございますっ！」

ペこりとお辞儀をするが、実際他の場所でも就職研修はあるからな。

「給料は普通に払われるし、社員扱いだから。ちゃんと、ミラグループ系列店では割引も受けられる」

「陛下！。そもそもミラグループ以外つてあるんですか？」

「んー。傭兵とか？」

「傭兵を雇うことなんてありませんよね……？」

まあそうだな。希望があれば、警備用ロボットを護衛に着かせることもできるし。

「それはともかく。ケティは今週。他の人たちでも見学して、機材の使い方とか覚えておけ。受注の仕方も聞いて、来週使う材料も頼んでおくように。遠慮なく聞けよ？ じゃないと覚ええないから。部

屋はルルにでも聞いてくれ。とりあえず俺は帰る。学院への連絡と  
かすることもあるし」

「あ、何から何まですみません」

「気にするな、じゃあな」

さーて。帰って書類も嫌だしどっか寄っていくかな。

### 屋敷の庭

「おお、可愛いなこいつら。結構増えたな」

『そうですねー、陛下。襲ってくる人間にも、食べ物に困ることも  
無くなったので、安心して作れます』

俺の目の前に居るのは韻竜の子供たちがたくさん。  
じゃれて遊んだりしている。

交代で成韻竜が子供たちを世話しているのだ。  
色が違うことから、違う韻竜の子供も見ているのだろう。

「まあ、その分働いてもらってるしな。トラックの輸送より早いからありがたい」

『ふふ、ありがとございます』

韻竜は400匹くらい成竜がいまいる。世界中探してこれだけだ。水韻竜なんて海の中で暮らしてたから伝説なのだろう。風韻竜は幻獣の森の様な場所。火韻竜は火山の火口の中。土韻竜は地下深く。そりゃ伝説にもなるわけだ。

ってことで、仕事をさせる代わりに、俺が保護しているのだ。今では人間の姿になって町中で遊んでる韻竜もいる。

竜の姿でなければ、食費もさほどかからないのだ。普通に社員扱いである。

『くあー、くあっ』

「ん？」

「メールほどの水韻竜が俺の近くに寄ってきた。」

『あら？ お腹がすいたらしいわ。お魚が食べたいって』

ふむ。リーンにマグロでも転送してもらおうか。

すぐに転送され、びちびちと跳ねる大きなマグロが韻竜の前に現れる。

『かつっ！』

子供なのにするどい爪で、マグロの頭を切断した……。

韻竜は子供でもすごいな……。

「食べ方は子供っぽくないな」

『赤ちゃんでも竜ですもの』

すごい勢いでかぶかぶと食べてゆく。血が庭に……。あとで、親役の韻竜が精霊魔法で消してくれるだろうけど。

「あ、そういえば。韻竜と人間のハーフ作った奴いないか？」

『さすがにそこまではいませんね。わたし達は人間の区別が出来ませんので』

俺が黒人の区別が難しいのと同じようなものか。

『最低でも、区別が出来るような人間でないと……その点なら陛下は大丈夫ですね』

「ん？」

『魔力の大きさも、周りにいる精霊も、身体も人間とは違いますし、すぐにわかります。韻竜よりも見わけがつきやすいですよ？ 陛下とならって子もいますよ』

竜にモテるつてのもな……。

『わたしもまだ、子供いませんから大丈夫ですよ？ くすっ』

「んー。気が向いたらな。俺ってそんな区別着くか？」

『ええ。陛下、シャルロット様、ミラ様、テファ様、ジヨゼット様、リン様はすぐにわかります。精霊や自然に好かれていますもの』

ああ。ナノマシンだからだな。世界全ての様なものだ。多分、知能がある生物ならある程度わかるのだろう。人間は直感が悪すぎる

から無理だけどな。

「そっか。だから韻竜は人に平等なんだな。好いてもいないし、嫌つてもいない」

『わかりませんからね。陛下達のごことは皆好きですよ。』

「はは、ありがと。俺は行くわ。元気に育てよ？ お前ら」

俺は韻竜の子供の頭を撫でてやる。

『くあつくう！』

嬉しそうに鳴く子供に背を向け、書類地獄に俺は舞い戻る。

38 演出は大事です。(後書き)

最近夢で蛇に襲われまくってます。

毒蛇とか普通のとか禍々しいのとか。

すぐに目が覚めて最悪です。蛇怖すぎる。

縁起がいいって言う白い蛇が出てきたことなんてありませんよ。

二日に一回くらい蛇出てくるとか最悪です。

### 39 ロマリアを併合（前書き）

ランキングには総合評価0なので載っていないのですが、別サイトの週刊更新ランキングで一位でした。

これじゃランキングから除外しても意味ないような気がする……。

僕は自由に書きたいのです（、・・・、）

フリーダム！ フリーダム！ 全裸解放宣言！

### 39 ロマリアを併合

パレード・ジョゼット

わたしとテファさんはヴィットーリオに言われ、パレードに参加することになった。

なんでも、宮殿から出発し、首都を一周して戻ってくるらしい。15時間予定と。

馬車を改造したような台の上に座り、そこから出発。ペガサスを使わせてほしいとのことでは了承した。

現在は宮殿を出てすぐのところなので、人は入ってこれない。

「ティファニア様、ジョゼット様。これはあなた方を歓迎する式典です。15時間となっておりますので、お疲れのないよう、演説はわたくしにお任せください」

傍に座っていた、ヴィットーリオがそう言って来た。

だから15時間なのね。出来るだけ疲れさせるために。疲れは人の思考を衰えさせる。王ともなれば、慣れているが、わたし達は慣れてないと。まあ、最初にわたし達がそう言ったのだが。

だけど、わたし達は人間ではない。やろうと思えば睡眠すらせずに数週間は大丈夫だ。



「お心遣い感謝しますわヴィットーリオ・セレヴァレ様」

出来るだけ、ほがらかに礼を言う。

『テファさん』

『そうですね、ジョゼットちゃん。終盤が勝負』

ナノマシンで会話をし、視線を交差させる。

「もうすぐ民の歓迎が見えてきますので、ほほ笑んであげてください。それだけで民は幸せを感じるのです」

「ええ。それくらいならいいわ」

せいぜい今のうちに思い通りに成ると思っていなさい。

わたし達を扱える人間など、お兄ちゃん以外にはありえないのだから。

8時間後

わたし達は今かなり不機嫌だ。

ヴィットーリオ・セレヴァレは手洗いなどで、席を立つのだが。

わたし達はそれすらさせてもらえない。まあ、元々お手洗いには

行かないのだが。

「ご飯も出さないとはどういうことだろうか。リーンちゃんに胃の中に直接食べ物を転送してもうと言う、あまり気分が良くない方法を使わざるおえない。まあ、エネルギーは一カ月分くらい貯蓄していたので、大丈夫だが。緊張で気持ち悪くならないようにとかで、昨日の夕食からなかった。ありえない。このヴィットーリオ・セラヴァレは手洗いって言って食べてたし。それなのに、水分補給すらわたし達はしてないのだ。曰く、皆は始祖様を見たいのだとか。だから、此処から離れることは許されないとか。」

まあ、民が喜んでいるのだから良いと思うが。そろそろ演出を開始しましょうかね。

「テファさん」

「ええ」

わたし達は杖を構えて立ち上がる。

「ど、どうしたのですか始祖様」

「あまりにも味気なくて。ちょっとした演出です」

わたし達はほほ笑む。

『皆さん、今日はたくさんの人たちに集まっていたいただき、わたし達はとても幸せです。なので、皆さんにもこの幸せをわけ与えましょ  
う』

わーと、大勢の人たちが歓声を上げる。

『では、夢の世界へ』

《イリュージョン》

わたし達二人の声が合わさり、一つの幻想を紡ぎだす。

馬車の周りにきらびやかな衣装を着た人たちが現れ、踊りだす。前方や後方にもパレードとしてのたくさんの演出。空からは花が舞い落ち、街の飾り付けもされてゆく。

イメージは別の星のネズミランドらしい。リーンちゃんから受け取った映像を再現しているのだ。まあ、全部幻影だけ。

人々は一瞬静まり、大きな歓声を上げる。

「すばらしい！ すばらしい！ まさしく始祖様の為せる技！ 虚無です！ どうですか皆さん！ これが“我ら”の始祖様です！」

歓声は更に激しくなっているが、完全に歓声がわたしとテファさんの名前に切り替わる。ヴィットーリオ・セラヴァレはしてやったりと思っているかもしれないが、民衆が着いたのはわたしとテファさん。

我等の始祖つても気に入らない。わたしはお兄ちゃんのも物でいいのだ。

「これだけの物。精神力がかなり削られたでしょう。後はごゆっくりとしてください」

「ええ……さすがに疲れたわ」

実際は米粒ほども減らないのだが。と言っか、疲れたと思うなら飲み物くらい渡してほしい。この人、明らかにわたし達が疲れたのを喜んでるし。

『もつすぐですなテファさん』

『はい。今のうちだけです』

ほほ笑みを、ニヤリとしたものに一瞬変える。

もつすぐですお兄ちゃん。

### 演説・テファ

残り一時間程。一番大きな広場で馬車は停止した。

周り全てが人、人、人。ナノマシンか精霊で声を拡散させなければ、声など聞こえない程の歓声だ。

「民のものたちよ、静まりたまえ！」

ヴィットーリオ・セレヴァレが大声で叫ぶと、一気に広場は静まりかえる。

「始祖様の魔法を見たのならば、誰もが納得するとは思いますが、彼女たちこそが虚無の正統後継者！ 始祖様である！ ついに、ついに我々は始祖様を崇めるのが出来るのだ！ どれ程この時を待つ

たか！ 始祖様はわたしのもとにとどまってくださっておる！ 我らが何よりも崇めている始祖様である！」

うまいと思う。わたし達は“滞在”すると言った。だが、民衆はとどまっていると聞けばずっと此処にいると思うだろう。わたし達は滞在してるとしかおもわないが、民衆にはずっといると思わせることが出来る。そして、わたしの“もと”と言った。確かにわたし達はヴィットーリオ・セレヴァレの宮殿に今は住んでいる。“元”だ。だが、民衆は“下”だと勘違いする。猯下の下に始祖がいる。猯下は始祖より上。そう思うだろう。わたし達は口出ししないわけなのだから。ヴィットーリオ・セレヴァレは出来ないと思っているようだが。

だが、ヴィットーリオ・セレヴァレはミスをした。自分で虚無の正統後継者と認めてしまっている。崇めると言ってしまった。これで、猯下とわたし達の位はほぼ同じ。ならば、此処で更に一石を投げれば一気に傾く。

「皆の集よ！ 我等の始祖様の虚無をみたいだろう」

そこで大きな歓声が満ちる。

「ならば見せていただくとよい！ これこそが虚無なのだから！」

皆の視線がこちらに突き刺さる。

「始祖様。此処で力を使いきってしまったても構いませぬ。今こそその力を見せるとき。盛大にお願いします。あとは、我々でフォロ―致しますゆえ」

小声でヴィットーリオ・セレヴァレが呟いた。

この人は知っている。虚無が大きな精神力を消費することを。そして、その後に気絶することを。もしそうだったら、この人の独壇場だ。しかも、わたし達に逃げることは許されない。乗って上げよう。

「はい。では、大きな魔法を放ちますね」

「よろしくおねがいします」

わたしとジヨゼットちゃんは上空に杖を掲げ、一番精神力を使うエクスプージョンを選択する。

《エクスプージョン》

上空で大きな白い爆発が生まれ、二つの白花を咲かせる。

精神力をかなり練り込んだので、兄さんのエレメンタルレース並みだろう。

「おお、観ましたか皆の者！ これこそが我等の始祖様です！」

あまりの爆発に最初は茫然としていたが、皆笑顔で歓声を上げる。これで、大部分をこちらに引き込めた。

そこで、わざとらしくジヨゼットと一緒にめまいを起こし、座る。

「大丈夫ですか始祖様？ 警備は万全故、おやすみになられてください」

「ええ、ありがとう。そうするわ」

わたしとジヨゼットちゃんは見えやすいように、馬車の荷台によりかかり、民衆の方を向く。

「始祖様は民衆の為に、長きパレードでお疲れです！ 此処からは私が演説致しましょう」

民衆は不安そうにわたし達を見る。それでも、けなげにほほ笑み手を振るわたし達に心を痛めている様子だ。

「我等の始祖様の為にこの場を借りて、わたしはある物を送りましょう！ これは、我が皇国に伝わる儀式剣。これは、皇国の民を守る誓いの剣でもあるのです！」

精神力を極度に減らすと、認識力は低下する。もし、普通の人間ならば、理解できぬままそれを受け取ってしまうだろう。それは永久の忠誠の証。

それを聞き、民は大きな歓声を上げる。

「よろしいですか始祖様？」

「……ええ」

そう言って、わたしは立ちあがった。

ヴィットーリオ・セレヴァレの唇が一瞬持ち上がったのを見逃しはしない。

「では、儀式を開始する」

カチャリと剣を抜き、ヴィットーリオ・セレヴァレは縦に構える。

「汝、ティファニア・ハルケギニアは我々と永久に共に歩むことを誓いますか？」

「はい。皆がわたしを“裏切らぬ”限り。わたしはあなた達を守護することを誓います」

ヴィットーリオ・セレヴァレは構えを解き、剣をこちらに向ける。それを右肩の上に置いて終了だ。

『いくよ、テファさん』

『いつでもどうぞ』

そして、肩に移動するはずの儀式剣は、わたしの心臓を貫いた。至る所で悲鳴が上がる。

「な、なっ！　ち、違う！　わたしは！　私は！」

ヴィットーリオ・セレヴァレは剣から手を離し、後ずさる。

そこで、ジョゼットちゃんは無表情で立ち上がる。だが、目だけには力を込めて。

『此処に裁定は成った。始祖の正統後継者として。我々は正統な判断を下そう』

わたしも立ち上がり、剣を胸から抜き去る。

皆驚いているようだ。

『我々の始祖とは神であらせられる。子孫の我々もまた神である。』

我々は死なぬ。例え、この裏切り者ヴィットーリオ・セレヴァレの醜き剣であろうとも死なぬのだ』

腰を抜かしてしまったヴィットーリオ・セレヴァレを冷たく見降ろす。

『今この時、この場を裁定の儀式と我ジョゼット・ハルケギニアは』



認める』

『並びに、我ティファニア・ハルケギニアは認める』

『よつて、この場に始祖ブリミル・ル・ルミル・ユル・ヴィリ・ヴェー・ヴァルトリを降臨させよう』』

民達が驚愕に声を失っている中、わたしとジョゼットちゃんは向かい合い、同じ杖を胸の前に掲げる。

《冥府よりいざなう我らが始祖よ。我等の名において、裁定の準備は調った。ヴィットーリオ・セレヴィレに裁定を》

そして、わたし達の中央上空に現れるはいかにもな感じの老人。まあ、兄さんが姿を変えた姿だけど……。大きな杖を持ち、ふわふわと浮いている。周りがキラキラと輝いているが、明らかに精霊を使った演出だ。

民はその神がかった演出を見、膝をついて両手を組む。

『我はブリミル・ル・ルミル・ユル・ヴィリ・ヴェー・ヴァルトリである。悠久の時の狭間から、今裁定者として舞い降りた。ヴィットーリオ・セレヴィレを前へ』

ヴィットーリオ・セレヴィレの身体が勝手に宙に浮き上がり、兄さんの少し前に固定される。

精霊見えるけど……。

『これより裁定を始める』

兄さんがそう声をあげると、背後に大きなフェニックスが現れる。うーん、いつ見てもキレイなフェニックスです。

『私の配下のフェニックス。再生と破壊をつかさどる。汝に与えるのは再生か、破壊か。我が認めた二人よ、裁定を』

兄さんの視線がジョゼットちゃんに移る。

『申し上げます。この国はよき国でありましょう。しかし、それは表面上でしかありません。我々がこの足で各地を見て回りましたが、差が激しく。裕福なものはより幸せに。貧しいものは明日を見ることすらかなわぬのが現状で御座います。その責任は、始祖の子孫であることだけを誇り、それを掲げた政策をしていた彼。ヴィットーリオ・セレヴィレにあります。わたしは彼に虚無を授けることを否定しましょう』

「ま、待って下され」

『口をはさむでない。二人は私の後継者。正統な判断をしているままで』

口をはさんだヴィットーリオ・セレヴィレを、兄さんは黙らせた。そこでわたしに視線が映る。

『申しあげましょう。わたしはヴィットーリオ・セレヴィレを信用しようと思いました。これからこの国をよきものに変えてゆくのだとしかし、それは彼の計画でした。我々を亡きものにし、この国を己の物のように作り替える。それこそが彼。ヴィットーリオ・セレヴィレ。実際、わたしは彼に剣で貫かれました。それは此処にいる皆が証明してくれましょう』

兄さんが兵士に視線を向けると、兵士は慌てて頷き始めた。

『それを踏まえ、わたしはこの物を正統後継者にすることを否定致

します』

『真であるのか？ ヴィットーリオ・セレヴィレ』

「い、いえ！ 決して殺そうなど」

「嘘だ！」

ヴィットーリオ・セレヴィレがそこまで言ったところで、一人の少年が声をあげた。

あれは……ジヨゼットちゃんが腕を治してあげた子供。

「聖王様は、お姉ちゃんを剣で刺した！ ぼく見てたもん！」

兵士が少年の方に走り出すが、精霊に頼んで、兵士をその場に拘束する。

『ふむ。ならば裁定は決まった。我、ブリミル・ル・ルミル・ユル・ヴィリ・ヴェー・ヴァルトリは、汝ヴィットーリオ・セレヴィレを後継者としては認めぬ。我の子孫と語ることも許さぬ。これが裁定の結果だ。後は任すぞ、後継者達よ』

『はい！』

そう言っつて、兄さんはその場から消え去った。

ヴィットーリオ・セレヴィレは空中から落ち、情けない声をあげた。

『我、正統後継者ティファニア・ハルケギニアは、彼、ヴィットーリオ・セレヴィレを始祖への反逆罪とし、永久に幽閉することを此処に宣言する』

そして、兵士に視線を移す。

「は、ハッ！ 我らは始祖様の為に！」

兵士が一齐にヴィットーリオ・セレヴィレに駆け寄り、両腕を拘束して連れてゆく。

「な、何をするのだ！ 私はロマリア皇国の教皇ですよ！ 離しなさい！」

「いいから来い！ 始祖様の命だ！ 始祖様を殺そうとした罪！ 処刑されないだけありがたく思え！」

まあ、あの剣も精霊で操っていたんだけど……。

『わたしはこの国を回り、嘆いていました。何故此処まで貴族と平民に差があるのか。何故皆幸せになれるのか。わたしは、とある国の王族です。そこで、皆が幸せになれるような国を作っています。どうでしょうか？ 皆が幸せになれるよう。わたしの国に来ませんか？』

わたしはほほ笑みながら言う。

一瞬キョトンとしたが、次の瞬間に大きな歓声に変わる。

『この国に現在、教皇はいません。前教皇に、正統後継者の認定を受けたわたし達が国のトップです。いま此処で宣言します』

私は大きく息を吸い込み、口を開く。

『今よりロマリア皇国は、ハルケギニア王国に併合することを宣言いたします！ 皆さん、ふがいない王族ですが、ついてきて下さい！ お願い致します！』

歓声以外聞こえないような歓声が各地で聞こえる。  
兄さんの言った通り、宗教国家は自分達が崇める神には絶対服従。  
こつもすんなり行くとは。

『では、これよりパレードを続行します！』

ジョゼットちゃんがイリユージョンを唱え、そこらじゅうにハル  
ケギニア王国の国旗が刻まれてゆく。

民は皆笑顔で歓声を上げ、祝福してくれる。

だましているようでも申し訳ないけど、幸せになれるのは事実だか  
ら。

ジョゼットちゃんと顔を見合わせ、苦笑する。

## 書室

「お兄様、終わりましたね」  
「ああ」

俺達は書室でそれを見ていた。

「それにしてもお兄様、あの発言、なんて厨二病！」  
「なんでお前がそんな言葉使ってんだよ！ まあ、でもさ。厨二病って結構有効だと思うんだ。裏がある駆け引きなんて大体そうだ。実際、俺は厨二病で今まで成功させてるわけだ。悪くないだろ？」  
「そうですねー、ご主人様はそれでいいです。あ、あと厨二病ってのは公開データになってますから皆知ってますよ？ 地球のナノマシンが入ってるんですから」

わー。どうもこいつらそっちの言葉知ってると思ったらそう言うことが……。

地球のナノマシンは一回満ちたわけだから、頭覗きまくってるもんな。

「ま、とりあえず準備するか。まずはあの国を変える為の出張かな。職人を大量に出さないといけないな。まあ、新しい政治体系とかはテファかジヨゼットが言えばすぐ決まるからいいけど。しばらくは餓死しないように、ミラ牛、樹送った方がいいかもしれん。まあ、オリジナルは送れないから分身した奴だけど。どっちにしる生産させるわけだし」

「ですねー。では、そのようにしておきます。ミラさんとシャルロットさん。今から全チャンネルで併合のお知らせと、浮遊テレビ全各地に送るから、手伝って」

「はい」

慌てた様子で三人が消え去った。

さて。これでエルフの聖地より手前は全部ハルケギニア王国になった。

だが、此処からが難しい。エルフは人間にとってめちゃくちや嫌われている。てか、恐れられている。仲がめちゃくちや悪いのだ。

一回視察行くしかないな。エルフは虚無を嫌ってるから、次はミラとシャルロットか。

両方に認めさせるのとかマジむずいな。

#### 40 エルフの聖地（前書き）

原作ここら辺みてないよ……。

てか、もう聖地原作で出たのか知らないけど、出てたらごめんなさい。だいぶ違ってくると思います。

WIKIでしか見てないから性格も違うかも。

もうバリバリ自分で設定考えちゃってます。ほぼ最初からだけど。



## 40 エルフの聖地

### 書室

あれから、テファとジョゼットは少しロマリアに残って仕事をしてくるそうだ。

併合は上手くいったし、こちらの技術もあつちで再現させている。そこで俺達が居なくなったらどうなる。

エルフの地に行きたいのだが、書類が出来なくなってしまう。

「なあ、エルフの聖地に行くって言っただろ？ でもさ、それだと書類が出来ないわけだ。そこで、最後の手段を使うことにした」

ミラとシャルロットは首を傾げる。

「偏在で分身を作って仕事をやってもらおう」

バンとミラが机を叩き、立ち上がった。

「どーして最初からそれをやらないんですかつ！？」

「落ち着け。偏在するのは能力があがるわけじゃない。本人が出来

ない仕事は偏在にだって出来ない。しかも、偏在が消えても記憶がこっちにバツクされないわけだから、何をしたかこっちにわからない。だから、最後の手段なんだ。あとあと必ず面倒事は本人に回ってくるから。主に俺に回ってくる」

まあ、今回は仕方ないかな。

俺は偏在を唱え、四人程分身を作る。実際はいくらでも作れるのだが……。

「じゃ、お前ら仕事して。二人も偏在使え」

二人は頷き、分身を四人ずつ作る。分身はまじめに仕事し始める……。

「おいミラ。それは誰の偏在だ？」

「何ってわたしじゃないですか？ 真面目に書類片付けてます」

確かに真面目だ。顔も同じ。

「お前がまじめにやってるのは見たことない。誰か憑依してるだろそれ？」

「失礼すぎますよっ！？ これはわたしです！」

「まあ、いいか行くぞ二人とも」

俺は二人を連れて扉に手を掛ける。

「待ってくださいご主人様！ どう考えてもそれわたしの分身ですよね！？」

俺は隣の分身ミラの肩に手を掛け。

「お前が今日からミラだ。よし行くぞ」

「待ってくださいよーご主人様」。捨てないでくださいーそんなものじゃご主人様を満足させられませんよー?」

「いや、お前で満足したことなど一度もないが?」

「ひどすぎるっ!」

まあ、分身がミラに切り伏せられたから、仕方ないので本体を連れて外に出る。

## エルフの聖地

いやーエルフってすごいな。スタイル良い人多いし。

まあ、問題があるにはあるが。一つは蛮族って俺達を呼ぶこと。もう一つは何故か囲まれてること。俺達が転移した瞬間これだよ。最悪だ。めっちゃ見下した眼向けられるし。

「てか、二人とも何でそんな睨みつけてるんだ？」  
「胸」

そうらしい。

「さーて、観光観光！ 二人とも、精霊は掌握出来るか？」  
「余裕ですよー、エルフ？ 何それ？ って感じに精霊達が味方してくれてます」  
「いつもと変わらないわ」

ふむー。エルフって精霊魔法しか使えないからかわいそうだ。自分より掌握力が強い相手だと魔法すら使えない。  
早くお偉いさん出てこないかなあ。

困まれてるのなんてなんのその、俺達は自由に歩き回る。困まれてるって言うか、遠巻きに見られまくってるって感じだが。人垣が出来てるだけ。エルフだけど。

「見るミラ！ シャルロット！ 毛抜きだ！」  
「ですね。それが？」

「えーっと、俺達は生えないから……なぜか家にまだいるカトレアに持って行ってやろう！」

「カトレアさんも毛うすいですよね？」

「じゃあ、オルレイン公夫人」

「母様も薄い」

「マジいららない商品だ」

つまらん。

あ……。

「俺これほしいわ……」

「招き猫ですか？ 知識しかありませんが」

「うちの国じゃこんなの売らないだろ？ だからこそほしい！」

「お金つて共通なんでしょうか？」

十中八九違う。

聞いてみるか。

「すみませーん、これほしいのですが？」

「はい、少しお待ちください」

中から声が聞こえる。なにやらごそごそと商品整理していたようだ。

「お待たせしま 蛮族っ！？ なんてこんなところにいるのっ！？」

いきなり蛮族とは。

「ご主人様ー、ちょっとこの長耳ぶっこ抜いていいですかー？ あと胸を」

「ははは、こんな“劣等種”のことなんて気にしないでいいぞミラ」

俺とミラはにこにこしながら会話をする。

「おねーさん。蛮族なんて言わない方がいいよ？ とりあえずさー、此処の貨幣見せてもらいたいんだけど てか見せる劣等種」

さすがに蛮族って言われまくとイライラする。

「ご主人様ー、もうダメですよこの国。早く滅ぼしましょー。エルフ無理。OK?」

「NO! 簡単だけどダメ。って言っても、話なんて通じなさそう。どうすっかな。今日は視察だけだし」

あ、なんか後ろの人たちが精霊使って連絡取ってるし。兵士っているのかな此処?

「あ、来ましたよご主人様ー。お話しできるかも知れない兵士のよ。うな人。兵士つぽくないですが」

俺達は店から離れ、兵士たちが走ってくるのを待つ。

確かに兵士ではない。ただ、年齢が他の人よりもかなり高いのだ。それだけ精霊を操る力が強いのだろう。その割に妙に弱そうだが。うちの無人機ですら滅ぼせそうだ。

「何故蛮族がこの聖地にいるのだ!? 貴様ら何処から入った!」

おお、いきなり好戦的。

「どこからって、そこから?」

俺は転移した箇所を指さす。

「んー、でさ。今視察中だから向こう行っててくれない? もうめちゃくちゃ集まってくるしめんどうなんだよね? あと、この国の貨幣見せてくれね?」

駄目か。せつかく礼儀正しくしてるのに。とりあえず此処の統率者に合わないのだめだな。共和制だから王ではないか。ますます友

好的には出来なさそうだ。

「ねえ、あんたらさ？ 蛮族蛮族ってうるさくない？ つまりだ、それは自分より上の奴に劣等種って言われても仕方ないわけだよ？

ねえ、劣等種」

「貴様ら！」

ギリッと歯ぎしりをし、いきなり精霊魔法を使って来た。もちろん掌握して霧散させる。

「なっ！？」

「だから言ったじゃん？ 自分より強い奴に劣等種って呼ばれていいのか？ って。で、俺は劣等種ってあんたらを呼んでるんだから強いわけだ。あーめんどい。ちよっと精霊との契約切らせてもらうね？ あとで契約し直せばいいから」

俺はエルフと精霊とのつながりを立ち切る。俺の場合、ナノマシン全ての上位存在なわけだから、精霊すら侵食しているナノマシンの絶対的上位命令権を持つ。精霊は俺の所有物のようなものだ。

「な、なんだこれは……」

「精霊がない……なんで！？」

「え？ 嫌だ、嫌だ！」

エルフは精霊と共に生きる。それは生まれてすぐだろう。そして、精霊が呼びかけに答えなくなったのも初めてなはず。まわりに見えるていた精霊が消える。それが恐怖として襲っているようだ。

「弱いなー劣等種。精霊が見えなくなったからって混乱するなよ」  
「蛮族！ 何をした！」

「何をつて、お前らの精霊との契約を切っただけだ」

「蛮族にそのような事が出来るわけがないだろ！」

人間嘗めすぎてる。人間ではないけど。

「だから言っただろ。劣等種だつて」

そこで、俺達はふわりと浮きあがる。

「精霊魔法だどっ!？」

その言葉を見せしめ、俺はミラとシャルロットに向き直る。

「なあ、東だ。でつかい穴があいてる。面白そうだから行ってみようぜ?」

「そうですねー、此処は煩わしいですね」

「何かあるのか気になるわ」

だろうな。不思議な場所だ。

「ま、待て! 人間がシャイターンの門に近づくことは許されない  
」!

「やっと人間と呼んだようだな。でも、気になるから行ってみるわ」

俺はくすりと笑って、その方向に飛翔する。



## シャイターンの門

俺達が近付くと、数人の見張りが魔法を放ってきたので、とりあえず寝かせておいた。

めちやくちやでかい穴だ。底も見えないし。ナノマシンが途中から切れている。

と言うか……あれ？

「わかるか二人とも」

「はい。別の世界にナノマシンが行ってますね。観測も出来ませんが……なんでしょうこの生物」

「この世界の人間は虚無を使うの？」

おかしい。人間と、わけのわからない生物が戦っている。人間なのだが、生体反応が人間ではない。もつとこつ……。

「禍々しい。キモチワルイ。あんな生き物が人間か？ 虚無を使ってる方は人間だが」

「ヴァリヤーグじゃ」

バつと俺達は振り返る。

他の世界に意識を向けていたせいで、まったく気付かなかった。

そこには、数人の護衛らしきエルフと、一人の老人が立っていた。

「ヴァリヤークってのはこの穴から続いている世界に居る、人間もどきのことか？」

「そうじゃ。六千年前、こちらの世界に押し寄せた悪魔達じゃ。一緒に穴から出てきた人間が始祖と呼ぶ者が、押し戻し、封印したのがこの穴じゃ」

ふーん。

「つまり、お前らが虚無を嫌っているのは、この穴から出てきた悪魔と一緒に出てきたら始祖ブリミル。それも悪魔だと？ この穴が繋がってる世界でも戦ってるぞ？」

「それはわかっておるのじゃが。虚無の魔法でこの穴は開いてしまった。だからじゃ。あちらの世界から此処につないだのが虚無じゃ。だから我々は嫌っておるのじゃ」

ああ、そう言うことね。

「つまり、そんな虚無を崇める人間は蛮人だと」

「そうじゃ」

なんてつまらねー争い。嫌われたら嫌う。それで人間はエルフを嫌った。精霊はエルフに味方し。人間は独自の魔法を構築。なんてくだらない。

「良いのか？ そんな大事な事俺たちに言っちゃって？」

「構わぬ。お主たちは繋がった世界を見てしまった。言わなくてもわかったじゃろ。わしらはこの穴から再び悪魔が出ぬよう見張っていたのだ。人間ならば、これを利用しようと思うかも知れぬから、

人間はこの地にこぬようにしていたが……」

苦笑しながらこちらをみつめる。

「お主たちは来てしまったようじゃのう」

「自己紹介でもするか？ おれはウイデイス・ハルケギニア。人間の王だ。共和制じゃないから王がいる」

「わしはシャイターンを監視しているエルフ達の統領。レイジールじゃ」

「あれ？ ってことはエルフは此処だけじゃないのか」

「さよう。部族として、かなりの場所に点在してある」

ふむー。じゃあ、部族ごとに統領がいるってことね。

「この穴ふさいでいいのか？」

「出来のぬのじゃ。このように数キロもの大きさで開いているし」

確かに、精霊魔法でも出来ない。ただ、それは感応力が低いからだ。

「なあ、一度この世界全ての精霊との、エルフの契約を切るぞ？ 優先度を俺が底上げする」

まあ、ただでさえ俺の優先度は高いのだが。他の場所で精霊使われたら困る。

「できるならやるがいい」

「サンキュー」

俺は命令をし、一発で切り取る。

「本当にやったようじゃの……」  
「だからやるつつつただろ」

そして、ナノマシンをこちらの世界に全て呼び込む。ああー、マジ最悪。あつちの世界に行つて5年以上立つてるぞ？ どれだけナノマシンが増えてるんだよ。

呼び込んだ瞬間、暴風のようにナノマシンがこちらの世界に流れ込む。

上空の雲がどんどん割れてゆく。

「い、いかん！ あの時と同じじゃー！」

あのとぎつて、こいつ六千年生きてるのか。

「安心しろレイジール。これは精霊みたいなものだ。あつちの世界にいる精霊を全部こつちに移動させてる」

精霊ではないが……。

やはり、この広さならすぐにこちら側に移つた。

「さーて、始めるか。ミラ、シャルロット。移動だ」

二人は頷き、正三角形を結ぶように転移する。

世界全ての土の精霊を動かさないといけないからな……呼びかけが必要か。

《聞け聴け従え。我世界の王ウイデイス・ハルケギニア。命ず、我に従え。理よ、我に従え。世界よ、我に従え。我は世界の王である。我の命を与えられし者よ、歡喜せよ、狂気せよ、粹狂せよ！》

同時に、俺だけでなくミラとシャルロットも同じ詠唱を行っているはずだ。

すぐに、地震のように地面が歓喜する。そこに指示を与える。穴をふさげと。

多分この穴に終わりはない。裏側に繋がっているわけではなく、途中から別の世界に繋がっている。

地面が脈動し、世界そのものが少しずつ移動する。世界にしたらほんの数キロ。」

地面が割れ、それをすぐさまに修正し、穴を埋めるために再度割れる。それを何度も繰り返し、だんだんと穴が小さくなってゆく。途中で結界が壊れたのか、地面の下から何か声が聞こえるが、それを力づくで押し戻す。

一時間くらい経っただろうか。集中のしすぎで、近づいてきた二人に気付かず。三人で頭をぶつけて後ろに倒れた。

「気づけよお前ら!？」

「ご主人様だつて目瞑つてたでしょ!？」

「集中してたわ……」

せつかく塞いだのに最後で台無しだ。

「奇跡じゃ……」

後ろを振り向くと、レイジールが涙を流して膝を着いていた。まあ、六千年もこの穴の向こうに怯えていたらな。

「あほかレイジール。奇跡なんてねーんだよ。結局は誰かがやらなきゃ変わらねー。お前が今まで人間を近付かせなかつただろ? だが、その人間が穴を防げた。劣等種ってバカにするのはいいけどな。

劣等種だつて出来る奴は出来るんだよ。多分劣等種以外は7人しかないいけどな」

「ご主人様……劣等種つて言ってるのはご主人様だけですよ？ 蛮族つて言つてただけです」

かわらなくね？ 野蛮人と劣等種。野蛮 下等な武力でしか生活できない民族。劣等種 格下つてか、出来そこない。同じじゃね？

「コーディネーターとナチュラルみたいなもんですね」

「あまり公開データ持つてくんないよ……例えばアホらしくなる」

実際俺らコーディネーターみたいなものだ。まあ、コーディネーターの方がまだ自然だ。人間ですらないし俺ら。

「ウイデイス殿。本当にありがとうございます。我等の長年の悲願、やっと終わらせることが出来ました」

「んー、別にあんたらの為にやったわけじゃないんだよ。この穴は邪魔すぎる。だから塞いだだけ。ちよつとレイジールに話があるんだけどさ、いいか？」

「もちろんでございます。今日は祝祭を開くつもりなので、主役として、どうぞご参加くださいませ。その後にお話を」

なんだかめちやくちや丁寧になつたな。領土よこせとか言いにくくなつた……。どうやって切りだそう？

## 41 エルフの客人

### 祝祭

俺達は何故か祝祭に参加することになった。

そして思ったこと。まず、塩が無い。砂糖もない。調味料がなにもない！

いやわかるけどさ。エルフは圧倒的強さで人間を恐怖におとし入れているが、数が少ない。独自でやるには限界がある。もちろん、貿易なんて出来るはずもない。

だから、まずい！ 味が無い！ 魚の味が無い！ 肉焼いただけ！ ぶち殺す！

「なあ、レイジール。調味料ぐらい作れ」

「しかしウィディス殿、我々は人間と相容れぬ存在。仕方がないのです」

「俺は人間だぞ？ しかも人間の王だ」

「人間にはとても思えないのですが……見た目以外は」

「お前ら何てただ耳が長いだけだろ？ 同じようなものだ。俺はただ、不老不死で、精霊魔法が使えて、世界の王それだけだ」  
「全然それだけじゃないと思いますけど……」

まあ、こいつらはエルフ。で、あつち人間。俺達はナノマシン。カテゴリーが違うだけなんだがな。

「でも、全然俺達と相容れてないなんて思えないぞ？ 普通に友好的だが？」

お酒注いだりしてくれてる。話しかけたりしてくるし。

「それは、ウイデイス殿やミラ殿、シャルロット殿がエルフにとって英雄だからでしょう。六千年の因縁を取り除いてくれたのですから」

そうか……ただの略奪者なだけだな……。

そこで、俺は精霊に頼んで音を遮断する。

「なあレイジール。俺はな、この国を併合したいと思って来たんだ」  
「何となくわかっておりました。人間の王がわざわざシャイターンを訪れることなど、普通では考えられませんから」

「すまんレイジール。せっかく楽しそうにしているのに、きつと言ったら英雄から暴君だ。だが、出来れば武力以外で併合してもらいたいんだ。武力の場合、エルフが残ったら反逆もありえるだろう。それに、東方を手に入れるまで時間がかかってしまう。最悪エルフ皆殺しってことになりかねない。両者の諍いだって過激になるだろう」

「そうですね。我々は決別して長い。今更そんなこと出来るかと言われると、首を振らざるおえません」



だろうな。

だが、武力だけは嫌だな。しかしこのままだと。

「俺達が出せるものなんてそう多くない。人間とエルフの仲を友好であつたと書き換えること。あとは、仕事の斡旋や、幸せに過ごせるように精いっぱいするくらいだ。あとは、人間とエルフと一緒に住める環境づくりくらいだな」

「記憶を書き換えることもできるのですか……？」

「俺には出来ないが、此処にいない俺の家族がな」

俺はリーンに頼んでおいた、ミラ牛のステーキを転送してもらおう。祝祭でもステーキはあるのだが、まずすぎる。

「これは俺達の方で作った料理だ。エルフ達が食べているものは正直まずい。食べてもらっていいか？」

「では、せっかくのご厚意。頂きましょう」

レイジールはそれを手に取る、一口食べ、目を見開く。

「なんと！ 同じ牛肉でも此処まで違うのですかっ!?!」

「そう。これが貿易のない国とある国の違いだ。各所で作り、それを一か所にまとめて最高の一品を作る。俺はそんな国を目指している。多くの国を一つにまとめ、争いのない、一つの幸せな国を作る。現在の俺の国は、人間が作つたら力国を一つの国にまとめたものだ。俺は全ての世界を一つの国にするつもりだ。それが俺の夢。絶対にかなえなくてはいけないことでもある。今は人間と韻竜しか一緒に暮らしていないがな」

「韻竜もくらしているのですかっ!?!」

「ああ。一緒に仕事をしているよ。竜の姿でね。最初は怯えられて

いたが、今では竜を誰も怖がらなくなった」

だが、エルフの場合はきつと忘却を掛けてもらうしかないな。溝が深すぎる。

「ふむ。確かに理想の世界ではあるのじゃな。だが、きつと民が納得しない。戦争になっても反対するじゃろう」

「俺一人でもこの国を制圧出来るってわかっていてもか？」  
「わかっていてもじゃ……」

だろうな。武力でなんて解決しないとわかっていた。だが、三万年後の未来ではエルフも一緒に生活していた。どこかに成功の糸口はあるはずなんだ……。

「なあ、レイジール。もし、併合の話を受ける場合。どうすればいいんだ？」

「そうじゃな……。老評議会全てに認めさせるしかならうて。だが、王制じゃろ？ 共和制から王制に変えるのは、かなり無理があるかと」

「そりゃそうだ。王制は古い。だが、今はまだ共和制には出来ない。そんなことしたら、国は潰れるだろう。いまは貴族廃止までしか出ていない。国の土台づくりの状態だからな。にしても……老評議会か……。なら、一度うちの国を見に来ないか？ いまはまだ記憶を変えていないから、エルフであることを隠さなくてはいけない。だが、併合した後ならば必ず一緒に暮らせるように出来るが？」

「ふむ……その後に議決をとるのがよいか」  
「あと、うちの国にいる間でいいけどさ。その間だけは蛮族って思わないんでほしいんだ。いや、蛮族だと思っただけでいい。ただ、無闇に蛮族と決めつけないでほしい」

「それは言っておこう。では、老評議会には通しておこう」

「頼む」

そこで、俺は精霊の遮断を解く。

「すまないレイジール」

「いや、成功するか失敗するかわからんしろう。それに、失敗したらきつとエルフは終わりじゃのう」

「失敗したら多分滅ぼすかもしれない。だが、それは言わないでくれ。俺が作り上げた国だ。正統に評価してもらいたい。成功はしてほしいけどな……」

「そうじゃのう……」

多分、俺とレイジールの想いは全く違う。

俺は武力で制圧するのが嫌いなだけ。

レイジールは種族が滅ぶことを嘆いている。

強者と弱者。結局この世界はそれで回っているのだ。

数日後、老評議会の奴らが12人集まった。  
このメンバーが視察に来るらしい。

「えーっと、じゃあこれで全員かな？ それだったらもう行くけど？」

俺はそれぞれを見回す。

「待ってほしい。わしは此処から離れることができぬのでな。かわりにこの子を連れて行ってほしいのじゃ」

レイジールは統括だしな。そりゃこれないか。  
変わりと言った子がレイジールの背後から出てくるが……。  
うん。絶対性格悪いわこの少女。目とか結構ツリ目だし。明らかに気が強そう。

銀髪だけど、光の反射部分が軽く紫がかっているな。髪……ながっ！ 膝くらいまでありそうだ。耳とがってるのは当たり前だけど。

「おじいちゃん。わたしは此処でお役目を果たすわ」

少女がレイジールを見つめ、口を開いた。

「気にするでない。お役目は既に終わっておる。遊んで来るがいい」「うーん……。わかったおじいちゃん！」

そう言っただけ少女はほほ笑む。

案外素直なのか？

少女は次いで俺を見る。

「あなた、蛮族の癖にわたしたちの客人なんですよってね。蛮族の村が楽しくなかったら殺すわよ？」

前言撤回。マジ最悪グランドファザコンだった。

「なあレイジール。こいつお前の孫？」

「そうじゃ。“一応”孫かのう。まだ52歳じゃ」

長寿すぎるこいつら……見た目15か6程度のこいつが52歳……。

俺はミラに視線を移す。

「わかったかミラ？ 年齢は関係ないんだ。お前が14でとまっていても、普通でも、それ以上成長しないって言うお告げだ。見ろ。52歳で身長150ちよいしかなないあの娘を！」

俺はビシッと指さす。

「でも、52歳になればわたしも成長するってことでは？ 身長も胸も。わたしのサーチアイによるとアレはDですよ。まあ、一生Dですね。他のエルフに比べたら貧乳街道まっしぐらです」

だろうな。人間なら大きいくらいだが、他のエルフが規格外すぎて小さく感じる。

俺とミラはケラケラと笑い合う。

そして、娘に視線を移すと、顔を真っ赤にして俯き、わなわなとふるえていた。

「おい、その娘。トイレなら早く行って来い。途中で漏らされたら面倒だ。トイレの場所わからないならレイジールに案内してもら

え

「ちつがーうー！！ アンタ達失礼すぎでしょ！？ わたしはまだまだ成長するわよ！ 100歳くらいまでは成長するんだからっ！ なんてムカツク人間なのかしらっ！」

俺は激怒している娘を無視し、レイジールに視線を移す。

「あの娘の家系は身長が高く、胸が大きいのか？」  
「いんや、皆これくらいじゃ」

俺は娘に視線をもう一度移し、優しくほほ笑んであげる。

「なんなのよその笑みは！？ 突然変異で成長するんだからー！  
うちの家系はたまにそう言う子が生まれるのよー！」

レイジールを見ると、首を横に振っている。

「ふっ……。そうだな。成長すればいいな」  
「そんな同情いらなーい！！ ムキー！！」

こいつもミラみたいに擬音口で発するのか！ 両手あげて感情表現してるし。すごい逸材だ。

「で？ あんたの名前は？」

「ふんっ、聞いて驚きなさい！ サーシャよ！」

「それは驚きだ。どんだけエルフっぽくない名前だお前」

「そう言う驚きじゃないのー！ わたしたちの英雄の名前なんだからっ！」

「へー。わかった。俺の名前はレイジールに聞いているだろうからいいや。じゃよろしくサーヤ」

「全然驚いてないっ!? しかもいきなり名前間違ってるじゃないのよっ!?!」

うるさいなコイツ……。本当に52歳かよこれ? 12歳の間違いじゃないか?

「えーじゃあ、この娘は放っておいて、適当にこの円の中に入ってください」

俺はアルテマウエポンで適当に地面に円を描き、そこに全員を入れる。

「すごい歪んでるわね……。まるでアナタの性格のように」

「黙れサーシャ。ついでに名前はウィデイスだ。だったらお前が円描けよ」

「い、いいわよっ!」

サーシャは落ちていた木の棒で、せつせと書き始めた。まるで砂弄りをする子供のように。

「どーよ?」

胸を張って言うサーシャ。描いた円を俺は一見し、フッと笑う。

「じゃあ、全員円に入ったな?」

「無視するなー!」

わめくサーシャを無理やり円の中に入れ、リーンに頼んで全員を転送してもらおう。

## ハルケギニア王国

俺達が転移すると、リーンが走ってきた。

「お兄様！ これを見てください！」

いきなりリーンが俺の前に、一つのウィンドウを出す。

どこにでもウィンドウを出せるのだが、俺達は使いこなせないの  
で、リーンだけだ。

俺はそれをゆっくりと読んでいく。

「却下」

「なぜにっ!？」

「だから、ナノマシン化はだめだったつの」

「違いますよ！ これはバイオです。生体強化です！ ナノマシン  
化より時間かかりますが、寿命をはじめ、全ての能力面アップです  
！」



「駄目だ。最初は良いかもしれないが、将来人口過多でやばくなる。最低でも、無酸素惑星で生活が出来るようにならないと無理。出来れば、無限に惑星を改造出来るくらいまで。じゃないと実行出来ない」

資料を見ると、平均年齢が7000歳とかなってる。実験もしてないけどな。脳死対策とかで、もとの身体の部分なんてほぼないし。まるで機械じゃない人造人間だ。

背後を振り向くと、老評議会のやつらはポカンと口を開いて茫然としていた。

「どうした？」

「これっ！ 何これ！？」

指さした方向を見るが……。意味がわからない。

「俺の屋敷じゃん？」

「どれだけ大きいのよ！？ 税金の無駄遣い反対！ 独裁者！」

「税金で建ててねーよ！ 税金は街の警備や、区画整理に回してる。これは俺の商会で稼いで建てた家だ」

実際は石油王の資産だが。外見だけは。中はリーンによって改造されすぎてわけわからない。かなり地下まで部屋あるし。

「じゃあさっきの移動は？」

目を見開いて問いかけてくる。

こいつ新しいことに興味津々って感じだな。

「あれは、王族の魔法だ。王族以外は使えないけどな」

嘘ではないし……。

「へー。人間の王族もすごいのね。いいわ。街の探索に付き合っ  
てあげる」

なんて上から目線なんだコイツ！ こう言うの大嫌いだ。

「よしわかった。ミラはサーシャと見学な。他は俺が5 リーンと  
シャルロットが三人ずつ連れて行けばいい」

大勢でぞろぞろ行くのも嫌だしな。

「どうしてですかっ！？ 無理です！ サーシャさんだけは無理！」

ミラが首をぶんぶん振る。

「あたしも嫌よ。あたしは一人で自由に回るわ！」

「うん。ダメ。お前一人にしたら町中に蜘蛛型兵器を暴走状態で投  
げ込むようなものだ。しかたないからお前は俺と来い。他は三人で  
分担して回ってくれ。耳隠してな」

サーシャの首根っこを掴みながら引きずってゆく。

ついでに、耳も人間のものに変える。

「自由に生きたいのー！ って、この地の精霊と契約出来ない！」

「ああ、お前が暴れないようにこの地は俺の許可ないと契約無理。  
てか、めんどいから世界中そんな感じだぞ？ エルフとの契約切れ

てるし」

「横暴！ 横暴だわ！ 精霊魔法が使えないわたし達でどうやって蛮族を殺せと!？」

「そのために使えなくしたんだボケ！ 歩けっ！」

「ヤッ！ いやー！ー！！！」

うるさすぎるエルフ娘を引きずって、俺は首都に向かう。

## 首都

「ねえ、アナタ」

「あ？」

首都に来たのはいいが、俺は首都に詳しいわけではない。

むしろ、ほとんど来たことが無いのだ。どのような形をしているとか、下水がどうなっているとかは詳しいのだが……。

ってわけで、俺が適当にぶらぶらしていると、サーシャから声がか  
けられた。

「蛮族は、皆あなた達みたいに強いのか？ シヤイターンの門閉じちゃうくらいに」

「そんなわけないだろ？ 王族だからだ。人間は弱いからエルフを恐れてるんだろ？ それ知ってるからお前らは人間を蛮族って言ってるんじゃないのか？」

「違うわよ？ 人間なんて見たのあなた達が初めて。と言うか、エルフのほとんどが見たことないわね。昔からエルフの間では人間を蛮族って言ってるの。だから、わたしもそう呼んでるだけ」

ふむ……。そう言えば、交流なんてないしな。先祖が言ってたことで、それが子に伝わるのか。

「だから驚いてたわよ？ 蛮族があんなに強かったなんて知らなかったって。精霊全部持って行かれちゃったって噂流れてるし」

「それも王族だけだな。多分普通の兵士と王族だと、強さの次元が違う。じゃなかったら平民から此処までこれないっての」「え？」

サーシャは目を見開いて驚いていた。

「ああ。レイジールにも言ってたが、俺は捨て子。他も捨てられたり、奴隷だったり身うちが殺されたりした奴らばっかだぞ？ うちの王族はな。まあ、だから国をよくしようって思うのかもしれないが。争いは皆嫌いだが、力が無いと何も手に入れないし、守れない。キレイごとなんて俺らみたいな人間救ってから言っしてほしいよな」

俺は苦笑しながら首都を歩く。

「……ねえ、大変じゃなかった？」

「そりゃ大変だ。王族だぜ？ 元々5つの国の王権をあの手この手を使って一つにまとめたんだ。しかも、国がじゃなくて、ただの平民の子供がだ。纏めてからも問題ばっかりだし。ままならねーよ」

ホントめんどい。人間だったら確実に過労死だな。

「もういいじゃないこれで。こんなに大きい国なんだから。それに、皆笑顔よ？」

サーシャの視線の先には、笑顔で客と話してる店主がいた。店主も客も笑顔だった。

「最初はミラが笑顔になった。次に領民、今は国民。次の目標は世界。決めちゃったからな……出来るところまではやるさ。まあ、最初は笑顔なんてどうでもよかったが、今は少し変わってな」

「そ。ならあたしにも笑顔を与えなさい。“ウィディス”」  
「はいはい。お、ちょうどよさそうな店があるぞ？」

わかったのかわかってないのか、サーシャはそっぽを向いてしまった。

多分、わかっていないだろう。教育プログラムも受けてない子供だしな。

俺はサーシャを連れ、小さなお店に近づく。まわりには、学生や女性客が集まっていたが、外に置いてあるベンチに座っているので、さほど並んではない。

「此処は？」

不思議そうに見つめているが、いいにおいにつられてか、俺の手

を引つ張っている。

「クレープ屋だ。此処も俺の系列ってか、この街は全部俺の経営店だが」

「へー、もしウイデイスが死んだら大変ね」

「国が潰れるかもしれない」

十中八九潰れる。まず第一に、ナノマシンがそれを許さない。例えなってしまうたら、ナノマシンの暴走で宇宙を侵食し、食いつぶす。繋がってる宇宙は全て消滅する。

「あ、早く！ もう前に誰もいない！」

「引つ張るな……」

俺達は一步前に出、飾つてある写真を覗きこむ。

「あら、陛下様いらっしやい」

「ん？ こんちわ。悪いね、目立つかもしれないけど」

「ははは、陛下様が来たつて宣伝になるわ」

20台後半くらいのねーちゃんが軽快に笑う。  
宣伝にするとはやるなあ。

「コレ！ これにする！」

「ん？ チョコバナナカスタードか。お姉さんコレ一つ」

「あ、待って！ トッピングは、アイスクリームにチョコチップにイチゴとバナナ！」

にこにこしているが、もうなんのクレープだかわからないなそれ。バナナ入ってるのにまだバナナ入れるのか。

「んじゃ、それ頼む」

「かしこまりました、陛下は？」

「俺はいらない」

「心配しなくてもお金は取らないよ」

「いや、俺が金足らなくて頼まないはずないだろ？　もうすぐ昼飯だからだ」

「はいはい」

俺マジ陛下か？　すごい適当に返答されてるんだけど？

隣のサーシャは、ただよってくる甘い臭いに期待を抱き、キラキラとした目で作る姿を見つめている。

「はい、出来上がり。落とさないようにね」

サーシャはそれを受け取り、俺は1エキューを台の上に置く。

そしてそのまま離れる。

「ちょっとおつりは？」

「チップでも何にでもしてくれ。どうせそのままでも俺に戻ってくるし」

「そりゃそうだね。じゃあチップってことにしておくよ。ありがとう」

隣ではサーシャがこちらをじっと見つめていた。すごく食べたそうにしているが……。

「食べていいぞ？」

「わかったっ！」

甘い物の前では子供っぽくなるのか。そういえばエルフに調味料なんてなかったしな。

サーシャはすぐにパクつきはじめる。口のまわりをクリームだらけにし、すごい勢いで食べてゆく。

「うまいか？」

こくこくとうなずく。

返事する言葉すらおいしいのだろう。

「……食べる？」

そう言っただけにクレープを突きですが、なんだかもう形もぐちゃぐちゃだし。サーシャの顔もぐちゃぐちゃだし。食欲がゼロになる。

「いらんが。食べられないのか？」

「二人で食べるものなのかと？」

首を傾げながら、指を指す。

指された先には、仲よさそうに食べている男女。明らかに恋人だろう。苦学生なのか、単に二人で食べたいのか不明だが。

「いいから全部食べとけ。そんな食べたそうな顔で言われても困る」

「じゃあ全部食べる」

かぶかぶしてるサーシャを連れ、再び歩き続ける。

次どうすっかな……。

数分後、食べ終わったらしく、ゴミを何処に捨てようか考えているらしい。



「その辺に捨てる」

「汚いでしょう!?!? だから蛮族って言われるのよ!」

「ちげーよ! いいから捨ててみるって!」

不満そうにしながらも、言う通りに地面に投げ捨てる。

すぐに、一メートル程の掃除用ロボットが現れ、それを掃除する。

水で洗浄もする。

まあ、ゴミ箱もあるのだが、今は見せるためにだ。実際はゴミ箱に捨てないと警備ロボットがきかねない。

サーシャは目を見開いて、それを見つめる。

「食べた! ゴミを食べる生き物……」

あーもうめんどいからそういうことにしておこう。

その後、何故か俺に顔を近づけ。んつと突きだしてくる。

「……なんだ?」

「え? クリームついたんだけど?」

「だから?」

「あれ」

サーシャが指さしたのは先ほどの恋人。

舐めとってあげているようだ。とりあえず、子供の教育によくない。サーシャは聖地から出たことが無い。つまり、教育では子供なのだ。

俺はポケットからハンカチを取り出し、拭きとってやる。

「あれは特別おかしい人種だ。真似しない方がいい。普通は拭きと

る」

「そうなのね。あ、ちよつとハンカチ貸して」

よくわからないが、ハンカチを貸してやると、座り込んで地面にポイツ。

すぐさま掃除用ロボットに吸い込まれた。

「……何を？」

「餌でしょ？ この街キレイだから餌少なそうだし」

後で教えないとダメなようだ……結構高いハンカチだったのだが……。

「あー、えらいなサーシャ。次何処行く？」

「洋服」

ああ、確かにな。今の洋服はちょいおかしい。どこぞの民族衣装だ。俺なんて公務用の服だ。

「わかったが、だけど俺も知らないんだよな」

「陛下でしょ？」

「陛下だからこそ知らないんだ。あ、ちよつとすまん。ここらへんで洋服売ってる場所知らないか？」

仕方ないので近くにいたサーシャくらいの子二人組に聞いてみた。

「え？ って陛下様！？ よ、洋服ですかー……」

高級店ってどこだろうとか会話してるが。

「いや、普通に君等が来てる感じの服が売ってるところでいい」  
「あ、それならミラ百貨で……って陛下のお店では？」  
「ありがと。うちのだが行ったことない。助かった」  
「いえ、では」

盲点だった。百貨店なら大体そろっじやん。  
俺はサーシャを連れてその場所に向かう。

数時間後。

やっと帰ってきたが、買い物長いのな。  
俺は女物なんてわからないし、若い店員を一人付け、適当に見つ  
くろってもらった。

帰ってきたサーシャは全身総変わりだ。  
夏っぽく肩まで襟が広がった白い半袖。その中に黒いタンクトッ  
プみたいの来てる。  
下は黒いスカート。下着もやっとなつけたのか。下は布で上は無し  
だったからなエルフ。  
てか、両手に持った袋は何さ。

「重いから持っていいわよ？」  
「さも俺が持たさそうにしてるよに言わないでいい」  
「店員の話だと男が持つって言ってたわ」

まあ、間違っちゃいないが……。仕方ないので持ってる。

「お腹すいたわね」

「んー、じゃあ空いてておいしい場所行くか？」

「いいわねそれ」

サーシャを連れ、空いていておいしい珍しい場所に移動する。

### 一時間後

「すごくおいしかったわ！でも何であんなに空いているの？」

「あれは値段だ。『死神の釜』はおいしいが高い設定らしい。だいたい『ミラ楽亭』って言う安価な焼き肉に流れる」

「よく潰れないわね……」

ミラ牛がなかったら速攻で潰してる。

「で、次何処行きたい？ 遊園地でも水族館でも、映画でも、ボーリングでも何でもいいぞ」

「んー、お菓子屋」

「お菓子……？」

「そうよ。さっきお菓子って言いながら子供がはしゃいでたの」

お菓子屋行くほどの年ではないと思うが……。

「じゃ、ミラ野菓子だな」

そう言えば、ミラのお気に入りのお店だったな。

数十分後。

サーシャはご機嫌で大きな袋を4つ抱えている。

お菓子屋でエキュー金貨5枚も使う奴滅多いな。

「さーて、次行くわよ！」

「荷物がこれ以上増えても持てないぞ？」

「大丈夫よ、次は孤児院だから」

は？ 孤児院？ 何しに行くんだコイツ？

「行ってどうするんだ？」

「しいて言うなら見学？ 最初に言ったでしょ？ “俺達みたいなのがいなくなればいい” って。いなくなってるか確かめに行くの」

「まあ、いいけど。じゃ、一番近場の孤児院に行くか」

「うん！」

って言っても、結構離れてるんだよな。

あれから、移動に数時間かかってしまった。

首都で孤児院は金がかかりすぎるのだ。物価高いし。

結局、首都から少し離れた孤児院を訪れた。

「あら？ こんにちは。陛下様」

「ああ。お邪魔するよ。別に視察とかじゃないから仕事に戻って構わないぞ？ 遊びに来ただけだし」

「はい。きつと子供たちも喜びますので、遊んであげてください」  
「了解」

40台くらいのおばさんに案内され、孤児たちが日中にいるらしい大きな部屋にとおされた。

「あ、陛下だー！」

「へいか、こんにちは」

「はじめまして」

「こんにちは」

やっぱり多いな……。

年齢は1〜16歳くらいだろう。結構孤児院あるんだが、約50人くらいいる。ある程度の年齢からは下の子たちを世話しているようだ。学生服を着てる奴もいるから、学校はもう終わったんだな。

「こんにちは。暇だったから遊びに来た。で、こいつが遊んでくれるらしい」

俺はサーシャの背中を叩き、前に押しやる。

「こんにちは。サーシャです」

ぺこりと一礼する。こいつ敬語使えたのか……。

「こんにちはサーシャお姉ちゃん」

「はじめましてー」

「遊ぶ？ 遊ぼうー！」

「何する？」

わらわらって擬音が似合いそうな勢いで子供たちが群がって来る。

「えーっと。じゃあまずお土産が在るの。皆でお話ししながら食べよう。」

そう言って、買って来た大量のお菓子の袋を差し出した。

この為にお菓子買ったのか……。

「わー、サーシャお姉ちゃん食べていいの？」

「いっぱいあるー」

「コレほしいー！」

「たくさんあるから喧嘩しないで食べなさい？」

にこにこしながら差し出すサーシャ。この反応は珍しいなコイツ。

「おねーちゃんコレ開けてー」

「うん。いいわよ」

子供からポテトチップスを受け取り、開けようとするのだが……無理だろうな。

安請け合いましたのはいいが、どうすればいいかわからないって感じの顔だ。なんか地面にたたきつけそうな勢い。

「……………」

「あー、違うサーシャ。それはこうだ」

俺は傍により、開けてやる。

「し、知っていたわよそれくらい！」

「アホか……知るわけないだろうが。うちでしか扱ってないんだから。素直にわからないならわからないって言え………」

「だって子供たちが……………」

不満そうにしているが、俺から受け取ったポテトチップスを子供に渡していた。

「おねーちゃんぱちぱちする」



隣から新しい子供が飴を持って、喉でパチパチと鳴らしていた。

「毒っ！？ あたっ」

「何で毒なんだよ！ あれは飴に入った炭酸ガスだ！」

「知らないわよそんなのっ！」

わからないのをわからないって言って、逆ギレするのもそれはそれでウザいな。

「お姉ちゃんごほん読んで！」

「いいわよ？」

「待て、お前字読めるのか？」

「それくらいよめますっ！」

それならそれで良いが……。

お、本当に読めるなんて意外。

それから何故か紙芝居になり、子供たちはお菓子を食べながら紙芝居を聞いていた。

夕方

俺とサーシャが孤児院から出ると、既に夕方になっていた。

「んー、今日は楽しかったわ！」

両手を伸ばして笑顔で感想を口にした。

「いいのか？ ほとんど孤児院に居たけど？ 服買ったくらいだし」

「あら？ 別にいいのよ。街の様子は見れたし、ウィディスが独裁的な王じゃないってわかったし。それに何より」

後ろを振り返り、見送りに出ていた子供にサーシャは手を振る。

「親のいない子供たちが楽しそうに笑っていたわ」

サーシャは何だが、寂しそうな笑みを浮かべて呟いた。

「いい国ね」

「俺の国だからな」

「まあ、そう言うことにして置くわ」

最後まで素直じゃない野郎だ。

不意にサーシャは孤児院から続く石を片足で跳んでゆく。確か、あれはけんけんっぱが出来るように遊び心で作ったとか言ってたな。

サーシャは石が並ぶ通りに進んでゆく。

最後の石の上でこちらを振り向き、満面の笑顔を浮かべて言う。

「あたしね、おじーちゃんの本当の孫じゃないのよ」

「あ？」

「拾われたのよ。おじーちゃんに。だから、恩返しに仕事とか手伝ってたの」

あー、ってことはコイツ。グンドファザコンじゃないのか。

「あ、でも親に捨てられたとかじゃないわよ？」

慌てたようにいいつくろつ。

「シャイターンの門って周期で封印が弱まってね。まあ、六〇〇〇年前程ではないんだけど、少なからず出てきちゃうのよ。それを押し戻そうとして、運悪くあたしの両親は二人とも死んじゃって。で、孤児。それでおじーちゃんが引き取ってくれたわけ。おじーちゃんは優しくったけど、あまり幸せではなかったわ。大人たちはあたしの親が世界の為に死んだってしてってるけど、子供は知らないからね。親がないあたしは虐められてたの」

ああ、そうか。コイツは知りたかったんだ。親のいない子供が幸せになれるのか。自分と同じような子が幸せになれるのかを。

「でも、よかったわ。皆幸せそう。幸せなのはすぐにわからないけど、楽しそうではあったから。だから、此処はいい国。以上あたしの結論」

ふざけたように笑い、言い切る。

「いいのか？ それだけで決めちゃって」

「いいのよ。国にとっては孤児なんて一番最後にやることでしょ？ お金ばっかりかかって利益にならないもの。その孤児が幸せそう。それならいい国よ。あたしはこの国になら併合しちゃってもいいかな。エルフにも孤児いるしね」

笑顔なのだが……やはり悲しそうな笑顔だ。

「老評議会も、皆此処と同じような感じなら大丈夫じゃない？ おじーちゃんも最初は最初からその気だったし。あの地を守る意味もなくなつたし、これからは民の幸せを優先させたいって言うってた。だから、これからよろしく。王様」

そう言って差し出した手を見つめ、俺はフッと笑う。  
そして、パチンと掌をぶつけ、そのまま歩きだす。

「いったいなーもっつ！ 手差ししたら握手でしょ！？」

怒りながらついてくるサーシャを確認。

「さーて、帰るぞ。帰ったら豪華な夕飯が待ってる」

「それは楽しみねっ！ お肉は嫌かなー」

「昼飯は全員肉系にしておいたから、夕飯は魚とか野菜中心なはず。いろいろうちで獲れた物食べていけ」

「そうね！ シャイターンはご飯まずいのよ。此処に来るまであんまり感じなかったけど。あつちは生きるための栄養みたいなの？」

まあ、あれじゃあな。俺だったら生きる希望すら失う。

その後、俺達は帰路についた。

41 エルフの客人(後書き)

はあ……。

## 42 砂漠化問題（前書き）

他の人の小説読みまくってたら更新遅くなりました。

思ったんだけど、間違っで殺して転生ってたくさんあるけど。あれ最初に考えついた人天才だね。めちゃくちゃ汎用性高いし。今ではありきたりすぎて自分は使わないけど、考えた人すごいなーと改めて思いました。

## 42 砂漠化問題

### 会議室

今日は久々に家族全員集合中だ。

テファとジヨゼットも、ロマリア関係は終わったとか。まあ、ただ微調整やこちらからの保護は必要なのだが。

で、今は家族楽しく書類地獄 会議中。

家族 + って感じだが。

「それで、君の名前は？」

俺は新しく増えた に声を掛ける。

「あ、はい！ ルーエン・リラウズと申します」

このルーエンと言う少年。ミルドの仕事の手伝いをしていたとか。ミルドは現在色々あり、業務をすることが出来ない。その変わりの少年。14歳らしいが、孤児院育ちで優秀。最初からうちの領で育った子供で、教育プログラムも完遂しているらしい。

ミルドは色々と言ったが、なんでも妻のお腹に子供が出来たとか

で、仕事に手がつかなくて俺が休暇をだした。普通に親ばかりである。

男の子がほしいらしいのだが、俺達はナノマシンで見て、出来るのがミラの妹だって知っている。言えないがな。

ついでと言っちゃなんだが、才人にも子供が出来たらしい。シエスタとの子供らしいが、才人人生舐めてるよな。あいつ仕事にすら就かないで愛欲の日々だし。一生紐でいるのだろうか？ 兵士になって話をしたことがあるが、シエスタとキュルケを残して死んだら死にきれないとか言って拒否されたし。だったら普通の職に言ったが、お前は俺達を引きはがすつもりなのかと怒鳴られた。絶対援助しないと決めた。

まあ、話を戻そう。

「わかった。ミルドの代わりとなるが大丈夫か？」

「はい！ 捨てられた僕が今生きていられるのも陛下のおかげです。このご恩は一生かかっても返しきれません！」

ふむふむ。元気のいいやつだな。ミラより優秀そうだし。

そこで、俺は視線を移す。

「で、サーシャは何故いるんだ？ もう老評議会は帰ったぞ？」

「べ、別に居たいわけじゃないわよっ！ ご飯おいしいし面白そうだから残ったの！ でも、あたしが残ったってことはエルフとの併合の件も上手くいってるんでしょ？」

「ふむ。そのことなんだが、とりあえず全員座れ。ルーエンもな。意見があったら出してみる」

「は、はいっ！」

素直だな。ミラに視線を移す。



「何ですかその目は！ わたしほど素直な子はいませんよっ！？  
もう24時間ご主人様の思いのままです！」  
「夜以外では全く言うこと聞かないだろ……」

俺の言葉に真っ赤になるかと思っただが、サーシャもルーエンも首を傾げていた。教育が足りないな……。知らない奴にほいほいついていきそうだ。ルーエンもサーシャも俺が建国する前だったら100パー誘拐されてたぞ。

「まあ、それはいいが。エルフの件だが……リーン。皆に書類を」「はい」

リーンに書類を配らせ、しばらく待つ。

「これは……不可能では？」

「ああ、テファの言うとおりかもしれん。全員目を通したか？」

見回すと全員がうなずく。

「あの老評議会のじじい共……」

サーシャがギリギリと歯をかみしめてるが、実際エルフが出した条件は嫌がらせでしかない。

これが出来れば併合してやろうって感じた。おとぎ話の、かくや姫が出した条件並みにむずかしい。

「まず、人間からエルフに対する感情の反転。これは出来るか？」  
テファとジヨゼットに視線を移す。

「はい、出来ます。忘却は、使用者の都合のいいように書き込めるので、忘却と言うより上書きでしょうか。ナノマシンで魔法を拡散させればこの星を覆うことも可能だとおもつ」

ジョゼットの言葉にテファも頷く。

これで第一条件はクリア。

ふと、そこう思う。

「ルーエンはエルフ怖がらないんだな？」

ルーエンの方を向いて問うと、首をひねる。

「はあ、見たのすら初めてですし。先住魔法と言いますが、うちの竜だって使えますよね？ 外見が人間とほぼ変わりませんし知能がある。怖がる要素がありません。竜だってうちの国では一日一回は運搬作業してるの見ますしね」

俺達は納得だ。だが、サーシャは目を見開いて驚いていた。

「わかった。で、次の問題なのだが……はっきり言ってこれは難しい。解決策が思いつかないので皆にも意見を出してもらおう。砂漠の緑化。いい案あるか？」

全員が思案顔で俯いてしまう。

「砂漠……まるでおじさんの頭がハゲるように……」

ミラの言葉は無視しよう。

しかし……。

「まあ、間違っちゃいない。一度砂漠化した土を元に戻すなんて神様でもなければ不可能だ。ゆっくりとなら出来ないこともないが、すぐにととなると、難しいを通り越して不可能の領域まで達するだろう。ミラのハゲと言う例えのようにな」

例えは微妙だが、限りなく不可能に近い。

「それならば、ナノマシンを弄って物質を変換しちやえばいいのです。一瞬で出来ます」

「ふむ。それはリーン一人で出来るのか？」

「一人と言うか、マスター権限を持つお兄様しか無理ですねー」

「なら無理だ。俺はそこまで使いこなせてないからな」

出来れば全てが上手くいくけどな………そんなの後数千年は無理だろう。

「あたしが老評議会で意見出してみようか？　こんな理不尽な内容無理よ」

「まあ、サーシャでもわかる理不尽だが、こつちもいきなり併合しろって理不尽な命令だしな。それに、サーシャの権限じゃ無理だろう。いくら統括の孫だからって、サーシャ自信に権力があるわけじゃないしな。そもそも共和制だ。一人で言い張っても変わることはない」

多分、レイジールはこちらの味方をしてくれただろう。だが、統括だからと言って意見が通るわけもない。だからこそその共和制だ。

「まず原因から述べよう」

俺はリーンに頼み、3D立体映像をそれぞれの前に映し出す。

「まず、砂漠化とは何故起こったか。エジプトのように、ピラミッド作成の為に木々を根こそぎ伐採したわけでもない。二酸化炭素を大量排出したわけでもない。気候問題でもない。放射能浴びせた訳でもない。つまる所……」

俺とリーンが事前に考えた案に、次々と×印が空間に浮かんでゆく。

「湿度の低下……ね」

「その通りだシャルロット。現状砂漠の湿度はほぼ20%で安定している。悪い安定だがな。これじゃ水すら集められない。地球でも此処までひどくはないぞ。サボテンすら生えない砂漠だな。この原因は……サーシャ何か知らないか？」

サーシャは言いづらそうにしているが、やがて口を開く。

「戦争……。六千年前のヴァリヤークとの戦争であそこは焦土と化した。それ以来草すら生えないと聞いたことあるわ。それまでは緑豊かだったらしいもの」

つまり、地表の緑どころか、地面の微生物もまるごと根絶やしにしたのか。土も割れて乾燥してしまっただろう。それがこの現状か……。

「難しいな。それだと雨を降らし続けても永劫自然は戻らない。木を植えたって育たないだろう」

地下水もほぼ枯れてしまっているだろうしな……。

「ごめんなさい……。結局エルフは自分たちの責任をなすりつけているだけなのよ。ヴァリヤークは魔法を使えない。つまり、あれはエルフの魔法で焦土にしたのよ」

めずらしくサーシャはシュンとしてしまったが。

「今はそんなことはどうでもいい。これからどうやって緑化するかだ。何か案ないか？」

見回してみると、おずおずとルーエンが手をあげる。

「言ってみる」

「ミラ樹を使うのはどうでしょ」

「それっ!!」

俺とリーンは声を荒らげた。

ルーエンはびくっとしてしまったがどうでもいい。

「そうか……。移動が出来る木々。湿度も保てる。しかも、分裂して広範囲にわたってすぐに緑化出来る。何故気付かなかった」

「まずひたすら大雨を降らしましょう。水脈を太くする必要がありません。ミラ樹はどこまでも根をすぐに張れるので、水脈まで掘らせる。木々によって湿度が戻れば、何れ土も元に戻りますね。大きな果樹園となり、そこでエルフを働かせることもできます」

俺とリーンは次々と計画を進めてゆく。

「ルーエンよくやったな」

「え、えへへ。ありがとうございます陛下」

「自信持っていていいぞ。ミラより役に立つ」

「ひどすぎる判決にむせび泣きますっ！」

まじで泣き出したミラは放っておこう。

「まずテファとジョゼットは人間からエルフへの好意を反転。エルフから人間への態度を反転させる」

「はい！」

「あとはリーン、ミラ樹を一本送れ。同時に大量の雨を。命令するまではいくらでも分裂していいと言っておけ」

「はい！ もつと種を増やしたいらしいですから喜びますね」

「他は併合した後の案件と、それに伴う書類処理。ミラとサーシャはお菓子でも食べてろ！ では始め！」

「異議あり！」

まだあるのかミラとサーシャめ。

「何だ？」

「わたしはお菓子禁止の命令を受けてますが食べていいのではありませんか！」

「あたしは此処のお金持ってないわ！ 金品を要求する！」

もう別に驚かないさ……こいつらはこんなもんだ。

「好きにしる。金は……俺の私財から払うからルーエンにもらっててくれ」

「やったー！」

手を叩きあって喜ぶ二人だがわかつているのだろうか？

戦力外通達してやったのだが……まあ仕事はかどるからいいや。子供がお小遣いをせがむように、キラキラとした目で二人がお金

をもらっているが、まあ子供だからいいや。

「テファ。この二人を首都に適当に飛ばしてくれ……」

テファはすぐに二人を飛ばす。

まあ、エルフがなじめるかの実験も兼ねて。

「あ、そだテファ。お前も耳戻していいぞ？」

「いいんですか？ もう数年ぶりですね」

「ああ。長い間すまなかつたな」

「いえいえ」

テファは久々に長い耳を披露した。やっぱりこの方がいいな。

竜とかだつて人間より竜の姿が好きなようだしな。元の姿が言い  
に決まってる。

それに、ぴこぴこ嬉しそうに動く耳が面白い。

「テファちょっとこっちこい」

「はい？」

テファを近づかせ、その長い耳に触れる。

「あふ……くすぐりたい」

「なんか久々だなー。この耳。確か感情に連動して動くとか。ます  
ます考えてることがわかりやすくなった」

俺はその耳を見つめ　　噛みついた。

「ひゃうっ！？　なぜかぶかぶするんですか！？」

まるで釣り糸のようだ。シャルロットも噛みつきたそうにうずうずしてるし。

「シャルロットも、もう片方がいいぞ?」

やはり噛みつきたいようで、すばやく移動し噛みつく。

「なんでっ!?!」

涙目で真っ赤に成りながら抗議するが、この耳はいい耳だ。

「なんひゃほもひろいふぁ……かぶかぶ」

なんて言ってるかわからないが楽しそうだ。

そこで俺は離す。少し唾液が着いているが……まあいいか。俺のすぐ後にジョゼットも噛みついてるし。

さーて俺は、書類書類。

楽しそうに噛みついたり噛みつかれたりしてる三人を放置し、俺は書類処理に取り掛かる。



### 43 無理やりに久々の休暇（前書き）

才人がどんどん屑に……。。

### 43 無理やりに久々の休暇

#### 書室

『ぺったんぺったん』

緑化計画を開始して既に6ヶ月。

砂漠自体は戻らないが、一見は緑豊かって感じた。実際は濡れた砂場って感じだが。

動物もかなりの数を放逐しているので、いずれ自然も戻るだろう。ところどころに微生物の混ざった土も置いてあるし。

それよりも、テファとジヨゼットに頼んだ反転。これが変な方向に進んでしまった。

人間からエルフに対してはもう敬意と言うか好意を持っている。大好きって感じた。恐怖や畏怖が反転してしまっただせいだろう。

エルフからは人間は尊敬されてしまった。お互い尊敬するっていうわけのわからない状態になってしまった。

このままでは、ハーフエルフがかなり誕生しそうな勢いだ。自分的には純エルフってのもほしいなとは思っているが。人間と混じると大部分が劣勢遺伝するし……。

それに、寿命が違うから未亡人が大量に発生してしまう。バイオで延命するってことも出来るが、そんな生態系の破壊はしたくない。

何のために開拓地の生物を一か所の地域に送ってるのか、意味がわからなくなってしまう。

『タンタンタン』

「……陛下？」

「何だルーエン？」

『タタタタタン』

「何をしているのですか？」

「書類だ書類。なあリーン。俺達世界狙えるんじゃない？」

自分の机で書類を処理しているリーンに声を掛ける。  
もちろん作業しながらだ。

「あたりまえですよー、お兄様。秒速10枚の乱れペツタンですか  
らね」

『ババババババババババ』

両手に持った印鑑が見えない程の速度で、判を押してゆく。偏在は紙の移動の補助だ。

「秘儀・無限連打！」

「いたた！？書類飛んできてます陛下！」

「だまつとれミッシェル！今の俺には誰も触れられない！」

偏在の書類移動が間に合わず、書類を弾き飛ばしながら印を押す。

「陛下お願いしますよ、まったく内容見てないじゃないですか！？ それ結局僕がやるんですよ！？ そもそも名前間違ってます！」

「徹夜は君の仕事だ。行くところがあるんだ。こんなものやってる暇はない。ルーエンこれ」

俺は書類の束をルーエンに投げつけた。それを慌てて受け取り、ルーエンは読み始める。

「これは？」

「エルフのこの街開発。併合すらしてねーのに勝手に森の果物食ってるし。俺が放逐した動物も狩りやがって。まるでこっちが無償で食べ物与えてるとかわらねーよ。動物増やそうとしてんのに片っ端から食いつぶしやがる。併合しないなら潰すって言うっておけ。それ渡した瞬間に併合が決定される。ダメなら条約違反で殲滅。約束も守れねーでどっちが蛮族だって話だ」

約束は守ったのに、あつちは守らねーで好き勝手とかありえん。あんな民族潰した方がいいかもな。

「ウイデイス。それはあたしが持って行くわ。あたしも確認したけどエルフの条件はクリアしたはず。約束守らないなんてエルフの品格を貶めてる」

「んー、サーシャが出来るなら行って来い。精霊との契約許可しといてやるから」

「やった！ 久々に精霊使えるわ！」

そんなにうれしんだらうか？ まあ精霊は王族が独占してるわけだけだ。

だが、文句は言えないだろう。エルフは精霊を使えるから人間を

バカにした。そして精霊を独占していた。今は、俺が独占しているからエルフは使えない。単純な武力構造だ。

サーシャがルーエンから書類を受け取り、嬉々として窓から飛翔していった。

「よし終わった！」

俺は最後の書類を弾き飛ばし、立ち上がる。

部屋には踏む場所が無いくらい書類が散らばっている。ルーエンは踏んでもいいように、靴を脱いでいる。

「俺はギーシュと遊び、もとい視察に行ってくるから」

背後の窓に足を掛けると、後ろから誰かに抱きつかれた。

「ま、待ってください陛下！　せめてまじめに仕事をしてから遊びにっ！」

「ええい離せルーエン！　俺はギーシュと雑談しにいくんだ！」

「離しません〜！　もう二日も僕は寝てないんです！　死んでしまします！」

「俺なんて一週間は寝てない！」

「陛下は寝なくても大丈夫な身体でしょ！」

くそ。最近ルーエンが慣れてきたせいで俺の威厳がきかない。ナノマシンのこと黙ってればよかった。

「あ」

「？」

「転移するわ」

「っ！ 待ってくだ  
」

ルーエンの悲鳴の途中で、俺は転移した。

## 学院

そういえば、ギーシュは今年で最終学年だな。終わったらうちで働いてもらいたいところだ。今まであいつとは何回も雑談してるかわかるが、信用出来る奴だ。

で、学院についたはいいが誰もいない。

俺はナノマシンで調べると、どうやら今は昼食の時間らしい。ギーシュは………いたいた。

学食がある建物に向かい、その大きな扉を開く。

「たのも……！」

なんかめっちゃくちや目立ってるけどいいか。全員こっち向いて驚いてるし。そういえば、いつもは広場かギーシュの部屋で会ってたからな。

そんなことを考えていると、こちらに大慌てで走ってくる教員達。

「へ、陛下！ 何度も言いますが事前に連絡を！」

「うむ。今度から気をつけよう」

「毎回そう言っただけで連絡しないではありませんかっ！」

いやいや。だってね、俺の仕事って不定期すぎていつ暇になるかわからないわけさ。前にギーシュと会ったのだって半年くらい前だし。

「とりあえず自由にしていいぞ？ 今回も視察とかじゃないし。

俺は……お、いたいた」

教師の横を抜け、全員の視線を浴びながらギーシュの所に向かう。

「ギーシュ……お前は相変わらず女に囲まれてるな？」

ギーシュ付近は女ばかりだ。最近はかなり努力をしているらしいからな。主に勉強面で。シャルロットとかルイズみたいな優等生がいなくなっただけで今では主席とか。モテ街道まっしぐらだ。

「おや、ウイデイスいきなりだね」

「俺がいきなり以外できたことないだろ？ ついでにうちの国は一夫多妻制ではないからな？」

「そこはホラ、アレだよ。ウイデイスの権力で」

「無理だ。ちなみに俺だってあいつら全員養子扱いだ。お前もそう

しろ」

「いずれ君とは議論しなければいけないようだ……」

「ふ……一国の王に口で勝てると思うなよ？」

俺達は真剣な表情で見つめ合う。まわりは顔を青ざめさせてるが、すぐに、俺達は笑い合う。男の中ではギーシュが一番の親友だ。周りはポカンとしてるが、俺たちにとってはいつものことだ。

にしても……俺は周りをきよろきよろとするが、ギーシュのそばは埋め尽くされている。座る場所ねーわ。

「あの……」

「ん？」

「ギーシュ様とお話するのであれば、わたしが退きましょつか？」

おずおずと、ギーシュの隣の少女が申し出る。

「いや、いい。椅子さえあればいいだけだし」

俺は影の中から適当な椅子をひっぱりだし、ギーシュの後ろに置いて座る。

「な？」

少女は目を見開いているが、こくこくとうなずいている。

「にしても……昼からワインが出る学校って頭おかしくないか？

昔の名残だろうが……直す必要があるな」

「おいおい、我々の楽しみを奪うつもりかい？」

「酔った状態で授業受けるなっつの」



昔から在った学校ではそのルールが続いてるのだ。まあ元国に一個ずつで5つの学校だが。今度見直した方がいいな……。

「それより、君が来た目的はなんだい？ なんなら場所を移そうか？」

「いや、そんな秘密つてわけじゃないぞ？ 才人のことだが……」

才人の名前を聞いた瞬間嫌そうな顔を浮かべた。それでも前は友達だったはずなんだよな……。

一時期は英雄だったのにアイツも……。

「かなり前に連絡受けたが、もう産まれたんだろ？ てか学校どうなってるんだよ？」

「うむ……。4年に進学する前にやめているよ。才人もキュルケも使用人のシエスタも。子どもは……産まれたといえば産まれたね……」

苦そうな表情だなあ……。

「思うんだが……俺の方で確認した情報だと、才人が仕事に就いた情報はない。ミラグループ以外に就いたのか？」

ミラグループ以外……この国でそんなものあるはずもないのだ。缶を拾ってはした金にするくらいしか……。

「才人は職についていないよ。キュルケは……ほら、コルベール先生っていたろ？ あの人と結婚したらしい。研究に情熱を燃やしてるところがカツコイイって言って。才人は墮落してしまったからね」

んむ……確かうちの工学の研究所で主任やってるはず。いつのま

に結婚したんだ……。

「あいつ……どうやって生きてるんだよ？」

「この前まではシエスタの父親の稼ぎ。だが、勘当されてしまったらしい」

「へえ……勘当されたのって才人のせいだったり？」

「うむ……。仕事もしないで一日中家にいる才人と結婚するなんてつてことらしいのだよ。子供が出来たのも……まあ偶然と言うつか何と言つか」

まあ、此処では話せないだろう。一日中やりまくってたら出来ちゃいましたってとこか。うちでは避妊具もないし、墜ろすことも出来ないからな。理由としては人口が少なすぎるからだ。これだけ広い世界で、人がいるのは地球での日本程度。人数で言うで一億に満たないのだ。働かない奴はする資格すらない。出来たなら育てる。捨てたなら一生会わせない。これが方針だ。子供には罪が無いので孤児院には入れるが……、実際俺の両親の産まれたばかりの子供はうちの孤児院にいる。もう一人は知らん。多分両親ともに餓死したのだろう。国で住民登録がされていないのだしな。

「で、今はどうやって生活してるんだ？」

ギーシュは非常に言いにくそうに口を開く。

「シエスタの使用人時代の稼ぎらしい」

「ハアっ！？ それって昔の物価の時だろ！？ いま物価上がってんだから一年ももたないだろ！？」

「そうなのだろうな……一度僕に貸してほしいと言われたのだよ」「で、貸したのか？」

「いや。ずっと連絡しないで、借りるときだけ連絡してくると言う

のにさすがに我慢ならなくてね」

「どんだけ屑になったんだよアイツ……ルイズが屑ならその使い魔も屑だな。」

「貸さなくていい。どうせ返ってこないし。俺だって仕事何回も紹介したが、ずっと断られてる。働く気が無いのだろう」

「だろうね。子供捨てる話までしていたよ。シエスタが泣いて嫌がったらしいが」

「捨てたらあいつだけは俺の権限で処刑しよう。てかシエスタめちやくちやいい子だな。よく才人についていく」

普通だったらとつくに捨ててるだろ。

「子供が出来てしまったし、その前は、才人が働いてくれると願ってたんだろうね」

「いやー、無理だろ。無収入で三人は生きていけないっつもの。いや、森の中で暮らせば……いけるか？ 最悪な生活だと思うが」

ただの放浪者だけ……。

周りを見回すと、ギーシュの周りの女生徒達が顔を青ざめさせていた。

俺は一度、くすりと笑い。

「心配するなお前ら、ギーシュなら信用出来る。ウィディス・ハルケギニアが保証する」

「おいおい、いいのかい？ 国王陛下がそんな軽いこと言って？ 実際僕はまだ就職先きまつていないのだよ？」

そんなことかと思ひ、俺は影から書類の束を取り出し、ギーシュ

の前に置く。

「お前の能力で出来そうな仕事一覧。全部首都勤務だけだな。ミラグループ代表の推薦状付き。それ出すだけで就職は決まりだ。家族くらい養える職場だから安心していい」

書類を軽く見、ギーシュは目を見開く。

「おいおい、全部重要な場所ではないかい？」

「お前の普段の行いや、成績面を見て出来そうな場所だ。なによりも」

俺はある一か所のリストを指さす。

「……知っていたのかい？」

「何年親友やつてると思ってたんだよ？ お前がネットワークに興味持ってるのなんて知ってるっつ。Nネットワーク統括部。多分お前が働くなら此処だろ？ うちのリーンの直属になるから教えてもらうといい」

リーンの場合マルチタスクを実体化して幾らでも分身作れるからな。素人のギーシュに付きつきりになっても問題が無い。

「ありがとうウィデイス。Nネットワーク関係は学院に回ってきてなかったからね」

「そりゃそうだ。世界中のデータが集まる場所だからな。必然的に機密が多い。仕事のには大変ではないのだが、信用出来る人間しか置けない。いまいるのもうちの元使用人ばっかだな」

ほぼリーンがやってしまうから仕事と言っても大したことないん

だよな。だが、Nネットワークするのはナノマシン技術全般を扱うことになる。必然的に、俺達がナノマシンだってこともばれてしまう。今それが広まったら国が混乱しかねない。

「彼女たちも連れて行っていいのかい？」

彼女達って……この十人くらいか？

「あー、別にいいが。他も首都勤務しないとダメだぞ？ 別にお前が養ってもいいけど、この人数はキツイ。幸せになりたいなら誰か一人選んで結婚しちまえればいい。そうすりゃ妊娠させようがなにしようが十分養えるぞ」

実際10人くらいなら平気だろう。だが、贅沢出来るかと言われるとキツイ。俺だって他の奴を働かせているのだ。まあ王族と比べると収入も全然違うが……。

リンなんて個人で月に数十万エキューくらいの仕事してるし。物価が上がった状態で、一般家庭の収入は月50エキュー。そういうや前の国では年120エキューだったな。ギーシュの場合多分百エキューくらいもらえるだろう。上が上がれば更に上がる。だが、沢山女がいたら、結婚することだって出来ないだろうし、最悪才人みたいになられたら困るからな。

「ふむ……。だが、僕は全ての女性を……」

「わかってるつつの。だから全員で話し合え。ギーシュといることが何よりも大事ならついていけばいい。貧乏でも一緒にいれば幸せって思えるくらいなら。だが、才人みたいになるなよ？ 俺は親友がそうなるのは嫌だからな？」

「わかった。ちゃんと将来のことも考えて話し合っよ」

その言葉に頷き、俺は席を立つ。

「またな、ギーシュ」

「ああ。次に会える日を楽しみにしているよ」

俺とギーシュはほほ笑み合い、俺は外に転移する。

そこで、王族サーバーにアクセスし、才人の居場所を特定。

「あいつ……エルフの森にいるのかよ……」

もしかしたら、動物や果物を勝手にとってるのはエルフではなく、才人なのではと思ってしまふ。あそこは立ち入り禁止のはずだ。だが、王族の印が入ったPDAがあれば警備などくぐれてしまふ。

俺はすぐに才人のPDAの機能を停止する。電源が入っていないのならば、印の入ったPDAの役目は果たすことが出来ない。ついでに、森の警備に警備ロボットを行かせよう。あの装甲なら剣では断ち切ることも出来ないだろう。

もしエルフではなく、才人が動物や果物を取っていた場合、あの量はおかしい。確実にどこかに売って金を稼いでいる。あそこは王族の私有地であるわけだから、犯罪として捕縛すら出来る。

税金も払っていないのだから、市民権も持っていない。あいつは犯罪者になっていると言うことに気づいているのだろうか？

まあ、それは後でいいや。とりあえず帰るか……。

#### 44 屑才人。(前書き)

大人気な才人が主役！

そういえば、よくストックなくなつたとか書いてる人いますが、あれって完成させたものを投稿しないで保持しておくことですか？ 商業誌みたいに。

自分そのまま書いて投稿とかしてるんでわからないんですが。利点とかあるのですしたら教えていただきたいです。理由とか。その方が良ければそうしてみるので。

## 44 屑才人。

### 書室

数日前、サーシヤが聖地から帰ってきた。

併合の件は上手くいったようで、晴れてうちの領土となったわけだ。

エルフには仕事の幹旋と、エルフの森の管理をさせている。エルフがストッパーになって、今まで東方にいた人間がまだこちらに来ないように、境界には無人蜘蛛型兵器を多数設置している。上空には無人ラプター。もうすでにラプターですらないものを設置。N技術により、完全な永久機関になってしまっている。空気中の、変質していないナノマシンを一直線に変換させるレーザーみたいなものを搭載し、弾すら必要が無い。情報を共有しているせいで、一直線上が一瞬で空気中のナノマシンの状態に還元される。ナノマシン圏内では、それが最上位命令とされるので、ダイヤモンドだろうと星だろうと、一瞬で空気に変換されてしまう。一定以上の土に変換されたナノマシンを通過すれば消えるのだが、見えないし防げない避けられない。最悪な攻撃だろう。

まあ、とりあえずは……。



「リーン、部品製造の自動化はどの程度まで出来てる？」  
「えーっと、80パーセントくらいでしょうか？ 搬送とかは無理ですが、箱に入れる状態までなら大体は」

ふむ……魔法が使えなくなったら確実に混乱が起きるからな。貴族の争いは先に消しておいたが、生産系の魔法はきつい。兵士は……地域で魔法を使えるようにして、未開拓地開拓で頑張ってもらうかな。メイジ部隊を5万人から増やさなくてよかった。まあ、メイジ部隊は操縦技術も基礎に入ってるから使えるっちゃつかえるか。

「魔法消し去ったとして生産率の低下は？」

「現状だと13%ですね。仕組みは出来ているので、その部品さえ先行で作ってしまえば、一か月で1%まで落とせますねー。そのあいだ機械製造関係が全部とまるので、一か月の利益は下がると思いますが、在庫がかなりあるので、そこまで被害はないです」

「ふむ。一か月そっちに専念させてくれ」

「わかりましたー」

それから組み立てて、人の確保……。

「魔法廃止はいつくらいから開始できそうだ？ 製造システム全て完成した後と考えてだ」

「そうですねー、わたしが偏在で組み立ててれば4カ月くらいでしょうか？ 問題が出たことを考えて、多めにみると半年ほしいです」  
「わかった。頼む」

東方に交渉に行く前に、魔法廃止をしたい。あっちが混乱しているならば、チャンスだ。あっちの技術は、全て一からの製造ではなく、最初は錬金だ。ならばなくなったら経済に大打撃。

混乱を考え、計画は約一年後か。もしものために、新型無人機開

発しておくか。

「あ、そうだお兄様」

「ん？」

「エルフの森に送った無人機が何体が破壊されています」

あっちゃー。それ才人のせいじゃね？

「エルフに破壊されたわけじゃ……ないよな？」

「エルフは精霊魔法使えなくなってますからね。あの装甲は破壊出来ません。検証結果から市民ではありません」

もう誰かわかるじゃん。よくアイツ剣で破壊出来た。

「生命反応は？」

「3つですね」

才人、シエスタ、子供。決まりだ。

「この国の教育制度どうなってたっけ？ 片親の場合とか」

「片親の場合、仕事中は孤児院に無料で預けることが出来ますね。」

あと、援助金がです。まあ、子供が16になるまでですが。援助金が出ますが、軽い仕事くらいしないと大変かもです」

ふむ。才人がいなくなったらシエスタは働くしかない。子供と24時間一緒にはいられない。いまとどっちが幸せだろうか……。現状犯罪者なわけだから、あそこに住まわせることは出来ない。才人の性格からして、守るためとか言って精霊魔法の使えないエルフじや下手したら殺しちゃう。シエスタにとってどちらが幸せかなんて俺は押し付けられないが、選択は出してやるか。シエスタだって被

害者だしな。

はあ……俺、才人気にいったのにな……。

「リーン」

「はい」

俺は立ち上がり、他の奴には仕事を続けるように言う。

「罪状は？」

「不法侵入、窃盗、器物破損、危惧種殺戮でしょうか？」

あその木々は全部ミラ樹だ。それを切って燃やしたりしてゐるからな。動物だつて結構少ない種を置いてある。あそこなら食べ物に困ることはないと思つたからだ。王国公式警備ロボットまで破壊している。第一にあそこは禁止区域。

「刑は？」

「うちでは窃盗と殺人、誘拐監禁虐待が最上位です。普通ならば処刑ですね」

ふむ。処刑でもいいのだが……

地球に戻すか。だが、あつちで何気なく生活されるのも嫌だから、軽く仕込んでだな。

「テファかジヨゼット。どっちかついてきてくれ」

二人は書類から顔をあげ、目を合わせる。二人とも机の上に視線を移し、書類の少ないジヨゼットが立ち上がった。

「リーンもついてこい」

二人を連れ、エルフの森へ転移する。

## エルフの森

現在、俺達は三人は森の河川敷を散歩中。

まあ、地面固めて石置いて無理やり水流してるんだけど。散歩つても、住むなら水があるかわら沿いだろうなっただけど。

ジョゼットは杖装備。

リーンは最終兵器リーン状態だ。最終兵器形体がなんかレベルアップしまくって怖い。でかい機械の羽に目のような宝玉がたくさんついている。なんでも、そこからレーザーが出るとか。

ストライクフリーダムでも壊せそうな勢いだ。

「なあリーン。一番住みにくい地球って何年だと思う？ 非公開データ閲覧許可する」

「西暦3236年ですね。地球の78%がが砂漠化。一般家庭以上は全て他の惑星へ移動。犯罪者などしか地球に残っていません。住

める状況でもなく、自然なんてほぼ皆無。最後にのこったコロニーがなんとか稼働中。生きるために人肉も食べてます。翌年にはコロニーの稼働限界により、空気清浄も水確保も不可。汚染物質によって地球に人類はいなくなりませう」

「ほう。時間軸の固定は？」

リーンの方を向くと、ニヤリと笑ってくれる。

俺の考えはわかっているようだ。

「ジョゼット」

ジョゼットはくすくすと笑っている。

なんて俺好みの女達だ。

まあ、二人とも才人のことは報告で知ってるからな。女としては許せないだろう。

「さて、此処から一キロだ。確実に戦闘になるから準備な？ まあ、俺一人で余裕だと思うが……一応な。最悪殺してもいいが、出来れば生き地獄に送る。まあ、才人程度なら余裕だろ」

「はい」

このあたりから警備ロボットの残骸が現れ始める。あと動物の骨。切断された樹。

せめて掃除しろよアイツ……。

少し歩くと、一人の人影が見えてきた。

姿から、才人ではないだろう。

俺達が近付くと、ビクッとしてこちらを振り向いた。

多分シエスタだろう。

多分と言うのは、面影があまりないからだ。頬はこけ、髪はぼさぼさで伸び放題。洋服だって色落ちした布のようになってる。

胸に抱いた赤ん坊もこのままだと死ぬ。母乳があまり出ないのかもしれない。母親があれだけガリガリだと……。動物は退避させ、果物もならないように命令してあるからか……。悪いことしたな。

「リーン。状況」

「母親はこのままなら一週間で死亡。子供は数日で死亡。要因は共に栄養失調、餓死。もし今から栄養を与えても死亡します。屋敷での集中治療ならば確実に助かります」

ふむ……。

シエスタは、リーンの言葉を聞いて口をぱくぱくするが……声も出ないのか……。

地面に横になり、立てないでいる。

「会話が出来ないな。なあ、俺が質問するから。“はい”なら右手の人差し指を動かせ」

すこし人差し指が動いたことから、わかったのだろう。

「リーン、多分食べられないから栄養剤を注射してくれ。さすがに飢餓はエリクサーでも無理だ」

「はい」

リーンが圧縮系の数種類の注射を転送させたのを確認し、質問に移る。

「なあシエスタ。俺が誰かわかるか？」

人差し指が動く。

学院の時何度か話したが覚えていたか。

才人がどうしたか知りたいが……聞けないしな。

おおよそ、得物を探して遠くまで行ったんだと思うが……。

「このままだとシエスタも子供も死ぬのはわかるよな？」

ぴくりと動く。

「才人を……愛してるか？」

少し間が空き、動く。

「一応愛してるか……これで動かなかつたらどうにでもなつたんだが……。」

「子供を愛してるか？」

すぐに動く。

「ふむ。多分子供の方が大事か……そりゃあな。今の生活だって才人のせいだし。」

「此処で生活してるのは才人の提案か？」

肯定。

「此処で死ぬまですごいたいのか？ 十中八九すぐ死ぬが」

否定。

「子供を助けたいか才人というのか。どっちかだ。才人は仕事したく

ないみたいだからな。才人と居たいか？ 子供はすぐ死ぬぞ？」

否定。

「誰よりも子供が大事なのか？」

肯定。

そこで俺は二人に視線を移す。

「決まったな」

「「ええ」」

頷き合い、何をすればいいか決める。

そろそろ来るか……。

「ウイデイス・ハルケギニアの名のもとに、シエスタとその子供を市民とする。平賀才人を、犯罪者とし、次元追放を決定する」

そこで、俺は影の中からアルテマウエポンを引き抜く。

「きますす！」

その瞬間、俺は振り向きざまに剣を振る。

ガキイイインと甲高い音をたて、振りぬく前に何かに当たり、火花が散る。

「さて。聞いていたか？ 平賀才人」

「……」

才人……今では面影すらない。ぼさぼさの長い髪の毛に、髭をぼ



うぼくと生やし、下半身にだけ腰布を巻いたような姿。肌は浅黒く、  
亜人のように太い腕に、大きな身長。まんま原始人だ。

「お前は何処でそうなってしまったんだろうな……才人。俺は結構  
お前が好きだったぞ？ 言葉すら忘れてしまったか？」  
「ウイデイス……」

言葉は覚えてるんだな。

「お前は何がしたかった才人。こんなになつて、シエスタや自分の  
子供が死にそうになつてまで、何がしたかった」

才人の髪で隠れた目を見つめ、俺はゆっくりと問う。

「幸せになりたかった……好きな奴といればそれでよかった」  
「なら何故俺が仕事を紹介した時に拒否し続けた。幸せになれただ  
ろ？」

「それだと一緒にいる時間が少なくなる。それに、俺はまだ学生だ  
った」

ふむ。こいつの頭はおかしすぎる。確かに地球ならば学生だ。大  
学卒業までは親が面倒を見てくれるだろう。だが、此処でこいつに  
親がいるわけじゃない。此処では16で働いてる奴なんて腐るほど  
いる。無理やり地球の普通を、こっちの普通として当てはめるバカ  
はいない。地球の常識は、こっちでは異常だつてことに気付いてい  
るだろうに。

どっちにしろ、最初は学生だったかもしれないが、途中からこい  
つは学校をやめてしまった。地球だとしても、それからは社会人な  
のだ。いつまでも学生気分にいるなんて甘すぎる。

「お前は家族を持ってしまったのに……ヒドイ奴だな。才人」  
「それはお前だっ！ お前が国さえ潰さなければ！ 俺は貴族として国から金がもらえた！ そうすれば幸せになれたんだっ！ 貴族制度さえ廃止しなければ！ あのままだったらよかった！」

もうダメだコイツは……シエスタだつて驚きすぎて目見開いてるし。

「才人……何故シエスタがお前に惚れたか考えたことあるか？」

「……」

「貴族に虐げられ、平民は貴族に逆らえないとずっと思っていた。そんな中で、才人は貴族に勝ち、平民の希望だったんだ。まさしく英雄だった。だが、そんなお前がなぜ貴族に執着する。しかも、墮落した貴族の代表のような考え方だ。俺はそう言う貴族が大嫌い。貴族制度を廃止した。一度はお前もそれをよしとした。都合が悪くなったからって言い訳するな。何処の子供だ！ 一度決めたら変えることは許されない！ そんなお前に家庭を作るなど不可能なんだ」

アルテマウエポンの切っ先を突き付け、才人に宣言する。  
不可能だ。コイツに再起は不可能。この世界に存在することは不可能。

「う……うあああああああ！」

獣のように向かってくる才人の脇腹に、アルテマウエポンの腹で叩きつける。

感触的には骨が三本くらい折れただろう。

「なあ、デルフ。なぜお前が居ながらこうなってしまった」

俺は才人のもつ剣に問いかける。

「すまねえ最強の王さま。何度もとめたが無理だった」

柄をかたかたと震わせて喋るデルフの答えに、俺はため息をつく。

「くそっ……デルフ……お前もアイツの味方なのか!？」

「もうついていけねーよ相棒……。今回のガンダールヴは壊れちまった」

だろうな。人間として壊れてる。

俺は一瞬で近づき、デルフを奪い取る。これで、才人は身体能力強化が出来ない。

「才人……地球に帰るか？」

「……は？」

「俺はそれが出来る。帰りたかつたんだろ才人？　こんな生活がしたくて此処にいるのか？　向こうなら幸せになれるんじゃないか？」

そこで俺は視線を移す。才人が獲ってきた得物へと。

「リーン」

「生体情報。登録情報から、エルフです」

リーンに確認するが……やはりか。

「お前は民を喰らってしまった。もうこの世界に置くことは出来ない。処刑……あるいは地球への強制送還。どっちがいい？」

「あれは亜人だろ？　人間ではない」

「いいや。エルフは民だ。耳が長いだけでよく罪もない人間を殺せるな」

それほど切羽詰まっていたってことはわかるが……許すことは出来ないだろう。

「帰るか？ 此处に残るか。どっちだ？」

才人はしばらく黙っていたが、口を開く。

「あつちには親がいる。子供が居ても何とか出来る。なら、俺“達は帰るよ”」

「そうか、なら“才人”を送ってやろう。リーン、ジヨゼット」

二人は頷く。

「座標軸固定、時間軸固定。次元の脆弱箇所を繋げます。対象は地球」

リーンが固定し、目の前が揺らぐ。

《ワールド・ドア》

今回は空間に穴をあけるわけではなく、逆召喚の鏡として開く。鏡は白く光り、向こう側は見えない。

見えたとしたら、それは最悪な地球だろう。

「さよなら才人」

「ああ」

才人はそう言ってシエスタに近づく。

「あっちなら幸せになれるよシエスタ。俺の両親が助けてくれる」

此処で自分が働くとは言わないのがバカだな。  
さてっと。

### 《ストップ》

久々の魔法で、才人の動きを止める。

「残念だが、その二人はうちの国民だ。次元追放のお前だけ……  
一人で行けっ！」

一瞬で近づき、鏡に才人を蹴り飛ばす。更にアバラを折ったようだが……下手したら肺に突き刺さってるかもしれない。

鏡に才人が入り込み、鏡は砕け散る。

「任務完了。下種は処分した。殺されたエルフを確認後、魂から蘇生してくれ。ほとんどの肉は才人が喰ったしな。シエスタと子供は屋敷で治療を。終わったらこれからのことを教えてやってくれ。以上」

「はい」

二人の返事を確認し、才人から奪い取ったデルフに視線を向ける。

「なあ、デルフ。これでよかったか？」

「ああ。ありやもう無理だろ。よかったんじゃねー？」

「そうだな……デルフ。お前はもう眠れ。疲れただろ？」

「そうさせてもらうかな。罪もない人間を殺したり疲れた。じゃー

な……王サマ……」

パキパキとデルフの刀身が錆ついてゆく。

そして、ぼろぼろの錆びた一本の剣となる。しゃべることもない。次のガンダールヴが現れるまでは、このままだろう。

俺はデルフを影の中に落とし、長い眠りに就かせる。多分、もう起きることもないだろう眠りに。

リーンとジヨゼットはシエスタと子供を連れて転移していた。

俺は、殺されたミラ樹の補完を命令し。動物たちを森に戻す。

そこで、俺も屋敷に転移する。

はあ……王族の印までやったのに。裏切られただけだったよ……  
才人。

#### 44 屑才人。(後書き)

なんか夢で、感想を読んできました。

50 行くらいビッシリと指摘されまくってましたね。

夢の中でかなりシヨンボリしました。

#### 45 閑話・地球での才人編（前書き）

出来るだけ屑に書いてみました。

18 禁じやないんでボカシまくってますが。

ハハハ、感想が怖いですねw



## 45 閑話・地球での才人編

\*この話は全て才人視点です。

### 滅亡一年前

「くそっ……いきなり送りやがって」

はめられた。

最初に思ったことはそれだ。俺は地球でシエスタと幸せになるつもりで戻ると言った。だが、あいつは俺一人を地球に送りやがった。復讐してやる……必ず。

まずは両親に会い、保護を頼むか。

とりあえず日本に行くか。

こんな紛争地帯じゃな。

周りは死体ばっかだ。茶色く変色した建物が廃墟のように立ち並んでいる。上空には、黒い雲が覆っている。ところどころ、デジタルのように青い空が見えるが、砂嵐のように映像がゆがんだりしているな。

ハッ、どこの国かしらねーが。ざまーねーな。

とりあえず俺は、何か武器になりそうなものを探す。

くそつ、ウイデイスの野郎アバラ折りやがった……めちゃくちや  
痛え……。病院にもいかねーとな。

そんなことを考えていると、死体の腰に取り付けてある、一つの  
コンバットナイフを見つけた。

銃はとられてしまったのかわないが、コンバットナイフのような近  
接武器は結構残してあった。

コンバットナイフ四本と、取り付けるベルトを奪い取る。  
左手のルーンが輝くことから、ガンダールヴではあるようだな。

腹が減ってはなんとやら。俺は腰につけておいたエルフの肉を腹  
に収める。

そこら中にある死体は、腐っていて無理だろう。

一日程歩くと、灯りが見えてきた。

まずどうやって日本に行くか聞かないといけないな。

灯りに近づくと、見張りの様な男二人。手にはアサルトライフル。

H & a m p ; K の G 3 6 か……。ってことは此処はドイツか？

遠距離はまずい……。近距離ならナイフの方が有利だな。

いや、投擲で十分だろう。

ナイフを二本腰から抜き取り、走り出す。

「貴様っ！？ 何者」

一人にナイフを投擲し、眉間に突き刺さす。

もう一人がこちらに撃つてくるが、遅い。銃の角度を変える速度  
以上で動けば当たることもない。

アサルトライフルを蹴り飛ばし、首にナイフを突き付ける。

「何故お前らが日本語を使うかわからないが。此処は何処だ？」

「あ？　なんでそんな」

「俺の質問に対する答えを言え」

「わ、わかった、此処は連合国、コロニー新東京03だ」

東京……？　連合国？　いつのまに日本は連合国なんてのに加入  
したんだ？　わからないことだらけだ……。

「コロニーとはなんだ？」

「はあ？　汚染物質が流れ込まないように作った楽園だろ？　って  
言っても、500年程前に、保たないと言われ、ほぼ全てが宇宙に  
上がったがな。此処にいるのは犯罪者の子孫ばっかだ」

わからない。全くわからない。

「今は西暦何年だ？」

「頭でも狂ったか？　3236年に決まってるだろ……」

3236年……だと？　俺がいなくなったのは200x年。

偶然……いや。ウイデイスだろう。アイツならこれくらいする。

「ごくらう」

「は」

ナイフで大動脈を切断する。俺の顔を血で汚しながら、バサリと  
倒れる。

二人の男から予備弾倉5つと、アサルトライフルを2つ奪い取る。

「ハハ、ハハハッハ！ ユルサネーぞウイデイス。俺はこの世界の王になり、貴様を殺しに行く。待っている！ 貴様ですら王になれるんだ。俺がなれないわけがない。ハハハハハッハ！」

大声をあげすぎたか、灯りのついた建物の中で、人が動く気配がした。かなりの人数だろう。

「手始めに俺の武器庫と食糧になってもらおうか？ 屑ども」

俺は薄い壁を破壊し、中に入り込む。

中では、俺が入口から入ると思いきみ、待機していた奴らがいる。その背後に俺は現れた。

「ヒヤハッ！ そんな常識にとらわれんな犯罪者共」

相手が動くよりも先に両手のアサルトライフルで殺しつくす。弾が無くなり、捨て去ると、ナイフを両手に持ち、残りを殺す。

「ハッ。よえーなあ。武器や“肉”は後で回収だな。まずは……」

ナイフを手に、俺は奥に進んでゆく。

途中何人か肉を殺すが、更に進む。

「此処が最後の部屋か」

扉を開くと、裸の女に囲まれた40くらいの髭野郎がいた。

「やあ、あんたがリーダーか？」

次の瞬間、俺は一瞬で近づき、リーダーらしき男の首を刎ねる。  
女達は悲鳴すら上げず、俺にすがりつく。

「ハハツ！　これがウイデイスがやってきた王って奴かア！　弱者は強者にすがりつく図って奴だな！　一体アイツはどれだけの女犯ってきたんだろうなア！　こんな誰にでも股開く奴じゃなく、処女をなっ！」

まあいい。こんな汚ねー女でも性処理道具くらいにはなるだろう。残せよ、俺の優秀な遺伝子をなっ！

近くの奴の首を掴み、濡れてもいないゴミ穴に入れるが、なんて糞な道具だろうな。一体どれだけくわえ込んだら、こんな壊れたオナホみたいな穴になるんだ。

「王、連れてきましたぜ」

扉の向こうから一人の男が現れる。

俺はあれから数千の人間を殺し、王となった。王と言っても、コロニー間の移動は出来ず、ここだけだが。

男は、抱えた少女をこちらに放り投げってくる。

「何処にいた？」

「へい。端の廃墟の中で父親らしき男と。そいつを殺して奪ってきました。処女ですぜ」

処女つてのは俺が連れて来いと言ったものだ。此処の女はガバガバすぎて屑ばっかだ。

女を見るが、別にかわいくもないな。中の下程度か。にしても…。

「若いな。どれくらいだ？」

「7歳程度かと。よく此処まで処女だったってレベルですぜ？ 普通5歳なら犯されてやすし」

だろうな。こんな無法地帯じゃな。

俺は少女の首を掴む

「がつ!?!」

さすがに脆い。口をパクパクとし、まるで金魚のようだ。まず、服をはぎ取る。

「いい具合に鳴けよ?」

全く濡れてない少女のソコに無理やり押し込むが、狭すぎる。  
だが、糞女どもよりはマシだろう。

「あぐっ……いつ……あぐっ」

声にすらならない悲鳴。涙を流しているが関係ない。  
舌を噛み切ろうとする口に手を入れて、防ぐ。

「ハハハハ！ 久々だなこの感覚！ 壊れるまで遊んでやろう！  
あぐっ？」

肌が泡立つような感覚……いや。本当に泡立っている。沸騰した  
ように皮がぼろぼろと溶け落ちてゆく。

「どうということだ？」

男に聞くが、男は自分で喉をかきむしり、死んでいた。  
少女に視線を移すが、虫の息だ。

「科学ガスが入ったのか……？」

地球がこうなった原因。光化学スモッグの流出。

酸素との結合により、酸素がある限り無限に増え続ける化学兵器  
それから守るコロニーに穴が開いたってことか……。

目から血の涙が出、喉が焼けるように熱い。いや、焼けているの  
だろう。

「クッ、ハハハハ！ 俺は他の奴と違う！ 王だ！ クソウィディ  
スよりも王としての器を持った男だ！ 死ぬはずがない！」

そこで俺は続ける。死んだ少女は微妙だが、もともと狭いからガバガバよりはマシだろう。

「見るよウイデイス！俺は死なねーよ！お前は俺を殺そうとして此処に送ったのかもしれないけどな！俺はあがき続ける！」

さらにピストンのスピードをあげる。

「くそっ、視界がおかしい……ゴミか？」

ヒューヒューと空気の抜ける音がするが、部屋に穴でもあいたか？あとで修理させねーとな。

王たる俺の部屋に穴など許されないからな。

うおっ……いきなり、絶頂かよ？予備快樂すらないぜ？しかも長い……どんだけで……ん、だ？

長い射精の最中。俺の視界は真っ白になった。気持ちよすぎて意識を失うのか……。

それから数分後。最後の人類が死亡した。

西暦3237年7月23日14:32





#### 45 閑話・地球での才人編（後書き）

レイプなどで妊娠率が高いのは、身の危険を感じて、種を存続させようって組み込まれてるからです。

男の場合もそうですね。瞬間に死ねば全部出せますよ？

## 46 桃悪魔脱走。書き換えました。

### 会議室

才人を送り返し、それから一カ月。

どうやらシエスタも子供も元気になったらしい。

シエスタはすぐによくなったが、子供がかなりの重症だった。と言つよりも、子供だから脆いのだ。少しの油断が命取りである。

普通なら死んでいた子供を、リーンのカプセル治療で治した。

最初見た時はクローンでも作ったかと思った。

で、今は会議室でシエスタに仕事の紹介。

「で、今渡した中でどれがいい？ 多分どれでも子供は育てられると思うけど」

「はっ、はい！ コレが……」

ふむ……使用人ね。

「学院時代も使用人でしたので、時間の都合がつくなら此処で」

「時間はそつちで自由にしてい。あー、そうだ。此処の保育所はどうだ？」

「？」

此処の屋敷の近くには、重要な施設がたくさんある。そこで働い

ているのは元使用人が多いのだ。30代後半の女性もいるので、子供をもった使用人の保育所が此処にはあるのだ。シエスタの子供もそこに預けようと思つてたからちよつどいい。

「そこならずつと子供と一緒にいれるぞ。もちろん他の子供の面倒もみなくてはいけないが、どうだ？」

「そ、それが出来るなら一番いいのですが……」

「じゃあ、それで申請しとくは、部屋は今まで通り使つていい。あとはそつだな。近々親にでも会つて来い」

「え……」

一気に顔が曇つたな。まあ、勘当されたんだよな。

「あー、勘当されたつてのは知つてる。才人とは別れたつてことと、王の屋敷で使用人やつてるつて言えば大丈夫だろう。子供も孫として迎えてもらえると思うぞ？　ちゃんと育てられるわけだし。まあ、出来ればちゃんとしたやつと再婚出来れば一番いいけどな……」

ジツとこちらを見つめるシエスタ。

「……俺は無理だぞ？」

「いつ、いえいえ！　そんな国王陛下様に恐れ多い！」

わからなくもないが、貴族制度なくしたつてのは平民にしたら英雄だからな……。貴族に勝つただけで才人に惚れたくらいだし……。

「まあそれはいい。それより紹介したい奴がいたんだ」

「はい？」

俺はリーンに、中に入れるようにN通信を行うと、すぐに扉が開

き、一人の男性が入ってくる。

その人物を見、シエスタは目を見開き、両手を口に当てて、泣き出す。

「おう！ 久しぶりだなシエスタ！」

よほどうれいいのか、シエスタは声の主を抱きついた。

「マルトーさん……ぐす……」

「つらかったな、シエスタ」

マルトーは優しい目をして、シエスタの頭を撫でる。

こんな表情のマルトーを見るのは初めてかもしれない……。やがて、苦そうな表情に変わり、憎々しげに口を開いた。

「まったく、あの小僧。『英雄』どころか、貴族よりたちがわりー

！」

小僧とは才人のことだろうな。マルトーには全部伝えてあったし。

「そ、そういえばマルトーさんはなんで此処に？」

上目づかいでマルトーを見つめるシエスタ。

そこは俺が説明するか。

「ああ、俺が説明しよう。少し前にな、俺がこの屋敷のコックに雇った。学院のコックは嫌だと言ってたし。料理がうまいのは知ってるから、開発兼コックとしてうちで働いてるぞ。シエスタもこれからはマルトーの料理食うことになる」

「おう！ なかなか見所のある陛下だな。民から王まで全員同じ食

事だ。うめーもんはうめーって言われてな。特許つてのもとつてもらえる。お陰である頃より給金がもらえて困りものよ！ だからな、子供が大きくなるまではシエスタ一人くらい養ってやれるさ！」

ガハハハと豪快な笑い声をあげて笑う。  
シエスタはゆっくりと首を横に振り、

「いいえ、いつまでも迷惑を掛けるわけにはいかないのです、わたしは働きます。それに、陛下の計らいで、仕事もずつと子供といれますので」

そう言って、ニコリとほほ笑んだ。

マルトーはその笑顔に顔を赤らめ、すこしたじろいだ。

「そ、そうかつ！ それはよかつたな！」

おいマルトー、照れ隠しに俺を叩くな。一応陛下だぞ？ お前の手デカイから普通だったらかなり痛いはずだ。ナノマシンだなんて教えてないぞ？ 一般人だったらどうするつもりだ。

にしても……年は離れてるが、ひよつとしたらひよつとするかもな。確かマルトーって独身のはずだし。あえて近くの部屋にしてみるか。どうなるかわからんが。

「んじゃ、つもる話もあるだろうか二人で話せ。マルトーはシエスタの子供みたいだろうから、使用人に連れて来させる。そろそろ定期検査も終わっただろうし」

そう言って、俺は部屋を後にする。二人とも全く聞いてなかったっぽいけど……。

あ、そういえば元学院の料理人と使用人全員こっちにいるの言い

忘れた。まあ、いいか。マルトーが言うだろう。

## 地下牢

### 約半年後

俺は犯罪者が脱獄したとかで地下牢に訪れた。

犯罪者って言うっても、かなりいるので、俺は貴族書南下だと思っ  
たが……。

「はあ！？ ルイズが脱走したっ！？」

「は、はあ…… 申し訳ございません」

俺の目の前で牢を監視していた兵士が頭を下げた。

辺りを見ますわと、かなりの数の兵士が殺されていた。

銃による射殺……か。

「杖は奪っておいたよな？」

「はい。ですが、多分手すりと契約したのでしょう」

トイレの横にあった手すりがなくなっている。そんなものでも契

約出来るのか……。

それで使い魔召喚したんだろうな。

「使い魔はいたのか？ 監視カメラあったら」

「はい。カメラが破壊されるまでですが、大きな人間の男でした。服装が独特だったので、東方の人間ではないかと……」

なら、ルイズと使い魔が向かったのは東方か。だが、銃程度で蜘蛛型戦車群を抜けられるか？

「あと……」

冷や汗をたらしながら兵士は言った。

「有人ラプターが一機奪われました……」

「はあ？ なんでだよ？ 奪われようがないだろ？」

「トリステインの常備軍です。その兵士が殺され、一機」

頭痛いな…… 実際有人ならたいした被害はないが、乗ってるのがガンダールヴだしな。

「で、被害は？ 市民も兵士も合計で」

「死亡124名 重症212 軽傷329」

「ただけやられてんだ……」。

ああ、奪われた後ラプターで殺されればそれくらいなのか。

「あー、うん。わかった。どうせ東方ならいかないといけないからいいや。死んだ奴は蘇生しといて」

「ハッ」



にしても……完璧公開処刑レベルだな。家族いないからあれだが、いたら一族皆殺しだ。

とりあえず無人じゃないから飛行はとめられないが、ナノマシン関係は使用不可にしておこう。あと、敵機として指定。無人ラプター群のところは味方として通り過ぎたんだろうな。

あー、殺しておけばよかった。

## 会議室

半年後

今、俺の目の前にはヴァリエール元公爵と、カトレアがいる。

夫人と、エレオノールは俺が拒否った。

ヴァリエールは、今はトリステインの地方役所をまとめている。かなり有能な上に、民のことを考えているのでまさに適役だったのだ。

カトレアはずっとうちの屋敷に住んでいる。と言うか、職場が近いから住んでるだけだが。

病気は治り、今では元気ではあるのだが。近くに、俺が保護して

いる動物達を入れた動物園があるのだ。その園長をやっている。動物園って言っても、竜とかペガサスとかありとあらゆる生き物を保護しているが。なので、うちの屋敷に住んでいると言う状況。もう30近いので、結婚しないと……とはおもうが、動物が好きで一日中動物園にいる。動物園……出会えないだろうな。いつそルーエンあたりと……。まあ、ルーエンはサーシャがスキっぽいけど。同じ孤児出身同士で、結構仲がいいから、もしかして？ って感じた。おっと、それより本題だ。

「んで、用って程でもないんだけど、どっちかと言うと報告かな。関係ないだろうし」

俺はバサッと投げやりに二人のまえに書類を放る。

「これは……？」

「読めばわかるだろ」

「は、はあ……」

二人が読んでいる間、俺は考える。

本当に厄介な事になったな。

ルイズが召喚した使い魔 それは東方の王だった。

王が力を持つのは厄介だ。ガンダールヴにより、機械の情報を読み取れる。

ラプターの量産……は出来ないだろうが。ついていた武器くらいなら出来るかもしれない。

しかも、ルイズによって情報が流出するだろう。ルイズ自体はあまり知らないと思うが、こっちに来てしまったことから文明レベルなどはバレる。これ以上ない方法で自分たちの領土に敵国のスパイを入れてしまったようなもんだ。

撃退出来ればいいが、逃してしまった。

俺はそれを知った瞬間、魔法が使えるもの全て集め、最優先で無人機を作らせた。自動生産が出来るようになってからは、魔法を全土で使えなくした。これでルイズを殺しても次の虚無は魔法が使えない。召喚も出来なくなつたわけだ。

東方の領土は、ハルケギニア王国と大して変わらない。戦争ばかりやってるこちらより人はかなり多いだろう。めんどくさい戦争になりそうだ……。

人は少ないから貴重なのにな……ルイズのせいで無駄な殺しが増える……。ルイズとか本当疫病神。才人呼んだのだからルイズだし。

「これは……」

そこで、顔面蒼白になつたヴァリエールと、カトレアが声を發した。

「んー、まあ事実だ。交渉しようとしてたんだが、これで戦争確定だ。多分数百万人程度死ぬだろうな。ルイズのせいで。最悪、どっちかの人間が全員死ぬまで。数億つてところか。どうすつか……」

マジめんどい。文明レベルわかつたつてことは、あつちはこの技術が喉から手が出る程ほしいだろう。そしたら攻めてくる。しかも、めちゃくちゃ兵を連れて。下手したら民全員連れて……。魔法使えないから食糧不足もだろうし。あつちは切羽詰まつてるだろうしな。同盟を取るか、国を奪い取るか。確実に後者だろう。あつちの技術なんてこつちにとっては屑同然だし。脅威になる国を残すより潰したほうが早いだろうしな。

「申しわけございません。どのような罰をも」

「だから報告だつたの。ルイズとはもう関係ないだろうが。それよ

りも現状を何とかする方法を考えるぞ」

忠誠誓ってる奴に罰与えたって意味がない。それよりも、どうやってこの現状を打破するか共に考えてもらった方がいい。

「戦争になった場合、勝てる確率はどれ程でしょうか？ こちらの被害状況も」

おずおずと口を開いたヴァリエール。

「勝てる確率ねえ、勝つだけなら現状100%。ただし、その場合相手を皆殺し。あと半年あれば圧倒的な差を見せつけて、運が良ければ降伏してくれるかもしれない」

俺の言葉に目を見開くが。

あたりまえだ、文明が数千年上行ってるのだから。

「まあ、本当は交渉したかったんだけど、多分あつちから攻めてくる。三年以内に。だが、待っているとあつちに盗まれたラプターから、兵器を量産されてしまうから、攻めるなら半年以内だな。今日はいから、なんかいい案あったら教えてくれ。戦争だつてタダじゃないからな。めんどいことこの上ない。じゃ、今日は解散」

そこで俺は背もたれにもたれる。

あーどうしよう。不安要素はガンダールヴだな。最悪、魔法が唯一使える王族が出れば片付くが……。

「アクセス：書室」

目の前に半透明のウィンドウを開き、全員がいる書室に繋げる。

『どうしましたお兄様』

「ああ、全員に命令だが、万が一のことを考えてナノマシンを操れるように特訓。書類は偏在にやらせておいていい。期限は半年。最低ラインは物質召喚。目標は変換」

『わたしは物質変換は出来ませんが？』

新しくテファが映ったウィンドウが開く。

「出来たら生物干渉な。リーンに聞いてくれ」

『わかりました』

テファのウィンドウが閉じる。

自然操作まで出来ればいいんだけどな……。

この場合の自然操作は木などを操ることではない。生物以外の全て。天候や惑星操作など全てが入る。最悪の場合にそなえて、超遠距離から対象を存在ごと消し去る操作も出来ればいいんだが。

てか、ルイズ何で王の養子になってんだアイツ。またあいつ『わたしはルイズ・ロバ・アル・カリイエ王女よ！』とかふざけたこと言ってきたぞうだ。

どう考えてもルイズが死んだらルーンが消えるから保護してるだろ？ あっちの王。

「リーン、無人機は今のところどれくらいだ？」

『ラプター20万 蜘蛛型戦車15万 蛇型10万 ガンダム5万  
ですね。戦艦は1万、空中要塞5000くらいでしょうか。』H A  
L『衛生が50』

あの似非ガンダム量産してたんだ……。

まああんなのガンダムじゃないけど。通信機として丸い球体に、大きな円がくつついた物体だ。どこをどうみたらガンダムなのだろうか。

専用CPUで演算処理をし、通信機を通して行動する物体。まあ、並列回線だから軍よりも軍隊っぽいけど。後ろについた円から、不可視のレーザーを何条も放出するから脅威っっちゃ脅威だが、ガンダムでは絶対じゃない。

ついでにHAL衛星。これがうちの最大攻撃だ。大気圏外から高出力のN砲を打ち出す。放射能汚染はないが、範囲や威力は核を超える。下手したら地殻までブツ壊して自滅しかねない。これは戦闘用ではなく、例えばこの星を捨てなければいけないなどの場合の為に置いてある。集中して撃てば地核まで吹っ飛ばしてハルケギニア終了だ。

未来の俺がめっちゃくちな奴と戦わないといけないって言ったからな。それ用だ。あいつがめっちゃくちゃって言うくらいだから、星レベルの相手だろう。だから、星程度は破壊出来る武装も用意したのだ。

「これって、半年後に1.5倍まで増産できるか？」

『可能です。しかし、ラプターは空中要塞ではなく、新開拓地におくことになりますか？ 空中要塞の建設には時間がかかるので』

「それでいい。あと、CPUを並列回線で繋いでくれ。タイムラグは0.00001秒以下で」

『了解ですー』

これでいいかな……。地上、海、空、宇宙からの包囲。これで挑んでくるなら完全なバカだろう。ああ、でもルイズなら独断で挑んできそう。ワルドの仇とか言ってる。

あとは……向こうが攻めてくる準備してるとか民に流すか。あつ

ちから攻めてくるって思わせないと困る。理由は……こっちの技術を奪い取るため。豊かになった国民なら絶対に許さうとしないだろう理由だ。

さて、俺もナノマシンの勉強すっかな……。

#### 46 桃悪魔脱走。書き換えました。(後書き)

そろそろ帰国します……と言っか、就職先の研修忘れてました。行かないと内定取り消される。

ってことで、落ち着くまできついかも？



## 閑話すぎるお話（前書き）

視点を变えてお送りします。

時間軸もそれぞれ違いますからわかりにくいかも。

## 閑話すぎるお話

屋敷が出来た後、リヤステイ領時代・使用人視点

先日わたしはある貴族に買われました。

貴族って言われるとかなり怖いです。わたしを買いにきたミルドさんは優しくかつたんですが、買ったのは貴族の領主様だと言われ、詐欺に会った気分です。

と、言っても。結局わたしに自由があるわけではなく、買うか買わないかはあちら次第です。

うう……知りませんでした。自分が売られたって。わたしの村はお金がなくて、半年に一度村の子を売ってお金にしていると、あとで聞かされました。仕方ないと言えば仕方ないのですが……貧乏でしたしね。そういえば、妹も何れ売られてしまうのでしょうか。心配です。わたしが12歳で売られたってことは、妹もあと4年で売られてしまうかもしれないですね……。

今は馬車で移動中なのですが、同じ馬車が四つありました。一つに5人程乗ってるらしいです。なんでも、200人になるまでこれを繰り返すとか。それならはじめから200人買えばいいと思うのですが……なんででしょう。

「着いたぞお前ら。失礼のないようにしろよ！」

わたし達を送る奴隷商人が怒鳴ります。  
そりゃあ殺されないように失礼しませんよ……。

入り口側から降りて行くので、わたしは最後ですね。

「あうっ……」

なんで降りてすぐ止まってるんですかー！？

後から降りた人がぶつかります！

いきなり後ろに転びました……ひどすぎます。

ぶつかったのに、前の人全然進んでくれません。しかたないので、横に移動して、これから働く職場を……。

「……おつきい」

思わず声が漏れる程大きいです。

確実に王宮より大きいです。それにキレイですね……庭も大きくてキレイ……。

この地面の石、なんでこんなピカピカしているんでしょうか？

これ外ですよ？ 踏んでいいんですか？ はだして歩いた方がいいのかもしれない。

靴汚いですし……洋服も……。

わたしが靴を脱ぐと、他の人も脱ぎ始めます。きっとここから靴を脱ぐおうちのなのでしょう。

って、奴隷商人さんも脱いでますね……。

「えーっと、これは入っていいのか？」

いえいえ、わたし達に聞かないでくださいよ商人さん。知るはず

ないでしょ？

と、思っていたら、目の前が一瞬で変わりました。ちよつと言葉おかしくなりましたが自分でもわかりません！ え？ なんていきなりお屋敷が目の前に？

後ろを振り向くと、小さく馬車が見えます。あそこにいたはずですが……。

周りも驚いたようで、きよろきよろしています。

そして、目の前にはわたしを買ったミルドさん。そして、わたしより少し上くらいの少年と、わたしと同じくらいの少女が3人。その後ろにたくさんの使用人が並んでいました。

領主様の子供でしょうか？

「ふむ……とりあえずなんで全員裸足なんだ……靴は手に履く人種か……？」

金髪の少年がすぐくえらそうに言いました。

そんな人いたら見てみたいです！ いまの状況がそうですが！

「すみません貴族の坊っちゃん。全員貧しい者達でして、勝手に脱ぎ始めてしまって……」

いえいえ、あなたが一番最初に脱ぎましたよ商人さん！

「お前も脱いでいるようだが……？」

「……」

「ですよー……」。

「そ、その！　それで領主様はどちらに……？」

商人さんが、一人だけ黒服を着たミルドさんに問いかけます。  
ミルドさんは視線を金髪の少年にうつしました。

「坊ちゃんが奴隷を買ったので？」

「まあ、間違っちゃいない。命令したのは俺だな」

ん？　なんか変な雰囲気になってきましたね。

「コホンツ。彼がヴィ・リヤステイ領主、ウイディス・ラ・リバルステイン・ヴィ・リヤステイ侯爵様でございます。ミラグループ代表にも御座います」

ミルドさんが心外だと言わんばかりに教えてくれましたが、開いた口がふさがりません。周りもぼかんとしています。

と言うか、初耳ばかりなんですけど！？

領の名前すら今聞きました！　ミラグループってあれですか！　大陸で一番大きな商会じゃないですか！　それに領主がわたしとあんまり変わらない年齢なんて！　買われた奴隷が皆わかいのって、や、やっぱりそう言うことするために……いえ、でも太った貴族にされるよりはましですが……。見た目はカッコイイですし。あ、でも……。

「……とりあえずそこで一人でくねくねしてる奴。落ち着け。ミラみたいだからな」

「ひどいっ！　わたしはあんなにくねくねするような変態じゃありませんっ！」

ガーン！　変態って言われた！　くねくねしてたのでしょうか……

…？

「あ、ちなみにわたしはミラ・ヴィ・リヤスティね」

なんだか元気な女の子が適当に自己紹介してくれます。

「わたしも紹介します。ティファニア・ヴィ・リヤスティです」

うわー……、胸大きい。と言うか、この家系は美形しか生まれないのでしょうか？ 貴族にしては珍しいですね。太ってもいませんし。

「まあ、とりあえず商人。情報よこせ」

「は、はいっ！」

数枚の紙の束が領主様に渡されます。

多分、わたし達の出身が書かれているのでしょうか。

それをぺらぺらと領主様がめくりまわります。

「なあ、アンタ情報はちゃんと書け。これほとんど偽造されてる。まあいい。ミルド金渡せ」

「かしこまりました」

ミルドさんが大きな袋を商人に渡します。

明らかに多い金額ですが、別にいいのでしょうか。

これで領主様、いえ、ウィデイス様のご主人様と言うことになります。

そこでウィデイス様は視線を移し、

「これから面接を行う」

ええー！？ お金払ったのに試験あるんですかっ！？

「慌てるな商人。その金で俺はコイツらを買った。今は俺のだ。だから」

ウイデイス様の視線が鋭くなり、

「殺されても文句を言えまい」

ゾクつと背中に冷たいものが流れた。

視線で人を殺せるってこういうことなのかもしれない。

あの若さで領主と言つのも納得だろう。

「選考基準。顔や男性経験、年齢、知能などはどうでもいい。そんなの後からでもどうとでもなる。問題は別だ。はっきり言ってこんな当然のことだが、当然すら出来ない奴が後を絶たなくてな。つてわけで面接を開始する」

そう言うと、ウイデイス様は一番左の人の頭に手を置きました。何をしているのかわかりませんが、面接なのでしょう。

それにしてもあの子、髪がツヤツヤです。わたし落ちるかも……落ちたら殺されちゃうんでしょね。

「はあ……いきなりか」

ウイデイス様はため息をつき、肩を降ろします。

「アルビオンの貴族の娘がなんのようだ？ てか、国乗っ取った後

に地位くれるって約束。本当にレコンキスタを信じてるのか？」

ニヤリと笑うと、少女がいきなり胸元からナイフを取り出し、襲いかかります。

ウイデイス様が少女の広がった股を蹴りあげると、少女が10メートルくらい飛びました。

意味がわかりません……何でご主人様を殺そうとするのですか？  
と言うか、蹴りあげて10メートルも飛ぶってどれだけ強く……。  
股の間って怖いですね……。絶対子供産めなくなりますよ……。あそこ  
まで強く蹴られると。骨ぐしゃぐしゃです。

「燃える」

ウイデイス様の一言で、少女は空中で炎に包まれ、消え去りました。

周りも顔面蒼白で、悲鳴すらあげられません。

屋敷の方々は全然顔を変えません。慣れているのでしょうか？

ウイデイス様は商人に視線を移します。

「わかったか商人。こう言う奴が現れるからちゃんと調べろって言うんだ。俺じゃなかったら殺されていた。まあ、多分腹上死でもさせようと思ってきたんだろっかな」

「も、申し訳ございません！」

商人は土下座して謝りました。つまり、殺そうと思って使用人になる人がいるってことでしょうか？

「次」

ご主人様が次の人に手を置き、もう一度ため息をつく。



またですか？

「二連続」

今度は杖を取り出し、詠唱を始めますが、杖を奪い取られ、口に突っ込まれてます。

突っ込まれるなんてレベルじゃありません。歯を折り、後ろに貫通してます。変なものが後ろから飛び散って……。吐きそう……。

そして、また燃え尽きます。後ろに飛び散ったものや、歯も全部燃えます。

「あー、めんどくさい。どうせばれるんだ。来るなら来い。一人で来るより全員で来た方がいいだろ？ 運が良ければ俺を殺せるぞ？ そうだな。今からコインを投げるから、落ちたら全員くればいい」

ご主人様がエキュー金貨を一枚取り出し、それを高く投げます。自分から合図を送ったんでしょうか？ 確かに、違う国の人たちならいい合図になるでしょう。

金貨が墜ちると、10人くらいの人が一気に飛び出しました。

こんなにあいたんですか！？

ご主人様がそこで消え去りました。ミラ様とティファニア様も消え去り、一瞬後には飛び出した十人が全員首を切られて……。

う……限界です。

キレイな石に吐いてしまいました……わたしも殺されるのでしょうか？

「んじゃ、次」

どうでもいいと言っただけにそう言い、ご主人様は持っていた剣を地面に落とすと、地面の中に入り込みました。

わたしは立つこともできず、涙目で吐き続けます。

額に手をあてられ、ギョッと目を瞑ります。身体が震えているのが自分でもわかります。

「採用」

へ？ 呆気なくそう言われました。使用人の一人が近づいてきてキレイなハンカチで口を拭ってくれ、わたしを向かい側に連れて行ってくれました。

薬を二種類飲まされ、それを飲むと身体中の傷が無くなり、気分が良くなりました。

それから採用されたり燃やされたり。やっと最後まで終わったようです。

「わかったか商人。結局残ったのは四人。他は全部スパイ。今回は金は渡すが、次売るときは気をつける」

顔面蒼白でこくこくとうなずき、次の瞬間商人は消え去りました。

死んだわけではなく、馬車の方に戻されていました。

ご主人様は振り向き、

「まあ、色々あったが使用人として歓迎する。仕事は朝食から12時。13時から21時まで。休みは週に二日。二日は自分で選択して休め。夜伽とかは来るな。来たら殺されるからな。んで、仕事は使用人に聞けばいい。まずは、着替えと風呂だ。使用人達頼む。そ

のままじゃ汚れるから、露天風呂に入れてやれ。俺は書類があるから戻る」

そこで、四人が空を飛び、一つの部屋に戻って行った。

魔法……杖すら使っていないけどすごい……。

それにしても……使用人の休みって普通ないはずだけど。そんなに休んでいいのでしょうか？

「こんにちはは、私はノイア。あなたが一人で出来るようになるまで私が面倒を見ることになっているの。よろしくね」

使用人の一人が、笑顔でわたしに言うて来た。

キレイな人……多分20歳くらいの人。

っと、ぼーっとしてちゃいけません。

「初めまして、わたしはエリーです」

ぺこりと一礼するが、上手く出来てるかわからない。

「ふふ。じゃあ、お風呂に入りましょうか？」

「は、はいっ！」

ノイアさんに付いて、早足で歩いてゆく。

しばらくすると、此处で脱いで中に入ると言われたので、素直に服を脱いでゆく。

ノイアさんも抜いでいたので、素直に脱ぐことが出来たのだ。

ノイアさんの裸はすごかった。真っ白なキレイな肌に、大きな胸。自分の胸を見降ろすと、切なくなる……。

「駄目よ！ エリーちゃん！」

え？ え？ 慌てた様子でノイアさんがわたしの肩を掴む。

「ウイデイス様は同性愛者嫌いだから。『非生産な恋愛とかまじ死ねばいい。いや、俺が殺す』って言ってたから」

え？ 待つてください！ それはわたしが同性愛者だって思われただってことですか！？

「ち、違います！ 胸大きく肌もきれいでいいなって！」

そう言つと、ノイアさんは胸を撫でおろす。

「よかった。それなら大丈夫よ。肌や髪は此処に住めばキレイになるし。胸は、成長すれば大きくなるわよ」

あと6年でなるんでしょうか……。

「とりあえず入って」

ノイアさんについて行くと、そこは真っ白な煙で先が見えない場所でした。

「エリーちゃん。こっちこっち」

どつちやらぼつととしていたようで、慌ててノイアさんの方に行っ

てみます。

木で出来た小さな椅子に座らせられました。

「じゃ、名前覚えてね？ 結構重要だから。左からシャンプー、リンス、トリートメント、洗顔、ボディソープ」

覚えられそうにないんですが……。

「うーん……あ、そうだ」

何処から取り出したのか、黒いペンで1-1とか書いていきます。と言うか、いいのでしょうか？ 屋敷の物を勝手に。

「何処からペンを？」

「これは使用人の必需品だから、常に持っているのよ？」

それよりさっきまで持ってませんでしたよね？

「屋敷の物に勝手に書いてしまっているのですか？」

「壁とか壊さなければ。わかりやすいように自由に書いていいって言われてるわ。壺とか割っても捨てればそれで大丈夫よ。別に怒られないわ」

それは優しいご主人様ってことでしょうか……？

それならその方がいいですね。噂では貴族はすごい怖い人達らしいので。

「あ、でも屋敷内の情報を外に漏らしたら殺されるわ」

気をつけましょう……言う人いませんが。

「まあ、話は置いておいて、頭を1・1から順番に着けて洗うの。で、顔が2。身体が3。隅々まで洗わないとダメだからね？ ご主人様は汚いとか臭いって言うのかなり嫌うから。捨てられちゃうかも」

あれ？ でも貴族の方は自分達が良ければいいのではないのでしょうか？ 使用人はご飯すらまともに食べられないと聞いていたが。

「ハイ、洗っていいよ！」

いきなり言われても……。

とりあえず桶を持ってお風呂に……。

「待つて！ そのままお風呂にはいつちやだめ！」

「え？ お湯を汲みに」

「あ、忘れてた」

普通見本とか見せてくれるんじゃないでしょうか……。  
いきなり言われてもわかりません。

それからお湯の出し方とか洗い方を教えてもらい。と言うか、わからなかったので全部やってもらいました。

「さーて。温泉入っていいわよ？」

ついにこくもくですね。

ノイアさんがザボンと温泉に入ります。何で飛び込むんでしょう

か？

「おいで？」

ニコニコと呼ぶノイアさん。

わたしもへりに足をそろえ、ジャンプッ！

「あつっ！ 熱い！ あうっあつっ！」

出ようとしてもノイアさんが離してくれません！

ハッ！ これは此処でわたしを殺そうと！？

「最初の内は我慢。だんだんとよくなる……はず？」

確かになれると平気ではありませんね……。

ぼかぼかして気持ちいいかも。

「はふー……」

なんだか不思議ですねー。身体の疲れが取れます。

馬車のせいで腰痛かったですし。

「ハイポーションもかなり入ってる温泉だからねー」

へー……ってあの高級薬ですか！ あ、そういえばご主人様が売  
ってるお薬だからいいのかも？

一本で平民の年収8年分くらいですよあれ……。さすがお金持ち。  
貴族のお屋敷って噂程悪くないですねー、皆嘘つきすぎです。

「あ、そう言えばお風呂ってどれくらいに一度入れるんですか？」

「毎日入らないと怒られるわよ？　ちなみにウイデイス様も此処に入るから」

「こ、混浴ですか……」

「そうねーって言っても、ウイデイス様はまだ12歳よ？」

「へー、12歳……じゅうに……ジユウニっ！？」

どう考えてもわたしより上ですよっ！？　何で同い年なんですかつ！？

「くすっ、一年前まではすごいちっちゃかったんだけど、一年旅に出たら三人ともすごく大きくなってたの。旅は人を大きくするのねー」

それは精神が大きくなるのかですよ！　なんで身体が大きくなるんですかつ！？

と言うか、皆それ信じてるんですか！？

「それ……偽物なんじゃ？」

「ないわね。顔の造形も面影があるし、力も同じ。頭の良さも同じ。喋り方もね。どこからどうみても本人よ」

ご主人様のことよく知ってるんですねー、そう言えばわたし全然知りません。

「ご主人様って、ご両親亡くなったのですか？」

本人には聞けません……知っておいた方がボロ出ないと思います。

「最初からいないのよ。確か平民だったけど、貧乏で捨てられたと



か。ミラ様も奴隷でウイデイス様が養子にして、ティファニア様も捨てられたところを引き取ったらしいわ」

「……どうやってお金を？」

「薬を売ったらしいわね。ほら、ミラ薬局。此処だけの話、あの薬いくらでも作れるらしいの。使用人なんて毎日使ってるし。それが高く売れるから、どんどんお金溜まってこうなってるらしいわ」

「ってことは頭いいんですね……同い年なのに。尊敬しますね……。視線を戻すと、にやにやしているノイアさんと目が合いました。」

「惚れても無理よ？ ウイデイス様は個として見てないから」

「個？」

「使用人は使用人としてしかみないから。使用人の長でも名前すら覚えられてないでしょうね。私達が贅沢な暮らしが出来るのも、屋敷にいる者が汚いのは気分が悪いって理由らしいから。それに、ウイデイス様は結構モテるの。貴族や王族からも婚姻の話がくるけど、全部断ってるし」

「はー、あれだけカッコよくて、お金もあつて、頭もよかつたらそうですね。」

「とりあえず、好きになってはいないってことを訂正したいです。」

「自分で言ってるわ。俺は世界で一番自己中心的だって」

「それを言えのもすごいですね……。」

それからしばらく経ち、わたしがお湯に倒れたところで温泉から出ました。

## 食堂

「食堂よ。全部タダだから好きなもの注文するといいわ。お勧めは日替わりセット。毎日食べても変わるから飽きない。今日来た他の3人があそこにいるから、親睦を深めるといいわね」

指さされた場所には、吐いていた三人……わたしも吐いたけど。それにしても、使用人さん達がたくさんいるけど、イスとかテーブルとかすごいキレイ……。

これどう考えても一個で使用人の年収超えますよ。

最初と言うことで、代わりにノイアさんが注文してくれて、料理を持ってきてくれました。

すごくおいしそう……、こんなおいしそうなの始めてみます。

「ふふ、案外あなたウィデイス様に気に入られるかも知れないわね」

「へ？」

「涎出てるわよ？」

慌てて拭きますが、ご主人様は涎が出てる女の子が好きなんですよ  
うか？

「ウィデイス様は面白いことが好きなの。面白い子がね」

そう言ってノイアさんは立ち去ってゆきました。

面白い……いえいえ、わたしは普通ですよ？

とりあえず言われた新人さん達の所に行きます。

「は、はじめまして。今日から一緒に働くエリーです」

ペこりとおじぎをすると、おじぎを返されました。

と言うか、緊張してますね皆。

テーブルにご飯を置き、早速。

「おいしいっ！ さすがご主人様ですっ！ お金持ち貴族バンザイですっ！」

あ、たしかおかわりも自由なんでしたよね！ これなら何杯でもいけます！ おかずだけでもらおうかな。色々食べてみたいです。

「あ、あの……」

「はむ？」

右の大人しそうな子が話しかけてきました。

「そんなに急いで食べなくても……」

「ダメなんです！ わたしの家の家訓では好きなものは早く食べないととられてしまいます。全部おいしいから急いで食べないといけません！」

「うまうま……」。

「ねえ、アンタすごいね。勇気あるわー」

「？ ご飯に勇気が必要なんですか？」

正面の気の強そうな子がゆっくりと食べながら言ってきてくれますが。

「皆ゆっくりと食べてますが、元貴族ですか？」

全員が首を振る。ならお金持ちな平民でしょうか？

「おいしくないんですか？」

「おいしいですよ……？」

そのわりにはおいしそうではないですか……。

……。

「えいつ」

「あーっ！？ 最後にとっておいたエビフライがっ！」

「ほふーん、ほはんはほいひくはべるのへふよ」

「ちよつとかえしなさいアンタっ！」

「いやねふ」

やっぱりご飯は楽しくですよね。

「ハハハ！」

後ろの方からなにやら笑い声が聞こえました。

「むー、失礼ですね。ご飯はたのしくですよ……はむっ」

後ろを振り向く時間すら惜しいです。

「やっぱりアンタ勇氣あるわねー」

三人がうなづく。

「ご飯に勇氣は要りません。独占欲が必要です」

「その通りだな。まあ俺の場合は面白くってのが大事だが」

「楽しい食事は大事ですね」

「そうだな」

気が合いますね。名も知れぬ使用人さん。ご飯食べ終わったらお話ししよう。

「エリーさん……すごい」

？ 大人しそうな子が何やら顔を青ざめさせてますが、何でしよう。

正面の子が背後を指さしてます。

仕方ないので振り向くと……。

「ご、ご主人様が何で此処に!？」

何やら書類を机一杯に広げたご主人様がいました。

パンを片手に作業していたようですが……。

「ふむ。一応俺用の食事とか部屋があるんだが、あそこは息が詰まる。新人の顔でも見ておこうかと思ってな。にしてもお前は面白いなエリー」

頭にポンと手を置かれて、思わず顔が赤くなります。  
もちろん恥ずかしさからですが。

「あれ？ わたしの名前覚えてたんですか？」

「ご主人様は名前覚えませんが……少しうれしいですが。」

「ああ、最初からくねくねしてたからな。ついでに言うと、俺は使用人全員の顔と名前覚えてるぞ？ 家族構成やら身体情報まで全部」

ポカンとしてしまいます。名前で呼ぶことが少ないだけで、全員覚えていていたんですね。それにしても……この人数を覚えられるとは、頭の出来が違います。

「特にお前はな。くねくねしてるし、最初に裸足になったし、今も口の周りにご飯つけまくってるし。覚えやすい」

裸足になったところ見えたんですかアレ！？ どれだけ目いいんですか！

しかも全部悪いところしか見てません！

「まあいいや。新人の性格もある程度わかったし。実物を見ないとわからないこともあるからな」

そう言うと、ご主人様は立ち上がり、出口に歩いていきます。

書類が勝手に纏まり、ご主人様の後をふわふわと浮いてついてゆきます。

杖すら持っていないませんが……相変わらずすごい魔法です。

「エリーちゃん頭」

「え？」

頭の上に手を置くと、キレイな金の刺繍がされたハンカチが乗っ  
ていました。

頭に手を置いたときですね……なんてすごいご主人様でしょうか。  
モテるのもうなずけます。

「それにしても、エリーもご主人様もすごいわね」

三人がうんうんと頷きますが、そんな賛辞いりません。

## 部屋

明日から仕事なので、今日は休みらしいです。

ノイアさんに連れて行かれ、わたしは部屋に案内されました。

「あの……此処ですか？」

「此処よ」

すごい部屋です……。

と言うか、自分の家より大きい部屋ですね。ベッドも大きいです。どこかのお姫様みたいです。

「寝具は明日までに用意しておくから、そのメイド服で寝てもいいし、下着だけで寝てもいいわ。鍵かけておけば誰も入ってこないから」

そう言って、ノイアさんは去ってゆきました。

とりあえずは……。

ベッドにダイブです！ ああ、柔らかくて気持ちいい。

このまま眠れそうです……おやすみなさい……。

ハッとわたしは目を覚ましました。

外は真っ暗。メイド服なるものと下着の上は何故か脱いでました。寝苦しくて脱いだのでしょうか。

それよりも……厠は何処！

今日一回も行ってませんよ！ きついです！ 今寝たらおねしよは必然。死にます。

鍵を開けて探しますが……わからない……。

仕方なく部屋に入ろうとしますが、入れない！ なんてしまったるんですか！？

誰が締めたんですかこれ！？



そう言えば下着も下しか……情けなくて涙が出てきます。

「ぐすっ……うっ……開けてください……」

中の方はわたしを無視します……なんで開けてくれないんですか……。

「……半裸のバカがいると思えばエリーか……何してんだお前……」

後ろでご主人様が憐れむような眼で見っていました。

恥ずかしいけどそれどころじゃありません……。

「ごしゅじんざあー……とじこめられました……厠もありません  
入れません……」

こんな場所で漏らすくらいなら死にます。

ご主人様にすがりつくと、この危ない状況に気付いてくれたよう  
です。

「ああ、トイレとオートロックね」

ご主人様が四角い紙を取り出し、ドアに通すと鍵が空きました。

「こい。部屋にあるんだっつもの。使い方知らないだけだ」

何でもいいから早く……漏れます。

「此処だ。この穴」

「はい！」

下着を降ろしてその上に乗ります。

完全に裸になってしまいました。それどころじゃないんです！

「アホかつ！　なんで上につてしゃがむんだよ！」

「「しゅじんさまー、いじわるいわないでください」

もう涙を抑えられません。本当にきついんです。

「ちげーよ、抱きつくな！　座れ！」

「はい……」

「なんで正座してんだよ！　あーもう。足広げろ！」

「え……ここでエッチするんですか……？」

「アホかつ！　椅子だ！　椅子みたいに座れっつもの」

ああ、そう言えば椅子に似てますね。

そこに座りますが……変な感じです。

「出せ」

「はい」

はふー……やりました。わたしはやりました……。

「……ご主人様？」

「何だ？」

「何でそこで見ているんですか？　恥ずかしいことこの上ないんですか？」

「ああ、横のボタンを教えておこうかと思ってな。いいから全部出せ。出来れば大までしろ。大用のボタンあるし」

「それは無理です！」

この状況で出来たらそれこそすごい勇気です！  
と言うか、トイレって全裸でするのでしょうか……。

「あ……終わりました」

「ん。じゃあ、壁のボタンあるだろ？ 間違っなよ？ リーンが改造したせいで意味わからないボタンもあるから。下手したら穴の中にハブラシ突っ込まれて洗われ兼ねない」

ブラシ！ 掃除用のブラシを……怖すぎます。

「まず左のボタン。これは毎回使うから覚えとけ。押してみる」

ポチつと、なんか揺れて……。

「いだっ！ 痛いです！ 膜がつ！ 水に処女が！ 位置も違います！」

「あ、威力が最強になってるし。えーつと、威力弱めて前に移動か」「これなら……」

変な感じですが大丈夫です。

「んで隣は大用だな。これは今はいいだろう。まあ、他のもあるが、適当に使え。俺つかったことないしこのトイレ。あとは、この風」

絶対他の使いません。ブラシ怖い。

ポチつと。今度は暖かい風が……これ意味あるんですかね。

「風はネタだ。水がまんべんなく広がって拭きとるのが面倒になる」

いらなすぎる風！

「で、このデカイボタンで止める」

ポチ。

止まった。

「で、流すときはこのボタン。まあ、トイレから出れば自動で流れるが。で、終わり」

終わったので、下着を履こうとしたらご主人様が必死に止めます。

「え？ ええ？ このままエッチを？」

「ちげーよ。拭け！ なんて拭かないんで履くんだよ！？」

「布持ってきてませんし……ない場合は仕方ないですし」

ご主人様は何か考え込みました。

「なあ、平民ってどうやって拭いてるんだ？」

「布ですね」

「拭いたあとは？」

「洗って次また使います」

ご主人様は衛生的に糞だなどか言っています。

「まあいいや。此処ではこの紙使え」

ご主人様が丸い物から薄い紙を引っ張ってます。

「ほれ」

「えーっと、どうぞ?」  
「自分でやれっての!」

知らないんですから仕方ないじゃないですか!?! どんな仕打ちですかコレ!

同じようにして取り出し、拭きます。うん、これはいいです。布よりキレイになります。

「はい」

「何で俺に拭き終わった物差し出すんだ! その穴に入れる!」

水が流れたところに入れ、もう一度流します。

うん。これで大丈夫ですね。

下着を履き、バッチリです。

「ありがとうございますご主人様」

おじぎをすると、バカな子を見つめるような眼で見てきます……。

「全裸でトイレ使う奴始めてみた。そもそも、半裸で屋敷内つろつろするやつも初めてだな」

うんうんとうなずいています、仕方ないんです!

あの場合どうすればいいんですか! ノイアさん恨みます。

「だが 面白いな。お前今日から俺の専属メイドな? 命令だ。何か失敗したら一日トイレ我慢で」

ひどすぎます! 一日なんて無理!

「まあ今日は寝る。これパジャマ。使用人用じゃないがいいか」

ご主人様が地面からキレイな服を取り出し、押しつけてきました。

「安心しろ。専属だからって夜の奉仕するわけじゃないから。見て面白そうだから専属にただけだ。じゃーな」

そう言って出て行ってしまいました。

了承してませんが、命令ですしね。

押しつけられた洋服は、ふわふわしていました。

顔を押し付けると、やわらかい毛が鼻腔をくすぐります。

「悪くは……ないですね」

その洋服を着て、今度はぐっすり寝ました。

閑話すぎるお話（後書き）

この使用人がテファよりも早くエッチしていたことはまた別のお話  
（お

真偽はわかりませんがね。

さーて、次は帰った時かな。  
研修めんどい。

#### 47話 開戦の合図(前書き)

祝2,500,000PV!

ちなみに白の本は7,000,000PV超えたくらいでした。  
差が激しいね……。

他の人が祝!ってやってるのでやりたくなりました。

ユニークはめんどいから両方数十万とだけ。  
ウィンドウ閉じちゃったしね。

てっててーてっててー!

未公開再び。



## 47話 開戦の合図

ハルケギニア王城、大会議室。

ルイズが逃げ出してから半年後、やはりというか何と云うか、東方では戦争に対する準備を行っていた。

「バカだねー……」

「ですねー」

全員が頷いている。

現在、この会議室に居るのは最高議会の議員ばかりだ。

まあ、議員と言っても、議会制民主主義の上に君主制。民の上に王が立っているのは変わらない。

ぶつちやけめんどいから纏めて持って来いってことだ。

民から選ばれた議員の頭を覗き、本当に国のことを思ってる奴だけこっちで選んだのだ。

ちなみにヴァリエール家はヴァリエールとカトレアが選ばれている。ギーシュは無理やり俺がねじ込んだ。エルフのレイジールは特殊枠で入れた。ついでに森の中で見つけた有翼人の代表も入っている。韻竜の長もいる。理由としては、人間だけでは意味がないと思っただからだ。まあ、賢者とかよばれてるらしいが、ギーシュすまんって感じた。重圧感で毎回涙目だし……。

「ウィンドウ：展開」

それぞれの前に、19インチ程度のウインドウが現れる。  
そこで俺は立ち上がり、ウインドウを操作しながら口を開く。

「まず、聞いてほしい。東方の開戦理由は食糧難。魔法が使えなくなったことで混乱し、半年で限界となったようだ」

さらに操作し、兵器開発の場面を映し出す。

「そこで、我々の国を落とせば、食糧にも困らなくなり、楽な生活が出来ると掲げ、民を誘導。現在、全ての生産をストップし、兵器開発へと移行しているようだ。民全てが兵士となっていると思ってくれ」

それから街の様子を映し出す。

「見てわかるとおり、民は食糧不足により、町中で餓死者が出ている状態だ。貯蓄は一年分あるとのことで開始した計画だが、それは全員が質素な生活をすればの話だ。上層が贅沢をすれば半年でこれだ。したがって、民からの不満の声がかなり上がり、今にも国では内乱がおこりそうだ。そのストッパーになっているのが、我が国に食糧が豊富にあるということだ。東方は悪い意味で民が一致団結していると言っていいたいだろう」

次に、東方軍の完成した兵器を映し出す。

「これが東方の兵器だ」

そこで、ギーシュが手をあげる。

「どっぞ」

「失礼するよ。それはラプターではないかい？ それだけの数がそろっているよ、我々側にかかなりの被害が出ると想定される。それに、戦艦や銃器が多いね」

俺は一度頷き、リーンに視線を移す。

リーンは頷き、立ち上がる。

「確かにこれは我々から盗まれたラプターのようなのですが、しかし、劣化ラプターです」

「劣化？」

「ええ。確かに空を飛べます。ですが、これを見てください」

リーンはある部分を拡大させる。

この時代の人間は、形さえ似ていれば全部ラプターだと思うのだろう。飛行機と言ふ言葉はないからな。

「プロペラ。これは、盗まれた資料を元に作りだされたプロペラ機です。軍事施設の付近に歴代の戦闘機博物館があったのをご存知でしょうか？ そこに設計図ごとおいてありました。置いてあった理由は、原始的すぎて使われても何も問題がないからです。更に、この戦艦は彼らが独自で考えたものでしょう。一応迷彩の為に青く塗っていますが、ほとんどが木造です。我等の戦艦や兵器は光学迷彩処理をしていますし、ナノテクノロジーを使った不可視フィールド。Nフィールド装備です。何も問題はありませぬ」

そう言っただけでリーンは座った。

他の人は、リーンが言った言葉を解説しているウィンドウを見て、目を見開いている。

「だが、銃器はどうするのだね？ あの人数が一度に銃器を持って

来られたら、こちらの兵士は魔法が使えない。人死には確実だろう」  
「その点は問題ない。この戦争は無人機と有人ダイレクトリンク機、  
王族のみで行う。」

ざわりと、議員たちが騒ぐ。

「それに、これを見てくれ」

俺はニヤリと笑いながら、皆に新しいウィンドウを表示させる。

「それはなんだね？ グラフのようだが」

その言葉に頷き、皆を見回す。

「これは半年前を百パーセントとした場合の、民の投降状況。この  
3パーセントは悪意を持ちこちらに近づいてきたもの。それはその  
場で処刑した。ちなみに、餓死者は入っていない」  
「な、何故いきなり投降してきたのだね？」

ヴァリエールが戸惑いをあらわにし、疑問を口にする。

他の奴も同じようので、視線をこちらに向けてくる。

「情報だ。民の間に情報を流した。ハルケギニア王国に保護を頼ん  
だものは、食べ物にも困らず、手厚く歓迎されると。戦争になった  
場合、こちらが勝てば元の家に戻れると。現在保護しているのが2  
7%。この戦争に介入しない者が46%。東方の人口の76%が戦  
争に介入しない。上流貴族や国の兵、王族と一部の民しか向こうの  
戦力はない。ただ、この人数だと、一人ひとりの兵士はかなりの武  
装をすることが出来るだろう」

最後の操作を行い、計画を全て順番に表示させる。

「残りの24%。これは殺すしかない。24%と言うが、その人数は30万人以上に及ぶ。5カ国の戦争など、比ではないくらいに戦争であることにはかわりはない。ハルケギニア史上最大の戦争だろう」

真剣な顔で言い放つと、議員たちは唾を飲み込む。

ちなみに、王族連中はお菓子を飲み込む。むろんちゃんと噛んだ。

「東方の領土を永遠に草も生えぬ焦土に変えるなら1分で出来る。しかし、それでは意味はない。こちらの戦力は無人機・有人ダイレクトリング機120万。更に、制圧後の為の有人機10万。出来るだけ首都からひきつけ、サハラ砂漠で迎え撃つ。動物や樹は一時撤去だ。エルフにも避難してもらおう。エルフの街は地面ごと一時退避させるつもりだ。また砂漠に後戻りだが、一年もたてば戻るだろう。地中深くまで攻撃しないように設定してあるしな。よいかレイジール？」

レイジールに視線を移すと、苦しそうに口を開く。

「いたしかたないのじゃ。あの場を戦場にすることを許そう」

すまんな……エルフの奴らに説明するのめんどろだろう。エルフはあまり争い好きじゃないしな。

「リーン。NGシステムはどうだ？」

「一年程でしたら問題ありません。それ以上はCPU、制御システム共に負荷に耐えられませんか」

「十分だ」

それならいいか……。

NGシステム。兵器に積んであるNフィールドを巨大化した制御システム。それを国の周り1000箇所に設置し、CPUにより演算処理。国を丸ごと不可視のフィールドでシールドにしてしまう方法だ。

目標としては、星の外部からの攻撃を防ぐために、星全体に張り巡らせる予定ではある。

「一応の為に、砂漠の中央に、蜘蛛・蛇型無人戦車を配置する。あとは」

俺はヴァリエールとカトレアを見つめる。

多分、この二人にはキツイだろうが……。

「24%を殺す。この意味わかるか？」

カトレアは首を傾げているが、ヴァリエールは俯く。そして顔をあげ、こちらを真剣な面持ちで見つめてくる。

「覚悟の上です。この戦争を招いたのはわたしの娘であります。それ相応の罰を与えます」

「お、お父様！」

「考えてみる。もしこれがトリスティンであつたら、一方的に蹂躪されていたぞ。それを招いたのは娘の裏切り。何も音沙汰無しとはいかない！ 我々は民の代表！ 私情をはさんではいけない！」

口調は厳しいが、顔色はかなり悪い。

ちなみに、どっちにしる戦うことにはなっていた。交渉なんて無

理そうだし。

まあ、ここはルイズに被ってもらうけどな。

「国家特級犯罪者ルイズ、家名は無し。罪状、終身刑からの脱獄。敵国の手引き。大量殺戮。国家機密の持ち出し。リーンこの罪状から刑の計算を」

「はい。留置期間内の脱獄、公開処刑。敵国の手引き、処刑。大量殺戮、公開処刑。国家機密の持ち出し、公開処刑。他抵触する罪状6、終身刑。判決」

リーンが見回すが、皆わかっているだろう。一つですら公開処刑なのだから。

「3Dホログラムによる全映処刑。処刑方、四肢切断のち、一か月の晒し身。その後、玉水の中に放逐。ハルケギニアにおいて、史上初、そして最後の最重刑でしょう。普通の処刑では民が納得致しません。この大戦争の責任を一人で背負うのです。これでも甘いくらいでしょう。ですが、これ以上の刑は事実上不可能。血管だけを縫合すれば、痛みだけを一か月負い続けるでしょう。最悪ハイポーションをかければいいです。あれは再生までは出来ませんので。では、採決を取ります。この意見に賛成の方はご起立を」

俺はすぐに立ち上がる。

これは見せしめでもあるのだ。これをしなければ民が納得することなどありえない。結果で言えば、莫大な金額と、これから死ぬ東方の30万+餓死者。計100万以上の殺戮。もし、状況が違ったら、こちらの人間が大量に死に、生き残っても奴隷として扱われることになる。それをルイズは一人で引き起こしてしまった。責任が誰にあるか、間違いなくルイズだろう。併合した後の東方の民、そして我が国の民の、その憎しみを一身に受けるのはルイズなのだ。

見たからわかるが、あいつは今も贅沢三昧している。誰のせいで大量の餓死者が出たのかも知らず、東方の救世主だと思い込んでいるルイズ。もしこれで終身刑どまりなら、今度は国民が王宮に反旗を翻す。その為の残酷な処刑。

それを皆知っているのか、二人以外立ち上がった。

二人とは、もちろんヴァリエールとカトレア。

やがて、苦々しい表情でヴァリエールがゆっくりと立ち上がる。

「おとう……さま」

魔法を消したらルイズを出すつもりだったが、此処まで来たらもう無理だ。

どっちにしる6割を超えたから可決なのだが……ちなみに、民主主義の上に君主制があると言うのはこのせいだ。王族関係は無条件で議員だ。それだけで6割に届いてしまう。可決否決もこちらの自由なのだ。

なかなか立ち上がらないカトレアにいらつき、俺は問いかける。

「カトレア。お前は民の代表だ。私情を持ちだすならばお前は議会にふさわしくない。出て行け。ルイズのせいで何人が死んだかわかるか？ 現在67万人。グラフには入れてないが、これだけの餓死者が居る。それにこれを見る」

俺はウィンドウに現在のルイズを映し出す。

テーブルの上にある大量の豪華なご飯を優雅に食べながら、いないものは下げさせて、新しいものを頼んでいる。

しかも、運んでいる使用人の頬は痩せこけている。それを見ても



こんな態度がとれるとは……とことん自分は選ばれた人間だって根性が見ついているな。昔っから平民は貴族に尽くす生き物でしょ？それが幸せなんだから！とか言ってたしな。

「これを見ても判断を変えないと？ ルイズをかわいがっていたようだしな。なんだっいたら今からルイズの元に送ってやろう。戦争が始まったらお前も殺すがな」

俺は冷たく言い放つ。

「ヴァリエール。きつとエレオノールやお前の妻も反対するだろう。だったらルイズの家族に戻って言っとけ。もちろん、何人養子にしようが、家族全員が公開処刑だ。はつきり言って100万人を殺した罪なんて、どんなことしようが許されない。一族処刑は免れなだらう」

「……わかっております」

やがて、カトレアは顔を歪めて、涙を流しながら立ちあがった。

「ついでにカトレアは議会から追放。私情をはさむ人間はいらない。私利私欲に動く奴や、横領する奴と何も変わらない。此処で決まったことによつては国家転覆だってありえることを頭に置いておけ。公平に見れず、家族を一番に置く奴は信用できない。もし俺だったら家族を切り捨てるからな。もちろん切り捨てられることも覚悟の上で……だ。では解散！」

カトレアは俺の言葉が終わると、その場に座り込んでしまったが、ヴァリエールに連れられて部屋を出て行く。

他の議員もだ。

残ったのは王族とギーシュ。

「何か手伝えることはないかいウィデイス？」

ギーシュが声を掛けてきた。

「あるにはあるが……それよりお前、女誰も連れてこなかったな」  
「ああ、そんなことか」

フッと笑ってかぶりを振る。

「養えるくらいにお金を貯めて、皆を迎えに行くのさ。その時まで僕を好きでいてくれたら、一緒に暮らすのさ。だから、僕は誰ともキスすらしたことがないよ。迎えに行つて、僕と一生歩んでくれるなら、その時初めてするつもりさ」

俺は苦笑してしまう。

だって、あのギーシュがだぞ？

「いい男になつたじゃないかギーシュ」

「半年間、彼女たちと話し合つて決めたことだからね。まあ出来れば、そのときも僕を好きでいてほしいけどね」

「ああ、大丈夫さ。お前ほどいい男はいない。お前を選ぶさ」

二人でくすりと笑ってしまう。

「あ、それよかギーシュ。仕事なんだが」

俺はウィンドウを表示させる。

ギーシュを囲むように大量のウィンドウが現れた。

「こ、これは？」

「国境の地中、陸、海、空を全方位見えるようにしてある。いわば監視だ」

「こ、この数を監視するのかい……」

まあ、実際は俺達全員世界を常時観測しているから必要ないんだが、ギーシュには重要な場所をこれから預けると思うので、その練習でもある。

「これをお前の部屋に置いておくから見とけ。戦争時は遠隔操作のポット開けておくから、試作の機人一機あやつってみろ。ダイレクタリンクで繋ぐからな、痛覚のフィードバックは消しておくけど」

俺もやったことあるけど、ゲームみたいで結構面白いんだあれ。

今では有人ダイレクタリンクだしな。

死ぬこともないし、兵士が操るから細かな操作もできる。

まあ、機人は配備してないけど。

にしても……結局ルイズのせいにして国乗っ取っちゃまうな。

実際王殺すのもルイズ拉致するのも転移して終了だ。ただ、悪いのは全面的に相手の王として国を乗っ取るために使わせてもらっただけだ。交渉はもともと不可能だったしな。

ラプターが獲られても放置していたのはこの為でもある。相手が戦争を仕掛けてきてくれないと困るしな。俺の中では、ルイズは最善の行動を取ってくれたと言えるだろう。

ま、いつか。さてと、準備するかな。

## サハラ砂漠

会議から2週間。敵は動き出した。  
現在、俺達王族は、上空に浮かんでいる。

敵の動きを監視しながら、N通信を開く。

『リーンは全無人機をマルチタスクで展開。飛行はCPUに任せ、攻撃はリーンが行ってくれ。近くの無人機の制御はこちらがもらう』『了解です』

俺も同時に、映像だけに振り分けていた並列処理を拡大させる。近場の空中要塞の制御もこちらがもらうか。最悪砂漠ごと焼き払えばいい。あり得ないと思うが。

『艦隊DL部隊は定位置にとどまるように、あとNフィールドをはっておけ。向こうがうってきたら、遠慮なく迎撃しろ。蜘蛛、蛇、戦闘機DL部隊は光学迷彩をはっておけ、蜘蛛、蛇は近づき待機。』

戦闘機DL部隊は東方上空の各空中要塞にて待機。国の制圧時には期待している。銃器部隊は蜘蛛に乗り制圧準備』

『『『リヤール（了解）』』』

『全軍に命令する。初撃はNフィールドで防げ、こちらは迎撃として迎え撃つのだ。断じて侵略ではない！ 一方的な侵略に対する自衛として戦うのだ！』

『リヤール』

そこで繋がった通信を閉じる。

音声通信だが、数百万を直結に結んでいるのだ。マルチタスクで処理しなくては、確実に声すらも聞き取れないだろう。

N映像で確認すると、敵はどうやら、戦車と、プロペラ機でくらしい。5万くらいか。まあ、圧巻だな。こっちは迷彩纏ってる無人機がめちやくちや飛んでるのが見えるけど……。

戦車の資料とられたからな……。やっぱ民全員兵器開発に回しただけあって、短期間でこれだけの数をそろえるとは……。街の鉄全部使ってたしな。

それにしてもあの距離なら……。あと10分くらいで始まるな。

そろそろか。もしもの為にギリギリまで待ったが、展開するべきだろう。長距離砲弾ありそうだし。

『Nフィールド展開！ リーンはNGシステム起動！』

『リヤール』

来てみるルイズ。

攻撃した瞬間、お前らの死は確定するんだからな。残虐に、残忍に、蹂躪してやるうロバ・アル・カリイエの者達よ。

だんだんと視認できるようになってきた大軍。

視界に入ると、少しして遠くで火花が上がる。距離にして3キロメートルか。

「敵ロングバレルから、大砲弾67！ 来ます！」

1キロメートル程まで近づいた弾は、無人機を操るリーンによる正確な射撃によって撃ち落とされる。

初撃を確認し、俺は声を拡散させる。

《我々ハルケギニア王国は、ロバ・アル・カリイエによる侵略の攻撃を確認した！ これより、彼の国を敵国とみなし、我々は全力で排除する！》

「光学迷彩解除！ 無人部隊蹂躪せよ！ 排除せよ！」

光学迷彩は便利だが、DV部隊からは見えない。同士うちさえあるだろう。完璧なステルス状態になってしまうのが傷だな。もとからステルス機ではあるけどな。並列処理をしている無人機同士なら確実に同士うちはないんだが……。

俺の命令により、至る所で光の反射を解除し、空間がゆがむ。

現れるは空を覆うような無人部隊。巨大な蜘蛛と蛇が陸を埋め尽くす。

海の方でも始まったのか、次々に撃破報告が流れる。

そこで、横一列に蜘蛛を並ばせる。

『全武装、前方に一斉掃射！ そのまま進撃！』

地が割れるような爆音をとどろかせ、色とりどりの光が前方に放たれる。

実際、ラグなしに発射したことにより、地が揺れている。

後悔させてやるよロバ・アル・カリイエ。

俺を敵に回したことがどれほど愚かな行いか！

47話 開戦の合図（後書き）

日本のマツクが食べたい。  
アメリカのデカイけど雑すぎる。



48 ロバ・アル・カリイエ（前書き）

ちよつとスランプ入ってる状態で、戦争時を書くのつらすぎ！

## 48 ロバ・アル・カリイエ

\*テオSIDEはロバ・アル・カリイエの王。テオ・ロバ・アル・カリイエ視点です。

### 旗艦ロドラス・テオSIDE

この戦争では、直に我が指揮をとることになった。

したがって此処にいるのは、軍事総督、風石伝達師。

風石艦により、我々は上空から戦況を確認している。

バカな駒は城に置いてきている。下手に動かれても困るしな。

自分のおかげで戦争に勝てるとか言っている愚か者だ。戦争が終わったら四肢を切り落とし、幽閉しておこう。邪魔故殺したいが、このルーンは便利なのでな。

遙か前方には、敵らしき影が少数。

ふむ？ 敵はこちらの思惑に気がついておらぬのか？ 監視だらうか？

数人しか兵がないではないか？ ならばそれはそれで都合がいい。国をおとされて後悔するがよい。

「第一攻撃部隊、突撃させる」  
「ハッ」

風石伝達で私の命令を伝えている。これで終わりか？

「長距離大砲弾により、一斉射撃。あの監視を殺せば敵国まで一直線だ！」

「ハッ！」

眼下で大砲弾を射出した轟音がとどろく。

これで終わりか…… 呆気ないものだな。

「伝令！ 大砲弾！ 全て撃ち落とされました！ 敵機、数を増しています。海軍も同様です！」

くそっ！ いきなりあらわれるとは、魔法が使えないと言つのに…… どんな細工をしたのだ！

「敵機更に数を増やします！」

こちらに向かう大量の敵影が見え始めた。  
数は…… どこにこれだけの数を！

「上空はまずい！ 旗艦ロドラーズを後方に下げろ。出来るだけ高度を低く保つのだ。他の戦艦は前に出、旗艦を守らせろ！ 第二飛行部隊を飛ばせ、なんとしても撃ち落とすのだ！ 第一部隊は左右に分かれ、腹を叩く！ 第二部隊は敵の足止めをしろ！」  
「ハッ！」

これで、敵の先陣は潰せるか……。そのまま、敵が消えた砂漠を横断し、敵が来る前に国に取り付けられればいいが……。

「伝令！ 横一面全てに敵影確認！ 移動できません！」

「バカなっ！？ 一体何十キロメートル幅があると思っっているのだ！」  
確かに此処は横幅がせまい。しかし、此処を通らなければ向こうには行けない。それに……狭いと言っても数十キロメートル。それを全て埋めるか……ハッ！

「敵は全ての軍を横一列に配置している！ 一か所を集中突破！  
他は無視だ！」

民の全てを出してきたか……我々と同じようだ。  
しかも横一列だと？ その分薄くなるだろうに、敵はよほどのバカか？

「第一戦艦部隊、飛行部隊、戦車部隊壊滅！」

「正確な状況を報告しろ！ そんなバカなことありえるかっ！？」

一瞬で壊滅などありえない……だが、それが本当なら対策を取らないとまずい。

どんな敵だとしても、弱点は存在するはずだ。

「それが、敵が一斉に長距離射撃を……」

「何故避けぬ！」

「全く同じタイミングで放ってきたと、位置をずらした二波により壊滅！ 射程威力共に我々より上です！ 推定射程20キロメートル！」

20だとっ！？ 何処にいても的にされるではないかっ！

「このままでは全滅です！ 指示を！」

わかっておる……やはり直に見ないと対策が思いつかぬ。

「一時全軍撤退！ 後方の山脈にて迎え撃つ。敵の先陣が到達しない、ダムを破壊しろ。水で押し流せ。我は上空から直接見、おつて指令を下す。後はまかすぞ軍事総監！」  
「ハッ」

その返事を聞き、我は背中を向ける。

許さぬぞ……！

#### 上空・テオSIDE

敵から盗んだこの機体。

これが我が軍最高の戦力とは、なんとも言い難いな。

だが、今は我のものだ。しかも、ルーンによって我は一騎当千。同じもので来られても敵ですらない。

「敵が山脈に突入した！ ダムを破壊しろ！」  
「ハッ！」

すぐに我の命令通りにダムを破壊し、味方諸共敵を洗い流す。あの敵の戦車……なんとも不気味な戦車よのう。まるで虫だ。

敵の戦車は丸くなり、その場に固まったようだ。

フハハハ流される！

『伝令！ 水流は敵の直前で何かにつつかり、流れを変えています！』

「何かとはなんだ戯け！ 正確な情報をよこすのだ！」

『それが、見えない何かとしか言いようがありません！ 何もありませんが、確かにぶつかり流れを変えているのです！ 水流により、我が第一戦車部隊は完全に壊滅しました。第二戦車部隊の被害は小』

くそっ！ これでは我が軍が自滅したようではないか！  
いた仕方あるまい……。

「火山口の爆薬を爆破させる！」

『しかしっ！』

「命令だ！ やれ！」

『は、ハッ！』

これで、我が第二部隊も壊滅だろう。

だが、それくらいの犠牲で敵を一掃できるなら何も恐れることはない。

眼下で爆発が起こり、地響きのような音が聞こえてきた。

くるぞ……くるぞ、くるぞ。

やがて、火山口から大きな赤い柱が立ち上がった。

「フハハハハ！ 死ね！ 死ね！ 死ねー！！ 勝機は我が軍に

あり！」

溶岩によって、味方諸共敵を飲みこんでゆく！  
眼下では悲鳴の合唱が聞こえてくるが、なんとも美しい歌だ。

「ハハハッハ！　ハハハ……は？」

何故だ！？　何故あの戦車は前に進む！　蛇のような戦車もそう  
だ！　全長50メートル程もある物体がなぜ沈まずに溶岩を超えられ  
る！？　重さがないのか！？　搭乗している奴らは熱くはないのか  
！？　悲鳴は我が軍のものだとっ！？

疑問が次々と浮かび上がる、だが、それにこたえる人間はいない  
……。

「陸軍は全軍出撃だ！　確実に殺せ！　敵を殲滅する前に戻ってき  
た兵は我が殺す！」

「ッ！　作戦はないのですか！？」

「圧倒的な戦力で潰す！　それが作戦だ！　私の命令は絶対だ！」

「……」

「返事はどうした！」

「は、ハッ！」

使えない伝達師だ！　これが終わったら処刑だ。

そこで、我は視線を前に向ける。

戦争とは、自衛ばかりしていても意味がない。要は国を落とせ  
ばいいのだ。

進むことをしない軍に勝機はない！

「飛行部隊全軍、敵の飛行部隊を撃墜し、敵国を落とせ！」

空は敵機で何も見えん。だが、撃てば当たると言うことでもある。味方が邪魔して避けられないだろう！

我が軍の飛行部隊が敵機に飛翔してゆき、ガトリング砲と言う物を放つが、すれ違いざまに破壊される。

ガトリング砲では効かないと言うことか……。

「中距離ミサイルを放て！」

これなら効くだろう。

こちらのミサイルが敵のミサイルに相殺され、一面が煙につつまれる。

しばらくし、煙が晴れた後には、味方はなく、敵の機影だけが変わらずに飛んでいた。

くそつ、やはり機体性能は向こうが上か！  
それもこの機体に乗ってればわかるがな！

だが、私の機体の誘導ミサイルは4 中距離ミサイルが4しかない。これは国を落とすのに使うだろう。  
ならば……。

我は一気に敵機に飛翔する。

敵から無限に誘導ミサイルや白い光が放たれる。私の機体にもついているレーザーだ。



だが、何故か我のは使えなくなってしまっている。

それを高速で回避しながら近づくと、追尾してくるミサイルが後方で爆発する。

それを見つめ、思いつく。

まてよ……これは使えるかもしれない。

我は飛翔し、次に誘導ミサイルが放たれるのを待つ。

敵機をよけながら横を通過すると……。

来たな誘導ミサイル！

それを引き連れ、ギリギリのところまで敵の横を通過する、その後、直線状に敵が来るように移動する。

背後では敵機が大きな爆発を起こし、落下してゆくのが見える。

「ハハハハ！ 完璧だ！ そのような操縦で我を撃ち落とそうなど片腹痛いわ！」

更に同じようにして数機落とすと。

『みんなー、今日はミルクティーのライブに来てくれてありがとうー  
ー！』

前方で半透明の大きな人間が5人、きらびやかな衣装で踊っている姿が現れた。

後方にも表れた……。

およそ、等間隔で同じような人間が現れているのだろう。

意味がわからない。戦争中に何をするつもりなのだ？

『まず一曲目ー！ 紅茶は真っ黒く白濁液でミルクティーく歌います！』

ええい！ 無視だ！

そこで辺りを見回すと、敵機は全部消え去っていた。

何故だ？ 我は全てを落としたわけではない。無傷と断言している程敵は残っていたはずだが。それに、一斉にだと？ そんな通信は不可能。ならば、先ほどの半透明の巨人が合図か！？

『へ、陛下！ 全軍壊滅しました！ 旗艦が攻撃を受けています！ 王都も制圧されました！』

『そのミルクをく注いでく 真っ黒なわたしはく白くなるのく』

くそつ！ 歌と重なって聞き取れない！ 奴ら！ これが作戦か！？

眼前に視線を移すと、踊っているはずの一人が宙に浮かんでいた。しかし……手はガトリング砲のようになっており、大きな機械の翼を持っている。

あれは人間ではない。直感的にそれがわかる。

「ねえ、あなたが王様よね？ お兄様の道を阻む王様。なら、殺さないといけないねー」

頭の中に直接響くような声が聞こえる。不気味だ……。その少女はニコリと笑い、機械の翼をバサッと広げた。

「貴様……敵国の兵士か……」

『でも、完璧な白にはなれないの、だってCMYKで黒と白は作れないから』

くそっ、こちらの言葉にちょうど重なるのかっ!?

その直後、数百に及ぶ光がその機械の羽から放たれた。

それをギリギリでかわす、我の機体の羽が少しやられ、操縦の仕方が少し変わるが、ルーンによって速度が少し遅くなる程度で済む。

「くすくす……やるー。ならこれはどう?」

少女が笑い、翼がメキメキと音をたて大きくなってゆく。約100マイル。

右手のガトリング砲が代わり、20マイル程の白くて長い銃に変わっている。

「えーい、えーい、えーい」

かわいく言っているが、ドンッと腕から射出された弾を避けた後方では、大きな白い爆発が発生する。風圧だけで、機体が揺らぐ。

そもそも、この機体のスピードに、少女は後ろに飛びながら先行しているのだ。

「化け物……っ」

『RGBならよかったのにね、だからデジタル世界がいいよ、あ、白い液』

なんて煩わしい歌だろう!

「うーん、これ以上行かせちゃつと怒られちゃつからごめんね」

キレイにはほ笑むが、我からみたらそれは悪魔の笑みだ。

羽から射出される数千の光の奔流。最初の内はよけているが、何しろ撃つたら終わりではない。それは白い剣のように終わりが無いのだ。まさしく触れられない剣。

次の瞬間、それが両方の翼を縦に通過し、翼が切断される。

そして、我は機体ごと落下を始める。

……終わったか……この高さから落ちたら終わりだろうな。

死を覚悟し、目を閉じる前に、少女の顔が目の前に現れる、一瞬で我の戦闘機を分解し、首を掴まれる。

目を薄く開くと、先ほどまでの映像はなくなり、我が映っていた首を締められ、上空に吊られている我が。

「えーこほん」

『えーこほん』

目の前の少女の声が響く。

色々な方向から聞こえてくることから、これは世界中に現れている映像なのだろう。

「これがテオ・ロバ・アル・カリイエです。ってわけで」

『これがテオ・ロバ・アル・カリイエです。ってわけで』

少女は右手に小さなナイフを取り出していた。

「処刑です。終戦です。これにより、ロバ・アル・カリイエは、

ハルケギニア王国に併合されます！」

『処刑です。終戦です。これにより、ロバ・アル・カリイエは、ハルケギニア王国に併合されます！』

ツ！？ 右腕を強烈な痛みが襲う。

切られたこともわからぬ程の速度なのか、右腕が肩口から落ちていく。

更に左腕、右足、左足……。意識を失う前に痛みを襲われ、気すら失えない。

「……………こ、殺せ……………」

「殺すよ？ でもね。責任を負ってからね」

『殺すよ？ でもね。責任を負ってからね』

少女は笑顔だった。どうやったら此処まで壊れられるのか……………やはり人間ではない。

次に右の耳が切り落とされる。そして左耳。鼻。眼球。最後に舌。

「さよなら」

『さよなら』

幻聴かもしれないが、最後にそう聞こえたような気がした。

蜘蛛で敵は大体沈んだか……。

「ご主人様ー、わたしたちやることあるんで帰っていいですか？」

戦争より大事なのか……まあ余裕だしいいか。

「いいぞ」

「頑張ってくださいーでは！」

そう言って、全員が消え去った。

まじ適当だなあいつら……。

俺はリーンにN通信を開く。

「リーン。俺ちよつと敵国の方のDL軍指揮してくるから、邪魔な軍全部排除してくれ。指揮は任した」

『りょうかいです。殺します？』

「全員殺せ。遊ぶなよ？」

『遊びませんよー、わたしはいついかなるときも、お兄様の為を思つての行動しかしません！』

なんだか胸を張っている様子が手に取るように浮かぶ。

さて、俺は行くか。

俺はその場から転移する。

ロバ・アル・カリイエ

此処は首都に向かう道で、一番近い道中の街。

俺の背後には終わりが見えない程のDL蜘蛛型戦車。上空にもDLラプターが飛んでいる。街を囲んでいる森などは、木を倒しながらDL蛇が進んでいる。

『えー、反抗してもいいが死ぬから家から出てくるな』

拡散して声を発する。

立ち向かってくる常備兵を焼きつくしながら道を進む。

5マイルの蜘蛛の行進は異様だな。

まさしく蹂躪ってね。

てか前方から機関車が来る……。

民が乗ってるかもしれないが……こんな時に乗ってるのが悪いな。にしても、路面蒸気機関車？

その機関車は止まることもなく突っ込んでくる。  
ああ、カミカゼ隊みたいなもんね。

機関車はそのまま進み、蜘蛛のNフィールドに当たって碎ける。  
残骸が邪魔だ……。

「焼き払え」

俺の言葉が終わると、先頭の蜘蛛がレールガンを掃射し、機関車を地面ごと弾き飛ばす。

なんか街から火の手があがってるがいいや。

前方の家々も破壊されて道が出来たし。

「前進！」

まあ実際は転移すれば一瞬だが、強さも見せておかないとね。

王城



数時間後、やっと城前まで来れた。  
もちろん地下通路は破壊済み。逃げられたら困る。

てかさ、なんか空中に浮かんだ3D立体映像なんだあれ？  
やることつて歌って踊ることかよ？

『陛下、城の包囲、各街の制圧完了致しました』  
「そのまま包囲と制圧しとけ」

まあ、包囲は目の前だから見えるけどね。  
城を360度完全に囲んでいる。上空もラプターで包囲され逃げられないだろう。

『投降してきたもの、反発してきた捕虜はどうしますか？』  
「捕虜だけ殺せ」

『リャー』

さて。ルイズはつと…発見。  
俺は偏在を数十人作り、城の中に入る。  
マルチタスクによって、偏在でも、各知能は俺と同等だ。  
ナノマシンも使えるし。

「さーて、俺はルイズに一直線」  
階段を上り、その部屋まで向かう。

「侵入者を発見応援を！ ……くっ！」

ああ、通信したけどいなかったってことね。

てか、いきなり銃で撃つてきやがった……。

「何故だっ!？」

その銃弾は俺の前で何故か弾かれる。

「物質変換：生物を酸素」

それだけで俺の前から人間は消える。残ったのは鎧と銃だけ。

「ハハハ、俺はマスターだぜ？ 装置なんてなくなってNフィールド使えるっての」

そしてそのまま一つの部屋に入る。

豪華な部屋だ。映像で見てわかるけど、ルイズの部屋だな。

「えーっと、こっちだな」

その部屋の壁を見つめ、呟く。

「物質変換：無機物を酸素」

実はこれ、座標で範囲を演算して指定しないと、世界中の無機物が酸素になったりする。CO<sub>2</sub>をOにとかも出来るけど、基本範囲指定大事。単思考しかできない人間じゃ確実に全部変えて死ぬな。

前方の壁がキレイに消え去り、隠し部屋が現れる。

「さーて、断罪の時間だルイズ」

部屋の隅で震えていた桃色バカに声を掛ける。

「な、なんでアンタが此処にいるのよっ！ 誰か！ 誰かいないの！ 王女のわたしの命令よ！ この無礼者を殺して！ お父様はっ  
！」

せめてこっち向いてから言え。

まあ、外に誰かいれば聞こえるな。

その時、城の外で王が殺されたと言っ声が聞こえた。  
遅すぎる……リン遊んだなアイツ……。

「ちなみにお父様って誰？」

「そんなの決まって」

「テオに決まってるか？」

おそろおそろこっちを見たルイズにニヤリと笑ってやる。

すぐにキッとした瞳でこちらを見てくる。

にしても、この状況で睨みつけられるのはすごいな。

「それで、テオが死んだ今。お前はヴァリエールをお父様と言って頼るんだろ？ ホントいい性格だな」

身体売って買ってもらっ女とかわからねーよコイツ。

「ついでに、お前の家族はお前が処刑されることを承認したぞ？」

「う、嘘よっ！ そんなことあるはずないじゃないっ！」

俺はルイズの前に四つのウィンドウを開いてやる。

「お父様！？ それにお母様もちい姉様もエレオノール姉さまも！」  
　　パアッと顔を輝かせてそれを見つめる。

「このバカに言っただけで！ わたしは悪くないって！ 王族のわたしにはむかついたの！ あんたなんてすぐ殺してあげるんだから！ 平民出身の癖に！ ただの成り上がりじゃない！」

「……こいつわかってるのか？ 言ってることが矛盾してるってこと。」

家族だって言いながら自分は王族だって言って。  
ほら、家族まで苦々しい顔してるじゃん……。

そっぴや、こいつゲルマニアが成り上がりだって、キュルケをめちゃくちゃ嫌ってたよな。

『ルイズ……陛下に対するその口のきき方はなんだ。確信しました陛下。この者の処刑。私が行なわせていただきます』  
「お父様っ!？」

いや……俺への暴言考えてみるよ……明らかに民のこと屑だと思ってるじゃん。  
　　弁解のしようがないし。

『あなたももう子供じゃないのよルイズ。自分の責任は自分でとりなさい』  
「お母様！」

意外に意外、夫人とエレオノールはヴァリエールが説得せずとも納得してたんだよコレが。

常識はちゃんとあったようだ。と言うか、貴族は優雅について教えたくらいだしな。今のルイズは優雅とは程遠い。

『貴女の最期をちゃんと目に焼き付けるわ』

「エレオノール姉さま……」

これ一番きついな……。

『……』

「ちい姉様」

カトレアは無言でウィンドウを自分で閉じた。

その後、俺は全員のウィンドウを閉じた。

「わかったか？」

「わかるわけないじゃない！ あんたなら人をだますためにこれくらいの小細工するわ！ そうよ！ これは偽物よ！」

確かにこれくらいはするが、これは本物だ。

なんてお気楽な考えしてるんだろコイツ。

俺はため息をつき、ルイズの言葉をナノマシンで拒絶する。

そして、3D立体映像の権限を俺に書き換え、全映放送をする。

『我はウィデイス・ハルケギニア一世である。我が国を侵略しようとしたテオ・ロバ・アル・カリイエ王は討ちとり、国家最大反逆者、ルイズ・アル・カリ・イエ王女を捕縛した』

立体映像にルイズを映す。声は遮断しているが、わめいているの

だろう。

『これにより、ロバ・アル・カリイエは、ハルケギニア王国に併合されることとなった。敗戦国民への虐待や捕虜は我が許さない。被るべき罪は全て、ロバ・アル・カリイエの王族にある。元ロバ・アル・カリイエの諸君。ハルケギニア王国は君たちを歓迎しよう。一週間後、我が国第24区域広原にて、この者、ルイズ・ロバ・アル・カリイエの全映処刑を執り行う。元ロバ・アル・カリイエの地域には、発展、援助を行う。法は我が国のものを適用させるが、混乱が起きないよう、早急に市役所を設置しよう』

俺の演説が終わると、外から大きな歓声が聞こえてきた。それだけ貧しい生活をしていただけのだろう。

そこで、声の遮断を解除する。

「ないっ！」

は？

「もう一回言え」

「何度だっと言ってやるわよ！ あんたが援助なんてするわけないじゃない！ そんな嘘ついてどうすんのよ！」

頭痛くなってきた……本当コイツ嫌い。

「此処で嘘つくつてのがどういうことかわかってるか？ この約束守らなきゃ内部分裂確実だ。だから今のは確約。確実にすることだ。そもそも、俺は国をちゃんと発展させてるっつの」

「ならわたしが処刑されるってのはなんなのよ!？」

「そのままの意味だ。お前は全国民に見られながら処刑」  
「冗談じゃないわ！ そんなの許さない！」

そうなんだよな……ルイズはどうでもいいが、子供に見られるのあんまりよくない……グロいし。

ほんと子供に見せたくないな。完璧に21禁レベルだし。  
仕方ないっちゃ仕方ないな。将来確実に歴史に残る大犯罪者として教科書に載るし。

「別に許さなくていい。どっちにしろお前死ぬし」

すぐに声を遮断する。わめいているがうざすぎる。

こいつは肉体言語と、感情論で叫ぶことしかできないのか？

今更遅いが、理論的に考えられないんだな。基本教育に理論的に話すようになってくれとかな？

わたしはこう思うから絶対こうってのはあり得ない。

例えとか出せ。客観的に見てくれ！

まあ、コイツに言っても意味ないし。

俺はルイズを仮死状態にして転移した。

#### 48 ロバ・アル・カリイエ（後書き）

もう少ししたら神編ですね！。

長くしようとしたら幾らでも出来る設定ですが、時間的に無理かな。



## 49 壮大な宇宙（前書き）

時間が飛びます。  
そして壮大ですw

## 49 壮大な宇宙

### 処刑場

此処24地区広原ってさ、軍事練習にも使う広大な広原なんだけどさ……。

終わりが見えない程人集まってるし……。  
皆処刑大好きだね。

真っ白い段が置かれ、国の重鎮がそこに座っている。  
個別にNフィールドも張ってあるから安全。

ルイズが一番高い段の上にある十字架に、全裸で磔にされている。  
俺の趣味ではなく、リーンがやった。なんでも、俺を裏切ったのだから当たり前だとか。

本当は殺したいけど、出来ないから。変わりに羞恥を味わえと。  
十字架ってのは、別に神を信じてるわけではなく、今回の処刑方をしやすくするからだ。

十字って言っても、xになっており、四肢が四方向に繋がれているのだが。

現在世界中に、巨大な六面ウィンドウが浮かび、この現場を映している。

俺は視線をヴァリエールに移動する。

「本当にいいのか？ なんだったら俺が執り行おうか？」

「いいのです。あれでも、私の血をひいている娘。けじめは私が」

最初、助けるのかと思って頭を覗いたが、本当に処刑を行っらしい。

視線をヴァリエール家に移動する。

「もし、お前らが邪魔したら、お前らも確実に処刑だからな。特にカトレアは押さえておけ」

カトレアは寸前で助けようとしている。  
ってわけで。

俺はカトレアを屋敷に転移させる。

ヴァリエール家は消去したと思って驚いているが、

「心配するな。あいつは直前で助けようって考えていた。だから、  
反逆者として殺される前に屋敷に移動させた」

「……ありがとうございます」

この人数に見られたら、弁解なんて出来ずに殺すしかないからな。  
さて、そろそろ始めるか。カトレアが戻って来ないうちに。

俺は声を拡散させる。

『静まれ！』

別にうるさくはなかったのだが、俺の声で無音になった。

この人数でこの静かさって怖いものがある。

『我はウイデイス・ハルケギニア一世。皆の者、此度の処刑に集まっていただき、感謝する。処刑人を紹介しよう。ヴァリエールだ』

ヴァリエールが一步前に出、一礼する。

それだけで大きな歓声飛び交う。

処刑なのにこの歓声って……。

『対象となるは、国家最大犯罪者ルイズ・ロバ・アル・カリイエ王女！』

此処で大きな罵声が飛び交う。

まあ、自分たちの幸せを破壊しようとした犯罪者なんだからあたりまえか。

『罪状。脱獄、機密情報持ち出し、敵国の手引き、戦招、国家反逆、機密盗難、大量殺戮。他抵触6罪。処刑方、四肢切断のち、溶解』

後ろを向くと、ルイズが何か叫んでいる。

もちろん、声は遮断！

『これより、処刑を開始する』

俺はヴァリエールに頷き、段に上るように合図する。

ヴァリエールが剣を持ち、段にゆっくりと上る。

ちなみに、背後の白い十字架は剣では切れない。

どっちにしろ、ヴァリエールは元々凄腕らしいから大丈夫だろうが。



そのルイズの秘所へと。

深々と20センチ。確実に子宮に穴があいているだろう、生きていたとしても女としては終わりだ。

ルイズは目を限界まで開き、号泣し、壊れたように叫ぶ。

ルイズの秘所からは、どくどくと血が流れ続ける。

それが、真つ白な段からぼたぼたと垂れ、広範囲を深紅に染めてゆく。

てか、声拡散させるって、リーンこえー。

「あらあら、処女をナイフで貫かれ、気持ちよくてイっちゃいましたかー？」

リーンがげらげらと笑っているが……。

あれが快樂だったら怖いわ。防音設備があるホテルでも悲鳴が漏れるわ。

「お兄様ー、気を失わないようにわたしが制御しておきますね。あと、切れた部分から下に血がいかないように循環もさせておきます。もちろん、神経はそのままです」

リーン怖っ！

「あー、このままじゃすぐにリーンが殺しちゃうから、ヴァリエール頼む。足から順番にな」

ヴァリエールが剣を振りかぶる。

『あ、ああ……お、おどろぎさま……たす……て』  
「くっ」

なかなか剣を振りおろさなくて、民衆から罵声が……このままじやヴァリエールまでが。

多分、ルイズを目の前にして決心が揺らいだんだな。

「手伝ってあげます」

リーンがヴァリエールを操り、ルイズの左ふとももから下を切断する。

『あゝあゝ……あゝ……いだ……だい……ああゝあゝ』

カランとヴァリエールが剣を落とすが、すぐさまリーンが手に転移させ、振りかぶらせる。

「つぎ右足ですねー」

『あゝあゝあゝっ！ ゆるじ……て……だ……じに……たぐない……』

固定された腰がなかったら、だらんとぶら下がっていただろう。

あまりの光景に、観客は目をそむける者もいる。

両足が切断され、秘所にナイフが刺さったままの少女。

きついなこれ。子供が見たらトラウマになるかもしれん。

「次左腕」

リーンがヴァリエールを操って更に、剣を振り上げる。

『あゝ……あゝあゝ……やだ……しな……せて、いだい、苦しい……はや』

「あ、ダメですね」

リーンが猿ぐつわをルイズに転送させ、舌を噛み切ったの自殺を止める。

そんな力残ってないと思うが……。

「次」

更に振りかぶり、右腕を切断。

四肢を失い、腰に固定されただけの状態だ。血がほとんど流れないのは、リーンが途中で繋げ、循環させているからだろう。

「うーん。そうだ」

リーンが更にナイフを取り出す。

「乳房も切り落としてしまいましたよ」

「こわっ！ 王族まで青ざめてるぞ。」

まあ、女にしかわからない苦しさかもしれないが。精神的に？

てかおい、ミラ。お前なんでテファの胸見てんだよ……。切り落とすつもりか？

そんなことを思っていると、リーンはルイズのささやかな胸をそぎ落とした。

「小さすぎて……そぎ落とす価値もありません」

そぎ落としてから言うな……。もう完全なリーン独壇場。ヴァリエール気絶してるし……。人形操ってるみたいだし……。



『あー、ハプニングもあったが、次にうつる』

用意しておいた大きなガラスケース。中には王水が入っている。唯一、黄金さえも溶解出来る液体である。

「ではー、移動します」

リーンがルイズを浮かせ、王水の上に移動させる。

「そうだった」

何か思い出したのか、リーンは猿ぐつわを外し、チューブをのどに突っ込んだ。

それをエリクサーが入った大きな樽に繋げる。

すぐに、ルイズの四肢が戻る。

「では、泳いでください」

バシャンとそのまま王水の中にルイズが落とされる。

うわぁ……、しかも秘所のナイフが抜かれてないから、復元、肉裂繰り返してる……。だんだんと王水が赤く……。

「ああ、それじゃ見えません」

リーンが血の色の光の反射を消し去る。

溶けては復元を繰り返す。見た目的にはずっとそのままだが、痛みは異常らしく、顔が……言葉にしたいくないような顔してる。

チューブが解けないのは、リーンの仕業だろう。あんな暴れて、それでも抜けないって、喉の周りに同化させたな……。

『はい！ ではこれを一か月放置します！ 楽しそうですね。皆後で近くに見に来てくださいね。一マイル以上近づけないようにしました。』

リン楽しそうだなー……俺もう帰りたいわ。

『えー、では処刑を終了します。この刑では不服のある奴はー……いないな。では解散』

俺は重鎮達を城に轉移させ、自分は屋敷に轉移する。

この記憶破棄しようかな……。

「お兄様ー、犯罪者が既に六か月放置ですけどいいんですか？」

俺がゆっくりしていると、リーンに声を掛けられた。

「ん？ 犯罪者って誰だ？」

「わからないんですか……？」

全く覚えがない。意味すら分からないぞ？

「つて、破棄しましたね？ とりあえず戻します」

瞬間、思い出した。思い出してしまった。

思い出したくなくて破棄したのに！

思い出したから仕方ない。

俺はウィンドウを表示させた。

うん。真っ赤な液体で何も見えん。とりあえず、反射率変更っと。

そして、透明になった王水の中にある生物が見つかった。

チューブだったはずが、大量の点滴をさされている。

「なんだこれ……？」

「ええ。エリクサーじゃ餓死しますから、圧縮栄養点滴です。胃にも直接圧縮した食べ物を入れてますね」

いやー、てか怖い。

全く動かないうえに、なんかニヤケてるぞ？

下の方に糞尿たまってるしってか、金魚みたいになってる。

「壊れちゃいました」

うん。それがわかりやすい。確かにこれは壊れてる。

「いつそ、直して風俗にでも入れますか？ 精神以外なら直せますよ？ 精神も直せますが」

「死んだ方が幸せだろこれ……？」

「そうですねー。一日もあれば骨まで溶解します。エリクサーなしならですが」

俺は遠隔操作で、全ての点滴の針を引き抜く。  
そしてウィンドウを閉じた。

「ふう。てかさー、また恐怖政治みたいになつたつつの。犯罪率減つたけどさ」

「それならそれでいいじゃないですか？ あのイベントの効果ってことです。お兄様に反抗する人間も減りますし」

イベントときたか。

まあ、愛されてるっちゃ愛されてるんだが……。  
ヤンデレどころじゃないぞこれ。

とりあえず、ルイズの記憶は破棄しよつと。

「さて、184区以降の発展はどうなってるかな」

「いきなりですね？」

「え？ なんか話してたっけ？」

「……破棄ですか。いいですけど。そうですねー、おおよそ順調。

こちらの職人の指導のもと、街起こししています。いずれその人間も職人になるでしょう。あとは、人口過多だったので、この大陸以

外の開拓した土地に移住させている人もいます。ついでに、184区以前の区域では、ベビーム到来です。すごいですよ？ 女性の平均出産人数4人です。時間がたてばまだまだ増えますね。それで移住者もいます」

ちなみに184区以降はロバ・アル・カリイエだった場所だ。387区以降が未開拓地だった場所である。

にしてもベビームか……。確かに、世界人口4億人程度しかないから、それは助かる。

「てか資源が余りまくってるんだよね。人口少ないのに星だけは地球並みだし」

「ですねー、星の開拓も始めましたしね」

「そうだなー……は？」

「待て待て、いつ始めた？ てかそんな技術あんのか？」

「ええ。先に銀河間移動できる星の人間が通りかかったので、頭の中覗きました。そこに知識があったんですよ」

「ああ、そうなのか……むむ。」

「この星って攻め込まれないか？」

「まだこの星は銀河惑星管理協会に登録されていませんからね。干渉したら犯罪です」

「そんなのあるのか……。」

「にしても、登録はしない方がいいが、知識だけはほしい。」

「それってこの恒星系内での開拓ならいいのか？」

「はい。銀河系を移動しちやいますと登録必須です。登録しないで

いると、向こうからきちゃいますね。最悪滅ぼされます。銀河の皇族とかもいるっばいですよ?」

束縛は嫌だな。

「ちなみに、未来のご主人様は皇帝も兼任していたりします」

「ただけすごい人間になってんだ俺?

「そりゃそうですよ。だって、ナノマシンを無限に増やしているの  
で、銀河群すべて手の中です。破壊しろって命令するだけでこの次  
元一瞬で消滅です」

確かに、管理と言う点においてこれ以上ないくらいだな……。

「なあ、やっぱナノマシンって増やした方がいいのか?」

「ですねー。入ってくる知識もけた違いに増えますし。進んだ文明  
から獲ってくれば最強です」

いつか干渉されても、このままじゃ負ける。

今の現状じゃ、後進惑星の地球くらいしか制圧できない。  
やはり銀河系くらいは治められないと……。

「未来の俺ってさ、銀河群トップか?」

「ですねー。銀河群の上、宇宙群のトップですが」

もう次元がわからない。

惑星<恒星系<銀河系<銀河群<宇宙<宇宙群  
どんな勢力圏だ。

「あ、でも主に納めてるのは銀河系三つです。首都みたいなものですね」

どっちにしろこのままじゃダメか。

《マスター：再分裂：最速》

リーンを見ると、目を見開いていた。

「いいんですか？ あ、三つ銀河系が勢力圏に」

「まあ、次元さえ超えなければ俺が指示出来るしな」

「あ、でも。星さえ壊すなって命令出しておけば、大丈夫です。今のごお兄様なら細かい命令も出来ます」

そうなのか……。

《ワールド・ドア》

背後を振り向くと、テファとジヨゼットが小さな窓を幾つも開けていた。いや……ってか、外まで続いているぞ？ この大きさだと数億とか続いてそうだ……。

「「兄さん（お兄ちゃん）が喜ぶと思っつて？」」

いやいや、そんなかわいらしく首を傾げられても……。

「一応今出て行ったナノマシンに命令すれば戻ってきますよ？ 今のままだと最速で分裂状態です。このままなら、星を破壊しないように命令しないとダメですね」

「いや、いい。このままにしておこう。そういえば、これ何処につ

ないだ？」

二人は首を傾げていた。適当なんだな……。

「座標はこちらで感知できますし、双方からナノマシンをぶつければ、壁も開けられますよ。あれ？」

リーンが、『そうか……この方法が』とか言ってるが。

「テファさんジョゼットさん。ハルケギニアの過去に穴を開けてください」

二人は頷き、ハルケギニアの過去に穴を開けた。

瞬間、脳裏に膨大な情報があふれる。てか頭いてー……。

てか、俺以外も膝ついてるぞ……つつう……。  
ホント鈍器で殴られたような痛みだ……。

「皆さん！ 並列回路を増やしてください！ 全てナノマシンに委譲するつもりで一気に！ 構成ナノマシンが悲鳴を上げています！」

どつりで、身体がゆがみ始めてると思った、てか消えかけてる。

この惑星全体を使う程の並列回路を構築し、なんとか落ち着いた。更に常時自動で増やしていかないと追いつかない。

「はあ……何したんだリーン？」

「そうですね、先ほど別の次元に穴を開けた時、一気に情報が増えました。理由は過去に穴をあけたからです、ですが、わたしたちが繋いでいるのは現在の時系列。だから過去からずっと増え続けたナノマシンを感知出来るんです。それをヒントに、ハルケギニアの過去でナノマシンをばらまいたことにして、現在の時系列で繋げると、



一瞬で膨大に増えます。ナノマシンへの命令は星を破壊するな、無限に分裂しろ、最速。これです」

ああ。だからか。てか、人間ってこんないたのか……人間っぽいの方が多いけど。

「いわば宇宙人って奴ですね。人間の見た目でも中身が全く違うのもいますねー。あ、この情報すごいです。これ情報だけ転写すれば、いますぐ星の開拓出来ます。てか、この無から有を生み出す技術ってなんですか！ 原則無視ですよ！」

いやいや、俺らが原則無視したような存在だろ？ 情報の転写で複製されるぞ？ 転写は俺しか出来ないけど……。権限与えてるか、らリーンもできるのか。

「ご主人様ーすごいですこれ！ 空間を操る魔法！ ちょっとこれ使えるように権限書き変えてください！ 亜空間でミラ牛大量生産です！」

そんなことのために亜空間構築すんな！ てか、すげーなこれ。

「神みたいだなこれ」

「次元移動、時間移動出来るので、神超えてるかもしれません。お兄様の神データがあつてればですが」

亜空間使えば世界宝玉も作れるな。

無から有を作れるっていいな、これ創造魔法じゃね？

「あ……」

「どっしたリーン」

「黙ってください!」

ビビった。リーンが俺にこんなこと言うの初めてだぞ?

数分後リーンは一息ついた。

「どうしたんだ?」

「ハッキングです」

「は?」

「これは多分皇族ですね。皇族の散布ナノマシンをこちらが喰いつくしました。こっちのほうが優秀だったみたいです。まあ、代々受け継がれてるナノマシンですからねこれ。何代前のご主人様を作ったかもわからないくらい受け継がれますし。改良されまくりで、そのナノマシンにハッキングしてきたのですが、逆に相手の制御を奪い取ってやりました!」

そんな胸張って犯罪宣言しなくても……。

「でも…まずいですね。まだ気付かれてませんが、これで皇族はるか、宇宙群に存在する銀河惑星管理協会全て敵に回しましたね。必然的に高次元文明惑星全て敵です。一万年以内に確実に気付かれます。破壊しましょうか? 邪魔ですし」

いちいち言うことが大きいうえに物騒だ。

「まだいい、とりあえずこっちの文明レベルを上げよう。先進惑星の機密知識を融合させれば、自衛くらいは出来るだろう」

「ですね。とりあえず、最低でも人類の数を数百兆人程ほしいです。数は武器にもなります。それだけで、宇宙に出れる大艦隊にもなりますから。ですから、惑星を転写しましょう。この恒星系の惑星は

12。この程度じゃ足りません。疑似太陽は簡単に作れるので、いくらでも大丈夫です。目安は120。引力に引つ掛けられる位置でお願いします。起動に乗る演算はこっちでやりますので」

はあ……せつかく世界統一したのに……次は銀河か？ 終わりにくね？

5000年後

気づいたら五千年、なんちゃって？  
実際五千年経ったけどさ。

現在の住居は王星に建てている。これは、王専用の星と言えるだろう。

一つ一つの星に住む生物はあまりいないが、120の星を管理している。

まだ全人口あわせても十兆くらいだろう。

韻竜の生体構造を変えたおかげで、魔力さえあればいくらでも子供が作れるようになり、韻竜も同数近くいる。まあ、魔法が使えないから大きいだけだ。

禁止しているが、普通に転移以外でも銀河系に出れる文明レベルだ。

ハルケギニアが六千年で中世レベルだったとは思えない程の進歩だ。

年齢はバイオテクノロジーの合法化により、平均200歳程だ。まあ、脳を変えないって規制をしているのだが。

今でも俺の傍に居るのは、ミラ、テファ、リーン、シャルロット、ジヨゼット、ルミア、使用人のエリー、韻竜のラルだけだ。

エリーなんて永久使用人だ。まあ、立場的にはかなり上位なのが、俺の使用人兼補佐を続けたいらしい。

他の奴らは惑星管理を少なからずしている。それでも50くらいは俺がしているのだが。

韻竜のラルは、実験として俺の子供を産んだ副作用で不老不死だ。ちなみに、韻竜との子供は逆になっただけだった。

人間が本当の姿で、化身で何故か竜になれる。しかも魔法を使わなくてもなれるってのが面白い。まあ、意識しないと、竜みたいな翼が背中から生えるけど……。

第二期ナノマシン、ウルと言う名前の女の子である。年齢を若くは出来ないの、何歳で止めるか決まるまでは7歳で止めている。だが、何故か竜の方は成長して、40メートル程になっている。まあ、それは置いておいても自分の子供はかわいい。ミラは子供を先に作られて泣いていたが知らん。

ギーシュは250歳まで生きたがそこで亡くなった。

なんでも、先に死んだら妻が悲しむから、最後に死ぬと言っていた。その通りに最後に死んでいったのだ。俺は初めて泣いた。250年、ギーシュとはずっと仲が良かった。初めて出来た友達でもあったのだ。なんとかかして延命したいと申し出たが、向こうで妻が待っていると言われ、断念した。

「ご主人様ー、わたしの管理してる牛星がピンチですー」

五千年経てば性格が変わると思ったたら甘い。

俺達は膨大な並列思考を持つ、それを全て変えるのなんて五千年程度じゃ無理だ。

何かに影響を受けようと、そんなちっぽけな事では容量的に残らないのだ。常に宇宙の情報を並列で監視しているのだ。それを監視している情報量を考えてみてほしい。影響なんていうちっぽけな容量すぐに消し飛ばす。

ってわけで、まったく変わっていない。

俺は子供が出来てから丸くなったらしいが。

「あー？ それはお前がミラ牛増やしすぎるからだろ？ どんだけ臭いんだよあの星」

「ご主人様ー転写をー」

ミラがすがりついてくるが知らん。

「パパー、てんしゃー」

「ん、何してほしいんだ？ 何でもするぞ？」

「差別ひどすぎる！」

だってかわいいだろ？ ウルかわいすぎる。

「ん、おかし！」

首を傾げ、思いついたようで満面の笑みを見せてくれる。

《物質転写：情報より引用》

バサバサと大量にお菓子が現れる。

「ご主人様」

「あーはいはい。権限やるから勝手にやれ」

「ぞんざい……」

いいから早く直して来い……。

ツ！？

バっと立ち上がる。

同時にウルや部屋にいたミラも立ち上がる。

その後、ナノマシン化したやつらが部屋に転移してくる。

「データ照合：神と人間のハーフ、半神と断定。数532。変質しています。次元を突破してきたようです。位置、N-38無人恒星系。その内一名が人間。ですが、神殺しにより神の力を奪い取っております。目標お兄様と断定。あと」

リーンに言われなくてもわかる……これは……。

「532の半神。神の遺伝子はお兄様に適合。お兄様の子供で間違いないです」

なんだかジトつとした目で全員に見られてるし……、ウルは涙目だ。

「いやいや、勘違いするなよ？ 俺が神の時だ。つまり前世？ 俺には罪アリマセンヨ？」

「お兄ちゃん……確か前世の記憶あるよね？」  
「……」

無理。誤魔化せないっす。

「てかこいつらさ……周囲のナノマシンが怯えて離れて行ってない？」

「神に喰われています。直接命令して物質化すれば攻撃自体はあたりますが、浸食は出来ないの、ここから殺すことは不可能ですねどうします？」

話題の擦りかえ成功。

「行くしかないだろ……？ とりあえずラル、ウル、ルミア、エリーは留守番かな？」

「どうしてパパ？ ウルもなのましん使えるよ？」

そんなウルを撫でてやる。

嬉しそうに目を細めて笑むが。こんなのみたらますます無理だ。

「パパはウルをそんなところに連れて行きたくないからね。エリーとルミアは戦闘慣れしてないからダメだ。ラルは……」

俺はラルの耳元に口を寄せる。

「もし……、もし俺に何かあったらウルを頼む。絶対に不幸にさせないでくれ」  
「……約束。絶対貴方も無事で帰ってきて。この年で未亡人なんてヤっ」

確かにすごい年だが……。てか涙目になるな、ウルが心配する。

返事はせず、俺は背を向け、転移する。

多分……この反応だと俺でも死ぬかもしれない。ナノマシンごと喰われる……それは俺達の死を意味するのだから。



#### 49 壮大な宇宙（後書き）

眠い。昼なのに。

キリがよくないけどこの後は帰ってから。

途中経過や、各人物の終生は閑話で書きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3905j/>

---

使い魔ですらない！

2010年10月9日11時02分発行